

あめとかぜと

岩佐寿一編・著

広島県戦前
大翼運動の手記

あめとかぜと出版委員会発行

あめとかぜと

岩佐寿一編・著

広島県戦前
大翼運動の手記

あめとかぜと出版委員会発行

あめとかぜと 目次

中国新聞 號外	廣島で驚くべき 大規模な赤化運動	治安維持法違反事件 けふ豫審終結決定(一)	無産者解放へ わが國體をどう 指導機關のもとに	組織された 各種支部	宣傳ビラなどで 革命思想注入 資本主義制度を攻撃し 労働者の不満激發	設置された 全協廣島支部 各支部を期して 闘争力強化へ		夏の夜の捕物 間をつんざく一瞥 最上屋敷 劉雲の嵐	
-----------------------	-----------------------------	----------------------------------	--	-----------------------	---	--	--	--	---

『あめとかぜと』もくじ

はじめに——戦前の広島県左翼運動について..... 1

一、昭和七年、3・5事件、10・30事件まで..... 31

労働党の思い出..... 渡辺 信樹 33

左翼労働組合のこと..... 岨 常次郎 37

悔いなき革命運動への献身..... 古末 憲一 39

手記 その一..... 寺尾 一幹 44

手記 その二..... 寺尾 一幹 51

広島高等学校のこと..... 寺尾 一幹 58

広島電鉄ストライキのこと..... 井上 栄 62

組合からモップル（赤色救援会）へ..... 仁井田教一 63

思い出..... 清水 政男 65

呉の本屋のこと..... 田中 豊 72

『唸るクレーン』のこと..... 重田 安一 74

『簪ゆるマスト』の人々..... 76

呉海軍の思い出..... 平原 基松 83

呉海軍病院のこと..... 稲垣 宏 86

回想録..... 小倉 正弘 90

福山地区の人々..... 野田 清一 95

尾道地区の人々..... 樋口 利夫 102

安田貞務のこと..... 迫川 敬一 104

尾道郵便局のこと..... 熊谷 良一・樋口 利夫 106

野村秀雄のこと……………小林 太郎…109

二、昭和八年から昭和一五年まで……………111

救援会のおもいで……………岡本菊次郎…113

10・30事件後の再建運動……………小寺 英雄…116

手記……………中村 定男…136

4・26事件と新協劇団後援会事件……………井上 栄…152

堀哲三の思い出——ロンド書房のこと……………大藤 軍一…155

瀬戸内に生きて……………数本タキエ…159

同志のおもいで……………岩佐 寿一…180

三、当時の新聞記事・資料・年表……………207

索引……………241

は
じ
め
に

はじめに

戦前の広島県左翼運動について

一九七〇年からあつめてきた戦前の同志たちの手記やききがを一冊にまとめるにあたって、それらの人々の活動の時期、そのつながりをとりまとめたておくこととします。ここにあつめたのは広島、呉で活動した人のものがほとんどですが、一九八一年になって尾道地区の人々、年が

けて福山市の野田清一氏の手記など、広島県東部についてのもが寄せられました。

手記や聞き書きは

(一)、10・30事件(1933年)まで

(二)、そのあとの再建運動、そのほかとふたつの時期にわけました。

その両方にまたがっている人のものは、おもな活動の時期にいれました。

戦後にも活動をつづけている人には、敗戦のあとしばらくのことにもかたつてもらいました。

それから、つぎのものを参考にしました。引用させてもらったものには〔注〕、〔参考〕とかいておきました。

○呉日日新聞としこみ(呉市立図書館蔵)

○中国新聞マイクロフィルム(同上)

○『大呉市民史』弘中柳三氏著

——以上は手記のあとに「新聞資料」として

○『五人の水兵の判決書』原弁会シリーズ

○『サンデー毎日』昭和四九年四月二二日号の

記事「反戦一路の四七年」

○『広高五〇年史』——学生運動の項

○『日本反戦詩集』太平出版社

○『昭和史発掘』松本清張氏著

○『社会主義運動 半世紀』山辺健太郎氏著

○『広島県労働運動史』広島県労働組合会議編

○『新聞集成広島女性史』広島女性史研究会編

○『嵐に耐えた歲月』板野勝次氏著

○『炎の記録』解放運動 兵庫県旧友会編

○『瀬戸内に生きて』数本タキエさん著
などです。

—

一九二八年(昭和3年)三月一五日、いわゆる3・15事件の全国一斉検挙のときは、労働党広島支部の活動家もほとんどのこらずつかまつたが、共産党に関係ある文書などなにもでないので、まもなく釈放されました。

つづいてその年の四月一〇日、労働党、日本労働組合評議会、無産青年同盟の三団体に解散命令

が出ました。

左翼への弾圧のあと、日本政府は四月一九日に中国侵略の第二次山東出兵、五月八日に第三次山東出兵（いわゆる済南事件）をおこないました。

広島高等師範の中国人留学生が「済南事件出兵絶対反対」のビラを校内にまくからと旧労農党広島支部に応援をもとめてきました。

これとは別に旧労農党広島支部の活動家は「済南事件出兵反対」のビラを広島市本通りにまきました。広島市の宇品港は中国大陸に軍隊をつみだす港でした。船をまつあいだ兵士たちは、市内の旅館や民家にとまっていた。日本でのさいこの夜をすごす兵士が本通りを市民にまじって歩いていました。

このため旧労農党の活動家は一斉検挙をうけました。活版屋のおやじもひっぱられて「だれがビラを刷ってくれたのみにきたか」と検挙されたものをならべて「首実見」させられたといいます。

この年、八月、日本反戦同盟（のちに反帝同盟）が結成されたのですが、その広島支部ができたかどうかかわかっていません。

解散命令をうけた旧労農党活動家は、なけなしの金をかきあつめて、早川義則氏を党再建大会に広島代表としておくりだした。この年一二月のことです。しかしこの、労働者農民党結成大会は三日目に結社禁止の命令をうけました。

広島市の労働組合は、評議会系の「広島一般労働組合」も解散して、八月に合法的な「広島合同労働組合」が結成されましたが、左翼の活動家はこの組合内の「革命的反対派」として働いたわけ

です。

中央では一九二八年（昭和3年）四月一〇日の評議会解散のあと、一二月には日本労働組合全国協議会が結成され、政府の解散命令にはしたがわず、非合法の労働組合としてスタートしました。

広島では左翼労働組合を結成するために、努力がつづけられたが、あくる年、一九二九年（昭和4年）七月、畠山三氏末元玄聡氏らが治安維持法違反で検挙されて、つぶされました。検挙の理由は「三滝山で不穏な会議をひらいた」などのあいまいなのですが、これが共産党の目的遂行のためにする行為とされたわけです。嶋常次郎氏のみ検挙をのがれ「地下にもぐり」ました。

呉市のうごきは、つぎのとおりです。

呉工廠製図工、片山峰登氏が一九二四年（大正13年）工廠を退職して上京、一九二五年（大正14年）東京無産青年同盟委員長、一九二七年（昭和2年）労働組合評議会書記となり、三・一五事件で共産青年同盟中央委員として検挙されて八年の刑をうけています。

しかし片山峰登氏と呉工廠労働者とのあいだにどんな連絡があったかをしめす資料はありません。

呉市についての新聞記事をあつめた『大呉市民史』によると、工廠労働者の検挙にはつぎのようなものがあります。

○昭和四年、工廠では左傾職工として、狭間、

佐光、清水の三名を解雇した。狭間の解雇理

由は、昭和三年春、大山郁夫が呉にきたとき

〔労働者支部発会式〕カフエーブラジルで

歓迎会をひらいたが、その席で狭間が「不都

合な言をはいた」というものである。

○佐光の解雇理由は「狭間の解雇は不当な理由による解雇だ。工廠当局を糾弾するべきだ」と、工廠の「労働組合」である、海工会の委員会で発言したからであるという。

○昭和四年の末には、工廠労働者数名が憲兵隊に検挙された。真鍋喜一、中田春雄、平原一雄、田中正雄、山口薫の諸氏。これは真鍋喜一が中心となつて、警固屋町にアジトをつくり、労働者一〇余名が読書会をよそおい、東京の同志とレンラクをとっていた。

○昭和五年五月、某事件関係の工廠労働者（24）など八名を喚問。そのうち一名は音戸町で発行している文芸雑誌『一路』の発行者。第二、

第三と検挙つづき、工廠労働者一〇余名。

これらを見ると「東京のある組織」と工廠労働者との連絡があったということになります。『無産者新聞』の記者が呉にきていたとの記事もあります。

これとは別に、昭和四年三月、工廠労働者に「3・15一周年と山宣虐殺に対してストとデモでたたかえ」というビラがまかれました。吉浦分工場では、ひるやすみに労働者にこのビラをくばったものがあつて「共産党のビラだ」と大さわぎになった。このビラ事件でつかまったのが中村定男氏（当時一八歳）でした。その思い出によれば

「昭和三年、3・15事件の検挙で東京外語の学生山道長君が退学処分になり、呉にかえってきた。その山道君のところに、片岡義夫、池田八束、それに中村などがあつた。弟の山道繁君（のちに活動家になったが）はまだ中

学生だった。研究会とか読書会とかいうのはつきりした組織はつくれないから（検挙されるおそれがあるので）、ときどき集まって、はなしあうということにした。そのうち池田八東君が山道君の紹介で上京したが、中村のところにいるんな文書をおくってきた。そのひとつが『3・15一周年……』のピラだった」

という事です。
中村定男氏は工販正門のあたりでピラをまき、吉浦分工場のはうは補習学校のクラスメートに、食堂か便所においてくれ、とたのんだ。その同級生が昼休みに、そのピラをくばってまわった。たちまちつかまって「中村にたのまれた」と白状したわけです。

呉海軍の水兵のうごきは次のようです。大正のおわり、昭和のはじめごろ、海軍病院の看護兵のあいだで左翼文学などを読んでいるグループがあったと、そのころ海軍領院第七病棟長だった稲垣宏、元一等看護兵曹が語っています。

稲垣兵曹が裁判をうけた「五人の水兵の判決書」によれば

「被告宏は大正十五年ごろ、海軍三等看護兵山本俊次とつきあうようになり、左翼思想をもつ山本の影響をうけて、ひろく左翼文書を読みあさるようになった」とあります。

大正十五年には、木村莊重氏も海軍にはいったが、左翼的なことをかいた日記を上官にみられて進級停止となり、「在役七年におよぶも一等兵のままであった」と『大呉市民史』にあります。

海軍病院に看護婦として入ったのが、木村莊重氏の妹、右田美子さんです。彼女をとうして木村

水兵と稲垣兵曹が知りあいになったとあります。関西地方および中国地方から、海軍にはいつてくる人々のなかには、すでに社会運動の経歴があるものもあつた。また、労働をとうして階級意識をもっているものもあつたわけです。下宿あてに『戦旗』などをおくってもらう人もあつたという（西川兵曹）。

一九三一年（昭和6年）、稲垣看護兵曹は、海軍の徴募兵の検査の助手として岡山県に出張中に、おくられてきた左翼文書を上官にみられて、呉海軍病院第七病棟長の職を免ぜられ海兵団におかれて、半年のあいだ、取り調べをうけました。宮内謙吉看護兵曹もおなじく海兵団で、取り調べをうけました。これとはべつに、一九三一年（昭和6年）八月に、海軍内に社会科学研究会をつくつていたとして、つぎの人々が検挙されました。

阪口喜一郎兵曹、西川照三兵曹、平原甚松水兵、山口水兵、若林水兵。

このうち、阪口兵曹は、呉海軍軍法会議の留置場に、ほかのものは呉海軍刑務所にいれられて、法務官のとりしらべをうけました。（平原甚松手記、ただしその社会科学研究会の具体的な活動について質問したが同氏の返事はなかった）

二

全協、広島地方協議会の結成

日本労働組合全国協議会は、はじめから非合法の労働組合として出発しました。中央では評議会

の組織が総同盟系をしのぐほどの勢いだったのだ、そのあとをうけた全協は、なかば公然とうごいていたといえます。

しかし広島地方ではまだ労働組合の力は弱く、評議会系の「広島一般労働組合」が解散になったあとは、合法的な「広島合同労働組合」にかわりました。

労働党が解散になって、幹部の大部分が労働大衆党、全国大衆党のほうにゆき、一九二九年七月には、左派の活動家の玖島三三氏などが治安維持法で検挙され、左翼労働組合の結成はおくれま

した。

「そのころの広島地方も経済恐慌がひどくなつてゆき、ストライキが多くなつていった。広島合同紡績のスト、合同運輸のスト、段原町の渡辺製糸工場の閉鎖反対のスト、広島電鉄のストなどを、広島合同労組そして革命的反対派が指導にあたつた」とあります。

そのころの左派の同志として嶋氏があげているのは

五条俊夫、松本京一（鷹匠町の建具職）、村上四郎（印刷工）、田谷春夫（同）、仁井田教一（大工）、花野岩男の諸氏。また広島紡績のストライキのなかから花野ふじえさん（岩男氏の姉）が成長したと、かいています。

なお、広島電鉄ストの起訴者のなかに、松本京一氏の名があり、合同運輸のストでは村上四郎氏が四カ月の刑になっています。

全協・広島地方協議会がつくられた経過は、『中国新聞』（昭和7年9月7日記事）に載っています

が、これは検事局や警察の発表のうつしだろうとおもいます。これについて、岨常次郎氏から一九八〇年（昭55）一月に手紙がよせられています。それによると――

一九三〇年（昭5）一〇月ごろ、広島郵便局員、市川忍氏と岨常次郎氏が会合して、全協広島地方協議会の準備会をつくったのが、はじめだとあります。

そのまえの年、玖島三二氏たちが検挙されたのち、検挙をのがれた岨氏にも警察の追及がきびしく、おもてだつてうごけないので、五条俊夫氏が全協・広島地協の準備会事務局にはいった。

一九三一年（昭6）一月二六日市川忍氏が上京して、全協本部に広島地方協議会をつくることの承認をうけました。

その年三月九日、広島地方協議会が成立したわけです。

各産業別支部の結成のみちすじについては『中国新聞』記事に、ややくわしく載っていますが、これも当局側の資料であつて、これに係した同志の手記は、いまだにありません。

のちに結成される共産党広島地方委員会の組織ともつながりがあるので、各産業別支部の名をあげておきます。

○全協通信・広島支部――広島郵便局分会。一九三〇年（昭和5年）一〇月市川忍が支部責任者となり、大藤軍一が分会責任者となつて、局員三名加入して分会結成。

○全協、交通運輸・広島支部――国鉄分会。支部責任者、松本武司。新原博ほか四名で分会結成。

○全協・出版・広島支部――市川活版所分会。支部責任者、吉田義雄。村上四郎ほか五名で分会結成。

○全協・木材・広島支部――津崎製材所分会。支部責任者、山本正一。下川浦右エ門ほか七名で分会結成。

○全協、繊維・広島支部――東洋紡績分会。支部責任者、小笠原豊。児玉幸夫ほか五名で分会結成。

○全協・食料・広島支部――専売局分会。支部責任者、村上文二。上野良子ほか九名で分会結成。

このほか、松本徹は日本製鋼所広島工場を、寺尾一幹は帝國人絹広島工場を、五条俊夫は広島電鉄、広島バスを目標として分会結成に努力。

なお『中国新聞』の記事にはつぎのように書いています。

「一九三一年（昭和6年）三月なかごろ、市川忍は同志岨常次郎より日本共産青年同盟の綱領、政策などをのせた同盟の中央機関紙『レーニン青年』創刊号同二号の配布をうけて閲読し、ついで小笠原豊にわたした」

このころ岨常次郎氏は、共産青年同盟のオルグとしてはたらいっていたわけだ。

赤色救援会広島地区委員会の結成

一九三〇年（昭和5年）十二月下旬胡川清氏（大阪外語を退学処分になり広島市にかえる）と、慶

応大学生原民喜氏（のちに原爆小説『夏の花』の作者）とが会合。原氏は赤色救援会本部から、オルグとして広島市にかえつてきたもので、胡川氏に赤色救援会広島地区委員会の結成をすすめた。

胡川清氏はこれをひきうけて、広島高等学校の生徒新田養三、佐々木益三の両氏に協力をもとめました。救援会のアジトは市内段原町、高村亮次氏の家です。高村氏は、胡川清氏の妹と結婚した人で、富國徴兵保険の社員です。すでにそのまえからシンパとして活動、岨常次郎氏などとレンラクがありました。

一九三一年（昭和6年）一月なかごろ原民喜氏のなかだちで、胡川清氏は救援会本部とレンラクして広島地区委員会をつくることの承認をうけました。そののち広島合同労組の仁井田教一氏もこの救援会のしごとにくわりました。また広島高等学校内の社会科学研究会も学外の活動としてこの赤色救援会広島地区委の組織にくわることになりました。

このとし三月、全協、広島地方協議会が結成されたので、これとレンラクをとり、また『戦旗』広島支局（責任者伊藤正朝氏）ともレンラクをとつて、共同戦線をはりました。

赤色救援会広島地区委は、『救援ニュース』、『建國察反対』のビラ、『広島電鉄ギセイ者救援』のビラなどをだしたが、福山地区の沼隈郡柳津町の山根清氏（神戸高商中退）へもおくつています。山根氏は福山地区で救援会及び全協のオルグとして活動しました。

三

広島電鉄のストライキ

全協・広島地協や赤色救援会広島地区委が結成されるあいだ、一九三〇年（昭和5年）年末に広島電鉄のストライキがおこりました。

広島電鉄は「広島瓦斯電軌株式会社」というなまえです。ガス会社が電車をはしらせているわけです。新聞記事などには、この電鉄のストライキのことを「瓦電争議」とかいています。

その新聞記事によると「昭和五年二月二十六日広島電鉄従業員よりなる広島交通労働組合は、賃銀値上げ、待遇改善など二一カ条の要求をだしたが、会社側の回答に誠意がみられないとして二月二十九日初発電車からストライキにはいった」とあります。

そのとき二〇歳で、入社一年めだった井上栄氏によれば

「千田町に電鉄従業員の寮があって、そこを争議団の本部にしていた。二月三〇日その寮の中庭で従業員がワッショ、ワッショとデモをはじめた。そのデモの列が中庭から、そとの道路におしだそうとすると、まちうけていた警官隊にぶつかった。こちらも元気のいい若者はかりだったから、警官がむかってくるのに、黙ってはいない。そこでなぐりあいになった。警察はさつそく、暴行罪、公務執行妨害罪として総検束をはじめた。寮にいたものはひっぱられ、とうとうストライキはつぶ

されてしまった。しかし、どう考がえても、ワナにはめられたような気がする。寮の中庭でデモをしているとき、なぜ、そこに警官隊がまちぶせていたのか。」ということです。

寮の争議団本部にいあわせたもの一七〇名が検束されました。べつところにアジトをかまえていた争議指導部や、応援の合同労組の左派のグループなど、ことごとく12月30日に検挙。

その夜は徹夜で取り調べをつづけ、31日には、おもなものの59名を検事局におくった。そしてその夜には、ほとんどのものを刑務所の未決拘置所におくりこみました。罪名は「脅迫、放火予備、公務執行妨害」ですが、「執行前の強制処分」という名目で刑務所にとじこめてしまったわけです。

なんともあざやかなことです。さすがの新聞もあきれて「争議団は警察のトリックにまんまとのせられた」とかいています。広島電鉄は正月二日には、いつもの半分の電車で運転をはじめて「乗客は不便をかんぜぬほどになった」とあります。

井上栄氏によれば、起訴されたもののうち電鉄の従業員は、中山武夫氏、杉野幹男氏、縫部啓蔵氏の3人で、あとは応援の合同労組などの人たちだということ。このなかには、松本京一氏（のちに共産党呉地区の書記）黄五姓氏（のちに木材土建オルグ）の名もみえます。

呉工廠解雇反対闘争

一九三一年（昭和6年）のはじめから、呉工廠

の首切問題が大きくなってきました。新聞記事にも、市民大会をひらくとか、全市民の署名をあつめて海軍省に嘆願書をだすとか、陳情委員が大挙して上京するとかのうごきがみられます。工廠の「労働組合」である海工会からも陳情委員が上京したが、かえってきた委員の報告会では「東京見物にいったのか」というヤジがとんで、大荒れに荒れたといひます。「海工会の幹部から首切られる」という、うわさがとんだと新聞に載っています。

はじめての新聞発表では、呉工廠四、一〇〇人 広工廠ほか七〇〇人（『呉日日新聞』昭和6年1月21日夕刊）とあります。

そののちの発表では、呉工廠三、七三五人、広工廠一九五人となっています。（同4月7日記事）

呉工廠内各職場の解雇人員（4月8日発表）

総務部	一一八人
砲煩部	四七九人
水雷部	二三八人
電気部	六四二人
造船部	五四六人
製鋼部	六三九人
潜水艦	二〇人
砲煩実験部	一一人
魚雷実験部	二人
電気実験部	一一三人
会計部	二人
医務部	二人
職工教習所	三、七二二人
合計	

四月八日、解雇するものを内示する日は、正午まで工廠内は通行禁止となり、労働者は全部午前中に工廠からおいでしてしまおうというきびしさでした。この日は広島市からも特高や憲兵が呉に動員されました。

首切反対のビラも六回にわたって、警戒の網をたくみにくぐってまかれました。広島市からも同志たちが呉市にのりこんでいます。

『大呉市民史』によれば

三月三〇日、吉浦砲熖実験部へ ビラまき

四月二日、工廠第一門めがね橋付近

四月八日、首切発表の日、全市に数百枚

というぐあいです。

このうち吉浦分工場にまかれたビラは、外部のものはいりこめないとこにまいてあった。また工廠第一門めがね橋ちかくのものは六〇歳の日雇労働者が、だれかにたのまれてまいたというだけで、犯人はわからなかった。

四月三〇日、ビラまきの現行犯として呉市曙町、町田三郎（仮名）がつかまった。その自由で

呉市本通り三丁目 末田良一（25）

同 吉川町 谷井政一（25）

同 中通り六丁目 吉川肇（22）

（いづれも仮名）がうかびあがった。末田良一は逃走中（『大呉市民史』）とあります。

このうち末田良一は古末憲一氏（東大生）谷井政一は鞍谷良行氏（早大生）吉川肇は田中豊氏（中通りの本屋）のこととおもわれます。

田中豊氏の、このときの思い出とおもわれるはなしには

「同志たちは、いくつかのグループにわかれて

ビラはりにいった。わたしはビラをはりおわって、かえってきて、本屋の店先で、なにくわぬかおでたっていると、むこうの交番に人だかりがしている。のぞいてみると、別グループのビラはりにいった同志がつかまっている。

わたしはすぐに自転車で古末君のアジトに走った。このアジトは私だけしか、知らないことにしてあった。同志たちがつかまったときの用心である。古末君から大阪の診療所あての紹介状をもらって、わたしは、店にも家にもよらず、そのまま大阪にとんだ。しかし大阪の特高につかまって、呉の警察につれもどされた。古末のアジトをいえとせめられたが、古末君がアジトをはなれるまでガンバっていて、もうよかろうと白状した。特高はとんでいったが、だれもいないと、おこってかえってきた。」ということです。

この事件で「赤い本屋」といって新聞にデカデカと田中豊氏のことがかきたてられました。のちに水兵の阪口喜一郎氏がこの本屋にレンラクをとりにきました。

また古末憲一氏は、はじめ大阪の全協組織と連絡をとって、工廠の首切反対闘争をはじめたが、広島地方に全協組織がつくられるにともなって、市川忍氏などと連絡をとりました。呉工廠の川窪鉄之助氏もこのルートで広島的全協・金属労組に加入しました。

四月三〇日の検挙をのがれた。古末憲一氏は、べつの家にかわり、ビラの印刷は、ちかくの空家でやっていた。片岡義夫氏（呉地区の共青同盟キヤップ）とふたりで、ガリ版ずりをやっているとこへ私服の特高がひとりやってきた。「やつつ

けてしまおう」と、古末、片岡のふたりでかまえると、その特高は逃げていった。古末氏は海へ、片岡氏は山へ、わかれわかれにげて広島市にむかいました。

古末氏が、広島市の全協の同志のアジトにゆくと、ちょうど広島市の「5・4事件」一斉検挙のあったあとで、アジトはだれもいなかった。特高が網をはっていなかったのも、うまくのがれました。古末氏は、べつのところで「5・4事件」の一斉検挙をのがれた岨常次郎氏、寺尾一幹氏と連絡をとることができました。

やがてこの三人で共産党広島地方委員会準備会をつくることになります。

「5・4事件」

一九三一年（昭和6年）五月四日から、全協広島地方協議会にたいして、一斉検挙がおこなわれました。

五月四日夜、台屋町的全協アジトをおそった警官隊や消防団のはでな「大捕物」が『中国新聞』にのりましたが、くわしいことは、当局の「新聞記事さしとめ」のために、一九四二年（昭和7年）九月七日の予審終結までふせられていました。九月七日、八日づけ『中国新聞』にのったものは、もちろん当局側の発表です。

五月四日の広島市の全協組織の一斉検挙のいとは、四月一六日の『戦旗』広島支局の検挙です。特高はかねてめをつけていた、広島放送局員

伊藤正朔そのほかを検挙した結果、『戦旗』広島支局責任者は伊藤正朔、『第二無産者新聞』『無産青年』の広島地方責任者は嶋常次郎、赤色救援会の広島地区責任者は、胡川清であることがわかった。また全協の組織も、事務局長は市川忍、事務局員は嶋、五条、小笠原であることもわかった。しかし、どこにいくかまだわからなかった。

五月四日特高は専売局女工、上野良子さんをとらえ、いったん釈放して、岡野巡査部長、黒山巡査ほか数人があとをつけた。そして台屋町の空家にあつまっているもの数人を検挙しました。

この事件で起訴されたものは、市川忍、五条俊夫、胡川清の三氏でした。

一九三二年（昭和7年）十一月二五日この事件の公判がおこなわれましたが、市川忍氏は、公判にはいるまえに被告人の会議をひらくことを要求してゆずらず、ついに裁判長から退廷を命じられました。そして傍聴も禁止となり傍聴人も公判廷からおしだされました。弁護人から「裁判長忌避」を申したてたが、しりぞけられ、被告なし傍聴なしの裁判となったと新聞記事にあります。十二月五日、市川忍四年、五条俊夫三年の刑が言いわたされると市川、五条は「弾圧下の欠席裁判反対。日本共産党万才」をさけんで退廷したとあります。

四

日本共産党 広島地方委員会の結成

「5・4事件」のあと、再建運動がつづけられ

ました。

嶋常次郎氏は、たび重なる検挙をたくみにのがれて活動していました。

「一九三一年（昭和6年）三月共産青年同盟本部と連絡がつき、六月に共産党中央から連絡があつて上京した。七月に広島市で、嶋、古末、寺尾の三人で党広島地方委員会準備会をつくつた。八月、党中国地方委員会、広島地方委員会を結成した」

と嶋氏はかたっています。（1983年10月）

なお、となりの岡山県では一九二八年（昭和3年）、「3・15事件」直前に、党岡山地方委員会が結成されています。板野勝次氏の『嵐に耐えた歲月』によれば、委員長は、広島合同労働組合から来た倉本虎一氏。労働組合評議会、中国地方評議会結成のため広島からきた倉本虎一、達一兄弟は争議の応援などで岡山県の同志たちとともに活動していました。そして党の岡山地方委員会の結成となったのです。

倉本兄弟は、一九二二年（大正11）七月広島市河原町の理髪店吉川長太郎氏、広島出身の東大生米村正一氏の『共産党宣言』などの学習活動に参加しています。（広島県労働組合会議編『広島県労働運動史』）

しかし、うちつづく弾圧で、岡山地方委員会もつぶされました。中国地方委員会は、一九三一年にはまだ結成されていません。

「中国地方に党組織を確立する展望をもっておりました」と、故古末憲一氏は書いています。

広島地方委員会は、「5・4事件」まえからの全協組織のメンバーのうち、検挙をのがれたものの、

不起訴で出てきたなどを、党に組織してゆきました。しかし、そのことをくわしく書いた同志の手記はありません。『中国新聞』（1933年5月23日付・10月5日付）の「3・5事件」発表記事―当局の発表―によるほかはありません。職場の組織をみると、広島電鉄は一九三〇年のくれのストライキをつぶされたのち、しばらく左翼の組織ができません。組織ができるのは一九三三年になってからです。

広島郵便局では「5・4事件」で検挙された大藤軍一氏（通信書記補）が不起訴でできると太田史郎氏（電信集配手）らと全協組織の再建と党細胞をつくることにつとめました。一九三二年（昭和7）三月五日および一〇・三〇の一斉検挙で、郵便局関係でとらえられたものは、このほかに、堀江明治氏、橋本俊三氏、竹谷時良氏の名があがっています。

日本製鋼所・広島工場はかねてから目標工場としていたが、一九三一年（昭和6年）八月、全協金属労働組合の分会が、野中富雄氏、井上満氏、安田裕俊氏によつてつくられ、ついで11月いづれも党にはいりました。

印刷工では共産青年同盟の組織がのびてゆきました。新聞によれば、石川市松氏（共青市川印刷所細胞キャップ）、丸川昇一氏（共青中国新聞細胞キャップ）、元安勝氏（同細胞員）などの名があります。

村上四郎氏は、広島合同運送争議・広島電鉄争議の応援の際も、活版工として検挙者の中に名があります。そのうち全協出版労働組合広島支部責任者として、はたらきました。

共青同盟はこのほかに、帝國人絹岩工場（責任者花野岩男氏）高等師範学校（責任者井ノ口俊夫氏、細胞員兼仁傑氏）などにも組織がつくられました。

花野フジエさんは広島紡績のストライキに参加したのち、福山市の福島紡績に入るべく友達とともに行きました。これは福山労働組合から「福島紡績に入って組織してほしい」とたのまれたからでもあります。しかし入社のための面接で、友達のほうは入れたが、フジエさんは採用にならなかった。「あんまりシッカリしすぎている」という理由だったそうです。そのご彼女は、広島市からきた岡田茂美氏とともに福山区の全協組織をつくるために、はたらきました。岡田氏が病にたおれてからは、花野フジエさんが責任者として、広島市の古末憲一氏などと連絡をとっていました。

花野・岡田そのほかの人のことについては当時福山労働組合の常任だった、野田清一氏の追憶の記が、よせられています。

広島専売局では「5・4事件」で、上野よし子さんが検挙されたあと、天津せいさんなどが、残っていました。韓利權氏がオルグにあたりました。全協の組織としては、一般使用人組合、官庁分会キヤップとして、島本隆司氏、同教員分会として、村上金彦氏、同金融分会は、清水次郎氏の名があげられています。

国鉄の組織は門司鉄道局管内に広島県、山口県がはいっているの、広島車掌区の同志が山口県の大島駅へかわったり、三田尻から呉線の吉浦駅にきていた同志もありました。一九三二年（昭和7年）三月には、国鉄の松本武司氏が広島県警に

検挙されたが、七月二四日には山口県警が防府市で国鉄オルグ岩村大次氏を検挙し、そのあと広島車掌区、吉浦駅、山口県の三田尻駅、大島駅などの同志を山口県警で検挙しています。

これらの組織づくりは、スケジュール表のようにきちんとすすめられたわけではなく、特高の弾圧をくぐって「ジグザグのみち」をとりながらすすめられました。

広島市での活動があぶなくなった岨常次郎氏は広島市での共青同盟のしごとを吉岡道人氏にゆずり、呉地区にうつりました。特高はなお手をゆるめず、呉市の岨氏のアジトをおそったが、ひと足はやく彼は上京してのがれました。岨氏のあとは、これも広島市での活動があぶなくなった寺尾一幹氏が、ひきつぎました。また広島電鉄のストライキのとき検挙され、ついで三滝山ピクニック事件で検挙された松本京一氏も呉地区に来て活動しました。

反戦ビラ

「このとし九月一八日（一九三一年・昭和6年）満州事件勃発。反戦運動を勇敢におこなう」と『大呉市民史』には、そのころの共産党広島地方委員会のことをのせています。

広島市では、宇品港にむかう兵士の列に反戦ビラをまいたと思ひ出を語る人もいます。騎馬巡査におっかけられたが、みんなにげて、つかまらなかったという。

『大呉市民史』には広島市の反戦ビラについてつぎのようにのせています。（同書P252）

九月二日、広島専売局に全協反戦同盟の名で「シナ」出兵に反対のアジビラ十数枚を配布。東署、憲兵隊で犯人捜査中、二三日早朝、呉線海田市駅において、呉工廠通勤列車到着の際、同様ビラを配布したものとあり、当局狼狽。

——一〇月、広島市の招魂祭をあてこみ、全協系の活動、日にめざましく、また各中等学校に「満州」出兵絶対反対などのアジビラを配布または送付。

——一〇月二四日未明、眼鏡橋付近および広島前小倉方面の電柱に、反帝連盟呉地方委員会の名で、満州出兵反対、帝國主義戦争反対、その他社会主義、大衆党を攻撃し、国賊的文字を連ねた九種類のビラを貼るものあり、呉署は全協系残党の仕業とみて捜査。（翌年二月に続く）

つづいて同書二五七頁に呉市内にまかれた反戦ビラについて、つぎのようにのっています。（昭和7年の項）

（一）紀元節（2月11日）の前夜、呉阿賀町、延崎方面の電柱、掲示板に半紙大新聞紙に朱と黒で「日支開戦」云々のアジビラをはりつけたものあり。広署捜査。

（二）全協系の不穏ビラが二月九日未明にも数十枚市内に撒布され、呉特高嚴重捜査。

（三）二月二七日午前八時ごろ市内一帯に激越な文句をならべた反戦ビラを撒布したものとあり、呉署

はこれも全協系のしわざとみる。

四 三月一日夕、広村電車交叉点付近で、残業の従業員の帰宅時間をねらって不穏ビラをまくものあり。

(五) 三月一四日、呉駅前、職業紹介所付近に不穏ビラをまくものあり。

(六) 三月一六日、同様ビラを配布。

広島市では三月四日、古末憲一氏が捕えられました。そしてあくる日、三月五日広島市で左翼活動家の一斉検挙がはじまりました。「3・5事件」といわれるものです。

呉市では、やがておそってくる弾圧をまえに同志たちは必死で反戦ビラをまいていたわけです。

『唸るクレーン』

一九三一年（昭和6年）はじめの海軍工廠労働者の解雇に反対するたたかいのなかで、全協組織と工廠労働者との連絡がついたのですが、くわしい記録はありません。

『中國新聞』によれば、「呉工廠製図工、川窪鉄之助は、昭和六年四月の大整理に刺激されて、同年八月全協、金属労働組合、広島支部に加入、呉工廠分会を各職場ごとの班別に組織し……昭和六年九月に入党、重田安一らと工廠細胞を組織」とあります。

重田安一氏のおもいではつぎのようです。

「はじめ呉市中通りの田中書店の田中氏から、

組常次郎氏を紹介された。そのうち組氏から寺尾一幹氏を紹介され、『これからは寺尾氏とレンラクをとつてくれ』ということだった。……寺尾氏と工廠にビラまきにいったことがある。工廠の塀のところまでいって『ここからさきは、きみがかつてをしゃっているからのむよ』と寺尾氏がいうので、私はビラのたばを塀のうえにのせ、塀をのりこえ、工廠のなかにはいって、ビラをまいたことがある。製鋼砲塹部といっているが、製鋼工場と砲塹工場とは別の工場だ。私は砲塹工場の旋盤工だった。そこからは蒲田政雄氏がオルグとしてはたらきかけてくれた。

工廠内ではまず製図工にその影響がひろがったようです。検挙者のなかに、「魚雷部製図工」「魚雷実験部製図工」「造船部製図工」など八名がいます。

呉地区、オルグの寺尾一幹氏が、党細胞の機関紙——いわゆる工場新聞をだすことをすすめました。そのころ労働組合—全協の分会が機関紙をだすときは、全協の分会の名をいれてだすことになっていた。党細胞がだすときは、工場新聞と書いていた。」

重田安一氏のおもいではつぎのよう

「職場のなかで、『こんど新聞をだそうとおもうんじやが、なんかかいてくれんかいの、不平不満、そのほかなんでもえ』といつて投書をあつめた。わたしは、海工会の役員選挙に一三〇票くらい得票があつたほどで、顔がひろかった。おやじも工廠ではたらいいて役つきだった。もつとも呉工廠の大整理で首になったが、『唸るクレーン』のガリ版の原紙をきつたのは、林寿恵子さんだろう。」

外交官（領事）の娘で、寺尾氏が手が足りないのによびよせたときいている」とのことです。

『聳ゆるマスト』

呉海軍のことについては、そのころの水兵そのほかの人たちから、かなり手記や手紙がよせられています。

一九三一年（昭和6年）八月海軍内で、社会学研究会をつくつていたとして海軍をおいだされた阪口喜一郎兵曹、西川兵曹、平原水兵、山口水兵、若林水兵が中心となって、水兵対策委員会がつくられたと平原甚松氏は、かいています。まだ水兵たちと党広島地方委員会や呉地区委員会とはレンラクがなかったという。

阪口元兵曹は、「赤い本屋」の田中豊氏に、党へのレンラクをたのみにいった。しかし田中氏からみれば、おいそれとひきうけるわけにゆかなかった。

田中氏のはなしによれば、「じぶんは、いわばおよがされていた。本屋の前の家の二階、表の間に特高が、見張りをおいていた。党関係のものが本屋にやってこないかと張り込みをしていたわけだ。そこへやってきた阪口喜一郎氏は、大きなからだの男で、もののいいかたもぶつきらぼうだった。党へのレンラクをとつてくれ、など、いって、オルグをつりだしにかかつているのではないかとおもった」といっています。

阪口氏は、なんども田中書店にきた。あるとき

は、おくさんの野村梅子さんもきたということとです。田中氏は考えたすえ、寺尾一幹氏に相談した。

「とにかく、あつてみよう」と寺尾氏がいるので、ある喫茶店で阪口氏に会わせて、田中氏はおもてで見張りの役をしたという。

あとで寺尾氏が「彼は大丈夫だ」というので、そののちは寺尾・阪口が直接レンタックをとることにしたそうです。

地区オルグの寺尾氏は、海軍細胞にも機関紙をだすことをすすめました。題名は海軍のなかまで『聳ゆるマスト』ときめたという。

この『聳ゆるマスト』をだれが編集印刷したかということ、問題があります。

平原甚松氏は、一九六九年（昭和四四年）一月「じぶんがガリ版をきった」と手紙をよこしました。

寺尾一幹氏は、一九七〇年（昭和四五年）四月、『聳ゆるマスト』は『唸るクレーン』とともに、じぶんがそれぞれの組織に機関紙発行を提案し、原稿は各自にかいてもらい、じぶんが取捨選択して発行した。林寿恵子がガリ版をきった」とかいてきました。

平原氏は、一九七〇年（昭和四五年）三月一日の広島市での無名戦士の碑の合祀祭のときの談話、一九七一年（昭和四六年）六月二七日づけの手紙などで、『聳ゆるマスト』はじぶんが発行したといっています。

これらはそのつど、プリントして関係者におく、さらに他の同志の手記とともに一冊にした『あめとかぜと』のなかにも、それらをいれて、同志たちに送りました。

一九八二年（昭和五七年）の年末、寺尾氏の手記がとどきました。そのご筆者が上京して聞き書きをとり、さらに寺尾氏から手記がよせられました。それによれば、寺尾氏が呉で活動していたころ、京都時代の同志林寿恵子さん（同志社女専三人組のひとり、三人とも家をでて名古屋でバスの車掌をしていた）を呉によびよせ、彼女が呉地区のガリ版刷りのビラ・ニュースなどを全部きった。呉港中学の自治学生会のニュース『学生仲間』や呉工廠の『唸るクレーン』なども彼女が原紙をきった。きれいな字だったといっています。当時工廠の労働者だった重田安一氏も、『唸るクレーン』はきれいな字だった。林さんがかいたものだ。寺尾君が京都からよびよせたもので、領事の娘だとか聞いているといっています。平原甚松氏はこれらのことを知っていないようです。こうした準備があるから、寺尾氏は工廠労働者や海軍の同志に党の細胞機関紙の発行を提案したのだと思います。

平原氏のいうようにだと、なぜ『聳ゆるマスト』だけ、しかも党細胞機関紙を、党地区オルグの寺尾氏が、あまりよく知っていない平原氏に編集印刷をまかせたかという疑いがあります。平原氏はガリ版にはシロウトであり、また今日つくってあしたくばるというものでもない。オルグのほうで印刷して十分まにあうものです。月二回発行にしたと寺尾氏はいう。

平原氏は「上部からの干渉介入は受けなかった。どこでどんなにして発行しているか、地区オルグといえども知っていなかった」とかいています。印刷は、シンパの留守宅（下宿の部屋）などをあ

ちこちかりて、やったといっていますが、これもおかしい。ガリ版のヤスリ、ローラー、原紙、リンクをのばす板、原稿などをもって、あちこち歩いたり、シンパの留守宅（下宿の一間）にあらこんで、ガリガリいわせて原紙をきるなど、疑われるものです。音のせめよう原紙がきれたらプロ級です。

『聳ゆるマスト』はガラ半紙二つ折り、二段ぐみ、四頁だてで旬刊発行。一頁は時事問題について社説的なもの、二頁は基礎理論的なもの、三頁は下士官兵の待遇などに関するもの、四頁上段は軍港のトピック的なもの、下段は必読書の紹介と編集後記的なもの」とも平原氏がかいています。

B4版のガラ半紙二つ折りの各頁に、それだけの内容を原紙でかきこむのは、よほど上手な人でもむづかしいでしょう。しかも一日ごとにださねばならないのです。

寺尾氏は「そんな、手のこんだものではなかった。B4のガラ紙のうらおもてに刷ったものだ」といっています。

『聳ゆるマスト』が四号までで、いったんまとめたのは、私が検挙されたからだ。平原君がひとりで発行していたのであれば、つづけて五号、六号がでているはずだ」と寺尾氏はいっています。

昭和七年五月一〇日寺尾氏は逮捕され、五月三〇日呉署から脱走、呉市に非常線がはられて、道のあるいていた平原君が逮捕されたとあります（『大呉市民史』）。

平原甚松氏はすでになく、『聳ゆるマスト』の現物もみることはできません。

〔注〕その一・「昭和八年二月二七日、平原甚松に対する判決文」というのをみると日時と事実関係にまちがいがありません。

- (1) 昭和七年四月 阪口喜一郎によばれて郷里豊田郡中野村から呉にて、党中国地方オルグ三好惣次、呉地区オルグ寺尾一幹に紹介された。
- (2) 三好惣次を責任者として寺尾、阪口とともに水兵対策委員会をしばし開いた。(5月20日頃まで)
- (3) この協議にもとづいて『聳ゆるマスト』第一号から第三号、特集号第一号各数十部を(平原が)謄写作成して、寺尾・阪口・木村莊重を介して海兵にくばった。

この判決文だと、昭和七年四月中旬から会議をひらいて『聳ゆるマスト』発行を協議してから、つくったことになります。四月から五月一〇日に寺尾氏が逮捕されるまでの短い期間に四号までの『聳ゆるマスト』発行はできないでしょう。寺尾氏・平原氏とも「昭和七年二月に『聳ゆるマスト』は発行されている、三好惣次氏は四月中旬に呉地区にきたので関係ない」といっています。また「みんなが一室にあつまって会議をひらいたことはなし。街頭連絡だった」とかいています。

判決文といっても、警察、検事局、予審で調書がつくられ(時にはデッチあげられ)、関係者の供述などにも、まちがったものがあるから、うのみにはできません。

なお三好惣次氏の談話や手紙には、はじめは『聳ゆるマスト』の発行されたことは、昭和七年八月に東京で逮捕されてのち予審判事から聞かされたといっていました。のちに、関係があるという主

張になっています。

判決

本籍 広島県豊田郡中野村二百五十一番屋敷
住居 不定

無職

平原 甚松

明治三十九年十月二十二日生

右の者に対する治安維持法違反被告事件に付当裁判所は検事古岡幸三関与審理を遂げ判決すること左の如し

主文

被告人を懲役三年六月に処す

未決拘留日数中百二十日を右本刑に算入す

理由

被告人は本籍地の高等小学校卒業後家業たる海運業に数年間従事し大正十五年六月一日志願兵として呉海兵団に入団し艦上勤務を経て呉海兵団勤務と為り海軍一等水兵に進みたるものにして其間プロレタリア文学に親しみ左翼文献を繕きて思想左傾し共産主義を信奉するに至り昭和四年四月横須賀海軍軍法会議に於て昭和六年八月呉海軍軍法会議に於て孰れも左翼運動を為したる廉に依り取調を受け同年十月十日左傾思想抱持の故を以て海軍志願兵令第十八条に依り現役免除予備役に編入せられ退団したるものなるところ日本共産党(略称党)が国際共産党の日本支部にして革命的手段に依り我国家存立の大本たる立憲君主制を撤廃し私有財産制度を否認し無産階級独裁を経て共産主義社会の実現を目的とする秘密結社なると及赤旗か党の機関紙にして其政策綱領を大衆に宣伝煽動する秘密出版物なることを知り乍ら党を支援し其拡大強化を図ることを目的とし

第一、昭和七年四月肩書本籍地に帰居中

呉市発信発信者不明の電報を受取り直ちに呉市に到り坂口喜一郎方を訊ねたる結果当時同市に

於て党中国地方オルグ三好惣次、同呉地区オルグ寺尾一幹指導の下に呉海軍海兵方面に對し党の拡大強化の目的を以て活動し居たる右坂口の發電なることを知り同人の依頼に応じ共に呉海軍方面に党活動を為すことを承諾し其呉市内に於て右坂口より前記三好、寺尾を紹介せられ右三好より党に加入方の勧誘を受け即時承諾して入党し三好を責任者として寺尾、坂口と共に党呉地区水兵対策委員会を構成し呉海軍海兵を目標として共産主義の宣伝、同志の獲得に努め同年五月二十日頃の間屢々呉市内に於て右水兵対策委員会を開催し活動方針、同委員会機関紙の発行等に付協議に参加し該協議に基き海兵の不平不満を激化せしめて革命意識を昂揚せしむべき趣旨の記事を掲載せる機関紙『聳ゆるマスト』第一号乃至第三号特輯号第一号を各数十部謄写作成し之を右寺尾、坂口又は当時呉海兵団在団中なりし木村莊重等を介して呉海軍海兵の間に頒布閱読せしめ

尚其頃呉市内に於て二回に互り前記三好惣次より冒頭記載の趣旨の記載ある赤旗二、三部宛を受取り其都度当時呉海兵団在団中の山下達吉及同人を通し前記木村莊重に各一部配布閱読せしめ

第二、昭和七年五月下旬右犯行の嫌疑に依り検拿せられたるも右犯行を極力否認して同年七月上旬釈放せられ本籍地に帰郷し居たるところ同年八月上旬頃黨員木村莊重の來訪を受け同人の勧誘に依りて再び左翼運動を為さんことを誓ひ次て木村よりの通信に接し同年十月上旬広島市に來り木村より党中国地方オルグ錦織彦七、同滝川恵吉を紹介せられ右三名と協議の上「天皇制を倒せ、帝國主義戦争を内乱へ、労働者農民兵士のソヴェート政府の樹立、米と土地と自由の人民革命万歳」其他海兵の不平不満に對する具體的要求事項より成る党軍事部海軍班のロー

ガン草案を決定し

第三、其際（昭和七年十月上旬）党中央より被告人に上京を命ずる指令の伝達方を依頼せられ居りたる前記木村より上京の上前記坂口喜一郎と連絡すべき旨を告げられるや即時東京市に到り当時既に同地に上りて党活動を為し居たる右黨員坂口喜一郎を訪ね同人に右スローガン草案決定の事実を告げ同人の紹介に依り同市銀座某レストランに於て党軍事部長長谷川茂氏と会見したる上同年一〇月下旬坂口の指令に依り横須賀市に潜入し同市に於て右坂口の紹介に依り黨員小倉キクエ、同目黒亀次郎等と連絡し坂口主宰の下に右目黒等と協力して横須賀海兵団海軍病院、集会所、軍艦等を目標として党組織結成の爲の活動に従事し

以て日本共産党に加入し且同党の目的遂行の爲にする行為を為したるものなり
以上の事実

一、被告人に対する予審第二回訊問調書中同人の陳述として自分は判示冒頭記載の如き経歴を有し判示の如き動機より共産主義を信奉するに至りたる旨及自分は判示第一乃至第二の犯行を為す際は日本共産党か判示の如き目的を有する秘密結社にして赤旗か判示の如き使命を有する秘密出版物なることは之を知悉し居りたる旨の記載

二、被告人に対する予審第三回訊問調書中同人の供述として被告人が三好惣次の勧誘に依り日本共産党に加入したる点を除き判示第一乃至第三と同旨並に自分は結局日本共産党の拡大強化を図り党をして其目的を遂行せしむる爲活動したるものにて即ち現在の天皇制に依る資本主義国家を倒しプロレタリア独裁国家と爲し更に進んで共産主義社会を実現することが目的なりし旨の記載

三、被告人に対する予審第一回訊問調書中同人の供述として自分は昭和七年四月二十日過ぎ呉市内に於て党中国地方オルグ三好惣次の勧誘を受けて入党したる旨の記載

四、坂口喜一郎に対する治安維持法違反被告事件に於ける証人三好惣次の予審訊問調書中同人の供述として自分は昭和七年四月頃呉市内街頭に於て寺尾より被告人を紹介せられ同人に対して呉海軍方面の活動を依頼し其承諾を得且自分か党本部より中国地方オルグとして派遣せられ居るものなることを告げ尚同月中呉市二河公園又は山の手方面にて入党方を勧誘し同人は即時承諾して黨員と爲りたる旨の記載

五、滝川恵吉に対する治安維持法違反被告事件に於ける証人錦織彦七の予審訊問調書中同人の供述として被告人か入党し居ることは自分か昭和七年九月二十九日東京より広島に行き際丹後吉郎兵衛より聞き広島にて木村莊重よりも聞きたる故三好惣次か入党せしめたるものと思ふ三好は党中国地方オルグとして丹後か被告人の入党せることを知れるものと思ふ旨の記載

六、坂口喜一郎に対する治安維持法違反被告事件に於ける証人寺尾一幹の予審訊問調書中同人の供述として判示第一の事実中被告人か三好惣次より赤旗を受取り之を山下達吉、木村莊重に交付閱読せしめたる点を除き其余の判示に照応する記載

七、木村莊重に対する治安維持法違反被告事件に於ける同被告人の第三回予審訊問調書中同人の供述として判示第二の事実及判示第三の被告人か党中央よりの指令に依り坂口喜一郎に向け上京したる点に照応する記載
八、判示に照応する

(イ) 「聳ゆるマスト」 第一号乃至第三号特輯号

第一号（木村莊重に対する治安維持法違反被告事件の証拠物中証第七号証第二百一十五号）

(ロ) 日本共産党軍事部海軍班スローガン草案

（滝川恵吉に対する治安維持法違反被告事件の証拠物中証第六十二号）の存在

を綜合して之を認定す

法律に照すに被告人の判示所為中国体を變革することを目的とする結社に加入し且其目的遂行の爲にする行為を為したる点は治安維持法第一条第一項後段に私有財産制度を否認することを目的とする結社に加入し且其目的遂行の爲にする行為を為したる点は同条第二項に各該当し以上は一個の行為にして二個の罪名に觸るるを以て刑法第五十四条第一項前段第十条に依り重き前者の刑に従ひ所定刑中懲役刑を選択し其刑期範圍内に於て被告人を懲役參年六月に処し刑法第二十一条に従ひ未決拘留日数中百式拾日を右本刑に算入すべきものとす

仍て主文の如く判決す

昭和八年十二月二十七日

広島地方裁判所刑事部

裁判長判事 福田 豊市[㊦]

判事 辻富 太郎[㊧]

判事 近藤 完爾[㊨]

〔注〕その二 広島地方と党中央との關係は、つぎのようです。

(一) 昭和六年七月、広島市から岨常次郎氏が党中央と連絡がついて上京、広島地方委員会結成の承認をうける。岨、古末、寺尾の三人で広島地方委員会を結成。古末氏が広島地区、岨氏が呉地区の責任者に。岨氏が上京して、寺尾氏が呉地区の責任者になる。

(二) 広島地方と中央との連絡がしばらく切れていたため、党本部では、三好惣次氏を中國地方オル

グとして出す。(昭和七年三月)三月五日より広島市を中心に一斉検挙がはじまっていて、ようやく四月に呉地区責任者、寺尾一幹氏と連絡がつく。

(三) 昭和七年五月十日、寺尾一幹氏が検挙され、五月三十日呉署から脱走、上京して、藻谷一郎氏(京大時代の同志で当時中央で活動)と連絡がつく。

四 昭和七年八月、三好氏は連絡のため上京して検挙される。

(五) 昭和七年九月、中央は、錦織彦七氏と滝川恵吉氏を中国地方オルグとして出す。錦織氏は岡山県と呉海軍関係を中心に担当、滝川氏は主に広島地区を担当。

(六) 昭和七年十月三十日、熱海温泉の党会議の一斉検挙で、錦織氏が検挙される。広島地区にいた、滝川恵吉氏以下木村莊重氏及び海軍関係も検挙される。(10・30事件)

昭和七年三月五日、広島市を中心にはじまった一斉検挙は、四月から呉市での一斉検挙となりまった。

五月十日 特高刑事が、ポストに手紙をいれようとしている男が寺尾一幹氏にいてと逮捕したとあります。(『大呉市民史』) 寺尾氏によれば、「留置場のブタ箱は検挙された同志でいっぱいだったので、私は二階広間の隣の小部屋に入れられた。ある日、部屋の出入口のカギがかけないののでそこから逃げた」とのことです。(寺尾手記(二)参照)「五月三〇日未明、午前二時ごろ、寺尾は手錠のまま脱走」(『大呉市民史』)。寺尾氏は広島市に逃げて、広島高校の某教授のちかくの空家にかくれました。そして同教授が、広島文理科大学の制服制帽をつこうしてくれ、それをつけて芸備線か

ら山陰線をまわって上京しました。

寺尾氏脱走のあと、呉市では非常線がはられ、道路をあるいていた平原甚松氏がつかまりました。しかし警察は、ただ注意人物だからつかまえたというだけですぐに釈放しました。阪口喜一郎氏も水兵関係のしごとを木村莊重氏にひきついで上京しています。木村莊重氏によって、『聳ゆるマスト』第五号がだされることになります。

木村莊重氏は呉海兵団を満期退団のあと、広島市に家をかきアジトとしました。広島市のカフエーリラスの女給、佐藤静枝さんが、呉市のカフエー摩天楼の女給となつてゆき、木村氏と水兵の間のレンラクをとるようになりました。

のちに呉の水兵の一斉検挙をのせた新聞には、「広島市のカフエーリラスの左傾女給純子にアジられて」と、佐藤静枝さんのことをかいています。この左傾女給純子とは、花野フジエさんのことと思われまふ。花野さんは福山区の全協オルグとして活動中検挙され、起訴猶予になって、広島市で活動をつづけていたもので、木村莊重氏の妹、右田美子さんとともに広島バスを目標にして活動していました。食うために、リラスの女給をしていたころ、佐藤静枝さんにはたらきかけたものです。

(注)「純子は、順子が正しいです。この頃、広島の花野から私に『順子』という名で手紙がきた。」と福山の野田清一氏から手紙がきました。野田氏の手記に花野フジエさんのことはくわしく書かれています。

カフエー摩天楼へは、小倉正弘水兵が時々いつていました。月十五円の一等水兵の給料では、カ

フエーへかようのは苦しかったとのこと。もっとも小倉正弘水兵は、海軍へ志願せよという父親に「月五円ずつ送ってくれるなら志願する」と交換条件をだして、父親も約束どおり五円ずつ毎月おくつていたという。小倉水兵は、下宿をふたつ借りていた。そのひとつの下宿に左翼文書をおくっていました。

佐藤静枝さんは、小倉水兵がゆくと、カウンスターのかげで文書をわたしてくれたという。彼女は小さい時から苦労したといっていたが、そのせいか年よりずつとふけてみえた。当時僕が二〇歳で、彼女は二二歳くらいだったが、二四・二五歳くらいに見えた。なんだか先輩の同志に会っている感じがした」と小倉氏は思い出を語っています。

大切な文書をうけわたしているという気持ちもあったでしょう。

『聳ゆるマスト』第五号は、つぎのようにしてつくられました。呉の水兵からの原稿は、木村氏がうけとつて広島市にもつてかえり、古田稔氏が自分の家で原紙をきる。その原紙は、黒崎保氏にわたされ、彼が自分の家で『聳ゆるマスト』に刷りました。古田稔氏は広島一中から早大に進み、学生運動で退学処分になって、広島市にかえっていました。黒崎保氏は「3・5事件」で検挙された、共青同盟広島地区責任者、吉岡道人氏の弟です。

『聳ゆるマスト』は呉にもちこまれて、小倉水兵にわたされ、彼から軍艦の同志にくばられました。

『聳ゆるマスト』第六号がガリ版で刷られ、呉にもちこまれたところで「10・30事件」の一斉検

拳があつて、呉海軍の水兵やオルグの木村莊重氏、ガリ版に協力した古田稔氏なども逮捕されました。

その裁判に提出された証拠書類のなかに、『聳ゆるマスト』第五号一五部（証拠第20号）。同第六号四五部（証拠第21号、証拠第38号）とかかれています。

〔注〕第六号は二カ所でみつかったとおもわれます（『五人の水兵の判決書』原弁会シリーズ）

第六号の記事について、判決理由書には、要旨次のような記述があります。

軍艦「白鷹」で夜中に士官どもが酒をのんでさわぐで、ある水兵が静かにしてくれといったところ、あべこべに士官どもから「注意」をうけた。このことを『聳ゆるマスト』第六号でとりあげて水兵にたいする不当な圧迫だと抗議した。

士官どもの与えた「注意」とは勿論暴力です。党オルグ錦織彦氏、木村莊重氏、水兵小倉正弘氏が協議して、士官に不当な取扱があつたときは、水兵は団結してあたれと、アジることをきめています。

「現役満期 強制延期 反対」の記事もめせたようです。このことについて、小倉正弘氏は、おもいでを、かたっています。

「だれも兵隊で一生めしをくうつもりはない。海軍へ志願してはいつたのは、どうせはたちになつたら兵隊にとられるから、はやくいって、はやく出たほうが社会にでて仕事にはやくつけ

るとおもつたからだ。『満洲事変』がはじまると、しつこく再役せよといつてくるようになった。ほとんど強制的だ。いつまでも海軍にいたら、社会にでてから仕事をさがしてうろうろせねばならん。はいつたときとはなしがちがうとみんなブウブウいつた」。

呉地区のそのほかの組織

全協は、金属労働組合支部（責任者 川窪鉄之助）、出版労働組合支部（浦田政雄）、一般使用人組合支部（茂渡義人）。これらの組織で呉地区協議会を結成したとあります。

共産青年同盟―自治学生会の組織は、呉市の中学校にもつくられていたようです。そのころ朝鮮から日本の高等学校や専門学校にはいるには、まず日本の中学校を卒業せねばならなかった。県立の中学校にはいれてくれない。呉市では、私立の呉港中学校や、興文中学校にも朝鮮からの生徒が多かつたわけです。呉地区オルグの寺尾氏と呉港中学のグループとの連絡がついて、彼らが「ニュース」をだすというので、寺尾氏がガリ版刷りをひきうけて『学生仲間』をだしたということです。興文中学校のグループと共青同盟呉地区責任者浦田政雄氏との連絡があつたことは「3・5事件」呉地区の新聞発表や『大呉市民史』の記事にみられます。つぎの(5)の「3・5事件」―（呉署で検挙）をみてください。

五

「3・5事件」

一九三二年「昭和七年三月五日から広島市を中心に、党、共青同盟、全協、救援会、文化団体などに一斉検挙がおこなわれたのを「3・5事件」といっています。

この一斉検挙のきっかけとなつたのは、三月四日の古末憲一氏の逮捕です。広島高等師範学校の生徒課から警察に、にせの高師生がいること、その下宿は千田町の家だとしらせがあつた。鷹野橋派出所の巡査がしらべにゆくと抵抗して逃げようとするので、とりおさえ、そのへやを調べると、共産党関係の文書がでたのでおどろいて、西署の特高係に報告しました。その夜の取り調べで、党広島地区責任者古末憲一氏であることがわかつたとのことです。広島県特高課では、すでに左翼分子の一斉検挙のてはずをととのえていたが、検挙の日をはやめて、三月五日夜明け、広島市内の一斉検挙にのりだしたものです。特高は、かなりくわしく同志たちの、いるところをつかんでいて、ほとんどその日のうちにとらえています。

そのときの新聞記事をたどてみると、検挙されたもの広島地区一二三名、呉地区五四名、松永地区五名、福山地区一二名、府中地区一〇名、県外五名

（広島市東署に検挙）

一、五日よあけ大谷光雄方を家宅捜査。

二、皆実町、消費組合事務所で迫柳盛登ほか二名。
三、大須賀町、松本武司は、てがかりなし
四、皆実町、井石竜爾方で松本徹。
五、皆実町 東田徳三郎方で、金平國ほか3名。
六、幟町 伊藤正朔。

七、鉄砲町 石川茂一。

八、五日よる 街頭連絡中の鄭謙谷ほか二名

九、六日あさ 稻荷町川村方で孫泰玄ほか一名。

十、10日あさ 南竹屋町高校生梶川英夫。

一一、10日午後 堀川町で街頭連絡中の吉岡道人。

一二、紅一点 天津せい。

(広島市西署で検挙)

広瀬町、三篠町のアジト、河原町、国泰寺町の
会合場所などを一斉におそい村上文二、村上金

彦、花野岩男、井上その。

舟入町八千代館よこの空家で、仁井田教一。

(そのこの検挙)

四月一九日、新川場町、谷本洋服店方に下宿の
自称高校生、滝本敏美にかねて、めをつけてい
たが、帝人岩國工場へ連絡してかえりの滝本を
とらえ、下宿から赤旗、ピラをみつけた。

そのあと、ここにきた、片岡義夫ほか三名をと
らえる。

四月二一日、村上文二は海田市署から脱走。五
月八日再逮捕。

また、仁井田教一は廿日市署から脱走。五月十
五日再逮捕。

井口俊雄は西署に逮捕の夜脱走。五月十日夜七
時ごろ道路上で特高にであい短刀でさして逃げ
る。六月二日再逮捕。

(呉署で検挙)

四月一日、興文中学校五年生金圭順らが、ある
きながら自治学生会のことをはなしているのを
きいた特高刑事があとをつけて、下宿をつきと
めた。警官隊がそこをおそって、四名の中学生

をとらえた。あくる日ここへ連絡にきた共青同
盟呉地区キヤップ蒲田政雄をとらえた。

四月三日よあけ、亀田勢、大下一二、佐々木修

三、山根重義を逮捕。

四月二三日、山崎政高を逮捕。

五月一〇日、寺尾一幹を逮捕。つづいてアジト

にいた林寿恵子を逮捕。このとき「海工会 上

田君」とエンピツではしりがきしたものがみつ

かった。かねて特高は、海工会理事、上田稔に

めをつけていた。五月一日、工廠製図工・

上田稔を逮捕。かれの自白で工廠製図工・川窪

鉄之助、佐々木万寿司、西川成美、旋盤工・重

田安一を逮捕。

五月三〇日午前二時ごろ、寺尾一幹が呉署から

脱走。呉市今西通二丁目、上田方の下宿にひそ

んでいるとみて、そこをおそったが、寺尾はお

らず、松本京一が入口に表からカギをかけて留

守をよそおってひそんでいるのを、ドアをけや

ぶつて逮捕した。この下宿には、茂渡義人もす

んでいたのだが、おたがいにしらなかつたとい

う。

このほかに、党呉地区オルグ寺尾一幹氏と、水

兵との連絡をつけた中通りの本屋、田中豊氏も検

挙されましたが、水兵の組織は検挙をまぬがれま

した。また、池本米雄(18歳仮名)とあるのは池

田八束氏の弟、池田米生氏のことです。

この「3・5事件」で起訴されたものは新聞記

事によればつぎのとおりです。そのときの組織の

あらましをすることができます。

(広島地区)

党地区委員会責任者

書記

古末 憲一

村上 文二

松本 徹
松本 武司
仁井田教一

田谷 春夫

村上 四郎

全協出版労組広島支部キヤップ

プロレタリア文化連盟広島支部キヤップ

全協一般使用人組合官庁分会キヤップ

島本 隆司

全協一般使用人組合金融分会キヤップ

清水 次郎

大藤 軍一

太田 史郎

吉岡 道人

村上 金彦

石川 市松

丸川 昇一

元安 勝

井ノ口俊雄

簾仁 傑

共青同盟高師 細胞責任者

同 メンバー

中国新聞

共青同盟市川印刷責任者

同 メンバー

共青同盟高師 細胞責任者

同 メンバー

呉地区委員会 書記

佐々木万寿司

重田 安一

松本 京一

片岡 義夫

蒲田 政雄

大下 一二

(呉地区、起訴猶予者)

呉工廠製図工

小川 一雄

宇都宮寿作

池上 繁雄

書籍商
小学校訓導
全協一般使用人組合

党呉地区書記

興文中学校生徒

〃

〔注〕大正三年生は昭和七年で19歳

他県で起訴されたもの

党、共青広島地方責任者(のち共青中央委員長)

党呉地区オルグ

党中国オルグ

党國鉄オルグ

上田 稔

西川 成美

野原 一雄

田中 豊

城戸 薫

茂渡 義人

佐々木修三

山根 重義

山崎 政高

林 寿恵子

藤原 鷹則

池本米雄(改名)

金圭順(大4年生)

季親尹(大5年生)

康東揖(大3年生)

白 康(大4年生)

岨 常次郎

寺尾 一幹

三好 惣次

岩村 大次

「10・30事件」

まえにのべたように「3・5事件」のあと、滝川恵吉氏、錦織彦七氏が広島県にはいつて再建にあたりました。起訴猶予でできた同志たちも再

建にとりくみ、広高生、吉田司氏も「5・4事件」で停学処分になっていたが、処分がとけて学校にもどると自治学生会、共産青年同盟の再建にとりくみました。『赤旗』は、一〇〇部づつ吉田司氏のところへトランクにつめて、おくってきたと彼はかたっています。

「10・30事件」といわれるものは、一九三二年(昭和7年)一〇月三〇日熱海温泉で党中央委員に地方オルグもくわえた会議がひらかれることをかぎつけた特高警察が一斉検挙した事件と、それにつづく全国一斉の検挙です。

熱海温泉会議のとき、中国地方オルグ錦織彦七氏、呉から横須賀へオルグにいった平原甚松氏もつかまつたが、錦織氏のもつていたメモに滝川恵吉氏の住所がかいてあったことから一月三日、滝川恵吉氏が検挙されたと新聞の発表にあります。しかしそんなカンタンなものではないと思います。特高警察は全国的に党組織の状態をつかんでいたとおもう。スパイ松村そのほかから情報をとっていました。熱海会議に出席しなかった党中央部のものを、ほとんど同時に鎌倉や銀座でとらえています。軍事部責任者長谷川茂氏もつかまつている。水兵の組織もかなりわかつていたようです。もちろん新聞には発表していません。

「3・5事件」につづいて、広島県でも一斉検挙がはじまりました。

広島郵便局では、3・5事件のとき起訴猶予でた堀江明治氏や、局内にのこっていた橋本俊三氏、竹谷時良氏が検挙されました。

日本製鋼広島工場も「3・5事件」の時のはがれたが、このとき、野中富雄、井上満、安田祐俊

の三氏が検挙されました。

帝国人絹広島工場と広島専売局を目標として組織活動をしていた、韓利権氏、宇品港の陸軍運輸部にいた、寺本強司氏もこのとき検挙されました。

学校では広島高等学校生徒の吉田司氏、石田保三氏らが検挙されました。しかしこの「10・30事件」のあとも、のこったメンバーは組織づくりをつづけました。のちに校友会理事の選挙で、理事全員を自治学生会メンバーでしめるような勢力となります。

広島高等師範学校からは星川鳳一氏が検挙されました。この学校では、新興教育同盟のグループがつくられていました。しかしこの星川氏の検挙のあとは、たちなおれませんでした。

この新興教育同盟のかんけいで、賀茂郡川尻小学校の先生の山本タキエさんも検挙されました。新興教育同盟本部のレンラクで、広島にでて高師の星川氏そのほかの人々にあい、さらに星川氏から吉田司氏にひきあわせられ、吉田氏からオルグの滝川恵吉氏にあい、報告したり活動の指示をあたえられた。もちろん、吉田氏、滝川氏の名もポストもしらなかった。それがすっかりバレていて検挙されました。

新興教育同盟は一九三〇年(昭和5年)八月つくられ、機関誌「新興教育」をだしていました。日本教育労働者組合が、合法的な宣伝活動のためにつくったものです。この組合は全協に加盟して、その教育労働部となっていました。(『新日本新書』『日本歴史』下) 師範学校、高等師範学校の生徒のあいだにも『新興教育』という機関誌の読者の組織が全国にひろがっていました。

長野県では全協一般使用人組合、教育対策部、長野支部および新興教育同盟準備会、長野支部をつくり、組織は、教員二〇八人、関係学校六六校におよびました。一九三二年（昭和七年）三月から一回も全県的な会合をひらいています。また

師範学校の新卒業生の歓迎会とか短期現役兵（師範学校卒業生のみがはいり）の除隊の歓迎会をひらいて、組織拡大をはかっていたという。一九三三年（昭和八年）二月一斉検挙をうけましたが、ある小学校ではケイサツから先生をつれもどそうと、泣いて決議した生徒が学校をでようとするところを、学校側におしとめられたという。（『呉日日新聞』昭和八年九月十六日記事）

残念ながら、広島県ではそこまで組織がひろがりませんでした。

新興教育同盟は、プロレタリア文化連盟（コップ）に加盟していましたが、広島県ではほかの文化運動のほうがすすんでいました。

「3・5事件」で検挙された、島本隆司の記事（『呉日日新聞』昭和八年八月二十九日記事）によれば、すでに一九三二年（昭和六年）にはプロレタリア映画同盟広島支部や美術家同盟、演劇同盟各広島支部ができていたようです。そのとし八月ごろには、島本隆司氏を中心となってプロレタリア作家同盟広島支部をつくり、ついで一二月にはこれら各団体によるプロレタリア文化連盟、広島地方協議会をつくったとあります。

「10・30事件」では、石川茂一氏、伊藤正朔氏が文化運動の関係で起訴されました。

伊川正朔氏は『戦旗』広島支局責任者として「5・4事件」のとき検挙されて起訴猶予。3・

5事件で検挙されてまた起訴猶予。「10・30事件」で、こんどは起訴となりました。

石川茂一氏は三高在学中に運動にはいり、退学処分になって広島市にかえっていました。

岡本菊次郎氏のおもいによれば

「西原初二君の自由堂書店の二階で、プロレタリア科学の読書会がひらかれていて、それにいった。チューターは石川茂一君だった。それが私の運動にはいるきっかけになった」とのことです。

広島郵便局の小川正一氏も、石川茂一氏としりあうようになって運動にちかづき、「10・30事件」で広島郵便局の同志の検挙のあと、再建にとりくみました。

福山地区では山根清氏が検挙されました。一九三一年（昭和六年）一月赤色救援会広島地区委員会の結成のころから、胡川清氏とレンラクをとって、福山、松永などで救援会、全協、文化運動などの活動をしていました。

福山地区で全協の組織活動をしていた花野ふじえさんは、そのご広島市にかえって活動していましたが、10・30事件で検挙されました。作家同盟の関係で、三次、十日市のサークルおよび竹原地区のサークルも、このとき検挙されました。

「水兵の検挙」

「一〇月三〇日熱海温泉で共産党検挙をおこなったとき、海軍関係の文書があったことから、警視庁——広島県特高課——憲兵とレンラクがあつ

た。呉署特高係は、かねてめをつけていたカフエー摩天楼の女給、佐藤静枝をひそかによんどとりしらべた。そして呉ににいる水兵グループ六名および海軍を兵役免除になっている山下達吉が、事件に関係があるためぼしをつけた。ただちに海兵団、軍艦から小倉正弘、北田建二、佐藤彊、山口義次、稲垣宏、宮内謙吉の6名を憲兵隊が検挙。山下達吉の郷里神戸にむかった広島県特高課は、大阪にいと見当をつけて大阪の警察の応援をえて検挙した」と新聞にあります。

呉の水兵検挙は一月七日となっています。

平原甚松氏は一〇月三〇日熱海温泉会議でつかまり、呉署におくられてきました。

木村莊重氏も滝川恵吉氏の検挙につづいて検挙されました。

『聳ゆるマスト』5号、6号の原紙をきった古田稔氏は、広島歩兵11連隊にはいる直前に検挙されました。彼は二年の刑をおわってでると朝鮮竜山79連隊にとばされたとのこと。

坂口喜一郎氏も東京で検挙され、呉憲兵隊に留置されたことが新聞記事にみられます。

なお阪口の妻、野村梅子さんは呉署に検挙されたが、阪口氏が口をひらくまでいっさい口をわらず、がんばりとうした。起訴猶予になったが、もともと養母の反対をおしきって結婚したので、養母のもとへかえらず、自活の道をもとめて上京したとあります。

このとし、一九三二年（昭和七年）八月には横須賀軍港でも水兵が検挙されました。

八月三〇日軍艦「山城」で盗難事件があつて、水兵の所持品検査をしたところ、河田水兵のとき

ろから『日本共産党二七年テーゼ』が出てきました。そこで各軍艦で全兵員に上甲板集合が命令され、艦内の大捜査がはじめられました。

こうして軍艦「長門」から吉原水兵、軍艦「榛名」から西氏水兵が検挙されました。(「サンデー毎日」昭和49年4月21日号)

かねてから横須賀軍港で、集会所や軍艦の「幸便箱」に党のビラがいられるので、めをつけられていたとおもわれます。これら各氏はいづれも、海軍に入るまえに左翼運動の経験があります。前記「サンデー毎日」によれば、

吉原氏は「太陽のない街」の出身者、河田氏は『第二無産者新聞』を配布していたという。

西氏恒次郎氏は少年のころから、新人会の学生のレポーターとしてとびまわり、その後船員になって、各國の港につくたびにその共産党事務所をおとづれていたという

とあります。

西氏恒次郎氏については『日本社会運動人名辞典』に つぎの ように のつて います。

「西氏恒次郎」一九一・三・八一(明治44年) 東京市駒込区本郷元町に生れる。尋常小学校卒業。

一九二五年十一月結成の日本無産青年同盟に加盟、翌年一月におきた共同印刷ストライキに参加。のち評議会本部、海員組合刷新会で働らき、一九二九年共産党に入党

一九三二年横須賀海兵団入団、五月戦艦「榛名」に配属され、共産党軍事部と連絡。七月軍艦細胞を結成したが、八月発覚し、軍法会議で懲役三年六ヵ月に処せられる

メリカ共産党民族課日本人部と連絡
一九四一年七月検挙されるまで、レポーターとして共産党主義文献の國內への持込み、連絡に従事
一九四五年五月出獄

横須賀の海軍軍法会議は、一九三三年(昭和8年)四月ひらかれ、西氏水兵、河田水兵三年六ヵ月、吉原水兵、三年の懲役となりました。西氏水兵は昭和九年に満期退団ですが、刑務所にいるあいだは兵役期間とはされず、一九三七年(昭和12年)に退団、すぐに船員となって日本をはなれました。

呉の水兵の公判は、横須賀より三日おくれで、四月一七月初公判。山口水兵のみ証拠不十分で免訴。四月二五日結審。傍聴禁止のうちに判決言渡しがありました。

宣告

小倉正弘 予備役海軍二等機関兵 (21歳)
稲垣 宏 呉海兵団海軍一等看護兵曹 (29歳)
佐藤 彊 呉海兵団海軍一等水兵 (21歳)
北田建二 特務艦朝日海軍二等機関兵 (21歳)
宮内謙吉 呉海兵団海軍三等看護兵曹 (32歳)

主文

被告正弘を懲役六年に処す
被告宏及び被告彊を各懲役四年に処す被告建二及被告謙吉を各懲役三年に処す

領置に係る『聳ゆるマスト』第五号一五部、同第六号、四五部、『赤旗』第93号、第95号(以下略)、『兵士の友』創刊号、二部、『反戦情報』創刊号六部。(その他略)はいずれもこれを没収

する。

木村莊重氏は、すでに民間人となっているから別の公判になっています。

『広島県労働運動史』(広島県労働組合会議編)によれば、官憲側でしらべた呉の関連水兵、「但し起訴せざるもの」として、つぎの氏名があげられています。

松本 保 二等機関兵 伊五七号駆逐艦
堀弥之助 一等機関兵 防備隊
松本辰治 一等機関兵 那智
宮永重登 二等機関兵曹

小林義雄 一等機関兵曹 伊55号駆逐艦

上記小倉正弘氏、稲垣宏氏ら五人の水兵の判決書は、呉の原田香留雄弁護士によって発見され、原弁会シリーズのパンフレットとしてだされました。

宮内謙吉三等看護兵曹は、獄中で病氣となって、出獄後死亡。

一九三七年(昭和12年)の末、木村莊重氏は四年の刑をおえて出獄、島根県鹿足郡木部村の実家にかえりましたが、宮内氏の生家は近いのでたずねてみたという。しかし、その村ではだれもおしえてくれなかったということです。共産党事件に関係した者は「村八分」になっていたのでしょうか。木村氏の村でもそうだったという。

なお、木村莊重氏は郷里で農業をやっている、昭和二年三月七日、日本共産党員として島根県鹿足郡木部村長に就任しました。

そして同年四月五日、公選村長選挙に無投票で当選した。それは当時島根県で三人の党員村長が

できたが、その第一号であった。

それから朝鮮戦争がおきて、米軍の掠奪や虐殺が赤旗などでも報道され、戦争反対が叫ばれる様になった。そんな時、私の村の細胞新聞でもこの朝鮮侵略反対が記事になって村内に配付された。

昭和二十五年一〇月三日、私は村長としてこの様な反占領政策的な印刷物を配付した村民の長としての責任を問われて逮捕され、占領軍の軍事裁判にかけられたのであった。

昭和二十五年一月二四日重労働七年罰金一、五〇〇ドルの判決、控訴して二六年五月二日重労働四年と確定、山口刑務所に移管され、昭和二十七年四月二九日講和条約発効で釈放……(木村氏からの手紙)

なお、呉軍法会議以外の「10・30事件」関係者は、つぎのとおりです。

「10・30事件」起訴者

〔呉日日新聞〕昭和8年10月5日記事)

昨年(昭和7年)12月下旬より本年七月にかけて、広島地方裁判所で起訴、予審にかけられていたが、同検挙により起訴されたもの二一名。おくられて起訴された阪口喜一郎、岡本菊次郎、坂本四郎の三名をのぞいて、つぎの一八名は予審終結。いずれも治安維持法違反として、広島地方裁判所の公判に付せられることとなった。

静岡県志太郡島田町 党中国地方オルグ

滝川 恵吉(31)

島根県鹿足郡木部村 予備役海軍一等機関兵

木村 莊重(27)

広島市幟町 元三高生 石川茂一(24)
同上 画工 伊藤正朔(27)

広島市三篠町 古田 稔(25)

朝鮮平安北海義州郡枇寛面 韓 利權(24)

広島市仁保町 元広島郵便局通信事務員 橋本俊三(21)

広島県安芸郡江田島村 元広島郵便局員 竹谷時良(24)

広島市南竹屋町 元広島郵便局集配手 堀江明治(25)

広島県安芸郡江田島村 前岡花野ふじえ(24)

広島市平塚町 日本製鋼所広島工場職工 野中富雄(25)

広島市段原町 同 右 井上 満(24)

広島市鍛冶屋町 同 右 安田祐俊(25)

神戸市湊西区鹿屋町 予備役海軍二等主計兵 山下達吉(25)

広島県豊田郡中野村 予備役海軍一等水兵 平原甚松(28)

広島県山県郡吉坂村 元広島高等学校生徒 吉田 司(23)

広島県沼隈郡柳沢村 山根 清(25)

広島市三篠町 元宇品陸軍運輸部従業員 寺本強司(26)

〔注〕『日本社会運動人名辞典』より

錦織彦七 一九〇六年四月一五—一九四一年九月九日(明治19年—昭和16年)

島根県簸川郡大津村(現出雲市)に生る。松江

高校をへて東京帝大文学部中退、在学中新人会に属す。

一九二七—二九ごろから労農党東京城北支部に属し

て活動、その後全協本部員、入党。

一九三二年九月ごろ党中国地方オルグ。広島、岡山を中心に党中国地方委員会の再建を準備し、呉海軍艦船内細胞を再建、「聳ゆるマスト」の発行を継続。

一九三二年十月三〇日中国地方代表として熱海会議に出席して検挙され、治安維持法違反で懲役6年の刑。出獄して結婚後1年6ヵ月で一九四一年九月九日岐阜県可児郡中村で死去。

六

「再建活動」

「10・30」事件のあと、犠牲者とその家族の救援活動にとりくんだ岡本菊次郎氏のおもいでによれば

「『3・5事件』で検挙されて、起訴猶予ででてきたから、商売をしながら広島から西にむかい小倉までいったところで、10・30事件のことをきいて広島にひきかえした。検挙された同志へのさし入れなど、まだやられていなかった。広島からでてきた坂本四郎君、専売局にいた天津せい君と救援活動をやることにした。じぶんの家にいたら、いつやられるかもしれないので、観音町のある家の二階に間借りをした。そこに坂本君や天津君も住んでいたし、三戸信人君もやってきた。」ということ。ひとつとところにはわかいものが四人、女もまじえてすんでいるのはめにつきやすいが、かねがないからしかたがない。

三戸信人君は10・30事件に共青同盟関係で検挙されたが、起訴猶予。その後共青同盟の再建にとりくんでいました。10・30事件で吉田氏がつかまつたあとの広島高等学校の自治学生会のメンバー、吉本康二氏たちともレンラクがとれた。また広島郵便局の小川正一氏が、消費組合の迫榊盛登氏に党へのレンラクをつけてくれといってきたので、それともレンラクがついた。広高の吉田司氏たちによって、広島市内の中学校——師範学校、広陵中学、山陽中学、広島県女などに共青同盟の組織がつくられていたが、これらともレンラクをとって『鯉城の健児』を発行したわけです。

一九三三年（昭和8年）四月五日党本部より、関谷源一氏が広島市にはいりました。これは、三戸信人氏が共青同盟のルートから党本部にレンラクして、広島地方にオルグをおくることをもめたものです。

四月一〇日広島郵便局の小川正一氏と三戸信人氏、関谷源一氏の三人で、党広島県再建委員会、準備会をつくったとあります。のち党中央の意見にしたがって、党広島県オルグ会議としました。関谷氏のアジトとしては、消費組合の理事長をしていた新田菊馬氏の家のなれをあてることにしました。新田氏は洋服屋さんです。

そのころ消費組合の常任だった迫榊盛登氏の、かたるところによれば

「あのころ、三戸信人君がよく消費組合の店にきていた。その三戸君のたのみで、関谷君のアジトをつくることをひきうけた。新田君の家のはなれというのは、よこの小路から出入りすることが

できるので、あまりひとめにつかないところだった。」ということです。

もつともそのころは、ひとつところにながくいることはなく、アジトはつきつきとかえてゆきました。消費組合は、皆実町から舟入町にかわっていましたが「合法的に」看板をかけていられるところでした。したがって、いろんな人がやってきました。

大工の達木幸太氏、洋服屋の新田菊馬氏、蔭絵の仕事をしている中沢晴海氏（はだしのゲン）の中沢啓二氏の父、画家の丸木位里氏（まだ絵のうれない苦闘時代）、朝鮮青年会の金弼東氏、周丁竜氏、三年の刊をおわって出てきたばかりの玖島三一氏なども組合員でした。

一九三三年（昭和8年）六月、岡本菊次郎氏、坂本四郎氏が検挙されました。公判対策会議を犠牲者の家族とともに開いているところを特高の一隊がふみこんできて、そこにいるものごとごとくつかまえました。岡本菊次郎氏、坂本四郎氏をはじめ、消費組合の迫榊盛登氏や犠牲者の家族の人たちも留置場にいられました。迫榊盛登氏のおもいでによれば

「特高は、岡本菊次郎君が責任者だということをしていてたようだ。岡本君のすわっているザブトンめくって、文書をかくしていないかしらべていた」ということです。

七月には、天津せいさんも家族のところをまわっていて特高につかまりました。

小寺英雄氏が宮島から救援会のしごとをひきつぐためにでゝきたのは、天津せいさんの検挙といれちがいでした。消費組合をたずねていった小寺

氏に、常任の迫榊氏は、獄中の同志たちからきたハガキのたばをわたしました。それらは「消費組合きつけ」としてあて名は岡本氏のペンネームがかいてありました。岡本菊次郎氏が検挙されるまえに、獄中の同志たちにだした手紙は、じぶんの本名や住所をかくわけにゆかないから消費組合（気付け）でだしたわけです。

古末憲一氏の返事は、ハガキにちいさな字できちんといっぱいにかいてありました。滝川恵吉氏のは、広島県の地理とか歴史の本がよみたいとありました。韓利権氏は「もらったハガキを、いちにち五目ならべでもみるようになっていきます」とかいていました。かれには家族がいないので、本のさしいれをするものもなかったのです。こんな人にこそ、さしいれをするべきだが、岡本氏や坂本氏や天津せいさんがうっかり刑務所にゆけば、つかまるおそれがあったのです。

小寺英雄氏は、ガリ版で『救援ニュース』をつくってこれらの獄中からの同志の手紙をのせました。また古くからの活動家——吉川長太郎氏や榊井盛之氏、消費組合の人たち、起訴猶予でた人などからもカンパをつりました。プロレタリア文化連盟のサークルの人や朝鮮青年会の人たちからも、カンパがよせられました。

『救援ニュース』にはカンパ報告をのせたのですが、そのなかに、「〇××」とかいたのがありました。特高は起訴猶予ででている丸川昇一氏をとらえて「これはおまえだろう」とその『救援ニュース』をつきつけました。このために丸川氏は、起訴猶予をとりけされて、実刑をくいました。

全協の組織もすすみました。

広島郵便局の小川正一氏は局内の加藤精一氏、大村猛夫氏、岸本春登氏とともに機関紙『おいらのたより』をだしました。この機関紙は、職場のなかまの脱衣箱にいれたり、それぞれの家に郵便でおいったりしました。

広島電鉄の組織には、郵便局集配手の小川正一氏が手をつけました。そのころ電鉄ではたらいでいた井上栄氏のおもいでによれば、「郵便局の小川正一君が、いつもおなじ停留所になつていて、私の電車にのりこんできた。客室のほうにせなをむけて、車掌台になつて、私といろいろはなしをするのだ。電鉄のストライキのはなしなどもしたのだから。なぜ小川君がわたしにめをつけたのかわからない。そのうちある晩、白島で関谷源一君をつれてきて、私にひきあわせた。そのあとは、小川君とはあわなくなつて、関谷君とだけあうようになった」ということです。

昭和八年六月には、電鉄内に宍戸年春氏、高橋渉氏の同志ができて、三人で機関紙『スパーク』をただしました。井上栄氏によれば、横川線の電車にとびのつて、この機関紙をまき、とびおりてにげるということもあった、いちどは特高の長谷部と山中が電車にのつていて、おっかけられたこともあるということです。

この六月には呉地区へオルグとして三戸信人氏（ゆき、茂渡義人氏、山崎政高氏（いづれも3・5事件で起訴猶予）とともに、全協・呉地区オルグ会議をつくつたとあります。（『大呉市民史』P1525）

呉地区についてはべつにかくことにします。

広島地区の全協組織について、なおたどつてゆ

きますと、このとし九月には昭和ゴムの争議がおり、黄五姓氏、田原勝次氏が応援にいつていました。田原氏は社会大衆党系の合同労働組合にいましたが、党オルグの岡谷源一氏とレンラクをとつて、合同労組内で革命的反対派の活動をしていました。黄五姓氏は、さきに広島電鉄のストライキで検挙起訴されましたが、このころ木材、土建の労働者のあいだで活動していました。

竹地定夫氏は、このころ広島市にかえつてきました。生れは広島県比婆郡山内村ですが、山口県宇部市で旋盤工としてはたらくうちに運動にちかづき、その後福岡県で検挙されました。起訴猶予になつて広島にかえつてきたとあります。

一九三三年（昭和8年）一〇月、全協・広島地区協議会準備会がつくられました。黄五姓氏と竹地定夫氏は、それぞれ土建・木材オルグ、および金属オルグとしてはたきました。

しかし広島郵便局、広島電鉄のほかは、10・30事件でつぶされた組織はたてなおしが、すすまなかつた。

山口県岩國市の帝國人絹岩工場に、いくらか手がかりができたので、三戸信人氏が岩國にいつて、組織をつくることになりました。

一九三三年（昭和8年）八月には、コップ（プロレタリア文化連盟）広島地方協議会再建委員会がつくられました。作家同盟は、國本金夫氏（ペンネーム 堀哲二）が賀茂郡からでてきました。プロレタリア科学同盟は、数本英次郎氏が再建にあたりました。このころ、新興教育同盟はプロレタリア科学同盟に合同することになつて、川尻小学校の先生で10・30事件で検挙され、起訴猶予に

なつていた山本タキエさんも広島市にでて科学同盟、作家同盟の活動にはいりました。竹原地区の文学サークル、三次十日市のサークルも再建されました。これらのことは、数本タキエ（山本タキエ）さんの『瀬戸内に生きて』にくわしくかかれてあります。

呉地区では、一九三三年（昭和8年）六月に坂田進氏、中村定男氏、木原吉人氏、小田正人氏、風早謙氏および、つたもとスミ子さんが検挙されました。

これはこのとし一月に、守田道輔氏を山口県の特高課が呉市で検挙してかえつた事件に関係のあるものです。守田氏は山口県の農民運動のくさわけ。一九三二年（昭和7年）二月の山口県の一斉検挙をのがれて東京へでたが、三月に広島市へはいつて、10・30事件のあとの再建をもくろんだものです。中村定男氏の手記によれば、正式に共産党中央からおくりだされたオルグかどうかはわからないとのこと。守田氏は社会大衆党のルートをとどつて呉地区にはいり、大衆党呉支部かんけいの活動家と街頭細胞委員会をつくりました。守田氏は、失業救済事業の日雇労働者となり、守田氏とともに広島市から呉市にきた、つたもとスミ子さんは市内バスの車掌になっていました。

一月に守田氏が検挙されてから、この委員会は解散のようになつていたが、呉署でもこのメンバーをはつきりとつかんでおらず、六月になつてはじめてこれらの人々を検挙したものです。

このうち、つたものスミ子さんは広島女専卒。一九三一年（昭和6年）二月、および六月、一九三二年（昭和7年）三月と広島市で検挙されて起

訴猶予になっていました。

また社会大衆党系の人たちは労働組合運動、呉工廠首切反対闘争と活動するうちに、とくに「満州事変」からの戦争反対闘争の波のなかで社会大衆党幹部のやりかたにあきたらなくなり、しだいに左翼運動にちかづいていったものです。しかし、一九三三年（昭和8年）四月広島市にはいった党オルグ関谷源一氏、六月呉市にきた三戸信人氏とは、まだ直接にレンラクはなかったわけです。

中村定男氏の手記によれば

「この事件で三五日ばかりむされたあと、不起訴でできて家にいるとき、山道繁君がきて、『竹地定夫さんがあいたいといっている』とレンラクしてくれた。竹地君とはまえに広島市にいたころ、全協の再建の会議を、たしか灰が峰のふもとの方の山の中でもった。メンバーは竹地、山道、岡田（西条町の石屋）中村の四人であつたとおもう。竹地君とは定期的に連絡をとっていたが、かれは呉にきてすぐ、町工場に旋盤工としてはいていた」とあります。

このなかの山道繁氏は、山道襄氏の弟です。3・15事件で、兄の襄氏が退学処分になって呉にかえっていたころ、中村定男氏、片岡義夫氏、池田八束氏などがその家にあつたこところは、山道繁氏はまだ中学生だったとのことです。かれはその後、広島師範二部中途退学。製紙工場職工。新興教育同盟、赤色救援会、反帝同盟関係。一九三五年（昭和10年）四月二日、大阪で検挙。六月二七日起訴（教育運動史関係資料）とあります。こ

のころは、呉で活動していました。

竹地定夫氏はまもなく、呉をはなれて広島市にかえりました。それは、竹地氏と中村氏がレンラクしているとき、私服の特高につかまって、交番につれこまれて身体検査をされたが、竹地氏は交番の仮眠室のガラス戸のあいだに文書をかくして、身体検査にはなにもみつけられないのがれました。かれはすぐに、広島市へにげたわけです。

中村定男氏は、そのあと山崎政高氏、山道繁氏など、呉工廠労働者にはたらきかけました。『第二喰るクレイン』がだされたのもこのころです。

小寺英雄氏の手記によれば、『ハンマー突撃隊』は山道繁氏を中心にして、呉工廠を目標につくられたとあります。

『大呉市民史』（P454）にはこのときのことをつぎのようにのせています。

（昭和8年）八月八、九日にわたり、工廠第二、第三門で「全協呉地区オルグ」の名をもって、「労働強化反対」「四時間残業廃止、従業員大会をひらく」のアジビラを撒布。呉署、呉憲兵分隊犯人厳探中。

八月一六日出勤中の工員に、「残業四時間制に賃銀増額」「海工会の主張する結核組合は、当然国家が全額負担すべきものだ。グラ幹をたたきだせ」などのビラ。

一〇月六、七日海連（海工会連合会）中央委員会、八日から広公会堂で同大会がひらかれるのをまえに、当局の警戒をくぐって、七日早朝比較的てうすとみられる場末々に「第一の喰るクレイン」は3・5事件で崩壊したが、陣営をあらたに……「全従業員はグラ幹の大会を監視せよ」などの五項目のビラを配布。前二回のビラと酷似して

おり、同一犯人とみる。一〇月八日も引続いてとあります。こえて昭和九年一月二日『呉日日新聞』の記事には

「呉にアジビラ 全協系の暗躍」

（一月）二〇日午前六時ごろ呉市和庄通清水通一帯にわたって、おりから出勤時の工廠従業員を目標に不穏ビラ二〇〇枚を撒布した怪漢があり、該ビラには「呉工廠内第二喰るクレイン社」とあり、最近中央を追われて職夫募集にまぎれ呉市に潜入した全協系の分子の活動とにらんだ呉署特高係では直ちに犯人捜査の警戒網を全市にはった。とあります

七

「差別裁判 糾弾闘争」

一九三三年（昭和8年）八月二八日、大阪で全国水平社主催の全国部落代表者会議がひらかれ、高松地方裁判所でおこなわれた「差別裁判」の取消しをもとめて、全国的な闘争をおこすことを決定しました。

「被告が、じぶんの部落民たる身分をかくして、女をつれだして同棲したのは、結婚誘拐罪にあたる」と高松地方裁判所で判決したことに対して、全国水平社がたちあがったものです。「八月二八日」という日は、明治四年のこの日、時の政府が「部落民の称を廃して、一般平民と同様にそろそろこと」という布告をだした日です。しかし身分差別はかえってひどくなり、納税・兵役の義務を

おわされただけです。「人間より上の者(天皇)が
いるから、人間より下のものができるのだ」と全
國水平社はいつていました。明治維新というもの
は、まさにそういうものだったわけです。

天皇の裁判所は「差別裁判を取消せ」という人
民の要求をいれるわけはありません。

「差別裁判を取消さねば、部落民の納税・兵役
の義務を免除せよ」というスローガンをかけて、
全國の部落から代表を出して東京へむけて行進す
ることを、全國部落代表者会議は決定しました。

「不当なる差別裁判の取消を求める非常上告を
大審院におこなえ」という請願を、國會にするこ
う「請願行進」のかたちをとったわけです。

差別裁判糾弾闘争は、部落ごとと部落闘争委員
会をおき、代表者を出して九州から東京まで國會
への請願行進をおこなうこととしました。当時の
商業新聞はその記事に「差別裁判」という文字さ
えひかえて「差別待遇撤廃」としかかけなかった。
当局からは、徒步行進は禁止する、在郷軍人が軍
帽軍服をつけて参加してはならない、代表者は一
県二名以内とせよ、途中の県で二日以上宿泊して
はならない、などと禁止してきました。

『中國新聞』昭和八年一〇月五日づけには「10・
30事件」の発表記事の下に小さく、「差別待遇撤廃」
の請願隊が、一〇月四日己斐駅についたという記
事があります。九州を出発した代表団が、途中山
口県の代表を加えてこの日広島県に入ったもので
す。同日夜は福島町で演説会をひらき、玖島三一
氏、白砂健氏が広島県代表として加わり一〇月五
日出発しました。玖島三一氏は、一九二七年七
月三滝山事件で検挙されたが、転向せずになんば

りとうして、一九三三年(昭和8年)七月にでて
たばかりです。いっしょに検挙されたものはや
く釈放されて、転向どころか共産党に反対する「解
党派」にはいつていました。

玖島三一氏は、でてくるとまもなく、この差別
裁判糾弾闘争にとりくみました。がり版すりその
ほかのしごととは、全協にはいつている岩佐のこ
ろにもちこんできました。広島市福島町では玖島
氏を中心に、青年たちが部落闘争委員会をつくり
ました。玖島氏が、請願隊に代表ででてゆくと、
全協の岩佐がこの闘争委員会の書記としてはいり
ました。山木茂氏著『広島県社会運動史』には、
全協員玖島が、全協員岩佐を闘争委員会の書記に
いれたとありますが、玖島氏は全協にはいつてい
ません。

玖島三一氏は、水平社青年同盟から無産青年同
盟へ、そして労働農民党および労働組合評議会へ、
労働党と評議会の解散のあとその再建運動中に検
挙されたものです。

「在広 朝鮮人 青年会」

このころ、朝鮮人の同志が中心になって在広島
朝鮮人青年会をつくっていました。日本の学校に
はいつていて、そこで共青同盟、そのほかの組織
で活動していた同志もありましたが、それは家の
ゆたかな人といえるでしょう。多くの人は、土建
労働者や鋳物工場労働者など、いわば底辺の労働
者です。それらの労働者が、しだいに青年会にあ

つまるようになりました。
青年会としては、これらの労働者を全協の産業
別の労働組合に組織するために、座談会や研究会
をひらきました。

金属オルグの竹地定夫氏や、土建木材オルグの
黄五姓氏などが、このためにはたらいていました。
そのころは、朝鮮人労働者のいる鋳物工場など
の職場でストライキにまでならないが、いろいろ
工場主あいての交渉がありました。竹地氏やとき
には党のオルグの関谷氏までが、その交渉にお
をだしていました。

青年会のおもな活動家は、金弼東、周丁竜、金
明文などの人たちです。

青年会は、夜の小学校をつくっていました。子
供たちに、よみかきはもちろんのこと、祖国朝鮮
のことばや歴史もおしえました。朝鮮人にたいす
る差別があるし、家が貧しいので、昼間の小学校
にゆかない子が多かった。義務教育という法律は
あったが、朝鮮人の子に教育をうけさせることに、
県も市もあまり熱心でなかったといえます。

金明文氏がこの学校の先生でした。かれの経歴
については新聞記事によれば、

「昭和五年九月内地にきたる。新聞郵達をしな
がら、私立松本中学校を卒業。昭和七年五月ごろ
から反帝同盟広島地区の組織で活動」とあります。

『中國新聞』昭和9年8月20日記事

反帝同盟というのは、「帝国主義戦争に反対し、
植民地民族の独立を支持する同盟」の略語で、日
本にもその支部がありました。

金明文氏はその後、昭和八年(1933年)七
月共青同盟にはいり、在広朝鮮人青年会に参加し

て少年団の組織をすすめていたとあります。

「広島自治学生会」

広島高等学校では10・30事件で停学処分をうけていた生徒が、一九三三年（昭和8年）五月、停学処分をとかれて学校にかえり、同志をあつめて自治学生会をたてました。

この年六月には、三戸信人氏とレンラクをとっていたが、三戸氏が呉地区にいったので、共青同盟員茂渡義人氏がかわってレンラクをとりました。七月一八日、茂渡義人氏が検挙されたので九月からは党オルグの関谷源一氏がレンラクをとりました。このころから、自治学生会の運動はなかなかいきおいをましたとあります。

『広島50年史』の学生運動のところには、九月をもって広島自治学生会が確立したとあります。ここにみられる同志の名は、吉本康二氏、永島孝雄氏、岡本重康氏、永井健造氏、正田誠一氏などです。

一〇月には「ブルジョア教育の欺瞞性と反動的役割をバクロし、広汎なる学生大衆を左翼化するために」、校友会の文科、理科の理事および各クラスの代議員の選挙には、自治学生会のメンバーを当選させた。また、寄宿寮の総務の選挙にも自治学生会のメンバーを当選させた。十一月には「広島内共産党資金網」を確立したとあります。

一九三三年（昭和8年）十一月、党オルグ関谷源一氏は上京、10・30事件後の再建のうごきにつ

いて報告しましたが、党本部広島地方対策会議の批判はきびしいものでした。「戦争反対のたたかいが、まったくやられていない」というものです。

八

「転向」ということ

一九三三年（昭和8年）六月には、佐野、鍋山たちの転向声明書がはでに新聞をかざりました。未決にいる同志たちにも、その転向声明書が印刷されてまわされました。

「共同被告につぐるの書」などかいているように、獄中の同志たちの転向をさそうために書いたものでしょう。

しかし、たったこのあいだまで「帝国主義戦争絶対反対」「天皇制打倒」といつていたこれらのものが、そろいもそろって「いま、おこなわれている戦争は、アジア民族を解放する進歩的戦争である」「天皇は國民尊崇の中心である」とかいています。こんなことは、政府の役人でもかきます。

「日本共産党は、尖鋭に崩壊するであろう」とかいているのが「共産党の指導者らしい」文章ということになりましょうか。

玖島三一氏は、出獄まぎわにこの転向声明書をわたされたといえます。かれは「ハナもひっかけない」という態度でした。

しかし、広島地方の3・5事件、10・30事件で未決にある人たちも、この声明書をきっかけとして、転向上申書をかくものが多くでした。その

上申書は、プリントされて未決の同志たちにまわされました。どういうルートでそとにでたのか、それらの転向文書をみたことがあります。

「転向は多くの青年の心をむしばんだ」とかいている本もあります。

転向ということは、ここでは「心境の問題」ではなく、裁判所とのとりひきです。だしてくれるかどうかの「カケ」です。じぶんの心をいつわって、転向の手記をかいだしても、実刑をくえば裁判所にいっぱいいわれたとおもう。じぶんのかいた手記は、プリントされてほかの同志にまわされる。ほかのものの転向をさそう道具につかわれ、じぶんの転向は「のつびきならない」ものになる。

天皇制の裁判所は、治安維持法にかけられた人民が公判廷で堂々と胸をはって戦争反対をとえ、戦争の張本人、天皇制の打倒をのべるのはこまるわけです。たとえ傍聴人をしめだした公判でも、非転向で法廷にたつ、そのことが大衆に大きな影響をあたえます。だからこそ「釈放するかもしれない」といつて転向をすすめるわけです。

一九三三年（昭和8年）十一月には党広島県オルグ会議は、解党派・大橋積、末元玄聰一派の排撃を決議し、ピラをだして組織内のスパイ、挑発を防ぐことにつとめたと、新聞記事にあります。（『中國新聞』昭和9年8月21日記事）

解党派というのは、佐野、鍋山らのまえに検挙されて転向した連中が、共産党反対の立場でうごいたものです。

党広島県オルグ会議の出したピラによれば「これらのいうところは、共産党の中央部はスパイだ

らけだ、うつかりレンラクをとつたら検挙されるぞとか、党のオルグはハウスキーパーをだいてねることしか考えていない、革命のことなどあたまにない、などとデマをとばしている」とありまして。

かれらは、広島でダラ幹の組合でない、合法的な左翼の労働組合をつくるうということも、となえていました。ダラ幹の組合とは社会大衆党系の合同労働組合のことです。また広島消費組合は、社会大衆系の購買組合と合同すべきだと、消費組合の役員や組合員にいてまわっていました。

山本茂氏の『広島県社会運動史』には、まちがった記述があります。これによると、

「広島消費組合と全協とは、二重組織になっていた。合法的な左翼労働組合をつくるかどうかで全協内で意見がわかれ、これがひいて消費組合内のゴタゴタになった」とあります。

広島消費組合の役員で、全協の組合員や役員になっていたものはありません。全協の役員やオルグで消費組合の役員になっていたものもありません。全協の会議で「合法的な左翼労働組合」などという、あやしげなものをつくるはなしをだしたものもありません。

筆者が、全協広島地協の再建のときから関係していますし、会合がたいい筆者のいるところまでひらかれました。消費組合の会合にもよく組合員として、出席していました。

いわゆる広島消費組合のゴタゴタというのは、そんなことではありません。

「解党派」といわれる連中が、消費組合の常任をひきずりおろそうとしたこと、組合と左翼運動

との関係を、たちきることにならうがあつたのです。そのために彼等は、消費組合の役員などのあいだをコンコンとまわって「このままでは、消費組合は弾圧されてつぶれる。社会党系の購買組合と合同して、もっと幅広い消費組合運動をするべきだ」といっていました。

「ダラ幹の組合でない左翼の労働組合をつくるう」というものと、「社会党の購買組合と合同しよう」というものが、おなじ「解党派」なのです。かれらは、社会大衆党の事務所によくあつていました。

九

「4・26事件」

特高警察の追及も、一九三三年（昭和8年）のおわりごろからきびしくなりました。

『中國新聞』昭和九年八月二〇日付（一斉検挙発表の時の記事）によれば

「郵便局集配手小川正一の行動につき、昨年末ごろから西署特高係員は尾行をつづけ探索していたが、翌年（昭和9年）二月ごろのある夜、西部の某橋下に身をかくして小川を監視中、同所につないである河舟の船頭さんがあやしき泥棒、泥棒と連呼した」とあります。

おなじく小川正一氏を尾行して観音町の空家にかくれて監視中の特高刑事が、泥棒とみられて交番につき出されたとその新聞は書いています。

高橋マツ子さんは昭和八年秋にオルグの指示で、広島グループの応援をえて専売局の組織づくりにかかっていましたが、昭和九年ははじめオルグの関谷氏から「検挙が近いから地下にもぐつてくれ」といわれました。広島生吉本康二氏から、京都の大学生（広島自治学生会メンバー）の家を教えられました。彼女はいったん呉にゆき、森島守人氏の家に身をよせて近くの職場でアイロンがけの仕事をしていました。広島で一斉検挙がはじまり、山道繁氏が呉にのがれてきたので、いっしょに京都に行き、京大生の家で吉本康二氏ともおちあいました。（高橋マツ子さん手記、『新聞集成広島女性史』より）

この二月、「帝國主義戦争絶対反対」の共産党広島県オルグ会議の赤ずりのビラが、広島市内のいたるところの電柱にはりだされました。

呉工廠へのビラまきもつづけておこなわれました。ビラのガリ版ずりは、たいいてい広島市のアジトで小寺英雄氏がやって、呉におくったものです。ときには関谷源一氏が呉にもつていて、まいたものがあります。工廠の出勤どきの人ごみにまぎれてまくのですが、封筒にいれてわたすと、たいいていポケットにいれて工廠にはいります。脱衣箱のところであけてみるだろうというねらいです。また工廠の従業員の多い住宅地で、一軒一軒戸のすきまへビラをいれてまわったこともあります。呉でビラをまいてから広島市にかえるものは、山のなかにはいつて、夜なかあけがたに、あるいてかえりました。呉線の列車にのるのはあぶなかつたのです。列車には移動警察の刑事がのつてい

ました。

一九三四年（昭和9年）三月、作家同盟広島支部の國本金夫氏と山本タキエさんが、憲兵隊に逮捕されました。これは県警の特高課とは関係なく、憲兵隊だけのみこみでやったものです。戦争反対のビラがはられたため、たまたま憲兵隊が「不審なもの」をつかまえたわけです。しかしまもなく釈放になりました。

広島から上京した三戸信人氏、加藤郁子さんも警視庁に逮捕されたことを、東京の同志から知せてきました。

『中國新聞』（昭和9年8月20日）広島県からの手配により、本年二月加藤郁子を、四月一日三戸信人をそれぞれ逮捕、両名の身柄をひきとって取調べの結果、一斉検挙の確信を当局に抱かしめた。

とあります。

党オルグの関谷源一氏も、あとを小寺英雄氏にしたので、広島をはなれるしなくてはしていました。また、広島自治学生会も、中心になる活動家はおもてにたらず、検挙をさけるようにしました。吉本康二氏は、広島生の検挙のときはうまくのがれて、その後の再建運動にとりくみました。

一九三四年（昭和9年）四月二六日からじまった、4・26事件の検挙は、新聞によれば

西署が四月二六日、関谷源一氏のアジトをおそったが、もぬけのからだだった。しかし非常線をはって己斐駅かくで逮捕。このほか、西署で逮捕したものは救援会の小寺英雄氏、大塚猛夫氏。全水の玖島三二氏、神崎宇一氏。消費組合の達木幸太氏。朝鮮青年会の周丁竜氏、金明文氏、鄭禹甲

氏、李敬道氏、羅振玉氏。そのほか、加藤精一氏、三宅末一氏などの名があります。

東署が逮捕したものは、消費組合で迫榊盛登氏、藤原勝美氏、岩佐を逮捕。そのほか九名となっています。

宇品署は、千田町のアジトでプロレタリア文化連盟（コップ）の数本英次郎氏を逮捕。北榎町のアジトで、共青同盟員李桂堂氏ほか数名を逮捕。五月一七日、賀茂郡東高屋村で國本金夫氏、山本タキエさんを逮捕しました。プロレタリア文化連盟関係は二〇名逮捕されました。

広島高等学校の検挙については、四月二六日、広島高校生李重春氏ほか数名が検挙されましたが、六月三日、正田誠一氏を逮捕、六月二四日、自治学生会指導員二名逮捕され、広島高の教授の机の中から自治学生会の機関紙『広島戦士』がみつかりました。これまで、特高が知らなかったものだという。六月二五日、広島市内に住むものだけをえらび、岡本重康氏ほか三名を逮捕。六月二六日、寄宿生のみ四名を学校の第一時限に、教室から拘引。その後一九名（うち卒業生五名）を引致。教授数名も東署によばれて、とりしらべをうけたとあります。

呉市の検挙については『大呉市民史』に、「四月二九日午前五時を期して署員総動員。それぞれ、ねこみをおそって、川原石町、中村定男ほか二〇余名を一斉に検挙」とあります。

中村定男氏によれば、山崎政高氏もこのとき検挙されて警察の留置場であったが、彼から広島合同労働組合の田原勝二氏も検挙されたことをきかされたそうです。

「その再建運動」

中村定男氏は、四月二九日の呉地区の一斉検挙では三〇日ほど呉署におかれたあと、釈放されました。そこへ山道繁氏が「広島高校生の吉本康二君がいたいといっている」とレンラクしてきました。

吉本、山道、高橋マツ子の三人は、「4・26事件」の一斉検挙をのがれて京都にゆき、のち大阪にうつっていました。

山道氏、高橋マツ子さんは、大阪で活動することになり、広島県の再建のために、吉本康二氏がかえることとなりました。まず山道氏が呉にかえり、遊廓入口にあった、餅屋の森島守人氏のところに、吉本氏の下宿をたのみました。森島守人氏のところには、高橋マツ子さんも広島からでて、一時身をよせていてそれから京都へいったのです。

吉本氏は呉にいくと、のこっている同志たちに連絡をとって再建をはかりました。小寺英雄氏（4・26事件で検挙）の弟、渡辺信樹氏とは、宮島へいって直接連絡しました。広島市へは中村定男氏がかわってゆきました。広島生との連絡もあったが、松本徹とも二回ほど連絡しました。はじめてあう男だったが、中村氏は徹のそぶりに疑いをもちました。かえってから吉本氏に「徹には気をつけたほうがよい」といったが、人のよい吉本氏は松本徹を疑わなかった。大阪へも彼は徹をつ

れてゆきました。

広島県へ、関西地方委員会からオルグをおくつてほしいと、吉本氏はたのみにいったわけです。

しかし、関西地方委員会にはオルグをおくる力はなく、吉本氏はむなしくかえってゆきました。松本徹は、ひと晩山道繁氏と高橋マツ子さんのいるところではなしていったが、マツ子さんは徹の態度に疑いをもったという。コミニストらしいまじめなところはなく、関谷源一氏のことをわるくいったり、エロ話をしたりしたという。「徹はあやしい」とマツ子さんは山道氏にいったそうです。

吉本康二氏は、「多数派」の線で広島県の組織を再建しようとしたものでした。

山辺健太郎氏の『社会主義運動半世紀』によれば、昭和九年の春、全農内党グループの宮内勇氏や、消費組合内の党グループの山本秋氏らが、当時の共産党中央委員袴田里見に反対して（もともと袴田も今のようにくさってはいなかったが）、「多数派分派」をつくり、関西地方委員会の人々もこれを支持したとあります。当然、吉本氏もこの線で動いたわけです。

もともと、あくる年7月のコミンテルンの批判で、「多数派」は解散。しかし、それに先だって、たったひとりのこっていた共産党中央委員袴田里見が三月に逮捕されました。その後、中央再建委員会準備会がつくられ、その大阪のメンバーに広島の本正一氏や平原甚松氏が連絡をとることにあります。

一九三四年（昭和9年）九月、呉地区を中心に一斉検挙がおこなわれました。しかしこれにききだって、高田郡吉田町付近の南小一氏を中心とし

た「渡政突撃隊」のグループや、佐伯郡廿日市付近の松垣義郎氏（変電所技師）を中心にした、宮島変電所員、農村青年よりなる党支持のグループを八月、九月にわたって検挙しています。（『広島県労働運動史』広島県労会議編P407、「思想月報」第11号）

呉地区の検挙については、『大呉市民史』につきのようにのっています。

「……つづいて県特高課千葉警部来呉に呉署色めき、翌朝五時を期して呉署総動員。川原石町中村定男ほか20余名の男女を一斉検挙、呉署の武道場に留置。このなかには某中学生、美容師（22）、芸南バス車掌（19）もあり、呉を中心に再組織をすすめていたもの」とあります。

中村定男氏によれば

山崎政高君とは4・26事件でもいっしょだったが、こんども武道場でおおをあわせた。また、吉本康二君がしばらく間借りをしていた、森島守人氏の妹のバス車掌さんも、留置場のほうにいるのをみた。これは相当広い範囲で検挙しているなどおもった。吉本康二君が無事であることをいのったが……のちに特高の取調べのとき、かおをあわせた。

といっています。

つづいて『大呉市民史』には
呉市塩屋町 ラス張り工 中村定男 同菊池町大工見習 山崎政高の公判を昭和一〇年五月六日。ともに求刑二年。転向をみるとめて、判決同、執行猶予。

広島高校赤化の中心人物、広島市 吉本康二は昭和一〇年二月予審終結。六月一五日求刑三年。

非転向のため判決同の実刑。八月三〇日控訴審も同。

とあります。吉本康二氏は腸結核となり、執行停止で出獄、まもなく死亡しました。なお、「4・26事件」でさきに検挙された、郵便局員小川正一氏は、昭和九年七月獄中で自殺したとあります。（『中国新聞』昭和9年8月20日づけ、「4・26事件」の発表記事）

『労働雑誌』読書会事件

中村定男氏は、執行猶予ででけると、まもなく広島市の社会大衆党系の一般労働組合の常任となりました。組合事務所は、田原勝治氏や風早謙氏がねとまりしていたので、そこころがりこんだわけです。

この組合事務所に、よくかおをだしていた山本正一氏が、大阪でだしている『労働雑誌』をもってきて、この読書会をやろうといいました。山本正一氏は製材工で、広島で昭和六年全協の組織をつくる時、津崎木材などの木材のオルグとしてはたらいっていました。その後、大阪地方の木材工場にいたらしく『大阪木材ニュース』というのをくれたり、大阪のことをよくはなしていたという。

中村定男氏も『労働雑誌』は、大阪の川上貫一氏のだしている合法的なものだから、これならよからうと、読書会をつくることに賛成した。そこで山本正一、中村定男、および広島市から呉工廠にかよっている製図工とその弟の四人ではじめた

ということ。

一九三五年（昭和10年）二月、一般労働組合事務所にとまっていた田原勝治、風見謙、中村定男ほかの四五人が逮捕されました。山本正一氏は、ほかのところで逮捕されました。

中村定男氏が県警の留置場にはいつてみると、元水兵の平原甚松氏がいっていった。「なんでやられたか、わからん」と平原氏はいつたそうです。

平原甚松氏は、大衆党の細田伊太郎氏の市会議員選挙の応援にきていたので、中村氏はおをしつていたわけです。

これは、山本正一氏、中村定男氏とはべつに、平原甚松氏が、大阪とレンタックをつけて、呉の田中豊氏、関口春夫氏などとグループをつくっていたものです。平原氏が社会大衆党の細田氏を応援したのは、大阪で人民戦線方式で社会大衆党の選挙候補者を左翼の組合も応援して当選させたのならうったものでしょう。

この事件で、中村定男氏はまえの判決、「二年の懲役、四年間の執行猶予」の執行猶予をとりけされて、あらたに二年の刑をくわえ、合計四年の実刑となりました。

山本正一氏と平原甚松氏のうごきについて、「思想月報」（1937年11月第41号）につきのようについています。（広島県労会議編『広島県労働運動史』別章、戦前における県下の共産主義運動）

広島県下においては昨年十二月五日、山本正一を中心とする旧全国労働組合同盟系の広島労働組合関係者と、平原甚松を中心とする街頭分子一味、合計十一名を検挙し、そのうち五名はまもなく警

察の手により釈放したり。右広島労働組合の中心分子、山本正一にありては、かつて全協活動により起訴猶予処分をうけたことあるものなるが、当時は非合法戦術に不満をよそおうて待機しおりたるおりから、昭和十年十一月ごろにいたりてコミンテルン七回大会の決議の影響により、我國內の運動戦術が自己の所信をうらぎするにいたりたるを知るや、この新方針に準拠しふたたび党活動にいらんことを決意し、まず広島労働組合を中軸として各種労働争議の指導ならびに在広無産団体共同闘争の協議等、無産戦線の統一運動に活動し、

なお、昭和十一年十月上阪して、党中央再建準備委員会系分子たる大阪木材労働組合常任書記 長壁民之助、労働雑誌関西支局常任書記 岩間光男、大衆政治経済関西支局責任者 清水巳之助らと連絡し、同人らの指導をうけて帰広後、刑執行猶予中の同志 中村定男と協力して『労働雑誌』等の合法雑誌による啓蒙活動ならびに反戦運動等の活動をなしおりたること判明したるにより、山本正一は本年五月二日、中村定男は同月七日いづれも広島地方裁判所に起訴、予審に廻付したり。（もつとも山本正一はそのご六月一八日病死したるにより同人にたいしては同月三〇日公訴棄却の予審決定ありたり）

一方街頭分子平原甚松にありては、昭和十一年二月十一日懲役三年六月の前刑を仮釈放されて一時郷里にかえり静養中、同年六月二六日仮釈放期間の満了するや、ただちに就職口依頼の名目をおかけて上阪し、森本亮一、長壁民之助、仲瀬美雄等の党中央再建準備委員会系分子としきりに従来会合したるうへ帰郷し、そのご各種の労働争議の広援指導、あるいは社会大衆党候補者の選挙運動広援あるいは水平社支部組織の結成等のため日夜奔走し、かつ片岡義夫、田中豊、山崎政高らの旧

同志としはば会合して、なんらか策動しおるうたがいありたるにより、この一味をも検挙したるものなるが、取調べの結果、平原甚松の行動については党支持の証左をうるにいたらざりしため、五月七日広島地方検事局において不起訴処分

に付し、ただ片岡、田中、山崎の三名については、平原とは別個に「建設会」なる文化団体の結成準備または『労働雑誌』による啓蒙運動等、軽微なる事実をみとめたるにすぎざりしをもって、これら三名は他の事情をも考察のうえ五月七日広島地方検事局において起訴猶予処分に付したり。

とあります。

『労働雑誌』

一九三五年（昭和10年）四月、加藤勘十氏らによつて創刊。加藤氏はアメリカに渡り、ひそかに加藤・野坂会談をおこない、日本における人民戦線結成について協議。一九三六年（昭和11年）一月、『労働雑誌』関西支所が、川上貫一氏によつてつくられる。一九三六年（昭和11年）二月、『労働雑誌』に弾圧。共産党中央再建準備委員会のメンバー検挙。

「新協劇団後援会事件」

広島県における最後の一斉検挙は、一九四〇年（昭和15年）八月一九日の大藤軍一氏を中心とした新協劇団後援会広島支部の一斉検挙です。みんな宇品署で正月をむかえたというから、ながくお

かれたわけです。

大藤軍一氏のみ起訴されて、三年の刑をうけて一九四四年(昭和19年)九月まで獄中にいました。

新協劇団後援会広島支部ができたいきさつは、つぎのとおりです。

一九三四年(昭和9年)の四月二六日事件で広島消費組合の常任、迫桐盛登氏が検挙され、消費組合本部から津田和治氏がきましたが、同氏は広島に新協劇団後援会の組織をつくる考えをもっていました。そのころ田中町に Rond 書房をやっていた、大藤軍一氏としりあい、津田氏が広島市をひきあげるとき、新協劇団後援会広島支部をつくることを大藤氏に頼んでゆきました。

新協劇団広島後援会はその後、一九三八年秋、島崎藤村の「夜明け前」の脚本朗読会を医師会館でひらきましたが、そのキャストはつぎの人々です。

青山半蔵——岨常次郎(3・5事件)
妻 お民——大前三枝(中國新聞社勤務)
寿平次——村上四郎(3・5事件、印刷工)
牛方——井上 栄(4・26事件)
宮沢寛齊——中沢晴海(元広島消費組合理事)
おふき——山口とし子(広島女専卒教員)
金兵衛——才野力三(青年)
ナレーター——田谷春夫(3・5事件印刷工)

〔注〕中沢晴海氏はプロレタリア美術運動で丸木位里氏らと活動、のちに消費組合活動、原爆死。山口とし子さん(故)は戦後、大教組婦人部長。岡本(福本)菊次郎氏夫人

一九三六年(昭和11年)五月、広島地方にも思想犯保護観察所がおかれ、治安維持法関係者は「保護観察」をうけることになりました。あくる年七月には中国との全面戦争となりました。「北支」の占領地へ、思想犯保護観察所の幹旋で「宣撫官」としてでてゆく者もありました。この年の暮から、あくる年、一九三八年(昭和13年)はじめにかけて、非転向のため刑期満了までおかれた連中が、でてきました。「夜明け前」の朗読会がひらかれたのはこんな時期でした。

大藤軍一氏はそのまえから、映画サークル活動などで若い人たちに影響をひろげてゆきました。そのころ文化運動はことごとくつぶされていました。もちろん労働組合などは、かげもかたちもありません。

広島のようなろくに仕事のないところで「保護観察」されているより、東京にでて工場にはいったほうがよいと、みがるなものは、広島をはなれました。

一九四〇年(昭和15年)八月、新協劇団、新築地劇団に解散命令がだされ、広島の新協劇団後援会のメンバーのおもな人々が検挙されました。岨、村上の両氏は、仕事で中国へいつていたので検挙をまぬがれました。責任者大藤軍一、井上栄、中沢晴海、田谷春夫の各氏、青年では才野力三氏、女では大前三枝さんです。お盆すぎの一九日に宇品署に留置され、年末に家族もちの中沢氏は釈放され、あとは留置場で正月をむかえたという。

「3・5事件」で三年の刊をおえて出た大藤軍一氏は、この事件でふたたび三年の刑をうけ、敗戦直前までおられました。山口とし子さんなど、広

島女専グループで先生をしている人々は、転任手続きをとって広島をはなれました。

一九四一年(昭和16年)四月八日、「広島グループ」という大そうな名をつけて警視庁特高課は、広島から東京にでている者を検挙して、都内の各警察署に入れました。しかしなにもでてこないの、一カ月くらいで釈放しました。治安維持法というものは、だれを何日間ひっぱろうがさしつかえなかったのです。「ジョーコ」というものは、ひっぱってからこしらえればよかった。

寺尾一幹氏は「広島グループ」とは別に、研究会をやっていたということで、仲間たちとともに検挙され、敗戦直直まで刑務所にいれられていました。

十

戦前の広島県における左翼運動について、そのあらましをかきました。

広島市は一九四五年八月六日の原子爆弾で、砂漠となりました。すでに広島市をでて、ほかにすんでいる同志たちは、敗戦とともにいちちはやく活動をはじめていましたが、一九四五年一二月に広島市にかえってみると、党のピラは一枚もはってありませんでした。

戦前の同志たちの手記をあつめて、残しておこうとおもったのは、一九六九年ごろからです。戦後、同志たちは各地でアメリカ占領軍のもとでのレッドバージや反戦運動、広島でひかれる原水

爆禁止世界大会へのとりくみ、そのほか、いろいろの生きかたをしてきました。しかし、もういちど「原点」にかえて若い日の広島での左翼運動について、語ってもらいたかったのです。戦前の左翼運動について、語ることは、われわれのつともでもあります。

はじめに「同志のおもいで」(岩佐)をガリ版刷りにして、同志たちにおくりました。また、『日本反戦詩集』という本のなかに、「聳えるマスト」という詩があるのでかきぬいて、呉の水兵だった人たちに問いわせました。それらの人から多くの手紙がよせられました。きびしかった海軍でのごとが忘れがたいでしょう、「胸せまる思いです」とかいてきた人もあります。

一九七一年一月一日、旧労農党書記渡辺信樹氏、一月二日旧海軍工廠旋盤工重田安一氏をたずねて、聞き書きをとりました。

これらは、そのたびごとにガリ版に刷ってみんなにくばり、あとで一冊にとじるため、一〇〇枚くらいづつのこしておきました。

一九七三年三月、小寺英雄氏から「10・30事件後の再建活動」という手記をわたされたので、これをガリ版刷りとして、これまでのものといっしょに一冊にとじることにしました。これも、同志たちにおくりました。

なお、残る同志の手記を待つあいだに、呉市立図書館に土、日曜の連休を利用して神戸からかよって戦前の新聞とじこみから左翼運動の記事をかきぬいてゆきました。『呉日日新聞』はそのままとしてありましたが、『中國新聞』は、広島の本社にも残っていないので、呉図書館のものをひきあ

げてゆき、そのかわりにマイクロフィルムがおいでありました。

「3・5事件」の記事のマイクロフィルムを映してゆくうちに、同志たちの顔写真がうかびあがりしました。これはコピーがとれます。「10・30事件」発表記事のマイクロフィルムからは、花野フジエさんの顔が浮かんできました。それらのコピーをみんなにみせてあるきました。「みんな若かったんだなあ」といった同志もありました。「前岡さんの顔ですね」と、なつかしそうな声をだした女の同志もありました。

つぎに呉にいったとき、「4・26事件」のマイクロフィルムを映してゆくと、同志たちの顔写真がならんでいるなかに、私の顔がありました。「こういうところにおったんか」といいたいような気持でした。

このころ、中村定男氏も手記にとりくんできました。「老眼鏡をふたつかけて書いている」と、呉の同志がいつていました。

新聞記事の書き抜きと、中村定男氏の手記とはガリ版刷りとして、一冊にまとめました。「一九七六年六月二七日 プリント」とかいてあります。

一九七九年(昭和54年)九月数本タキエさんの手記『瀬戸内に生きて』が出版されました。原稿の段階で、運動に関係あるところは、こちらにいいさせてもらうことにしました。

一九八一年(昭和56年)八月、戦後の三原、三菱車両従業員組合委員長だった樋口利夫氏と連絡がつきました。戦前、尾道での安田貞務氏を中心とした左翼グループのこと、そのころの尾道郵便局のこと、また尾道港を中心とした瀬戸内港湾従

業員組合時代の野村秀雄氏のことなどいろいろと聞き書きをとることができました。

一九八一年の暮れから一九八二年二月にかけて、福山市の野田清一氏の手記が、数回にわたって送られてきました。広島市から福山地区に全協の組織をつくるためにいった、花野(前岡)フジエさん、岡田茂美氏のこと、福山労働組合のことなどが語られています。

一九八二年一月には、寺尾一幹氏から呉市での活動についての手記が送られてきました。

一九八三年一月には、上京して寺尾一幹氏から、広島高校時代の活動について聞きとりをしました。

一〇年以上にわたったこのしごとも、これでひとまず終わることとします。

その運動にはいるとき、多くの同志は二〇代のはじめ、なかには一〇代のもいきました。検挙された水兵は二〇歳のものがあります。

おわりに、若い同志たちの健闘をいのります。いつの日か、その半生をふりかえって、豊かな手記が書かれることをねがっています。

一九八四年五月 神戸にて

岩佐 寿一

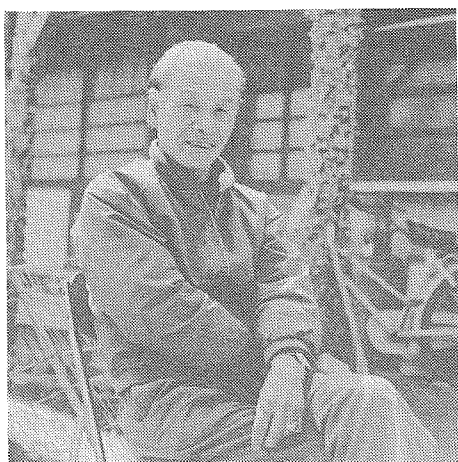
一、昭和七年、

3・5事件、

10・30事件まで



昭和7年3月5日「3.5事件」を報道する



労農党の思い出

渡辺 信樹 談

私は明治四〇年（1907年）八月三〇日宮島でうまれた。

兄の小寺英雄は東京にでていて関東大震災にあり、大正十二年（1923年）宮島にかえってきたが、私はそれとれちがい東京にでて築地の自動車学校にはいり、昭和二年（1927年）徴兵検査のため帰って、広島市の南竹屋町、シンドオートバイの工場ではたらいいた。

そのころのオートバイは単気筒の大きなシリンドラで、今からみればおそまつなものだ。ガタガタと震動も大きく、エンジンの廻転もおそかった。シンドでは、外国のトライアンフをそっくりまねたようなものをつくっていた。クラッチは、円板に小さな穴をたくさんあけて、その穴にコルクをつめてあるのだが、そのコルクをシンドにおさめているのが、東洋コルクという工場。そこのおや

じが、のちの東洋工業の社長だ。

そのおやじが私に、しきりとオートバイのことについて聞く。私はコルクのことについて質問したものだ。いまから思えば、彼はそのころからオート三輪の製作にのりだすねらいがあったのだろう。そののち、東洋コルクからシンドの方に、いっしょにやろうという話を持ちこんできたが、シンドの方でことわったということだ。

そのころはオートバイとしては、トライアンフのほかにインデアンとかハーレイダビッドソンなどがあつた。秋の「招魂祭」のオートバイレースで活躍したものだ。

シンドの工場のちかくに労農党（労農党広島支部のこと、以下おなじ）の事務所があつた。労農党の演説会もよく開かれていた。そんなことから私も労農党にちかづいてゆくようになった。

こんなこともあつた。労農党のビラに、佐竹新市の住所がかいてあつたので、たずねていった。たしか丹那（タンナ）だったとおもう。しかし、さがしてもわからない。それから、早川義則の家をたずねていった。ところがあくる日ゆくと、どうも話がおかしい。きのうイエスといったのに、きようはノウというようなくあいだ。こいつは二重人格じやなかるうかとおもった。義則と義彦という、双子の兄弟とは知らなかった。

つきあってみると、性格はまるでちがつていた。義則の方は、演説もうまいし、はでにうごくが、義彦の方はめだたないがまじめで信頼のおける人間だった。

玖島三一君は私が労農党にちかづいたころすでに活動していたが、かれは自分の職場があるから、いつも労農党支部の事務所に来ているわけではな

かった。

寺尾一幹君は広島高等学校の生徒で、ときどき事務所に来ていた。広島高等工業の生徒で、よく事務所にくるものがあった。おかあさんは産婆さんだといっていた。

労農党の事務所は、あちらこちらよくかわった。警察の高等係——まだ特高係はなかった——が家主に圧力をかけるから、ひとつところにながくられない。ときには私の下宿している部屋においてある。佐竹が平塚町の土手に家をかりてそこを事務所にして、そこにはながくいた。昭和三年の一月か二月ごろ、私は労農党広島支部の書記になったとおもう。

そのまえの年、昭和二年全国水平社の第六回大会が、広島市の寿座でひらかれた。私は入口で、労農党のビラが無産者新聞をやってくる代議員にくばった。大会がはじまると二階にあがって、傍聴席でみていた。

「労農党の旗のもとに」という一代議員の発言で、アナ系とボル系にわかれてにらみあったことはおぼえている。それが、大会の一日目だったかたか、二日めだったか、おもいだせない。

〔注〕昭和八年玖島三二氏が、その当時のことを語ったところでは、岐阜県の代議員が「労農党の旗のもとに」といったために、アナ系の代議員が「ちがう」「ちがう」とさげび、まんなかの通路をはさんで、アナ系とボル系にさっとわかれて、にらみあった。みごとにふたつにわかれたという。

私や中島正一は、労農党広島支部の書記として働いていたが、そのほかに、中本円一が半書記というかたちではたらき、大杉という活動家もいた。党員は、もちろん党費をだすことになっていた。党員証に、党費を払った月は印紙をはった。印紙にはキューピーかなにかの絵がかいてあった。しかし、あまり党費を払ったものはなかった。だから、みんな食うや食わずだった。

おもな収入は、演説会の入場料だった。お寺や新天地の小さな芝居小屋などをかりて、演説会をひらくとすわりきれないほどはあった。いまから考えると、金を払ってまで、どうしてあんなに演説会にはいったのか、ふしぎな気がする。いまごろは演説会にどうして人をあつめようかと苦労するが。

労農党の事務所に出入しているものは多かったが、そのなかに、どうもスパイではないかと思われる奴がいた。Kという名にしておく。そこでKをためしてみることにした。

片岡重介がこういうことはうまかった。比治山で集会をひらくという、ウソの計画をKにきかせることにした。

Kがやってくるのが見えたので、ウソの会議をはじめた。「比治山にあつまって……」「おまえはあれをやれ、おまえはなにを持って……」と、Kにきこえるようにした。Kはきいていたが、何くわぬ顔ででいった。

あとで比治山をのぞいてみると、高等係の私服がうろついている。「やっぱり奴があやしい」ということになった。（これは二月一日反建國祭のときのことだ）

労農党は、合法政党とはいっても、警察の取り締まりはきびしかった。済南事件反対のビラをまいても、活動家がねこそぎひばられた。

私たちは、そのころ共産党は広島のかかにあるだろうと、漠然とかがえていた。しかし、だれがその党員であるかも知らなかった。佐竹新市などは、合法政党一本槍でゆくというものであり、または表面合法的な労農党のカンバンをかけて、うらで非合法活動をしようにいうものもあった。片岡重介はその中間というところであった。

大山郁夫が呉にきて（労農党呉支部発会式）演説したが、共産党と労農党のちがいについて、「共産党は労働者の政党であるが、労農党は労働者と農民の政党である」といったが、それ以上の説明はしなかった。

〔一九七一年一月一日と一月一七日、聞き書き。なお、ひきつづいてつぎのような聞き書きをとりました〕

ある日、東京からきたという人と高津正道と私と三人で、あるきながら話したことがある。あくる日だったか、末元義彦が私に「きみを、共産党員にスイセンしておいたよ」といった。世間はなしのようないかただったし、私もそうかと返事をしただけで、べつにあらたまった感想というものはなかった。しかし、この入党のことは、それきりでたちぎえになつてしまった。

末元義彦というのは、末元玄聰の兄で、同志社大学にいるころ社会科学研究会にはいっていたと

いう。3・15事件で退学処分になり、広島にかえっていたのだと思う。労農党事務所で研究会というか読書会というか—その会で「共産主義のABC」などを、テキストにして教えてくれたことがある。

3・15事件のおもいでは、つぎのようなものだ。朝はやく労農党支部の事務所の戸をたたくものがある。二階の窓をあけてみると小路の中までポリ公がいっぱいいる。これじゃ逃げられないと戸をあけた。

そのときは、東署にいられたが、なにもないからあくる日、かえってきた。

東署には、上岡利夫や筒井のまっちゃん（松三郎）もきていた。早川は家からつかまってきた。佐竹は家でやられたか、事務所でもやられたか思いだせない。片岡重介は三篠が長束に家があったが、東署にきていたから事務所にとまっていたのかもしれない。

その3・15事件のあと、労農党の呉支部発会式があったとおもう。四月になってからでは花見などで、人のあつまりもわるかろうと、三月の末にしたのだとおもう。

一九二八年（昭和3年）四月一〇日、労農党など三団体に解散命令がでた。

その日かあくる日の夜、新聞記者が談話をとりにきた。私がとりついで早川に知らせた。早川は「なんど解散命令をうけても、あくまで、たたかう」というような勇ましいことをいったが、記者は帰っていったと思うと、すぐひつ返してきた。「どうも、ぶさいくな記者でして」といって、

今はなされた人はどういう名前の人でしようかときいた。そんなことをおぼえている。

5月のメーデーのとき、私と池松とが検束された。津崎製材所の争議に負けて、みんなバラバラになっていたので、レンラクについていて検束されたのだ。

済南事件のおこったとき（一九二八年5月8日）、広島高等師範の中国人留学生がレンラクにきて、「広島高師の学生が、済南事件反対のビラを校内にまくから応援にきてくれ」といった。私たちはすぐ高師にいつて、ポリ公がこないようにピケをはった。

私たちも、広島本通りで済南事件反対のビラをまいた。そのころ、宇品の港から戦地におくられる兵士は、船を待つあいだ広島市内の旅館や、民家にとまる。夜は本通りを歩いているものが多い。それらもねらって、本通りでビラをまいた。このため事務所にいた常任書記たちは、西署に総検束された。労農党は、解散命令を受けたが、党再建のために事務所にがんばっていたわけだ。

ビラを印刷した袋町の活版屋のおやじもひっぱられた。「だれが印刷してくれとたのみにきたか。言え」というわけだ。ほんとに私がたのみにいったのだが、みんなをズラリとならばせて「首実見」の結果、活版屋のおやじが、あの人だとさしたのは、井上豊だった。首実見なんていいかげんなものだ。井上豊は、おかげで責任者として起訴されて、あとでこぼしていた。

こんなことがあったのは、夏のことだった。私の監房にスリがはいっていたが、彼は宇品にあった球場で全国中等学校野球大会の予選があつて、

そこをうるついでいてひっぱられた。「宮島の管弦祭がおわるまで、おかれるかもしれん」といつていた。かれらスリにとつて、かせぎどきなのだ。またこんなこともあつた。警察のブタ箱のめしは、おかずはつけものだけだが、なすびのつけもののあくがまわって茶色になったのがいれてあつた。

「こんなものがくえるかい」と、あそび人がどなった。「くえにや、くいんさんな」と弁当屋のおばさんがいつたので、さわぎになった。ハンストになり、巡査がきておばさんをしかりつけて、晩のめしはいくらかましなおかずがついた。

そのころは、なんぞというつかまつた。その秋のことだ。別府からの帰りの船が宇品につくと、警察がはりこんでいるとわかつた。私は茶色の中折れ帽子をぬぎ、赤いフロシキを黒いフロシキととりかえた。むこうは、たいていそうした持ち物で見当をつけて、つかまえるのだ。人相まではつきり知っているわけではない。

船がサンバシにつくと、すぐにとびあがつてそとにでた。刑事たちは船室にとびこんでいつた。すれちがいった。こうしてうまくのがれたが、あくる日だつたかにつかまつた。

労農党の再建までは長くかつた。その年の二月、なけなしの金をかきあつめて、早川義則を労働者農民党の結成大会におくつたが、大会中に結社禁止の命令がでた。

私は胸をわるくして宮島に帰つたので、玖島などが検挙されたときは広島にいなかった。

佐野、鍋山などの転向声明がでたころのこと、ある日検事局からよびだしがあつていつたことが

ある。そのとき、佐野、鍋山たちの転向声明の印刷物をわたされて、それをかえてから兄の小寺英雄に渡したことがある。

なんのために検事局によびだされたのかおぼえていない。あるいは坂本四郎さんがモツプル活動のために宮島から広島にでてゆき検挙されたので、その関係でよびだされたのではないかとおもっている。

兄はこのあと宮島からでていってモツプルの再建にしたがったわけだ。

松本徹がうらぎったということは、獄中の兄からの連絡で知った。さしいれの本の三一五頁に、しるしなどをつけて連絡することは、まえもつてきめてあった。その本はいまでもあるとおもう。

「S字形の鉄はわるいから、とりかえたほうがよい」という、兄からの手紙の文句でも松本徹のことをさとした。

その松本徹と天津せいがつれだつて宮島の私のところに来たことがある。それまではあったことはない。兄は昭和八年の夏には広島にでている。天津せいは昭和九年の三月に執行猶予ででている。だから三月からのちのことだろう。兄たちが一斉検挙をうけたのは昭和九年の四月二十六日だ。

松本徹がなぜ、私の家を知つてたずねてきたかわからない。

天津せいとはそのとき、はじめてあった。そのまえモツプルで天津のさしいれのこともあり、天津の姉さんの家というのをたずねていったことがある。二階から三味線の音がきこえてくるような家だった。

吉本康二君もたずねてきた。4・26事件のあと

だったとおもう。

私が工夫した「かくしインキ」の方法を、かれに教えたことがある。タンニンで字を書く（ペンで書く）とあとがつくから、マツチの棒にタンニンの液をつけて書く。あとで、酸化第二鉄の溶液をぬると文字がうかびあがるのだ。吉本君はこれを中央との通信につかうといっていた。

それから吉本君が呉にいたるとき彼にあいにいったことがある。（了）

（一九七三年一月一八日および一九七四年二月二日 ききがき）

〔参考〕兄の小寺英雄氏がつぎのようなエピソードをかたっています。

「広島市の住吉橋の西詰めの茶店のようなところで、労農党再建のはなしあいがあるというので、弟の信樹といったことがある。広島連中がどんな考えをもっているのか気にかかることがあった（合法的な運動一本やりでゆこうという主張のものもあった）。茶店には、だれもきておらず、ただ若い男がひとりいた。岨ですと名のつた。だれもこないで流れたということで、私たちは帰ることにした。『いまの男は、ソワという名前ちゃったのう』と弟にきいた思い出がある。」

東京の岨常次郎氏にたしかめてみると、そんなことがあった、といっていました。あのときは、とうとう誰もこなかったとの事でした。（以上）

左翼労働組合のこと

岨 常次郎

前略 その後お交りはありませんか。この正月にお逢いしたときには余りゆつくりと話をする時間もなく失礼しました。

「5・4事件まえの広島組織とその闘争」資料の出版の件、順調に進捗していますか。

実はその資料について学兄がはりきって出版の件を話しておられたので余り水をさすのもどうかと思つてさし控えました。私の感想を率直に申し上げると広島左翼労働組合の歴史が突然、昭和五十六年ころに全協・労働組合協議会運動として発足したようにとられて、かえって誤解を生みかねないのではないかと案じられます。

左翼労働組合のこと

〔参考〕あとにある「当時の新聞記事と資料」―「中国新聞」一九三二年昭和七年九月七日記事の「広島最初の全協組織」「広島最初のモップル」をみて下さい。

あの記録は警察側記録として、結局広島左翼労働組合運動の歴史の流れが正確に知られないままに終つたことを物語っているように思います。

というのは、広島市を中心とした左翼労働組合運動の歴史は、昭和二年にできた「全国労働組合評議会」系の広島一般労働組合がつくられたことに始まります。問題はこの労働組合の伝統が昭和三十四年から昭和六年に至る左翼運動、労働党関係の政治活動への弾圧の諸情勢のなかで、どのように守られ再建が企図されていたかということです。

玖島（三二）と私とが中心になり再建が企図されていたが、玖島の検挙などで、そして一方では佐竹新市などの労働党関係者の政治活動からの脱落、労働大衆的な方向への転身、そして広島一般労働組合にかわる広島合同労働組合の結成という

方向に展開していきました。

そこで私たちは、昭和五年から六年にかけての広島における経済恐慌の深刻化とストライキの多発条件の成熟の諸情勢のなかで、左翼運動の昂揚と発展を考え、とりあえず広島合同労働組合のなかでの「革命的反対派グループ」として活動することとし、広島合同紡績（舟入町）のストライキ、合同運輸のスト、段原町の渡辺製糸工場閉鎖反対のスト、ついで広島電鉄会社のストの指導に従事したわけです。

五条俊夫君や松本京一君、村上四郎君や田谷春夫君、仁井田教一君、花野岩男君などはそのころの広島合同労働組合時代の同志であつたわけです。そして広島紡績のストライキのなかから花野ふじえ君も成長してきたわけです。

このような広島を中心とした地域においても、

かつてないストライキの波の昂揚、経済恐慌による生活の不安と動揺が急速に強化し、それまでの広島市の小市民的牧歌性を、ほりくずしはじめました。

そしてこれが、昭和五年以降の広島市を中心とした広汎な政治的経済的文化的な左翼運動の高揚を醸成していくわけです。

市川（忍）君と私はこのような情勢のなかでお互いに仕事を分担し、全協組織の指導を市川君にそして、私と市川君のレンラクは五条君を全協事務局に入れることで、強く結ばれたわけです。昭和六年に入ると私もしだいに青年同盟、党活動の側面の仕事が増えてきたわけです。しかし、いずれにしても以上のようなわけで広島島の当時の労働運動の全体像と、経済恐慌を土台とした市民生活の動揺のなかで、左翼労働組合運動の展開を評価していくことが必要のように思います。

なお、先日来訪されたとき見せた「宮本百合子全集」（第四巻）には「一九三二年の春」として私の昭和七年の四月から五月にかけて本郷駒込署の留置場での状況が、同じように検挙されていた宮本百合子によって書かれているわけで、その全集の月報に私の一文が載っておりますが、まだコピーする機会がなく、そのままになっています。そのうち参考に送ります。いずれまた日を改めてかきます。

岨 拝

（一九八〇年 来信）

わたしは一九〇七年（明治40年）に軍港呉市の商人の家に生まれた。少年時代は海軍士官にあらがれ、中学を出たら海軍兵学校にはいるつもりだったが、一人息子であるという理由で説得され、海軍はあきらめ、大学へ進むことになった。関東大震災の翌々年の一九二五（大正14年）年、一八歳の時に一高入学のため上京した。田舎の中学から天下の一高に入学できた自信に満ちて、将来の「出世」の夢を抱きながら学生生活にはいったが、東京の現実にはわたしの夢をむざんに打ち砕いた。

第一次世界大戦後の深刻な経済恐慌と関東大震災の打撃、数十万人の失業者と労働争議。とくに大学卒業生の半数以上が就職できないという現実、学生層を不安に陥れ、マルクス・レーニン主義への関心が急速に高まっていた。わたしは一高の寮にはいって間もなく、すずめられて社会思想研究会に入会した。これが、その後わたしが一生を革命運動に献げるようになった最初のきっかけであった。

しかし天皇制政府の弾圧の下で、一高の研究会も半ば非公然の状態、夜うすぐらい柔道場の片隅でこっそりとひらかれていた。『空想から科学へ』『マニフェスト（共産党宣言）』『レーニンの戦闘的唯物論』などがテキストとして使われ、チューター（講師）は大学生の先輩砂間一良同志などであった。

その頃とくにわたしに影響を与えた事件は、京都大学の治安維持法違反一号として弾圧された石田英一郎が一高の大教室で真相発表会をひらいたことである。こうした演説をはじめてきたわたしはひどく感動し、その後マルクス・レーニン主義の研究にも身をいれ、各所の演説会にも積極



悔いなき革命運動への献身

古末 憲一

的に参加するようになった。三年生になるとわたしは一高の社研グループの責任者となり、数名の仲間と、本郷に家を借りて合宿をはじめ、学外運動にも参加するようになった。

わたしは一高から東京帝大の文学部美術史料に入学した。美術史料をえらんだのは試験が一番らかったからである。

わたしは東大新人会にはいるとすぐ学連(FS)のオルグとして明大、中央大、上智大などの指導に派遣された。3・15、4・16とつづく不当な弾圧に心から憤りを感じていたわたしは、自ら志願して労働運動に飛び込む決心をし、一九二九年の三月から『無産青年新聞』の組織部員として働くことになった。

ただ一つわたしの心の奥底にいつも気になることがあった。それは郷里の呉でわたしの卒業にす

べての希望をかけ、老軀にむちうちながら、学資を送りつづけてくれている両親のことであった。

わたしは夏休みなどに帰省して、両親の信頼しきつた顔を見るのがつらく、口実をもうけては、なるべく帰らないようにした。親の希望通り大学を卒業して就職するのが親孝行か、革命によって親と子が本当に幸福にくらせる世の中をはやくつくるのが真の親孝行か、この二つの思想がたえずわたしの頭のなかで格闘した。そうした時、いつもわたしをばげまし、革命の方向に導いてくれたのは『レーニン伝』やシャパロフの『革命への道』、ゴリーキの『母』などであった。

労働者のなかで活動できる喜び

『無産青年新聞』組織部のオルグとしてわたしは京浜地区を担当することになった。川崎、横浜などの大工場の労働者のなかにはいつて活動できる喜びで胸をはずませながら仕事を始めた。わたしはまず川崎の富士紡（2000人）を重点経営として社宅工作にとりかかった。そこには沖縄出身の労働者がたくさんおり、もっとも熱心であった。『無産青年』の読者が少しづつではじめてきた。

しかし、こうしたやりがいのある活動をはじめてわずか四ヵ月にしかないその年の七月、わたしは東京市内の秘密連絡所で捕えられてしまった。日本橋の久松署に送られ、ここでわたしは、警視庁の拷問をたつぷり味わわされた。何回も氣

を失いかけながらわたしは歯を食いしばって黙秘でがんばり通した。かれらもわたしの強情に手を焼き、ついにあきらめてわたしをブタ箱に放り込んで帰ってしまった。体中がはれ上って身動きもできず、一週間は、同僚の者の肩にかつがれて便所に行つた。この拷問の苦痛と敵にたいする腹の底からの憎しみは一生忘れることができず、わたしのたたかいのエネルギー源となった。

六〇日間のたらい回しの後、不起訴処分で釈放され、郷里へ帰つた。その時の両親の落胆ぶりはとうてい言いあらわすことはできない。わたしは留置場生活で重い心臓脚氣にかかり、一時重態におちいつた。心臓が弱って苦しくなつた時、わたしは「このまま死ぬのは何としても残念だ。もう一度元氣になり共産党にはいり、思いきり活動してから死にたい」、こう真剣に考えた。両親の行き届いた看病とわたし自身も療養につとめた結果、六ヵ月目によりやく全快した。

療養生活の間にわたしは、市内の友田書店の店員田中と懇意になつた。その店にはマルクス主義の書物が若干あつたので、それがきっかけで話し合うようになり、かれの紹介で海軍工廠の労働者川窪らとも知り合つた。健康を回復するとわたしは姉をたよって大阪に出て、小さな石炭業界の新聞で働くことになった。

呉海軍工廠の首切り反対のたたかい

わたしはここで一〇ヵ月余り働いていたが、余

りにひどい待遇にがまんできなくなり、同僚といつしよにやめてしまった。ちょうどその頃、呉から一通の手紙が届いた。友田書店の田中からで、それにはつぎのようなことが書いてあつた。

「いま海軍工廠の労働者の間に非常な動揺が起きている。ロンドン軍縮会議の結果、呉、横須賀、佐世保などの海軍工廠労働者の一割が整理されることになり、呉でも三千人を整理すると当局が発表した。そのため職場では不安で仕事も手につかない有様である。……ついてはぜひ呉に帰って首切り反対のたたかいを指導してもらえないか」。わたしはこの重要な役目を喜んで引き受けることにした。

一九三一年三月のある日の夕方、わたしはひそかに呉にはいつた。出迎える同志の案内で用意してあつたアジトにはいつたが、田中、亀田、片岡など数名の同志が待ちかまえていた。みんな二〇歳前後の青年ばかりで、わたしが最年長の二三歳であつた。わたしは海軍工廠内や地域の情勢などくわしく聞き、首切り反対をどのようにして組織するかを相談した。工廠内の積極分子を糾合して全協日本金属労組支部準備会を組織すること、準備会の名で不当な首切りに反対するピラを職場に入れることなどをきめ、ピラの内容は私が書いた。

約二千枚のピラを数名の同志が朝工廠に出勤する労働者にいつしよに歩きながら手渡した。首切りの不当をバクロし、その撤回を要求したピラは職場のなかで大きな反響をよび、首切りにおびえている労働者たちを勇気づけた。二回目のピラは職場の同志たちの弁当箱に入れてもち込み、食堂、便所、更衣室などにおいた。職場の動揺はますます

す大きくなり、あちこちの職場でサボ状態がおこりはじめた。積極分子の糾合同も川窪らを中心に次第に進んだ。あわてた海軍当局は憲兵隊や警察を総動員してわたしたちのアジトを探しはじめた。アジトを他に移すとともに、男だけでは危険なので一高の合宿時代に炊事係をしてくれた牧野ひき同志にハウスキーパーの役目をひき受けてもらった。

広島との連絡は山を越えていくのが一番安全で忍君と打ち合わせをした。かれは広島郵便局出身のすぐれた活動家であったが、間もなく検挙され五年の獄中生活の間に廃人のようになって出所後病死した。

広島との連絡は山を越えていくのが一番安全であった。呉軍港の背後にそびえる灰ヶ峰をこえて広島まで行くには、片道六里(24キロ)はあるが、この道を何回となく往復した。峠から見下すと、海軍工廠の大煙突が幾本も黒煙を吐き、三万トン級の軍艦を収容できる大ドックや大クレーンがならんでいた。軍艦が停泊しているのもよく見えた。港の向こうには江田島がかすんで見え、絵のように美しい景色であった。「あの工廠のなかにも、軍艦のなかにも必ず共産党の細胞をつくってみせるぞ」、わたしはこう心のなかで叫びながら峠をこえた。

ある日わたしは片岡と二人で、海岸に近い山中腹の一軒の空家で印刷にとりかかっていた。近くに人家のあまりないこの空家を仮の印刷所に使っていた。わたしが原紙を切っていると、突然玄関にはいつてきた者がいる。見ると洋服をきた男で一目で、私服警官であることがわかった。「しま

った」と覚悟をきめたわたしは、片岡と二人で表へ出た。見るとそこにはたった一人しかないではないか。「なんだ、一人じゃないか、やつつけよう」。わたしは片岡にいった。その瞬間、その男は顔色をかえ、さつと身をひるがえすと坂道をこるげるようにして逃げていった。その格好のおかしかったこと、今でもはつきり思い出すことができる。

わたしたちは二手に分かれ、片岡は山へ、わたしは海岸へ出た。わたしは貸しボートを借りて駆逐艦や巡洋艦がたくさん停泊している間をぬって、ゆうゆうと沖へ漕いで行った。海岸が遠くかすむところまできた。もう大丈夫だ。わたしはたまらなく愉快になった。五月の太陽がきらきらと海面に輝き、瀬戸内海の島々が新緑にもえ美しかった。わたしはボートを江田島の岸につけて上陸し、広島行きのポンポン蒸気船にのりかえて宇品港に渡った。

わたしは全協の市川のアジトをたずねた。ところがいつもの階段をあがって二階の部屋をのぞくと誰もいないうえによろすが変だ。わたしはいそいでそこを出て他の家をたずねた。あとでわかったが、その日早朝、このアジトは敵におそわれ、市川は逮捕され、家宅捜査をされたばかりであった。実に危いところであった。わたしたちが海岸通りから逃げたあとの呉市内は全市に非常警戒線がはられ、蟻のはい出るすきもないほどの大さわざであったが、山に逃げた片岡は無事であることがわかった。

日本共産党に入党

わたしは広島にとどまって、破壊された広島の大協組織を再建することになった。郵便局、国鉄、帝国人絹、日本製鋼、中国新聞社、福屋百貨店など重要経営の連絡は回復し、再び活発となってきた。しかしこれらの大衆運動を指導するためには、共産党の指導がどうしても必要であることが痛感されてきた。わたしは検挙を免かれた岨常次郎と消費組合運動をしていた寺尾一幹の二同志と相談し、党中央と連絡をつけ指導を受けるため岨を東京に派遣することにした。かれは全協の線を通じて党中央と連絡ができてまもなく帰ってきた。かれは東京で日本共産党に入党し、広島地方に党を建設する任務を与えられていた。

わたしと寺尾はさっそく入党の手続きをした。「共産党員として活動してから死にたい」というわたしの念願はついにかなえられ、わたしは光栄ある日本共産党員となることができた。一九三一年(昭和6年)七月であった。

三人はさっそく中国地方委員会準備会をつくり、党建設の仕事にとりかかった。中国地方委員会と呼んだのは、広島だけでなく、山口、島根、鳥取など中国地方全域に党を組織しようという意気込みからであった。党中央の方針にしたがい、重要経営の活動家を大胆に党に入れ、そこに経営細胞を建設した。共産青年同盟の組織にもとりかかった。そして九月には中国地方委員会の結成を

ひらくまでに進んだ。

九月一日、日本帝国主義は「満州」にたいする侵略戦争を開始した。広島市はこの侵略戦争の前進基地となり、全国から戦線に送られる兵士がぞくぞく到着した。旅館はいっぱいになり、民家にまで分宿した。

資本家・地主のための帝国主義侵略戦争に反対しようという党中央のよびかけに応じて、中国地方委員会もたちに戦争反対のたたかいを開始した。ピラ、リーフレット、伝單（ポスター）などをつぎつぎにつくり、党、共青の青年行動隊が出征兵士の宿舎や、陸軍の兵舎のなかにもち込んだ。まさに命がけの活動であったが、みんな勇敢に行動した。この時の行動隊長は現在国民救済会広島県本部会長の前田文二（旧姓村上）同志である。

やがて呉海軍の水兵の学習グループとも連絡がついた。地方委員会はこれを重視し、海軍内に積極的に党を建設するために呉地区に寺尾を派遣し、その指導にあたらせることにした。その結果、わが国で最初の軍艦細胞が組織され、細胞新聞『聳ゆるマスト』が発行された。また、広島連隊内には共産青年同盟の班が組織された。

大学、高校の学生や中学生の間にも党の影響は拡大し、党の活動資金の大部分は学生のカンパによつて賄われた。文化運動の方面にも党の指導がのび、文化連盟支部も結成され、その年の暮れには連盟の主催で「無産者の夕」が劇場「寿座」でひらかれ、千名の人たちが参加した。

一九三二年二月、わたしは党中央との連絡のため上京した。その時會つた中央の同志は紺野与次

郎現中央幹部会委員である。紺野同志はまだ二三歳位に思われた。中央では呉、広島での軍隊内の活動を重視し、特別に軍事委員会をつくつて指導にあたることになったということであった。わたしは今後の活動上の重要な指示をうけて帰った。さつそくその方針を具体化する準備を進めている時、三月五日の朝、ついに宿舎で逮捕されたのである。（注 古末氏の逮捕は三月四日）

わたしの検挙をきっかけに、敵は、党、共青、全協、農民組織、文化連盟など一斉に検挙をはじめ、二ヵ月余りの間に、三〇四名にのぼる活動家や支持者を検挙し、そのうち二七名を治安維持法違反で起訴した。しかし海軍関係は完全に守ることができた。寺尾はいつたん捕えられたがうまく脱走し、岨は検挙を免かれ、共に東京で活動をつづけた。わたしは警察の留置場でたえず脱走の機会をねらっていた。広島市から汽車で約三時間の三原町警察署に一週間たらい回しにされ、再び広島へ護送される途中、わたしは列車から飛び降りて逃走しようとした。夜行列車で二人の刑事が両側に坐っていたが、便所には一人しかついてこなかった。わたしは刑事がちよつとわき見をした瞬間、便所の扉のカギを内側からかけ、窓をあけて飛び降りようとした。あわてた刑事は乗降口の外からまわつて、わたしの足をつかんでわたしが飛ぶならいっしょに飛ぶと必死に叫んだので、わたしは飛び降りるのを断念した。もしあの時飛び降りていたら、おそらく命はなかったかもしれない。予審判事の取り調べがつづいたある時、わたしは再び逃走を企てた。昼休みで判事も書記もいなかった。護衛の看守がわたしの背後でだいびき

かいて眠っていた。わたしは右の拳を固めてかれの鼻柱をつよく打った。あて身をくわしたつもりだったが見事失敗し、看守は大声でわめきながらわたしを麻縄で後手にしぼり上げた。わたしはすぐ刑務所に送りかえされたが、体にまきつけられた麻縄がくい込んで眠ることもできない。わたしは看守長に縄を解くよう要求し、ついに解かせた。しかしその代り革手錠を後手にはめられた。これはずせと要求し、三日三晩ハンストをやった。そして前手錠にさせることに成功した。

わたしが検挙されてから一年余りの後、生ける屍のようになった父はついに病死した。この知らせは大きなショックであったが、しかし他の同志たちも同じ苦しみを味わっていることを考えれば、この悲しみに打ちかたねばならなかった。わたしたちの検挙後、外部では岡本、小寺などを中心に大規模な救援運動が組織され、書籍、衣類の差し入れ、家族の相談など実に行き届いた世話役活動がおこなわれた。わたしの部屋には差し入れの書籍がいつも十冊以上もあり、経済、歴史、自然科学などずいぶん勉強できた。こうした外部からの救援活動は獄中のわたしたちにこの上ないはげましになった。統一公判と裁判の公開を要求して二年近く、公判闘争をたたかい、二審の公判はわたしだけであったがついに公開をかつとった。わたしは5年の懲役刑をいい渡され服役した。

獄中での健康を守るたたかい

服役してから自分の健康を守るためには、敵と

の毎日のたたかいが必要であった。一日三〇分以内の屋外運動は受刑者にとつては何よりの楽しみであり、健康を守るうえで絶対に必要な日課であったが、監獄法に三〇分以内とあるのをたてに短縮されることがあった。わたしは一分間短くとも譲らず看守長に抗議した。室内ではラジオ体操をやり、寝る前に腹式呼吸をした。便秘を防ぐため、毎晩コップ一杯の塩水をのんだ。こうして一日も休むことなく健康を守るたたかいをつづけた結果、風邪ひき以外は病気をせず、六年半の刑務所生活を終え、一九三八年六月、非転向で満期出所することができた。

ふりかえると一九歳で学生運動に参加してから検挙される二四歳までの五年間、あの凶暴な天皇制の弾圧のなかでよくやったものだ。まさに青春のエネルギーを十分に發揮したように思う。つづく刑務所での六年半は灰色の青春であったが、これまた戦後の党大飛躍の準備期として意義のある生活であったように思う。

しかし、呉や広島で共にたたかった若い同志たちで、敵に捕えられて殺された海軍水兵の坂口喜一郎、宮内謙吉をはじめ病死した同志、原爆で殺された同志を合わせると四二名にのぼっている。

(これらの諸同志は、広島市平和大通りの解放運動無名戦士の碑に合祀されている)。

今日数十万の強大な党として、民主連合政府の樹立に向かって前進している日本共産党のいしずえは、これらの多くの若い戦士たちの犠牲によつてきずかれたことを忘れることはできない。

ふるすえ・けんいち 一九〇七年広島県呉市に生まれる。三〇年東大文学部中退。『無産青年新聞』オルグとして活動中検挙。三二年呉海軍工廠労働者の首切り反対闘争を組織。同年日本共産党に入党。党中国地方委員会の創立に参加。三二年三月検挙。

四四年埼玉県加須市に疎開。四五年党埼玉県委員会の創立に参加。五三年より五五年まで国民救援会中央本部事務局長。四九年より六七年までの間、衆院選埼玉県第四区に五回、参院選地方区に二回立候補。六七年、七一年加須市議に当選、現在に至る。

(前衛 一九七一年一〇月号より転載)



手記 その一

寺尾 一 幹

一九三一年広島地方にはじめて共産党が根をお

ろしたが、当初は古末、寺尾、岨の三名だけだった。そして古末、寺尾は広島市におり、岨は呉市にいた。岨は広島市に生まれ育ち、年は若かったが、古くからそこで活動してきた同志であった。そんなわけで広島市では特高の追及もきびしかったため、古末のいなくなった呉市を舞台に活動していた。しかし岨は間もなく上京して、東京で活動することになったので、そのあとは寺尾がついでやることになった。

寺尾が実際に家を出たのは一九三一年九月ごろであった。ゆきさきはいわなかったが、家族にもわかれをつげた。入党してからの約二ヵ月間、寺尾は広島市ではこれまでどうり消費組合の結成や、学生との接触で日をすごし、二回ぐらいは呉市で岨に会い、状況をきいたり、呉市のなかまた

ちの紹介をうけたりしていた。

当時、岨は広島から服部を同道しており、服部は共産青年同盟に加入しており、岨の協力者だった。服部久男はもと広島師範の学生だったが、学校から追放され崇徳中学に転校したりしていたが、その後活動に深く身を投じたよい若者だった。岨が上京して呉にいないとなると同時に、服部も呉をはなれて四国地方にわたり、そこで活動することになったと、岨からきかされた。どのような事情で四国にわたったのか、その後の連絡もなかった。寺尾にはわからなかった。

岨から紹介をうけた同志たちは、川窪鉄之助、重田安一（以上海軍工廠―黨員）、蒲田政雄、片岡義夫、亀田勢（以上街頭分子―共産青年同盟員）、田中豊（書店店員）などであった。これらの諸同志の大部分は、古末が勢力土台をつくり、岨が党

員・同盟員に加入させたものとおもわれる。

当時の広島地方の共産党は、中央との連絡もほとんど断たれっぱなしで、入党申込み書のようなものもなく、全部口頭で処理されていた。そのつど中央に報告して承認をえることも不可能だった。また党費も徴収していなかった。もっとも任意ながら、かなりの額のカンパをだしてもらっていた。

当時の呉は、人口十数万で広島よりひとまわりも小さい都市であった。海岸に沿う平地は広大な敷地をもった海軍工廠、そして海軍鎮守府が占拠しており、背後にそびえている灰が峰の山裾に、商店街や人家が所せましとおしあっているような都市であった。

寺尾の活動対象は、当然のことながら海軍工廠の労働者と水兵であった。

海軍工廠は、従業員が何万もいる大工場で、艦船の建造、修理をやっていた。一般にはこのような大工場をとりまいて、多数の下請け工場があるものだが、このような下請けは全然なかった。機密を保持する必要からか、全部を一括して工廠内部で完成していた。

鎮守府のほうは、横須賀、舞鶴、佐世保とならんで海軍四拠点のひとつで、常時2万の水兵がいた。沖合、沿岸に大小さまざまな艦船がうかんできり、これらの艦船は演習、戦争などのため、時としてでいりしていた。

海軍工廠のほうは、まだ端的とはいうものの、川窪、重田らを通じてつよいキズナでむすばれていたが、他方、水兵のほうは全然手掛かりもつかめず何からはじめたものかと、思案するしかなかった。

しかし、まもなく、そのチャンスが到来した。それは当時すでに退役していたが、坂口喜一郎、坂口をへて平原甚松と接触できたことである。

田中豊は、呉の目抜き通りにある、友田書店の店員をしていた。のちにはこの書店をゆずりうけ、田中書店という書店の経営者になった。岨からのひきつぎでは、田中は常時店にいないければならず、あるていど特高からもにらまれている、また商人肌で軽はずみのところもあるので、党员・共産青年同盟員への加入はさしひかえているとのことだった。しかし田中は、寺尾との関係では重要な役割をはたしてくれた。

阪口を見出し、寺尾に紹介したのもこの田中であつた。阪口は書店によって田中にあい、左翼的組織との連絡がつかないかどうか、それとなく

さぐりをいれてきたとのことである。当時、阪口はよく着物のうえに二重まわしを羽織って、往来していた。おまけに口ヒゲなどもたてており、一見してうさんくさいとおもったのも無理はない。だが、満更でもない判断して、寺尾に紹介してきただった。

さらにつづいて、はじめての現役、木村莊重(水兵)、稲垣宏(兵曹)、そして佐々木万寿司(海軍工廠)、城戸薫(広村小学校教員)を寺尾に紹介してきたのも田中だった。田中は書店の店員をしており、左翼出版物をさがしたり、買ってゆく人を目をそそぎ、積極的にはなしかけたりしてくれていた。

また田中は、お互同志の連絡が何かの事情でできた場合、その連絡復活もしてくれた。寺尾はイモツル式の検拳を防止するという観点から、すべての連絡は街頭でおこなっていた。どこかの部屋のなかで話しあったりしたことは、一度もなかった。これはどうしても、個人的指導というマイナスがあるが、やむをえなかった。ただ、城戸のところへは二・三度訪ねたことがある。城戸の学校は、まだ農村地帯ともいえる郊外にあつた。たまに訪ねたときが、この村の祭礼にぶつかり、大変ごちそうになったことをおぼえている。生徒の父兄の家からもつてきてくれた料理だといっていた。先生は大変人柄もよかつたので、父兄の信頼もあつたのだろうとおもわれた。

さて田中を通じての連絡復活だが、一方の側が田中のところへ、日時場所を指定したレポをおいしておけば、他方がそれをうけて復活するのだった。田中はそのほか、最初は自分の給料から、自営す

るようになってからは、その資金のなかから、毎月かなりのカンパをよせてくれていた。

懲兵適齢期がきて検査合格し、入隊してくる陸軍とちがい、水兵はまだ少年期ともいえる一七・八歳で志願して入団していた。志願兵だけでは人員がたりない場合に、懲兵検査合格者をまわして補充していた。自ら志望して入団するくらいだから「御國のためにつくす」という心情も、はじめのころはつよくもつていたにちがいない。しかし水兵生活を通じて、社会的な、また軍隊内部の矛盾を感じ、当初の志願のなかにもふくまれているとおもわれる、人生に対し積極的になちむかうという心がまえから、智識欲もあり思想的な転換もおこるのではないかとおもわれる。そして軍艦にのれば生活は閉鎖的になり、喧嘩もあるが、お互の親睦感もわいてくるのではないかとおもう。また階級により、日数の差はあるが、外泊しており、気のあつたもの同志で町中に部屋を借り、そこへ私物の本などをおいても、一応憲兵や上官の監視の目からのがれてすごすことができた。当時、寺尾は水兵の特殊な性格環境などについて、その他にもいろいろ、例えば機関兵の労働的な面など、思いめぐらしていた。

以上、私見だが、いまもそのようにおもっている。

工廠労働者を対象とした『唸るクレーン』、水兵を対象とした『聳ゆるマスト』が発行されたが、その発行の意図、そしてどのようにして作成されたかは、つぎのとおりであつた。生者、死者をふくめて、寺尾はもっとも深く関与しており、経緯をよく知っている。ただし、『聳ゆるマスト』は六

号まで発行されたといわれるが、寺尾が作成したのは一号―四号までで、五号―六号については、検挙されたあとなのでどのようにして誰が主として関与したかは知らない。

大体両者とも創刊は同時頃で、月二回刊にしたので、およそ四号ぐらいまで発行されたはずで、寺尾検挙後はそのままになったとおもわれる。

中央との連絡は、呉をふくめ広島地方全体は長い間絶えていた。中央の頻繁な弾圧でとぎれ、また遠くはなれているため頻繁な往来もできないので、回復は容易ではなかった。出版物荷物のうけわたし、アドレスを交換しても、郵便小包を中途で気づかれ当局にあけられ、アドレスが敵に知られ弾圧のキツカケにもなった。

そんなわけで、『赤旗』はもちろんのこと、その他の宣伝物は長い間みることができなかった。かつては店頭に見かけられた雑誌類も、発行―即時発売禁止で、全く姿を消していた。

いまや端的初めというのはものの、核ともみるべき組織を工廠労働者、水兵のあいだに組織することができた。各自は自分の周囲に働らきかけて革命的左翼的な影響力を、ひろげてもらうことにしていたが、これも漸次のびていた。しかし個人的に親しいとか、共鳴しているというだけではどうも組織としてよく、どこからどこまでがわれわれの仲間か、それを固めることを寺尾はかんがえた。そのために、ニュースを発行し、その内容は工場・水兵の中にある矛盾、要求、不満などを、投書としてまとめその他の記事では、すではじまっている、中国侵略の本質をあきらかにするなどを考えた。この投書以外の原稿は、寺尾がかいた。B

4判一枚、うらおもてのものが、三分の一ぐらいは寺尾がかいたものであった。

寺尾は、このニュース発行計画は、水兵対象のものは阪口に、工廠労働者対象のものは川窪、重田らに提案して賛成を得た。ニュースの題名はそれぞれに考えてもらうことにしたが、阪口からは、若干のもののうち『聳ゆるマスト』にしたい、工廠関係のものは、川窪から『唸るクレーン』がよからうということになり、そのような題名にした。

『聳ゆるマスト』も『唸るクレーン』も二月中旬頃、すでに題名もきまったので、ほとんど同時に、創刊号を発行した。月二回でいどの発行が適当とおもわれたので、五月上旬寺尾が逮捕されるまで、それぞれ四号まで発行している。

どちらも創刊号よりも二号、三号と、刷部数もふやしていった。当初は三〇部くらいだったが、だんだん増して五〇部以上刷るようになった。ニュースを通じて影響力をつよめ、組織をひろげるという寺尾の所期の目的は、一応成功したといえる。

しかし、もしこのニュースが、一部でも敵にかまれたら、弾圧のきつかけにはいらないかとの懸念もあった。すべて信頼できる相手だけに、手渡しで配付することにして、広範囲にまきちらすようなことはしなかった。また配付の系統も、『聳ゆるマスト』をたとえ仲間であつても工廠労働者や街頭の人たちにも手渡すようなことはしなかった。『唸るクレーン』も同様であった。刷り部数がすくないのもそのためであった。また発行者の署名も、本当は党の出版だったが全然記入しなかった。

原稿や編集については、まえにものべたが、印刷は寺尾が京都時代から知りあっていた林寿恵子をよびよせていたので、ガリキリは彼女にやってもらった。彼女は上手な字をかくので、キレイな印刷物ができた。ただし、寺尾がガリキリをしたものも少しはあった。寺尾は字が下手なので、出来のわるいものは寺尾がやったものである。その他の者に編集印刷をやってもらったことは全然ない。

林寿恵子は、同志社女専を卒業し、私が知りあったときは京都の日仏学院に勤務していた。同級生三人がいて仲良く、いずれも革命運動に厚い関心をもっていた。当時寺尾は大学の社会科学研究会で活動していたが、同時に学連の活動にもしたがっており、同志社大学や竜谷大学の社会科学研究会の指導も担当していた。だがさらに別に、大阪に拠点を移していた共産党（田中清玄指導）とも結びつき、ピラマキの行動隊を編成しておくりこんだり、カンパ資金の調達もやっていた。

林ら三人からは、この資金をもらっていた。その後三人とも家をでて名古屋にゆき、そこでバス車掌をしていたが、そのとき寺尾が呉で活動することになったので、よびよせた。呉では寺尾と同じ居し、ガリ切りのほか、寺尾はあまり外出しないことにしていたので、連絡や用足しなどをしてくれていた。また、寺尾の母、弟妹のいる広島の家にも立ち寄せた。母に、寺尾の健在を知らせることと、金をもらいに寄せた。寺尾は母に、この人と結婚しますので諒承してもらいたいと手紙をことづけたこともある。母はよろこんで承知してくれたが、その後、林が起訴猶予で釈放される

と、寺尾の家で家族の一員として温かく迎えられ過ぎた。寺尾としては、一刻も早く東京へよびよせたいと思つたが、何しろ警察脱走で当局から厳しく追及されているので、うまく連絡もとれなかった。ただ彼女の兄が藤沢に住んでいて、寺尾はその兄に連絡のとれる方法もつけておいた。兄は反対の態度も示さなかったもので、うまくやってくれることと思つていた。ところが、この兄から寺尾の指定連絡場所に手紙がきて、スパイが家のまわりをウロチョロしていて危険だから藤沢へくるな、とのことであつた。アトになつてわかつたのだが、スパイではなく、そのとき林は兄をたよつて上京していた。私とあうことを妨害したのだつた。林はまた広島へかえつていった。

ほどなく寺尾は東京で逮捕された。まだ留置場にいるときだが、上京してきた広島の前審判事の取調べをうけ、その判事から彼女について、不審な話を耳にした。夢想だにしていなかったことでありうべからざることとおもつた。その後寺尾は起訴され、未決拘留の身となつたため、広島のと彼女あてに手紙をだした。母からは、大変孝養をつくしてくれていて、寺尾の怒りは無用だという返事がき、彼女からは、寺尾の詰問は何のことかわからないという返事がきた。

彼女は、ひと足さきに上京して活動していた、寺尾の妹をたよつて上京、豊多摩刑務所未決拘留中の寺尾に面会にきた。今後、差し入れなど何なりと世話をしたいとのことだつた。寺尾は、まずとんだ誤解をしてすまなかつたと詫びた。

それから10日ぐらゐもすぎたであろうか。妹が面会にきた。林は、かつて寺尾が大変お世話にも

なつた、安田徳太郎博士の診察をうけ、百方手をつくしたが、急性肺炎で死亡したとのことであつた。

妹は獄中の寺尾の仮出獄にも奔走してくれたが、裁判所の許可はおりの苦もなかつた。一九三四年一〇月で、獄窓から見あげる樺の大樹が黄ばみ、落葉がはじまつていた。

呉における印刷作業の実状についてのべる。當時呉には活用した謄写版は一台しかなかった。『聳ゆるマスト』、『唸るクレーン』、それから寺尾が原稿をかいた、三、四種類のパンフレット、街中に貼つた伝単(ポスター)、ビラは、すべてこの一台の謄写版で作成した。

謄写版印刷も至極簡便なやりかただつた。簡便といつても鉄筆、ヤスリ、ゴムローラーはどうしてもいる。原紙やインクも勿論必要だつた。しかし、インクをのべる板、原紙をはりつける枠、そして一般には、これら諸器具を収納するかさばつた箱がついているのが「一式」ということになる。しかし寺尾は枠やインクののべ板はつかわなかつた。まず枠だが、これは厚手のボール紙の、中を四角にくりぬいて、原紙をとりつけ、焼け火箸を周囲にあてると簡単に付着する。ボール紙があたらしいときには、ローソクをたらした。この原紙のうえをローラーでこがすと、スクリーンなしで二〇〇回以上は原紙もち、立派に刷りあがる。またインクのべ板は、窓ガラスをつかい、この上にインクをたらしてローラーでのばした。ボール紙をつかうのは寺尾の独創ではない。忘れてしまつたが、誰かからこのヒントを耳にしていた。大抵は黒をつかつたが、伝単などは赤をつかつたり、

二色ずりしたこともある。ローラーも、のべ板もひとつしかなかったので、切りかえのとき、ローラーやのべ板を多少インクおとしをやつても、とりきれず、色のまざつた茶色の印刷物もまじつた。すりあがつたもので、『聳ゆるマスト』は阪口に、『唸るクレーン』は川窪にわたして、配布してもらった。伝単類やビラなどは、水兵をのぞいて他の諸同志の力を借りて街頭貼りをした。寺尾自身もこれをやつた。

呉で寺尾と協力することになった松本京一についてべる。

彼は古くから広島市で活動していた同志で、岨常次郎などとも近しくしていた。寺尾も広島であつたこともあるが、その経緯などはおもいだせない。彼は、広島での活動が警察にも目立つので、呉市に派遣されてきた。寺尾が逮捕される一カ月前くらい前であつた。

寺尾は彼を阪口や川窪らに紹介し、これからというところで、呉市の大検挙がはじまつた。

彼は小柄なやき男で、静かな人物だつた。寺尾は別段の説明もできないが、大言壮語する男よりも松本のような男の方が本物という気がつよい。松本は、本物の共産黨員だつた。

当時の呉では生活費をふくめて、活動費はどのようにして捻出していたか。

当時の米の価格は一升一〇銭余であつたとおもふ。部屋代もはらつて月一〇円というところが最低だつた。

財政は三本の柱に依拠していた。ひとつは呉の同志たちからのカンパであつた。といつても、水兵からはたのみもしなかつたし、もらわなかつた。

工廠の労働者、田中書店の田中などであった。月により、額は不定だったが、安い月給のなかから大変だったにちがいない。他は寺尾の高等学校時代、一緒に社会科学研究会で活動し、京都帝大にいた学友たちであった。彼らは大学へゆくようになってから一步後退した。大学の社会科学研究会に入会し、活動をつづけたのは寺尾ひとりだった。しかし彼らもその後退に負い目を感じ、苦しんでいた。守屋恒美が中心になって、親もとおくられた学資をさいて何人かから集金し、呉の寺尾におくってくれた。その後、各自それぞれの人生コースをたどってきたが、充分な感謝の言葉もつたえていない。安田徳太郎博士、日高教授、学友など、皆それぞれお世話になりっぱなしで、心のこりになっている。そして寺尾の母からも、時々金をもらっていた。

五月上旬逮捕されてから、脱走するまで約一〇日間、寺尾は一見すきもないほど厳重に警護されていた。その間、呉署の特高主任、県の特高などがきて、紙片をひろげ、取調べを開始しようとした。寺尾は、自分からは何もしやべらないから、ほかの方法で調らべたらよいだろうといって抵抗した。実際何もしやべらなかつた。特高はこの抵抗をもてあまし気味だったが、別段拷問を加えることもなく、また怒声をたてるようなこともなかつた。むしろ警察流ながら、丁寧な言葉をつかう特高係や巡査などもいた。そのうちおもむろに調べあげようとおもっていたのだろうか。

寺尾と三好惣次との関係である。三好が呉にきたのは、四月中旬頃であった。中央からきたオルグということで、例の書店の田中を通じて寺尾は

はじめてあつた。五月一〇日に寺尾は逮捕されたので、その間はきわめて短日時であつた。

三好は、三月に広島市で大檢舉があり、その後、東京から入広したといっていた。寺尾は、自分がやってきた呉市での活動、海軍工廠や水兵のことなどを報告した。この海軍、水兵のことは特にくわしく報告した。三好はこの寺尾の報告を、逐一メモしているようであつた。後まもなく中央の△赤旗▽に、呉の水兵の活動記事のつたが、三好からの報告によるものだろうとおもう。

寺尾と三好との接触期間は、前にもいったが、大変短かつた。そのうえ、三好は広島へ帰つて来たこともあり、正味の期間はもっと短かつた。

工廠や海軍の諸同志、さらに松本京一を三好に紹介したかどうか、またそこまで進めたかなど、寺尾にはハッキリした記憶がない。

なお、書きおとしたが、騰写版の諸器具は広島の大きな文具店から、林をつかいにして買ってこさせたものである。

寺尾が逮捕された状況などは、稿をあらためて書きしるすことにする。

備考

一

戦前からの古い共産主義者は、誰しも万丈の波乱のなかを生きてきたと思います。とりわけ私は、海軍水兵の組織建設、警察署からの脱走、のち東京、西神田署で完全黙否闘争をやり、△大形宗太郎▽の名前をつけられ、何ヵ月も頑張つたこと（当時ブル新聞にも麗々しく報道され、仲間の話題にもなつた）、すこしさかのばれば、学生時代、獄中で結核にやられ、瀕死にちかい状態で仮出獄した等々、自分ながらも波瀾の多い過去をもっていると思います。大ザッパながら、全体をよく知っているのは私の弟妹です。これら弟妹は私に△自伝▽をかけとつねづねいっていました。また私の子供らや、近しい諸同志もそんなことをいっていました。

これにたいして私は、自伝などは絶対に書かないと拒否していました。私なりの理由があつたわけです。

第一は、私のおかしないろいろな誤りです。仲間たち、さらに党全体も誤りを冒しています。たとえば、私自身、東京の獄中で同志たちへの不信感におそわれ、革命運動に絶望して苦悶し、一度転向しました。転向にたちいたつた心境なども、別にまとめてみますが、理由の如何にかかわらず最大の誤りでした。

第二は、私の革命運動にたいするそばくの貢獻、これを語ることは、自分の手柄話をしている

ようで気になります。

誤りをありのままにのべるのも、情情的に気おくれがし、手柄話にうけとられるのも心苦しく感じました。

第三に、長い党の歴史を正確な記録として残しておくことは、大切なことだと承知しています。しかし私ひとりの活動でもなかったたので、誰か他の同志によって明らかにされるだろうというわけです。

いずれにしても口は閉ざしがちになり、ペンも重いということになります。

ところが、最近山岸一章氏の『聳ゆるマスト』が発行されました。また三好惣次君は、一年前の『広島民報』新年号むきに、やはり『聳ゆるマスト』のことにいて自署の手記をよせていました。どちらも私は一読しましたが、いろいろまちがっており、部分的には全くのつくり話すらあります。

一読して、これでは私として沈黙しているわけにゆかないと痛感しました。そして、この報告をまとめました。古い昔のことで、私の記憶がうすれたところもあります。しかし、この私の報告は真実を語ったものです。

二

まず、山岸氏の『聳ゆるマスト』ですが、これは平原甚松君からの聞きとりを基にしたものなのです。平原君の意識的な作り話が主な原因です。

が、筆者としてはその嘘を見ぬくだけの科学的な

眼力をもっていてもええらと思うこと切です。

たとえば、P72「阪口が、全体の責任者となり、平原が編集・印刷の実務を担当し……」

P73「聳ゆるマスト」の編集方針は……次のように決められました。

一、……

二、……

三、……

四、……

五、……

P73「尾行のつく呉市内で、印刷材料をかうと危険なので、平原甚松はボンボン蒸気の連絡船にのつて一日がかりで広島市へ買いにゆきました……謄写印刷で経験のある他の援助を得ることができませんでした。」

P87「編集担当者平原甚松の記憶によると」

P113「同じ頃、三好惣次は呉市内のある水兵の下宿で、党呉地区責任者の寺尾一幹、呉海軍出身の阪口喜一郎、平原甚松の四人で『聳ゆるマスト』を中心にした反戦活動の現状を検討したり、今後の方針を決める重要な会議をひらいています」

P115「印刷は、軍艦にのりくみなどで留守の水兵の下宿を転々と借りて、自分の下宿には証拠物を一切のこさない細心さで……」

以上は、山岸氏の『聳ゆるマスト』を一読して気づいた、作りばなしの若干部分です。その他にもいろいろあります。何が真実か、私（寺尾）の手記と対比してみてください。

阪口喜一郎の獄死問題です。これには、自殺説と虐殺説とがあり、山岸氏は自殺説を紹介しながらも、虐殺説をとっています。

私は以前、古末憲二君から彼は独房内で離婚問題で煩悶し、縊死したと聞かされており、自殺したものと思っています。

山岸氏の「虐殺説」は推理を重ねたといえそう

で、阪口の自殺説にはいろいろな根拠があります。

山岸氏は、当局がその妻、野村梅子との仲をさこ

うとしたことに憤激したといっています。

未決になると、一般には外部からの面会や手紙

など、制限はあるものの許されています。阪口は

接見禁止、通信停止などの処分をうけていたので

しょうか。野村梅子との意志疎通も、野村が離婚

を考えていなければ、できた筈です。阪口の苦悶

も私としては理解できます。独房で大声を出したり、扉をたたいたりしていたとのことで、正常な

心理状況ではなく、錯乱状態になり自殺につなが

ったものと思います。

阪口自殺については、その他にも若干の根拠が

あります。だが、ここでは右の一事だけにとどめ

ます。

三

次は、三好惣次君の手記原稿です。

この原稿は、一年前の『広島民報』に掲載されることになっており、民報から兵庫に住んでいる広島出身の岩佐寿一君のところへ、まずおくれたものです。岩佐君は、広島、呉の共産主義運動の資料をあつめたり、研究もしている人物です。

民報からなぜ岩佐君のところへおくってきたのかわかりませんが、資料のひとつくらいに考えたかと思われれます。

岩佐君は、三好署名のこの原稿をみて、内容に疑問を感じたので、コピーしてさらに私のところにおくり、私の意見をもとめてきたものです。

余り長文のものではありませんが、その内容も知らない人はだませても、私や岩佐君の目をごまかすことはできません。次のような個所もありました。

「最初の委員会は、水兵が休息に使用していた。アパートの一室でひらき、出席者は私（三好）、寺尾同志で、水兵の阪口喜一郎、平原甚松、両同志でした。そこでは阪口同志が責任者になって、軍艦細胞の機関紙を発行することをきめました。

この後細胞会議で、機関紙発行について討議し……いろいろな案がでしたが、平原君提案の『聳ゆるマスト』にきまりました。

創刊号は、平原君が原稿あつめからガリ切り、印刷、配付まで中心になってやり……」

以上のように、全くデタラメのものでした。第一『聳ゆるマスト』の創刊号は、二月です。三好君は四月の中旬頃、はじめて呉にきており、『聳ゆるマスト』はすでに四号まで発行されていました。創刊号発行を討議するなどはありえません。

また、阪口君の獄死については

「広島刑務所で彼は、看守のひどい拷問をうけましたが、組織を守ってたたかい、ついに殺されました」とかいていました。

事件の取調べは、まず警察がやり、そのさいは半殺しの拷問も加え、徹底的に調べあげます。起

訴されて刑務所に移されてからは、予審判事の取調べがあり、予審判事、書記、被告、三人の間でおこなわれ、予審判事など暴力的な拷問はやりません。刑務所の看守が被告の活動内容を聞きだすようなこと、そのために拷問を加えるようなことは絶対にありません。刑務所は、身柄を預かっているだけです。ただ受刑者、被告人などが刑務所の規則に違反した時などは、「閉禁」などの懲罰を加え、あばれまわったりすれば暴力を加えます。看守から拷問をうけ、組織を守るといような事情はありません。

寺尾はこれらの点を指摘し、三好君に早速返事をくれるよう手紙をかきました。三好君からは返事がきて、『聳ゆるマスト』の創刊は、寺尾指摘のとおりで、『広島民報』の三好原稿は、民報記者が勝手にかいたものであること、また阪口の虐殺のこと、看守の拷問にもかかわらず、組織を守った云々は、山岸氏の文章から借りたものだという言いのがれのものでした。

四

私は△自伝▽など書かないつもりでいました。

しかし今回呉での活動を文書でまとめたことから、ペンをとってみようかの気になりました。大体の構想は

- 1、生いたち（中学卒業まで）
- 2、目ざめ（高等学校、大学時代、その活動と獄中生活まで）

3、病氣静養時期（執行停止処分をうけ、入院・自宅療養期、その間の活動）

4、呉市での活動（今回まとめた手記）

5、呉警察からの脱走顛末、上京

6、東京での活動（東京で逮捕されて出獄するまで）

7、暗黒反動時代（この時代の生活、活動、戦時中の三度目の獄中生活）

8、戦後の活動（敗戦から現在まで）

9、付 家庭

以上のとおりとなるかと思います。今のところ、印刷することなど考えていません。この項目のなかで党中央の方で、党史資料として要望されるものがあれば、まとも次第提出します。

私は嘘は書きません。

一九八二年一月一日

寺尾一幹

以上

手記 その二

寺尾 一幹

一、呉の街頭で逮捕される

一九三二年五月一〇日の昼すぎ、私の隠れ家から程遠くない街頭で、いきなり一人の特高がおそいかかってきて私は逮捕された。もともと、この日が一〇日であったかどうか、いまは記憶にない。警察の記録がそうになっているとのことである。

何の用で外出したのか、これもいまでは思いだせない。私はなるべく外出しないように避けていたのだが、普段着の着物と下駄ばきという姿だった。何か一寸した用足だったようだ。

相手の特高もひとりだったので、振りきって逃

げようとして格闘となった。しかしそのうち多勢の人だからができ、特高は小柄ながら腕力も強く、つかまってしまった。

私にとつての呉は全く馴染みのないところである。反対に呉市民のなかで私が寺尾であることを知っている者はない筈と思っていた。特高とても簡単にはこの私を確認しないだろうと思っていた。しかしその特高がいきなり私に飛びかかってきたので疑問に思った。

私はがんにがらめに縛りあげられて、あまり遠くもない呉警察まで引きたてられていったのだが、逮捕のきっかけになった疑問もわかった。警察では交替で入れかわり立ちかわりで私を監視していたが、その警官のひとり、私が一四歳の少年期、約一年間塾で勉強していた頃、一年上の上級生だったとのことである。逮捕される約一週間

前、やはり一寸した用向きで外出し、三米幅ぐらの小川の縁を上流に向って歩いていた時、反対側の道を背広姿の男と警官が連れだつて下つてくるのに出会った。そのとき彼らはジロジロと私の方を見て通りすぎたのだが、何だかうす気味悪かった。警官はこの上級生で、背広は特高刑事であった。私を逮捕したのはこの刑事であった。それにしてもこの警官は数年後の私をよく覚えていたものである。但し、この三月の広島市の大検挙から、私が呉に潜入して活動していることを特高はつかんでおり、私を狙っていたにちがいない。

格闘中、私はとりまきの群衆にむけて何度も泥棒ではない、共産主義者だと大声で叫んだ。特高を手助けするような者はひとりもいなかったが、私を助けたそうとする者もいなかった。当時としては当りまえのことであつたらう。

私が大声で叫んだのはこの騒ぎが大きくなって、あまり遠くない私の隠れ家の者が気づき、その時いた林と三好が逸早く逃げてくれるかとも思った。

こうした逮捕されたが、無念千万の思いであった。

二、嚴重な特別監禁

警察では留置場（所謂ブタ箱）に收容されるのが普通である。ところが呉警察では私は特別待遇の身になった。しかしこれは私を特に優遇したわけではない。

呉でも既に大がかりな検挙が始まっており、留置場は仲間たちで超満員となっていた。留置場だけでは足りないの、道場のなかなどにまで收容されていた。呉では私が中心人物の人物というわけ、留置場にいれると、連絡をとりあつたりするかと懸念したようだった。私を特に隔離するところがネライであったようだ。

警察の本館二階は粗末な机や椅子が並べられた広間になっていた。この広間では警官たちを集めて署長の訓示などを使用されていた。

そしてこの広間の隅の方に小さな部屋がふたつほど区切られており、そのひとつは特高室になっていた。他のひとつの部屋に私はブチこまれた。この部屋は10坪近くもあったが室内はガラシとして何もなかった。何かに使用されていたのを片づけた風にもみえた。

この部屋の一側面はガラス窓になっていたが、私を收容するために釘づけにされて、開閉できないようにされており、また外が見えないようカーテンが張られていた。他の側面にはドアがついており、このドアを通じて広間に入出入りすることになっていた。このドアは通常は閉められており、鍵はかけられていなかった。

この部屋で私は両手に手錠をはめられており、食事の時だけははずしてくれたが、夜はそのままで（手錠をかけたままで）眠る始末であった。

また私を監視するために四人の警官が当てられた。但しこれには二人づつ組んで交替することになっていたのだが、室内に長机と椅子五脚が持ちこまれており、当番の二人は勿論この椅子に腰かけていなければならなかったが、非番の二人も大抵はこの部屋にいた。余つたひとつの椅子は私用のものであった。私を監視する以外には仕事もないので私を交えて雑談することが多かった。

夜は二人の警官は目を覚まして椅子に坐っているのだが、非番の二人は私の寢床を狭んで両脇に自分たちの布団を敷き眠った。当番・非番は大抵夜昼とも三時間ぐらいで交替していた。私の起床も就寝も特に時間の指定はなく、朝適当なときに起き、夜は「ソロソロ寝るか」ということで、これも適当なときに寢床に入った。

私がこの部屋から外に出るのは洗面で階下に降りるのと、便所へ行くときこれもやはり階下に降りるときだけで、勿論警官つき添いであった。私の取調べというつもりか、県の特高主任や、特高が用紙と鉛筆を持って室内にきたこともあった。しかし私は「自分からは何もしやべらないので他

の方法で調べてくれ」と言った。まだ小手調べ程度のことで、それ以上食いさがってくるようなことはなかった。特高も私にたいし怒号するとか、まして拷問を加えるようなことは全くなく、一応私にたいしては紳士的（？）応対であった。

監視の警官たちも私にたいしては姿勢が低く、自分たちの退屈しのぎもあって、共產主義とはどんな思想か、何故共產主義者になったのか等、割合真面目な姿勢で聞いてくることもあった。私は真面目な態度で応対した。共產党の活動に逢着したことのない小都市の田舎出の警官ということだったかとも思う。ある警官は自分のうちの鶏が産んだものだといって、卵を一〇コばかり栄養を摂れと持ってきてくれた。

三、脱走―計画を練る

逮捕のドサクサも終り、警察に落ちつくとともに脱走のことを考えはじめた。京都の刑務所生活で重い結核にやられ、執行停止を食っていたこともあって、この事件では相当長い刑務所生活を覚悟していたが、結核の再発が懸念され、はたして生きて出られるだろうかとも思った。何とかして脱走してやろうと思った。

夜・昼ともに手錠をはめられており、四人の警官に監視されている。警戒は嚴重で脱走の余地は全くないようにも思われた。警察側でも安心してゐたにちがいない。しかしそのような環境のなかで、私は脱走の計画を練りはじめた。

夜、私の両側で眠っている警官はともかく眠っているが、目を覚まして私を監視している警官が時として睡魔と疲れで椅子に座ったまま目を瞑っていることがあった。試しに私が咳ばらいなどをすると、すぐ目を開けるので、眠りこんでいるわけでもなかった。しかしこのようなとき、耳は聞こえるにしても目は全く利いていないことになる。もし私が物音ひとつ立てずにこの部屋から出ることができれば第一の最大関門を突破したことになる。この成否にまず運を賭けた。

部屋の床は板敷きになっていたが、ところどころその上に乗れば軋む音を立てるところがあった。昼間、運動のためといって室内を歩きまわり、このような場所をチェックした。しかし続いての難問はドアを開けて室外に出るときであった。鍵はかかっていなかったが、ハンドルに手をかけると錠のなかのスプリングが何かが跳ねて、カチツという音がした。便所へ降りるときなど、私がサキに立っている工夫してやってみたが、この音はどうにも仕方がなかった。このようにしてチャンスも把握せず一日一日が過ぎていった。

そこで私は一計をたてた。そのとき私は成算があったわけではない。何とか現状を打開できないかと思っていたことであつた。

私は監視の警官との雑談のなかで結核の話をしてやった。それには私はわざと咳をしたり痰を出したりして体の調子が悪く結核が再発したらしいと告げ、結核の伝染性、特に患者の傍にいと菌の活力も強く濃厚伝染といつて、悪質の患者になるなどと話してやった。まだ結核が怖れられていた頃のことでもあるし、田舎出の警官たちにはシ

ョックをあたえたようであつた。

警察側からは私にたいし何とも言っていないが、私の結核話は早速に効きめが現れることになった。私の部屋からは机、椅子などがとり去られ、これらはドアの外に置かれた。ドアは夜昼とも開け放しで、警官はこの新しい位置から私を監視することになった。また夜、私の両側に寝ていた非番の警官も布団を外の広間に敷いて寝ることになった。

第一関門をうまく突破しても続いてその他の難関があつた。階段を降りたところのコンクリート廊下の側に小さな別室があり、深夜でも二人の警官がいて電話の交換業務をしていた。また本館の玄関口に向つては、やはり何人かの警官が寝ず番勤務についていた。だが彼らは皆、私の脱走路の廊下にたいしては背を向けて坐っていた。そして最後の外に出るためには構内から町中に消えてゆかねばならなかった。警察はコンクリートの高い塀で囲われていた。これは裏の方に自動車の出入りも可能な通用門があるのだが、頑丈な観音開きの扉がついていた。これにはカンヌキがあつたので、これに足をかけて飛び越そうと思った。電話交換室の状況や裏門のことなど、便所に降りた時に充分に偵察しておいた。

しかし万々一、警察からうまく脱走できても当然警察は大騒ぎになり非常警戒を張つて追跡してくるだろう。私はまず呉市の裏に聳えたつて灰が峰のなかに滑りこむこと、この山の中から毎日人目につかないよう何日もかけて目的地に辿りつこうと計画していた。目的地は一応広島と忠海を考えた。私ひとり隔離されていたので、呉の仲

間のうち誰と誰がやられているか見当もつかなかったが、留置場そして道場にまでも検査者を収容していたところを見ると、相当の者がつかまっているものと思われた。広村小学校の先生、城戸薫の家が最も適当だとも思ったが、あるいは検査されているかとの不安もあつたので、ともかく一刻も早く呉から離れようと思った。

広島を目差すにしても、忠海を目差すとしても、それぞれ一長一短があつた。

広島は呉から近い。私が長い間生活していたところで町なかの地理にも明るく、山伝いに潜入すれば、町に入つてからは人目もあるが割合に容易にたどりつけると思った。そしてまた、飛びこんでゆけば助けってもらえるかと思われる、しかも警察が夢想だにしないような有力な人を知っていた。しかし私の顔はよく警察方面にも知られており、当然非常警戒も敷いているだろうとの不安もあつた。

忠海には私はまだ一度も行ったことはない。この町には当時京都帝大生で検査、釈放されて自宅謹慎中の山中という者がいた。家は忠海で下駄屋商売を手広くやっていると聞いていた。この山中の家までたどりつくことも考えた。呉から忠海までは大体海岸沿いに行くことになる。私が忠海に潜入することは警察にとつては予想外とも思われたが、途中が長く、多勢の人目に触れる心配があつた。また今でも山中が自宅に謹慎中かどうかとの不安もあつた。

私はほぼ広島行を決めていた。

前にも述べたが私は食事の時以外、一日中手錠をはめられていた。鍵がなければこの手錠は容易

にはずれるものではない。何かで手首のところを隠すにしても途中で人に気づかれると大変なことになる。しかしこれには一定の仕掛けをして、簡単にはずれるようにしていた。

懐中には一銭の金もなく、全くの無一文だった。

四、脱走——成功、広島へ

時刻は深夜の頃であつた。下の方から大声で男のわめき声が聞えてきた。仲間の誰かが拷問にさらされているかと思つたが、酔っぱらいが暴れていたのだろう。それからは深い眠りには入れずウツラウツラしていた。

熟睡もしないままに布団のなかにもぐりこんでいたが、コツコツと階段を歩く靴音が聞えてきた。夜中でも上役が巡回してきて、監視状況をみながら机のうえの用紙に判コを捺して帰るので、それかと思つた。しかし目を開けて肩越しに監視の警官の席をみたら、ひとつの椅子はカラになつており、もうひとつの警官は目を瞑つて座っていた。

咄嗟に私はチャンスと思つた。落ちつけと自分に言いかけながら素早く布団をふくらませ、中に潜つているように見せかけて、草履を突っかけ物音ひとつ立てないよう、踏む床板も注意しながら動きはじめた。広間の音の軋む床板まではキヤッチしてはなかつたので、これは釘の打つてある場所を踏むことにした。階段を下りはじめたが、監視警官には全く気づかれなかつた。階段下の電話交換室の警官も背を向けていて、すぐ傍の廊下を

通る私に気づかなかつた。

私はかねての計画どおり便所近くの裏口通用門まできた。さてカンヌキに足をかけて越えようとして、よくみたら、どうもこの観音開きの頑丈な扉がうまく噛みあつていないようであつた。大袈裟な錠前がついていたが、全然噛みあつていなかった。手をかけて引くと音もなく開くのだつた。大通りに出たので私は早足で歩きはじめた。そして最初の曲り角を折れ、尻からげして灰が峯を目かけて一目散に走つた。手錠は即刻にはずし袂のなかにいれた。

朝未明の四時頃であつた。各家々はまだ戸を閉じていた。少し白らんだきた町中を、朝の早い新聞配達や牛乳配達が見え、三走つていた。よく夜明け前の闇は暗いというが、その時刻は薄明で人気がない深夜、まして昼間などと較べて最適の時刻であつたように思われる。

当時の呉は人口十数万の小さな都会で、灰が峯の麓から海にかけての狭い地域の人家が密集していた。警察を出てから、ものの二〇分ばかり突っ走るともう人家も跡絶えた山裾に入る。ここまで来て私は歩を緩め、しかしひたすらに頂上を目差して昇りつづけた。

人家が絶えて樹林に入る中間地帯は幾段にも重なる段々畑になつていた。目的地に着くまでは夜中に少しずつ移動することを考えていたのだが、その間の空腹を凌がねばならないという問題があつた。私は最後の段々畑で丁度この時期に熟しかけていた麦の穂を摘み、袂一杯にふくらませて食料に当てることにした。

山に入ってから私はひとりの男とすれちがつ

た。四〇歳がらみの男で何か山仕事でもしていたような感じであつた。別段私を注目して見るような様子でもなかつたが、一寸気にかかつた。

山のなかにはジャングル化してはならず、径が通じていた。履いていた草履は町なかで使わねばならないと思つて、脱いで懐にいれ、跣であつたが足裏を痛めるようなこともなかつた。

この日は朝からよく晴れていたのだが、俄かに雲がかかつてきて、霧雨が降つてきた。高い山のなかでは、下からみると雲がかかつた景観となることもある。降りつづく雨ではなく、いつ時のものらしく思えた。その通りだつた。

私は警察を出てはじめて腰をおろし、ひと休みした。この場所からは遥か遠くだが彼方に広島町の町も眺められた。そして行き先は広島に決めたが、サテこれから強行作戦で一気に広島に入つてゆくか、それとも何日もかけて夜少しずつ広島に近づくかを検討した。時刻は午後三時頃であつたかと思う。そして私は強行作戦を選んで山をおりはじめた。山の麓の状況も勿論できるだけ詳しく偵察した。このあたりは矢野町、坂村だろうと思つた。住民はいずれも半農・半漁で暮しをたてているところだが、人家の疎らな道を辿れば、あまり人目に触れずに海岸ばたに出られ、遠浅の波打ち際に沿つて広島潜入ができるかと判断した。これが強行作戦を選んだ理由だつた。陽はまだ高かつたが、広島島の目的地へ着くまではまだ数時間はかかるだろうと思つた。

無事成功するためには、しかし私にとってはひとつ気がかりなことがあつた。それは私の風体であつた。私は生来の髭づらで、約一〇日間も伸び

放題のままで人目につけば、それだけでも異様であつた。また服装は着物の着ながしで擦りきれた草履をつつかけていた。警察の手配がどの程度まわっているかわからなかったが、とにかく人目は避けねばならなかった。だがやはり人目に触れないというわけにはゆかなかつた。ある農家らしい家の前を通つていたら、ひとりの主婦が表に出てきたが、私の方をジロジロ見るのだった。変な男がということがその顔の表情にもうかがえた。私はなるべく目をあわせないようにして平静を装つて過ぎ去つた。

警察を出てから薄明、呉の町で新聞配達などを離れたところからみた以外、広島の目的地に到着するまで間近に人に会つたのは、この主婦と、広島に入つて鉄道線路を歩いてた時ふたりの鉄道員らしい男に見咎められただけであつた。よく道も選んだのだが、好運にも助けられたかと思う。都会のなかも通りぬけたのだが、まさに無人地帯を行くということか。

広島町の太田川という川の三角洲のうえに拡がつており、こちらからの最初の川は猿猴川と呼んでいた。目的地に到達するには、どうしてもこの川だけは渡らねばならなかった。下流からの最初の橋は猿猴橋といつて、しかもその橋の袂には交番があることを私はよく知っていた。この橋を避けて更に川上の橋を渡ると、賑やかな町を通るので危険もあつた。しかしとにかく私がこの川岸に着いた時は日は既に暮れていた。七時であつたろうか。

広島に着いた。

太田川の一分流というものの、このあたりの

川幅は相当なものだった。一〇〇米近くもあつただろう。水かさも相当なもので、とても歩いて渡れるような状況ではなかった。この場に臨んではいたしかたがないので、私は川に沿つて上流に向け歩きはじめた。

ところが意外のことに打ちあつた。猿猴橋に到るまでの最下流に、もうひとつの鉄橋がかつてゐるのを発見した。ここに鉄橋があることは知らなかった。広島駅から宇品へ向けて軍需品など運搬するために架設されたものらしく、貨車だけが通過するものようだった。橋の上には枕木だけが並べられており、下には流れが渦を巻いてゐた。

何はともあれで私は橋を渡つた。付近には余り人家もなかったが、それからは線路づたいに目的地に向つた。大体的に見当だが、この線路を歩くと目的地へ殆んど直線的に行きつける最短距離だと判断した。

だが途中先方から懐中電灯をピカつかせながらふたりの男がやつてきた。警官らしい服装をしていたのでギクリとした。しかしこの時刻、この場所まで警察が網を張つてゐるのも、どうかと思つたので、私は逃げだすようなこともせず、平然としていた。しかしこの男たちは黙つて通りすぎるのではなく、私を呼び咎めた。ここは人の通るところではないので、道路を歩けというのだった。私は神妙にどうもすみませんといつて、また線路を歩きつづけた。

五、恩師に匿われる

私の脱走行のこれまでの経過は大体において警察でたてた計画どおりに事が運んだ。

夜の九時頃であつたろう。私は目当ての恩師の家に辿りつき玄関をくぐつた。これも私がたてた計画の逃走先だった。しかし先生が引きうけてくれるかどうか、事が事なので何ともいへなかつた。もし先生のところが駄目だったら、やはりこの近くに住んでいる従弟の家にとびこむ第二の予備地も考えていた。

呉で私が逮捕されたことは既に先生は知つてゐた。然し私が警察から脱走してきたことは、何しろその朝のことなので知る由もなかった。先生はビックリした様子だった。

私は玄関で簡単に今朝、呉警察から脱走したこと、こんなことは先生に頼むべからざることを充分承知しているのだが、何とか助けてもらいたいと卒直に話した。

先生はしばらく私を見ながら無言だった。そして、よろしい引きうけたといつてくれ、またしばらく無言になった。窮鳥が懷にとびこんだとも思つたのだろうか。

先生はその間、更にどのように私を匿い、安全なところに送りだすかなどと思ひめぐらしてゐたようだ。そして具体的な方策をたててくれた。

自分の家には家内や子供もいるので匿うわけにゆかない。この近所に一軒の空家があるので、そ

の床の下に隠れておれ、できるだけ急いでいろいろな準備をしてやろう、といってくれた。

今朝から何ひとつ食べていなかったが、全く空腹を感じなかった。

少し距離を置いて私は先生のフトについて空家までいった。この空家の縁の下から潜りこみ、更にその奥の床下にいることにした。ここなら外からは全然見えない。

私はこの床下に三泊ぐらい過したと思う。先生は早朝または夜分に毎日一、二回訪ねてきて食パン、牛乳その他若干の日用品などを置いてくれた。先生がきたことは咳ばらいでわかるようにしていたが、品物は縁の下に置いてくれていたので顔をあわすようなこともなかった。

この潜伏場所は絶好ともいえるが、困ったことには夜、昼とも蚊の襲来をうけ、よく眠れなかった。大分疲れていた。

最後の晩であった。この時はオイオイと先生が呼ぶので私は床下から這い出した。先生は準備ができたといって、いろいろな品物を取り揃えてきてくれた。

大学の学生服、学生帽、シャツ等々、安全カミソリ、革靴、そして金二〇円、その他鯉節一本、便箋、鉛筆、古新聞紙、一米平方大の風呂敷等々。学生服などは中古品で、どこからか調達してくれたものだろう。鯉節はこれ一本あれば今後いろいろ困難もあると思うが、それだけで一週間ぐらいは命がたなげる。古新聞は保温力があるので、寒いときに上衣の下にさしこめば野宿もできると言うのだった。

これまで私は先生に会っても小声で話しか、む

しろ無言で、自然と双方とも目でものを言うことになっていた。

しかしこの最後の日、私は床下から出て先生に礼を述べ、別れをおしんだ。もし天候が晴れなら明早朝、ここから出発することを告げた。

私は涙がでて、しやうがなかった。先生の目も光っていた。

先生に助けられた経緯は私はこれまで誰にも明かさなかった。命をかけて黙っていようと思った。戦前は要職にあつた先生の身に大変なことが起ることだった。戦後は民主主義と変つたのだが、それでもますます要職にあつた先生に迷惑が及ぶことも懸念されたので秘していた。

その後私は東京で検挙され、呉からわざわざ特高が出張してきて私を取り調べ、当然私の脱走の状況なども聴いてきた。相手は私の説明に納得したかどうかは別としてだが、私は先生のことは一言もしやべらなかった。

私はその後自由の身になって、ひそかに数回、先生に会った。この先生も四、五年前に亡くなされた。

私から言うのもどうかと思うが、逃亡を助けてもらったことは先生の高貴な精神の発露であり、その一生を飾る出来事と思っている。遺族にも話して諒解されれば、秘すこともやめたいと思つている。しかし奥さんも既に亡くなられ、子供さんだけなのだが、先生は家族の中でも余り話していなかったかも知れない。

六、広島から脱出、東京へ

幸に天気もよいようだったので、私は身づくろいし学生になりすまして未明の時をとらえ床下から脱出した。深夜は不審問にかかる虞れもあるが、朝未明はまだ家々は戸を閉し、人通りもほとんどないので一番好都合であった。

東京へは広島駅から山陽線に乗り、東海道線へ上つてゆくのが普通だが、広島駅の張りこみも予想されたので、裏道の日本海を伝つて上京することにした。これには中国地方を横断するローカル線の芸備線があつた。しかしこれも始発駅は危険だと思つたので、この線に沿つて歩き、約二時間ぐらい歩いて田舎の小駅から汽車に乗った。呉や広島から離れるにつれて安心感が加わつた。

途中で一度乗りかえをしたかと思うが、私の汽車は島取に着いた。この汽車はここが終点だった。

私は駅から出て、こちらへんどこかの宿屋へ一泊することにした。駅からかなり離れた宿屋を見つけた。長い間風呂にもはいっておらず、広島では蚊の襲撃もうけ寝不足だったので、少しノンビリしようという気もあった。夕食もすませ入浴もして早々と寢床にはいつて眠っていた。

ところがここでも、これは一大事という事件に見舞われた。

夜中の頃、襖の外から、「モシモシ、広島のお友だちが訪ねてみました」という女中の声で目を覚まされた。そして女中が襖を開けると、その後

に四〇歳がらみの太った男が控えており、私の側までやってきた。宿帖には私の知っていた実在の町居住、そしてその名前は変名を名乗り、広島文理大学生ということになっていた。それにしても広島大学の友だちが私を訪ねてくるわけがない。一瞬に私はやられるかと思った。この男は案の定、刑事だった。

この機に及んで万事休すで心臓の鼓動が停ったかのショックだった。しかし私は顔色ひとつも変えずで落ちついて宿帖に書いたとおりの住所、姓名を名のり、広島文理大地歴科の学生でこの地帯の砂丘の研究に旅行していると言ってやった。刑事は私の顔をジロジロ観ていたが、間もなくさうですかと言って引きあげていった。

サテこの事件はどんな意味を含んでいるのだろうかと思ひめぐらしてみた。刑事は一応帰っていたが、私を確認したので間もなく警官を動員してこの宿屋を取りまくようなことになるかとも思った。私は早速また学生服に着かえまたここから逃げだすことを考えてみた。しかし刑事の言うとおり単純な家出人の不審かとも思ったので、そのまま眠ることもなく夜の明けるのをイライラしながら待った。そして早朝夜が明けるやいなやこの宿を去った。女中がわざわざ道路にまで出て私を見送ってくれたが、商売柄のサービス以上のものだったろう。

思うに私が風呂へ入っていた時に女中が私の持ちもののなかを見て、鏝節などがあったので不審がったのでは、ないだろうか。

昨夜の刑事がまた鳥取の駅に張っていて、万一見咎められてはという懸念もあったので、私はま

た鉄道線路沿いの道路を歩きはじめた。余談めくがそのとき後になり先になりでふたり組の男がやはり歩いていて。いずれも四〇歳がらみで作業服を着ており、荷物らしいものは何ひとつ持っていなかった。別段警戒を要するような男ともみえなかった。それで、退屈まぎれにどちらからともなく雑談を交しながらしばらく同行した。彼らは下関を発って歩きつづけ、これから東京まで歩いてゆくのだと言っていた。彼らは道すじで役所、学校、寺院さらに民家などに立ち寄り、金銭や食事などを貰って國中を放浪しており、東京へ着いたら今度は青森まで往復すると言っていた。当時(1932年頃)は世界的大恐慌の挙句で國中に失業者が溢れていて、自分たちのような男が多勢いると言っていた。

三、四時間も私は彼らと一緒に歩いたが、彼らは一寸奔走してくるというて道を外れ、私と別れた。奔走するとはどこかえ立ち寄って金をねだるとか、腹ごしらえすることだと話していた。

大分長く歩きつづけたため、若干蒸し暑いとはいふものの晴れ渡った好天気だったが、靴が足に合わず豆をつくってしまった。また東京を目指して小さな駅から汽車に乗った。

この汽車は舞鶴まで来て、そこがまた終着だった。駅の待合室で過すのは危険なので外に出た。宿屋は鳥取で懲りているので泊るわけにはゆかなかった。少し歩いて郊外に出て、田圃に積んであった藁のなかにもぐって夜を明かした。

翌朝また汽車に乗り、途中乗いかえもあったが車中に一泊、中央線で早朝立川などを経て東京に着いた。

東京へは私は一度もきたことがなく不案内で、ましてや党は非合法活動で地下深く潜っていた。どうして連絡をつけるかという問題があった。これには一計をたてていた。学生時代、結核で京都で安田徳太郎博士に大変お世話になったが、この安田徳太郎博士は東京に住んでおり、医業ばかりでなく広く文筆活動もしていた。安田博士に会えば何とか党との連絡をつけてくれるのではなかった。しかしその安田博士の自宅など知っていなかった。どこかの出版社を訪ねれば教えてくれるかと思った。神田方面には三省堂や岩波書店があることを知っていたので、神田駅に降りたちその方面に向って歩いた。私が神田の鈴蘭通りにさしかかったところ、先方から学生時代に共に活動していた藻谷小一郎とバッタリ会った。全くの偶然、奇遇であった。藻谷も当時党の活動をしていたので、極めて簡単に私は連絡をつけることができた。

警察を脱走してからまだ何日も経っていないが私はまた党の懐に受けとめられた。

以上

広島高等学校のころ

寺尾 一幹

広島高校にはいったのは、一九二四年になりますか、まじめというわけではないが、まあ普通の学生として入った。中学生時代に、あとで運動にはいるような必然的なものはあったのですが。

高校二年生のとき早川義則の選挙ポスターをみて、その選挙事務所へいってピラくばりやポスターはりを手伝った。もちろん学生すがたではなかったですが。

ある日、選挙の演説会があつて私もはやくからいって会場準備をやった。

その演説会に、広高の学生がひとりきっていた。それが守屋恒美君で、おなじ学校だから顔は知っていたが、ものをいったことはなかった。その彼がはなしかけてきた。彼のおやじさんは、呉工廠の労働者だということだった。

それから広高で社会科学研究会をやるという

ことになった。私と、守屋君と、李永植君と三人だった。「空想から科学へ」などの研究会をやったり、組織の拡大をねらっていた。高校の下級生にもはいるものが出て、多少組織がひろがりました。ほかの学校のことをかんがえて、高等師範学校にめをつけていたが、歴史学部の高沢君というのがみつかった。広島高校の、私とおなじクラスに木下君というのがいて、それと知りあいの人物でした。木下君は、こつちにはこなかったが。

守屋恒美君が、高師にいる田坂君というのを知っていて、これもこつちに入った。これが広島の高生組織のおこりです。率からいえば、広島高校の方が多くこれが中心でした。

高師のなかに臨時教員養成所というのがあつて、その学生と広高生とが私の家の近くに下宿していました、その広高生と私が知りあいだつ

たので、彼を通じて臨教の学生がこつちに入ってきました。

中学校のほうは、岨常次郎君の知りあいに、広陵中学の吉岡道人君、師範学校に村上金彦君、服部久雄君がいて、これらもこつちに入りました。

広高のおわりごろになって、朝鮮で大きな事件があつて、多くの中学生が追放されて広島や呉の中学に入った。広島の高生が山陽中学にはいっていたそれらのものを組織しました。広島の中学生の組織ははいい方ではないかとおもいます。

あとからきいたことですが、私たちの前に、上級生がやはり社会科学研究会を組織していたということでした。それはまだ系統だったものを勉強していたわけではなかったということです。

あるとき、広高内で弁論大会があつて、私も一席弁じたが、古い連中がそれを聞いていて、あの

男はみどころがある。こっちの組織へ勧誘しようじゃないかといっていたそうだが、その研究会は解散してしまったので、そのことはありませんでした。

我々がうごいていても、古い連中は知らん顔をしていました。

どこの校友会も運動部が中心で、文化的なものは、弁論部かサークルのようなものしかありませんでした。我々は、校友会費をもっと文化的なことにつかえといったものです。

われわれの研究会は、そのうち資本論をやろうということになりました。あのとおりむつかしい本だが、別段、先生格のものがあるわけではないが、守屋君、李君、私それに高師の広沢君くらいだった。

あるとき、学校へゆくとあまり出席していなかった。そのうち大勢、おかれてどやどやとやってきた。バスがストをやっているので、おくれたという。

それで、われわれ三人で相談して、ストの応援をしようということになりました。

当時、玖島三一君たちもつかまわっていて火のきえたような状態でした。守屋君が争議団へいって、協力させてほしいといいました。むこうもよろこんで、たのむということになりました。争議の指導といったって、我々に経験があるわけではないし、争議団を元気づけるていどのことしかできません。

争議のほうは、要求事項はわすれたが、大部分とおり、まあまあ解決でした。

それがすんでから、バスに乗ると、ある運転手

が争議団の活動分子だったので、守屋君や私のかおをおぼえていて、車掌さんに「この人は料金をもらわなくてもええから」といった。それから運転手や車掌にそのことがひろがって、我々は料金をはらわないで乗っていました。会社からいえば無賃乗車ということになります。

玖島君や街頭の連中といっしょになって、ビラまきやポスターはりを行いました。そのころは、つかまつたら一大事というころでした。社会科学研究会も公然とはなかったが、かなりやりました。学校当局にもおおよそわかったようです。三年生になってから、ある教授が「きみらはどの大学へゆくのか」ときいたが、きみらというぐらいだから、グループでうごいていることも知っていたようです。

ビラまきで多少かぎつけられて、高校へも弾圧の手がのびそうになったこともあります。どこにか広島高校を卒業しました。

いちばんハデに活動したのが李永植君で、高校を卒業して京大にすすむとき、無試験のはずなのに李君だけは入学許可がおりなかった。私や守屋君は京大に入りました。広島高校卒業まぎわに、下級生の増原君や河野君にてがかりができました。私が卒業してから花田君、吉田君などがあとをひきついでやりました。

私は京大で検筆されて、未決にいるとき体をわるくして、執行停止ででて広島にかえりました。そのとき、増原君や河野君が広島三年生でいて接触がありました。

ある夏、能美島で家を一軒かりて、三、四人で合宿して、水泳をしたり勉強したりしました。増

原君のおやじさんが、息子たちは能美島へいっているといたらしい。一週間くらいいたら、おまわりがきていろいろ聞いてきた。べつにそのときはひっぱってゆくというのではなかった。

〔注〕 岨氏談「三日間くらいだった。峠一夫君がくる筈だが、こなかった。玖島君もこなかったの私と高校生と四人ぐらいたった」

だいたいそれくらいが学生時代のことです。

臨時教員養成所は、府中中学出身の者がいました。府中中学から一人は広高にはいり、一人は臨教にはいりました。広高にはいったのは妹尾大膳という男でした。妹尾君の下宿に私が本などを預けていたので、その臨教の男とも知りあいになりました。妹尾君は、こっちにはいらなかったが、臨教の男は積極的にこっちにはいりました。戦後、こっちの運動をやっていたことですが、名前はおもいだせない。おなじ府中だから、山代さんが知っていることでしょう。

増原君は熱血漢で、一生運動をつづけるとおもって期待していましたが、このまえ彼が上京して岨君をたずね、私のところへもきました。こちらの方にはいっているかどうかは聞きませんでした。

このまえ『広高五〇年史』を出したが、そのなかに学生運動の項があつて、私にも書くように吉田司君から手紙がきました。吉田君のころのことは彼がかくとして、その前のことを私にかいてく

れとのことでした。そのとき吉田君の手紙に、副

題として「つわものどもが夢のあと」と、つけようとおもうといってきました。とんでもない。そんな茶化したような題ならわしかかん。今になってみれば夢どころではなかった。書いたものは、一字一句そのままのせてくれ。編集のほうで都合がわるいとおもったら、没にしてもかまわないと、釘をさしておきました。できてきたのを見ると、全部そっくりのつていました。あれに広高社研ののことを書いておきました。

私は、京大にいつてから、まるまる一年もおらんうちに検挙されましたが、広高時代仲のわかった運動部の連中が「赤色スポーツ団」というのをつつたので、おやおやということでした。

守屋君が社交的で、いろいろの者につきあいがあるので、かれからそんなはなしをききました。彼等にしてみれば、正式な選手になるには力量が不足しているでしょう。当時たいていの学生が左翼化しているので、そんなものをつつたのでしよう。もっとも、連中は社研には入ってきませんでした。

守屋君も京大にいつてからは社研にはいつてこなくなりました。

私が、呉にいつてからの活動費は三本立てで、ひとつは工場の者や、本屋の田中君など呉の連中からのカンパ、そのころ月に六〇円くらいの給料から毎月ではないが、五円くらいずつカンパしてくれた。ふたつは京大の守屋君が、広高出身の京大生数名からあつてくれた。それと広島の家についてせびつたものとだ。そのころ月に一〇円あ

まりで生活できた。

私など、終始一貫しているようですが、人間というものはよい面、憶病な面がありますから。私も憶病な面もあります。やらねばならんとおもうから、運動からはなれずにやれたんじゃないかとおもいます。みんなが運動からはなれてゆくのは、いかにも残念だよね。戦時中はしかたがないとしても、戦後もやっていけません。

京大にも社研には二〇〇名くらいいたのに、みんなはなれてゆきました。ずっとやってるのは私くらいのものでしよう。反共になったものも多くなります。

東京に京大同窓会の「白川会」というのがあって、あるときその会員の宇都宮徳馬が、単独でキユーバにいったが、その報告を白川会でやった。司会者が紹介で「宇都宮先生が……」というのがアタマにきました。おなじ同窓会員で、日の当るところだけ「差別待遇」してやがると思つてね。それきり白川会にゆきません。「宇都宮先生」が中国へゆかれるので、その送別会と帰られた際の歓迎会をします、などという手紙が白川会からきたので、「私も来月あたり中国へゆくかもしれんが、送別会、歓迎会を白川会でやってくれるか」とねじこんでやった。まるで会の運営がためじやないかといつてやりました。なかに、私が中国へゆくはなしなどなかったのですが。そのくせ、河上博士の追悼会をやるから出席しろなどといつてきます。なんで奴等が、そんなことをするのか。やっぱり、ひかれるものがあるのかな。

〔以上、東京、神田神保町 れいめいビルにて。
なお、広高生について 寺尾氏より つぎの手紙が おくられてきました。〕

花田起志夫のこと

彼は、増原・河野両君らと同学年。しかし、私たちが卒業したあとだったが、決意を固めて活動してくれた唯一の同志であった。同君は卒業後、京都帝大経済学部に入學。当時、私は結核のため、刑の執行停止処分を食って、大学病院で静養中だったが、私の制帽を彼にやった。後上京して、党中央の軍事部で活動、検挙され、松沢病院で死去したと聞いている。その詳細を知りたいと思つているが、気になりながらも私は放任している。

李永植君 広島西警察から脱走の顛末

李永植君は、私の広島高等学校の同級生（但しクラスは別）でした。高校を卒業して守屋君、李永植君、私は京都帝大経済学部へ入學することになりました。その年は、経済学部は無試験入學だったので、一同揃って入學できるものと思つていましたが、李君だけは入學許可がありませんでした。当時も高校からの内申書のようなものがあつたと想像されます。

それでも李君は、私たちと一緒に京都にやって

きて、学生街に下宿していました。学生でないの
で京大の社会科学研究会には顔を出せませんでした
が、ある程度は左翼学生とも交際をもち、詳し
いことは知りませんが、なにやかやと活動してい
たようです。その後、彼はまた広島に舞いもどり、
活動していました。

一九三〇年か三一年頃のことです。彼は広島で
検挙され、西警察に留置されました。その頃私は
京都で検挙されて、未決に収容されていたので、
そんなことがあったとは知る由もありませんでし
た。しかし後日、私が彼と会ったときその脱走の
顛末を話してくれました。同君は今も横浜に生存
しています。活動に派生したひとつのエピソード
として記します。

一九三〇年か三一年頃、彼は広島で検挙され、
西警察署に留置されていました。彼は、留置場の
なかではとにかく食事がお粗末なので、栄養物を
食わせろという要求をし、天井やカツ井などをと
らせることもしました。また留置しっぱなしで健
康によくないので運動をさせろとも要求し、毎日
短時間構内の広場に出させ運動もさせてくれるよ
うになりました。

こうして運動にでたある日、彼はいつものよう
に、広場のなかを歩いたり走ったりをはじめまし
た。そして、ここぞと思う一瞬をとらえ、彼は通
用門をくぐり、街に駆けだしました。監視のおま
わりもいることで、一大事とばかり何人も追跡し
てきました。先頭にはオートバイや自転車もあり、
その差は詰められるばかりでしたが、署の近くの
国泰寺まできて、彼は咄嗟にその塀を跳び越し寺

院内に逃げこみました。オートバイも自転車もそ
のままでは塀を越し、寺院内に入りこめないの
でマゴマゴしたでしょう。李君もこれからどうす
るかでマゴついたわけですが、目の前に小さな物置
風の建物があり、その出入口には一応錠前がつい
ていたそうです。彼はこの建物のボロけた一枚の
ハメ板をはずし、中にもぐりこみました。必死に
走ったので、彼は呼吸もつまり、ハアハアとい
う息が離れたところからでも聞える程だったこと
です。彼は手ぬぐいで口を覆い、地べたに口を
着けて呼吸することにして、音を消したとのこと
でした。程なくおまわりたちも小屋の側まできて
ガヤガヤしており、この中は大丈夫かなと言
う声もしました。彼は、はずしたハメ板はもとのと
おりにしており、錠前もそのままだったので、や
がておまわりもたち去りました。

よく見ればこの物置は、寺院の漬物小屋で、彼
は沢庵などをとりだし、かじったりして日の暮れ
るのを待ったそうです。夕刻、彼はシャツとサル
マタだけの出でたちになって小屋を這いだし、寺
院の正面にまわり、参拝客を装い掌を合せ、それ
から手ぬぐいで鉢巻をしたうえであたかもマラソ
ンの練習をしているかのように、ワッショイ、ワ
ッショイと言いながら街を駆けぬけたとのこと
でした。

それからどこに逃げこんだかは聞いていません
が、私の家に秘かにきて、母から20円の金を貰っ
て更に遠くへ逃げてゆきました。(以上)

一九八三年二月二日 記

広島電鉄ストライキのころ

井上 栄談

ストライキがあったとき、一九三〇年（昭和5年）一月二十九日―三〇日、私は広島電鉄にはいつて一年ぐらいの時で、上の指導部のことや全協のことなどよくわからなかった。二〇歳のころでガムシヤラにやったようなものだ。

このストライキで検挙、起訴されたもののうち電鉄の従業員は中山武夫、杉野幹夫、縫部啓蔵の三人くらいで、あとは応援にきていた人が、検挙起訴された。

このうち中山武夫という人は仕事のうえでも優れた人で、いづれ電鉄の幹部になる人だとみんなからも思われていた。その人がまっさきに賃金ねあげの闘争にうごきだしたので、みんな中山氏のまわりにあつまって、たたかうようになったのだとおもう。中山氏に全国大衆党の線がはいっていたと思う。縫部、杉野という人はまだ若く、むこ

ういきも強いので、デモと警官隊がぶつかった時も相当たたかったので、暴力行為の罪名で起訴されたのだろう。

しかし、なぜ労働者のデモと警官隊がぶつかるように、しむけたのかということで私は争議団の指導部のやりかたにうたがいをもっている。

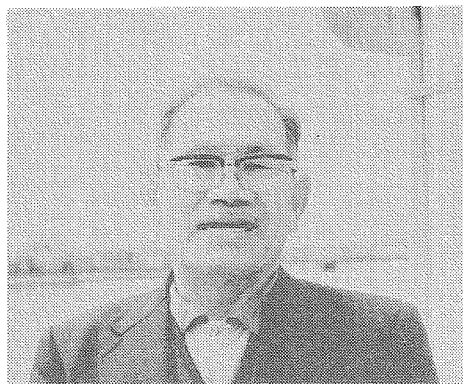
私たち若いものは別動隊で、鷹野橋のちかくの別の寮に待機していた。争議団本部のものが検束されたときいて千田町の寮にかけつけたが総検束が終わったあとだった。

争議団の本部は千田町の従業員の寮だった。こは池があつて、建物は池をとりまいてコの字形にたっていた。はじめはその池のまわりをワッシヨ、ワッシヨとデモをしていた。そのうちデモが外におししたが、そこで警官隊とぶつかった。そして総検束となった。どう考えても、うまく

できすぎていると思う。

わたしは五条俊夫氏も知らなかったし、全協の線がどこまでのびているかも、知らなかった。広電のストライキでは村井一夫氏が指導部ではいちばん勇敢だったと思う。佐竹新市氏は消極的だったようにおもう。（了）

（一九八〇年一月五日ききがき。井上栄氏のはなしは4・26事件の項につづきます。）



組合からモップル（赤色救援会）へ

仁井田 教一 談

私は「社大党」系の合同労働組合ではたらいっていた。むかしは社会党ではなく社会大衆党といったし、そのまえは中国無産党という地方政党だった。合同労働組合というのはいろんな仕事の労働者があつまっていた。そのころは、労働組合にはいつているというだけで工場をクビになるという時代だ。クビになった者の解雇手当をとったりするためにいそがしかった。

木材工場のストがあつたり、染物工場の争議があつたりした。

染物工場の争議では工場主との交渉がラチがあかず、とうとう労働者たちが「仕事をしているのはオレたちだ。オレたちで工場をつくらう」ということで、福島町のしもての土手に家をかりて工場をつくった。しかし、労働者だけで仕事はできても、注文をとったり資金ぐりなどできるもので

はない。とうとうつぶれてしまった。

河原町の山陽紡績（広島紡績）の争議のとき、工場側が門をしめて従業員をそとに出さず、ぐずぐずしているとストライキにはいるチャンス逃がすということになるので、私は工場のうらの赤レンガの、カンゴクのような塀をのりこえてなかにはいった。女工さんたちを集め、みんなの「團結の力」で工場のそとにおしだした。国泰寺のちかくの家に争議団体本部をつくってストに入つた。

この紡績会社はこのストで、左前になり、とうとうつぶれることになった。

そんなことをしているころ岨君が「全協にはいつてくれ」といった。彼とはストライキの応援にいったときなど、よく顔をあわせていた。コンナがまたなかなかショータイ（正体）をあらわさん

男でう。ぼつぼつ、こだしにしか左翼のはなしをせん。彼は逃げるのは要領がえ。私などあとに残つてがんばつていて、いつもつかまるのはワシだ。

全協にはいれといつても、私は合法的労働組合にいるのだから、全協に入るのは、すこしまずい。それより救援活動をやらねばならん。同志たちがつぎつぎとつかまつている。その差入れもほつておけん。私は大工だから工場につとめる者より時間都合がつけやすい。刑務所の面会、さしいれもできる。そんなことで救援会のしごとをするこゝとになった。胡川清君が検挙されてから私はひとりモップルの仕事をやらねばならなかった。

〔註〕 胡川清 赤色救援会広島地方委を結成し、一九三一年五月四日——5・4事件で検挙。

仁井田教一。一九三二年三月五日——3・5事件
に救援会責任者として検挙。

3・5事件で私が検挙されたとき、私の部屋の本やポスターがちらばっている写真が新聞にだが、母親がちゃんとその新聞を切りぬいてとっておいてくれた。新聞の記事では私が特高の刑事をなぐりつけたというように書いてあるが、あれはデマ記事だ。アカという連中はおそろしい奴等だ

という考えを大衆にあたえようとしたものだ。

〔一九七二年三月一七日 聞き書き〕

〔参考〕

広島労働組合のうごき

一九二四年

四月二日 広島労働組合（吉川長太郎 吉

本隆一）

八月 五日 広島労働組合

九月 八日 広島合同労働組合（総同盟へ加

盟）

一九二五年

五月二四日 評議会へ加盟

六月 一日 広島鉄工組合 早川ら

一九二六年

十一月二五日 広島一般労働組合（広島合同

広島鉄工合同）

一九二七年

二月一八日 労農党広島支部結成（広島一般

労組と日農県連が中心）

一九二八年

三月一五日 3・15事件

四月一〇日 労農党評議会・無産青年同盟解

散命令

広島一般労組解散

八月二一日 広島合同労働組合結成（佐竹、

吉本、唄）

二月二五日 全協結成

新労農党準備会解散命令

二月二八日 政治的自由獲得労農同盟結成

広島県下の旧労農系

政獲同盟広島支部（末元、玖島、

片岡、早川、唄、晒谷）

合法左派中国無産党（高津、高

橋、佐竹、吉本、上岡）

一九二九年

四月一六日 4・16事件

一九三〇年

五月二一日 広島自由労働者組合 佐竹ら

六月 一日 全労（全国労働組合同盟）結成

六月二九日 全労中国連合会（広島合同・広

島自由・福山労働）

二月二九日 広島電鉄スト

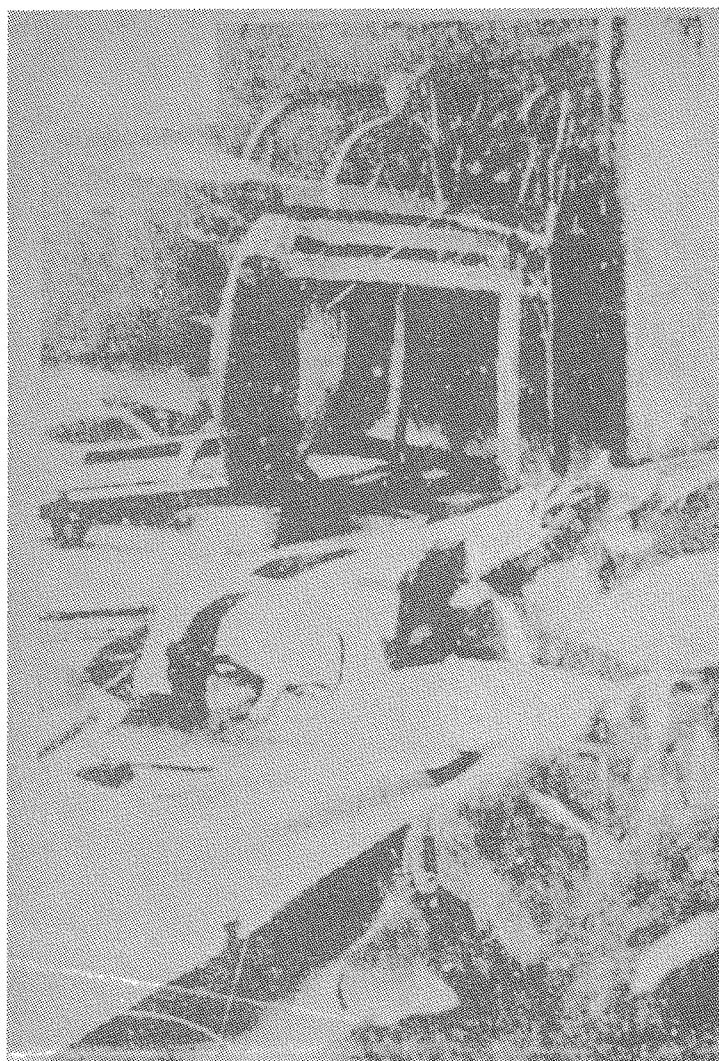
三〇日 一七二名総検束

広島合同広島自由幹部起訴

一九三一年

五月 四日 5・4事件

〔数本英次郎氏より〕



想 い 出

清 水 政 男

明治三六年広島尾長町片河うまれで儂も今年六六になった。

〔この手記は一九六九年〕

若い時代、革新的な考えをつちかっていた関係で、また現在も赤旗をよんでいるおかげで大学の問題、安保、日本の将来、はたまた人生の幸福について年輩者と意見をたたかわすことのできるのは左翼運動に身を投じて非合法の実践の活動を経て、獄中の貴重な体験等、現在の若い労働者の経験していないことを体験したことがそうさせているのだとおもう。

さて私は長いおもいでを書くまえに、幼い頃からの思い出をつづってみよう。

父は私のものごとろついていた頃は自然と視力がおとろえはじめていた。何時の頃から父は按摩を業として生計を立てていた。苦しい家計の連続は幼い

私の心に少しでも収入を増すよう家計を助けようとの考えを抱かしめるようになっていた。

小学五年生になったころ、午後五時ごろから當時胡町にあった広島毎日新聞社に行つて夕刊五枚を三銭で買い、一枚一銭で売つて、ひとばんに二銭もうける夕刊売りをはじめた。残つた一枚か二枚を広島駅にいつて、電車の終点から駅までゆく人々に売るのに一二時頃までかかった。当時一杯のうどんが二銭だったが、うどんもたべずラムネの一本ものまず、二銭をもうけててくてく尾長の片河のわが家までかえていた。

夕刊を売つてためたお金が、つもりつもつて一〇円になった。母は古道具屋で一〇円の佛壇をかった。「正男やあんたが毎日毎日夕刊を売つてためたお金でこの佛壇をかつたのだよ」とよく母は私にいいきかせてくれたものだ。

六年生になつても夕刊うりはつづけたが、学校の成績がおちたとの先生の言葉で、夕刊よりより学校が大事ぢやアとの母の注意もあつて以後の夕刊うりをやめた。

当時母は近所の百姓しごとの手伝いで毎日おそく帰っていた。私は学校からかえると湯をわかし弟たちに行水してやつたりランブのホヤをふいたり、家を片付け掃いてきれいにしつて、つかの間も机にすわつたり、近所の友達の竹馬あそびをしたり水泳にいつたりなどのことは自分にはとてもできなかった。

大きくなつても泳ぐこともできず遊ぶこともしらぬ、まり投げひとつようしない子供になつていた。ただたんに、つれの遊ぶのをみている子供にすぎなかつた。

六年を卒業するとき優等だつた。受験準備の組

に入つて四則の応用問題を習つたが中学には受験しなかった。それは余り家が貧しくて親に負担をかけるのが、つらかつたから……。

当時父の仕事の関係上竹屋町に移りすんでいた。一五歳だった。就職第一番目は広島郵便局の給仕だった。日給一二銭で生活は未だに楽でなかつたので京橋町へ朝3時頃起きての新聞の配達をはじめた。

一年後郵便局の通信生養成所に入つたが、二次試験の技術試験におちて郵便局を去つた。(1919年、大正8年)

その頃本家の従兄が鉄道の機関庫に入つていたので、これに入りたと思つて機関庫に行つてみたところ視力が悪かつたので不採用になつた。やむなく広島電鉄に車掌として入社試験をうけた。運よく合格したので以後半年ぐらい電車の車掌となつた。当時御幸橋河畔で電鉄の納涼会場が出来たのを今もうつすらとおぼえている。

この秋頃だったと思う。国鉄の列車給仕の採用試験があるのを聞いて、直ちに受験した。合格したので下関にいったが即日帰広するように申され、家にかえつたが生れて始めて汽車の旅をしたので、つかれたのか三日ばかり床についてしまった。駅からよびだしがあつて行つたところ列車に乗務して車内を掃除する役を命ぜられた。

翌日から旅客列車にのつて車内を箒をもって清掃する備員となつた。銀ボタンのついた小倉服の服装である。だんだん馴れてくると、自分は駅夫待遇であること、その上級は雇員といつてラシャ服をきて金ボタンとなり、帽子も駅夫の銀色の動輪の帽章が、金の小さい動輪を木の葉みたいなも

ので囲つた帽章に変わつて、小荷物掛、貨物掛、出札掛、車掌等、皆雇員の資格をもっているもので、昇給もするし若い鉄道マンにとつて、あこがれのまゝであることがわかつた。それには雇員採用試験に合格せねばならんことも判つて猛勉強がはじまつた。一年たつてこの試験に受験し合格した時ほどうれしく思つたことはなかつた。小倉服からラシャ服、鍋の帽子からピンとはつた帽子、一人前の責任ある仕事をさせてもらうことなど、すべてが新しく希望にあふれた満足感にひたつてこおどろしたことも事実だろうと今は思われる。

雇員となつて車掌を希望した。紅顔の、少年が朝夕の旅客列車にのり長いプラットホームに立つて、白い手袋をはめ片腕を水平にあげて、ピリピリッと笛を吹いての発車合図、列車が動きだして、さつととびのつて又片腕を出して前後の車掌の安全確認合図、列車が駅長の前を通過する時の別れの合図——など年老いた現在でも当時を思い浮かべて、すぎし青春の思い出に胸のたかなるのをおぼえるのである。

高等小学校卒業後すぐに、東京神田駿河台の正則中学講義録をとつて独学していた自分は、何だか物足らなく感じ、いつの頃から中学教科書によつて勉強していた。鉄道省中央教習所に入學できれば任官も早いし試験も中学卒業程度とのことで、これだこれだと最終目標を掲げて、ふんどしをしめなおした。やがていくつの年だったか門司に第一回の試験をうけにいったがダメだった。

私が二五の時父は死んだ。父の四九日もこぬうちに、たよりにしていた弟が死んだ。弟は親戚の時計屋につとめていて店主の信頼をえており、私

にも世間のいろいろの問題についてよく話しあつていた相談相手であつた。

「もう東京へ行つて勉強するのはよしてくれ。

あとに残つた弟や妹の面倒をみてくれ。あんなだけしかたよるものはおらん」と母は哀願した。私も覚悟して「今後試験勉強はよそう」と堅く決意した。(1928年、昭和3年)

私の向学心はその後もやむべくもなく、早稲田の文学講義録を求めた。

(円本の) 日本文学全集 世界文学全集を求めた。

駅前の本屋、駅の売店、プラットホームで立売する新聞雑誌の中にも戦旗、プロレタリア短歌、詩集がめだつてふえてきた。

(注) 一九三〇年の頃広島県山口県は一括して門司鉄道局管内。

一九三一年(昭和6年)全協広島地協結成の頃国鉄の組織は松本武司が新原博ほか四名と、全協・日本交通運輸広島支部・国鉄分会結成(中国新聞5・4事件発表記事)とあります。

左翼運動に入る

そのころ広島駐在車掌詰所へ列車掃除夫としてはいつてきた岩村大次君と顔をあわすようになった。岩村大次君は私といつしよに乗務したときなど直ぐ車掌室にやつてきていろいろな話をしてくれ

た。

「それでも長いものにはまかれるということがあるではないか」と反論すると

「いんにゃあ そうぢやあない」と私をときふせるように話しつづけた。

我々車掌詰所は広島駅階上であって、車掌監督のもとに車掌として貨物列車乗務車掌、旅客列車乗務車掌、荷扱専門車掌それに貨物列車乗務の貨物荷扱手（ハッピ）をきて停車場で貨物の積みおろしを指示するもの、制動手（広島糸崎間の勾配線に貨物列車の制動をする人）、旅客列車乗務の掃除夫など三〇〇名ばかりいた。

これらの部下に業務上の注意の伝達機関として時折り乗務員会を車掌監督の指示のもとにひらいていた。

そのころ合理化とかいって配置転換の風説がたわっていた。誰がどこに転勤になるのだろうか、転勤になる対象人物は？ よく欠勤するもの、成績不良のもの、よく列車乗務にのりおくれるもの——だろうか等々、種々憶測され、ことに貨物荷扱手など戦々競々だった。我われ乗務員は駅勤務にくらべて乗務旅費（約20日）というものが支給されていたから駅勤務に転出されることは、それだけ収入減になる。まして貨物荷扱手など相当の年輩者で家庭持ちが多かったから尚更であった。

その時期に乗務員会がひらかれた。みなものはかたずをのんで車掌監督以下助役並びに内勤諸氏の方に一斉に視線をむけていた。誰か何かを発言するかと見守っていた。会場は重い空気にみたされた感じだった。

私がたつて、「今、広島車掌監督室の定員は何人

ですか」と問うた。みなは思いもせぬ者がだしぬ

けに急所をついた質問をしはじめたので異様の感にうたれた。定員は一般には知らされず所謂高等政策の極秘になっているものだったにちがいない。その定員を公表することによって、現在人員

からひげば増減はおのずと判明するし、まして配置転換、過剰人員の何名かはわかるからだ。

助役は突然の質問に当惑らしく、監督に近寄って、何かこそそと返事をすべきか、せざるべきか協議しているらしく、監督は「この事は協議して答えるかどうかきめます」と答えた。

結果は清水というものがあるいみでクローズアップされたのみで、みなにとつての心配のたねは解消されなかった。

乗務員会の外、弁論部というものがあつた。出演弁士は殆んど業務改善についての発言が多かつた。私は「生活をみつめて」と題して特異の演説をした。内容は貨物列車に乗務中、食事をすると、お茶、水の一滴も口にすることができず、のどにつまらせてつばで御飯をのみくださなければならぬということもある。また冬に貨物列車に乗務したときなど、タドンひとつの暖では足をあたためることはむずかしく、トンネルにはいったとき、ドアをあけて機関車がきだす煤煙で顔を暖めている状態であること、などをはなした。数学を教えてくれていた藤井助役が、「幹部にきらわれることはいわんぼうがええで」とたしなめてくれたことがあつた。

国鉄の同志たち

車掌所の同志として今は故人となつた新谷繁松、五日市の山本質、徳山の長沼富美雄、スポーツマンの山県貞一、新谷七蔵、小倉某、杉山國雄、伊川明、今はなき広島操車場車号掛松本武司などがいた。

松本武司君の連絡で旧一中のグラウンド付近で他の組織の同志たちとあい『無産者新聞』を手に入れ、前記の同志諸君の胸乱の中に入れていた。また全協のビラも手に入れていた。

いつだったか、岩村大次君と山県貞一君が東京の国会議事堂でビラをまいたとかで、二人とも鉄道を首になった。山県君のお母さんが当時ぐちをこぼしておられたのを、うつすらおぼえている。岩村君は広島にかえつて我々を指導していた。オルグとしてだらう。読書会をひらいたり職場の不平等、要求を記した機関紙を二度か三度発行したようにおぼえている。

新谷繁松君については当時アナキストとして、あまり相手にしなかつたように思う。だが『無新』はわたしていた。

その何年かまえメーデーのときだったか、新天地の広場で石炭箱の上のつて、なにかアジ演説をしていたのを見たことがあり、その後地検のものが人力車でのりこんできて、家宅捜査をしたとはなをしきいたことがある。こんなわけで今は年も三〇歳前後だったので、彼は先輩のつもりで

我々に接していた。

広島駅うらの客車を洗滌するあたりで、山本實、杉山、長沼、清水ほかだれだったか、腕をくみあっていたところを写真にとったことがある。この写真をだれかがもっていてパくられたとき、うごかぬ証拠を当局ににぎられたことがあった。

松本武司君が当時国鉄関係以外との連絡を主としていたらしく高天が原へも一、二度つれだつていったことがある。連絡のきれたときなど、つぎの連絡を指示してくれていた。松本武司君がわが家を訪れ、うどんを一杯たべにいったとき、彼は当時流行していた「酒は涙かためいきか 心のうさの すてどころ」の歌を小さい声で口ずさみながら自分にいきかせるように歌った。いちど松本は比治山に私をさそって、党員にスイセンするといった。そのとき「肉親の情をたちきることが一番むつかしいのちゃあ」と党員となる条件のきびしさを縷々説明した。

そのころ日本紙にガリ版ずりの美しい字の『赤旗』を手にしたことがある。

玖島三二君の国会か県会に立候補している（獄中立候補）のを知り、彼に投票したこともある。

やがて伊川明君は大島駅の貨物掛に、新谷繁松君は神代信号所の助役に栄転した。

いつの頃からか「3・15 うらみの日」の歌や「鬼怯者 去らば 去れ」の歌など口ずさむようになっていた。静岡の高等学校の学生が拷問にたえきれず、警察の窓からとびおりに死んだとかきいて「同志は倒れぬ」の歌を思い出した。

話は前後するが、山県貞市君が在職中だったと、思うが、ふたりして何のビラだったか忘れたが、

駅から大須賀の鉄道購買部、寮へかけてビラを貼った。山県君は鉄道の者に見られてはいかんと思ってたか「おい清水もうやめよう」「いや、まだまだ」と度胸がすわつてきて、目につきやすい場所を求めて貼つていった。山県君はいつのまにかにげてしまった。翌日昨晩貼つたと思うところを、それとなく歩いてみるときれいにはがしてあった。特高がはがしたのだろう。

おもいだす人々

松本武司君と牛田にいったことがある。立派な家だった。その家の父は町内会長をしているのかいった。その子息が、市川忍君という通信関係の同志だった。よく筋道のとつた話をしてくれた。事件後同志たちとともに応島保護観察所で市川君にあつたとき、むかしの理路整然とした話ではなくすこし変だなあと感じた。きけば岡山の方の刑務所にいたとか。まこと変になるのはむりもない。刑務所は人間を馬鹿にする所だからなあと感じた。

いつの年か、はやく暮れかかる秋の夕暮、ちかよらなければそれとわからぬ時刻、ひとりの同志がおとずれ「おい、この手錠をはずしてくれ」と耳もとでささやいた。みれば両手にガッチリと手錠がはまっているではないか。どきつとした。

「警察からにげてきたんだなあ……道具がないよ。どこかでやつてもらえよ」

「そうちゃのう」

つかまらんように、はずしてくれる同志のもとまで無事にたどりつくまで……彼のすがたが、みえなくなるまでのりつづけた。

私も二八になり、そのくれ妻をめとった。いつも枕もとには『第二無新』をおいてみていた。女房はいちべつしたか知らんが、みようとほしなかつた。だが身辺はいつもきれいにしていた。

三〇のとき、長女が生まれた。渡辺政之輔の妻、丹野セツ氏にあやかりたいと「セツ子」と命名したが、おいしいことに原爆でなくなつた。今生きておれば三七になっているはずだ。（この手記は一九六九年六月九日記）

検 挙

一九三二年（昭和7年）夏もおわりに近づいた日だった。呉線乗務から帰ったひるすぎ突然内勤助役から広島運輸事務所へゆくようにいわれた。いつてみると、見知らぬ背広姿が三人まぢかまえていた。

「大島駅の伊川明を知っているか。なにかもらつたか。なにかわたしたか」だった。はあはあー特高だなあと直感した。

質問はこれきりだった。「まあ、あんたのところに行こう」

前の食堂でカレーをくわせて私の家に直行した。私のうしろに二人ついて家にはいった。二人は本箱の中をいちいち探していた。特高は「きがえをひとつ」と要求して、母はおろおろしながら、

手拭、石鹸などフロシキにつつんで私にわたした。すぐ帰るからのうと、ひとこといって、またしていた自動車にのって二時間ばかりして柳井へいった。

警察

日暮前だった。どこだろう。ひとけのないガランとした室がいくつもある建物であった。あとでわかったことだが、柳井の廓の性病治療所であった。翌日から特高二人に私服一人の三人で、竹刀をもっておそいかかった。尻をなぐる。股をこすきたたく。最初のものでしたら、ほんとうにいっぺんにどぎもめぬかれる。ひと晩のうちに、股などはれあがつて紫色にかわってしまった。

軍隊では、ビンタなどはられて古参上等兵などから無理難題をいわれ、ずいぶんいじめられて今でもその野郎をみたら半殺しにしてやりたいとおもっている、糸崎の合宿所でよく貨物荷扱手の一年先輩の人がはなしていたのをおぼえている。

「この特高野郎いまに見ておれ。おれの天下になったら、いの一歩にかたきをとってやる」とおもった。くる日も、くる日も残虐な仕打ちはずつづいた。

しかし多勢に無勢、時の権力に抗しきれず白状した。他の同志に対してすまないとおもいながら……。今この文をかきながら涙は頬をつたって、とめどもなく原稿の上にながれおちる。

何日かたって柳井警察署に連行された。署内に

はいると、杉山國雄君のギョロツとした眼が私をみかえした。はつとした。杉山がきている——なら、山本質君も長沼富美雄君もよばれたのだろう。根こそぎやられたなァ——と思った。

丁度そのとき岩村大次君が、うしろ鉢巻をして歯をくいしばって眼で合図しつつ階段をおりてくるのに出会った。無言の再会だ。はァよく頑張っているなァ……と。

柳井署の階上には署長がかしの木剣をもつてまぢかまえ、他の野郎が竹刀をもつての訊問だ。

『赤旗』のガリ版をみただろうと、おそいかかった。このガリ版を手にするこゝろ自分が黨員たるの証拠である。また治安維持法にふれることになり、起訴するに充分な資料となるものであったらしい。

かしの木剣は針をさすようにいたかった。所かまわず木剣でつき、死の一步前までくるしめる。また新しい紫色から黒色に皮膚はかわつていった。歩くのに苦しい幾日かがつづいた。

何日かたって私ひとり平生の警察署にたらいまわした。いなかの署だけあって留置場がすくなかった。ある日特高の野郎がきて床の上に雨下駄を逆において、その上に正座させて訊問をはじめた。そのときの苦しさは、その下駄を特高の顔をめがけてなげてやりたい気持ちだった。

獄中

いつの日だったか拷問のつづいた警察から別れ

の日はきた。私服につきそわれて署をでた。久しぶりにみる柳井駅前の広場、いつもとかわらぬ広場だがみている自分にとっては今とらわれの身、空は晴れていても何だか暗い感じのまぶしい広場にみえた。駅では誰にも会いたくない気持ちだったが、幸い顔みしりの誰にも会わなかった。

大島駅停車中でも、みなれた風景だったが、感じる思いはちがつていた。岩国刑務所は横山拘留所だった。

独房は奥行き九尺ぐらいだろうか。入口五尺だろう。畳が一枚。窓の下のみすみにかめ——壺が一個、ふたがしてある。あけてみたら便器らしい。水がめ一個、茶碗、はし、井、ふとんなどがある独房だ。そこから山の中腹だろう木立のみどりが眼に入る。拷問からのがれて一寸安堵の思いだ。あぐらをかいて坐る。そなえつけのしょうもない本に目をとらす。時には入浴するのが唯一つの楽しみになっていた。浴場から帰るとき吉浦の駅手だった山田喜一君に偶然あった。山田君は私が呉線に乗務していたときに、よくしっていた。どうして左翼運動をしていたか今どうしても思いだせない。全然知らぬ。

そのご、ふたたび顔をあわすことはなかった。きけば執行猶予にならずカマったということである。

二三年まえか、山口県委員長になっているとか。あのおとなしい、どちらかといえば、無口のように思っていた若い二〇歳前後のことしか知らぬ自分にとっては、奇異に感じた。ご健在で奮闘をいのつてやまない。

それにしても長い拘留だ。更新の判決を幾度か

もらった。共産党事件は長くなるものと覚悟はしていたが、なんと長いことか。無為にすごす日が幾十日とつづいた。声帯もかれてきた。言葉を発する機会もなくなると自然声帯もかれてくることがわかった。

一度母と、子供をおぶった妻が面会にきた。

私はあみ笠をかぶり手錠をはめられたまま看守につきそわれて面会室にはいった。私の姿身なりをみて、母も妻も泣きふした。

釈放

年あけて上村進氏、布施辰治氏ら自由法曹団名入りの弁護する旨の書類をうけとって我々の公判に弁護してくれるものと知った。だが公判廷には出席しなかった。

公判廷で検事は懲役二年を求刑した。判決懲役二年、四年間の執行猶予であった。

釈放は伊川君といっしよだった。外はよい天気だ。まぶしいばかりの太陽がさんと照る日だった。伊川君はよく肥えて口ひげがのび、すこし青白くみえた。私もそうだったろう。

お互に元気でやろう。ご無事で……と西東に別れた。それきりあわんが、元気かしらん。由宇で八百屋をしているとかきいたが。

その後のあらまし

(一) 釈放後、あくる年（1934年昭9年）妻が死んだ。

(二) 裁判所の廷丁を一年ほどやった。

親類に看板屋をやっているものがあり、そこに見習にゆき半年ほどして自分でやることにした。はじめはへたで白島町の金魚屋の看板がフナだか金魚だかわからぬものになり、あべこべに金魚屋からなくさめられた。

外交がへたで、仕事かとぎれることもあり、何度かやめようと思ったこともあるが、これしか、やる仕事はないと思い、注文があったときタルキを買い、トタンを一枚でも一枚でも買い、ペンキもいるだけ買えばよいのだからとおもいなおして自主・独立とむちうって今日まできた。

(三) 芦溝橋事件、日支事変、太平洋戦争と戦局が拡大してくるころ、特高が足しげくやってくるようになった。

戦局が終末をつげる——空襲がはげしく、灯火管制が毎夜のようにつづくころ二女は疫痢で死んだ。

(四) 長女も、家屋とりこわしのあとの瓦はこびに学童、学級先生とともに働いているとき、原爆の一閃で国泰寺あたりでなくなった。

(五) 戦後の横暴な徴税にはなやんだ。一十万円があくる年は二〇万円もふっかけられたものだ。

そのころ若い同志たちによって、私の家を広島生活擁護同盟の本拠として発足した。

近くの商店をあつめて税金攻勢に対抗して組織し、学習会をひらき、元の兵器廠あとの税務署にデモをかけた。無茶な家財の差し押えには即刻出むいて税務署員に談判し分割払いによる納入で保証人となり、自動車につきこんでしまった家財をとりかえすなどしたものだ。

いまは強力な民主商工会となっている。

(六) 昭和三〇年（一九五五年）田中町自治会ができて会計庶務部長などやり「子供の幸福を守る会」の運動をしている。

一九六九年六月九日記

山田喜一氏より

四月一〇日付の御手紙拝見していました。何分にも選挙のさなかで返事がかけませんでした。

先ず質問からお答えいたします。吉浦駅にいたのは天野健一君です。天野君は山口県防府市出身で吉浦駅に勤めていました。現在防府市に在住し、戦後私と一緒に労働組合運動、党活動をやり、一九四九年日通をレッドパージになり、その後中小企業を転々としながら今も党籍をもっています。

私は最初から国鉄三田尻駅で出札をやっていました。

岩村大次君と連絡がつき、文化運動から全協国鉄分会、党はいり（1932年3月頃）その年八月に岩村、清水、伊川、山本君らと共に検挙投獄、岩國少年刑務所拘留場に伊川、天野、清水同志と共に一年三カ月ばかりいました。岩村君は本場拘留場に分離されました。私と岩村君が相被告で、伊川、天野、清水三君が一グループでした。公判は相前後しておこなわれ、一審判決は岩村六年、私が二年。天野君は二年半で一審「服罪」しています。伊川、清水君は執行猶予になったようです。私と岩村君は控訴で、広島控訴院では一審通りの判決で共に「服罪」しました。

伊川君は御承知の通り由宇町で荒物屋をやり現在由宇町議ですが党籍はありません。

岩村君とは今でもつきあっていますが、清水君には会っていません。当時広島キコの山本君という人がいました。この人の消息がよく判りません。

清水君のガリ版刷りの「想い出」なつかしく拝見しました。御連絡の節はよろしくお伝え下さい。いっせい地方選挙、共産党の躍進で留さんも大喜びでしょう。山口県もお陰様で県議一人の再選を辛うじて確保し、市議では八市一八人の全員当選をかちとりました。

これを機会に御昵懇に願います。

お互に、またたく間に年をとりました。しかし新しい民主主義革命の達成の日まで寧日ないのがお互様です。

御自愛の上、御健闘の程お祈りします。

一九七一年四月三〇日

呉の本屋のころ

田中 豊談

わたしは呉の川原石でぞだった。中村定男君とは鉄道線路をはさんで、あっちとこっちに家があった。私は明治四二年うまれだから中村君より、ひとつ年上だ。母親どうしが友だちなのだが、子供のわれわれは、鉄道線路ではなれているから、あそびなかまのグループはちがつっていた。

家はまだ左前になっていなかったから、上の学校にもゆこうとおもえば、ゆけたのだが、私は商売のほうがよいとおもって、友田書店の小僧になった。のちに私が運動に足をつつこんで、検挙されたりするものだから、父親は店の一軒でも持たしたら、すこしは責任をかんじて、おこないもあらたまるだろうと、友田書店の主人に相談して、支店を買いとって田中書店にしてくれた。

呉工廠の首切反対闘争のときから、古末憲一氏

といっしよに運動するようになって、いろいろとおしえられた。「けつして力以上に無理をしてはいけない」という人生訓といったものは、そのちも守って商売にも生かしてきた。

首切反対のピラを、われわれはいくつかのグループにわかれて、はってまわった。ある日、わたしはピラはりをおわって、何くわぬかおで店にいと、むこうの交番に人だかりがしている。のぞいてみると、ピラはりにいった別のグループの一同志がつかまっていた。

私はすぐに自転車にのって、古末氏のアジトにいった。このアジトは私だけしか、知らないことにしていた。つかまったときの用心だ。

古末氏は大阪の西成の診療所へ紹介状をかいてくれた。私は家へも店へもよらず、そのまま大阪へとんだ。しかし大阪ですぐつかまってしまった。

ある日外出してかえった私は診療所の玄関さきで、特高刑事とぶつかった。

私のにげるあとから、特高が「どろぼうだ」とおっかけてきた。私は「どろぼうじゃない。共産党だ」とどなりながら走った。しかし、踏切りのところで、電車がとおって通行どめになっているのでつかまってしまった。

警察ではさんざんなぐられた。しかし、呉から手配があったから、つかまえたものの、大阪の方では何を調らべるのかわかっていなかった。ただなぐるだけだ。

そのうち呉署の特高が、やってきた。特高の取り調べは、かたほうの奴がさんざんなぐって、かたほうの奴がやさしく「おためごかしに」、はやく白状したほうがよいじゃないかというのだ。呉署からきた奴がそのやわらかいほうの役だ。

「おまえ、このままだと、ころされるぞ。呉署につれてかえつてやるから、いいかげんに白状して調書をつくってしまえ」といった。

大阪から刑事につれられて汽車につたが、刑事は「古末のアジトはどこだ」ときいてきた。

「古末？古末というのは知らんが」と私がいうと、いままであいそのよかった刑事がすこしむくれたような顔をした。

広島駅で呉線にのりかえ呉駅につくころにはくらくなくなった。呉駅のてまえの川原石の私の家の、かどぐちには「田中氏」の提灯がだしてあるのがみえた。呉駅には両親がまっていた。しかしその足で、わが家にかえられるわけではない。

呉署での調らべでは、第一に古末氏のアジトをいえというのだ。テロ係の奴が、すごんで、やわらかい役の奴が「大阪であれくらい、やられたのに、うたわなんだから、ここでなんぼたたいてもいうわけはない」といって「はやく白状して、でたほうが、ええとおもうがの」などという。おどしたり、すかしたりというところだ。

そんなに何日もがんばりとうせるものではない。もう古末氏のアジトをかわつたとおもうころ「白状」した。特高はすぐとんでいったが「もぬけのからだ」とかえつてきた。「おまえ、もうにげたと思つたから白状したんだろう」とおこつた。

それから何度も特高につかまつた。父親の死んだ時も特高につかまつていた。留置場から刑事につれられて家にかえつた。父親の顔には白い布がかけてあつた。

家から出て留置場にもどるとき、刑事が、「どうだ、おもしろかったか」といった。「おもしろかったよ」

と私は刑事にいつてやった。わすれるものかとおもつた。

釈放されて家にかえると、親類の連中があつまつていた。親類代表という老人が「田中家の一族には、國をひつくりかえすというような、おおそれた人間がでたことはない。また、ひつくりかえせるものでもない。それに、おまえは本家の長男ではないか。弟や妹やそのほかのもの、めんどろをみなけりやならんのだぞ」というようなお説教だ。

私は家をとびだして「職業革命家」というものになってやる——くらいの氣でいた。

「わしを廃嫡ということにしてくれ。弟に家をつがすか、妹に養子をとつたらええ」といつたら、としりがおこりだして、

「家をでるんなら、このわしをころしてからにせえ」と、仏壇においてある白ざやの短刀をぬいて、畳のうえにつきさすというさわぎになった。これじゃ、家をでるわけにもゆかなかつた。

私の田中書店（中通りにあつた）にも特高が、見張りをつけるようになった。むかいの家の、二階のおもての間に、特高がはりこみをしてた。だれか同志が本屋に連絡でもとりにこないかとアミをはつてた。私が店からでかけるといつてくるのだ。

店は雑誌など、たくさんつみあげて、客の出入りは多かつた。

水兵だつた阪口喜一郎君は客のようになかつた。で、ぶらりといつてきて、店の雑誌など立ちよみしてから、私にはなしかけてきた。私は阪口君を知らない。店ではなにもなせないから、しめ

しあわせてそとであつた。党へ連絡をつけてくれ、というのだ。

阪口君はからだの大きい男で、もののいいかたも、ぶつきらばうだ。私は「刑事ではないか」とおもつた。「党へレンラクをとつてくれ」などといつて、オルグをつりだしにかかつているのではないか？私がまよっているの、阪口君は何度もきた。妻君の野村梅子さんもきた。

私はオルグの寺尾一幹君に相談してみた。「とにかく、いちどあつてみよう」と寺尾君がいうので、ある喫茶店で、私がおもてにビケになつて、阪口君をオルグの寺尾君にあわせた。

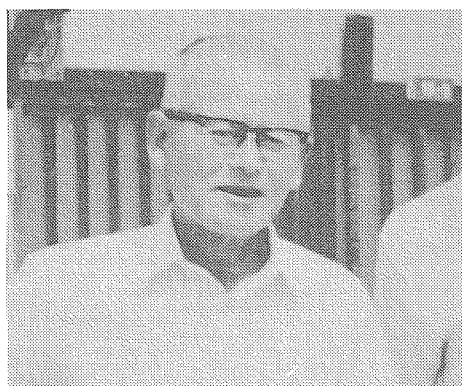
あとで寺尾君が「かれは大丈夫だ」というので、そのあとの連絡はかれらにまかせた。

工廠の川窪鉄之助君や、重田安一君も、古末君や岨常次郎君に、レンラクをつけた。

川窪君はエリートという人だった。重田君のおとうさんも工廠の役付き職工だったが、工廠をやめてからは孫をつれて漫画の本などかいたものだ。

「満州事変」がすすんでくると、本屋の商売もだんだん左前になってきた。10・30事件のあと再建のためにきた党のオルグ関谷源一君には、カンパといつてもろくにできないようになっていた。特高の圧力もきびしい。紙の統制や本の販売統制もきつくなつてきた。とうとう本屋をやめることにした。

中村定男君のおかさんに弁当をつくつてもらつて、中村君とふたりで土方仕事にいつたりした。それからつてをもとめて、中國にわたることになつた。（了）



『唸るクレーン』のころ

重田 安一 談

戦後まもなく広島市の三菱造船の造機部にはいり、土肥浅市君などとおなじ職場ではたらいっていた。土肥君はもうなくなっているがあのころ副組合長をしていた。村上経行君、土肥君と私の三人で「細胞」をつくり、それから黨員もふえていった。野村秀雄氏も演説にきてくれた。黨員が百名くらいになったころ、レッドパージでみんなやられた。そのパージ反対闘争以来まだこうして社宅にすわっている。家賃は一五円だ。会社はうけとらないから、供托している。

「火焰ピンをつくっているだろう」というので、私と息子は検挙され、家宅捜査で『球根栽培法』などを押収された。

私はすぐ出てきたが、むすこは釈放されず、私はむすこの差しいれや公判闘争のしごとにおわれたものだ。

戦前のことだが、広島消費組合のものと、消費組合をやめていた豊田茂とのあいだでハカリを借したとか、まだもどさんとかいってゴタゴタがあり、消費組合事務所にあつまっていた私たちは全部検束された。神崎宇市君だけうまく逃げて、私の家にとびこんだ。そのとき、東京の消費組合からきた津田和治君と私だけ、ナワをかけてしばらくした。それをみていたむすこが「おとうちゃんが、しばらくあ」とワアワアなきだした。そのむすこが、さっきいったむすこだ。

革命前のロシアだったか、親、子、孫三代の活動家というのがいたというが、なかなかそこまでゆかないものだ。

呉工廠細胞機関紙『唸るクレーン』は、私が工廠の砲煩部に旋盤工ではたらいっていたころ出たものだ。寺尾一幹君のほうでつくって、こっちにま

わしてくれた。ガリ版をきつたのは林寿恵子さんだろう。非常にきれいな字だった。あのころ呉では寺尾君ひとりで活動していて手がたりないから、寺尾君がよびよせたのだ。領事（外交官）の娘だとかいっている。

『唸るクレーン』の投書を職場からあつめるには、私は「顔がきいている」からあつめやすかった。海工会の役員に二三七票で当選していたのだ。おやじも工廠の役付きだったが、例の工廠の大量解雇のときに首になった。

「こんど新聞をだそうと思うんじやが、なんかかいてくれんかいの。職場の不平不満なんか、そのほかなんでもええ」と投書をあつめてまわった。

（一九七一年一月二日聞き書き）

田中書店の田中豊さんが岨常次郎君をつれてきた。そのとき、岨君が青年同盟にはいつてくれと
いって、私は「はいります」とこたえ、岨君が「あ
りがとうございます」といったのをおぼえている。
あるとき岨君が寺尾一幹君をつれてきて、「こん
どから、この人が呉のほうをやることになったか
ら」とひきあわせた。それから寺尾君と連絡を
とるようになった。

寺尾君と工廠へビラまきにいったことがある。
寺尾君は工廠の塀のところで「ここからさきは君
がはいって、ビラをまいてくれ」というので、私
はビラのたばを塀の上におき、塀をのりこえて中
にはいり、工場のなかへビラをまいた。

私の職場は砲煩部。そこで砲身を旋盤で削って
いた。もうひとり同志がいたが名前はおもいだせ
ない。(了)

〔一九八〇年一月六日の聞き書き〕

『聳ゆるマスト』の人々

平原 甚松
稲垣 宏

ともかく、それはつぎの詩である。

「聳ゆるマスト」

菅原克己

（「ぼくらの年代」から）

軍艦山城の乗組員が
艦内細胞をつくる

その機関紙は『聳ゆるマスト』

ぼくは その記事を 切った

場所は 高円寺

ぼくは 手製の 謄写機で

それを 刷った

絶対に 音のしない 自慢の機械

ぼくは 手伝いの娘に 威張ったも

のだ

「ごらん

軍艦の 細胞だ
日本で はじめてだ
そして この ガリ版は
カンパスの 枠で
この ぼくが 作ったんだ」と

（大平出版社発行 『日本反戦詩集』
より）

私は木村莊重氏にといあわせてみ
た。

二、木村莊重氏の手紙

おはなしにある横須賀の『聳ゆる

マスト』については、よくおぼえて
いないが、昭和七年八月ごろ、平原
君が広島から上京し、党命で横須賀
のオルグにおくりだされていたので
彼の手で一―二号くらいは『聳ゆる
マスト』の横須賀版がだされている
はずです。三号位でているかもしれ
ません。君がみたのはそのうちのも
のでしょう。詩の作者その他につい
ては心当りはありません。
平原君ならおもいだすかもしれません。

そこで、平原甚松君に「そびえる
マスト」という詩の要点をかいて、
問いあわせてみた。私はまだその大

一九六九年八月、同志たちの手記
をあつめたところ、本屋の店さき
で『日本反戦詩集』というのをみか
けた。「あとがき」には「厳密なみ
で戦前の日本には反戦詩というべき
ものはない」と編者のひとりがかい
ている。めくっていると「聳ゆるマ
スト」という詩がめにとまった。す
こしひつかかるところがあった。『聳
ゆるマスト』は横須賀でも発行され
たのだろうか。

平出版社発行の本をかっていなかった。

三、平原甚松氏からの手紙

冠省

一〇月一八日づけのお手紙拝讀いたしました。お名前はうけたまわったことがあります、ごおも思ひ出せません。失礼ですがおゆるしください。

さて、おたずねの名称は『聳ゆるマスト』です。「そびえるマスト」ではない。現在の当用漢字にはないが、漢字で「聳ゆる」です。題字の下絵のカットは戦艦のやぐらマスト（檣マスト）のシルエツトで、そのため、「マスト」の三字は黒地に白ぬきの宗朝体ゴシックでした。「聳ゆる」の字は天空にあたる部分に位置するので黒字でややくずした楷書でした。

この名称（平原案）は軍艦細胞の編集会議に提案し採択されたもので、その他にも「潜望鏡」（阪口案）「水兵」「戦艦」など、いろいろ提案されたが、呉海軍工廠の全協機関紙（注、工廠党細胞発行の工場新聞）『唸るクレール』とのこともあり結

局『聳ゆるマスト』に決定されたわけでした。

軍事部オルグであり、水兵出身で事情にあかるいため私が中心になって編集会議、原稿あつめ、印刷、配布などやりました。印刷はシンパの留守宅など転々いたし、けつしてアジトではないことにしていました。旬刊でした。編集会議のこと以外は、地区オルグといえども知っておらず、どこでどんなことをして発行しているか、私以外のだれも知っておりません。党軍事部は特殊活動であつたため、厳格にこれを守っておりました。

菅原という人の詩が真実を表現しているかどうか、明確に断じかねますが、水兵としての私の体験と知識から、当時呉軍港以外のところで『聳ゆるマスト』が発行された事実はないと信じています。

横須賀軍港へオルグとして私が派遣され、まもなく軍細胞は結成しましたが、細胞機関紙は発行するまでにいたつていずのまま、熱海事件で私が検挙されました。検挙された後、私の補佐役をしていた高橋という同志（検挙をまぬがれたが、約一年頃後検挙された模様）がいて、私のあとをついで組織づくりをした様子で、この同志が発行したのかもしれない。

ません。しかしこの人は社会運動のキャリアがあつたので、機関紙の理論をしゃべっている苦なので、呉軍細胞機関紙と同一名称のものを横須賀軍細胞に採用することは常識的に考えられません。

戦艦「山城」（横須賀籍）の乗組員が東京の高円寺の下宿先で娘に手製の謄写機を自慢しながら、細胞機関紙を刷つたという詩は、現実の事柄をふまえて書いたものではないと思います。

詩は詩であり史実ではないので、あまり気にしないほうが賢明でしょうが、御疑問がおありのようですので、私なりの見解をのべておきましょう。

(一) この詩の作者菅原という人は海軍の状況を知っておらない人だとおもいます。

(二) 艦艇からの上陸者は普通夕食後上陸、外泊し、翌朝食までにはかならず帰艦しなければなりません。戦艦「山城」は横須賀所属であるので、これらの乗組員は当然横須賀軍港で上陸するでしょう。この駅から湘南電鉄で高円寺の下宿にゆき、そこでガリ切り、プリントをし、翌朝食までに帰艦することは当時の上陸許可時間では不可能でしょう。

(三) 軍細胞は警戒心を強く教育してあつたので、下宿先の娘に手製の謄写機を自慢するなどの無防備な党員はいないはずだ。

以上要点をつかんでお答えをしておきましょう。これ以外に世に知られていないことも多々あります。語れば現存する人が迷惑することもあり、検察当局とのこともあって、胸をひらいて語る時期でもないのです、それはそれでまた語る日が来るでしょう。その時また。

私、本年五月末役場を退職いたしました。現在のんびりやっています。では粗文をもつて御返事まで草々。

一〇月二二日

平原 甚松

党中央委の担当者が史実調査をやるべきなのですが、仲々手を出さないですね。のろい話です。

〔注・一〕 水兵は、陸軍の兵士とちがつて、演習後の上陸日にはかなりの時間のゆとりがあつたようです。あとにある稲垣元兵曹、小倉元水兵の聞き書きをみてください。

〔注・二〕 「下宿さきの娘」と平原氏はうけとっているようだが、この女の人は党関係のプリントをやっていた人です。このことは、菅原克

己氏の別の詩からもうかがえます。いつだったか『赤旗』に彼女の手記か談話と写真がでていました。

四、前田文二氏の手紙

十一月十六日づけの広島民報に、原田弁護士事務所から、五人の水兵の判決文を中心として

『呉軍港における太平洋戦争前の海軍工廠の労働者と 水兵の革命運動』

のパンフレットを作って十一月二二日の総評弁護団第一三回全国総会の参加者、呉市民をはじめ広範な人々に読んでもらおうと三、〇〇〇部作成しているところ。三、四年かかって、まとめた記事にはあるが、今までさっぱりうわさはきかなかったので一寸おどろいた。一部一〇〇円くらいで頒布するらしいので二〇部申しこんでいた。

送ってきたらお送りします。

一九六九・一一・一七

前田文二

十一月二十九日広島へいったので、前田氏からそのパンフレットをもらった。

判決文は裁判所特有の文章、それも戦前のものだから、書きぬいて整理してみないと、あたまにはいりにくい。

何回もよんでいるうちに、この裁判官たちを、逆に人民の名によって、さばかねばならないと思った。

以下、五人の水兵たちの動きをおうことにする。

五、五人の水兵の判決書の書き抜き

○判決書の日づけ

一九三三年（昭和8年）四月二五日

○五人に下された判決

小倉正弘。予備役海軍二等機関兵

稲垣 宏。呉海兵団海軍一等看護

兵曹 懲役六年

佐藤 彊。呉海兵団海軍一等水兵

同 四年

北田健二。特務艦朝日海軍二等機

関兵 同 四年

同 三年

宮内謙吉。呉海兵団海軍三等看護

兵曹

同 三年

○押収された文書

『聳ゆるマスト』第5号（15部）

第6号（45部）

『赤旗』第93号付録（2部）

第95号（45部）

第96号付録（2部）

第97号（1部）

第98号（2部）

同 付録（1部）

第100号（10部）

特別号（2部）

号外（37部）

『兵士の友』創刊号（2部）

『反戦情報』創刊号（6部）

其他『文学新聞』『われらの科学』

『大衆の友』

檄文「共産党員に天皇制裁判官の

死刑判決迫る。全勤労者大衆は大

衆闘争で判決を阻止せよ」

ピラ「銀行ギャング事件に関して

革命的労働者農民に声明す」

リーフレット「ストライキを如何

に準備し如何に戦うべきか」

○水兵たちの経歴

小倉正弘 予備役海軍二等機関兵

一九二二年（明治45年）二月一

五日、台湾総督府巡查小倉正

の四男として台北に生れる。

同 三年

淡水工業学校を中途退学

一九三〇年（昭和5年）一月、

呉海兵団に入る。その後軍艦

「那珂」「白鷹」にのる

一九三二年（昭和7年）一月ご

ろ、海軍一等機関兵木村莊重

としりあう。「白鷹」に乗組中、

木村莊重などと連絡をとって

活動。

稲垣宏 呉海兵団海軍一等看護兵

曹

一九〇四年（明治37年）生まれ。

高小卒業後、三重県立師範学

校給仕

一九二一年（大正10年）志願兵

として海軍に入る。普通科及

高等科看護術をおさめて一等

看護兵曹となる。

一九二六年（大正15年）海軍三

等看護兵山本俊次と知りあ

い、左翼文献をよみはじめる。

後木村莊重としりあう

一九三一年（昭和6年）末 左

翼文献をもっているので検察

官の取り調べを受ける

佐藤彊、呉海兵団海軍一等兵

一九二二年（明治45年）二月二

四日生。高小卒業後、名古屋

中央電話局技手見習となる

一九二七年（昭和2年）六月、

志願兵として呉海兵団に入

る。普通科電信技術、練習生の課程をおさめ、駆逐艦磯波及葵のりくみをへて、海兵団に勤務

一九三一年（昭和6年）ごろよりプロレタリア文学をよむ。

海軍二等主計兵山下達吉をしり、共産主義を信じるようになる。

〔注〕 山下達吉、神戸三菱造船職工学校鑄造科生徒より志願兵として呉海兵団にはいる。

北田建二 特務艦朝日海軍二等機関兵

一九三〇年（明治45年）四月二十九日機械工北田伊和の二男として生まれる。神戸三菱造船職工学校を卒業し神戸三菱造船所内燃機科職工となる
一九三〇年（昭和5年）六月、志願兵として呉海兵団にはいる。軍艦「矢矧」海兵団をへて特務艦「朝日」のりくみとなる

一九三二年（昭和7年）一月ごろ、阪口喜一郎（予備役海軍二等機関兵曹）としりあい共産主義に共鳴するようになる

〔注〕 ここで軍法会議の裁判官は北田機関兵について注目すべきことをかいている。北田は早くから労働を体験し、現資本主義にあきたらず、その欠陥は資本家の横暴なる搾取に原因があるとして左翼思想をいだいていた。

宮内謙吉 呉海兵団三等看護兵曹

一九〇一年（明治34年）一〇月

二八日生。山口県萩中学卒業

一九二三年（大正12年）志願兵として呉海兵団に入る

一九三〇年（昭和5年）十一月

三等看護兵曹となる

かねてから文芸を愛好し、昭和三年ごろより左翼小説をよんでいた。そのうち木村莊重としりあい専ら共産主義の文献をあつめてよんでいた

一九三一年（昭和6年）六月末

検察官の取り調べを受ける。

〇水兵たちのうごき（判決書にかかれたもの）

（一） 予備役になったばかりの一等機関兵木村莊重は、すでに前から予備役になっている二等機関兵曹の阪口喜一郎から、共産党中国地方オルグの林を紹介された。（一九三

二年）昭和七年六月下旬。オルグ林は「坂口君はいまひとりで海軍方面の活動をしているので、いっしょに活動してほしい」といった。木村は広島にすんで活動することになり、七月上旬入党した。

そのころ阪口喜一郎が上京することになっていたので、林の指令で木村は阪口から『聳ゆるマスト』の編集発行をひきつぐことになった。

その年八月中旬オルグ林は上京したままかえらず、一〇月初旬錦織彦七が、オルグとしてきた。そして共産党中国地方委員会に軍事部をおくことになり、木村莊重が責任者になった。

（二） 山下達吉海軍二等主計兵は共産主義思想をいだいているというので、兵役を免除されて予備役になっていたが、下宿さがわからないうので木村莊重やオルグはしきりに彼のゆくえを探した。

（三） 小倉正弘は軍艦白鷹のりくみのころ木村莊重から『銷夏快適のユーモア全集』という左翼文書をうけとつたが、そののちも『聳ゆるマスト』『文学新聞』などを木村からうけとつて特務艦「朝日」で北田機関兵に、軍艦「白鷹」で橋詰義國一等水兵にわたした。（昭和

七年九月一八日ごろ）
木村莊重からの文書はカフェーの女給をしていた佐藤静江を通じてうけとつていた。

そのころ軍艦「白鷹」で士官ともが夜中に酒をのんでさわぐの、ある水兵が「しずかにしてくれ」といったところ、あべこべに「注意をうけた」。

〔注〕 暴力飯場で小頭たちが酒をのんでさわいでいる時、平の土方が「やかましい」といったら、どんなことになるか。国家権力をカサにきた士官どもは飯場の小頭よりもタチがわるいのはいうまでもない。なにが「注意をうけた」だ。

小倉正弘はこのことを「士官の兵員にたいする圧迫だ」という原稿にして木村莊重にわたし、これを『聳ゆるマスト』六号にのせた。

（四） 小倉機関兵は木村莊重、錦織彦七と、つぎのようなことも協議した。

ちかくおこなわれる海軍小演習中に上官に不当な処置があったときは、これをとらえて抗議運動をおこすこと。

現役満期を強制的に延長させようとすることに反対の氣勢をアジ

ること。

(五) そのころ兵役満期前になると水兵たちはひごろのうらみをはらすために隊をくんで上官に暴行した。これを「バレ」といった。このさい「満期者に職を与えよ」「満期強制延期反対」のスローガンのもとに統制をとって闘争することを小倉、木村、錦織は協議した。

(六) 一月三日木村莊重、小倉正弘などが会合して、おりから入港中の艦隊の乗組員に同志の獲得につとめることを協議した。

また、ちかく小倉機関兵は満期になるので佐藤水兵が文書の配布の一部をうけもつことになった。

同日木村莊重のすすめで小倉正弘は入党。

〔注〕 以上が判決書にかいてある小倉機関兵の行動である。この文章でも人間として当然の行動だが小倉機関兵は六年の刑をうけた。

(七) 木村莊重は日本の農村青年の海軍に志願兵として入る数の増減と景気の変動とを比較して統計をつくることを考え、「海軍志願兵の入隊前の職業別、学歴別調査」をなすべく広範圏にわたって行うことを、宮内謙吉三等看護兵曹を通じて、

稲垣宏一等看護兵曹にたのんだ。

稲垣兵曹は海軍部内の左翼思想をもっているものをみつけて木村莊重に知らせることを約束した。

(八) 宮内謙吉兵曹は広島市の木村莊重の家にいったとき原稿用紙に小説をかきうつすことをたのまれた。これはオルグ林が党中央への報告に暗号として使うためのものであるが、その小説の文字に印をつけて暗号とするもので宮内はこれをかきうつして渡した。

以上、判決文のおもなものをかきぬいてみた。

六、『聳えるマスト』の詩の

作者からの手紙

『聳えるマスト』の詩がのついている『日本反戦詩集』の出版社にこの詩のことについて問い合わせたところ、年をこして一九七〇年のはじめ、詩の作者から手紙がきた。それはおもいがけないような——しかしなかば期待していたような手紙だった。

今日出版社の人からお手紙をお借

りして拝読いたしました。あの詩は「ぼくらの年代から」という九つの連詩の中の第三番目にあたるものです。当時、ぼくは『兵士の友』という共産党軍事部の新聞のプリンターをしておりました。あれはたぶん昭和八年の九月ごろだったとおもいます。『兵士の友』のガリ版をきりながら、軍艦「山城」の細胞新聞『聳えるマスト』のことをしり、たいへん感動した。そのことを書いた詩です。よくごらんになれば、おわかりになると思いますが、

軍艦「山城」の乗組員が
艦内細胞をつくる

その機関紙は『聳えるマスト』というのが導入部の説明で、二字さげにして、次の二連目がぼくのことになるのですが、

ぼくはその記事、を切った
場所が高円寺。

つまり「聳えるマスト」をつくったのではなく、その記事（『聳えるマスト』がでたという記事）を『兵士の友』のプリンターであるぼくが切ったということです。しかし『兵士の友』のことなどどこにも書いていないので、ご不審をもたれるのももっともな事で恐縮しています。

ぼくはその後、いわゆる「共産党スパイリンチ事件」なるものにぶつ

かり、そのあとから『赤旗』のプリンターになり『赤旗』終刊号まで運命をともしにするのですが、かつての軍事部長であった小畑達夫という男がスパイで、その男が査問委員会で変死したという事件はぼくの『青春』をゆるがすような大きな出来事でした。それが「ぼくらの年代から」という連詩の主題になったわけです。この三番目の「そびえるマスト」が反戦詩集にくみいれられることは知らなかったのですが、おそらく岡本潤さんが推薦なさったのだろうと思われまふ。この詩集はぼくの第二詩集『日の底』に入れてあります。この詩は戦後回想の形式でかいたものですから「敗戦の部」に入ったのでしょう。

呉の原田さんが出されたという『水兵たちの軍法会議の判決記録』は手に入らないものでしょうか。ぜひ読みたいものと思っています。それから遠い昔のことで記録がいかにも知れませんが、その水兵さんの一人は河田という人ではないでしょうか。もしその人でしたら、その人の兄さんとは昭和九年ごろ東京の消費組合運動でしりあっていたものですか、なつかしい気がするのです。ボウバクたる年月をこえて、いまだに（つい昨年のことのように）若

い時代のことが思いだされてなりません。

昭和四五年一月二〇日菅原 克巳

〔注〕「河田水兵」は横須賀軍港で戦艦「山城」の中で逮捕された。戦艦「長門」で吉原水兵、戦艦「榛名」で西氏水兵も同時に逮捕された。機関紙はだしていない。

詩集「日の底」より

菅原克巳氏の『聳ゆるマスト』がのっている『日の底』は一九五八年の発行なので、あるかどうか、といあわせたら、すぐおくてくれた。その詩集をみると――

「ぼくらの年代から」というところに、九つの詩がある。

第一の詩。党へもぐりこんでいたスパイが死んでいるという新聞記事。「そいつの部下がぼくだった……摘発されたスパイが／死んでいた／いまここで／ぼくが待っている男」

第三の詩。「聳ゆるマスト」

またガリ版ずりをした娘のことは「練馬南一丁目——戦前の赤旗を見て」という詩にでている。

見給え

ここに

一七三号から

終刊号までの

「赤旗」がある

これは僕と、ちい公と呼ぶ娘がプリントしたものだ。

プリント ビューローは

練馬南一丁目の わが家

そして、いつさいの

僕の、光の、存在理由は

ここにあるのだ。

——おう

庭のプラタナス、ポプラ

棕櫚の木、八重桜よ

夏の燃えたつ空

古びたオルガンよ

そこで

昼、僕らは鉄筆の音をたて

夜、せつせと刷った、

笑ったり、怒ったりして。

（いまも よみがえる インクの匂い

機織りにも似た手製の騰写機の音

この娘のおもかけをつたえる詩がおわりの『日の底』にある。『散文詩』というのだろう。

それは古い機織りのような音だった。おれと、一人の娘が騰写版で新聞を刷っていた。娘は色が黒く、眼と眼の間がはなれていて、一寸

小狸のようなユーモラスな顔をしていた。おれたちは刷りながら、いろいろなことを話した。娘は遠い南の島の生まれだといった。バナナとかパイイヤの話。夜空にある爆竹の音。……と、そこへ突然あの男があらわれた。あから顔の、ひげそりあとの濃い男。なぜ彼が来たのか、わからなかったし、どうして仕事場を知っているのか不思議だった……

この男がスパイ小畑達夫だろう。

「あから顔で小ぶとりの手が小さく白い男。東北なまりがある」と別の詩にかいてある。

七、平原甚松氏の手紙

拝啓 再三にわたって文書をちやうだいして、まことに恐縮、深謝の外ありません。とくに菅原さんからの資料まことによいものを、もらって有難うございました。

私が昭和七年九月上旬上京して逢った党軍事部長は長谷川茂（捕えられ、あとで本名はわかった）でした。スパイ小畑達夫はこのあとの軍事部長でしょうか。即ち七

年一〇月三〇日事件（熱海事件）以後のことでしょうか。私達が連坐した、いわゆる熱海事件もスパイが喰いこんでいたため比較的重要ポストにいた連中がつかまり、党が全般的な打撃を受けたわけでした。

「マスト」に関する資料に失礼ながら筆を入れておきましたが加筆の通り修正してほしいです。

阪口喜一郎君は獄死し家族も不明で資料がすくないため粗漏にあつかわれがちですが、大切な役割を果たした同志ですから、まことに済まないが心しておいて下さい。お願い申します。

一九七〇年一月三〇日 平原甚松

松本清張『昭和史発掘』に、10・30事件のときの党の軍事部長は長谷川茂、組織部長は紺野与次郎とある。同書によれば平原氏たちが検挙されたのは熱海温泉の伊藤別荘でひらかれた全国代表者会議。スパイMの連絡ですでに特高が一〇月二十六日ごろから隣の旅館にはりこんでいた。党中央では、あぶないとおもい会議の中止をきめたが、それを知らずにきた十一人の代表者が、一〇月三十日の夜明けに警官隊にふみこまれて逮捕されたとある。党中央部のもの

もこの日東京、鎌倉でつかまつた。スパイMからすべてつつめけに監視庁特高課にしらされていた。

八、平原甚松氏のはなし

一九七〇年三月一五日広島市の「解放運動無名衛士の碑」のまえで、平原甚松氏、小倉正弘氏（現石飛）にあった。一九三八年にあったきりだから、三二年ぶりである。

ついこのあいだ町役場を退職したという平原氏は色も白く髪もふさふさしている。土建屋をやっている小倉氏は日にやけて、まっくらだ。

無名戦士の合祀祭のあと近くの広島屋にあつたが、自動車を運転してきた小倉氏はまもなく光へ車でかえっていった。小倉氏とはまた会うこととして、平原氏から、あのころのことをきく。沢山の人があつまつていたので、ききもしもあるとおもう。

『聳ゆるマスト』について

呉工廠の工場新聞（党細胞発行）の『唸るクレーン』は一九三一年（昭和6年）ごろから出ていたとおもう。

われわれ水兵の新聞も、あの『唸るクレーン』にまけないような、「詩的な」なまえにしようと『聳ゆるマスト』にきまつたものだ。

『唸るクレーン』のガリ版はだれがきつたものか、わからない。寺尾一幹君はガリをきれいな筈だし、それに呉地区全体を指導しなければならぬから、いそがしい。

『聳ゆるマスト』は第一号から私ガリを切った。つかまつてから特高が「へたくそな、ガリ版じゃのう」といったほど、私の字は、まづかった。木村君のたのみで古田君が原稿をきつたというのは、五号から六号のことではないかとおもう。

阪口喜一郎君のこと

彼はひどく用心ぶかい男で、なるべくおもてにでて活動するようなことはひかえていた。本来なら彼は私より先輩なのだから、自分がさきになつて動くのだが私をひっぱりだして先頭にたてて動かすようにした。

阪口君と私は、ほとんどおなじころ上京したが、そのとき彼は木村莊重君にあとをひきついだものだ。

私が広島島の拘留所にはいったとき、むかいの房にカスリの着物をきた古末君がおり、また近くの房に阪

口君がいた。阪口君は房のとびらをガンガンたたいてあばれていた。私などでも、やかましいと思つたくらいだ。

そんなことから拘留所の看守どもの暴行をうけて、ついに殺されたものと思う。

大井という看守長がいて、学校出だというがなまいきな奴で、ほかの同志もこの大井に暴行をうけたものが多いが、私の房にもきて「おまえも阪口のように殺してしまつてもいいのだぞ」と、おどし文句をいったことがある。

阪口君は家族もないらしいが、下宿さきの娘と結婚したいと思うが、どうだろうかと私に相談したことがある。私は、運動にプラスになると思うなら結婚したらよいし、プラスにならないなら結婚しないがよろうとこたえたことがある。

呉の町に田中という本屋があつて、それが組織に連絡をつけてくれる場所になつていた。

私が上京して党の軍事部長の長谷川茂にあつてみると呉の組織状況もじつによく知つていた。陸軍の航空隊に組織があることも話してくれた。呉の様子はオルグから中央に報告がいつていたのだらうと思う。

私は熱海事件で検挙されたとき

は、たいして調べられなかったが、そのあと呉の特高の調べになり、口をわらないものだから、ひどくやられた。いまでも傷あとがのこっている。

昔のおもいでをかけと、せめられるが年をとると涙もろくなつてね、むかしのことがかきにくい。自慢ばなしのようになるしね。それから入獄中は、救援会の天津せい君や岡本菊次郎君などの人たちに、ほんとに世話になつたなあ。

呉海軍の思い出

平原 甚松

昭和四六年（1971年）六月二
七日

なにさま宴席でガヤガヤやってい
たので話の内容にくだしいが、酒の座
でもふしぎはないことだし、酒の座
の話だから、ほっておいても差し支
えはないようなものだが、考えてみ
ると、そんなわけにもゆかないので
事実を正確に述べておく。そこで合
祀祭の折（昭和45年3月15日）お話し
たこと、「プリント綴、九」を次のよ
うに改訂し差し加え願えませんか。

一、このあらまし

一九三一年（昭和6年）八月上旬、
阪口、西川両兵曹、平原、山口、若
林、各水兵らが治安維持法違反被疑
事件で検挙され、阪口兵曹のみが呉
軍法会議の留置場に残されたまま、
その他の者はみな憲兵隊や軍法会議

から八月中旬に呉海軍刑務所に収監
され、法務官の本格的な取調べをう
けることになった。これが呉海軍社
会科学研究会事件で、この社研グ
ループが母体となつてのちに呉海軍
水兵対策委員会が生まれ、党に連絡を
つけ組織化され、対策委は発展的に
解消し、呉地区軍事部がうぶごえを
あげ、ユニークな党活動を本格的に
展開したのである。

二、軍事部が生まれるまで

この海軍社研事件で阪口、西川、
平原の三人はこの年一〇年下旬ごろ
相前後して赤化思想信奉者（海軍で
は当時こんなにいっていた）という
レッテルをはりつけられ、兵役の免
除をうけ社会にはおりだされた。そ
の直後この三人で呉海軍水兵対策委
員会が結成され呉軍港内の海兵の結

集再建を図る一方、他方では自主的
に党との結びつきを求めて阪口を中
心に積極的のうごきはじめた。

この対策委をつくりあげるのには
討議に討議をかさね、じつくり合議
をはかった。三人とも組織づくりは
初めてなのでまごついた。労働組合
の闘争組織、陸戦隊操法、陸上演習
の経験、クラウゼヴィッツの戦争論
などを参考に、海軍組織の現状に対
応できるような随分考え真剣に智慧の
限りをしぼった。その結果大要つぎ
のように方針がきめられた。

- (一) 党外組織であること。
- (二) 細胞結成までの暫定的な組織であること。
- (三) 各艦艇、陸上部隊内に外郭組織をつくること。
- (四) 艦隊、予備、陸上別に組織を結成すること。
- (五) 代表者会議をもつこと。

この外に組織の防衛を早急に建直
しを図ること、小児病的な行動を行
わないこと、などの申しあわせのあ
ったことを記憶している。

組織と活動の方向にあかるい見通
しがついたので、西川兵曹は帰郷す
ることになった。海兵団機関科分隊
にいた西川兵曹は温厚で本をよく読
み思慮の深い、うすぎたない下士官
根性のない、よい人柄の二等機関兵

曹で、組織にとつて期待のもてる人
であったが、刑務所の独房の苦しか
った生活が心身にこたえたか、出獄
後は万事がひっこみ思案になり全く
覇気を失っていた。このことがその
後軍事部より党活動を要請してもこ
れにこたえず、ドロップアウトして
まい、郷里の山中で一炭焼き人とし
ておわらせる結果となつた。実にお
しいことをしたものである。苦しみ
を共にした同志に落伍されることは
戦列にとどまっている者にとつて実
に淋しいものである。

事件後のことであり困難ではあつ
たが軍隊内の主要メンバーとは連絡
がとれ、海員組合刷新会出身で組織
づくりを経験のあつた山口君等優秀
な者七八人で、地味に着々と建直
しをはじめ、影響下をぜんじ拡げて
いった。強い権力の圧制下における
揺籃期の組織づくりは、一般的な傾
向として人間関係の線をたどつて、
組織化を手工業的に行っているのが
通則である。労働組合も、一般的に
同好会すらない軍隊内では、この対
策委のぐるりのメンバーも、同年兵、
下級兵、下士官など人間関係の日
常生活の線をたぐつて種々の手法で
影響下を次第に拡げ、組織化を図つ
ていった。

当時今日の緊急を要する問題と

して、党との結びつきの案件が残っていて阪口君と平原は鳩首相談した。

七月中旬（平原が社研事件でつかまる直前）夏休暇を利用して大阪市港区の全協フラクションに連絡をとり、広島か呉の党組織につながるよう手配してあったので、平原がその旨報告し意見を求めたところ、阪口君より「呉市内で党と連絡がつく見込みがある」との申し出もあり、合議の結果、阪口案ですみやかに手をつけ、駄目であった場合は平原案でゆくということで党との連絡役を阪口がつとめることになった。

呉市中通りのめぬき通りに大きな書店があった。この店主は田中さんという、丁稚からたたきあげた生粋の商人だったが、進歩的な人で、かつて党や全協の連絡役をつとめ、全協検挙のとはつちりをこおむり、当時の新聞に写真入りで報道され、赤い本屋として有名になっていた人だった。阪口君はこの田中書店の主人に目をつけ客をよそおい、細心の注意を払いながら再三に亘って連絡をとり続けた。

年末もかい一二月にいたって、やっと呉地区オルグ寺尾一幹君に会えた。念願の初会見だ。ここに呉海軍水兵対策委員会の代表と呉地区の

キャップが結びつきえたのである。両者の度々にわたる打ち合わせにより、話は急速に具体化し、組織はすめられ、呉地区委員会の一翼に軍事部が構成され、初代の責任者に阪口君がすわった。だから阪口喜一郎君は党軍事部の産みの親であり創設に大きな役割を果たした者の一人である。

海軍を追放されると早速、呉市内の山手に家を借りて、阪口君は生命保険の外交員、妻君は日の丸デパートの売子で生計のめどをたてたが、阪口君はひとすじに党活動に専念し、外交員の収入もほとんどなく、生活は随分苦しくて妻君は恥も外聞もなく生活費の算段にはしりまわった。この妻君は野村梅子さんという、彼が海軍時代にいた下宿先の養女で、母の反対をおしきって恋愛結婚した文学少女で、阪口君をよく扶け苦勞を共にしたが、のちに未決囚として最も腐心する予審中の彼に離婚をせまり、苦悶の追い打ちをかけた。

三、『聳ゆるマスト』の創刊

前後

軍事部専属の活動家としてはたろきだした阪口君の身辺にもようやく

憲兵や特高の目が光りだし、活動にも制約をうけるようになったと感じとった彼は、そのころ生活費のくめに郷里に帰っていた平原を電報でよびよせ、

「尾行がつくようだから活動をひかえる。君が軍事部専属の職業活動家として、これからはたらけ」といった。オルグ寺尾君も「阪口君は折をみて外に転出させるから軍事部の仕事をしてほしい」といった。

平原は4・16事件にもかかわって検挙され、呉海兵団当時より外出の折には必ずといってよいほど憲兵の尾行がついており、下宿先にまではりこみがあつて有名人においては阪口君よりはるかに上で、党活動のその容易でない（呉においては）ことを充分考えたが、海軍部内の事情に明るい阪口君が消極的になり、オルグの寺尾君は部外者で事情にくらくて活動に具体性がなく、軍隊内部には党務に専念できる人がみあたらず、検挙の早いであろうことを覚悟で遂に平原は肚をすえた。

やれるところまで、やってのける気がまえで平原は、やる気十分。まず呉署ちかくの自転車店の二階に下宿している山下達吉二等主計兵をそつと訪ずれると、彼は目をまるくしておどろき「ポリ公かたの横で危険

なのに、よく来てくれた」と大変よろこんでくれた。こんなに同志より心からよろこばれたことは、あとにもさきにも、これがはじめてであった。

彼より艦艇のうごき、予備艦の上陸者その他の状況について詳細にききとった。活動方針に対する具体的な意見もあった。あたまのよい、きもったまのすわった水兵さんで、『聳ゆるマスト』の拡大に、たいへん力をそそぎ、しかも編集に対する意見も積極的におこない、みずからもペンをとって寄稿し、行動力のある同志だった。そのほかの同志にも順次連絡をつけて、顔なじみの連中のなかには、社研事件の見舞をいつてくれるものすらあつて、心はむすばれ固まっていた。

呉地区軍事部の機関紙の必要を、いちばんさきに提唱したのはオルグの寺尾君である。そこで平原は早速阪口君に連絡をとって、このことについて合議をはかった。山下君、山口君にもそれぞれ個別に相談した。みな双手をあげて賛成。ここまでは、たやすくはこべたが、サアこれからが大変だった。印刷機がない。ローラーもない。印刷インキも紙もない。肝心の配布網もできていない。これらの諸材料を市内で購入すればアシ

がつく危険性が充分ある。そこでボンボン船にのつて、一日がかりで市外へ買入れにでた。その材料でコッコツ音のせぬようにボール紙で手製の謄写機を造り具体的に活動をおしすすめることは、実にたのしいものである。印刷の準備は万事OK。

『聳ゆるマスト』の編集方針はあ

らましつぎのとおりであった。

一、一頁は時事問題についての社説にあたるもの

二、二頁は主として基礎理論的なもの

三、三頁は下士官、兵の待遇などに関するもの

四、四頁上段は軍港のトピック的なもの。下段は必読書の紹介と編集後記的なもの

五、其他文章を平易に、記事は具体的に、特に三頁は切実なもの

を
はじめてで調子がでないか、たのんでまわった原稿がしめきりまでにでてこない。かけずりまわるが海上からの上陸兵には階級に応じて、それぞれ制限があつて、上陸日まで待つよりはかはない。

創刊号の巻頭をかざる「発刊の言葉」をオルグの寺尾君にすでに依頼してあつたので、街頭連絡でこのことをいったが、彼はまだ書いていな

いという。やむなく、その代役を阪口君にたのむと「オルグがそんな無責任なことでは駄目じゃないか」としうい顔で早速原稿をくれたのは有難かつたが、その原稿の内容が、マルクスだ、レーニンだと、その引用文が多く銜学的でそれに朱筆をいれるのにほねをおつたのを今でもおぼえてい

『聳ゆるマスト』はザラ半紙二ツ折二段ぐみ四頁だて、旬刊発行の党呉軍事部の機関紙であつた。外形的には貧弱な印刷物ではあつたが、なかみは反戦問題を中心に多彩な記事がのり、啓蒙書として水兵達に人気があつた。特筆すべきことはこの機関紙が海軍部内の下士官、兵からの執筆寄稿を中心に編集されていたことである。このことは党のあゆみにとつて決定的に重要なことである。

原稿依頼、原稿あつめ、もちまわり編集会議、校正、ガリ切り、プリント、配布、反響調査など、ずいぶん手工業的な労働と時間をかけ、発行まではテンテコまいであつた。

『聳ゆるマスト』の創刊号は一九三二年(昭和7年)二月に発刊され、約四〇部くらい配布していた。もつとも、そのうち五部はオルグ寺尾君に上部機関への報告用として手渡していたから実際に軍隊内部に配布し

たものは三〇部余りであつたろう。そのご、この水兵さんたちの、うけが案外によく配布網のメンバーから増刷の申し入れなどがあり、第三号ごろからであつたろう漸次部数をまして七〇部、八〇部くらいにふえ、平原がとらえられたころには一〇〇部ちかくにのびていった。

号をかきかねて三月をむかえたある日、オルグ寺尾一幹君が呉署に検挙された。そのとき、すでに多くの同志が留置場にあふれるほどひっぱられ、地区委員会もカラッポにちかかつたが、ただ軍事部のみは例外的に健在で、『聳ゆるマスト』を通じ傘下はしだいにふえつつあつた。

(注) 寺尾氏のつかまつたのは五月十日

この検挙をまぬがれた同志たちは組織のたてなおしに危険をおかし、心血をそそぎ、もとめられて平原も個々の軍事部以外の任務にかけずりまわっていた。そんなでんやわんやのおり突然オルグの寺尾君が留置場から脱走したと、同志から情報もたらされた。ポリ公の非常警戒がものものしい。これでオルグ寺尾君がまだつかまってい

ないことが、確認されてその無事をいのつた。(五月三

○日寺尾脱走

この脱走のあおりをくらつて平原は〇月の上旬、市内の街頭でついに逮捕されるにいたつた。ただちに呉署特高の部屋に引きずりこまれ、木刀、竹刀、皮スリッパなどを持ち、四、五人の私服がおそいかかり、なぐる、けるのかぎりをつくされ、私はこのテロでぶつたおれてのびてしまった。筆舌につくしがたい暴虐だ。怒り心頭に発し口をむすび一口もしやべらぬ——これをもつてむくいた。

取調べがすすむにつれて『聳ゆるマスト』がオルグ寺尾君のアジトから押収されていること、関係被検挙者はオルグ寺尾君のみであること、軍事部の組織については知っておらないこと、平原が左翼運動に関係はあるだろうと推測はしているが、具体的にそのうらづけをもっていないこと、などの見当がついた。平原の態度はきまつた。終始一貫とぼけることだ。その結果〇〇日ぶりに留置場から暑い六月のシャバに、やつとでできた。

下宿に帰てみると、ひそかに張り込みがついている。あきらかに泳がせているのだ。特高は陰険で、油断させておいて、平原が活動をはじめるその現場をとりおさえ、再検挙

にもつてゆこうとするもくろみのようであった。すきをぬって軍事部のあるメンバーに連絡をつけ、平原の現況を報告し、外部の状況をききとり再会を約しころおきなく呉を去っていった。

平原が検挙されたのちは平原にとつてかわり阪口がふたたび軍事部の責任者となった。この六月の下旬島根県の木村莊重君をよびよせ彼を軍事部のあとがまにすえ、阪口君はほとんど呉から出奔した。

バトンをうけついだ木村君が責任者となつてからつづいて『聳ゆるマスト』は再刊されはじめた。

のち組織の要請で平原は上京して中央の軍事部長、長谷川茂君らと画策し横須賀軍港へ軍事部の組織のためオルグとして派遣された。

四、若干の補足

非合法時代のことであつて自己以外の人々の活動については判然としないことが極めて多く——ですからこの『聳ゆるマスト』に関する記述は平原が関与し、観た『聳ゆるマスト』のあゆみであつて、再刊以後のことについても大体のことを知ら

ぬでもないが、正確性を欠く危険性があるので、あえてさしひかえておいた。したがつてこれは『聳ゆるマスト』のあゆみのひとこまにすぎません。この観点にたつてお読みいただければ大体ご理解がえるのではないかと思います。

この『聳ゆるマスト』はいろいろとりざたされ、さわがれてきましたが、正当な評価をいただくために若干の補足をつけ加えておきます。

(一) この機関紙は特定の指導者によつて俗にいうところの「させたり、やらされたり、まるのみ」したことは一度もない。また原稿も地方のオルグから寄稿されたことは一度もなかったし、編集についてもオルグの取捨はうけなかった。

軍隊という特殊なところでの活動であつた関係から一堂に会した編集会議は殆んど不可能にちかかつたから、持ちまわり決裁で合議編集が行われ、いわば集団編集であつた。ここにユニークさがあり民主制が成りたつており刮目すべきよさがあり、水兵にひろく支持された所以である。

(二) 『兵士の友』は党中央委員会軍事部の機関紙であり『聳ゆるマスト』は党呉地区委員会軍事部の機

関紙であつてその役割は異なつていた。これら機関紙の創刊は『聳ゆるマスト』が『兵士の友』より先行していた。一部の人々の疑問にお答えしておく。

(三) 阪口君や私が軍事部で活動していた当時の、同志やシンパ、進歩的な方々で多く検挙をまぬがれた

人々がおられる。それは単にのがれたのではなく願ひは反戦の旗をおしすすめていただくためだったのです。阪口君などは死をもつて守りぬいております。どうぞここにおもいをいたして下さい。

以上

呉海軍病院のこと

稲垣 宏

一九七一年七月一日(日曜)三重県久居市に、稲垣宏氏(現姓池村氏)をたずねる。なんとなく、しらがあたまのいかつい人だとおもつていた。

『五人の水兵の判決書』には海軍一等看護兵曹 明治三十七年生 治安維持法違反 懲役四年とある。

「朶雲並びにッそびゆるマストの人々」拝誦いたしました。三〇有余年前のことなど思い起して胸のせまる思いです」と手紙がきた。

一九七一年の賀状には「あらたしき としのはじめの初春の

きよう降る雪の
いや重け よごと」 万葉
とあつた。

一六七一年六月二三日の手紙には、つぎのようにかいてあつた。

「木村莊重君との関係は私が昭和七年呉海軍病院第七病棟長時代、かれの義妹右田美子さんが派遣看護婦として私の病棟につとめられたことから、義兄木村君を知ったかと記憶

しています。小倉氏は、まったく知りあい関係はありません。公判廷でお目にかかっただけ。北田君も同様。宮内は私の後輩でよく語りましたが、ニヒリストで彼がマルキストとの裁きをうけたのは、いまもってナセンセスと断言します。佐藤君は私が呉病棟長当時、入院患者で文学愛好者でした。彼とは恋愛のライバルでもありました。

こうした五人が同じ法の裁きをうけたことに、まったくもって、おかしさを感じます」

ところで七月一日正午、バス停にむかえにでていた人は、やや小柄でかみの黒い、やさしそうな人だった。つい近くに家があつて、涼しい風のふきぬける二階にとうされた。稲垣元兵曹の思い出をきいて、帰ってから、ノートにかきつけた。それはつぎのようなものである。

「大正一〇年に、河上肇博士の『貧乏物語』をよんだのが、はじめての、思想との、ふれあいということになるでしょう。この年に海軍に入りました。まだ軍縮時代だったので海軍に志願するものはすくなかったです。大正の末ごろには、看護兵のあいだで、左翼文学をよむグループが

できていました。片西正夫、山本俊次、それから柴田嘉章、松原兼正などでした。」

稲垣氏は古いアルバムをだしてきただ。とじひもが切れていて、水兵たちの写真も色がかわっている。山本俊次という名は『五人の水兵の判決書』の稲垣兵曹の項にも出ている。それによれば、稲垣氏が看護兵曹のころ、三等看護兵として入ってきた山本俊次と「交遊するに及び、左翼思想を抱持し居たる同人の影響を受けて、ひろく左翼文献を渉猟し……」となつてゐる。

水兵たちは、海軍にはいるまえ、社会生活で左翼思想をしり、なかには實際行動に、はいつていたものもあった。

「昭和七年だったか、海軍徴募兵の身体検査の助手として岡山に出張したが、そのとき私あてに送つてきた本が左翼文書であることがわかり、呉病の病棟長をクビになつて、海兵団入りとなり、半年の間取り調べを受けました。外出も禁止でした。もつていた本は——自分の郷里の家にもあつたのですが——みんな親類のところへ送つたので押収されないですみました。戦災にもあつたが、当時の本は今でももっています。」

アルバムもそのうちのものだろう。

う。

呉の本屋のことをきくと、

「それはキトウ書店です。鬼頭とかきます」と例のアルバムにはつた一枚の写真を示した。アルバムは黒い台紙で白い字で説明がかいてあるが、おしいことに字がかすれて消えかけているのでよめない。写真には書店の主人と奥さんと年頃の娘さんがうつつてゐる。

「鬼塚というようによめますが」ときくと、

「いやキトウが正しいです」と稲垣さんはいった。左翼の本をそろえている小さな古本屋でよくそこへ本を買いにいったという。

それにしても、あのころの写真が残っているのはおどろきであつた。

「この本屋の横に、木造三階だてのアパートみたいなものがありました。木村君と右田美子さんが、この三階にすんでいました。木村君は運動のことで走りまわっていたから、美子さんが生活をささえていたのでしょう。」

「宮内という人はニヒリストだったとお手紙にあります」ときくと、

「彼は私の後輩ということになります（稲垣氏は大正一〇年入団、宮内氏は大正一二年入団）ずばらな

男で、せんたくというものを、ほとんどしない。上着下着いづれも三枚ずつ支給されているのだが、服装検査になるとそのよごれたもののうちいくらかマシなものをよりだして着てでる。うらのほうがきれいななら、うらがえしに着てでるという始末でした」

ずばらな仲間を思いだして、稲垣さんの顔に笑いがうかぶ。

「宮内という人は荻中学を卒業して、士官学校や兵学校をうけたが合格せず、海軍にはいったということですが」

と私がきくと、

「まあ彼が試験に合格したとしても、士官になつてから、あまり出世しそうなタイプではなかったですな。思想的に、まったくのニヒリストで、かえつて裁判にかけられて、すこしはピリッとしたかもしれせん。しかしもう死んでしまいました。私は予審中は呉海軍刑務所にいましたが、そのうち広島刑務所にしばらくのあいだうつされ、それから三重刑務所にかわつたわけです。広島刑務所では、麻縄をなう仕事でしたが、うまくできなかった。独房の扉には「厳正」という札がかけてありました。『態度厳正なり』『思想厳正なり』とかなんとかはめてゐるのかと思つ

たらそうではなかった。それから呉の警察にいたとき、となりの檻房に佐藤しずえさんがいたのを、おぼえています。背の高い、しっかりした人でした。そのご、どうされたか知りません」

以下雑談で、そのころの海軍のことなどをきく。

○水兵の給料。「一等兵で一五円だった。それからだんだんあがつてゆく。私は四五円だった。船にのれば別に航海手当がつく。」

〔参考までにそのころの賃銀をあげれば、失業救済事業―当時の失対事業―日給一円二〇銭―一円三〇銭。工場雑役七〇銭―一円。米一升二三銭くらい。〕土方米三升〕ということばがあった。〕

○外出。「二等兵で六日に一回。一等兵で四日に一回。兵曹になれば隔日」

○下宿。「士官なら水交社、下士官、兵なら下士官集会所を利用できるが、たいがい畳の上で、のんびりしたいから民家の部屋をかりた。平の水兵などは三円か四円の間代の部屋を、二―三人でかりて、交代で帰ってきて、ねるものもあった。」

○長髪。「まだ戦争にならないときで、海軍もすこしは、ゆとりがあつた。宮内があんなにズボラでも、ピ

ンタをとられなかった。私など髪をのばしていた。船にのっているころ当番士官が私に「副長がよんでいるぞ」といった。実はこの士官、副長から、私に「髪をみじかくしろ」といわせたかったのだ。私が副長のところにくくと、副長は「よんだおぼえはないぞ」といった。かえつてきて、その士官にそのことをいうと、あてがはずれたという顔で、それきりになった。

○バレについて。「病院の看護兵ではなかった。しかし水兵や機関兵は訓練演習でひどくしごかれるから、上官に対するしかえしはどこでもあったとおもう。」

○さかい川。「ちいさなドブ川だった。そこに、のみ屋、あいまい屋などがならんでいた。まあ、水兵たちが待ち伏せするには、もってこいの所でしょう。」

稲垣氏の手紙

七月二四日付御書簡並びにプリン
ト拝見しました。筆無精のためいっ
も失礼しています。一一日御来駕の
節は生憎組の仕事があつて、あなた

の御帰りもお見送り出来ず残念でした。実はあの日一泊してもらつて、ゆつくりと語り合う時を持ちたいと存じていたのですが、私が組の仕事から帰ったら、あなたは既に出発された後で遺憾に思いました。
扱てプリントありがとうございます。

平原さんの手記を読んで、私があるなかに申しあげたことに誤りがあることを確認しました。

(一) 木村君との知り合いの時期
(昭和5年頃)

(二) 私の思想検拳の期日(昭和7年3月)

(三) 宮内、木村、右田、私、それからプリントに表われていませんがオルグ錦織彦七氏との関連(昭和7年10月)

(四) 私個人として朝日新聞記者(姓名失念)との関係

(五) 私が左翼思想について検拳官の取調べをうけたいきさつ(第二次、昭和7年3月)

(六) 私の検拳のてんまつ(第二次、昭和7年11月)

(七) 検拳とその後の検察官との諸関係(昭和8年5月)

(八) 刑務所生活

それらのことについて一応まとめ綴ってお送りします。

一九七一年七月二六日

失礼

池村

〔手記未完のまま 稲垣宏氏(池村氏)は急逝されました。〕

寺尾一幹氏の手紙

御無沙汰に過しています。友人たちに対して礼を欠く私の悪癖です。君がまとめた木村君の歌、それから『聳ゆるマスト』の経緯など興味をもって読みました。君の健勝を知ることでもき大慶というところです。私、昨年夏痼疾の結核ではなく意外にも胃潰瘍にやられ、貧血も加つて約三ヶ月入院していました。しかし今は全く回復し元気で多忙な毎日を送っています。

『聳ゆるマスト』のこと、平原君の文章その他もありましたが若干正確を欠く点もあり、事実はそのような次第です。当時、私は顔が知られた広島での活動が難しくなり活動の舞台を呉に移し潜りました。当時岨君が呉で活動していたのですがバトンを私にわたして上京しました。

呉では海軍工廠や水兵の間に党組織もでき、われわれの根を拡げることができました。これだけの組織を築きあげたので、私はそれぞれの組織の機関紙を発行する考えをもち、まず工廠では『唸るクレーン』について海軍では『聳ゆるマスト』を発行しました。題名はそれぞれの組織内で決めさせました。大体月二回ぐらいの発行だったようにおもいます。原稿は各自に書いてもらい、私が取捨して編集しました。私が書いた原稿もあります。

戦後、わが党の歴史に触れた正式な党史ではないが出ています。例えば『日本共産党の四五年』『近代日本人民のあゆみ』（新日本新書）野坂さんの論文（数年前、前衛に連載）などで、当時の軍隊内の反戦活動として『兵士の友』『高いマスト』が発行されたと述べられています。『兵士の友』は活版で新聞紙大のものでした。『高いマスト』というものは発行されておらず、明らかに呉の『聳ゆるマスト』のことです。その後私は党の方に話し、訂正することになりました。再版された『日本共産党の四五年』では訂正されています。何故このようなまちがいが起きたのか解りません。

当時呉でも広島でも、中央との連

絡が切れており、中央の機関紙なども手に入りませんでした。しかし、たまたま中央から三好君がオルグとして派遣されてきました。三好君は最初、広島にきたのだが広島島の組織が弾圧をくっついていて連絡ができず、呉にきて私と連絡できたわけです。私は呉での闘争について詳細に報告しました。これは三好君の手でまとめられ中央に報告され、第二無産者新聞（『赤旗』）に大きく何段ぬきかの記事となりました。海軍工廠や海軍の中の活動『唸るクレーン』『聳ゆるマスト』がはじめて全国的に紹介されました。特に天皇制帝国主義の牙城である呉海軍の中で、このような闘争がおこなわれていたことは全国的に一つのセンセーションを起し、激励したことと思います。

『聳ゆるマスト』は呉以外では発行されておらず、あの詩も第二無産者新聞をみて書かれたものでしょう。

一九七〇年四月一五日

寺尾一幹

（一九七一年六月一九日再プリント。
『聳ゆるマスト』関係のものは一九六九年から同志の手紙がくればそのたびごとにプリントして関係者におくりました。ここにあらためてプリント

しました。』

木村莊重氏の手紙

稲垣君に会いに行かれたそうですね。呉の本屋については一寸調べてみないとわからないが、僕の記憶から言うと鬼塚だと思う。本名についてはわからないが、僕の出獄後の投書などに蛇塚と言うのがあるが、これは鬼塚を思い出して鬼を蛇にかえたものです。

また、山本俊次と言う男は知らないが、稲垣からもらった写真はまだ持っている。

宮内については、獄死しているの、文句も言えないが、本当に気のいいもので、警察でも一から十まで平気で話してしまい、かくせる事まで言ってしまうって三年半もやられたのです。

僕の家近くの、二一三回、出獄後訪ねてみたが、遺族の者とは会えなかったし、本人も居ない事なので帰った。それでも近所で、墓所などきいて、墓へでも参って行こうとたずねてみたが、あまりくわしく教えてくれず、知らぬ様な話のだったが、正式な葬式などしてないの

ではないかと思つて、あまり深追ひしてたずねはしなかった。そのままです。（後略）

回想録

小倉 正弘

(一九八一年一月六日、山口県光市に小倉氏をたずねて、まえから書きかけているという同氏の手記をみせてもらいました。一九七一年に聞き書きをとったので、それらをいっしょにのせることにします。)

略歴

一九二二年二月一日 台湾台北州台北市日新街にて、小倉正の五男として生れる。

本籍地 岡山県苫田郡富村字富西谷二五一九の二番地

一九一八年(大正7年)四月七日、台湾台北州大邱園尋常高等小学校尋常科一年として入学

一九一九年(大正8年)四月、同州大溪郡大溪尋常高等小学校第二学年に転入学

同年九月 台北市城西小学校に転入学

一九二〇年九月 台北州淡水郡淡水尋常高等小学校に転入学

一九二四年(大正14年)四月、台北州立台北工業学校電気科第一学年に入学

一九二九年(昭和4年)三月、電気科講師ボーコット事件並に喫煙事件にて中途退学

一九三〇年(昭和5年)一月一日、呉海兵团へ徵募志願兵として入団。軍艦那珂の乗組となる

同年一〇月一日胸膜炎にて呉海軍病院に入院
一九三一年(昭和6年)二月退院し、保健班を経て、第八分隊(機関科補充分隊)に編入

一九三二年(昭和7年)三月、軍艦白鷹に乗艦、同年一〇月満期のため海兵团に帰団

一九三二年(昭和7年)十一月四日 「10・30事件」にて検挙され、海軍衛戍監獄に被告人として拘留される

一九三三年(昭和8年)四月二十九日 治安維持法違反にて懲役六年で下獄

一九三六年(昭和11年)二月二十五日 (服役中皇太子の出生により、刑の四分の一、即ち一年半減刑、仮出獄約一〇ヵ月) 仮出獄し、愛媛県宇和島市丸の内長兄小倉一正宅に寄寓し、明治生命宇和島営業所にて外務員として勤務

一九三七年(昭和12年)八月 香川県高松市野田農器具製作所に入社

一九三七年(昭和12年)一〇月 広島市段原大畑町一〇四 前田文二氏の鉄工業前田組に入社

一九三八年(昭和13年)二月 徳山清水組に入社

一九四〇年（昭和15年）五月 朝鮮鉄道平壤操
作場鉄骨建築工事（銭高組）の下請として工事に
従事

一九四四年（昭和19年）十一月 帰国

一九四五年（昭和20年）六月 徳山にて戦災に
あう。八月、終戦直前再び戦災にあう。

一九四五年（昭和20年）十一月 徳山防長陸運
に入社。労組結成後解雇

一九四六年（昭和21年）日本共産党周陽地区委
員会を結成（原田長司氏と共に）、自宅に党事務所
をおく。居住細胞責任者として運動

一九四七年（昭和22年） 離党

一九四八年（昭和23年）十一月、光市に転居、
山子として三年半、林業に従事

一九五二年（昭和27年）四月、光市失対事業に
就労、労組結成、執行委員及副委員長として活動

一九六三年（昭和38年）二月、大阪市吉永水道
工事に入社、八月に退職し、その後日雇鉄工とし
て各事業場にて工事に従事

一九七〇年（昭和45年）三月より、土木建築請
負業を営み、現在光市内にて工事に従事

水兵のころ

海兵団時代は「8・8艦隊」ができるというの
で、訓練はきびしく、我々機関科でも「十能操法」
（石炭をボイラーに投入する方法）を一時間四五
分休みなく、二月の極寒にもかかわらず汗が十能
の先に点々とおちる有様、またボート操法の時間

も、約二時間休みなし、毎週土曜日の大掃除には
兵舎の床を三〇分くらい、休みなしで腰をのばせ
ずはいまわらせられ、全く人間扱いではなかった。
約四カ月の海兵団生活から（四等兵から）——四等
兵は「カラス」といつていた。その理由は、黒の
制服に腕章がなく、真黒な服装をしていたからな
ので——新三等兵になって、軍艦那珂（第一艦隊
所属の第一水雷戦隊の旗艦）に配乗して電気部に
入る。艦長は当時大佐で南雲忠一（のち第二次世
界大戦のサイパン島玉碎の司令官、第一司令長官
は山本権兵衛大將だった。また水雷戦隊司令官は
末次信正少将（当時の水雷戦術の世界的権威者Ⅱ
覆面殺人者）であった。
当時、艦隊は米國を仮想敵國として常に太平洋
で一カ月から二カ月の間、演習をしながら日本を
一周していた。

〔注〕「8・8艦隊」。戦艦八隻、巡洋艦八隻の
編成。その他軽巡洋艦や駆逐艦で編成された水雷
戦隊。水雷戦隊は、旗艦、軽巡洋艦一、駆逐艦六
、八隻編成。潜水戦隊は、駆逐艦一、潜水艦六、
八隻編成。

私は海兵団時代から水泳が割合上手だったの
で、「那珂」に乗艦してからは、水泳部員となり入
港の折は毎日水泳の練習を（海にて）していまし
た。また演習中は、太平洋の真中で魚型水雷を発
射して、それを回収するのに水泳部員が浮いてい
る魚雷にバンドを掛ける作業をしていました。金
華山沖等では本当に黒潮という真黒な海の中で、
三〇分もその作業をした事があります。

昭和五年一月の神戸特別観艦式の準備中、
水泳と作業の重労働で胸膜炎で倒れました。一一
月呉海軍病院に入院、翌年二月中旬退院。呉海兵
団の保健班に入り、のち機関科の補充分隊である
第八分隊に配属されました。

〔以上、手記は未完。以下一九八一年一月六日、およ
びそのまえの一九七一年四月一八日の聞き書きをのせ
ることにします。〕

軍備拡張時代で、志願兵のほかに徴募兵もた
くさんはいつてきた。そのなかには、海をみたこと
のないものもいた。またテキパキ仕事が出来ない
もの、学科のできないものもあった。

新三等兵はよく二等兵や一等兵になぐられた。
私は仕事で機関科なので、鹿の角の柄のナイフを
もっている。電線をつないだりするのに必要なの
だ。「なぐるならなぐってみろ」と、ナイフで古年
兵をおどしてやった。私は進級がおくれて、ほか
のものは二等兵になったのに、三等兵のままとい
た。私のつぎに入ってきた新三等兵をなぐるうと
する二等兵や一等兵には極力抵抗してやった。

古兵は「なぐらねばわかん」という。私は「よ
くいつてきかせればわかるじゃないか」と、「新三」
をあつめ、小腹をきつて一袋五銭の菓子をいくつ
か買ってきて座談会をやった。私も三等兵だが、
古いから新三等兵よりも上である。

私は当時、運動選手をしていた。陸上競技とか
バレーボールの対抗試合には、よく上陸して出場
した。こんなときは休暇がとれるので、時間のゆ
とりがあった。入賞して、メダルもたくさんもら

ったが、治安維持法で検挙されたときみんな没収された。そして一等兵になっていたのに、二等兵に降等された。稲垣兵曹は、勲章をもっているから検挙されたときも降等処分にならず、一等兵曹のままであった。

私は、兵隊で出世しようとか、はやく進級しようとかおもっていないので、気が楽だった。ほかの者は点呼とか訓練とかいうと目の色をかえてとびだしてゆくが、私は掃除当番などみなひきうけてやった。しかし私はまったく手のつけられぬあばれ者だったわけではない。従兵にして、かわいがってくれた士官もいる。

海軍に志願したのは、おやじが「兄が三人もいるのにだれも兵隊にいていない。おまえ海軍に志願しろ」としつこくいった。私は「毎月五円づつおくってくれるなら、海軍に志願する。それであれば満洲へいって馬賊になってやる。」「五円づつおくってやるから志願しろ」というようなことで、海軍にはいった。おやじは約束どおり五円づつおくってくれた。

それで、下宿をふたつかることができたのだ。ひとつは玉突き屋の二階、もひとつは西田のおばさんのところ。

上陸したときは、近所の子供たちとあそんで人氣があった。検挙されたとき、近所から三〇人ほど減刑嘆願の署名がきた。

「おまえなかなか人氣があるな」と憲兵にいわれた。

その検挙のとき、西田のおばさんに「万一のときはすててくれ」と私がたのんでいた文書を、おばさんがカゴの底にかくしてもってでようとして

特高にみつけられた。

「バレ」について

バレというのはばらすということからきたのかもしれない。

部下をしごく下士官をやったときは、こっちの仲間はずのところに目印の布をぬいつけておく。同志うちをやらないうためだ。そして笛をふくとあつまるようにしておく。その下士官のおおを知っているものが、あいつだとほかのものに合図する。彼がまっさきにその下士官をなぐると、あとでカタキをとられるから、合図するだけにする。ピーポ、ピーポと笛がなると、みんなドツとあつまって、その下士官を堺川にほうりこんだ。「巡ら」などがきて、あぶないおもうと見張り役がピーポ、ピーポと笛をふく。それでみんなちりちりになつてすがたをけした。

集団行動というのは、水兵がよくやったものだ。ある女郎屋のとりあつかいがわるいというので、水兵があつまって家にロープをひっかけてヨイシヨ、ヨイシヨとひきたおしたことがある。あんまりよい例ではないが。

「再役強制反対」

もともと、兵隊でいつまでもめしをくうつもり

はない。海軍に志願したのは、どうせ二十歳になったら兵隊にとられる、はやく兵隊にいつてはやくでて、社会のしごとについたほうがよいとおもうからだ。

ところが「満州事変」がはじまったら、強制的に「再役を志願するものは申し出でよ」としつこくいつてくる。

いつまでも兵隊でおって、マゴマゴしていたら、社会にでてから、仕事をさがしてうるうるしなければならん。兵隊の古手なんぞ社会ではつかいものにならん。志願して入ったときとははなしがちがう。皆ぶうぶういつていた。

「現役満期 強制延期反対」のスローガンは、こんな空気のなかで出されたものだ。

同志のこと

佐藤静枝さんは、カフェー摩天楼の女給をしていた。そこへ私もレンタルにいった。水兵としてはカフェーにゆくのは金の点で苦しい。銚子一本とつきだしをとって、チップを一〇銭か二〇銭おいても一円くらいかかる。静枝さんが、うけもちのテーブルならたすかる。そうでないときにはあとでよんでもらった。静枝さんは「ちよつとこつちへきて」といつて、ものかげによんでエプロンの下から文書をだしてわたしてくれた。ほんとに信頼し尊敬する同志という気がした。

そのころ私は二〇歳、静枝さんは二二歳だったというが、二四歳くらいにみえた。小さい時から

苦労したというからふけてみえたのだろう。あのころ断髪にした女は呉にはほかにいなかった。

「軍艦の招待日」という催しがあった。一般の人を軍艦にきてもらって、艦内を見学してもらうのだ。水兵が接待係兼案内係だ。私は、セーラー服の女学生の仮装をして案内係をした。そこへ静枝さんがきた。私は艦内を案内しながら、小声で「木村莊重君への報告」を彼女につたえた。なんにも知らない水兵たちは「小倉にあんな彼女がいるとはしなかった」と、ひやかしていた。

〔注〕『大呉市民史』P278ページ、昭和七年の頃。

カフエー摩天楼の女給よしえこと佐藤静枝(22)生前両親が離婚。祖母の私生子として届けられた。八歳のとき女中奉公の奥母に引き取られたが、一二歳で母がつれ子して山県郡八重町に嫁し、一四歳広島市左官町の料理屋に単独で奉公。一八歳同市、カフエーリラスの女給となり、ここの左傾女給、純子の影響をうけ、昭和七年八月共産党の指令をうけて来呉。

(検挙後) まもなく釈放。やはり同店につとめた。ちよつとした美人。客へのサービスもよいほう。静枝は軍艦に小倉をおとすれ、「赤旗」をわたしたり、下宿も再々訪ねていたという。

北田健二君は、私より一年下だがおなじ機関兵で仕事の相棒だった。

木村莊重君とは海兵団でいっしょだった。彼は思想がわるいというので、船にはのせられず、海兵団におかれていた。そこで私と相棒でロープをはぐしてモツプをつくる仕事などをやりながら、話をしたものだ。

その木村君から『聳ゆるマスト』をみせられた。

第三号だったか第四号だったかおぼえていない。

内容についてはおぼえていないが「水兵諸君の投書をつくる」とあって、私が投書したのが第六号の三ページめにのつたのをおぼえている。投書には「軍艦白鷹内 蔣弘」とかいてだった。水兵たちとの連絡や文書のうけわたしは「幸便箱」を利用した。各艦内の水兵あてには、表に紙をはって何々艦、何々水兵殿とかいて「幸便箱」にいれると、それをランチで各艦にくばる。途中で調らべられることはない。

オルグとして呉にきた綿織彦七氏とあつたのは、木村莊重君からの連絡だった。「呉駅前で、君は西から東へ、むこうは東から西へあるいて、であうようにしてくれ。むこうは、手に赤い本をもつて胸のポケットに白いハンカチをのぞかせているから」というようなことだった。彼は、ちよつと木村君にいた背の高いやさ型の男だった。

獄中のこと

私は憲兵隊に検挙されたのち、呉署にあづけられた。その留置場で佐藤静枝さんや稲垣兵曹ともいっしょになった。

木村莊重君はうしろ手にしばられ、さかさづりにされて竹刀でなぐられていた。わざとわれわれにみえるように、扉をあけていた。

私にも特高の奴が「チョツカイ」をだしかけたので、「きさまらに、帝国軍人をなぐる権利があるのか」とどなったら、手をひっこめた。奴等には

「帝国軍人」ということばは、にがてなのだ。

海軍の刑務所というところは、一般の刑務所よりきびしい。一日中正座していなければならぬ。一週間に水浴二回、温浴一回ということになっている。水浴はつめたい水ブロだ。温浴というのがこまる。ひえきつたからだで、わきすぎているフロにはいらねばならぬ。まごまごしているところからロープをたばねた奴でひっぱたかれる。

海軍刑務署から広島刑務所へうつされてのち、雑役の「独歩」になった。「独歩」というのは看守のつきそいなしで、あるきまわって、仕事ができるのだ。

第二独居というところに思想犯がいられていた。

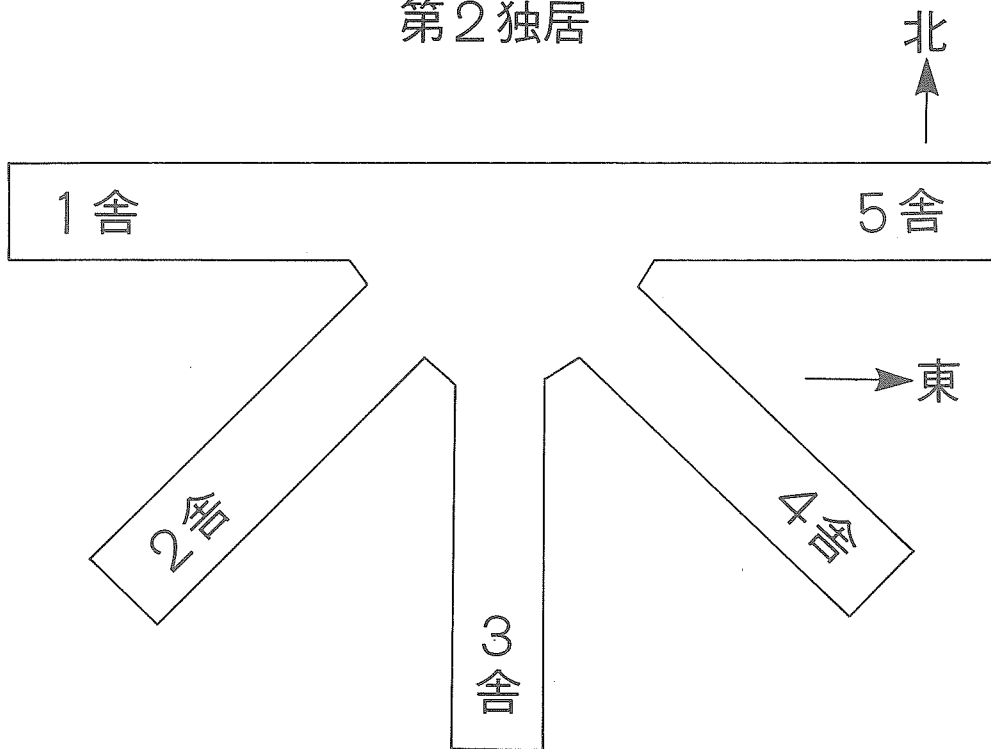
非転向のものは、第五舎にはいつていた。二舎の二房には村山藤四郎君、二舎の九房には谷健二君がいた。谷君は長身で、大阪の港湾で活動していた人、六年の刑だった。

ハンストをしたのは椎野悦郎君、岩村大次君だった。椎野君が、さいごまでハンストをつづけ、鼻から食物をつぎこまれたが、それをはきだして抵抗した。

それから心にのこっているのは、関谷源一君だ。未決の独房にいる彼とはなしたことがある。「自分は治安維持法のほかにも事件があるから生きてでられそうにもない。君は元気でやってほしい」といつていた。

戦後、関谷君が下関の全日自労にいたことは知っていた。私も光市で自労の運動をやっていたからだ。彼は役員などにはけっしてならず、戦前のことも口をつぐんでかたらないということだった。

第2独居



た。「ずいぶん口がかたいなあ」と、みんないって
いたそうだ。(了)

福山地区の人々

野田 清一

一、花野フジエ

昭和五七年一月二日記

花野フジエは、広島市の山陽紡績の検査工だったそうです。当時（昭和6年頃）彼女には南米に移住している相手がきまっていて、早々に彼氏のもとに嫁入りして渡航する予定だったのです。『聳ゆるマスト』（山岸一章著）一八七ページにでている前岡フジエは、彼氏の姓をなのっていたので、彼女は花野とはいわないで、前岡と自分からいつておりました。

来福した事情については、福労の幹部の久下本有（タモツ）が山陽紡績争議応援に広島にゆき、

争議でくびきりになった花野と山本ヤエを、福島紡績福山工場にもぐらせて組織の拡大をはかりたいため、福紡の女工募集係の萩原という人を通じて、入社のほたらきかけをした。萩原さんは、労働組合の陰の協力者だったのです。

入社試験で、山本はパスしたが花野は不合格だった。山陽紡績スト中、全協と連絡のついた彼女は、全労系の福山労働組合をたよって福山入りしたが、日常活動は全協系を通じてやっており、花野は街頭の立場から福紡にはたらきかけようとしていました。

福山城公園は、山陽線福山駅すぐ北に位置して、公園にのぼって福山市街地を一望に見おろすことができます。ある日、花野は城公園から市街地をながめておったところへ、福山警察署の特高主任の三井理一巡査部長がきあわせた（そのころ福山

警察の特高は三井理一と藤井巡査の二名でした。のち警部補を主任として増員した。）

そのとき彼女は、田舎から家出して職をさがしているようにいいのがれたので、うつくしい娘がかわいそうだとおもったか、特高は福山の旅館にすみこみでつとめるせわをしました。後日、三井特高が旅館をたずねてみると、職をせわした彼女は旅館から逃走して所在不明となっていた。特高はそれ以来彼女をさがしておりました。日がたつてから、ある夜街頭で、にげだした彼女をみつけた三井特高は彼女のあとをつけていった。一方それに気付いた彼女は突然、みちばたの他人のみしらぬ家の裏戸からにげこんで、家人に「今自分は胸がくるしくなったから、しばらくここでやすませてほしい」とたのみ、ついで水がほしいといいました。こうして時間をかせいだ。

彼女をみうしなつた特高は、そのあたりをしきりにさがしてもみつかりません。そのころは、冬のさむいときで、今の洋服とことなり、きものの上に羽織を着用していたので花野は機転をきかせて、自分のきている羽織をうらがえて着用してうら地をだし、コシをかがめて、杖をついた老女のすがたで危機を脱しました。

そのころ、広島から派遣された全協オルグ岡田茂美とともに福山市霞町の餅屋の二階をかりてアジトとしておりました。病弱な岡田が食事がほしいとのぞんでも、金はなくあたえるなものもないこまつた生活をしておりました。

紡績の寄宿舎生活をしておる山本ヤエの紹介で、福紡の工具とは公園や街頭で連絡をとりながら、組織拡大につとめておりました。

佐藤茂は福山本町の印刷屋で、画の上手な人だった。生粋の福山ッ子だったが、文化関係の方から全協の人々と協力しながら、左翼組織にあたつていて『文学新聞』や『働らく婦人』等が、福山にまわされておりました。

昭和七年の春、検挙されて岡田、花野が福山署の留置場から広島にまわされるとき、彼等が使用していた鍋や釜などの炊事道具は福山署の特高から知らせをうけて、品物を私があづかりました。（花野たちが私を指定した）

彼女たちが、後日福山にきて活動する日にそなえて、吾家に保存しておりましたが、昭和二〇年八月八日よるの福山空襲のさい一つものこさず焼失しました。

花野の女給名、純子ではなくて順子が正しいのです。私は姫路から順子あてに連絡をとりました。

今年から一〇年ぐらいまえ、岡田茂美を東京・青山の無名戦士の墓に合祀を推薦したころ、豊田郡本郷町の岡田の生家に実妹、八重子さんを訪ね、墓参りしたとき、八重子さんの話によれば、

昭和七年、広島から釈放された岡田は一時帰郷していたが、また広島に向向いていった。しばらくして広島から「岡田が危篤だからすぐむかえにきてくれ」と連絡があったので、当時生存していた実父が、広島に店に急行すると、店の二階で兄がたおれていた。

そのそばに女の人がついていたと。岡田は貧しい父が広島から本郷までハイヤーをかりきりで帰郷してそのまま死んだと。

岡田の最後に付添つてくれた女は花野フジエではないかとおもいます。

二、続 故花野フジエ 闘いの記録

昭和五七年一月二三日記

昭和七年春、花野フジエは広島県左翼関係一斉検挙で、在福中の岡田茂美とともに福山署の留置場に拘置された。特高の取調べに彼女は平然として、

「いま福山公園で桜がさいているでしょう。ここでグツグツうるさい調べをするよりか、あなたいっしょに桜見物にゆきましょう」と、取調べにはこたえず、特高をなやませたと。――後日、特高自身、全労の事務所にきてもらしていた。アカぬけした現代的な、彼女のからだに力づよ

い指導能力があり、いつも他人をひきつけるなものかをもっているようだった。しかし、女としての生理日には体に異常があったのか、苦しんでいる様子だった。

全労系福山労働組合員の紡績の男工をつかんで、公園でひそかに連絡をとり、全協指導下にとりこむ活動をしていた。さそわれた男工さんたちは、ベッピン（美人）にさそわれて胸をドキドキさせながら指定場所についていたようすが福労事務所に報告されていました。

彼女は山陽紡績の争議で階級的にめざめた。そのころ（昭和五年ごろ）として、婦人運動家の少ないときに、ほかより目立つた活発な行動のできる人だったので、全労系の組合関係では広島、福山ともに、彼女を知る人はみんな彼女に好意をもち、将来を期待するようでした。

『広島女性史』の本に、守田スミエさん、小寺マツ子さんが彼女、花野に関して話されているとおり、彼女は闘争訓練不足の上に、婦人労働者出身なるが故に運動の面で重要視された点と、当時広島左翼運動の組織が弱小体だっただけに、組織拡大に気持ちが急ぎ、おちついて運動にとりくむことができなかった。また一方では彼女の実弟の花野岩男の検挙があり、彼女の親から「フジエの影響で弟をカンゴクに入れた」といわれ、彼女にはかなり動揺があったのではなからうかと推察できます。

私は、いまになりおもいますが、花野フジエは彼女の古戦場の福山に、かなり愛着がありはしなかったか？ 事件後福山に彼女をむかえてやればよかったとおもいますが、戦時下で思想取締り

はきびしく、私も非転向者なる故に保護観察所の稲田正夫観察官からはニラまれ、時あらば「予防拘禁」おくりしようと私を福山警察署によびだし、特高主任（このころ主任は警部補）は強気のことをなげかけてきていました。そのようなときに、花野と連絡をとることも困難だった。ついに彼女に救援の手をさしのべるのができず、売女の口入を業とするものの妻とならせ、その後原爆死した全協活動家花野フジエが可愛想におもえます。

花野フジエは、山陽紡績、在職以来、山本ヤエ（1912年生？）を妹のようにかわいがっていたし、山本は近親者がすくないこともあり、花野をあつく信頼していた。花野はとらわれの身となり、山本ヤエを指導することができなくなったので、私が福山署の留置場にはいったとき、担当巡査の目をぬすんで、山本の指導を私にたのみました。私がブタ箱をでてから、福紡の女工さんをレポにつかって山本ヤエと連絡をつけ、兵庫県におくりだしましたが、その件についても予想外の問題がおきました。（後日くわしく）。

花野フジエの記録は、このくらいにしてつぎは岡田茂美、山本ヤエの件にいたします。

三、戦前、福山地方で全協の活動をした 故岡田茂美のおもいで

やっと簡単な、はしりがきのような手記をかきおえてお送りすることができました。半世紀前、組織のそとにいた私が自分の記憶をたどりかいたもので、各所にあやまりがあるかもしれません。

福山の左翼運動の先輩の方々のあゆまれた道が、私の手記の一部分でも資料として参考になり、記録として後世にのこすことができれば「俺をバリゲートにして革命戦をたたかってくれ」というのこして、二〇歳のわかさでこの世を去った岡田茂美や、戦争に絶対反対をさげながら戦争の最大のギセイとなり、原爆死したなつかしいフジエさんに申訳がたつ気持ちがいえます。どうか私の手記を手直ししてよりよいものにしてください。

（昭和五七年二月五日夜）

「兄は共産党でした。兄が共産党の運動して、そのために検挙され、私達一家はどんなにくるしんだか。野田さんおわかりでしょうか。何もなかったことにしてください。知らなかったことにして、たよりはおこさないでください。私たちのいまのしあわせな生活はこわしたくない。いまの自分のきもちは玉となつてくだけんよりか、瓦となつてながらえんことをのぞみます。」

こんな意味のかかれた八重子さんからの手紙をうけとつた。封筒の表上部には、切手がさかさまにはつてあった。

私は八重子さんからの手紙をよんで、なんともいいようなない無気力な、くらいくらしいきもちになった。この手紙をうけとつたのは、昭和三年の春ですから、その日から二二年が経過します。私は岡田家の皆々様の安否をきずかいながら、いままでなにもしてあげられなかったことを残念におもっています。

八重子さんや御主人、お嬢さん、あれから元気でおくらしでしょうか。

さる昭和三年三月一八日の東京青山の「解放運動無名戦士の墓」に、全協オルグ故岡田茂美の合祀推薦の手続をすませたのち、私がひとり山陽線本郷駅に下車して、不案内な元北方村を訪ねたのは昭和三年一月四日だったと思います。

村の入口に位置している木下飲食店にたちよ、北方村上谷の岡田家をたしかめてから、たずね、たずねて岡田茂美の生家に行った。その日は正月やすみで、在宅中の八重子さんや、学校の先生の御主人におあいすることができた。

あのとき、私の突然の訪問を八重子さんは、死んだ茂美兄さんが帰ってくれたようだったといつて、どんなにかよるこんでくれたことか。私も時間のたつのもわすれて茂美君のおもいでをかたり、今日の遺族訪問がどんなに意義あることかとうれしかった。

福山にかえってから、日本共産党広島東部地区委員会の木村昭六君に、豊田郡本郷町の岡田茂美の生家を訪問した由をつたえ、且つ彼岡田が、戦前の福山における左翼運動の第一番の開拓者であり、弾圧のためにいかにくるしい闘いをして若い生命を失ったかをくわしく報告しました。

地区委員会では報告をきき、協議の結果地区委員会として、東部地区委員長名で八重子さんあてに手紙で、福山の先輩として活動された感謝とともに解放運動犠牲者家族の苦難の道だったでしょうが、我々の先輩の過去をいままで知らなかった、野田さんにきいてこのたび知って誠に申訳ない、どうか元気で頑張つて下さい、というはげましの言葉で手紙が郵送された。

ところが私の予測しないことがおこつた。私が

本郷町岡田家訪問のとき、木下店で話した「共産党関係のこと」と、東部地区委員会から郵送された封筒の裏書きに、日本共産党の署名があったことで、こんど岡田の家に共産党のものがたずねて来たり、手紙連絡があったりした、このうわさがひろまった。

この年はわが国の安保反対の大闘争がまきおこった。茂美兄の生存中とおなじように、岡田家はくるしい立場にたたされたのである。

訪問した日、八重子さんから長ゴム靴をかりて足にはき小高い裏山に案内してもらった。そこが岡田家の墓地であつた。小石がおかれて、その下に岡田が埋葬してあつた。

私は三〇年間わすれることのできなかった同志岡田の墓にしずかに頭をさげて礼拝した。解放運動の犠牲者がこんな淋しい場所に安置されて今までだれひとり仲間がたずねてこないことは、岡田よ淋しいだらうよ。感きわまつて涙にくれた。

後日『アカハタ』（赤旗）投書欄に私は、昔の全協活動家の岡田茂美の墓まいりの報告をかき、かたがた岡田の生前の活動について知っていられる方々は、岡田の生前のよりくわしい活動状態を知らしてほしいということいっしょに、犠牲者岡田の墓を建立することに協力してくださいとうったえました。しかし私の投書にこたえてくれる人はひとりもなかった。

私は岡田茂美とおなじ年のうまれです。中国の昔の人が「七十古来稀なり」と申されているそうです。古稀の私、余生いくらありましようか。岡田のお父さん、実弟雅之君、それから幼かった八重子さんたちを思えばどんなにか胸がいたみま

す。

我々の先輩、岡田茂美の生前の活動の報告をいまこそ私がしなければだれがするだろう。年が経るにつれてわからない部分が多くなる。八重子さんの苦しい心の中はよくわかる。どうか許して下さい。私は拙い筆で過去の記憶をたどりながら書く。

岡田との出会い

さる昭和六年の暮にちかいある晩だった。私が一番しづかに、福山桜町全国労働組合同盟、福山労働組合事務所を、顔に血の氣のないひとりの青年が訪ねてきて、組合の申込書をだした。この青年は要領をえないことを話してしばらくしてかえった。そのころこの家の階下は、久下本有さんの住居になっていて、二階が全部組合事務所として使用されていた。

あとでわかったことだが、この青年が岡田茂美であつた。私が彼にあつた最初である。彼は組合の様子を調らべにきたのだった。

つぎに私が彼、岡田茂美にあつたのは、福山警察署の留置場の、おなじ監房にいれた昭和七年の春だった。

昭和七年、瀬戸内海にうかんでいる木之江島の石粉工場に争議が勃発した。木之江の石粉工場は福山労働組合が指導的立場にあつて、福山支部として活動していた。

この工場には、半島出身者もいて戦闘的組合だ

つた。社長が明石市にすんでいて、島内の工場だけでは争議解決のみこみがないので、明石の社長のところまで福山からあるいてゆくことにきまり、いわゆる餓死行進を決定した。広島から応援にかけつけた村井一夫、福山の久下本有、ほかに何人かの者が行進にくわつて出発した。

占部要次、三谷文太郎それに私たちは福山残留組になった。

そのるす番中に、福山市天神町のバーム工場（タワシ、ホーキ製造）で、要求書提出から争議にはいる事件になった。

それよりか少し前、同年四月一六日（4・16記念日）、福山労働組合の事務所は、前から家主に家のあけわたしをいわれ、裁判であらそつていたが敗訴したため、入口はがつしりした大きな木をうちつけて閉鎖され、なかの荷物はそとになげだされた。退去命令である。この桜町の事務所の家主は野島石炭店で、福山ゴムの工場主の所有だった。野島は、山口県宇部の桜山炭坑を経営していたのである。

久下本は福山ゴムの労働者で、社長所有の貸家をかりていたのだが、昭和五年の広島電車の争議に応援にいつて、広島村井、吉本、福山の藤原孝憲、岡田嘉市、山口五郎、大阪の大西らとともに投獄され、そのために福山ゴムを首切りとなり、家のあけわたしをせまられていたのである。そのような事情で、木之江やバーム工場の争議の発生したときには、組合事務所は福山市東堀端町（現城見町）の佐藤完一経営の餅屋の貸家を中心に、そこに移転していた。

あのころは、福山、広島と争議がつづいておこ

り、福山も広島も活動家はお互いに応援しあい、そのために入獄する活動家が多かった。

こうした多発する福山の争議のなかで、私は福山警察署に検挙されたのである。

福山のブタ箱で岡田茂美といっしょだったし、そのときに彼がかたつたこと、いま私が記憶していることをつぎにかいてみる。

全協組織の関係については、なにひとつかたならなかったし、私のほうからもきかなかった。しかし岡田や花野が福山にきて、組織活動をする事について、彼等のうしろにいる指導的立場の人が林となる人だということはうすうす私は当時知っていた。

岡田には足のわるい父がいて、自分でつくった木の義足を足につけて不自由なからだではたらかし、弟雅之（マサユキ）は尾道の青果市場にすみこみ店員としてはたらく（年齢18歳くらい）、北方村の生家には、幼い妹八重子が父といっしょにすんでいる、ということだった。実母のことについてはなにもはなしにでなかった。

妹は岡田にとつては可愛いいらしく、獄舎でつねに心にかけている様子だった。たまたま山本ヤエが、妹とおなじ名前だったので、どちらにも特別のしたしみをもち、彼は口にしていた。

豊田郡北方村上谷（現本郷町）が生家とおしえてくれたが、あれから三〇年たつて、私がその生家をたずねるまで私はその住所を記憶していた。

彼等（岡田、花野）は検挙をうけてブタ箱にはいつてから、だれも知り人はなく、自分らの組織関係の者はやられていることだし、ブタ箱の彼等に救援物資はなにひとつはいっていなかったとお

もわれる。

その年の八月中旬に、彼は郷里で死去するくらいだからそのころはかなり体がよわつていて、ほとんど横になっていた。そんな状態にもかかわらず釈放されなかった。彼は死を覚悟していたとおもえるし、彼の精神力はなかなか旺盛だった。

岡田、花野の立派な獄中態度に感動して、私は合法活動から地下活動にすむ決意をしたようにおもいます。

私は福山警察署を釈放されてから、尾ノ道の青果市場に岡田雅之君をたずねた。そうして、こんなことをはなしたとおもいます。

「君の兄さんは福山警察署にいたけれど、彼はプロレタリアの解放のためにたたかっていたのであつて、なにもわるいことをしてつかまつたのではないし、立派な行爲をしたのであるが、金持ちやその手先の警察など取りしまる方がわるいのだ。心配しないで元気をだしてはたらいいてくれ」と。

幼い店員の雅之君は、淋しそうに私の話をきいていた。これが彼にあつた最初であり、また最後だった。それから三〇年ちかい年月がたつて、私は本郷町を訪ねたとき、弟雅之君にあらうことができるとおもひ、村をたずねたのであるが、村の入口の木下店できいたのはなしでは、雅之君は一時、自動車（トラック）にのつてはたらいっていたのであつたが、いつの日か死去したと。再会をよろこぶつもりで訪ねたが、墓前での再会となつた。

私は昭和七年六月中旬、福山をでて兵庫県にはいった。私が福山をたつすこしまえのように記憶しているから、六月のはじめのようにおもいます。

北方村から岡田茂美が私あてに近況報告のしらせをよこした。

「自分は先日、広島から釈放になり、郷里にかえり兵隊検査をうけ、検査場で検査官にしかられた。ひさしぶりに郷里にかえると、野も山も緑で空気はすみ平和な里にたつて気持ちがいい。しかしその反面、貧しい農村があり、村人は営々としてはたらいっている。」

妹八重子さんの話によれば、「兄はそのとき（昭和7年）帰郷して、しばらくして再び広島にでていったが、八月広島から『茂美危篤』のしらせをうけ、足のわるい父がいそぎ広島にとび、店の二階にねていた兄を当時としては異例の貸切自動車にのせてかえつたので、近所の人達はハイヤーを利用したことにおどろいていた」と。

彼、岡田は広島で釈放され、保養することもせず、党再建のため広島にとび、ついに花野フジエがはたらく店の二階にたおれていたのではないかとおもふ。「二階では若い女の人がつきそつていてくれた」とのこと。

岡田茂美は昭和七年八月、二〇歳の若さで世を去つた。

福山警察署で最初に左翼の動きに気づいたのは、昭和七年初頭の3Lデーの記念日に半紙判の用紙に赤の筆書きで、左翼のスローガンをならべて「×月×日福山の八幡さんに集合してデモに参加せよ」こんなアジビラが電柱にはりつけてあつたとか。私は本物をみていないのでそのビラの内容はくわしくはしらない。

あのころ彼等は、福山に謄写板をもちこんでいなかったのか、岡田たちが検挙されたあと、彼ら

の所有物を警察からあずかったときは炊事道具だけだった。

四、山本ヤエ

——兵庫県へ潜入に関して——

木ノ江、森川石粉工場争議団は昭和七年五月下旬、久下本有、村井一夫等と共に福山を出発し、途中岡山県の農民組合、姫路の播州化学労働組合等、各友誼団体の応援をうけながら明石市の石粉工場の本社に到着したのである。その中の播州化学に山崎という常任（京都出身）がいて、久下本との間に話ができて、福山の労働者を姫路に派遣してくれとのことだった。

福山は城下町であり、福島紡績が主要産業であった。一方姫路市には福島紡績、日本毛織、竜田紡績、日の出紡績などの紡績産業が主要産業になり、城下町であることと共に、福山と姫路が同一条件を備えている。繊維産業中心地は一般に低賃金である。姫路には紡績工場内に活動家はいないので、組織が進まない。だいたいこんな話だったと記憶している。

私は福山署のブタ箱で、花野フジエから「山本ヤエが福島紡績をクビになっているから、彼女のことをよろしくたのむ」という依頼をうけて釈放されて出た。

山本ヤエは、久下本らさきに広島山の山陽紛争議に応援にゆき、顔を知っている人達からはヤエちゃんとの愛称でよばれているけれども、私は山本ヤエを知らない。その頃、山本ヤエは福紡の女工寄

宿舎に住んでいた。私が直接面会にゆくことはまずいので、福紡女工の藤井アヤ子をつかいにして、寄宿舎にいってもらった。ところが敵の網がはってあった。その中に入ったようなことになり、藤井はついに福紡をクビになった。

山本ヤエとの連絡は、私が独断でやったことで、貴重な組合の工場内メンバーを浮き上らせ、その上クビにならせたことには私に大きな責任がある。しかしこの時、組合執行部から何一つ言われなかった。この事件も私の苦しい出来事の一つだった。

山本ヤエと連絡がつき、彼女は姫路の播州化学の山崎をたずねて姫路にゆき、紡績工場にはいるために福山を出発する決心をした。

一方ほか二名の婦人が姫路にゆくことにした。

一人は藤井アヤ子、もう一人は松岡政子。松岡は去る昭和三年の福島紡績福山工場の大争議の犠牲者（被解雇者）のうちの婦人闘士だった。（注）、藤井アヤ子はのちに昭和九年春、私が岡山刑務所に服役中に私の妹になりすまして私の面会に来てくれて、外部の状況を報告してくれた。服役中は近親者以外は絶対に面会は許されなかった。このことがバレたら、私が治安維持法で服役中のことだから、大変なことになるのだった。

〔注〕 松岡政子。（争議報告演説会で）「カゴの鳥より、カンゴクよりも寄宿すまいはなかつた」とやって、臨席の警官から「注意、検束」をくつたとき、一六歳だったという。いま老いて福山に健在という。（広島県労働組合会議編「広島県労働運動史」P 74）

山本ヤエの福山脱出は、スパイの目が光っているもので、充分注意し、福山駅から一つ東の、岡山県境の山陽線大門駅まで歩いてゆきそこから乗車することにした。福山の他の同志には誰にもこのことは話さず、私と山本と二人で決行した。

私は地理に不案内の山本を大門駅まで送った。山本について、藤井、松岡が姫路入りすることが出来た。山本は竜田紡績、藤井、松岡は日の出紡績に入社して、各寄宿舎に入るようになった。

私が姫路にゆき活動するようになって知ったのであるが、その後松井喜代治の奥さんが福島紡績に、白井憲一の関係の婦人が日本毛織に入っていた。

松井喜代治は元岸和田の紡績の方で合法活動していたと。姫路に来てから、飾磨にアジトを設け、奥さんは工場の寄宿舎で生活していて時々奥さんの方からアジトを訪ねていた。松井との連絡は小林春馬が当たっていた。（松井が本名か変名かわからないし、その後松井の行動は誰からも聞いていない。）

私は昭和七年六月中旬、福山を発って姫路入りした。私の従兄弟が姫路市外手柄村に住んでいるので、そこに身をよせた。ずいぶん迷惑をかけ申し訳なく思っている。

工場にもぐることが出来ないで、変名で「大八」という食堂（姫路駅前の神戸ゆき神姫電車駅の横、鉄道・電車・自動車の労働者相手の食堂）で月給五円で働くことになった。住込みでは会議も何も持つことが出来ないの、アジトがほしいと思っていた。その頃運動の方は播化の山崎と連絡をとっていた。ある日、私の居所をどうして知った

のか、広島市の村井一夫が大八食堂を訪ねて来た。彼は大阪へ組合の大会か何かで行くところで、途中下車して私に会いに来てくれた。

私に左翼に走らないように自重して運動してくれといった。私の将来を心配してわざわざ訪ねてくれたと思ひ感謝している。

ある日山本ヤエと街頭で連絡をとったことがあるが、アジトが必要な話でたとき、山本は自分の着物地でフトンを作るからとのことであった。彼女は文学少女的なところがあり、未知の姫路にきて淋しさを感じていた。私が何かの話をいつに、彼女に向って冗談に、子供をつくればよいといったら、彼女は私は心臓が弱いからだめよといった。

空気の悪い紡績工場内で働くので、内臓が悪かったのかと思う、この頃広島の花野から私に、順子という名で手紙が来た。私に来るぐらいだから、花野フジエと山本ヤエの間に連絡があり、山本には広島の花野の居所はわかっていたと思う。

山本は一度私に満州の伯父の所に行きたいといったこともある。

私はアジトを持つことが出来ず「大八食堂」から姫路の女郎屋「音羽」の主人が経営する野里の養鶏場に転職した。そこで私が所持していたコップ関係の本を、養鶏場の同輩にみつき警察に密告されて検挙された。その頃は駅の近くに警察があったのだが、私がブタ箱に入っている時、国道二号線筋、総社の近くに新しい警察が新築されて、新監の方に護送されていた。

取り調べは県本部の影山警部補が当たったが暫くして釈放された。検挙されてから山本ヤエとの連

絡はきれた。私は他のことは何もしゃべらなかった。検挙が彼女に及ぶことはないと思う。今もなお彼女、山本ヤエの生死が気になっている。彼女は山本キシエと従姉妹の名を使用していた。

五、小林正一について

福山のブタ箱生活のとき、小林正一が松永警察からまわされて福山にきていた。私は一度、小林に房外であったのであるが、担当巡査の目がひかっている言葉をかかわすことができなかった。

無名戦士合祀者名簿によれば、昭和六年頃松永町（現福山市）柳津町の進歩的な青年とともに、日本赤色救援会松永地区委員会を再建、その責任者となり、昭和七年三月五日に一斉検挙せられ、その後も松永地区で昭和八年三月一八日、一斉検挙せられた。

昭和二七年五月一八日、松永駅東方一八〇〇メートルにて鉄道自殺。享年四四。遺族は妻春巳。

六、昭和七年ごろの全協活動家

（福山地区）

佐藤茂 福山市吉津町。一九〇九年（明治四二年）生、昭和一九年一月二〇日死去。享年三五歳。印刷工。

福山市洋画グループ「プラタルゴニアン」に属す。全協オルグ岡田茂美、花野フジエに協

力する。広島からオルグ派遣について、事前に佐藤と広島市の指導部との間に協議があったと思える。

影響下には、私が知っている人では

牧本哲夫（元教師） 福山市西神島町

福山党幹部 中島博氏の夫人の実父。

安原（旧姓） 福山市東深津町

東部地区委員長 小林宏氏の実母

南部ヤエ子（故人、元教師） 深安郡神辺町道上

藤原孝憲（故人） 福山市

戦後、福山市職員組合初代執行委員長

中山一郎 福山工業試験場

佐藤茂の友人で画の関係の人と思える。

山本ヤエ、花野フジエを通じて、福紡の工員。

三成五郎（現、藤井五郎）

小寺吾一（三成の友人）

昭和七年三月五日の検挙でだれがヤラれたか全部は知りません。（おわり）

〔注〕 兵庫民報社『炎の記録』野田氏手記。

「昭和七年二月三〇日夜神戸市新聞地相生座うらで検挙（共産党関西地方委発行のビラ『64議会の23億円の軍事予算反対』を配布中）。兵庫署留置場に昭和七年暮から八年九月下旬までいた。昭和一〇年岡山刑務所を出獄。その後福山労組の活動に参加」。



赤旗まつり大泉緑地
一九八五年五月五日

尾道地区の人々

樋口 利夫 談

一九八一年一〇月三日、新大阪駅に尾道市向東町の樋口利夫氏の上京途中をむかえて、駅構内の喫茶店で戦前の尾道地区における左翼運動家のことについて聞いた。樋口氏は戦後、三原三菱車両の労組委員長だった。

樋口氏から、尾道地区の安田貞務氏、迫川敬一氏、熊谷良一氏および瀬戸内港湾従業員組合で野村秀雄氏とともに活動した小林太郎氏の名をきかされた。安田氏、野村氏は今はないが、そのほかの人たちには手紙で問いあわせた。

一月一四日、一五日、一六日の三日間、尾道市と沼隈郡常石町千年（チトセ）に、それらの人々たちをたずねた。

樋口利夫氏にきく

一〇月三日 新大阪駅にて

(一) 尾道出身の安田定（さだむ）という人が尾道にかえってきて、私たちに左翼運動のことをおしえてくれた。熊谷良一、迫川敬一、私などがよく安田氏のところへいったものだ。

私は大正一〇年尾道郵便局にはいり、そのころ集配係をしていた。おなじ局にいた熊谷良一君からさそわれてたびたび会合にいった。

迫川敬一君は現在、左官をやっているが、左官の組合長で全建労に所属している。熊谷君は戦後レッドパージで郵便局をやめた。

安田氏は現場の労働者に検挙がおよばないよう

に用心していた。彼は家族といっしょに住まないで、自分ひとり、山手にある本家のほうの家にすんでいて、そこにみんなをあつめていた。家族のものにはあわせないことにしていた。「3・5事件」で、安田氏が検挙されたので、いずれ我々のところにも警察から手がまわると覚悟していたが、安田氏はがんばって我々のことを白状しなかった。そこでこちらに検挙はおよばなかった。

安田氏は釈放されてから、我々との接触はさけていた。彼は満州へわたったとき、ひきあげてこない。

(二) 私たちは郵便局で五〇人くらいの「互助会」をつくっていたが、「通友同志会」（因ノ島、土生の郵便局にできていた総同盟系）とは連絡がつかなかっただけで、郵友同志会からののはたらきかけをけとばしたわけではない。

そのころ浜口内閣の緊縮政策がはじまって、郵便局にも人員整理と減俸がおこなわれた。(1929年1昭和4年1秋 浜口内閣の官吏減俸案発表)。一〇〇円の給料のものは九四円になった。また尾道郵便局の配達区域は、これまで一〇区にわけていたのを九区にされて、人員整理と労働強化になった。

「通送」といって、鉄道の駅とのあいだの郵便物のうけわたしも人が一名へらされた。

(三) 配達のことでもいさすのは、尾道にそのころ住んでいた野村秀雄氏のことだ。郵便局長が「野村あての郵便物はとりのけておいてこつちへもつてこい」と命令した。私はそれにかまわずほかの手紙につつこんで、そのまま配達していた。

「野村あての手紙はこないじゃないか」と、局長がよくきいた。警察とくんで野村氏あてのものを検閲していたのだろう。そのころから野村秀雄氏のことは知っていた。彼は尾道を中心に、瀬戸内海の船員の組織をすすめていたようだ。その時の船員で、小林太郎という人がいまも元気である。

(四) 私は昭和一五年に尾道郵便局をやめて、三菱にはいった。神戸の三菱造船の和田岬の寮にいた。それから一七年に三原の工場にかわった。

戦後になって、組合をつくるときはまず野村秀雄氏に相談した。

野村氏は、アメリカ占領軍の共産党にたいする弾圧はかならずやってくる、だから黨員も一〇人に一人はおもてにださないでしずめておく必要があるといっていた。

安田貞務のこと

迫川 敬一 談

迫川敬一氏の手紙

一九八一年一〇月二二日

思いもかけぬ御手紙でした。記憶にあることを次に書きます。「安田定」ではなく「安田貞務」です。私より二つ年上ですので、今生きていれば七〇歳のはずです。

検挙されたのは昭和七年の二月だったと思います。寒い夜、安田と私は同時に別々にとらえられ、尾道警察署のブタ箱へ別々に投げこまれました。箱は三つあって、その両端なので話しあうことはありませんでした。留置された日数は四九日間、取調べで、特高の目的は当時ひそかに読んでいた『赤旗』の入手経路及びその他の出版物、ま

た尾道における他の仲間等、今から思えば、よく知らぬで通したものと思っています。

また検挙されたのは別のグループで、野村秀雄氏、栗根恒夫氏、土屋某氏がいましたが、それまで面識もなく、警察の方でも無関係と考えていたようです。

安田はこのグループを、社会民主主義者だから危険だと言っていました。考えればそれほど当時は相手を警戒して、接近しなければならなかったのでしょう。しかし野村氏も、栗根氏も事実は同じ方向にむかった者同志であったことは戦後社会主義政党の合法化によって公然たる活動が行われた中で判ったことでした。

『赤旗』やその他の非合法出版物が、どういう経路を通じて入手なされていたかは、安田氏のみが知っていて私には判らず、特高でいくら責めら

れても言いようがないのが辛いでした。また我々の仲間であった樋口氏や熊谷氏は郵便局員であったし、この二人は絶対に守らねばと強い決意で通しました。

安田氏はそのご再び上京して、暫く消息を絶ちましたが、後年大阪にいた私を頼ってきて、左官職人であった私と共に働いたりしていました。手に職もなく、またつねに特高につけられていた彼は、不遇な暮らしをしながら、でも信念は固く私には判りませんでした。何かやっているようでした。金に困っては私によく無心を言い、一〇円、二〇円とひそかに都合してやったものです。

彼が何故、何の目的で満洲に行ったのか知りませんが昭和一二年頃だったと思います。私も尾道から大阪、北海道、また尾道と職人修業もあって、転々としたのですが、尾道にいた頃、牡丹江か

ら便りが来たことがありました。戦争激化に伴い、音信はとだえて消息も知らぬまま終戦を迎えました。

戦後引揚者の妹タキヨ君達から、彼が既に故人となっていたことを知りました。

思えば私とは家も近所であり、幼な友達として育ち、のち彼の教えをうけ、社会主義の方向をいつの間にか歩みはじめていた私でした。彼が晩年に動揺していたかどうか知る由もありませんが、彼のためそう思いたくない私の気持ちです。満州において両親を失った彼の一人息子、進君が今東京にいるそうですが会ったこともないし、それ以上は知りません。

安田貞務。歳月の流れに移り変わる社会情勢の、目の前にある現実。ややもすれば忘れがちなこの人のこと。おかげで今彼の面影を思い浮べ淋しくも又懐しく昔をしのんでおります。

つい長々と書きました。御希望にそえたでしょうか。

では又。

迫川 敬一

迫川敬一氏にきく

一九八二年一月一四日

尾道市の喫茶店で

安田貞務氏は尾道で高等小学校を卒業してから東京へでた。なんでも小石川へんの本屋に奉公した。そこで勉強したらしい。かぞえどし二〇歳で尾道にかえってきて家の農業をてつだっていた。家は旧家で、借家もたくさんもっていた。家族

はみんな便利のよい下の方にすんでいた。彼ひとり上の方の家にすんでいてそこにみんなあつまつた。

熊谷良一氏は安田氏より小学校が一年以上で、私は安田氏より二年下だったが、小さいときから三人でよくあそんでいた。このほかに二、三人あつまつて、プロレタリア文学の読書サークルのようなものをやった。安田氏がプロレタリア小説の朗読をして、みんなで感想をのべたり、はなしあったりした。

プロ文学の本などは本屋でうっているから、あまり用心しないでもよいが、非合法の出版物は用心しなければならない。だれでもあつめるわけにゆかないので、郵便局の樋口利夫氏をいれて、安田、迫川、熊谷と四人でサークルをつくった。

粟根氏、土屋氏などは別の文化サークルをつくっていたが、安田氏は「かれらは社会民主主義者だ」といつていた。このサークルとどんな関係からか、野村秀雄氏とレンタルがあつたらしい。

そのころ尾道港に入った船の船員のストライキがあつて、尾道の人たちはかれらは社会主義者だというような目で船員たちをみていたものだ。(尾道市の喫茶店で)

尾道郵便局のこと

熊谷良一
樋口利夫

尾道郵便局のこと

―熊谷良一氏にきく―

一九八一年一月十五日

尾道市新浜 熊谷氏宅にて

そのころ尾道郵便局には活動的な人々がいた。私はいわゆる文学青年というほうだが、樋口利夫氏などは活動家タイプだった。「互助会」を組織していた。

因島、上生、両郵便局には総同盟系の「通友同志会」ができていたが、そこからビラなどの出版物もおくってきた。しかしそのころの総同盟のやりかたをみて、通友同志会とレンラクをとるのはあぶないと思った。こちらの局のだけれどそれが活

動家か、だれだれが中心分子かなど、みんな知られてしまう。

今日の「統一戦線」というような考え方からみれば「セクト的」だといわれようが、そのころの特高は、職場の活動家をみればすぐにひっぱる。そんなわけで通友同志会とは連絡をとらなかつたわけだ。

尾道局の「通送員減員」(一〇名を九名にへらす)の反対闘争で、三島坂次郎君が解雇されたのは、且君が職制につぐぐちをしたためだとおもう。故人をわるくいってはいけないが。

三島君は思想的にはつきり左翼というほどではないが、正義感のつよい男だから先頭にたつてやったので首になったといえる。

尾道郵便局と三原車両のこと

―樋口利夫氏にきく―

一九八一年一月十五日

尾道市向東町樋口利夫宅にて

戦前のこと

私は明治四一年うまれで大正九年高小を卒業して、大正一〇年尾道郵便局にはいり昭和一六年八月にやめて神戸の三菱造船にはいった。そののち三原の三菱車両にかわった。

尾道局には現業員―電報、郵便、保険などの親睦会として「愛親会」というのがあった。これには郵便局からも金ができるし、えらい人も顔をだす。これとは別に、配達員だけで「互助会」をつくつ

た。五〇人くらいのメンバーで自主的に運営して、役員も投票にした。

「愛親クラブ」という野球チームもあって、私が監督兼キャプテンだった。

野球秀雄氏をはじめてみたのは、丸一汽船のストのときだった。この丸一汽船は尾道郵便局から四国松山ゆきの郵便物をつむので、船員とは顔なじみだった。尾道郵便局からもストライキの応援にいった。

野村秀雄氏が船員たちに演説していた。彼は立派な口ヒゲをはやして「海員組合からもメッセーじがきた」などといっていたが、まったく人をひきつけるものがあつた。(この演説のあと彼は検束された。)

「瀬戸内港湾従業員組合」の尾道支部の主事が野村氏で、常任として活動していたのが、いま常石にいた小林太郎さんだ。

尾道乗合バスのスト、山根ゴムのストなども野村氏が指導していた。バスのストライキは車掌さんたちが争議団本部にたてこもって、たたかった。山根ゴムもはげしいストライキだった。

戦後の組合結成

三原の三菱車両従業員組合は、一九四五年(昭和二十年)十一月一日結成された。野村秀雄氏を相談役にした。会社の隠匿蔵物資をあばきだし、組合管理のもとに配給した。これで労働者の、組合にたいする信頼がたかまった。

委員長は「いっぺん伊勢本にやらせてみよう」ということで彼にすることになったが、闘争がす

すむつれて半年もしないうちに「もうやってゆけん。たすけてくれ」と私に言うので、委員長を交代した。彼は本社に交渉にいつてもすぐに妥協してしまうのだ。

秘書ということで、重家豊君をえらんだ。彼は三原で看板屋をしていたが、車両の鋳物工場にはいったのだ。有能な人で、父親は呉工廠の役付きだったそう。安芸津に家があるとの事だ。今呉で入院している。

あくる年、昭和二年三月一日をきして闘争にはいることになった。その闘争にはいるまえ、青年行動隊をつれていつて本社野口常務をつれてかえり、団体交渉をおこなった。このとき青年行動隊のうち七人が入党した。これが三車党細胞のはじまりだった。のちに三車(三原三菱車両)で黨員四〇〇人から六〇〇人になった。

野村秀雄氏はまえにいったように、アメリカ占領軍の弾圧はかならずくるから、黨員一〇人に一人はしずめておけといっていた。野村氏はこうした党の防衛ということを党本部にいつてもきびしくいったということだ。

職員のはうで、社会党にはいつていた赤松氏や平野氏が共産党にはいつた。平野氏は三車の職員組合の初代書記長だ。彼は首切りになったとき、不当な首切りだと労働委員会に提訴して勝ち、首切りを撤回させた。彼のちに、石田という総務部長ととりひきして「会社に忠誠をつくすから」というようなことで、職員のレッドパージをゼロにしてしまった。

昭和二年三月一日の闘争で、従業員組合はクローズドショップを要求した。野村氏は、クロ

ーズドショップというものは「両刃の剣だ」といつていた。それはいつたん組合がひっくりかえって、反共になると、左翼分子は工場からおいだされることになるというのだ。

この闘争で、工場内に組合事務所をおくことをみとめさせまた月給制を実施させることとなつた。

所長は「月給制にしたら能率がおちたではこまる」と心配して、組合に協力をもとめた。われわれは「自主的にやる」といつて生産復興闘争をくんで、月産、エヤブレーキ二〇〇〇個、機関車修理八両を目標にした。

全国車両産業労働組合の結成をよびかけて、三原車両で結成大会をひらいた。若松日立、下松日立、川崎車両、汽車会社、近畿車両、帝國車両、日本車両ナゴヤ、汽車会社東京、日本輸送機(山崎)など計一万八〇〇〇人。産別会議に加入した。労働組合にたいする攻撃は、つぎのようにはじまった。

まず、GHQ労働部が「共産党の労働組合支配の実体」という、図解のようなものを発表した。これで動揺したものがあつた。

昭和三年四月天皇を三車にむかえ、これで④をつぶす計画を会社がたてた。組合の委員会、社会党側から天皇の三車参観を歓迎するために、午後から工場を臨時休業にするという案が出された。これを投票で採択することになったが、左翼はこれにまけた。

暴力団が「三車肅正会」というものをつくつて、チヨツカイをだしてきた。

それでもうまくゆかないので、会社は第二組合

をつくることをもくろんだ。

また企業整備ということを口実に、第一次から第三次まで、活動家をねらいうちに首切ってきた。このとき「川上事件」といって、ボイラー場占拠事件がおこった。

第二段として臨時工四、〇〇〇人のうち二、〇〇〇人の首切りを発表した。この首切反対闘争で、活動家が工作部長をとじこめて交渉した結果「首切はしない」という誓約書をかせた。会社側は、多数の脅迫によってかかされた誓約書は無効だとして、この闘争に参加したものを全員を解雇した。この闘争をはじめるとき、組合に知らせるとやめろというにきまっていると、組合に無断でやったわけだ。

第三段として、企業整備に名をかりて一七〇名首切り。これで第一組合の勢力の大半がぎられたわけだ。このころ工場の中はサボタージユ状態で、生産はほとんどとまってしまった。

そのとき「二〇万円事件」がおこった。工場委員会で、闘争費用としてつみたてられている二〇万円を利用する件が提案された。このかねで食用油を一括購入して、組合員に配給するというものだ。これは工場委員会で可決された。会計から二〇万円もってきた。もういちど工場委員会をひらいて確認をとったほうがよいという意見もでたが、手続きはすんだのだからと、そのまま油屋にわたした。これは失敗だった。結局油屋から油をもつてこないということになった。

昭和二四年のメーデーは分裂メーデーになった。三車の第二組合は、青い旗をつくって反共主義のデモをやった。のちには統一ということの名

目にして第三組合もできた。

第四段の攻撃が、レッドページだ。

河野栄氏のもっている写真は、第一組合解散大会のときのものだ。

〔参考〕 河野栄氏手記（要旨）

ある日かえってみると内容証明の封書が会社からきていた。開封せず組合長の手で一括会社に戻した。しかし工場内の空気は一変し、反共幹部は肩いからせて

「赤旗はもう我々には必要はなくなった。諸君、もってかえって女房の腰巻きにでもしたまえ。女房がよろこぶぞ」という始末だった。

慶応大学出身の幹部が法対部長となり、裁判にうったえ毎週私達は尾道地裁にでかけました。また一方では犠牲者の生活のため三原の職業安定所に集団でおしかけました。なかなかどうして、元気な若者たちが幹部のあとからおしかけて、半数は所長室へ、半数は廊下でさわぎ、職員は事務がとれないありさまでした。なにしろ、首切りは不当だからめないと裁判にうったえながら、一方では失業保険金を支払えという交渉です。矛盾した話ですが、何回かおしかけて交渉するうち、とうとうみとめてくれました。

つづいて組合がアメを一括購入して、各人の居住地で、宣伝をかねて闘争資金づくりをしました。こんなこともありました。本通りのある店のオヤジさんがおしえてくれました。——アンタは講釈ばかりいうて、手がうごかない。行商とは必要なことを簡潔に手早くはなしながら、ふろしきをひ

ろげて品物をあいてに早くみせるようにしなければ——といわれて、なるほどとひとつ勉強になりました。それから半同情をよせてかっもらいました。

三菱の闘争も昭和二五年六月一日解決し、一人名が復職、他は闘争期間中の賃銀をもらって「解雇」でした。

当時の記念写真をひきだしてみると、鉛筆で一九四九年三月から一月一七日まで、四回にわたって解雇されたとあります。

その間会社側のきりくずしもあって、生活がくるしくなると、会社のいうことをきくものがあるのでしよう。写真のうらには、

「一二〇名中落伍者でる。完全拒否者五五名」と記してあります。私はもちろん五五名にはいません。

一年五ヵ月かかりました。写真や金をもらって、ばらばらに散ってゆきました。

このころ経営細胞には便箋にかいて正式に離党届をだしました。居住細胞には一年あまりたつて、口頭で申し出たはずです。人情的にいいづらかったのです。

その間ほんとうに苦しい生活がつづきました。左官のてつだい、大工のまねごと、フスマのはりかえ、自転車修理などなんでもしました。家では女房はカマスを織り、四〜五時間ぐらいしかねなかったようにおもいます。（後略）

（河野氏は鹿児島出身。戦後竹原市に居住。三原三菱車両に通勤。三車細胞及び竹原細胞に所属。手記は最近竹原市の数本氏に寄せられました。現在大阪府在住。）

野村秀雄のこと

小林 太郎 談

小林太郎氏にきく

―瀬戸内港湾従組と野村秀雄氏のこと

一月一六日 沼隈郡常石町十年 小林太郎氏宅にて樋口利夫氏とともに

野村とのあいには、つぎのようなことだった。

私は尾道で小型船の機関長をしていた。そこへ瀬戸内港湾従業員組合の常任の柴田世界というのが、棧橋についた船によくオルグにきた。組合費の五〇銭をおさめてくれる組合員をたくさんつくらんと、かれもめしがくえないわけだ。

わたしは柴田とは気があわんというか虫がすかんというのか、「毛唐かぶれの社会主義なんかよせつけるな」と、わたしはいじがわるいから、三つ

の棧橋をおさえて柴田をよせつけないようにしてやった。私はからだはちいさいがケンカばかりしていた。「ケンカ太郎」などといわれていた。

そのうち野村秀雄がやってくるようになった。

野村はどこでもおかまいなしにはいつてくる。向島ドックなどにも、守衛に「よう」などいつてどんどん工場のなかにはいつてゆく。私が船を棧橋につけると、さっそく野村が機関室の上からのぞきこんで声をかけてくる。まい日でうるさい。

「機関長、きのうケンカしたのう」ある日また野村がきていった。どこかできてきたのだ。

「ケンカしようがどうしようがワシのかってだ」といつてやった。きのう、さかり場でゴロとケンカして、八つ折り（草履）で相手の鼻柱をなぐりつけて船にもどってフトンをかぶってねていたのだ。

「ケンカいうものはいのちがけでなければするな。七つ八つの子供とケンカするんでも、本気でやらんといのちを失うぞ。一對一のケンカなんかするな。沢山の人のためのケンカならせい。佐倉宗吾郎を知っとるか」ときた。

「佐倉宗吾郎ぐらい知っとるわい」

「沢山の百姓のためにたたかって、ハリツケになった。神さんにまつられ、芝居にもなつとる。芝居のまえの日には雨がふるといいうじゃないか」

なるほどとおもった。そんなことから野村のところにゆくようになった。かれは尾道の池田商事のとりの、写真館のおやじやむすこまで「まるめこんで」その二階にすんでいた。野村は立派な口ヒゲをはやし、洋服をきてスマートなかつこうをしていた。柔道やカラテもやっているので暴力団がきてもおそれない。かれは海員組合刷新会の

ほうで左翼だ。右派の海員組合のほうは野村の活動をおさえようとしていた。

私も野村のあとをついてあるようになった。尾道丸の機関長をやめて、常任をやることになった。西京町に洋服屋をひらいて女房がミシンをふんだ。生活はらくではなかった。なにしろ、野村までやしなわねばならない。五〇銭の組合費をあつめてもくえるだけにはならない。

野村にたいする援助は、そのちずつとつづけた。そのうち彼は愛子さんと結婚した。たいへんな美人だがそのお母さんがまた「化けもの」かとおもうほど若くきれいにみえる人だった。愛子さんは、巡査がサーベルをガチャガチャいわせてやってくるやと玄関にすわって手をついてにらみつけていた。

そのころ、あちこちの争議の応援にいった。円石正一も野村の支持者で尾道の運動の草分けといわれていた。円石は尾三タクシー（尾道・三原タクシー）の助手をしていたが、野村がタクシーの争議を彼にやらせた。そのほか尾道乗合自動車のストライキ、山根ゴムの争議も円石が指導した。尾崎汽船のストでは何日か船をとめた。丸一汽船のストでは尾道郵便局からも応援にいった。野村はこのとき演説のあとで検束された。

丸一汽船の経営者は、岩崎栄蔵という男だが、のちには彼も野村のところにくるようになった。糸崎の沖仲仕の争議の応援にも彼が野村についていった。

尾道の港湾で、このころはじめて退職金をとった。

昭和八年私は西京町の店をしめてチトセにかえ

った。脱落したものとみられたかもしれないが、くえないからしかたがない。

海岸にいつてみると、子供のころカキをとつてやいてくつたときの岩のくぼみがそのままのこっている。故郷はちつともかわっていない。ほかの港は、一航海してはいるたびに様子がかわっているのに、ここはちつとも発展しない。この村のものがなんとか生活できるようにしなければならんとおもった。

野村が私に、神戸の川崎造船にはいつて組織をつくれといった。しかしはいってみたが勝手がちがう。私は小型船の機関しかさわったことがない。川崎では大型船ばかりだ。大ハンマーをふるって鋳をカシめる仕事もやったことがない。イモノのハツリ仕事では、片手ハンマーで手をたたいてばかりいた。とうとう川崎造船をやめてしまった。

それからまた姫路の家島のストの応援にゆけと野村にいわれた。石船のストライキだ。高等学校にいつていた三木孫三郎と、神戸の某もいつしよにいった。私はこのときはじめて演説をやった。

金光さんからヤシロをもつてきて「こけらおとし」がある。人があつまるから、そこで演説をやれと野村にいわれた。前の晩に原稿をかいいて一生懸命暗記した。さてその日演説したが、途中でわすれてしまった。そこで宿に原稿をとりにかえつてまた演説をやった。

さてチトセにかえつてきてから、村長と相談して、ここは港と港との中継地にあたるから船の油をうることにした。かねは親類にだしてもらった。この村の者も私の油をかうように親類がほねおつてくれた。

そのころ野村は神戸の垂水にすんでいたが、私は毎月油のうりあげから金をもつていつてやっていた。これは何年もつづけた。戦争がはげしくなつて野村一家も私のところに疎開してきた。娘のチイ坊も私のところで育った。

因島のドックにならつて、ここにもドックをつくらうと村長に相談した。村長は平田の土地の権利をやらうといった。

野村は県北の木材をこの港からだすようにしたら、この土地も発展するといった。それには道路をつくらねばならん。道路づくりは、私が町長のときにやった。

それからチトセ村が野村に土地の権利をあたえて、ここにシキナ造船（木造船）のかたちだけはつくった。これはあとで則岡静彦のつとつた形になった。この部落のものに「よそものにうまいことさせた」とうらまれた。

野村秀雄の墓は向島にある。野村家の墓という碑が野村を知る人たちのカンパでたてられた。愛子さんもそこに眠っている。娘のチイ坊も、そこに入れてほしいといっている。

二、昭和八年から昭和一五年まで

共産黨の全國的大檢挙

地下へ潜入する
魔の手を潰滅した

先づシンパ網を破壊
黨の善後大會を機として
首脳部と細胞を一網打盡

防弾衣 鐵兜で
警官隊が突撃
兇弾に胸腹官重傷
熱海大會場手入れ

熱海大會場手入れ

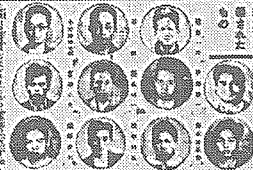
ついに暴徒達を潰滅した。共産黨の地下組織は、この大檢挙で、首脳部と細胞を一網打盡された。この大檢挙は、共産黨の善後大會を機として、先づシンパ網を破壊することを目的として行われた。警官隊は、防弾衣と鐵兜を装着し、兇弾に胸腹官重傷を負った。熱海大會場の手入れも完了した。



大亂闘のあと

現役海軍軍人が
六名からある
した、かな女二人
起訴されたもの十九名

廣島奥で五十六名



起訴された十九名

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

共産黨の地下組織は、この大檢挙で、首脳部と細胞を一網打盡された。この大檢挙は、共産黨の善後大會を機として、先づシンパ網を破壊することを目的として行われた。警官隊は、防弾衣と鐵兜を装着し、兇弾に胸腹官重傷を負った。熱海大會場の手入れも完了した。

共産黨は、昭和3年3. 15、昭和4年の4. 16の大弾圧を受けたあとくり返し弾圧された。昭和8年には、組織を壊滅させるため広範なシンパにまで弾圧の手がのびた。

—当時大檢挙を報ずる中国新聞。



救援会のおもいで

岡 本 菊次郎 談
(福本)

運動にはいるようになったのは、つぎのようなことからだ。広島でプロレタリア科学主催の講演会があつて、そのあと西原初二君の自由堂書店の二階で、読書会がひらかれていたので参加した。石川茂一君がこの読書会の中心だった。

そのうち、全協の活動にはいったが、わたしははじめ巢守鑑札工場ではたっていたので、全協金属労組に、のちに宇品の陸軍運輸部の臨時雇の労働者になって、全協運輸労組に加入した。全協のオルグというのは滝本君だ。じぶんでは広島高等学校の生徒だといっていたが、どうみても高校生とはおもえなかった。

はじめて検挙されたのは、三月五日の一斉検挙のあと、四月になってからだ。新川場町の洋服店の二階、滝本君の下宿しているところへあがろうとしたところを、はりこんでいた特高におさえら

れた。

滝本君のいるへやのてすりに、タオルがかけてあつたら、「るす」または「あぶない」という合図ときめてあつた。タオルがかけてないから、滝本君がいるものとおもつてあがりかけたらやられたわけだ。わたしを井ノ口君だとおもっているらしく、「井ノ口か」「井ノ口だろう」となんどもきいた。西署につれてゆかれてからも、まだ「井ノ口だろう」といっていた。西署には堀江明治君などがつかまつっていた。

そのときは、起訴猶予で、できた。田谷春夫君が全協の再建運動をやっていたので、それに参加した。しばらくして、石川茂一君、中川秋一君ができたので、全協の再建運動はかれらにまかせた。

それから清水次郎君の弟とカンパン屋をやっ

て、山陽道を西に、くだっていった。

カンパン屋というのは、道案内の地図のカンパンをかいて、広告料をもらった商店の名前をかきこんで、これをまちかどにうちつけるというしごとだ。これはけっこう商売になった。

しかし要塞地帯とか、軍事工場のある土地は、そんな地図をかくことは禁止されていたので、そんなところは商売にならなかった。たとえば宇部とか徳山とかだ。こんなことをしながら小倉まできた。小倉でも地図をかくことは、とめられていた。

そのころ、10・30事件のニュースをきいた。商売もゆきづまったので、広島にかえることにした。広島市にかえって、検挙された同志の救援のことが、気にかかった。しかしまだ、だれも差入れをやっていない。これはほっておけない。中川秋

一君のところに救援カンパがすこしあつまっていたので、それをひきついだ。専売局にいた天津せい君、宮島からでてきた坂本四郎君とともに、モッブル活動にとりくんだ。

観音町のある家の二階をかりて、坂本、天津、私とそれから三戸信人君の四人がすんだ。三戸は、10・30事件で検挙され、起訴猶予ででてきたのだが、まだ年がわかい。一日中家のなかでぐずぐずしていることが多く、あまり動きまわる人間ではなかった。宮島からでてきた坂本君は、はじめすぎる男だから、三戸君のルーズなところをひどくいやがっていた。

わたしは、そのころガリ版の原紙をきるのに、すこしやると眼がかすんだ。しばらくやすんで、またやるという、ぐあいだった。なれないからだとおもっていた。じぶんが遠視だということに、きがつかなかったのだ。そのち、昭和一四年東京にでて、古末君のいた本庄製作所にはいつて事務のしごとをするようになってからまた眼がいたむようになった。眼医者でみてもらって、はじめで遠視だとわかった。めがねをかけてから、よくなった。

いよいよ、喰う物がなくなると、わたしは、じぶんの家にうらぐちから入って、米ビツからすこしづつ米をとってきた。すこしづつだからわかるまいとおもっていたら、おふくろは、ちゃんと知っていた。ある日しのびこんだら、米ビツのうえにフロシキ包みがのせてあって、なかにかねとにぎりめしがはいつとるじゃないか。あのときはまいったな。

ふたたび私が検挙されたのは、伊藤正朝君の家

で同志の家族をあつめて、3・5事件の公判対策会議をひらいていたときだ。特高のやつがどつとふみこんできて、そこにいたものはみんなつかまった。このとき坂本四郎君と私が起訴されて、実刑をくった。

特高はすでにオルグの人相まで知っているようだった。わたしはまだ関谷君とあっていないのに、オルグの顔はこれこれだろうと、わたしにきいたのだ。

まえに起訴猶予になっているから、こんどは三年の実刑をいわれた。

刑がきまって、おりた工場ははたおり工場だった。坂本四郎君とはいっしょに検挙されたが、未決のあいだはひきはなされ、公判廷でも分離裁判だからあうことはできなかった。工場においてからあうことができた。

この工場でのしごとは、くつ下のさきのがりだ。板の間にならんですわってしごとをするわけだが、ここでいっしょになった同志は、大藤一君、韓利權君、水兵の佐藤彊君、岡部隆司君、坂本四郎君だった。同志たちだけがならんですわっていたわけではなく、あいだにはかの受刑者もすわっていた。そんななかで、看守のめをぬすんでちいさなこえではなすわけだ。

大藤君は、資本論の研究をやるうじやないかといつた。もつとも、テキストがあるわけではない。大藤君がおぼえているところを暗誦して、それをみんなで討論しようというのだ。岡部隆司君はおくれて工場にはいつてきたが、「出獄してからすぐやくにたつように、一九二七年テーゼを勉強したほうがよい」といつた。岡部君は、産業労働調査

所にいた。(そこでは、産業労働時報やインタナショナルをだしていた。ソ連からかえてきたものが、日本の党とレンラクする窓口にもなっていた)だから、かれも一九二七年テーゼを暗誦するくらいよんでいたのだとおもう。しかし、そんなに大物というようにはみえなかった。のちに昭和四一年ごろ、われわれは東京の蒲田にすんでいたが、岡部君も蒲田にいたのだ。みちでゆきあえばわかつただろうが、あつたことはない。

坂本四郎君ははじめな男だが、しごとの手がおそく、いつもこつちからできあがりまわしてやって、ノルマをこえるように応援したものだ。た。(一定のしごとの量をこなせば、週に一回、ぼたもちをくれることになっていた。)

研究会のことは本はないし、ノートやエンピツがあるわけではないから、それきりになってしまった。

そのほかに、同志たちでやったことといえば「もつとよい本をよませてくれ」という要求をだしたことくらいのものだ。刑務所でよませる本は、宗教の本か精神修養の本くらいしかなかった。

戦後のことになるが、原爆あとの広島市にいつてみたが、党のビラが一枚もはつてなかった。はつてあつたのは戦災者同盟のビラで、責任者として仁井田教一君の名があつた。「さすがにいきょうだ。やつとるな」とおもつた。そのほかの同志はみんな死んでしまったのじやないかとおもつた。

一二月のすえに、同志たちをさがそうと、われらはまた広島市にはいつた。やつとのことで、神崎宇市君のバラックをたずねあて、それからそこ

で、いなかからやってきた玖島三二君にあったわけだ。そして、総選挙に共産党の候補者としてできるように彼にすすめた。玖島君は、わしらがさしだした赤旗再刊第一号を熱心によりながら、「すこし考えさせてくれ」といった。

庄田忠二君の聞き書きをみると、このときすでに岡田春夫君、庄田忠二君、玖島三二君の三人で、党の広島地方委員会準備会をつくることをきめ、十二月に東京でひらかれる党大会に、代表二名をだすこと、総選挙に岡田、小見山を候補者とすることをきめていたわけだ。(このときの総選挙の投票方式は、三名連記)

玖島君はそのことをひとこともいわなかった。神崎宇市君にも、いつていない。戦前の非法組織じゃあるまいし。

ともかく、広島市ではだれもなんの活動もしていなかった。

(一九八〇年一月二七日 聞き書き)

中国新聞 號外

この号外は本紙に再録しません

思想的安楽地帯へ

襲来した赤色魔手

血に彩られた三・五事件

執拗な組織も潰滅す

宇品新聞の畑で

黨委員會の發會式

手分けして活動開始

第二部
オルグ派遣

昭和八年五月、広島地方の共産党弾圧を報ずる中国新聞



10・30事件後の再建運動

小寺 英雄 談

非合法生活

10・30事件の記事解禁で、新聞発表のあったときは、広島市の組織はほとんど壊滅していたらしい。

私たちは、なんとかしてそれらの残党と連絡をつけねばとおもっているうちに、坂本四郎君のほうに連絡がついてきた。まもなく四郎君はモツブル（救援会）再建のために広島市にもぐった。だがその寿命はたった三―四ヵ月であった。はかない寿命だった。

このときにもやられたのが、岡本菊次郎君（現姓福本）天津せい君たちであった。あるとき四郎

君の兄の康さんが「四郎はやられたらしい」と連絡をつけてきた。これでまた宮島と広島との連絡はぶつりと切れてしまった。だが、これまでに四郎君から広島の状態を、ほばきいていたので広島がどんなになっているかは大体見当はついていた。やはり私が出てゆかねばならないとおもった。

私が家をでることは、家族にとつてたいして、さしさわりはなかった。弟が二人もいるし、上の弟、信樹は広島で過激な活動をしていて結核にかかり、当時病後の静養中ではあったが、ほとんど回復にちかかった。だからまだはげしい職場にはいることはむりなので、就職もできないでいた。だけど家業（トウフ製造とシデヒモ製造）についていても、10・30事件で起訴留保中なので、合法性はないのだから、就職などということはでき

ない。また、そんなことでは仕事にならない。だから非合法活動にはいるのだが、わたしの生活はどうするか。これは全然目算はなかった。まあなんとかなるだろうというところであった。私は最低生活にはなれていた。いわば訓練済みであった。ではどんな訓練かというと、私は一〇年も前からどのような生活にもたえられるようなからだをつくらねばならないとおもい、冬の最中でも夜具はセンベイ布団一枚きりで、こたつなしでねていた。ときには生いもをかじったり、きわめてつまんなものをたべたり、これはまた貧乏でやむなくたべたのだが、なんでもたべる訓練をした。これを見て母はよくいつていた。「英雄は監獄へゆくつもりで、その訓練をしよるんじやのう」。まったくそのとおりであった。

ただ最低限度の住居費さえつくれば、あとはそ

う金はかからないから、やれないことはないとおもった。だが実際にはそのこの闘争生活は予想以上にきついものであった。それはもしかしたら過去において、そのような無理や栄養不良の生活をしたことによって、私の身体の成長がまたげられ、いよいよ本番というところで耐久力がなくなつたのかもしれない。

一九三三年七月のある日、弟にもつげずに家をする決心をした。そのほうが弟の立場がよいとおもつたからだ。その日は朝早くから商用で呉市へゆき、帰途サンブルを入れたカバンとかんたんな手紙を厳島番船にたくしておくりかえした。

坂本四郎君からかねてきていたとおり、広島消費組合をおとずれて迫栴君にあり、組織のなかに連絡をとってくれるようにたのんだ。迫栴君ははじめはうさんくさそうな顔をしていたが、そのうちわかつたのだらう、ひきうけてくれた。またこの当時坂本四郎君の弟の弥彦君がこの常任といつてよいが、小僧がわりをしていたので、私があやしいものでないことはすぐにわかつた。それからその夜にねるところも、おりからそこにきていた岩佐君にたのんでくれた。岩佐君はすぐに承諾してくれた。彼は当時住井さんという後家さんの家の二階（観音町）をかりていた。私はそこに同居することにした。岩佐君は広島旧制高校を中途退学、天満町の缶詰工場で工員としてはたっていた。彼はエリート意識などなく、労働者のなかにとびこんでゆき、みずから完全な労働者になりたいという気持ちでいたらしい。恋愛ということにもテンタンであった。彼がもといたふじ屋という食料品店の、当時広島女学院の専門部にい

た娘からよく手紙がきていた。その手紙をいちど私もよんだことがあるが、小林多喜二のことについてなにかかいてあつて、しきりに彼の指導をもとめているような様子であつた。彼はあまり相手にせず、「プチブルの娘はしょうがない」という調子であつた。彼は全く純粹なそして階級意識に徹底しようとした男であつた。彼はするように努力していたのだらう。

かれのガンバリ屋についてはこんなこともおもいだされる。これはずつとのちのことだが、わたしが出獄して一年あまり身体の調子がわるく毎日微熱がつづいた。県病院の内科では異常はないというのだが、体温計ではかれば七度一―二分の微熱がでているのだ。そのために私は就職もできずにいた。そのころ岩佐君にだした手紙に私のうちひしがれた絶望的な気持をかけたものと思う。彼のその返事にこんなことがかいてあつた。彼が獄中の独房である日虫をつかまえて糸でつないで歩いたところ、虫はひと晩じゆう糸をひっぱつて歩こうとがんばつていた。君もそのようにがんばつてくれというのだ。この虫は岩佐君だとおもつてもいい。彼はそのような男だつた。

ふたりの生活は彼も私もおなじようにさびき屋なので、なにもかにもさびき屋らしくして、へやは足のふみいれもないほどだつた。これはふたりの共通の欠点だつた。炊事は炊事場がないので、窓かまちへ七輪やなべをならべて木炭でたくのだが、火をおこすのに新聞紙をもやしてうちわでバタバタあおぐので、灰かぐらがたつやら、火の粉がちるやら全くメチャメチャであつた。よくもその小母さんはだまつていたと今ごろになつて思

うことである。

丁度そのころは暑いさかりだし、あたりはドブ溝があるので蚊が多い。蚊取線香などという高価なものは買えないので、オガクズに油をしませたような蚊取粉をかつて、それを一晩中くべるので、人間がまいりそうであつた。岩佐君は闘争生活がおもになるので、工場はとかく欠勤がちで、そうでなくとも安い給料が、いつそう収入がなかつたので、万事がこんなことであつた。

九月にはいると、神崎宇市君のせいで、福島町へ移転することになった。神崎君は極東オリンピックで有名な砲丸投げの高田選手の異母弟なのだが、高田選手のようにガツチリしてはいなくてやせた男であつた。

移転といつても何もあるわけではない。ただ、からだだけ移転すればよかつたので簡単であつた。よごれた布団は、たまつた部屋代のかわりにおいていつた。移転さきは神崎君の家の近所で二間ぎりの独立した小さい家で、炊事場もなければ便所もないという家であつた。したがって家賃もものすごく安かつたが、いまおぼえていない。そこはもと屑屋がすんでいたとかで、きたないことはなはだしい。たたみときたらじとじとして、とてもこのままでは住めたものではないので、神崎君の家のあまつた畳をかりてきて、しきかえてやつと家らしくなつておちついた。

わたしたちはこの夜から、ふとんなしで畳のうえにごろりと横になつてねることになった。九月もだんだん深まって秋らしくなると、それでは寒くて足がしびれてやれなかつた。なんとかせねばならんとおもっているとき、党オルグの関谷源一

君がふとんをもってひっこしてきたので助かった。三人は、ひとつふとんにはいつてねることになった。

この家は福島町の南通りのうらのとてもややこしい迷路の中にあつて神崎君がいったように、パイ（スパイ）——特高刑事のことを当時はこのようにいつていた）におわれても、このへんを二―三回キリキリまわつてにげたら、にげられるというところであつた。またこのあたりは特高などはいつてもこなかつた。近所というのはなにをしてるかよくわからなかつたが、となりは朝屋台車をひいてでてゆき、夜かえつてきていた。だいたいみんなこんなところであつたとおもう。そのおっさんは人のよさそうなおっさんだったが、ある日わたしに「いつか写真をうつしてくれ」といつた。わたしを写真屋だとおもつてゐるのだ。多分ガリ版の原紙をきつてゐるのをみて、写真の修正をしているのだとおもつたのだろう。そのような調子で近所には私たちを何者かとうたがうようなものはいないし、スパイをするようなものもないなかつた。まったくここは安全地帯であつた。わたしたちは、ここを根拠地にして毎日ていつた。

小さい家に男が三人すんでゐるということだけでも不自然で組織の防衛上正しいことではない。だからこれではいけないと思つてゐるところへ、さらに女がひとり加わつた。岩国地方の一斉検挙でにげてきた連中のひとりで、上川あやめという婦人闘士である。眼鏡をかけた美人であつた。だからいつそうよくめだつた。となりのおっさんはわたしのなにかとおもつたらしく、わたしをひやかしてゐた。彼女はまもなくでいつた。その後、

関谷君のはなしでは彼女たちは突然職場から（天満町の缶詰工場。このとき竹地定夫君の妻ミツ子さんも、ともに働らいていて）連行逮捕されたところである。警察で上川君がいちばんよくがんばつたそうである。警察でいいかげんテロられて、うけなくなつてゐるのに、不起訴ででくると、むかえにきた兄貴にまたまたたかれたり、けられたりさんざんなめにあわされたところである。

このような検挙事件があればよいところばパレるのだが、私たちはこのときはすでにそれぞれ、みなでいつてゐた。

岩佐君はすでに部落解放運動にくびをつつこんでいて、部落闘争委員会の書記をしていたので生活はどうやら保証されていたが、わたしはまだひとりあるきできない状態であつた。福島町では岩佐君にたかり、関谷君がくればかれにたかり、命をつないでいたのだが、そういう状態のままで福島町の家をでたのだ。さて、でていつても家は無い。また消費組合へいつた。迫栞君の世話で達木幸太君の二階においでもらうことになつた。達木君は高田郡の出身で、南小一君をしており職業は大工さんで、おくさんと誕生すぎのかわいい男の子強ちゃんと三人ぐらしであつた。その当時消費組合員であつたが、のちに全協にはいつたものとおもう。私はここでひとりで生活をはじめたのだが、それこそほんとに金にこまつた。このころ消費組合の理事であつた新田菊馬君のところへもたびたび乞食にいつたり、とめてもらつたりした。あかの他人のわたしを面倒みてくれるのはやはり同志だからこそである。いまはなき吉川長太郎君のところへもせびりにいつた。

そのほか、あちこちから知つてゐる同志をかたつぱしからたずねて生活費をかせいだ。だが、これもあまりよいものではない。なんとなく卑屈になる。達木君の家の二階にはこれも消費組合員というひとりの若い男がいた。かれは職業はなんだから知らないが、終日ぜんそくか気管支炎かで、せきこんでいた。治療しようにもない病気にとりつかれて、医者にもかかれず、いつまでこうしてゐるのかわからない状態で、全く可哀想であつたがどうすることもできなかった。かねはどれだけでもつていたかしらないが、長期持久戦で、ちびりちびり自炊生活をしてゐた。かれは毎日のように、飯のおかずには湯をわかつて、とろろ昆布をいれ醤油をおとしてのんでゐた。かれのこの生活は悲惨な生活であつたが、私の生活もこれにおとりはしなかつた。私には、彼のとろろ昆布が、よだれがながれるおもひだつたのだ。なんとうまそうなものをつくつていやがるなとおもつた。

私は当時福島町で発病した脚氣で（といつても自己診断だが）足がしびれて歩行に困難であつたのだが、医者にかかる金はないので、食餌療法のつもりで麦ばかりたべてゐた。それこそ米をいつさいいいないオール麦なのである。それへおかずとして赤みそである。これが朝昼晩の私の食事だから、とろろ昆布がうらやましいのは当然である。このような無茶な生活をする私は、いかにも栄養に無関心な男のようにおもわれるが、じつはかねがないためである。だいいち湯をわかすやかんさえもつていなかった。わたしのもつてゐたものは、しちりんと、なべとほしだけであつた。これだけ買うのでも、やつとのことであつた。達木君にい

えば多少なんとかしてくれるだろうが、間代はただだし、ふともんもかしてくれているし、あれこれ世話になるのに、それ以上かれに負担をかけるわけにはいかなかった。かれの生活も、みたところ、けつしてらくではなかったからだ。こうやっていううちに、風邪のためか微熱もでた。だがわたしは病気はあまりきになかった。病気なんか精神力でふつとばせるんだとおもっていた。そしてまた事実精神力でふつとばしていた。わたしの脚気は、日とともにかるくなった。微熱もかなりなにくつづいたが、これもいつとはなしに、なくなつたようだ。達木君の家には二週間くらいいただろうか。そのうち広瀬町の土手下に恰好な家を見つけた。それは偶然そこをあるいていて、表の間で下駄をつくっている中年の小父さんをみて「こちらに貸間はないでしょうか」とたずねたところ、

「私の家の二階でよかったです」ということで、かることにしたのだ。こも低収入らしく非常に低い生活をしていた。後日わたしが捕ったとき、警察はこへもなにかをききだしにいったのだそうだ。だが、いつてくれなかったと紺谷という警部補はいっていた。そしてわたしに「あの家は君となにか関係があるんかいの」といっていた。このような貧乏な庶民階級の人達は、警察に庇護されているわけではなく、なんら恩恵にあづかってもない。だから警察におもねって手先になつたり、いらぬことをペラペラしゃべるなどといったことはしない。なるべく、かかわりあいにならないようにしている。これは彼等の庶民的な保身術である。また私自身も家主に迷惑をかけたが、嫌われるようなことはしなかった。だから彼

は警察よりも私の味方であった。この下駄職人の河辺賢二さんの家はそのような調子だから、いちばん長くいることができた。そして党の主要会議や赤色救援会広島地方委員会の再建会議など、重要な会議場にもつかわれた。また一時、関谷君や岩佐君もやってきて前のときとおなじように生活をとにした。

わたしがここに住むようになって、はじめて弟がやってきた。弟とは宮島口で時々連絡をとっていたのだが、ひさしぶりでゆつくりはなしあった。また器用な弟は私の理髪もやってくれた。わたしは広島へ来て床屋へは一度もいったことはない。福島町にいたときは近所にすむ朝鮮の人にやってもらっていた。朝鮮の理髪と日本の理髪はちがっているらしい。わたしは朝鮮人らしくなっていた。また弟は塩酸へ鉄をとかした酸化第二鉄と、タニン酸溶液をつかう、かくしインキをつくつてもってきてくれた。その後、この方法で連絡をとった。これにヒントをえて、関谷君は広島高校の化学実験室あたりからシアン化加里を手にいれてきた。これなら赤色の鮮明な文字がでるのだが大変な毒薬なので私はつかわなかった。

ずいぶん沢山、しごとをしたものだ。三二年テーゼも岩佐君がガリをきって印刷した。呉工廠へまいた『第二なるクレール』や党オルグ会議署名の文書はここで印刷した。また宣伝活動につかうパンフレット『ロシア革命小史』というのもあった。表紙は「尺八吹奏法」とか「魚つりのコツ」「哲学者のために」とか「洋服地の裁ち方」など普通ちよつとみたのでは誰も興味のなさそうな題名をつけて、中味は組織論やアジアプロ記事でいっ

ぱいのパンフレットもつくつた。これは私たちの生活の一助にもなった。一部五銭か一〇銭でうるのだ。そして岩佐君とふたりで「これだからこの商売はやめられんわい」といつてわらつた。

こうやっているうちに、この二階もそろそろ、にげだす必要を感じるようになってきた。また家さがしである。やつと横川で貸間札をみつめて、たずねてみたらそう高くなく、小ざつぱりして感じのよい家で、ここならすこし上品すぎるとおもいはしたが、かることにした。早速小車をかりてきて、竹地定夫君に手伝ってもらつて、いっしょにふとんやら炊事道具やらガラクタ荷物をはこんだ。竹地君というのは先にのべた上川あやめ君らの同志で、全協をうけもっていた。普通の引越しならタンスだの水屋だの家財道具が多いのだが、私の引越しはそんなものではなく、むやみとくだらぬものばかりである。ふつうならすててゆくところだが、荷物らしいものがなければ、信用されないので、わざと荷物をつくつた。二階へはこぶのを手伝ってくれた奥さんは、それだけでも変だと思つたことだろう。いちおう二階へおさまつて、その翌日になると、その奥さんが言いにくそうにしたのむように、でてくれといひだした。それもなにかおびえているようであった。そうなれば、むしろこちらの方がかえつておそろしくなつた。警察へでもいわれたら、一も二もない。文句もなにもいえたものではない。また車をかりてにげるようにでていった。あとでわかつたのだが、この家の主人は消防署にいる人で、そのころ消防署は警察の構内にあつて、ひとくち「変な男がきた」といいでもしたら、すぐに警察がくるところ

であった。丁度その夜は主人は不在だったらしく私は顔をみていなかった。

大きいそで出てゆくのだからどこでもよい。あれこれいってられない。丁度竹地君の關係で以前に誰かがかりていた家があいていたので、そこへたのむことにした。すぐにかしてくれた。そこは老人夫婦の小さな古物屋のうらの倉庫の二階で人のすんでいるようなところではなかった。だけれも、こんなところに人間が住んでいるとはおもわなかっただろう。出入りも、うら口から出たり入ったりするので、家の人はなにも知らない。この家はアジトとしては適当な家であった。だがここには一ヵ月あまりしかおれなかった。ここがわたしの最後のアジトとなったのだ。ここにいるあいだに三次町の大塚猛雄君がもぐってきたのだが、かれは検挙されにきたようなものだった。

救援活動

話をまたもとにもどして——私が広島市へはいつてから二三日たったろうか。迫栞君が連絡にきた。

×曜日朝一〇時観音町の電車線路から観船橋までの土手を新聞をもってあるいてくれ。むこうはハンカチをもっている。もしそのとき連絡がとれなかったら、一時間同じようにあるいてくれというのであった。

指定された日のその時間がきたので、きめられたとおりにていった。私には時計がないので岩

佐君のめざまし時計をもつていった。一〇時かきりに電車線路から、ふつうの速歩であるいた。夏の二〇時はもう日がたかく、かなりのあつさだった。人通りはあまりなかった。

中央辺で、あたからハンカチをかぶって、顔をかくしてくる男にあつたが、あつからこんなかつこうをしているんだらうと、そのままとおりすぎた。橋まであるいたが、ついに相手の人にはあわなかった。さっきの男だったんだとおもった。

一一時またふたたび同じようにあるいた。こんどは、であった。相手はいろいろのあさぐろい、強度の近眼鏡をかけた目のするどい中背の男であつた。かれはだりりとしたゆかたをきていた。いかにも仕事もなく金もなく、そこらをうろついている失業者のようなかっとうであつた。ふたりはかおがあうとだまって、そのままそのへんの氷屋へはいった。かれは自分の身分はいわず、ただ私にモップルの再建をやってくれとたのんだ。

私がかき氷をたべおわつても、かれはいつまでも半分ばかりのこしたままでいるので、わたしはそれが気になって「ついでにたべてしまつたらどうですか」といった。たべおわると私がかねをはらつた。わたしはしぜん、なんの気もなくそうしたのだ。かれはのちにはなしたが、そのとき私をスパイではないかとおもつたそうだ。というのは「ついでにたべてしまつたら」とはいかにも、つれてゆかれるときのパイのことばのようであつたというのだ。また同志たちの街頭連絡のときは、ふつう上部のものが金をはらうのだそう。それを私が金をはらつたから、ますますおかしいとい

うことになるのだ。もしパイだったら、けとばしてにげてやろうとかまえていたのだといって大笑いした。彼との連絡はその後雨がふつても風がふいても欠かさずもつた。いつの間にか、かれが党のオルグであることがわかつた。わたしはかれの指示にしたがつてモップルの再建活動をはじめることにした。

モップルの再建活動をはじめるといっても、わたしはいわば西も東もわからない人間である。どこから手をつけてよいやら、さっぱりわからないのだ。わたしひとりでは、どうにもならなかったのだが、迫栞君がいて助力してくれた。これは大きな助けであつた。消費組合はまだ合法性をもつていたので、非合法のモップルを手助けすることは困難なことであつた。それを迫栞君はあえてやってくれたのだ。岡本君や坂本君たちもこの消費組合のお世話になったそうだが、私もまたそうだった。

迫栞君が最初にわたしにわたしにくれたのは、消費組合気付として岡本君あてにとどいていた獄中の同志からの手紙の束であつた。このような手紙が消費組合あてにくるのだから、警察が目をはからすのは当然だが、そこは迫栞君がなんとかうまくいってパイをかえしていたらしい。だが警察は消費組合も赤の一味とにらんでいたのだから、のちにわたしたちの検挙のとき迫栞君もいっしょにやられたわけである。わたしはかれからもらつた数十通の手紙を、まずひととおりよんだ。この手紙は獄中の同志の心境についての問にたいする答えであるかのように、ほとんどの同志たちは佐野・鍋山流の転向をしていて、それを声明し

たものであった。これは外界と遮断されて一般の情勢をしらない獄内の同志たちが「偉人佐野学」などと必要以上にたたえあげられていた最高指導者の転向に盲従したものだともった。だがのちにわかったことだが、これには刑務所当局のテロによる強制があったのである。

このテロによる強制にも屈せず公然と非転向を声明した同志も一〇人くらいはいた。古末憲一、滝川恵吉、松本京一、木村莊重、清水次郎、島本隆司等の諸君。これにのちにスパイとなった松本徹もくわわっていた。また転向とも非転向ともわからないものもいくらかあった。これは非転向とみなしてもよいとおもった。

わたしはまずこの非転向組にたいして激励のハガキをかくことにした。転向組にもかかねばならないのではあるが、とてもわたしひとりではできない。非転向組にさえ全部のひとにかくのはなみたいていのことではなかったのだ。それらふつうの手紙のように、おもうことをそのままかきばらくなのだが、それはできない。あからさまにかいたら「不許」になって絶対同志の手にはほいらない。やはりあたまをひねらねばならないものがあるので、むつかしかった。

わたしのハガキにたいして、おりかえて返事がきた。みんな元氣そうであった。またいろいろな注文もよこしてきた。たとえば、滝川君は広島県の歴史地理経済に関する本がよみたいというのだ。これはむつかしかった。第一そのような本は手近にはみつかりそうもなく、本屋にたのんでとりよせてもらうとしても、かねがかりすぎて、とてもわたしたちには手におえない。

古末君の手紙はいつも小さなきれいな字で三枚くらいの紙へ、びっしりつめてかいてあった。これはニュースに転載するのにつごうがよかった。ある日こんなことがかいてあった。「ここではよい本はよめない。だがどんな雑草でも、よくかみしめてたれば、滋養分はある」これはまったく古末君らしいとおもった。古末君はどのようなところにおかれても、それにたえてその中から、なにかをじぶんのものにして、やってゆく人間だとおもった。

このように同志との文通と同時に犠牲者の家族も訪問した。家族たちのなかには、ずいぶん元気がよくて、むしろこちらがアジられるようなこともあった。寺尾一幹君のお母さんはわたしがよくと歓待して、いつも寺尾君やその他の人たちの消息をきかしてくれた。またこんなこともきかしてくれた。

寺尾君が呉の警察から脱走したとき、寺尾君の友人のようによそおって、パイがきたそうだった。寺尾君の恋人だったかの女の居所をさがしましょうというてかえり、またやってきたが、ちゃんと調らべていたそうだった。

この事をおかあさんが、あるえらい先生（多分広島高校のシンパの教授）にはなしたら「それはおかしい。普通人がそんなに早くそのような調査ができるものではない。それは警察の者だから気をつけなさい」といわれたそうだった。当時寺尾家はおかあさんとふたりの妹さんがいたが、くらいかは全然なかった。ということは、そのおかあさんは息子の人柄を通じて共産主義の正しさを確信していたものとおもう。

堀江明治君だったか、比治山下にすんでいた家族をたずねたとき、おとうさんもお母さんもころよく迎えてくれて、これも二人もごもに鼻をうごめかして得意になって明治君のはなしをしてくれた。

検挙の当日おもてからパイがつれにきたとき、うらが山だから山づたいに、にげてやろうかといったそうだが、にげてはすぐにつかまらさうからまああゆこうということになって、連行されたのだそうだった。この家庭でも暗いものは全然なかった。またどこだったか今どうしても思い出せないが、警察の奴等がどうのこうのと気焰をあげていた人もいた。

江田島の切串の花野ふじえさん、岩夫君の姉弟の家をたずねたとき、おかあさんは気丈な人らしくこのような話をしてくれた。

事件の記事解禁のとき、一ページ大の新聞の号外を町のフコ屋がお客にみせるためにはりだしたそうだった。おかあさんはすぐにいつて、やかましく抗議して、のけさしたというのだ。その当時の切串などは島の田舎町でとても封建的で、共産党といえど天人共に許さぬ悪党くらいにおもっているものが多かったなかで、この家族は毅然として独力で荒い風波と闘っていたものとおもう。

まだまだ、このような家族はいくらもあつたとおもうが、残念ながら私は一々当てもないし、忘れもしている。

またこのような家庭と対蹠的に、昔でいえば閉門といったような形で蟄居している家庭もあった。わたしが訪れると、さすがにおかあさんは息子の身を案じて私の話をきいてくれたが、おとう

さんは「転向するというならとにかく、転向しないというものは私の家の息子じゃない。そんな者はいついっさい構わないから、もうこないでください」という剣幕であった。

またある家では、さんさんにぐちをならべられた。「共産党の親分は本部から金をもらっているんでしょ。うちのむすこは金をもらうどころか、なんでもかでも家からもちだすんですよ。だから共産党になるんなら、親分にならなさいというんです」といった調子だった。こんなのかかると往生だった。だから自然そのような所へは足がむかなくなつた。じつは、そのような所へこそ啓蒙に行かねばならないのだから、なにかさこちら是非合法の身である。うっかりそのようなところへ出入りしようものなら、いつパイに渡されたり出会つたりしないともかぎらない。

一度こんなことがあつた。ある同志の家を訪れてかえるとき、ものの二〇米も歩いたところでパイらしい男にでくわした。その当時パイは大抵ステッキをもつていた。その男は一日中歩きまわっているらしく、背広はほこりつぽく、色あせていた。体軀は頑丈そうで、目つきは何かを求めているようで、私の顔を見ると、じつとみすえていた。普通のサラリーマンと明らかに区別できた。私は直感的にパイだ／とおもつた。こんなときは相手の顔をみてはいけない。私は全然相手の存在に気がつかないような風をよそおつてすれちがい、なにげないかっこうで歩きながら全身でうしろに注意をむけた。どうやら私のあとをつけているようだ。私はうしろもみずに、わざとゆっくりあるいているうちに角に氷屋があつたので、氷をたべる

ようなふりをして店にはいつていった。そして、はいるやいなやすばやく横町へはいりこんだ。パイはおそらくそこまで気がつかず店のぞきこんで探していたことだろう。でなかつたらわたしは追跡されていたにちがいない。

このように犠牲者の家族の訪問もかなり危険なものであつた。

一月七日ロシア革命記念日に赤餅のさしいれにいった。

一日もはやく救援会は組織せねばならない。とはいへ救援会の組織ということはその楽なことではない。救援会が合法性があるなら、会員をつくることはむづかしいことではない。しかし救援会の会員というだけで警察が知ったら検挙されるのだから、だれしもきがるに入会してくれない。そこでどうしても、すでになかに組織されている人をひっぱってくるしかない。そうやって、やつと組織しても血の気の多い連中は地味な救援活動はしたがらないという傾向があつた。またいそがしくてできもしなかつたのである。

わたしはまず近まわりの岩佐君や神崎君に会員になつてもらつたが、両君とも救援活動といつてはなにもしてくれなかつた。また私もそれを期待しなかつた。だからやはりなにもかも私ひとりで行ふことになる。それでもいちおう赤色救援会は結成したことになり、救援会のニュースを発行した。題名は『赤救ニュース』となづけて週刊とした。美濃紙版のザラ紙の表と裏に小さい字でギッシリ一杯うめてガリ刷りした。記事は古末君、滝川君その他の同志の手紙や消息エピソード、それに犠牲者家族の訪問記などをのせた。これらはほ

んど私ひとりで書き私ひとりで印刷した。これは一部一銭で、かねはかならずもらうようにした。それは経済的理由ばかりではなく無料のものはとかくよまれないので、よますためにもいくばくのかかねはとる必要があるのだ。

私のかくニュースはインテリによるこばれたさうだ。関谷君がそういつていた。インテリによるこばれたということは、労働者にはよろこばれなかつた、ということになる。大体そのころの出版物は『インターナショナル』にしても『産業労働時報』にしても直訳調で、むやみと難解であつた。『赤旗』でさえ、いまの『赤旗』とくらべたら、ずっとむづかしく書かれていた。文章はいづれも至極調子の高い名文なのだが、いまとちがつて小学校しかでない労働者にはよみづらいものであつた。これは宣伝技術の拙劣というのだろうか、あるいは（とりよつては）故意に発行停止にならないように「純學術的」に、むづかしく書いて弾圧をかわしていたのではないかとさえおもわれた。私もなにほどか、これらの影響をうけていた。私はニュースをつくるのに、つねにブル新（当時は商業新聞をそのようによんでいた）にならつていた。

ブル新は商業政策として、もつとも広汎な層によまれるようにつくられてあるので、我々もこのとおりにすればよいとおもつていた。だがこれはあやまつていた。我々の場合は主として労働者農民といった底辺を対象とするのだから、なにもブル新なんかまねなくともよいのだ。

その点は職場の中でつくられたニュースはよくできていた。たとえば岩佐君がつくつた。『おんど

がま』は典型的であった。結局私はニュースを、あたまの中でつくつていたのである。岩佐君は工場のなかでつくつていたことだろう。

『赤救ニュース』についてかいたから、ついでに印刷機についても説明しておこう。その当時謄写機のことを機関銃といっていた。そのころの活動家はみんな金がないので、一式そろった謄写機をかうことはできなかった。ヤスリとローラーだけはどうしてもかわねばならなかったが他は手製でまにあわせた。そして充分にあった。そのころ発行された組織活動についての手引きといった単行本には原紙をはる枠を厚紙でつくる方法がでていた。私はヤスリは厳島でつかっていたものを弟におくってもらい、ワクと台は達木君につくってもらった。従来だれでもがつくつていた方式は台と枠を蝶番でとめただけなので、用紙は一〇枚か二〇枚くらいしかおけなかった。それを一寸工夫して蝶番を二段にした。それで二〇枚でも三〇枚でもおけるようになった。とても能率がよくなった。これで前に一寸のべた『第二喰のクレイン』などを印刷したのだが、一〇〇〇部くらいは二人がかりで、ひとりはずる、ひとりは紙をとるで、一時間はかからなかった。

このようにして『赤救ニュース』は発行したのだが、ろくろく救援活動もしないうちに、3・5事件つづいて10・30事件の犠牲者の公判がはじまった。しかも、ひとりひとり非公開でやる、分離暗黒裁判である。

これに対しては勿論『赤救ニュース』で、分離暗黒裁判絶対反対となえて大衆によびかけたのだが、実際問題として、こうした敵のやりかたに

対応してたたかう力を我々はもたなかった。自由法曹団の弁護士といえども金がなくては動けなかった。公判闘争はみおくるしかなかった。

「いったい救援会は、なにをしているんだ」といわれそうであった。いや、いわれたことであろう。しかしなんといわれようともどうすることもできなかった。

救援会が活発にじゃんじゃんやっていたら、獄内の同志たちもはげまされて、転向はしなかっただろうし、公判闘争もじゃんじゃんやるだろうが、このように同志たちを孤立のままに放置し、一日中テロとデマにさいなまれるにまかしていたのでは、闘志をうしなうのもむりはないだろう。

公判は二―三日おきくらいに被告ひとりひとりに対して開かれ、また次々と判決が下されていった。治安維持法は死刑以下二年以上の懲役ということになっていたので、二年よりかるいのはない。だが情状酌量という分で、二―三年くらいの執行猶予は数名いた。

かの松本徹も党員であったために、懲役三年であったが、執行猶予三年で出所した。かれは非転向組でガンバっていたのに、急に転向したのもらしく、それを買われたのかもしれない。またかれらは兄弟二人で、もってゆかれて母親ひとりのがこされているというこの情状酌量ということもあったのかもしれない。

さいごにこのこった古末君の公判には、これこそなんとかせねばとおもっているうちに、その前日になった。おもいがけなく迫栞君から連絡があって、東京から弁護士が来ているから今夜消費組合にきてくれということだった。弁護士というのは

青柳？とかいう若手弁護士で、自由法曹団から派遣されてきたものらしい。だれがどのようにして手配したものか、私は全然知らない。最近迫栞君にあつてきいてみたが、かれも知っていなかった。

その夜は古末君の公判闘争に関する対策会議であった。あつまつたのは三―四人の朝鮮の同志と迫栞君と私だけであった。これという結論もえられないままに解散した。というのは大衆動員といったところで、とても可能性はなかったからだ。結局古末君の公判には迫栞君と消費組合関係の者数名が傍聴にいったのにすぎなかった。翌日迫栞君から様子をきいたのだが、迫栞君は弁護士がたよりなさそうなので、どんなことになるかと思っていたら、やはり弁護士だけあつて、うまいことやっていたと感心していた。

古末君の公判闘争は市川忍君のように派手ではなかったが、解放運動の犠牲者は無罪であると主張し即時釈放を要求したということだった。

第一審で五年の刑になった古末君は控訴したが、第二審でも前審通り五年の刑となった。このつぎは上告だが、上告しても刑期はかわらないだろうし、この辺でおりようということになったらしい。そのころの心境をかいた手紙をくれていた。

古末君の公判がさいごで、公判はおわった。事件の順序からいうと滝川恵吉君の公判がそのあとにあるはずだが、かれはこれよりまえに東京だったか岡山だったかに移送されていた。

3・5事件、10・30事件の全被告が下獄して、かたがつくと私は肩のおもにがおりた感じがした。いままで救援活動ができないということが、

どれだけ精神的に大きな負担になっていたことか。これは、だれにもわからないだろう。自分の任務を果すことのできない自責の念が日夜私をいららさせていたのだが、このときから私の気分はおちついた。

日本赤色救援会広島地方委員会の結成

広島地区の赤救組織はさきへのべたように赤色救援会の生えぬきでなく、消費組合、全協、全水などからよせあつめた会員で一〇名あまりしかいなかった。その一〇名あまりもニュース配布や基金カンパには応じてくれていたが、救援活動など全然しなかった。まったく、ささやかな弱体組織であつたが、それでも私にとっては大切な組織で、私はここをよりどころとしていた。いまにこの組織をがつちりした強固な組織にそだてあげねばと、いきこんでいたのだ。

高田郡では南小一君が責任者になって、かなり赤救組織ができていた。赤救の会員が何人いたか、いまわかつていないが、『赤救ニュース』の發送数からかんがえても二〇人くらいいたのではないだろうか。かれの話では高田郡というところは貧農の多いところで、革命組織のできる素地は充分あるところだそう。ここでもブル新（商業新聞）さえ購読できない人が多く、したがって『赤救ニュース』などはよるこんで読まれているとのことだった。都会人はこんなガリ版のニュースなんか、面倒くさがってなかなかよんでくれないが、日頃

新聞をみることのない農民たちは、一字一字、たんにんによんでくれたのだ。記事の反応については、いろいろいつていたが、天津せい君の頑強な闘争の記事をよんで、

「はたちの娘でのう……えらいものじゃ」

といつて、ひどく感心してカンパしてくれた人もいたということだった。

高田郡に隣接した三次町には大塚猛雄君がいて、ここにも数名ばかり会員がいた。この方面へのニュースの發送は高田、三次を一緒にしておくつていた。こちらは架空の薬品店名をかき、宛先も変名で十日市町のある運送店とめおきとして、自動車便でくつた。

三次と高田郡吉田町の間は四〇キロくらいの距離があるのだが、どうして配布していたのか、私は知っていないのだが、たいへんだったとおもう。いまなら自動車やオートバイがあるので、わけないが、その当時は自転車で吉田と連絡し、途中の甲立村その他にバラバラにある組織へ配布していたのだとおもう。

広島では10・30事件の弾圧であらわれて、ガタガタになつたうえに、坂本四郎君、ついで私が出てゆき、その後も四五人の同志が島をはなれて、組織はあるかないかわからぬような状態になつて、いたが、私の弟の渡辺信樹が再建にのりだして、やつと組織らしいものができた。だが今までのような活発なものではなかった。このような狭い小さい町では、一度弾圧に見舞われると、その後は当分日和見になつて活動が消極的になることは、さけられなかった。だがそれにしても、弟はひとりよくがんばつていた。ここへはニュースをお

くるのが、非常に困難であつた。郵便小包などとはとても危険であつた。その当時は郵便局長が警察の意をうけて郵便物をかつてに調べていた。やむなく私が宮島口までとどけることにした。電車や汽車は宮島の人にあう危険があるので、自転車をかつた。あらかじめ日時をきめて、いまの競艇場のちかくまでゆき、弟に直接に手渡すのだ。これなら絶対確実だが、毎週オンボロ自転車（この自転車は岡本君がつかつていて消費組合へおいていたもの）をこいで、夜道を宮島口までかようのは、楽ではなかった。かえりにバンクしたので夜おそく、ひいてかえつこともあつた。いま国道すじは夜も昼も、ひっきりなしに自動車ははしつていけるし家もたちならんでいるので、にぎやかだがその当時は夜ともなれば車はもちろん人つ子ひとり通らないのだから、そんなところでバイにでくわしたら、不審訊問にひつかる危険もあつたのだ。

こういう状態が二、三ヵ月続いたのち、私の住所がきまつてからは弟が広島にでむいてきて連絡をとつた。

こうして各地区とも組織がだんだんと拡大していった。地方委員会を結成する時期がきた。私はこれらの準備のため一二月の末、自転車で高田、三次まで連絡にいった。まず高田郡吉田町の竹岡宅一君の家にゆき、かれと打ちあわせをして、その夜はとめてもらい、翌日三次十日市の大塚猛夫君のところへいった。午後竹岡君の家までかえり、その夜もそこへとまり、翌日雨のなかをカッパばかりたがずぶぬれになつて広島にかえつた。その夜ある同志と連絡があつたので、かえらないわけ

にゆかなかつたのだ。翌年、一九三四年、一月高田から南小一君、竹岡宅一君、三次から大塚猛雄君、巖島から弟の渡辺信樹があつて来た。場所は例の河辺賢二さんの二階、私のすんでいるところである。ここで会議の結果、地方委員会を結成することになった。構成員は上記のメンバーで、私がその責任者となった。ニュースは今まで『赤救ニュース』という題であつたのを『救援突撃隊』とあらためることになった。そして、これはさつそく広島地方委員会の署名で第一号を発行したのだ。この委員会は4・26検挙まで活動をつづけた。

党組織拡大競争（社会主義競争）

前年の十一月ロシア革命記念日の直前のある日であつた。党オルグの関谷君が私にむかつて、あらたまつた口調でものを言いだした。私を党員に推薦しようとおもっているが、どうかというのである。私はかねて、それは希望していたことなので異存なく即座に承諾した。私と前後して高田郡の南小一君も入党した。かれは自分から申し込んだのだ。このころの慣習では自分から申し込むということはなかつたのだが、かれの場合は田舎で素性が知れているので、うたがわれることもなく、入党してもらつたのだ。丁度このころはロシア革命記念日を目標に、党の拡大強化運動をやつていたので、これを期に数名の新党員がうまれた。私達二人のほかに広高の吉本康二君と呉の山道繁君等二人もそうだった。

ロシア革命記念日を目標とした第一次社会主義競争がおわつて、つぎにメーデーを目標として第二次社会主義競争が計画された。

ある日、私の住居である広瀬町の河辺賢二さん方の二階へ、党オルグの関谷君と前記の南小一君、吉本康二君、山道繁君と私の五人があつまつた。まず関谷君は会議をひらくまえに防衛について一言注意した。「いまもし敵が襲撃してきたら、君たちはそれと闘つてくれ。その間に俺は文書を処分するから」。それから会議にはいったのだが、そのときの模様の詳細は記憶しないのだが、このとき決定したことは、メーデーをめざして党員獲得その他についての社会主義競争であつた。競争参加者はそれぞれグループをつくり、それを隊として組織し、目標とする職場、学校等へはたらきかけ党員を獲得するというのである。そのときつづられた隊は、渡辺政之輔にあやかうという「渡政突撃隊」これは南小一君が責任者であつた。広高のなかで組織の拡大強化をやるうというのが「岩田義道突撃隊」、吉本康二君が責任者であつた。呉工廠を目標とする組は山道繁君が責任者で「ハンマー突撃隊」となづけられた。山道繁君は今までも、私の印刷した『第二うなるクレイン』を大量に工廠めぐけて、ながしこんでいたので、この方で成果を獲得せねばというのだった。私の分は国鉄へ組織をつくるというので、「動輪突撃隊」となすけた。

他の隊の目標工場学校等は何程か、大なり小なり足がかりがつくられていたもので、わりとやりやすいのだが、私の場合は全然それがなく、知人ひとりいないところなので、なかなか困難であろう

とおもつた。そしてその日から競争がはじまつた。

私は国鉄へ入りこむ方法をあれこれと考えたすえ、ひとつの方法をおもいついた。それはあの大きな国鉄だから、文学青年が何程かいるにちがいない。それをまず、さがしだそうというのだった。今なら労働組合があるから、それにちかづけばよいのだが、そのころはそんなものはないとつない。そのなかで、本をよむ、理屈をいうといった、知識的な人間といえは、まあ文学青年くらいしか考えられない。そこで文学の同人雑誌らしきものをつくることにした。まず、あちこちの古本屋をあさつて一冊五銭か一〇銭の同人雑誌の古本をかつてきた。時間のない私が自分で詩や小説をかくわけにはゆかないからだ。これを適当に編集して岩佐君にたのんでガリを切ってもらつた。岩佐君もいそがしいので、面倒くさそうな顔をしていたが、まあまあやつてくれた。岩佐君でなければ同人雑誌らしい字体のものができないからだ。印刷にかかると、なかなか面倒であつた。部屋じゅういっぱいに紙をひろげて、そのまんなかにすわつて、ひとりで印刷した。やつと二〇一三〇部ばかりの「同人雑誌」ができあがつた。表紙は青い厚紙をつかつて、題名を「北極星」とつけた。いみはなにもない。

私はさつそく、これをもつて広島駅のまわりをうろつた。そのころ広島島の西側に国鉄職員の食堂があつた。そのまえあたりで、ひとりの若い国鉄職員をよびとめて、自分はこのような同人雑誌をだしているのだが、文学のすきな人がいたら紹介してくれないかとたのんだ。その青年はすぐに、自分の知った人で文学ずきなものがいるから、紹

介しようとして食堂に案内してくれた。しかしそのひとがみあたらないのでまたの日を約束してわかれた。

約束の日がきて、その時間に食堂へいったら、立川謹次という青年を紹介してくれた。立川君は気さくな青年で、すぐに心やすくなり、文学論はもちろん国鉄内部のことや、軍隊時代のはなしをしたりして、いろいろはなしあった。かれは上等兵だったそうだ。またかれはある日「同人雑誌は活字にしたいなあ」といい、「だがこれは資本論になるなあ」といった。金がいるというところを資本論といったのだから、資本論ということばを知っているのがおもしろいとおもった。そして何回かあって段々と親密になったが、残念なことは、こちらは非法の人間である。こころやすく、いつたりきたりできない。

そうやっているうちに、四月二六日一斉検挙がきた。

松本徹のこと

いまは故人となつてはいるが（そして彼のことを個人的感情をもって、かきたくはないが）かれのやったことについては、事実は事実として記録にのこす必要があるので、私の知っているかぎりをかきとめようとおもう。数年前、無名戦士の碑へ松本徹の合祀問題がおこったとき、広島旧友会の一部に反対があった。私は自分の経験に基づいて反対意見を岩佐君を通じてのべている。まえに

のべたとおり、松本徹は党员でもあったし、よく活動もし、よくがんばっていたらしい。検挙されても、最初のほどは非転向でがんばっていた。だれだったか——もしかしたら天津せい君だったか——獄中の松本徹へ「転向したといううわさをきいたが、どうか」という手紙をおくったところ、大変におこつて「なんで転向なんかできるか」とかいてきた。この手紙は私も読んでいるが、迫栞君も知っている。たしかに彼は、その年（1933年）の夏までは非転向であつたはずである。それが、いつの間にか転向して執行猶予で出てきたのだ。いったいそれはどうなのであろうか。党员が執行猶予ということは、いままではあつたことがない。ただわたしたちは、それを詳しく調べようとはしなかった。私がかれを知つたのは彼が出所してまもなくであつた。

さきに岡本菊次郎君「坂本四郎」といふしよに、つかまつた天津せい君はそのご非転向でがんばっているということを書いて、私たちの間でなんとか救援の手をさしのべねばということになり、彼女の救援カンパを『赤救ニュース』でよびかけるとともに、合法的に差入れ活動のできる人をと、さがしたのだが、適当な人がいなかった。彼女には姉さんがいたがその職業の関係で不可能であつた。そういうときに、たまたま彼女の愛人である松本徹が出所したのである。関谷君は松本徹をつかえばいいじゃないかといひだした。私はどうかとおもつた。天津せい君は非転向でいるのに松本は転向している。あまり感心しないなあと、おもつたのだが、結局かれしか合法的にやれる人はいなかつたので、かれをつかうことにした。

ある夜大州町のかれの家をやつときがしあてて、おとづれた。丁度かれはいいた。用向きをはなすと、かれは当惑した顔で、引うけるとも、断るともいえず、頭をかかえた。

その様子を奥の間できいていたお母さんができて、ふたりのあいだへはいってきて「うちではふたりやられて、非常にこまりました。やつとひとりではかえされたので安心したのだが、また、ひっぱりだされるようなことがあつてはこまるから、これだけはこらえてやつてください。」とたのみこんだので、私としてもそうまいわれれば、どうすることもできないのでそのままかへつた。それから翌日か翌々日、消費組合の迫栞君が連絡にきた。松本徹が私にいたいといふのだった。さつそくあうことにした。

きめられた場所と、きめられた時間にかれと連絡をとつた。かれは「あのときは自分も決心がつかず、おふくろもああいふので、返事ができなかったが、じっくり考えたすえ、やっぱり天津の救援活動をするにしたい」といふのだった。私はたいへんうれしくて、それならたのむということになり、それから一週間に一―二回くらい定期的に連絡をとり、僅かながらもあつた救援カメバの金をわたしたり、いろいろと指導をしたのだ。だが私たちのやったことはまちがつていた。かれを天津君の救援活動につかつたこともだが、そのごも同志としてあつかひ、連絡をとつて仕事につかつたこともある。

かれは天津君を激励するどころか、反対にくさらせることになった。考えてみれば当然のことではある。自分は転向していて、しかも執行猶予の

身で、公然と非転向の天津君に面会して、どういふことばがはけるだろうか。それはいうまでもないことである。はじめ私たちはこのようなかたちで救援活動をやらすつもりではなかったのだが、かれが、かつてにそうしてしまったのだ。

だからかれが天津君をくささらせた時点において、かれとの連絡をきつたらよかったのだが、私も助平根性をおこしていた。天津君が転向したのはしかたがないとしても、松本徹が運動に復してくれば、まあいいだろうとおもっていた。こちらのところが、あとからかんがえてみて、自分ながらその不明さが、はがゆくもあるし、残念でなかった。たとえ刑務所の面会室であろうと、転向をすすめることができる男が、どうして運動に復することができるだろうか。

もっともこの時代には、こういうこともあった。敵は我々の陣営をつきくずすために、だれにでも転向を強要した。転向というものは自分の思想が変ってからこそおこるものであって、他からの強要では本物の転向とはいえないはずだが、そんなことはどうでもよい。中味は何であろうと、表面転向をよそおい、行動をやめることを誓いさえすれば、それで一応転向とみとめて、減刑もするし事情によれば釈放もしていた。だから出所できるとおもったら戦術的に擬装転向して、でていつてまた活動にはいるということもあった。あるいはまた、気のよい同志は、はげしいたたかいにたえられず、共産主義の正しさを確信しながらも、実際の運動面からさることを一度は決心する。だがその後何かの刺激でたちなおり、勇気を鼓してもういちど運動にはいる。こういうこともあった。

だが松本徹の場合はそんなものではなかった。かれには革命的情熱はなく、共産主義の勝利を確信して行動していたというのではなく、ただ冒険のスリルに興味があったのだとおもう。かれの性格は多分にそんなものであった。それを、うらづける、ひとつの例がある。日本共産党広島県オルグ会議署名の「帝國主義戦争絶対反対」のポスターを、いっしょにはりにいったとき、かれはじつに大胆で交番のまん前の電柱へわざと、べたべたとはついていた。交番は夜はたいいねこんでいるのだが、もし物音に眼をさましたら大変なのである。だがかれは一向平気で面白がつてやっていた。そのときかれは、そのまえに行動隊でたとき、交番の扉のガラスにはつてやったことがあると得々とはなしていた。このように、かれは戦争反対よりもスリルに興味があったのだ。このような共産主義者というものはない。こういった種類の人間にはときに節操がなくて、自分の都合で平気で仲間をうらぎることのできる図太い人間がいるものだ。だからかれについては、もっとあらゆる角度から検討すれば、かれをつかうべきではないという結論は出てきたはずである。そこは私がひとをみる眼があまいのと、働き手に飢えていたため、何事も希望的に観察をして採用したのであった。ではなぜ、そしていつごろからかれはスパイになったのだろうか。×月×日反戦ポスターをはりにいったときは、かれはスパイではなかったとおもう。スパイはそんなとき、よく勇敢に挑発的にやるものだが、かれの場合にはそういう風には考えられない。これは私の憶測だが、かれがスパイに転じたのはそのあとである。しかもこのポス

ターはり原因である。あの夜ビラはりにはふたりとも手袋をつかわなかった。だから警察が指紋の検出をすれば、すぐにわかるはずである。またポスターはりには白島の東西に通ずる道路を、三篠橋のほうから広島駅の方向へ常磐橋の辺までの電柱にはつたのだが、この線を一直線にのばせば大州に通ずるのだ。この辺からでも松本徹が関係がありはしないかと、うたがわれるだろう。こちらの辺が非常に拙かったのである。私たちには事前によく研究もせず、いきなり行動にうつるくせがあった。

こうしてかれは検挙され、スパイを強要されたのだ。この際かれは非常によい立場にある。もしスパイをことわれば、執行猶予をとりけされて三年かまらねばならない。そうなれば、折角釈放されてできた愛妻と当分わかればねばならない。そしてかれはスパイのほうをえらぶ。もしこれが私だったら、どうだろうか。私だったら絶対に刑務所のほうをえらんだ。

また私でなく他のだれかの場合はどうだろうか。こんなことをかんがえたとすぐに丸川昇一君のことをおもいだす。丸川昇一君については、私のかれにうちあけて謝罪する機会を失しているのだが、かれが執行猶予をとりけされて二年間かまったことについては私に責任がある。私がかれから救援基金のカンパをうけて、私が猫ばばしたとおもわれたくないために、変名ではあったがニュースで報告したのを、警察がかぎつけてかれを検挙した。かれは刑務所のほうをえらんだのだとおもう。丸川君だけではなく、良心的な同志なら、みなそうしたであろうが、松本徹はその点非常に

卑劣であつた。

私はかれがなにくわぬ顔をして、スパイに転向したとはつゆしらず相変らず連絡をとつて、あつていた。いまからかんがえると、変だなあとおもわれることもないでもなかつた。何か私からききだそうとする態度があつた。私がお人好しではなかつたら、すぐに見破つたろうが、私はそのような能力がなかつた。このことをかんがえると私は自分ながらはらがたつた。このことから、私は全く自信をうしなつてしまった。

私がかれと最後にあつたのは検挙の前日、四月二十五日の午後であつた。私は人もあろうに、敵のスパイを忠実な同志と信じこんで、私のアジトへつれてきたのであつた。馬鹿は、知れているノ

4・26検挙は、私のアジトがわかつたからはじまつたと当初私はそのようにおもつたのだが、そうはいえないようにおもふ。私ひとりとなえさえすればよいのなら、かれとの連絡途上において、いつでもとらえることはできた。やはり敵は一斉検挙をたくらみ、準備をし、機が熟するのをまつていたので、それまで私はおよがされていたので。

それは岩佐君もかいていたように、中央からもばれていたかもしれない。『赤旗』が危険で郵送できなくなつてから、東京から汽車でわざわざもつてきていたが、その男がスパイだったと関谷君はいつていた。その男に関谷君はこちらの情勢を報告していたのだ。私もこの男にあつたことはあるが、何だかひとくせありそうな顔をしていた。こんな顔でも共産黨員かとおもつたことである。だがかれの言動にはそれらしいものは全然感じられなかつた。関谷君も同様にそれをうたがわなかつ

たのだ。こういった情勢の中では中央も地方も組織の内部まで、すつかり敵に知られていたとおもわれる。

松本徹が私のアジトを知つて、当局に通報した時点、機は熟していて検挙のきつかけとなつたのである。

松本徹は私を売つて、つぎには広高生の吉本康二君を売つたのだ。かれは私たちの検挙後全然関係のないはずの吉本君と、どうやつて連絡をとつたのか、私は知らないが、吉本君が京都ににげていつたとき、かれもそのあとをおつたのだ。吉本君と同じく検挙をまぬがれて大阪ににげていた山道繁君と私の妻の高橋マツ子（旧姓）は同じところ にいたそうだが、松本徹は大阪までにきてたというのに、関谷君の悪口ばかりいい、真剣なものが全然なく、これが非合法でもぐつていっているものの態度かと、おもふほどだったという。マツ子は敏感なので、すぐにかれの正体をみぬいたのだが、吉本君はまだ年は若いし、純真な坊ちゃんでもあつて、そこところがわからなかつたらしい。依然として松本徹を信用していたのだ。

それからまもなく吉本君は呉の組織を再建するという重大な任務をおびて、広島へ出発したのだそうだが、これが最後のわかれとなつたとマツ子はいつていいる。吉本君は広島で松本徹に売られ、同君はマツ子にあてて獄内から手紙をよこしたそう。それには「松本徹はタルチスのような男でした」とあつたという。

吉本君がつかまつたのは九月ごろで、私たちよりだいぶんおくれたのだが、事件はいつしよで、裁判所ゆきのバスに同車した。かれは私をみると

何やらしきりに合図した。そして、なにかを知らせようとしていた。だが私にはそれがどうしてもわからなかつたのだ。きつと松本徹のことを知らせようとしたのだろう。そのときは私は、吉本君は私たちといつしよに一斉検挙でやられたものとおもつていた。松本徹を知つていないかれが、松本のことをいうはずがないので、かれの合図がどうしてもわからなかつたのだ。かれはあきらめて合図をやめたが、いまかんがえると不憫でならない。

かれは獄中で肺結核となり、腸結核を併発し、絶望状態となつたので仮出獄し、うらみをのんでこの世をさつたのだ。

私は私で獄中から弟に松本徹のことを知らせようとおもつて、いろいろやつたがこれもだめだった。かねてうちあわせたとおり、さしいれの本の三一五のページのある文字に爪で印をつけて秘密通信したのだが、どういう手ちがいからか、よんでくれていなかった。また手紙でこんなこともかいたのだ。「S字型の鉄はいけない。これだけはいけたほうがよい」。ただこれだけかいたのだつたら、わかつたかもしれないが、敵にさとられないために、長々と家の商売につかつている糸くり機の改造についてかいて、その中に上の文句を挿入したので。機械にくわしい弟のことだから、機械については意味のない上の文句をなんとか判読してくれるだろうとおもつたが、判断してくれなかつた。まさか松本徹がスパイとはおもわなかつたのだらう。私は以前に松本徹のことを、活発によくやる、くさつても鯛だといってほめたこともあるので、尚更うたがわなかつただらう。

だが松本の魔手は厳島にまではびかなかった。厳島は4・26検挙をまぬがれた。それは松本徹は厳島の組織を知らなかったからである。

〔注〕 渡辺信樹氏のはなし、「兄からの手紙や、さし入れの本の三二五ページのしるしで、松本徹のことはわかった。その松本徹と天津せいが宮島の私のところにたずねてきた。なぜきたかわからない。」

四・二六検挙

一九三四年四月二六日未明、夢うつつのなかで大のはえるこえをきいて眼がさめた。それから何秒たっただろうか。ザーンと風でもふくような物音がしたとおもうと、弾丸のようなはやさで、私と大塚君はふとんの上から、三十四人の男におさえつけられた。それにつづいて六十七人ばかりの男たちが、一斉に侵入してきて、部屋いっぱいになった。かれらは私たちが凶器をもっているかもしれないと思つたのだろう、ひどくあわてて「早う早う、手錠手錠」とよんだ。やっとだけれが、私の手をふとんの中からひきだして、ガチツと手錠をかけ、私はひきおこされた。六十七人くらいの男が私たちをとりまき、ステッキをもつたやつは、私のあたまといわず肩といわず、ビシッビシツとやたらとなぐりつけた。こうも多人数におそわれたのでは、にげることもどうすることもでき

ない。私は奴等のなすがままにまかしていた。大塚君のことは気がつかなかった。そのとき私はころのなかでさげんだ。「徹にやられた」

西署につくと、すぐに二階の調べ室につれこまれた。三十四人の特高が私をとりまくようにした。多分課長かなにかだろう。まったく無雑作に、「名前は」ときいた。うつかり、つりこまれて「小寺」というところだった。私はだまっていた。その男はまたかさねて名前をきいたが、私はだまっていた。三十四度それをくりかえしたのち「無言戦術だな」といつてそとにでた。なにかうちあわせをしたのだろう。こんどは三階のほこりっぽい、ものおきである。そこには訊問するように、ちゃんと古びた事務机とイスがおいてあった。拷問部屋という感じである。

今日では黙秘権は国民の権利として憲法で定められている。そのころは、そんな権利はない。いわなければ、あくまでも力づくで、いわせようというのだ。それにたいしては、ただ無言でがんばるしかない。昔ロシアの革命的労働者、アー・シャヴァロフの手記「マルクス主義への道」の巻頭に、「同志よ敵の訊問にたいしては無言でおれ、これが組織を防衛する唯一の方法である」とのベてている。私はこのことばを金科玉條として、ころにきざみつけていた。

やがて訊問がはじまった。私を調べる奴は五〇恰好の下品な顔をした男だった。千葉良一という警部だ。かれはいきなり私の頬を平手であつた。パンというひびきがはでにするだけで、ちっともいたくはなかった。かれはつづげざまに両頬をパンパンとうつた。

とうとう本物の拷問をはじめることになった。

私は手錠をかけられたままで、ざらざらする板の床にお行儀にすわらされた。私は観念した。かれらは用意してあつた三寸角くらいの棒をもってきて、足の間にはさみ、千葉が靴のまま私のひざのうえにあがり、おちないように頭髮をひんにぎり、ひとりは、たおれないように私をささえ、ひとりは棒の上にあがつた。三人がかりである。そして上下にどすんどすとやりだした。私は歯をくいしばり、下腹にちからをいれ、めをとじて、うーんとこらえた。それがどれくらいかの時間つづいたか。時間はひどくながいような気がした。のちには足がしびれたのか、さほど苦痛を感じなくなつた。奴等は「名前をいえ、なまえをいえ——まだ、いわんか」といいながら、どすんどすとやる。それでもだまっていると、「返事だけでもええ、小寺じやろう」といつて、私の髪の毛をひっぱつて、うなづかせようとする。だが私はあくまで無言でがんばつた。

とうとう奴等のほうがくたびれてしまった。私はたちあがることができないので、奴等がひきあげるようにしてたたせた。そして三十四人がかりで三階から急な階段をつりおろした。

留置場にはいると二三人ばかり留置人がいた。みな異様な私のすがたに、なにごとかというような顔をしてむかえた。というのは私のきものはズタズタにやぶれ、顔は、おそくはれあがつていたかもしれない。腰から下は自由がきかないというかつこうだった。みないちように「どうしたんちゃ」といった。

私は「テロをくつたんだ」といった。そしてつ

いでのことにこういつたのだ。「ぼくは、もしかしたらここで死ぬかもしれん。あんたたちはでたら、ぼくのことをだれにでもよいからしやべつてくれ。そしたらぼくの同志の耳にはいるかもしれないから」

このときには、検挙は私たち二人だけかとおもっていたので、このことをその同志に知らせねばならぬとおもったからだ。とにかく、ここがえんばらねばならぬとあらためて決心した。

その翌朝ひとりのわかい特高が私をつれにきた。手錠をはめられ、いっしょにあるきながら「今日はさかさにするんぢやろう」と、こともなげにいつてやつた。奴は「そんなことはしないよ」といつていたが、「ちよつとここでまってくれ」といつて、ちいさな部屋へいれてでていつた。まもなくもどつてきて「今日は調べはやめよう」といつて、またもとのフタ箱にもどした。それからここでは私を調べようとはしなかった。忙しい最中で私ひとりにかかつてはいられなかったのかもしれない。

ここで、ちよつとテロについてのべておきたい。テロというものはどんなにおそろしく、どんなにたえがたいものかとだれもおもうのである。もちろん、けつしてらくなものではない。いちど覚悟をきめてしまえば案外たえられないものではない。

私の妻が大阪でテロをくつたとき、最初ものすごくいたかつたので、おもわず「まって」といつたところ「まてとはしやらくさい。申しあげるか申しあげぬか、どっちだ」といつたので、とたんに覚悟がきまつて、その後は、それほど苦痛をか

んじなかつたといつてゐる。そのときテロの間中うつぶせになつたまま、みうごきもせずじたら、奴等はひつくりかえてみて、めをパチクリさせているのを見ると、またテロをやりはじめたという。このときは「いれずみをいれてやる」といつて木刀と竹刀で尻をひっぱたくのだそう。たたく凶器の種類によつて色がかわつて、いれずみみたいになるのだそう。その日のテロは奴等がくたぶれて夜まででおわつたそう。その夜から数日間ハンストをやつたが、その決意にまけてそのまま奴等は取り調べをしなかつたといつてゐる。

私がつかまつて、その日のうちか、あくる日からか、ぼつぼつ同志がはいつてきた。早志みどりさん（のちの玖島夫人）もきていた。留置場が満員なので、男といっしょにするわけにもゆかないので、彼女は房外にすわられていた。電鉄の井上栄君もきた。かれは私に「なにもかもバレーしているが、どうしようか」というから「バレーしても、いなくてもかまわない。とにかくがんばれ」と激励してやつた。

何日めだつたか、二つ、三つのさきの房に関谷君のこえがきこえた。私は関谷君のペンネームでよんでみた。かれは私に「松本君（私のペンネーム）きみはだらしないぞ」といつた。「なにがだらしないんだ」と反問したが、かれはなにもいわなかつた。私が松本徹に売られたことをいつたのか。しかしかれは、それは知らないはずだ。では、取り調べにたいしてあれこれ申しあげたとしてもおもっているのか。そうだったら、かれは特高のかまにかけられているのだ。わたしはかれにい

つた「わしはいつさい無言でやつてゐる。これからも無言だ」。だがかれは、そのままのことについてにはなにもいわなかつた。

かれがどうしてつかまつたのかきいてみると、己妻かどこかで飲食店へはいつたところをつかまつたのだそう。全市に非常線をはつたのかもしれない。

こうして同志たちが沢山はいつてくると、ガヤガヤとにぎやかになつた。そのうちに食物がまづいといふことになつたらしい。私自身についていえば、ちよつともまづくはなかつた。きたない木箱へ入れたむぎめしで、おかずは朝昼晩ともなっぱの煮た奴だが、私のそれまでの最低生活にくらべればまだましなほうだつた。だが他の連中にとつてはほんとにまづかつたであらう。とうとう処遇改善の要求をだし、ハンストになつた。関谷君がリーダーだつた。二・三房さきで関谷君が監守とやりあつてゐた。私は同房のわかい男に、「大声でさわげ、さわげ」とけしかけた。かれらはみんな弁当をそとへおしだし「こんな弁当、くえるかい」「白いめしいれえ」「花のさいたナツパなんか、くえるかい」「いつもいつも花ばつかりくわしやがる」とさわぎだした。

他の房でもみな大声をだしてさわいでいた。そうやつてついにこちらの要求をいれさせた。そのつぎにきた弁当は、おかずが沢山はいつてゐた。みんな一応満足した。だがその翌日にきた弁当はまた逆もどりにいつた。そしてブスブスいいながらだまつてくつてゐると、そのつぎはまたものとクサリナツパになつた。また不平がたかつた。ちようどこのころ私は祇園署へまわされたのだ。

だからあのことは知らなかった。最近に玖島夫人の手記を見ると、数日間ハNSTにはいったとでているので、その後まもなく第二次のハNSTにはいったのだろう。

祇園署の留置場は前近代的な「牢」であった。房は二室で、うらのすみっこにあった。光線がはいらず、いつもほのぐらかった。だが宮島のよりすこしあかるかった。

ブタ箱（留置場）そのものが拷問の道具で、この生活がたえられないなら、はやく白状しろということだから、衛生的であるはずがない。めしはわりあいよかった。近所の仕出し屋からとるのだから、わるくしうがない。私ひとりにたべさすために一合か二合のむぎめしをたくわけにはゆかない。だが分量がすくなかったので、はらがへっていけなかった。

留置場は光線がはいらないのと、厚い板でかこまれているのでかなり底冷えがした。かぜをひいたのか熱がでた。段々ひどくなつて、かなり高熱がでた。ちかくの医者をよんでくれた。医者にみてもらうときは、ブタ箱でなく宿直室にはいった。医者は脾臓のあたりをおさえたり、あやったりこうやったりしていたが、注射をうって処方箋をかいてかえった。この医者は刑務所とはちがつて町医者なので、私のようなあかにまみれた、ひげぼうぼうの男でも、親切によくみてくれた。このときは医は仁術だなおもった。医者の薬をのむと、さしもの熱もだんだんひいていった。

祇園署は、いなかのケイサツだからいつもひとりばつちでたいくつであった。

そのうち、となりの房に、数本英次郎君がやつてきた。かれはコップ（プロレタリア文化連盟）関係でやられたのであった。私はそれまでこの検挙が、どこまでひろがつているのか、まるで見当がつかなかったが、かれからいろいろきいて、かなり大がかりな検挙だということがわかった。数本君のいるあいだはたのしかった。おたがい窓へかおをくつつけてはなしあった。かおはみえなくとも、心と心はふれあった。

そのうち数本君がでていつて、またひとりになった。まもなく西署から紺谷がやつてきた。数年前私が西署に検挙されたとき、巡查部長であった紺谷は、警部補になっていた。ひさしぶりに二階のあかるい広々とした武道場にあがると、夜の鳥が昼間できてきたように、まぶしかった。いつのまにかあたりはすっかり夏になっていた。

紺谷は、数年前とはすっかりかわつて、ニコニコして私の機嫌をとるようであった。そのあげく調書をつくりにかかった。私は「組織についてはなにもいえない」といつたら、その調査に「組織についてはなにもいえません」とかいた。かれはこういつた。「君たちや、安々と自白したんじゃ、顔がたたんのかね。少々やられて、しかたなくいわされたというほうが、よいのじゃないかね」と、テロをほのめかした。私は「どっちでもおなじことだ」といつてやった。私はまだまだこれらがテロも本物だろうと、かくごした。かれは一時間いてかえったが、手記をかいとくれといつて、紙と鉛筆をおいていった。

私はじぶんの取り調らべを断念ささねばならぬとおもひ、こまごまと私の決意をかいた。それへ

私の短歌もかきそえておいた。

「堤防は よし決潰すとも 最後まで、

おのれ ひとりで 堤を守らむ」

何日かして、また紺谷がきた。手記をわたすと、かれはニコニコしてよみはじめたが、みるみる顔はくもり、まるで泣きそうな感じがしたので「それはやぶろう」といつたら「いやええ、とつておこう。これも証拠だ」といつてカバンにいれた。それからまた何日かたつて、こんどはふたりでやつてきた。「あちらがあいたら、もうそろそろ帰ろうか」といつた。

西署にかえつてみると、留置場の中は満員であつた。このころケイサツは、ヘロ患（ヘロイン中毒患者）狩りをしていた。

そのうち私の調らべがはじまつたが、もう調べことはほとんどなかった。私がいわなくともバレルものはみなバレていた。私はそれを承認するだけになっていたが、それはしなかった。奴等もしかたがないので調書に「組織についてはいえません」とかいた。

未決拘留

広島刑務所へゆくとすぐに私服やはきもの、その他は拘留所にあづけて青いきものをきせられた。丸ぼうずにサンパツしてフロへいれられる。三ヵ月めのフロなので身体がさつぱりした。

この拘留期間中こまつたのは最初の二三日、ものすごいノミにおそわれて、ねむれなかったこ

とだ。板の間にゴザを（タタミ一枚分くらい）してあるが、そのゴザのなかに無数にひそんでいるのだ。よこになってみると、ぞろぞろはつてくる。ゆびでおさえて爪でつぶす。ひと晩中ノミばかりつぶしていた。あくる日はすわったままこくりこくり、よるになると、またノミつぶし。よくも前住者はこのなかでへいきでねむっていたものだ。三日めくらいには、私も前後不覚にねむってしまった。

あついきかりを二四日間ひとりでもしない、すわっているのもくではなかった。

拘留の満期がちかづくころ、やっと監房の戸があいて検事局へゆくのだといっただされた。

検事局では、のちに思想犯保護観察所長になった思想検事桜井が担当であった。

「きみはなにもいわないが、いわなきや起訴せんぞ」、私は「起訴しなきや、しなくてもいい」といってやった。それから彼は急に態度をかえていろいろはなしだした。私はシヤバでは言論の自由がなかったが、ここでは自由があった。私は天皇制の矛盾をつき、テツテイ的にこきおろした。かれにはなんの理論もないので反論しなかった。かれは時々ちよつと口をはさむのだが、すぐ反論してやった。

かれはふと時計をみて、「ああ理論闘争をやっていたら三時間」といって書類をしまいだした。かれは思想検事だが、知っているのは「理論闘争」ということばくらいなものであった。

二四日がすぎると未決拘留監りである。領置へあづけた私のゆかたをきてタタミのうえにすわったときは、またシヤバにもどったような気がし

た。このゆかたは、祇園署にいれられていたとき、詐欺ではいつていた男がくれたもの。私がつかまったとき、きていたものはズタズタにやぶれたが、そのときも同房のものにあわせを一枚もらった。

ここでは私本がよめる。もちろん検閲があつて左翼的な本は一切よまさない。だからここでは語学とか数学とか基礎的な勉強をすればよいのだ。

私たちの検挙後、救済会が活動していた。いっしょにつかまった神崎宇市君や大塚猛夫君は釈放されてすぐ救済活動をはじめていた。ふたりとも前後して面会にきてくれた。面会所で金あみをへだてて、おたがいにニコニコあつて話をするときは、刑務所という感じがしなかった。神崎君がなにかいいかけたら看守が制止したので、かれは「それではもういうことはないわい」といって、でていったのがいうまでもはっきり印象にのこっている。

またここにいるあいだに早志みどりさんが四五回ばかり手紙をくれた。早志さんは、そのころ派出看護婦をしていて、ひまなときは消費組合に出入していた。ここでは手紙をもらうことがなによりもうれしい。なにかいてなくともよい。手紙をもらうだけで、とても大きなげましになる。

本のさしいれは私の弟（渡辺信樹）がやってくれた。近代日本歴史とかいう幕末から明治初年にかけての歴史の本で、かなり専門的なものであった。これはきつと高等学校のほうからきたものにながいがいい。また有沢広己という東大の助教授のかいた統計論が、これがまた妙に面白いものであった。それはいたるところにマルクス、エンゲルス、レーニンの引用でうまっているのだ。あたか

も有沢さんが、さしいれ用にかいてくれたようであった。この本は岩佐君もよんでいる。神崎君あたりからさしいれてもらったのだろう。

ここでは他の同志と連絡をとることを厳重に戒めていた。だから顔をあわせたり同志のこえをきくような機会は全然なかった。じつは、ひとつおきくらいに私たちの仲間がすわっていたのだろうが、私たちには全然わからないので、じぶんひとりでいるような気がしていた。だから同志の元気な顔が、みたくてみたくて、時々夢にみるくらいであった。またなんとかして同志によびかけて激励してやりたかった。

ある日運動のとき、丁度看守がはなれてたつてるとき、監房のなかの同志によびかけるつもりで赤旗の歌をうたつてあるいた。するとまんなかの房の高い窓へにぎりこぶしをあげたやつがいた。それがだれだったかわからない。それから何日かたつて独房のなかで本をよんでいると、そとの運動場でしきりに歌をうたっている。インターカ赤旗かだった。そのこえはたしかに岩佐君のようであった。ああ岩佐君は元気でがんばっているなあとおもった。ただこれだけのことだが岩佐君と会話をかわしているようにおもった。

ここではどういうものか、よく転房さしていた。そこで私もおもいついて独房の壁へ、めがねのつる（私のねがねはつるがおれて針金をくくりつけていた）で落書した。「J K P（日本共産党のドイツ語の頭文字である）」とかいた。ちいさくかいたのだが、それを看守がみつけて監区長に報告したので、さっそくひっぱりだされて監区長のまえにひきすえられた。監区長は大井という若い東北帝

大をでたという男で、いつも口をへの字にむすんで、いやに威厳をもとうとつとめているような奴であった。この男の机の上には数冊のドイツ語の厚い原書がかさねてあった。そのうちの一冊は、DAS KAPITAL（資本論）であった。かれは「こんなものまで、ちゃんとよんでいるんだぞ」というような顔をしていた。だがこの男はインテリににあわない残虐性をもっていた。阪口喜一郎君はきつとこの男にころされたのにちがいない。

岩村大次君や椎野悦郎君もこの男にやられたそうだ。その他多くの同志たちもこの男にやられているにちがいない。かれは私をよつんばいにさせて尻をまくりあげ、皮手錠でびしびしとしばいた。「ブルジョアジの番犬はこんなものだぞ」とかれはさげんだ。

そしてそのあげく左手後右手前といつて皮手錠をはめられた。なぐられるぶんはたいしたことはないが、この手錠にはちよつとこまつた。めしをくうのに右手だけで犬のようにして、くわねばならないからだ。このあと切れ痔にこまつた。用便のとき、あぶらあせがでるほどいたんだ。このことを弟への手紙にかいたら、すぐに医務係がやってきて薬をくれた。多分監区長の大井が私の手紙をみて、さしむけたのだろう。かれはいつも私の手紙に目をとうしていた。私の痔の原因は尻をなぐったからだと思っていたのだろう。

予審

こうして夏はすぎ秋もすぎ年をこした。

ある日突然予審廷にひきだされた。斉藤という予審判事がしらべるのである。かれも思想についてはなんにも知らなかった。

その後ひきつづいて二―三度出廷した。一回は迫桒盛登君、南小一君と私との関係をたしかめるためであった。私が知らない否認するので、判事は迫桒君をつれてこさせ、私のまえて迫桒君に、これはだれかといわした。つぎに南小一君の調書を私にみせた。私が否認すると判事は「こんな風に南はちゃんといっておる。これを否認するんなら、また南を出廷ささにやらん。そんなぞうさなことをさせないで、はつきりいつたらどうかね」といった。徒に公判をおくらせ、無用のくるしみを同志にあたえることになるので、あつさりみとめることにした。

予審が終結するとまもなく公判日を通知してきた。いまは何年何月かおぼえていない。

公判

公判は勿論のこと非公開だった。

検事は長々と論告して四年を求刑した。

私の陳述は長々としゃべるのは自信がなかった。

た。私は長期間無言の行でいたので、このころは言語障害をおこしていた。そうでなくても口のへたなのが、体力の消耗とともに声帯も萎縮して蚊のなくような細い声しかでなかった。また私は英雄きどりで公判闘争をするということは、すきではなかった。そんなことは私のガラではなかった。だから私はただ共產主義は正しいということ、思想は転向しないこと、出所したらふたたび運動をつづけるということを簡単にのべただけだった。

公判があつて一―二週間後に判決があつた。検事求刑どうり懲役四年、未決拘留通算一二〇日というのだった。

拘留監にかえるとすぐに控訴の手続きをとった。刑がおもかろうとかるかろうと、それは問題ではない。我々はそれを刑だとはおもっていないからだ。悪いことをしないのに、刑があるはずはない。これは弾圧なのである。だから我々はそれにたいして反対し、即時釈放しろというのであった。

控訴

控訴院は国恭寺のちかくにあつたが、古くさい一見御殿風の建物だった。こんども非公開かとおもったら、そうではなかった。

婦人ばかり（どこかの婦人会らしいが）その傍聴で満員だった。そのころ共産党事件といえど新聞は一ページ大の号外を発行し、社会面も全ペー

ジをうめていた。検挙されたものが、いずれも優秀で、まじめな青年であることが、おなじ年頃のむすこをもつこれらの人たちに共産党事件の公判を傍聴させたのかもしれない。

こういう機会をとらえて、いわゆる公判闘争をおこない、啓蒙活動（宣伝活動）をすればよかったのだが、私にはできなかった。婦人のまえではテレるくせがあつて、あがつてしまった。裁判長が私に控訴の理由をたずねた。「我々は無罪である」といったら「えつ」といつて、きき耳をたてたが、私が無罪の理由をいううちに、やつぱり共産党だなあと顔をしてだまつてしまった。共産党なら、しらべることも、きくこともありはない。刑の相場はきまつていてもいようようであつた。傍聴者もせいになかつたろう。

判決も一審どおり懲役四年、未決拘留通算一二〇日であつた。これは一九三五年六月二十六日のことであつた。

一九三四年四月二十六日の検挙から一年二ヵ月めであつた。このときは大審院に上告ということになるのだが、このへんで下獄することにした。下獄すれば今まで頭へつめたものの何割かを忘失するだろう。それがおしいとおもつた。

この事件については私はくわしいことはきいておらず、当時の新聞記事などもみていないので、誰々が起訴され、どれくらい実刑をうけたかなどよく知っていないのだが、これではとんどねこそぎにやられたものとおもう。

このようにして邪魔物を排除した天皇制ブルジョア政府は戦争への道をまっしぐらにつきすすんだのだ。

略歴

私の出生地は広島市小網町（昔は畳屋町といつていた）寿座という大きな劇場の前の小さな菓子屋の長男として生まれた。旧士族出身の父は私以上に商売が下手で損ばかりして貧乏し、遂に宮島に流れついて豆腐屋をした。そこで私は大きくなつた。そのような訳で貧乏の味は充分になめていた。まだ小学校へ行っている頃から宮島細工の彫刻屋の従弟に入つて資本家（と云つても問屋）の横暴さを知り、階級意識を自然と体得した。

だが私は向学心に燃えて二〇歳の時上京し国民英学会の英文学科の夜間部に入った。勿論昼間は労働、そうしながら一方では社会科学の勉強をした。当時西雅雄主幹の「社会主義研究」という月刊誌が出ていたので、それを購読していたのだがメーデーの前々日の夜突然検束されて西神田署のブタ箱に入れられた。処が意外の事に、それまで遠くにいて思つていた西雅雄、その人がそこに拘束されていたのだつた。しかもその隣りには、かの一九三二年四月に逮捕虐殺された上田茂樹がいたのだ。後に知つたことだが、丁度その頃は第一次共産党事件の最中であつたらしい。私も一応共産党の仲間の一人に見られたのだつた。だが私はチンピラなので二日おかれただけで釈放されたのだが、このことは私の将来の方向を決定してくれたのだつた。

関東大震災に会つて焼け出され帰広すると、私

が上京前に組織していた新学生会（進歩的な青年の団体）の中でマルクス主義の宣伝活動をはじめた。そのうち警察の圧力が加わり、遂に不敬文（天皇に対する）落書事件が発生した。これは当局の謀略であつた。（後にその事が判明した）。私と仲間の一人は警察へ引ばられ、私は起訴されて広島監獄へ収監された。だが一週間ばかりで予審免訴となつて釈放されたのだが、この時代の田舎ではこれ位のことでも大事件で、とても新学生会がこれに堪えられるものではなかつた。新学生会は自然壊滅であつた。

しばらく宮島にも冬の時代が続いたのだが、やがて春が来た。3・15の大検挙があつた頃から、宮島にも左翼のグループが出来た。その後広島における救援組織、赤色救援会広島地方委員会と連絡なつて赤救佐伯地区委員会を結成した。私は責任者となつた。だがまもなく広島の一斉検挙に、そのあおりを食つて宮島も一斉検挙され厳島署に一週間あまり留置されたが、起訴留保で釈放された。

（以下、本文参照）
遂に四月二六日検挙された。そして懲役四年の刑をうけた。獄内では非転向でがんばつた。

太平洋戦争ばつ発の日、一二月八日の翌朝また検挙された。だがこの時は何もやっていなかった。ので、一ヵ月ばかりで釈放された。その後三年位たつて、もうボツボツ敗戦が近づいた頃、また理由なく県の警察部へ検挙された。叩けばほり位は出るだろうということだつたのだろうか。一〇

日ばかりいて釈放された。ほこりが出なかったのだ。ということはいち早く岩佐君、岡本君が広島へ帰った。ということはあまり自慢話にならない。

敗戦後、いち早く岩佐君、岡本君が広島へ帰ったので連絡をとり党の再建活動を始めた。宮島でも厳島細胞を組織し、税金闘争等で大衆の先頭に立った。この頃が宮島の闘争は花であった。やがて凋落しはじめた。原因は第一に分派が出来て二つに割れたことである。第二には封建色のつよい田舎の小さな島ではあまりに周囲の壁が厚かったためではないだろうか？ 活動家たちは島外に向って一人去り二人去りして細胞（支部）も殆んど実体がなくなつた。私も妻が入院し、金があるので、金もうけにあくせくせねばならない状態になった。電気屋をはじめてみたが、これもうまくゆかず、結局失敗だった。この間に私も宮島から廿日市へ移転した。今ではささやかなレコード店を経営しているが、これは又とても忙しい商売で党活動などやる暇がない。

〔後略〕

昭和九年四月二十六日「四・二六」事件報道する中国新聞

「4・26事件」

大亂闘の末逮捕す
西郷十組の決死隊
臨時特高商會が
意外の實を露出す
東郷大を飾る一頁
字品新機組の前には
抵抗は無効だつた
意外の大物を逮捕
絶食同盟へ選手
闘争を見る性
女たらし

手記

中村 定男

一九二九年三月一五日最初のピラまきによる逮捕。「3・15の一周年と山宣の虐殺に対して全労働者はストとデモで闘え」のピラ。

一九二八年九月ごろ山道襄君（山道繁君の兄）が東京外語学校を3・15事件のために放校処分となつて呉にかへつてきた。かれを中心に、池田八束、片岡義夫、吉浦町の某君、中村の五人でグループをつくつたが、いまは3・15事件の直後で組織的にうごくことは危険だという山道君の意見で、ごくルーズな交友関係で当分ゆこうということ、ときたま五人があつまる程度のことであつた。

一九二八年秋ごろであつたか、池田八束君が山道君の紹介で上京した。そのうち交友関係も間違になり、秋には平凡な一八歳の少年にかへつたが、丁度そのころ私の兄繁一が三菱造船（神戸）にい

た。兄は神戸で旧労働党員で労働組合評議会の活動家であつたために、三菱造船を首になり、一時かへつていたことがあり、私の家に特高が時々様子をさぐりにきていたが、中村の弟に『戦旗』などよんでいるものがあることは、特高は知つていてマークしていたわけだろう。

上京した池田八束君からは、つねにたよりがあり、印刷物などおくつてきていたが、一九二九年三月はじめごろ、上記の「3・15一周年」のピラを呉市内にはるようにおくつてきた。

三月一五日のあき、のりバケツとピラをもつて未明の街にでたが、その日は春にはまれな大雪であつたとおぼえている。工廠への通勤時間にははやすぎたので、市内の要所要所にピラをはりおえ、のこりのピラをもつて海軍工廠の労働者が大勢通

勤する本通りの電車通りにでかけた。

通勤の労働者がめがね橋——工廠の入口にむかつていそいでいた。そのとき本通りの電車すじいっぱいになって、工廠へ工廠へと洪水のようにながれていた。

わたしはいつしよにあるきながら、一枚一枚手渡していった。そのうち次第にあかるくなつてきたので、ピラをくばるのをやめて帰途についたが、三津田橋のところで「工業補習学校」の同級生にでくわしたので、かれにのこりのピラをわたして、工廠内でひるやすみの時間に食堂のテーブルの上に、おいてくれるようにたのんだ。

かれは当時海軍工廠の火工部（吉浦町にあつた）に通勤していた。ところが、かれは私の命じた以上に、みんなにそのピラをくばつたそうだ。

そのとき火工部にいた吉浦町の花本さんが後年

はなしたところによると、共産党のビラだということで大反響があったといっていた。

その友人はすぐにつかまり、いろいろ追及されて「中村にたのまれた」といったために、特高は私のやったことだと気づいて、翌朝二人の特高がふみこんできて、のこっていた文書を押収し、わたしを呉署にひっぱった。

この事件で、生まれてはじめてブタ箱にほうりこまれた。そもそもこの事件が、後年わたしが左翼運動にあしをふみこむ発端になったわけだが。

この事件以来、ことあるごとに、たとえば何々の宮様が呉にきたといつては予防検束と称してはブタばこにはうりこまれた。

何回めかのブタばこで、当時大衆党の党員であった高橋君と知りあい、いっしょに待遇改善のハンストをしたりした。

かれにさそわれるままに大衆党に出入するようになったわけだが、わたしが最初のうち左翼運動となかなかレンラクがつかなかったのは、大衆党員であったことがわざわいしている。

二七年テーゼがでた当時で、三二年テーゼでもはじめのうちはそうだが、社会民主主義者は有害な社会ファシストとしてテーゼは規定していたわけだから。

大体広島、呉の大衆党というのは、旧労農党の流れをくむものが多く、広島は佐竹氏にしてもそうだし、故人になった呉の竹本氏にしてもそうだった。新労農党準備会の時など、高橋弁護士（故人）が呉の支部長だった。

手記
それが、しだいに右傾化してゆき、ついに社会大衆党という右翼社会民主主義者の集団になった

わけだが、わたしの所属していた当時は全国大衆党といっていたとおもう。

一九三三年 守田道輔氏とのであい (左翼運動路線への連絡)

3・5事件、10・30事件のあいづく弾圧で左翼の活動が壊滅にひんしたころ、旧労農党の闘士の守田道輔氏が広島をへて呉にはいつてきた。かれはまず大衆党の左翼分子と連絡をとり、わたしはそのころ木原君という大衆党員の家であったのだが、そのとき旧姓つたもとすみ江、現在の守田氏の奥さんもいっしょだった。

ともあれ、そのようなことで守田氏と連絡がつき、かれは大衆党員のなから、若い私と坂田君をえらんで同志にしたわけだ。

守田氏は当時四〇歳くらいだったとおもう。かれが当時正式な共産党員だったかどうかはいまもってわからないが。

かれは地味に土方のしごとをやりながら、朝鮮人労働者を二三人つかんでいたようだ。わたしもいち度か二度、守田氏と朝鮮人の同志のところに行ったことがある。

約半年くらいして守田氏が検挙され、私も坂田君も逮捕された。

その検挙で私ははじめて特高のテロをうけた。

坂田君ははやくでたが、わたしは三五日ぐらいブタばこにいたであろう。桜井検事が呉署に出張して、取り調べたが、守田氏が私や坂田君のことはあまりいっていなかったらしく、そのときは微罪

処分で不起訴となり釈放された。

守田氏との事件で釈放されて、しばらくのころ、山道繁君が拙宅へ「竹地定夫君が君にいたいといっている」と連絡をつけにきてくれた。竹地君とは以前広島にいたころ、多少しりあっていたので、ころよくあうことにした。関谷源一君が広島地方にオルグできたころのことで、竹地君は呉地区のオルグであった。

竹地君と連絡がついてしばらくしたころ全協組織再建の会議を、たしか灰が峰のふもとの方の山中でもった。メンバーは竹地、山道、岡田（西条町の石屋さんで呉にきていた人）中村の四人であったとおもう。3・5事件のあいづく弾圧で地方としては強大な組織も消滅していた。

竹地君と定期的連絡をとっていたが、かれは呉にきてすぐに町工場にはいつていた（旋盤工）。皆経済的に苦しく、貧苦にたえながら活動していた。

非合法時代の同志との連絡は、どこでもにたようなものだったろうが、夜街頭連絡か山中か、人目のあまりないような喫茶店か食堂などであった。

竹地君は腕時計ももっていなかったたので連絡のときは小型のめざまし時計をもつてあらわれていた。所定された時間で、時間を五分すぎれば、その日街頭連絡はうちきることになっていた。

敵から身をまもるためにはそれほどきびしさが要求された。

ある夏の夜指定された場所へ私は右側から竹地君は左側から近づいていつて、顔をあわせあたりをみて大丈夫だということを確認してから、「今夜は君にわたすものもあるし、一寸はなしもあるの

で、夕涼みをよそおってしばらくあるこう」という。でその夜はどちらも昔のことで、和服すがたであったが、ぶらぶら雑談しながら、さも夕涼みをしているのだというかつこう。数メートルくらいあるいたところで突然私服の刑事に誰何された。

よほど新米の特高であつたらしく「君たちは何をしているのだ」というから、「あついで涼みがてら散歩しているのだ」というと、「その交番まで同行してくれ」という。

心中、しまったとおもつたが、ちかくの朝日町の交番につれこまれた。

さいわいなことに、私の方をさきに調べ、竹地君は奥のポリ公の仮眠する場所で、またされた。その刑事は、なにかもっていないかと、いろいろ調べたがなにももっていないかつし、私の調べはかんたんにすんで、つぎの竹地君の番になった。

じつさい、その刑事、新米の特高だった。私は呉署に何回も検挙されて、顔だけはおぼえていたが、かれはドロボウがかりの刑事で、わたしがその後で検挙されてかれが特高になっているのを知った。特高になりたてのホヤホヤだったわけだ。

交番から釈放されて、竹地君が「こまつたことになった」という。「君がしらべられている間に、関谷君からわたされてもっている文書を、かくし場所に窮したあげく、ポリ公がねおきする部屋の、はずしてたてかけてあつたガラス戸のうらにかくしたのだ」という。

さて、どうしたらいいかということになり対策を協議したが、かれは「おそくともあしたの朝までは発覚する。おれはこれからつとめさきの工

場にいつて、はたらいた賃銀をもらつて山をこえて広島にげるから」と再会を約してわかれた。

まさに危機一髪のところであつた。

アジトの整理は私がしたが、もつてきていたものはふとんくらいのものであつた。奥さんのみつこさんのところにおくつたとおもう。しかし、これが生前の竹地君とのさいごのわかれになつてしまつた。

その後4・26事件でかれは関谷君等とともに検挙され、出獄して戦地におくられ戦死してしまつた。ことし三月一日の追悼式で会つた奥さんが話していた。

苦難な時代をともにたつた同志が再会もできぬまま生涯をおわつてしまつたことに対する哀悼の情は、いよいよもなくなさみしい。3・15の追悼式で未亡人のみつこさんにあえたのが、せめても私にはなぐさめであつた。

関谷、竹地の逮捕にもなつて、4・26事件の余波をうけて、私も検挙されて三〇日ちかいブタ箱生活ののち、未決拘置所におくられた。その時は呉からは私とは連絡はなかつたが、山崎政高君（現在大阪府門真市）も未決でいっしょだった。山崎君のはなしによると田原勝二君も4・26事件の同志だったということだ。

この事件では呉地区に全協の組織らしきものが、ほとんどなく、竹地君等も我々を防衛してくれたためか起訴猶予処分でできた。

4・26事件後の再建活動

吉本康二君とともに

釈放後しばらく家でぶらぶらしていたところ、また山道繁君が連絡にきてくれて、吉本康二君とあつたのだとおもう。

当時の客観情勢は、日本帝国主義の中国侵略戦争が益々拡大しつつあり、5・15事件（軍部ファシストのファッショクーデター）がおこつた直後であり、我々の運動もますます困難をきわめつたあつた時代であつた。

阪神方面（京都）にのがれた吉本君をおつて、スパイ（松本徹）も、そのあとをおつたと小寺君の手記にはでているが、事実とすれば吉本君は呉に潜入する前からスパイ（特高）におよがされていたことになる。

私が吉本君にあつたのは京都から呉に潜入してきたころだろう。山道君と高橋まつ子さんも、いちど呉までかえり、山道君が吉本君を私に紹介したあと、ふたたび大阪方面にまつ子さんとともに去つたのだらう。高橋まつ子さんには、山道君とまつ子さんが大阪に発覚するさい、森島さんの家でいっしょであつただけである。

当時本通り一三丁目の遊廓入口に森島守人さんというシンパの人がいて、この人は山道君がなにかで検挙されたとき、ブタ箱のなかで知りあつた人だとのことだった。のみ屋で左翼的なことをしゃべつていて、特高にマークされた人だとのことだった。

森島さん一家は、森島のおばあさん、奥さん、奥さんの弟で洋服屋の職人さん、その妹でバスの車掌さんをしていた娘さんであった。奥さんとはとても親切なよい人だった。

最初吉本君は、そこにいたのだが、いつまでもいては危険だし、森島さんに迷惑をかけてもすまんといい、ほかにアジトをかりたが、森島さんや奥さんはいつも吉本君の身をしんばいして、どうしているか元気でいるかと気づかってくれた。

森島さんの家業が餅屋さんだったので、私は時々もちをかうそぶりをしてたちよっていた。

党の五〇年史にもでているように、一九三二年、三年にかけて敵のスパイは党中央部にも潜入しており、大泉兼蔵、小畑達夫らが中央委員会に潜入していた。これらスパイの一群はさいわい摘発されたが、警察当局のスパイ政策は中央から地方党組織にいたるまでおよんでいた。同志とおもってちかづいていった奴がスパイであった。したがって旧同志にたいしても、うかつに手をさしのべことは、危険でもあった。

古い同志の上にはいつも特高の目が光っていたのだ。

スパイ松本徹について

吉本君と私ははじめた再建活動の第一歩は、4・26事件をのがれた同志とのすみやかな連絡の回復であった。

吉本君の学生時代の同志が数人、広島におり、その同志たちとの連絡は、吉本君が広島にでかけることは危険なので、私がかわってひきうけた。

そういうことで、こともあろうに最初からスパイ松本徹と私はつきあわざるをえない羽目になったのである。

第一回の徹との連絡は、横川駅から一〇メートルくらいいったところの踏切の手前のうどん屋であった。

当時の横川駅付近は、うらぶれたさみしいところであったが、私はそのうどん屋へかけていった。お互に初対面のことなので、私は週刊雑誌をもち、左手のくすりゆびに白いホウタイをまいてめじるしとした。

徹も同様なかっこうをして、であつたらペンネームで声をかけて、相手を確認すること、前もって吉本君が手紙で徹に連絡しておくことになっていた。

私はその日、指定された時間かつきりにうどん屋にでかけていった。ところが時間がきても徹はあらわれない。いらいらしながらまわっていると、五分か六分をすぎたころ、洋服ネクタイすがたの中年の男がうどん屋にはいつてきた。だいたい、そんな紳士然とした人のはいるよううどん屋ではないのだ。

私の神経は、初対面の同志にあうということに緊張しているし、これはおかしな奴がはいってきたとすぐ感じたので、そしらぬ顔をよそおって、テーブルの下で、左のくすりゆびのホウタイをはずした。

もし特高なら不審問されるだろうが、そんな

つたらどうするかかんがえてみた。ポケットには徹にわたす文書をもっているし、さてそういうことになったら、どうのがれるべきか。

うどん屋のうらが竹やぶ、その方向へはしるよりほかはないと心にきめて、しばらく様子をみていたが、敵はうごく心配はないので、私は何くわぬ顔をしてうどん屋をでて駅の方へいそいでいると、徹らしい男が駅の方からやってくるのだ。

私はたれそれ君かとかれのペンネームをいうと、そうだという。

「いま、うどん屋でまわっていると、変な男がはいってきたので、でてきたのだ」というと、「そうか」とのんきなかおでいう。

普通非合法運動しているものなら、すこしは緊張したようすをするはずだが。

ま、とにかく吉本君から托された文書をわたし、そのときつぎのレンラクはまたするといつて早々にわかれた。

このときの洋服ネクタイの男が県警察部の特高の岡野であったことは、のちになってわかった。このようにして私はむろん、吉本君もだが、スパイ松本徹のうらぎりによって最初からおよがされていくことになる。

呉にかえつてきて吉本君に事のしだいをのべ、「徹という男はおかしいんぢやないか」といった。

純情な吉本君は「いや、かれの兄も入獄中だし、大丈夫だとおもう」というので、そのときはそうかなあとおもったが、かんがえてみればその時点で我々はもつと慎重であるべきだったのだ。

大体、非合法時代の運動のなかで、連絡時間が五分も一〇分もおくれることは、時として重大な

結果につながるものであり、我々の仲間は充分、それはわきまえていたはずなのだ。

第二回の徹との連絡は、初夏のころであったとおもうが、徹のほかには広高の学生との連絡があり、広島にでかけていった。

徹とかんたんな連絡をとり、わかれようとする、野郎が「私も呉の親戚に不幸があったので、呉にゆかねばならんから、いっしょに呉までゆきましょう」というから、私は「ほかにもちよつと用件があるのでここでわかれる」といってわかれた。

徹とわかれて学生とたかの橋のところの喫茶店で連絡をとり、広島駅にでてみると、駅の玄関口のところで徹が人待ち顔でたっていて、私をみると近よってきてはなしかけようとするので、「ここでは危険だから、話があるなら列車のなかで」といって列車にのりこみ、さしむかいにすわった。

列車のなかでなにかかれは、そわそわしておちつかないようすで、ポケットから金をとりだして、封筒にいれてみたり、キョロキョロあたりをみまわしたり、全くおちつきをうしなっている様子だったが、「じつは香典をわすれてたので、家にとりにかえたから、列車にのりおくれたのだ」といいわけをしたりしていた。

この時の連絡でも私は徹の通報によって、「面を割る」ために、特高に学生との連絡をみられていたのだ。

さてこれはのちのこととして、さきをいそう。列車のなかとか、私の無口な態度やなかで、スパイ徹はスパイであることをみやぶられはしまいかと、心のなかではおどおどしていたのかもしれない。

れぬ。

やがて呉駅のひとつまえの吉浦駅に、列車がついたので、「私はここでおりるから、失礼する」というと、彼は「私もここでおります」という。

「君は呉の親戚までゆくんだろう」というと、どうだ徹は、「しらない土地にくると不安なので、バスでゆきます」とこういうので、「いっしょにおりても、私は呉では特高に知られているので、いっしょにあるくわけにはゆかん」といって、わたしひとりバス停の方へむかった。

ふみきりをこえたところに当時バス停があったが、バスをまつていると、そのそばの神賀川にむかって立小便をしている男がいる。

徹のようすのおかしなこともあって、私は第六感で「こいつは、あやしげな奴だ」とおもい、さてバスにのるべきかどうかをかんがえたが、やがてバスがきてその男はバスのいちばんおくの座席に坐をしたので、私はいちばんまえのいつでもとびおりられるところに席をとった。

やがてバスが私のおりる停留所のふたつくらい手前にとまったとき、でかかったバスからとびおりた。

このときのバスの男が、徹を直接つかっていた、県の特高、岡野警部補であったことが後にわかった。

私は吉本君に、松本徹の態度はいちどならずこんどもおかしかったという、吉本君は「徹の親戚が呉にあるということは、きいたことがない。私も気をつけよう」といっていたが、かれは逮捕されるまで半信半疑であったから、連絡をうちきらなかったのではないかとおもう。

宮島の渡辺信樹君とも二度ばかり私がでかけていって連絡をとったことがあるが、特高が渡辺君を追及しなかったところを見ると、徹は私が渡辺君にあつたことを知らなかったからだとおもう。

私がどうして、こうながながと「スパイ松本徹」についてかたるかといえば、スパイというものについていくし、それにもまして、彼のうらぎり行為によって、同志吉本がたおれたことをわすれないからだ。吉本君は入獄中、腸結核のために絶望状態となり、執行停止、仮出獄となり、うらみをのんで死んだ。

たんに「轉向」というだけならまだよい。轉向して「敵のスパイになりさがった奴」。いまかんがえてみても、憤怒の情がもえる。

この気持ちは、松本徹が「同志」であつた時期いっしょに活動した人々には、「いまさら死屍にむちうつ」ようなことは書かなくとも、おもう人もあろうが、私には終世わすれることはできない。

余談はともあれ、二度めの連絡で私は徹との連絡はうちきつたが、吉本君は検挙されるまで、つかずはなれずのかたちで連絡があつたのではないかとおもう。吉本君も私も敵に完全におよがされていたのだ。

一九三四年夏ごろのことであるが、中央委員会は破壊され、情勢がコントンとして地方では中央の事情をつかむすべもなかつたので、ついに吉本君が上阪して、中央の事情を調査してくることに、大阪にでていった。

まえにかいたが、京都にいった吉本君のあとをおつて、松本徹が京都までおつかけていったというのは、このときのことではないかとおもう（小

寺君の手記によると、4・26事件で吉本君が京都にのがれたところとなっているが、こんど小寺君に
あう機会があれば、いちどたずねてみたいとおも
っている。

吉本君が上阪して、かえってきてからの報告に
よれば「中央奪還 労働者派」と称するいわゆる
「多数派」がどうも正しい中央指導部であるらし
いとの情報をもつてかえってきたので、「多数派」
に所属することにした。

おそらく当時大阪方面では「多数派」の勢力が
つよかったので、そういうあやまった判断をした
のであろう。

ちなみに「多数派」とは党の「50年史」による
と、最後の中央委員袴田里見が、ひきつづく弾圧
のもとで活動していた時期に、「全国農民組合・全
国会議派中央グループ」および「日本消費組合連
盟中央グループ」の一部に発生した「宮内勇」「山
本秋」などの活動によって……云々と記されてい
る。念のため。

逮捕より未決監へ

一九三四年秋 逮捕

一九三四年秋、私は自宅で逮捕された。どうい
うわけかブタ箱にいれずに、道場へほうりこまれ
た。道場のなかは満員である。竹地君との事件で
起訴猶予になった山崎政高君がいる。私の個人的
な友人たちがいる。そのほか顔を知らない人々で、
みうごきもできないほどだ。

手記
私が便所にゆくと、看守につきそわれた婦人

をみるとなんと、それが森島さんの義妹、バスの
車掌さんだ。

これは相当手広く検挙されているなどおもっ
た。

山崎君に「どうしたんだ」ときくと「おれにも
わからんのだ」という。

大体こんなに組織が拡大しているとおもえな
いので、てあたりしだい警察はひびつてきたも
のらしい。

吉本君は逮捕されているのか？ それとも検挙
されてどこの警察にいろのかもわからない。

私はかれが無事、検挙をのがれていればいいが
と、そのみをいのつた。しかし、かれが検挙を

のがれるはずはなかったのだ。我々はスパイに売
られ、特高におよがされていたのだから。

ただ敵は、組織の実態をつかみかねて、このさ
い4・26事件後の党活動を徹底的に弾圧するため
に、苛烈なほどの検挙をやったのだとおもう。

客観的情勢は、日中事変はますます拡大しつ
つあり、左翼運動をこのさい徹底的にやつつけよう
としたのだとおもう。

呉署ではかくべつの取り調べもなく、私は広警
察署にうつされた。広署というのはちいさな警察
であった。留置人は私と私の二人の友人、ドロボ
ウ一人、精神異常者一人の五人であった。ブタ箱
のうらは広大川であった。

私は最初ドロボウ君といっしょの房だった。だ
いたい房も四つくらいしかなかった。ブタ箱のめ
しも、さしいれ屋がいつもはひとりかふたりのめ
しで、めんどろだったのだろう、むぎめしではな
くて、米飯だった。洗面はブタ箱をでて小使室で

させていた。

小使室のうらが裏門であって、朝のうちゃひる
まは、ひらいていたようにおもう。最初のうち、

ここからにげられはしないかと毎日かんがえてい
たが、うらの川にとびこめばすぐつかまるし、裏
門からにげれば数メートルあるいてすぐつかまり
そうだ。

結局あきらめたが、逮捕された人間というもの
はにげることをかんがえるものらしい。

そのうち県の特高の千葉警部が、取り調べのた
め広署に出張してきて、「中村君も性こりもなく何
回も検挙されたようだが、ついにここまできたか。
こんどは往生せえや。吉本やおまえのやったこと
は全部こつちにやわかつとるんじや。おまえ、た
かの橋のところで学生とおうたるうが。わしは偶
然散歩しておつて、それをみとるんじや。」とぬか
した。

これで前述の、たかの橋の学生との連絡も、「ス
パイ徹」のてびきによってわかつてしまっている
ことが、はっきりした。

そのうち吉本君も私も、呉署につれもどされて
本格的な取り調べをうけたが、こつちの運動の内
容は、スパイをつかつて警察側は知りつくしてい
たので、ただあたらしい事実がでてきはせぬかと
追友しただけだが、運動がひろがっていなかっ
たので、かれらにもそのことがわかったので、あま
り追及はしなかった。

いちおうの取り調べがおわつて、特高の取調べ
室で、吉本君と顔をあわせて、ちよつとだけ特高
のいないすきをみて、雑談したことがあるが、こ
のとき吉本君は、「うちのおやじは在郷軍人で、か

たい男だが、妹だけはぼくのシンパだ。今学校の先生になるつもりで師範学校にいつているが、ぼくがこうなったので、彼女の夢も実現はすまい」とわらっていた。

一カ月をこえるブタ箱生活ののち、吉本君と私は送検された。

再び未決監にて

一九三五年の冬であったか、最初北側の一番東の端にほうりこまれたが、やぶれたガラスにはった紙が終日ビビビとかなしい音をたててふるえつづけていた。

東北地方に大飢饉のあった年で、新聞紙上にも大さくのつていた。私はさむい房のなかで

この寒さ いかに生きるや 東北の

飢えて 草の根 食らう人々

というような感慨にふけりながら。

いちど飢饉にみまわれれば草の根までくわねばならぬ貧しい農民たちのことを、おもっていた。

都市の失業地獄と農村では飢饉に、うちひしがれていた当時の世相であった。

しかも一方で戦争の拡大へと軍靴の足音はなりひびいていた。

ともあれ、このような一般的情勢のなかで我々は未決監につながれていた。

最初のうち吉本君とはなすことはもちろん、顔を見ることもできなかったが、そのうち「視察窓」——看守が夜など房のなかのようすをみるために

ある三〇センチ×一五〇センチのかなあみの窓——から房外の廊下をのぞくと、まえがわの房のとびらがみえるのに気がつき、みていると運動にでるとき、前側の房の人たちが房から出て一列にならんでいた。

胸から下ぐらいがみえるのにきがつき、運動場にでる時間になると、まいにち「視察窓」にかおをくつつけ、まえの房をのぞいていた。

そのうち私のはいつていたなめ前の房から、吉本君らしいのがでてくるのがみえた。

あれが吉本君らしいと、毎日そっちに気をつけていると、あるときなにかのはずみに前かがみになったので、みると、まさに吉本君であった。

「元氣そうだな」と私はやっと安心したものだ。

あるとき予審のため裁判所にでるのに両側の房からでて廊下にならぶ。吉本君が房からでて前にたつたので、私は看守のスキをみて彼の方にむかって、ちよつとアミ笠をあげて合図した。彼もアミ笠をあげニッコリわらっていた。

これでお互の元氣そうな顔をみて、安心であった。

裁判所の拘置場でさいわいにも、となり同士の房にはいったので、またとないチャンスだと思つて

「松本徹がスパイであつた」ことを彼につげた。彼は「ぼくも彼がスパイであることが、特高の取調べのなかではつきりわかつた」といった。

吉本君は「ぼくは関谷君との関係もあるし、どうあがいてもこんどは実刑をくうから、君だけはどんな手段を講じてもでるようにしてくれ。君と

は時々連絡しただけで、運動にはほとんど関係ないと、特高の取調べにこたえているから」という。私は彼の厚い友情がジーンと胸にきた。

彼は「君がでたら、松本徹がスパイであることを君の知っているかぎりの人達につたえてくれ。

そして『エコノミスト』（経済雑誌）をさし入れてほしい。どのページのどの記事がおもしろかつたと手紙をくれ。そしてそのページに針の先で字をひろいながら、点をうつてくれ。それを獄中と獄外のレポにしよう。」と、かんたんうちあわせをした。

裁判所の拘置場というところは、看守のみはりが、わりとゆるやかで、そのていどのはなしならとなりどうしでできた。

私は裁判所の拘置場のベンキぬりの板かべにツメで、たんねんに「松本徹はスパイであつた」とかきつけた。ほかの同志や、あとからやられてはいつてくる同志に、わかるようにとおもつて。

「松本徹というスパイ」、単に気がよわくて転向したとか、そういうものではないのだ。転向してでて特高におどかされて、スパイになった卑怯下劣な男だつた。

私も転向組のひとりで、転向を表明して二年の懲役、ただし三年間の執行猶予ということで、でてきた。でてから吉本君との約束にしたがつて、雑誌『エコノミスト』に針のさきで点をうつては、獄外のようなレポの交換をやっていた。吉本君は懲役四年くらいで下獄したのだとおもう。

しかも服役中肺結核となり、腸結核を併発し、絶望状態となつて執行停止となり仮出獄し、うらみをのんでこの世をさつた。

私には、断腸のおもいである。

いくら吉本君が私をたすけるために、友情からいつてくれたにしても、なぜ彼とともに裁判を非転向でたたかわなかったのか。

私の気のよわさ、人の厚意にすぎるあまい考え——という人間的なよわさが、あるからだろう。

一度、転向を表明すれば、たとえ松本徹のようにならずとも、敵の意にしたがわなければなぶりごろし同然にしようとするのだ。

のちに、私が執行猶予中に検挙された事件も、敵は最初からでっちあげにかかっていたのだ。

さすがにスパイになれとはいわなかったが、でっちあげられ、「執行猶予つき二年の刑」というのをとりけされ、「実刑二年」にされ、さらに二年の刑を追加されるはめになったのだ。

余談だが、出獄してから、丙子会——思想犯の刑余者のあつまりがあつて、つた本すみ江さんも出席していたし、高橋まつ子さんなども出席していたようにおもうが、私は松本徹がスパイであつたことをたれかれにいったとおもう。しかし、だれもあまり本気にきかなかつたようにおもう。思想犯刑余者たちは保護観察に付されていたせいもあつたろう。

「労働雑誌」読書会弾圧事件から

四一年出獄まで

執行猶予でで、しばらく家でおとなしくしていたが、父親や親類のものをたまえもあつて、いずらくなつたので、私は広島にでることにした。

母親はしきりとめめたが。

当時広島市舟入町に大衆党系の一般労働組合というのがあつて、その事務所に昔からの知りあいたつた風早謙、田原勝治、そのほか三、四名ねとまりしていたので、そこにころがりこんだ。

一般労働組合というのは、山陽木材の労働者や馬車ひきのおっさんたち、機械工、製材工、自由労働者などの合同労組で文字どおり一般労働組合であつた。

私は合法的な労働組合なら問題なからうとおもつたのだが、敵はそれほどあまくはなかつた。

我々が『労働雑誌』の読書会事件ということで検挙されたあくる年には、いわゆる「人民戦線事件」という、社会主義者とか自由主義者とかのすくなくとも戦争反対の立場をとつた人々が一斉に検挙されている。

戦争を拡大してゆくために敵階級は、戦争に反対する連中をかたづけしから検挙しだしたのだ。

そのまえばれが我々の検挙であつた。

「労働雑誌 読書会事件」というのは、敵がデツチあげのためにかかつてにつけた名称だが、実態はなにもなかつたのだ。

一般労働組合に出入していた製材工の山本正一君が、ある日『労働雑誌』というのをくれて、この雑誌の読書会というのをつくらうというのだ。

こっちは「執行猶予中」なので、これはどういう性質の雑誌かときいてみたところ、大阪の川上貫一氏の主宰している合法的な雑誌だというので、そのていどの雑誌なら問題なからうと、山本、中村、それに名前はいまわすれたが、当時広島から呉の海軍工廠へ、製図工としてかよつていた人(呉

の本屋の田中豊氏と個人的な友人) および、その弟と四人ではじめた。

田原勝治君をいれようとしたが、山本正一君は田原君とそりのあわないところがあつて、山本君が反対するので、やめた。私は田原君とは前からよくうまのあうほうだった。

山本正一君は前に大阪方面にいたことがあるらしく、大阪木材労組のはなしをよくしてて、『大木ニュース』というのをくれたりしていた。

(注) 山本正一。広島地方最初の全協結成のとき、全協木材労組オルグとなる。

一九三五年の冬、一二月の末頃、突然一般労組の事務所に一〇名ぐらいの特高がおどりこんできて、事務所にねていた四、五名の人々を逮捕した。田原君、風早君その他であつた。

逮捕後、私は西署でちよつと取り調べをうけたのち、県警の地下室のブタ箱にほうりこまれた。県警のブタ箱にはいつてみると、元水兵の平原甚松君がはいつていた。

「君はどうしたんだ」というと、

「それが、さっぱり、わからんのだ」という。

広島に私がでるまえに、呉の大衆党支部長細田伊太郎氏が市議選にでたことがあり、どういう関係でか平原君が応援にきていたことがあつた。

そのようなことで、彼も我々との関係をうたがわれたのかもしれない。

県警のブタ箱はあまりはいつていなくて、多い

時で四名くらい、すくないときは平原君とふたりだけのときが多かった。

どこがどうきだったか、若い方の看守が私によくしてくれ、人数のすくないときは雑役がわりに私の房からだして、掃除をさせたりしてかなり長時間房からだしていた。

そのうち取調べがはじまった。私を調べたのは、古い同志なら知っている人も多いとおもうが、県警の黒山という特高の部長であった。小男の、蛇のようなつめたい目をした残忍そうな奴だった。

その特高の黒山が、就寝の時間がきてさてねようかとおもっていると、取り調べにくるのだ。ブタ箱にコツコツと靴音がしだすとならず奴がやってきて、一二時、一時までしらべるのだ。

「労働雑誌が党の関係の雑誌だということは、知っているだろう」というので、「しらない。執行猶予中なので、知っていれば読書会なんかつくるわけがない」といっても、てんからうけつけない。もつとも、やつらはこいつは性こりもない人間だから当分刑務所にはうりこんでおけということだろう。

丁度そのころ看守が「中村、今日は房のなかでおとなしくしていってくれよ」という。しばらくして、入口があいて、ひとりの男がはいってきて、「中村はどこにはいっているか」と看守にきいている。看守がバツと敬礼しているところを見ると、かなり上司らしい。はて、なにやつかとおもっていると、看守が「ここです」と、私の房のまえにつれてきた。

その男は、視察窓をあけて、「中村、ひさしぶり

じゃのう」という。「あのとき吉浦じゃあ、うまいことまかれたのう」という。

岡野だ。県の特高警部補だ。まぎれもない、こいつだ。スパイ松本徹の親分だ。吉浦のバスのなかでみた顔。横川駅のふみきりのうどん屋でみた顔。こいつだ。うらみ骨髓に徹している、スパイ徹の親分だ。

私は「あなたはどなたですか。私にはよくわかりませんが」と、とぼけていると、「まあ、ええわい。こんどは年貢をおさめてゆけ」とぬかした。

私は、はらのなかで（このやろう、とうとうじぶんでどろをはきやがった）とおかしかった。

特高でも自白するものとみえる。

ふたたび 再審へ

県警のブタ箱から、ふたたび未決監にほうりこまれた。初夏のころであった。ブタ箱からそとにでたとき、明るい日ざしがサンサンとてっており、青葉がうつしくかった。

上記の件で、とうとうでつちあげられ、執行猶予をとりけされ、あたらしく「読書会事件」のでつちあげで二年の懲役、合計四年の刑だった。もつとも未決拘留一八〇日通算というのがあった。

4・26事件で小寺英雄君らがやられてから、赤色救援会（モッブル）は壊滅してしまい、吉本君の時代以来、外部から救援の手はさしのべられず、田原君等が本のさしいれとかいろいろ面倒をみてくれた。

きものや弁当など家族の者がしてくれたが、貧乏世帯の上に苦勞させては親にきのどくなので、弁当のさしいれは監獄のモツソウめしで充分だからとことわった。

そのころ吉本康二君のお父さんから弁当のさしいれがあり、「康二も病氣のために刑の執行停止になり、いちど家までかえりましたが、すぐ死亡しました。あなたもくれぐれも身体に気をつけて、一日も早くかえられるように」と丁寧な手紙をいただいた。

私のことを新聞で知れたものらしい。私は吉本君の家にむかつて正坐し、瞑目合掌した。お父さんからいただいたさしいれ弁当を、すこしづつかみしめながら、とめどもなくでる涙をおさえようもなかった。純情で誠実で人間的なふかいおもいやりのあった吉本康二君、さぞ無念であつたろうと。

山本正一君も予審中に発病し、うらみをのんで、獄中でなくなつたときく。

獄中の 同志たち

下獄から釈放まで

最初第二独居にいられた。うらが運動場に面した側の房であつた。

まだ誰かがいるはずだとおもつたが、初めのうちはどこにだれがいるのやら、さっぱりわからなかった。そのうち教務の独歩（雑役）で、本のかしだしの役目をしている三戸信人君がたのんだ本をもつてきたので、お互に自己紹介をしてはかの

同志のことをきくと、私の房のひとつおいてとなりに古末同志、四つ五つおいて小寺同志、前側の房のすじむかに岩村同志、ひとつおいて岩佐同志がいることがわかった。

さっそくわたしは壁をたたいて、となりの房に合図をおくり、そのとなりの房の思想犯をうらの窓のほうにでもらうようにたのんだ。

「古末君ですか」というと、「きみは」というから、名前をなのって自己紹介した。

彼は、獄中、とくに独房では運動不足になるので房のなかにいるときは、腹式呼吸をかならずやること、運動にでたらおもいきって運動をすることなどを、しんせつにおしえてくれた。

岩村同志は「担当、担当」と看守をよびつけては文句をいつていた。

岩佐同志はよく「運動停止」「減食」の札(懲罰)がかかっていた。岩村同志のように尊大ぶった態度ではなかったが、低い声で、ときどき看守とやりあっていた。私は彼は槍のような男だなとかんじた。おかれた情況のせいもあったからであろう。

小寺同志は散髪にでちよつとだけ看守のスキをみてはなしたが、かれは「ゆうべは一睡もできなかった」とあおい顔をしていた。からだでもわるいのですかときくと、時々こんなことがあるんだといっていた。当時、どこか身体がわるかったんだろう。

いちばん感銘をうけたのは古末同志の態度であった。運動にできれば、かけ声をかけて、力いっぱい一生懸命運動していた。いつもかれはニコヤかな顔をして、看守とは無駄な口論などしなかった。

ようだ。

私と古末同志とはフロ場でいつもいっしょだった。房がちかかったので、いっしょにフロにでるのだが、できるだけとなり同志になるようにしていた。フロ場は五つくらいにきぎつてあるのだが、看守は「入浴」の号令をかけると、その廊下にならばせてあるつぎの入浴者をみはるために、浴場のそとにたつていたので、かなりみじかい時間でもはなしができた。

したがって私が吉本君との関係で執行猶予中やられたこと、転向を表明していることも充分承知していたが、別段こだわる態度はみせなかった。いちど戦争の宣伝映画(ニュース映画)を教会堂でみせたことがある。転向者、非転向者もいっしょだった。

第二独居のほかの諸君はでなかった。古末同志と私だけみについて、いっしょにやらんで座をしめ、充分なはなしができた。

かれは「ぼくたちはもううちうちにでるが、君は工場の方へおろされるかもしれんが、さががながいので身体だけは気をつけるように」といつてくれた。

(岩佐君のはなしによると、その後一年くらいしてみな前後してでたのだという)

私はその映画をみてから二・三ヵ月後に、第一独居にうつされた。その日は寒い吹雪の夜で、西のいちばんはしの房にはいったが、ビュービュー雪がふきこんで、房のなかの入口がまっ白になった。

第一独居には國本金夫君がいて、どうして手に入れたのか、鉛筆がきのレボを運動にでたときよ

くくれていた。

第一独居に二ヵ月いて、私は、教務の雑役になれというのをこわって、機械工場におりた。竹地定夫君が、機械工場におりているということだったので、もしかしたらあえるかもしれないとおもったが、私がいったときはでたあとだった。

工場と居房のゆきかえり、入浴のゆきかえりにはるか西の空をあおぐ。監獄の高い塀のむこうに、広島島の西北の山なみがくぎつてみえる空を私はみていた。あのむこうには自由があるんだなどとおもいながら。

刑務所には累進処遇令というのがあって、成績のよしあしによって、三級から二級へさらに一級へと累進させることになっている。級別に、めしの量がちがったり、着物の色も三級が赤、二級が青、一級は昔の小学生が夏にきていた小倉のシモフリ服だった。

一般囚人もそうだが、出獄のとき仮釈放される。早くでる人は二年くらい早いものもいた。普通半年か四ヵ月くらい早いのだだろう。私はあまり成績がよくなかったのか、でる一年まえごろ二級にしてくれ仮釈放もお義理に四日か五日だった。

釈放され、ひさしぶりに町をあるいた。五月雨がしとしとと、ふっていた。まったくひさしぶりだ。四年余の街であった。古本屋をのぞいてみると左翼出版物はほとんど姿をけていた。ようやくゴリーキーの「母」をみつけて、買いもとめ、かえってむさばるようによんだ。

その後町工場につとめていたところ、大平洋戦争のボツ発でまた検挙され、五日市署のブタ箱に一五日はどいたら、呉の保護司がむかえにきてや

っとだしてもらった。

そのうち「寿工業」の前身の東亜航空に五、六人で下請けの組をつくって仕事をしていたが、どうも憲兵や特高がうるさく動静をみにくるので、同工場の疎開工場が山口県にできたのを機に山口県の工場にゆき、終戦直前までいた。

呉にかえってきてターレット機械を町工場で仕上工の仲間といっしょに請負ってやっていたら、召集がかかってきた。それまでは軍需工場の関係で召集延期となっていたのが、山口県の工場をやめると同時にしかかってきた。もともと終戦の年の年末出征ということだったが、「出征という名の土方」ぐらいをやらされていたろう。

そのうち原子爆弾の投下であつてなく戦争がかわってしまったので土方をやらされずにすんだ。

呉地区委員会再建から東洋工業争議まで

ある日『赤旗』再刊二号が私の家にとどいた。夕方職場からかえると、妻が「とうちゃん、いいものがきているよ」といつてだしたのが『赤旗』二号であった。

数日後、三原の岡田重夫君から、「広島地方の党再建をやる相談を某日三原でやりたいとおもうので、是非出席してほしい」といつてきたので、その日三原にでかけていった。たしか小見山とみえさん宅だったとおもう。

集まってきた同志は、三原地区から、岡田、庄田、小見山、山代巴、徳毛など、広島から、玖島

三一、岩佐、神崎宇市その他、呉から中村定男であつたとおもう。

そこで各地区に地区委員会を結成することなどの党再建のことが協議され、私はそのとき入党した。非合法時代は全協にはいつていて、党员ではなかった。

こうして古い同志たちとの連絡が回復し、地方委員会は広島市におくなどの協議が決定した。

三原からもつてかえった「読め赤旗」というピラを、呉の全市にはつたら、翌日関口さんがさつそく私宅をたずねてくれたので、地区再建の相談をいろいろした。「赤旗呉分局」をつくることとして、地理的に便利がよかつたので「本通り一丁目のうちの家をつかえ」という関口さんの厚意にあまえて関口宅に「赤旗呉分局」の看板をだした。これが呉地区委員会再建の第一歩であつた。数日後私宅に一通の脅迫状がまいこんだ。「おまえをさし殺すから覚悟しろ」というような文句のものだった。

関口さんはそのころ進駐軍の食堂の調理場につとめていて、さつそく彼といっしょに働いていた梶村、松村、石原などを入党させた。脅迫状の送人はほかならぬこの石原君であつたので大笑いしたことだ。彼は特高隊あがりだったが、のちに地区の専従党员としてよくはたらいだ。その他当時呉地区にあつた人々は、

池田八束、中国新聞呉支局の清水君、進駐軍放送課につとめていた堤さん（天応町在住）、岡本一彦君、中村芳郎君、守安ドリル工場にいた某君（姓名失念）、税務所の保喜君、長迫小学校の女教師宇根内さん、二一年に市職組のストがあり、スト後

入党したのが中村一郎君、斉藤君（広高時代の吉本康二君の同志）、鋳物工場の香川一彦君、地区委員会事務所前の松本組の事務員松垣君、そのほかハリマ造船（呉造船の前身）の香川、若松、浦山、毛利君、市民病院の医師六名、看護婦五、六名入党し、「ハリマ造船細胞」「市民病院細胞」なども確立し、二二年四月に呉市議選挙があり、候補者三名をたてたがなかった。中村一郎、中村芳郎、池田八束の諸君であつた。

池田八束君入党のころ、私と彼が中心となつて全市を宣伝活動のため演説してまわつた。

地区委員会が再建されたいの地区委員は

（委員長）中村定男

（委員）池田八束、中村芳郎、関口春夫

その他であり、松本組の松垣さんに財政をうけもつてもらつた。のちに斉藤君が書記となり、岡本君その他の若い同志も地区委員になつた。

そのころはみんなくえなくて、私や石原君や、その他の同志もよく関口さんの奥さんにめしをたべさせてもらったものである。

おもえば関口さん一家には呉地区の党は、そのころから、ずいぶん世話になつたものだと思う。

東洋工業争議

私自身もくうことをかえねばならぬので、東洋工業に試験をうけてはいつた。そのころの東洋工業は——戦争直後の工場はどこでもそうであつたろうが——経営者は「終戦ばけ」で日本の今

後の経済的な動向をつかめず、模索していた時期で、東洋工業も人員は、職員、工員をあわせてわずかに一八〇〇人であった。

私は東洋工業にはいるまえに、広島地区委員会のほうから、東洋工業に三名の同志のいることをきいていたが、まだいちども、顔をあわせたことはなかった。

私の入社当時、すでに待遇改善の問題で、組合がもめはじめるときだった。昼やすみの時間に、ひとりのわかい労働者が、機械工場でアジ演説をはじめ、周囲を数十人の労働者がとりまいている。

なかなか元気のいい青年だなおもいながら、「あの演説している男はだれか」と、ちかくにいたひとにきくと、「あれは旋盤工の胡子君だ」との答であった。

「ああ、かれが胡子君か」とおもい、たのもしき気持ちになったものだ。演説がおわったので、私は「呉地区の中村だ」ということをつけると、すでに呉地区委員会から連絡があったものらしく、すぐ宮近君の職場につれていって、私を彼に紹介した。

山根君は労務課の労務主任であり、宮近君は機械修理工場の伍長であり、胡子君は機械工場の旋盤工であった。

入社したその夜、ただちに細胞会議を宮近君の宅でもって、争議の進展情況、職場の空気、シンプアのひろがりかなどをきかせてもらったが、争議はまだサボ状態で、一回くらい会社側と交渉をもった段階しかなかった。

今後の争議のすすめかたとして、現場にシンバのアミをひろげること、

シンバのなかから有能な人をえらんで、党員を獲得すること、

職場委員を党の影響下におくよう努力して、現場をしつかりかためること、

代議員、執行委員を党員でなく多くしめること（宮近君、胡子君はすでに代議員であった）

——などを協議し、定期的に細胞会議をひろき、あわせて学習会をおこなって、党員候補とみられる人も、学習会に参加させることを協議決定した。

執行委員会の空気を山根君にきくと、着々と闘争の態勢にすすみつつあるという。

まさに、たたかいの火ぶたは切られんとしつつあるらしい。

組合長はゲージ工場の職長だった。おとなしい人だったが、誠実な人だった。ともあれ当時の広島地方には労組の地方協議会はできていた。広島地区労協がやつとできたところであった。

中国電力労組、中国新聞労組、三菱造船労組、日本製鋼労組であり、その他、国鉄、全通などにも組織ができていたものとおもう。

しかし民間労組でいちばん活発な活動をやり、闘争にはいったのは東洋工業であり、広島地方協議会の中心であった。地区労の会議はほとんど東洋工業でやった。

そのうち私は代議員になり、つづいて執行委員になった。細胞の活動によるものだが、これはのちにかんがえてみて、失敗だったと自己批判した。せいぜい代議員くらいのところについて、つねに現

場の大衆に密着し、大衆をかためるべきだったのだ。

そのうち地区労の会議があった席上、戦後第一回のメーデーが協議された。地区労には戦前の組合運動の経験者がいないので、「中村さんに、メーデーの委員長をやってもらおうではないか」と、山根君が提案し私は固辞したが、万場一致で私がメーデーの委員長になることが決議された。戦前といっても、全協の非合法活動をやっただけで、労働運動の経験はなかったが、ともあれメーデー委員長をひきうけた。

メーデー当日は小雨がけぶっていたが、会場の駅前広場には戦後再開メーデーということで、戦争がおわった解放感と、食うものもない敗戦直後の労働大衆の憤怒とで、小雨をついて数万の労働者があつまり、私はメーデー大衆をまえにして、はれがましさにあがってしまつて、労働者の団結をうったえ、「人民にパンとしごとを」と夢中になつて絶叫した。

中国新聞がメーデー記事に「絶叫する中村大会委員長」とだしていて、ちよつとテレくさかった。一方争議の方は、日一日と大衆は尖鋭化しつつあった。「賃金をあげろ」団体協約を我等の手に」と。

機は熟した。毎日のように各職場で、職場集会がひらかれつつあった。争議をどうすすめるべきかが討議され、さしあたつて、このまましばらくサボ状態のまま、一方で会社側との交渉をつづけようということになり、つぎの団体交渉のとき私も交渉委員のひとりとして出席した。



「絶叫する中村大会委員長」 中国新聞

社長は先代社長——故人——の松田重次郎で、現社長は当時専務であった。会社側の交渉委員は社長、専務、常務、労働部長等で、席上、社長・松田重次郎が、「東洋工業は私が旋盤工から身をおこし、コルク工場から出発して、戦時中一万人をこえる大工場にまでしたのだ。文句のあるものは、やめて、でていってもらいたい」と放言した。

私はこいつはいちどたたいておかねばいかんとおもって、テーブルをたたいて、「社長、なにをいうか。あんたがここまで工場をふとらせるまでには数千、数万の労働者の血と汗がながされているんだ」とやったら、一瞬彼はボカンとした顔をして、いたが、つぎにまっかな顔で、「君はいい、だれだ」と激怒したので山根君であったか、「こんど組合の執行委員になった中村君です」とこたえると、「きみのような新米労働者が、なまいきなことをいうな」とどなりだし、大論争になりかけたので、他の重役連中が社長をなだめて退席させた。以後、かれは交渉にあらわれなかった。かれは頑固一徹なおやじで、有名な男であった。重役たちは、かれを交渉の場にだせば、組合との交渉が難行すると判断したらしい。もっともかれは交渉の場にはでないが、かくれたところから交渉を指揮して組合の要求をみとめようとはしなかった。

闘争へ。争議団の結成なる。

いよいよ争議団を結成することになり本部を医務室においた。またも私は争議委員長にかつぎあ

げられ、争議を指導することになった。大任である。

労働者大衆を戦闘的に訓練する必要を感じていたので、一八〇〇人の労働者をひきいて、大州をまわってキリンビール工場前通りを労働歌をうたつて一周しながらデモをやったら、進駐軍の兵士がジープに機関銃をかまえて威嚇した。

当時広島島の町は原子爆弾でやけ野原となり、進駐軍の司令部をおく場所がなかった。

東洋工業のある向洋町は、被爆をまぬがれていたで、東洋工業三階に県庁や進駐軍司令部をおいていた。

労働者の意識は高揚し、戦闘化しつつあるかみえた。そのころ岩佐君が争議団本部に応援に朝からつめかけていた。細胞の学習会にもかかれが講師としてやさしい資本論やマルクス主義の講義をしてくれた。

会社側との交渉は何回かもたれ、会社側は我々の要求する賃銀の値上げは、ついにみとめたが、団体協約は我々の要求通りにみとめようとはしなかった。

組合はクローズド・ショップを要求し、会社はオープン・ショップでゆこうということで難行した。

交渉中重役側はおしまくられて、すでにみとめるかみえると、交渉を中断して休憩しようという。休憩してかえつてくると、かれらの態度がかわってかたくなっている。これは重次郎社長ががんばるんだと我々も気づき、次の交渉のとき、「今日は、ぜがひでも、解決しよう。夜を徹してでもやろうではないか。」ということではじめた。

交渉は難行し、ついに夜にはいった。かれらは団体協約をクローズドにすれば、会社をのつとられるとでもおもったらしい。

組合側も今日中にはどうしても解決しようという意気込みでのぞみ、おしまくった。

廊下には青年部の組合員がおしかけ交渉のなりゆきを、下の組合員大衆に午後から報告しつづけている。

我々の側には、にぎりめし、パンなどのさしいれが組合からどんどんはいってくる。このパンは何々組長よりというふうに。この段階までは組長も組合のほうについていた。職制上かれらは日和見的であり、景気のいいほうにつく。

そのときの要求は、クローズドだけではながびくだけだと予想されたので、クローズドとオープンの中間という、一種の妥協案でのぞんだが（たとえば人事権の問題では我々の側に有利なように——『入社した社員、工員は即ち組合員になること』などを文章の上で、たくみにとりいれたけれど）（会社側も馬鹿ぞろいでもないで、完全なオープン・ショップをのぞむと、なかなか妥協に応じない。

かれらがおしまくられて今一步ということになると、必らず休憩を要求する。休憩からかえつてくると、また固くなっている。

これは社長がいて指揮しているのだと我々は直感した。

夜一〇時ごろ、めしをくわせてくれ、というので、「めしはにぎりめしがここにあるから、お前らもこれをつくってがまんしろ」というと、「いや、とにかく休みたいから」という。

かれらのほうが旗色がわるくなると、なにかと理屈をつけて休憩にもつてゆくので、ともあれ、「今夜中には解決をつけたいので、おたがい真剣にやろう。社長とよく相談してこい」というと、「社長は、夜だからかえって、いません」という。こんなことで休憩にしたが、休憩からかえるとかれらは強気になる。

休憩中我々組合の交渉委員も相談して、「もう一歩だから朝までかかっても今日中に解決してしまおう」と相談して、もう休憩は絶対にゆるすまいということにした。

交渉は難行し、ついに夜の一二時になった。と、かれらはまた休憩をもちだし、「もう夜中の一二時だし、決定権は社長にあるので、今夜は社長も本体のことで帰宅したので調印はできないのだから、あしたにしてくれ」といいだした。

「駄目だ。むすこの専務もいるし君ら重役の判だけでもしろ。そしたら交渉を明日にのぼしてもいい」とやったが、かれらはしりごみするばかりで、調印に応じない。

そのうち、むすこの専務（現社長）が突然頭をかかえこんで「頭がいたい」といいだし床にすわりこんでしまった。

と突然電燈がきえ部屋はまっくらになり、労働歌が高唱されだした。ドアをドンドンたたきながらの労働歌である。ついにシビレをきらした青年たちの怒りであった。

かれらが電燈のスイッチをきったものらしくつた。五十六分後に電燈がふたたびついてみると専務は床にすわりこんで頭をかかえこんでいる。他の重役は総立ちになってふるえている。かれらの

ひとり、事務が病気になるたのでとにかくちょっと交渉を中断させてくれといひだした。我々は、「ちょっとだけならやすむが、この部屋からでることはゆるさない」とがんばった。

これではなしにならない。

重次郎社長が、どこかの部屋にいるはずだと考えた私は要求書をもって、山根君に、「どこかに社長がいるとおもえるのでちょっとさがしてみる」と廊下にて、二階の部屋をひとつづつさがしてあるいていると一番端の部屋にわずかに燈がもれている。

「ア野郎、ここにいるわい」とおもって静かにドアをあけてはいつてみると、衝突のそばのテーブルに頭をたれて重次郎社長がすわっている。

「社長」と私がよぶと、ビクツとして腰をうかしかけ、私をみるとふたたび腰をおろし、「ア、君か。君はひどい男だ」とかなしそうな声をだして、「私の会社に君のような男がはいりこんで、老人の私をこんなにまで苦しめる」と、泣きごとをならべだした。

「あんたを格別くるしめようとしているんじゃない。あんたがあまりに頑固だから交渉がまとまらないんだ。あんたさえこの協約書に判をおせば、争議は解決することだ。この協約書に判をおさない。」と協約書をつきだすと彼は頭をたれ、「どうか、この老人をこれ以上いじめないでくれ」と机の上につぶせになって動こうとしない。これは駄目だなとおもって、交渉委員たちのいる部屋にひきかえしてみると、事務の野郎が廊下に木の長イスを出してそこにひっくりかえっていた。

一瞬私ははっとした。

「しまった。だれか若いものが、ゴウをにやしてついにかれをなぐりたおしたのではないか」とおもったのだが、そうではなかったらしい。

「どうなったんだ」ときくと、「事務のやつ、とうとう病氣だといってひっくりかえったで」と若い者がいつている。

これでは今日の交渉は中断せざるをえない。ところが事務の野郎め、夜のあけかけた六時、ヒョコリ立ちあがってチンパをひきひきかえっていった。

事務は仮病をつかっていたものと、おもえる。朝になれば進駐軍の連中が出勤してくるのを計算にいれている。かれらがでてくれば、このひどい事態から助けだしてくれるので、夜明けまで廊下の木の長イスの上で、がんばったのだろう。ごくろうなことだ。

つぎには戦術を変更して、本館前で従業員をあつめて、総決起大会をやり、大衆をアジリ、一階から二階までデモることとし、一階の事務室におしかけると、課長連中はクモの子をちらすようににげてしまった。逃げおくれた用度課長がウロウロしているのをみつめて、わかい連中がとつつかまえて詰問しはじめた。

「おまえ坐っていないで立て。戦争中自分だけいいことしやがって。おれたちをさんざんな目にあわせやがった。立つて皆のまえで頭をさげて、わびをいえ」とやっている。

わかい連中のなかにはパイプや鉄棒のきれつぱしをもっているものもある。用度課長は青くなつてふるえあがり、私は若い連中が用度課長をなぐりはしないかとヒヤヒヤした。

へたをすると挑発にかかるおそれがあるので、みなをまとめて二階へデモ隊はおしかけた。二階は重役室、会議室などであったが、だれもでてるわけがない。二度ばかり一階から二階をデモってひきあげた。

交渉は膠着状態となり、ゆきづまつてしまった。徹夜の交渉のあと、会社も交渉にでてくるのをしぶった。

かれらは争議の調停を地方労働調停委員会にかけようといひだした。しかし我々組合側は中央労働調停委員会にかけようを主張した。地方労働調停委員会には労働者側委員らしきものがないからである。

局面を開閉するために会社側も組合側もいろいろ考えはじめた。

会社側は職制を通じての切りくずしにでているようだった。組長の態度がかわつてきたようだという。一部では、賃銀値上げの要求は通つたのだから、もうこの辺で妥結してもいいじゃないかと、不平が出はじめているらしいとのこと。

不平分子は「組合幹部はおれたちによくわかりもしない、クローズドとかオープンとかで、まだ、もましているが、ほどほどにしろもらいたいものだ」というわけである。

これはなんとか手をうたねばならんと私はおもひ、山根君たちと相談した。よい智恵がでないので、尾道の野村秀雄さんにきてもらつて意見をきこうということになった。

そのころ三原の三菱車両工場は争議にかつて、百人くらいの大細胞ができており、三車の組合の竹田君が闘争資金をもって、東洋工業に応援にき

てくれ、大衆をあつめてアジ演説をしてかえったのもそのころのことである。

野村氏は当時三車の組合の顧問かなにかしていたころだったとおもう。

(彼については一部で家父長的な面が指摘され、批判があつたようだが、当時五〇歳くらいの、ロシア革命当時から海外で船員として組合運動に従事し、組合運動については深い経験をもった人だった。)

その野村氏が我々の要請に応じてくれたので、事態を説明し善後策について相談したところ、彼は「労働者のいちばんのぞんでいるものは、なにかを一番に考えねばならん。賃上げを会社側がみとめたのなら、団体協約のために交渉がこじれているときは、オープン・ショップでもよい。この際妥協すべきではないか」という意見であつた。

我々は生産管理方式をとったり、いろいろ苦労しながら、争議団の結束を固めようとしていたが会社側は足もとをみたのか、「賃上げはみとめたのだから、団体協約はオープンでなければ絶対みとめない。」と強硬な態度にでてきた。

ある朝会社の門前でピラをまいてる奴がいるというので、出てみると、「争議きりくずし」のピラを二人くらいのものが出勤する労働者にわたしている。我々の姿をみるといちちはやくにげた。会社側は露骨な手をつかいはじめたのだ。

ある日職場委員がよびにきたので、何事かと職場にかえってみると、ひとりの男が争議きりくずしの演説をやっていたが、私の姿をみてすばやくどこかにげいていった。

職場委員にきくと、現場ではスキヤップがあつ

ちでも、こつちでもきりくずしの演説をやつて組合員をアジっているらしかった。

私は一応「結束」をうつたえて争議団事務所にかえつたが、事態は急速にかわりつつあつたのだ。敵のきりくずしは執行委員会におよび、のちに執行委員の投票の結果、私は執行委員をしりぞかざるをえない羽目にまでなつた。

我々は必死にまきかえしをはかつたが、スキヤップは職制や暴力的なあんちゃんめいた男たちになまこよび、敗色は日をおつて、こくなつていった。ついに我々共産党員に対して会社側は最後の通告を示してきた。辞職勧告であつた。

「君たちは争議の責任をとつて辞職してもらいたい」というものだった。

我々は細胞会議で、いかにすべきかを協議したが、「今辞職勧告をうけつけなくとも、つぎに彼等がうつ手はわかつている。解雇だ。」と私はかんがえた。

山根さんひとり「中村さん、ここでまけないでがんばりましょう。代議員におちたつて、平組合員になつたつて、再起を期しましょう」といった。しかし私は前記の私見をのべ、ここで辞職に依るしか仕方がないといった。

宮近君も辞職に賛成し、みんなで辞職することにした。

辞職しても有力なシンバがのこつていゝかきり、外部からでも再建できるとおもつたのだが、敵はそれほどあまくはなく、第二弾をうつてきた。マークしたシンバと目される人々を臍首したのだ。

いま坂の町会議員をしている榎尾さんも、その

ひとりだった。ほかに設計主任の中村さんそのほかの職員もいた。

完全な敗北であつた。あるいは山根さんの言が正しかったのかもしれない。しかし六ヵ月におよぶ争議の責任者として、私は心身ともにつかれてていた。

その後県委員会に常任として広島にとどまり徳毛君らと県委員会の下でたつたのだが、その後のことは時期をみて現代の人が回想録をまとめるだろう。

(おわり)

山道 繁氏(談)

兄の名前は「翼」ではなくて「長」で、「ひさし」とよみます。呉一中を卒業して東京外国語学校のロシア語科に入り、昭和三年の「三・一五事件」で退学処分になり呉にかえつてきました。片岡義夫さんと兄とは呉市の吾妻小学校で同級だったと思います。

私はそのとき呉一中の三年間でした。兄はまもなく台湾にゆきました。

(105ページにつづく)



4・26事件と新協劇団後援会事件

井上 栄

党との連絡

はじめに、広島郵便局の小川正一君が私にちかづいてきた。わたしがのっている電車のコースの、いつもおなじ停留所に小川君がたっていて、のりこんでくるのだ。

〔注〕 小川正一。当時広島郵便局集配手。全協広島地委、及党広島地委再建委員会メンバー。4・26検挙後、獄中で自殺

そのころの電車は「チンチン電車」というやつで、お客さんの、のっているところはドアでしきつたなかで、運転手や車掌のいるところは風のふきさらしのそとだ。そこにたつて客室のほうにせなをむけていけば、お客のほうから顔をみられることもないし、はなしをきかれることもない。小川君はそうして立って私とあれこれ話した。

なぜ小川君がわたしに目をつけたのかわからない。わたしは文化団体の会合などにもいったことはない。ただ寿座でひらかれた築地小劇場の公演をみにいって入口で名前を聞いたことはある。それと電鉄にはいる前に広島郵便局の電報配達をちよつとしたことがある。

そのうち小川君はわたしに関谷源一氏をひきあわせた。ところは白島から八丁堀にでる道だった。小川君はかえり、関谷君と私は八丁堀の白十字と

いうミルクホールだか喫茶店だかにはいった。コーヒーのほかにケーキかなにかをとったが、かねを払うだんになって、わたしは一〇銭くらいしかないし、関谷氏はかねをもっていなかった。さあえらいことになった。無銭飲食ということでサツにレンラクされてはこまる。そこで店の人にあたまをさげて「かねがたりないが、あとでかならずもってくるから」とあやまった。そのたりないぶんはすぐに払いにいった。これは今でも思い出にのこっている。

関谷氏とレンラクしたのは二回くらいだった。そのつぎに関谷氏は青木という人をつれてきて「こんどからこの人とレンラクをとってくれ。法律問題にくわしい人だから、この人と相談すればよい」といった。かれは学生ふうの若い男で、ほほがたれているという感じ、やさしいもののいい

かたをした。

この青木という人と穴戸、高橋、私とで、あうようになった。私と穴戸君とは運転の組がちがつていたが、穴戸君と高橋君とはだいたいおなじ時間の組だった。みんなのしごとがおわるのをまちあわせて会合したとおもう。

「スパーク」というのはそのとき出した機関紙だった。二号くらいしかだしてないとおもう。まもなく我々は検挙されたから。

青木君がわれわれのはなしをきいて、それをもとにガリ版ずりのニュースをつくって、もってきたものだ。広電の従業員詰所の便所のなかにおくということもやった。

横川線の電車——そのころは単線で、まがりくねっていたが、それにとびのつて電車の中にまいて、とびおりにげるといふこともあった。昔のチンチン電車はそれができた。とびのり、とびおりはわれわれの専門だ。あるときは西署の特高の山中と長谷部という奴が電車にのっているとも知らずにとびのつてまいたが、おっかけられて、とびおりにげることがある。これは昭和八年だったか九年だったかおもしろくない。

新協劇団後援会のこと

わたしは電鉄にはいるまえ、すこしのあいだ、広島郵便局の電報配達をしていた。その主任格の人が大藤軍一氏だった。(通信主事補)

一九三四年四月二六日——いわゆる4・26事件

でわたしは検挙され、執行猶予でできたときには、3・5事件でやられた大藤軍一氏はすでに獄にいた。そして竹屋町筋というのか、そこにロンド書房という本屋をひらいていた。

私がロンド書房にゆくと、大藤氏が「きみは郵便局にいたことがあるだろう」といった。そんなことから、大藤氏としたしくなった。

そのころは、ひきつづく弾圧でなんにも組織がなかった。新協劇団後援会ができるまでにはこんなことがあった。

大藤氏は、はじめ映画鑑賞会というものをつくった。いまでいえば映画サークルだ。中島の世界館と契約して、洋画の「どん底」などを見る会をやった。世界館のほうへ何人分かの入場料をはらっておいで、それだけの割引券をつくって、高師とか高校、女専などにだした。またその映画をみた感想をはなしあう会合もひらいた。若い人のあつまる会ができていった。

広島の人劇団は「十一人座」というのがあったが、それが「広島舞台」とかいふものになつていった。

大藤氏は新協劇団後援会をつくるようになり、宇野重吉氏、滝沢修氏などをまねいて座談会をひらいたりした。

そして「夜明け前」の戯曲朗読会をやることになるわけだが、「広島舞台」の方の連中は「しろうとにながでできる」といったぐあいだった。それとはりあうようにして「夜明け前」の朗読の練習にはげんだ。もつとも「広島舞台」のほうからも音響効果などいろいろ応援してくれた。

岨常次郎氏も応援してくれたが、とうとう朗読

の青山半蔵の役をやってくれた。そのころのことについてすこしかいてみたいとおもってはいるのだが。

こんなことにまで特高が目をつけて、「治安維持法」にひっかけるとはおもわなかった。(1940年—昭和15年、8月に二斉検挙、留置場で正月をむかえた)

責任者の大藤氏をはじめ「夜明け前」の朗読で、おもな役をやったものは、男はみんな、女は大前三枝さんがひっぱられた。さいわい、岨常次郎氏、村上四郎氏は「満洲」か「北支」にいつていたのでたすかった。

大藤氏はふたたびこの事件で実刑をうけた。私が留置されているところへ、特高の黒山の奴がきていろいろとひっかけようと訊問したが、私は起訴はされなかった。

(一九八〇年一月五日 聞き書き)

先日は失礼しました。

加藤幹男さんの件ですが、おかきになっているなかに若干相違がありますので訂正させていただきます。

宇品造船とあるのは間違いで、有限会社宇品内燃機が本当です。同上の会社は陸軍運輸部の船舶関係の直接の下請工場でありました。社長は、4・26事件の正田誠一氏のお父さんでした。

また私と加藤氏の関係は、私が4・26事件後自宅で遊んでおる時、昭和一〇年頃か同町内(己斐

話がとびます。前記 発動機工業組合は、昭和一三年ごろ企業の整理統合等により解散、広島湾付近の発動機、機関製造業者も整理合併等、生産部門戦時体制に入りました。その結果正田のお父さん達が設立したのが、前記（有）宇品内燃機であります。

加藤氏も私も他の組合職員も宇品内燃機へ転職したのであります。

私が昭和一五年の新協劇団後援会の件で検挙され、釈放後復職できたのも正田誠一氏、加藤氏等がいたと為と思っております。加藤氏の事件は同じ会社におりながら、全然私が知らなかったのは部署が違ふなどからも知れないが、本当に知らなかった。もつとも党の指示によるものではなく、特高の作り事の事件であつたからだろうとおもいます。

軍の製品製作の新体制等々考えてやった事が、特高のエサになったようですね。

旋盤など、モーター直結の機械などの購入の姿
なところで特高をよろこばす結果になったよう
です。

加藤氏検査の時は加藤氏、小林氏のほかもう一人位だったのでないかと思います。

以上職場名等少し違った所を訂正します。

一九八一年、昭和五六年一月七日





堀哲二の思い出 Rond 書房のこと（遺稿）

大藤 軍一
（大月 洋）

堀哲二のおもいでをこの年になってかくことは、夢にもおもってみなかったことだが、いざペンをとるとなると、不思議にその一切が生々しく、つい昨日あったできごとのように、胸いたくなつかしさがあふれでる。哲二の死は私にとって私の青春（私は二五歳の春から四一歳の一番大切な時代を一〇年以上の警察、未決、牢獄と社会と断絶させられた）の忘れ難く心に響く辛い現実に出ている。

〔注〕 堀哲二、本名國本金夫。4・26事件当時作家同盟責任者。

私と哲二のふれあいは実をいうと、ほんとに少

しの期間であった。昭和一三年二月哲二が刑務所をでるとすぐ私を訪ねてくれた。それが初対面であった。そして同年九月には日赤糸崎病院（結核療所）に入院、昭和一四年八月には同病院で生を終って、広島から訪れる私を喜ばしたり寂しがりしたり辛い思いをさせたりしながら、最後にははるか海のみえる糸崎の高い山の粗末な焼場まで、真夏の太陽のきらめく中を、二人の男に死棺を担がれ、哲二のお母さんと私と、若い少女のような尼僧のたつた三人でいよいよ最後の哲二につきそい、私は哲二と生と死のわれわれの闘いの困難な時代をしつかりみつめ、たしかめあいながら、はかなくこの世に訣別していった哲二のことは、私の終生忘れさることのできない思いのなかに生きのこっており、ペンもいくたびかとまったことだ。死後彼の念願だった遺稿の全部、日記類まで含

めて全部を、数日徹夜を通して読みおわり、その年の年末には急いでその墓碑銘として、遺稿歌集『愛情の歌』を発刊したわけで、今ではあの状況のなかで、よくなしとげたとおもい、ほんとうに良かったとおもいをふかめている。

私は翌年八月一九日（1940年、昭和15年）の新協新築地両劇団の強制解散、弾圧事件で検挙され、同関係者の中で全国唯一人実刑を課され、再び下獄、終戦直前まで社会と断絶のやむなきにいたったので、一層このおもいはつよい。でも何故か随分久しい深い交わりのように思えて、このおもいでペンも最後に近づくにつれて苦しく辛くなるにちがいない。

初対面はずっと後になったが、それ以前、賀茂郡西条警察署の留置場で哲二とは、顔、姿はお互い全く相見ないで、声、言葉だけは交じている。

私は一九三二年（昭和7年）三月五日早朝、広島の非合法弾圧事件で検挙されていた。十分寛愍の上であり刑事、検事の執拗な苛酷な取調べに対して私は大へん用心ぶかい、言葉すくない頑固な人間と全く変わり果て、次々と新しい事実が続々と判明して来るので、長い間警察の留置場にとめおかれ、その間いろいろな広島周辺の田舎の留置場をたらいまわしされて、丁度西条警察に大分長く居たときである。

ふたつ房があり、そのひとつに小雨のふっていたある夜、どたどたと数人の人たちがはいってきた。私はどこの留置場に入っても意識的におこなっていることを例のごとくやった。私は広島3・5の左翼弾圧事件であげられたと、私の姓名、年齢、職場などをくわしくとなりの房につげあいさつをした。

となりから哲二がすぐ答え、それで私の房の左すみと、哲二の房の右すみのうらの方で刑事たちの目と耳を盗んで、こっそりと連絡をとり、その夜とまり、翌日朝めしまえに調べに出されたと思っていたら、そのまま釈放されたらしく、それで哲二とはおわかれになった。

そのとき哲二は賀茂地方の作家同盟のことをほんのすこしはなし「今度の広島弾圧はスパイがいたらしいが、どうか」ととき、私は「そのことはきいているが、同志たちの志気に影響するので、しっかりした事実をとらえた慎重な発言をすべきではないか」とこたえたことをたしかに記憶している。哲二はまだ夕めしも食べていないし、全く金ももっていないというので、私は定時の夕食はすでにすませていたが、パンとうどんを一杯余計

にまたたのみ、房のうらから哲二の房のいれものこっそりながくかかって、うつしおえたこともおぼえている。事件の監視者がいないと、田舎の刑事、小使いは人がよかつたし、まことにおとなしい私になっていたもので、こんなこともなした。彼等はこのことをわざと知らん顔をしていたように私は思う。夜もほとんどねむらないで、私たちはコソコソと話を交じえた。

哲二は私が文化活動にも関心が深いし、三月四日の夜おそく（検挙の前夜）コップ（日本プロレタリア文化連盟）の広島支部の中心活動家、石川茂一（彼もまた後に獄中結核で仮出獄になり出獄後まもなく死亡）と会う場所が既に警察の手入れで連絡がきれたこともはなしたので、コップの活動、文学、演劇、詩歌などにもくわしいのに驚ろいたらしく「しっかり勉強せんと駄目だ。しっかりします。」と、しきりにくりかえしていたことも強く印象にのこっている。そして哲二は昭和九年五月にナルプ（日本プロレタリア作家同盟）の広島地方の責任者となっていて検挙され、昭和一〇年五月下獄、同一三年二月満期出獄した。その間私たちは全くすれちがいの生活をしていたわけで、昭和八年四月ごろには、私はすでに起訴され吉島町の刑務所の未決拘留所におり、同監が同志たちでいっぱいなので、いちばん外壁にちかい既決の囚人独房にいれた。差入れの書籍を五〇冊以上もっていて、その差入れの本のなかに哲二のチェックした非合法の大胆な文書も三回くらい発見して、たのしんでよんだ。

昭和八年四月三日に、やさしかった養母（私はひとり息子）が面会にきて、その夜ふけ急に心臓

発作でなくなり、むろん葬儀にも参加できなかった。

やがて私も三年の刑で下獄したが、まったくおもいがけない皇太子の誕生で思想犯をふくむ特別恩赦にあつて、昭和一〇年八月に出所している。

哲二は同一〇年五月に下獄しているの、全く断絶の生活をしたわけである。だから哲二とほんとうに自由にはなせる生活をはじめたのは、彼が昭和十三年九月日赤糸崎病院に入院してからで、私はその当時広島に進歩的文化組織、サークルがなにもなかったなかで、すでに新劇活動の創造に深い関心をもっていて、中央の新協劇団の広島後援会の責任活動家となり、同劇団の定期広島公演を真剣にかんがえ、その仕事にうちこんでいた。大阪、東京における同劇団公演も度々みにゆき、連絡もとっており、丁度尾道の私の若い友人の三角関係の切羽つまった唯一の相談相手になっていたので、度々至急電話でよびだされてそれらの往復もふくめてたびたび哲二をみまう機会をえた。

一月ごろだとおもうが、一時病状もたいへんよく、近く退院可能のよろこびをもらし、いろいろと文筆活動のねがいをかたりあつた。

同時に哲二に恋愛がささやかに結実し、そのころが一等幸福そうに私にはみえたが、急にその彼女が病院を去ることになり恋愛もはかなく終末をつげたあと、しばしば咯血にみまわれた。

私は哲二の彼女が上り列車のデッキで最後の別れのハンカチをふったとき、哲二の室で居合わせそれを見送った。

それから度々の咯血があり、私も洗面器でそれをうけとめ、相当な血液が私に散ったこともあつ

だが、相当重病の結核の知人にふれてきて大丈夫らしいので、免疫だと信じて面会のときの白衣の着衣、消毒その他も一切無関心で哲二の病室に入りしめていた。

病院の副院長から（院長は広島日赤院長）度々注意と、もし異状を自覚したら、いつでも相談にくるよういわれていた。この人には哲二のことで、いくら感謝してもたりぬほど世話になった。それから哲二の病状も一進一退、段々と悪くなつてゆくばかりで、私を心配させつづけた。初夏だったとおもうが哲二からハガキに随分みだれた字で「死を決して近く我が家にかえる」を受取り、私はびっくりして至急電報で「すぐゆく、それまで必らずまで」とうち直ちに病院にとんだ。

事情は施療患者の入院規則で、退院期日だったので、ずっとおりたいが大八車にでものり家にかえらざるをえないと決心しての通知であった。

こんな重病人を家にかえずなんて、死ぬ、殺すも同じだと考えた私はすぐ病院の官舎を訪ね、副院長と色々はなしあった。それで唯一つの道は、病院が結核治療の継続をみとめ、病人の移動を厳禁するくわしい証明理由書を提出して、それが認可にさえなれば延期できるということがわかり、その証明理由書をもらうために、それこそ全力をつくして話しあった。長い間のはなしあいであつた。「できるだけ期待にそうよう書きましよう」という確言をとり、もうすつかり夜になった松原の官舎をでたときの私は、ほがらかに第一の関門突破で大きなよろこびにみたされ、心ははれと夜おそく広島にかえつた。

翌日病院をたずね、その書類を受取つてみて全

くおどろいた。なんと部厚な評細をきわめた内容のもので、病院でもはじめてだとのこと、その人の良心、誠実さに私は頭を全くさげ、心から拝まなばかりに深謝した。ようやく、ほとんど一日中その手続きにはしりまわつて、やつと延期許可をとり私は哲二のもとにとんでゆき、よろこびをわかちあつた。

その甲斐もなく哲二の生きたい、みんなの生かしたいとの願望も全く応なく、哲二はとうとう八月十三日

耐えられぬ 苦痛を

ずっと 耐えている

この苦しみから 救われる日は

死ぬ日では ないか

この作品を最後の詠作として、ペンをおき八月十七日に付添費請求まで手紙にかき、八月十八日には意識不明の重態、二十三日の未明遂に三十二歳の若さで散つていった。

「この世では、生きることも死ぬことも決して新しいことではない」とエセーニンの詩は表白しているが、私には哲二の死はこの年になつても、未だ常に歴史への把握の新しい視野を、おもいおこしてくれている。それほど重くすつしりと私の心に生き残っている。

合掌

〔注〕『山河』第二号より転載。同誌は広島県賀茂郡高屋町——堀哲二・國本金夫氏の故郷から発行されている。創刊号に「堀哲二の歌と、その生涯」をのせ、第二号にこの大月洋・大藤軍一氏の「堀哲二の思い出」をのせている。同第三号には堀哲二の小説をのせている。（一号二号は一九七〇年発

行。三号は一九七一年発行。一九七一年二月広島での前進座公演のとき二〇年ぶりに大月洋氏というより、むかしRond書房をやっていた大藤軍一氏に会った。敗戦まもなくのころあつたきりである。

まもなく同氏から『山河』第二号がおくられてきた。これは堀哲二の思い出でもあるし、大藤氏の回想記でもある。いづれおりをみて同氏に、もっと語ってもらいたいと思つてゐる。

一九七一年四月八日

大藤軍一氏遺稿

Rond 書房のこと

私は第一回の出獄後エスプラント語でRond書房という小さな古本屋（Rondとはサークル・集いという意味）を田中町、竹屋小学校前の四ツ角の所で昔運動の同志の知人の店先を借りて三坪ばかりの店を開いて居た。（後にはその知人が移住したので私の一家全部移つて来た）

それまでは社会状態が悪く苦しく、何しろ思想運動の経歴があるので、偽名で日給1円くらいの重労働などで生活していたが、三〇年ぶりに逢つた生母（養母は獄内にいるとき死亡）と同居生活中、朝私の弁当を作ってもらい、比治山本町から西の江波町まで歩いて通つていたころ、母は朝急に脳溢血でたおれて急死した。（母は一声大きな声をだして私の名をよんだという）

働らくことを断念し、他人に雇われる希望をすて、考えた末、本が好きであつたから、古本屋の

可能性があることを考え、小数の同志たちにこのことを話したら、みんなの集まる場所にもなるし、それはよいと賛意を表してくれた。いろいろと蔵書まで寄贈してくれたり、店の本棚まで同志たちで作ってくれたりして店を初めた。

私がロンド書房をひらいた時期は全国的にも

——広島はもとより——進歩的文化団体、組織が

一つもない淋しい限りの時なので、幸い私が新劇に深い関心をもち、本もよんでいたで、丁度そのころ消費組合の活動家で、東京からオルグとして広島にやってきていた津田和治君が新協劇団の後援会のパンフレットを配布していたので、私もそれをよみ、したしくなった。そのうち彼は広島消費組合も挫折して帰京することになり、後事一切（劇団のパンフの配布のこと、劇団との連絡のこと）など私にまかして広島をはなれた。私は早速劇団と連絡をとり私が正式に責任者として活動することになり、私の店にいろいろと異色の古い同志たち、高等学校の文化サークル、高等師範の文化サークル、ほか婦人公論愛読者グループ、エスプラント語普及活動のグループ等と、どしどし組織的につながりをもち輪をひろげ、新協劇団の広島公演の実現を考え真剣に組織活動にとりこんでいた。

昭和十五年八月一九日の新協新築地両劇団強制弾圧解散ということになり、私は全国でたった一人の体刑をうけ下獄した。

その時笑えない話がひとつある。運動の時間に一人の、私より大分年の若い人が（おなじ治安維持法違反）あなたはもしや田中町の小学校前で古本屋をしていませんか」ときいた。

私がそうだと答えると、急に頭をかきながら、「じつは私は旧制広島出身で、学生時代にあのエス語の看板の店に数回行き、二度ほど金が足りんと偽りのことを言い、古本代をたいへん安くしてもらったことがある。私たち学生仲間では、あの店の主人は本を買う時金が足りんといえませんが前よく負けてくれるという学生仲間の評判なので、つい私も二度ばかり金をもっていたのに、それを実行してすみませんでした」

きいていた看守も私も、みんな声を出して笑いあったことがある。

私にしてみれば、わざわざ財布の口をあけて見る上手な役者もいたので、ついうっかりのつたので、苦しい時代ではあったが、ほろにがい、たのしい思いを含んだエピソードであった。

話をもとに戻すと、当時中島新町（現在、平和公園）に世界館という洋もの封切館があった。フランス映画「どん底」が中央で評判になっており、広島でもまた、新劇ファンの中でもその話が高まっていたので、その封切の交渉をすると「この映画に一般の客は決してこない。前売券（当時一人三〇銭）三〇〇枚引受けてくれるなら封切してよい。そのかわり、プログラムの編集、ポスターの作成、一切の宣伝工作事務をそちらに一任する」という条件をもちだしてきた。私はすぐ東京のキネマ旬報社に映画館で直接電話し、いろいろと広島事情を話し、（私は以前に数回原稿をおくっていたから記憶されていた）同社の後援承諾OKをとり、直ちに日常連絡のついている広島、広島師、映画連盟、新劇の素劇団「広島舞台」等（ここらに昔の同志村上四郎君がいた）に連絡し、主催新

協劇団広島後援会。後援、キネマ旬報社・広島師、広島映画連盟・広島舞台。のポスター三〇〇枚専門のポスター貼りにきくと、二〇〇枚貼れば広島のみからすみまで、残りなく貼りうるのと（このこり一〇〇枚を各サークル、文化団体に配り、宣伝、組織活動を全く日夜を通し積極的に遂行し、前売券三〇〇枚を封切前三日位で完全消化した。

映画館も入りが大変よく、ほくほくで、よろこんだ。その後封切交渉は主として文芸映画だったが、いつでもすぐ応じる。プログラム編集その他も一任する。日常会員には割引会員券を発行するという好条件をとり、大成功裡に終わった。

そのころ呉の新劇団体「ぶどう座」がゴリキの「どん底」を公演せんとしており、当時の指導者高坂利雄氏（のちに市議に当選）に連絡し、同映画封切を知らせ、「ぶどう座」一同を広島に招き、映画鑑賞ののち、同劇団員をかこみ「どん底」の一部朗読、座談会を催した。

目
〔大藤軍一氏の遺稿より写す。一九八一年二月二二日〕



瀬戸内に生きて

数本タキエ
(山本)

- 1、明治四二年（1909年）八月二五日広島県豊田郡吉名村字下条、山本成一の長女として生れる。のち竹原町へ移転。
- 2、大正一三年（1923年）竹原高女三年に編入。
- 3、大正一五年（1925年）三原女子師範二部に入学。
- 4、昭和二年四月 豊田郡大崎下島、大長小学校に赴任。
- 5、昭和五月三月 教師の生活に自信を失って退職、竹原町にかえる。
- 6、吉名村で祖母の末弟の看病、秋風のたつころその生涯をみおくって、竹原町にかえる。

この田舎にいるあいだの生活は心にやすらぎを与えてくれた。

マルクス主義へ

一九三〇年秋読書シーズン、私は古本屋に足がむくようになりました。開店してまだあたらしい、ちいさな店で「ニコニコ堂」といいました。社会科学の本が目にとまった。台上にならべられた雑誌にも全然みたことのない左翼のものがありません。私はまず『社会主義への道』を購入しました。それから『空想より科学へ』『家族私有財産国家の起源』を購入したように思います。そしてその理路整然として革新的な内容にひきつけられました。自分がしだいに、えらくなつてゆくようであつた。

母は私の読書をいやがったので、階段をあがる足音がするとすぐに書物をとじてミシンをふんだ。理解できないところは、なんべんも、くりかえして頭にきざみこむようにしました。なかでも『日本女性史』をよんだときは、感動して歴史のながれの一点にある自己の存在をみつめるのでした。

生産手段の発展につれて女性の地位も変遷した様子が理解できました。原始共产社会から奴隸制、農奴制、資本主義への移行、つまり階級社会が出現して家父長制となり、女性はその物質的存在でしかなくなった。男尊女卑の社会がつづき、公然と人身売買がおこなわれた。そして女性は長い忍従の生活にたえてきたのだった。御手洗港でみたオチヨロ船の遊女のおもかげが、歴史の上にあざやかにうかびました。母を卑屈な態度にまでお

いこんだ元凶はなんであるかをもとめて、私はさらに読書しました。

宮本百合子氏、織本貞代氏の評論や小説をよんで、女性の地位と生きかたの問題を考え、女性解放へのみちしるべをえました。そして両氏のゆたかな知性とふかい思想に、尊敬をいただきました。それから唯物弁証法の法則をしり、史的唯物論の知識をえました。

共産党宣言の最後の言葉「プロレタリアートは鉄鎖のほかに失うべき何物もない。得るものは全世界である。万国の労働者団結せよ」また、婦人論の「未来は社会主義者のものである。そしてまず婦人と労働者のものである」の語をノートに記入し、くりかえしよんでは満足していました。

雑誌類ではナツプ（全日本無産者芸術団体協議会）の機関誌「戦旗」の月おくれをかってよみ、プロレタリア解放運動の世界を知りました。「文芸戦線」も購読したけれど「戦旗」と比較してちょっと異質なものを感じたようにおぼえています。さらに『プロレタリア科学』（プロレタリア科学研究機関誌）によって『新興教育』（新興教育研究所機関誌）の発行をしったけれど、雑誌は古本屋にはうっていませんでした。

小説は、中野重治、貴司山治、藤沢桓夫、林房雄、武田麟太郎、片岡鉄兵、小林多喜二、徳永直等プロレタリア作家の作品をむさばるようによんでいった。河上肇先生の『第二貧乏物語』を購読したのもこのころだったとおもう。弁証法的なものの見方に接し私の人生観が根底からかわってゆくのを意識しました。新鮮なよろこびと興奮のなかにいた自分を、いまでもはつきりとおもいだし

ます。平易にかかれた文章は、先生のひとがらをあらわして、くりかえしてよめば、充分に理解することができたのです。

敗戦後の昭和二年（1947年）世界評論社より出版された先生の『自叙伝』をよんで、その清潔でまじめな人間性と思想の純粹さに胸うたれましたが、いまでも最大の尊敬をささげています。

先生は敗戦の翌年二年（1946年）一月三〇日、六八歳の生涯をとじられました。栄養不足と寒気のため肺炎を併発されたのです。

昭和六年の夏もすぎようとしていました。こんな生活をだらだらとつづけていてもしかたがない。母にもすまないし、働いて意義ある生活をしなければとおもいたち、復職することにきめました。母の遠縁にあたる竹原小学校の平田校長を母と二人でたずねて復職を依頼しました。

この年は満洲事変勃発の年にあたります。前年（昭和五年）九月には、「新教」（新興教育研究所）の創立、十一月には「教労」（日本教育労働者組合）が結成されて、教育運動がもりあがりつつあった時期です。教員の減俸や職首と不況の最中に、復職志望校の選択などゆるされるはずもなく、どこかの学校の空席をまちつつ日をすごしていました。

乃美尾小学校

秋もなかばをすぎた一〇月下旬、賀茂郡乃美尾小学校（現在は黒瀬町）に赴任の辞令がおりまし

た。農村の小さな学校ときいて、私はまた自分の手腕に不安を覚えました。しかも一年半の空白があります。でも人生観の確立をえたい私のには、目のまえがあかるくて勇気がわきました。どうしてもやりとげなければならぬと覚悟しました。

母はその頃、尾道市の呉服市場で反物を仕入れて販売もしていましたが、私に大島紬の着物やコートを新調してくれました。

昭和六年一〇月、二三歳の菊かおる朝でした。荷物をととのえて、母と祖母にみおくられ西条ゆきのバスにのりました。一時間半ばかりかかって西条駅前で一度下車し、今度は広行きのバスにのりかえ、黒瀬川にそって坦々とした稲穂の道をくだつてゆく。黒瀬盆地にはいり、どちらをみても広いたんぼのいねは収穫をまっています。上黒瀬村を通過し乃美尾村の停留所に下車しました。大きなフトン袋もおろしてもらいました。小学校は村の中程からすこし南に位置していました。停留所のならびに少し家がつづいているだけで、納屋をともなつた農家があちこちに点在しているといった風景です。学校への途中に高い煙突をたてた、つくり酒屋が二軒あつて目標になっていました。

賀茂郡西条町（現在は東広島市西条町で学園都市建設計画の中心地）は広い西条盆地の中心にあつて農産物の集散地です。古くから酒造業がさかんで「賀茂鶴」「福美人」などの銘酒は全国的に有名です。この乃美尾盆地にも二軒の酒屋がならんでいることは偶然ではなく、良質の米と水がゆたかであることを証明しているとおもいます。

小学校の門をはいるとすぐ運動場でした。左右両側の校舎をつないでいる前面の古い校舎の真中

に教員室があったが、教師も生徒の姿もみあたらない。どうしたのだろうと、おもいつつ、右側の宿直室をのぞいたら小使さんがおられ、今日は遠足であることをしりました。しばらくまっていると校内がさわがしくなり先生たちも帰られた様子です。小使さんの注進をまって私は職員室に案内されました。先生たちの視線をあびて、校長の机のまえにゆき、私は辞令をわたして「おねがいします」といっておじぎをしました。つぎには主席訓導、次席とひとりひとりにアイサツをかわしてまわったのち、末席の自分の席につきました。終始私は緊張していました。学級数は補習科をあわせて九学級、教員数は一〇名でした。亀田校長は、県立商業学校から師範二部を卒業した人で三五六歳のわかさで校長のイスを獲得したのだから、いわゆる「やりて」というのでしょうか。色白で口ひげをはやしていた。初対面の印象は中々手ごわくて如何にも校長ぶっているといったかんじでした。

私の担任は二年生で、左側の校舎のはしからふための教室でした。各学年が一組づつで全校の生徒数は約二〇〇人くらいだったとおもいます。

あらかじめ頼んでいた下宿に荷物をはこんでもらい、直ちに簡単な歓迎会をひらいてもらいました。女教員は私をいれて三人でしたが、一人は郵便局長夫人で補習科の裁縫教師、一人は役場の収入役夫人で、三年生の受持の沖本先生です。二人共この土地の人で年配の先生でした。

若い男教員で師範一部出身の今田先生は何か思わせぶった態度で、じろじろと私をみて品定めをされているような感じは気持ちが悪く、井上先生

は準教員でしたが、ざつくばらんな態度は朗らかな人にみえました。教頭は次席より若く、單身赴任の身で気むづかしさが表情に現れていました。

担任の生徒は、純朴でおとなしい。人数は三〇人あまりでこの点は理想的です。その大部分が農家の子です。服装はそまつでした。授業時間に手をあげてこたえる生徒はよく訓練されて、お行儀がよかったです。

ここでも優等生教育がおこなわれているのだとおもいました。教科書にそうた天皇制教育は生徒本来の自由な意志をずいぶん束縛しているのだとおもい、まけてはならない、純真な芽をのばしてやらなければとおもいました。

となりの教室は一年生で次席訓導の担任です。中年の温厚そうな先生で、オルガンをひいて唱歌をおしえていられる。楽しそうな雰囲気を感じられますが、その歌曲がみな、先生流にアレンジされて、小節をきかせてうたわれています。これではちよつと流行歌調で、なんだか場ちがいの感じがして、厳肅な教育方針に合致しないのではないかと思います。その愉快そうなうたいぶりをきいていて、私は微笑しました。また皮肉さを感じてたのしく思いました。

一年生の担任はじめてだということで、校長のワンマンぶりがうかがえる一例だとおもいました。というのは、新学期に校長の長男の入学にあたり、その受持ち教師として、おだやかな性格の次席に白羽の矢がたったというわけです。一年生、二年生は女の担任だったという、これまでの慣例がやぶられたのです。やぶられた、そのことはそれで結構だけれど、三年生の持ちあがりになった

沖本先生の面目と、次席の困ぶりが校長の人間性にかさなつて、この小さな村のうわさになり新学期をにぎわしたことだろうと想像しました。校長は西条町と乃美尾村の中間にある板木村から自転車通勤していましたが、愛児をわざわざ自分が校長である、この乃美尾村の小学校にかよわせているのです。子供自転車通学の亀田君はおそらく近所の幼な友達とつれだつて、たんぼの道を通学したかったのではないだろうかとおもってみました。

竹原地方では女性で自転車にのっている人をほとんどみかけませんでした。この農村地帯では自転車か唯一の足でした。テクテクあるくのは時間がかかりすぎるのです。地主や大きい自作農はみなもっていました。女自転車もこの村で七八台はあるといわれるが、小作農家では、ほしくても到底買える品物ではありません。亀田君の子供自転車はめづらしくて羨望をよんだものです。

この純然たる稲作農村はなんといっても、封建色が濃いものです。私が非常におどろいたことは、宴会の席やときには教員室で、男教員の間で猿談がかわされることでした。前任地ではきかなかつたことなので、私はいやでなりません。何の刺激もない田舎の生活がおもいやられました。が、教師自身の質的レベルの程度がわかるような気がしました。

お茶くみや弁当保温のせわ、ときには男教員のはしりつかいまで、隣席の沖本先生がされています。はじめ私は気がつかず、手伝いをしなかったら教頭にきつい口調で注意されました。得々として何の抵抗もなく、女教員の役目として動いてい

られる沖本先生をみて、農村の主婦の生活と女の地位をおもいやり暗然としましたが、私はなにもいうことができず、沖本先生を手伝いました。

沖本先生は亀田校長の下で非常に気をつかっていられるようにみえました。正教員でない自分がいつ遠くの学校に転勤させられるかもしれないという危惧です。夫君が収入役なので一応の心強さもあるのだろけれど、なんといつても年とつていて正教員の資格をもたないというハンディは大きい。私は先生の気持ちがよくわかり、となりの教室によく話しにゆきました。沖本先生は小さい坊ちゃんをひざに、だきあげていられることがありました。

教員室のとなりは補修科室になっていましたが、畳に坐って裁縫をしている女生徒のところへ私はよく出入りしました。藤井先生は別に私に對して、いやなかおもしろ、応対はきわめてお上手でした。農村の乙女たちはいまなを考へ、どんな家庭のなかで如何に生活しているかを知りたいとおもったのです。そして話しあえる友達になりたかったのです。それにしても生徒の服装はそまつでした。「モータ」という木綿のきものをきています。銘仙やモス生地のものをつけている自分を省みて、これではいけないと、早速母のところへ便りをだし、家においてある木綿のきものをおくってもらいました。

復職まえに竹原の古本屋で購買した『プロレタリア科学』の広告でしっていた『新興教育』（新興教育研究所発行の機関誌。創刊は昭和五年九月）をみたいとかねておもっていた私は、おもいきって東京の研究所へ注文して送付してもらうように

なりました。

この年昭和六年（1931年）一〇月にナツプ（全國無産者芸術団体協議会）が解散になり、その加盟芸術諸団体とプロレタリア科学、教育、反宗教等の諸団体とともに「プロレタリア文化連盟」（コップ）が結成されました。いままでの新興教育研究所はコップに加盟して「新興教育同盟」とよぶようになった。したがって昭和五年一月に結成された「教労」（教育労働者組合）と「新教」（新興教育同盟）の両組織によって、生徒のための真の革新的な教育運動が推進されることになったのです。

『教育労働者組合』はわれわれの城塞であり『新興教育』はわれわれの武器である」と両者の役割を明示したと「嵐の中の教育」にのべてあります。送付された『新興教育』は私にとつて、かけがえのない指導書になりました。教科指導に対するいままでの摸索から両の目がパツチリとひらいてゆく感じでした。

11月号はソヴェート教育特集号で、扉にはレーニン夫人クルプスカヤの写真がでていました。「教員俸給不払の国と増俸の國」と題して、経済恐慌にあえぐわが國無産大衆の生活と、教員の待遇の悪化、ゆがめられた教育の現状と対照的にソヴェート教育のすばらしさが紹介されてありました。

ソヴェートでは婦人と子供がいかに解放されているか。

『新興教育』拡大と読者獲得の方法。

「赤いチョーク」欄では職場の報告や感想、希望等、読者の通信がのせてあって、ひとつひ

とつ身近に教えられ、うなづくことができました。

編集後記に財政難がうったえてあり「新教防衛カンパ」が募集されていました。

私は通信といつしよに五円のカンパを毎月送金することにしました。月給は初任給にもどつて四〇円でした。大長小学校のように住宅手当は一銭もでなかったが、農村では生活費は大してかららず、貯金もできたのです。

非力な私には大した組織活動もできず、せめてカンパすることがひとつの大きなよろこびでした。

中央部からの通信は個人名（ペーネーム）で封書がよせられましたが、いまではそのペーネームもわすれてしまいました。この信書による指導と励ましに、私はどんなに喜びと、力を与えられたかしれません。

信書の人が昭和四八年九月、四〇余年ぶりの連絡により小田真一氏であったことがわかつて私は当時の思い出をあらたにしたのです。

朝礼の時の校長の訓示を生徒のうしろできいて「またあんな欺瞞的なことをいつて子供の自由な意志を束縛しようとしている」などと批判をしていました。

週番の時は私も朝礼台にたたされましたが、内気な性格はどうしようもなく、自分では大きな声をだしたつもりでも、後まではとかないらしく、「きこえません」という今田先生（師範一部卒業の男の教師）の大きな声がはねかえってきました。

後日、補習科生の二三人が「あの時は今田先生のいじわるといつてやったんです」と私をなぐ

さめてくれたので、この娘さんたちは私に好意をもっていてくれるのだとおもって、うれしくなりました。そして親しみがわきました。はやくこの娘たちと友達になって、生活の実体を知り、山積する社会矛盾をみる眼をつちかわねばならぬとおもいました。私は同僚のなから、どうにかして同志を獲得したいとおもっていました。まず井上先生に目標をさだめて、話す機会をまっていた。教員室では何もうことができないので、となりの補習科室に時々出入される先生をみつめて、アジプロ活動の一步をふみだしました。一部の補習科生にはプロレタリア小説を与えて読書すすめ、読後の感想をきくことからはじめました。

その後井上先生には『新興教育』を手渡すまでになり、私の教室でいろいろと話しあうことができました。封建的な田舎では、周囲の目がうるさく、すぐにうわさが立つので、私の方からは先生の教室へゆくことをひかえていましたが、先生の新しい教育に対する熱意はかなり積極的でした。

冬のおとずれは早く、教室でストーブをたくことになりました。生徒たちがわりあてられた薪を持参してくるのです。私はいまだストーブのいない生活をしてきたので、いまさらのようにこの地方の寒さが身にこたえました。

教室の廊下側は日があたらないが、南側の窓辺は冬日がサンサンと中まではいいこむので、あたかでした。私は無意識のうちに窓側の席を巡回していたらしく、「先生は日のあたる窓の方ばかりりいて、こっちはちいっともきてくれてんない」という不平のことが耳にはいり、私は愕然

としました。不用意でした。私はもつとこまかいところまで気をくばらなければならぬと反省をして、ただちに廊下側の席を交替させました。そして私は公平に機関巡視するように心掛けました。下宿に帰っても、夜はさむくて大型の和衣をつをおばさんから借りて身体をあたためた。夜中に目がさめると、つとめて読書するようにしました。物音ひとつきこえない深夜は頭がさえて、すこしぐらい難解なものでも理解できるような気がしました。『賃労働と資本』『唯物論と経験批判論』などを讀んだように記憶しています。『婦人公論』もつづけて購読していました。

校長はまさか女教師の私がプロレタリア文化運動などに熱中しているとは、おもってもみなかったようで、井上先生が私の教室に出入するのは、お互に好意をもちあっているのだと誤解したらしく、冬休みもおわりに近いころ結婚を問う意味のハガキが竹原の家にとどいたので、私はとても驚きました。考える余地はなく、全然その意志のないことを記してただちに返事をだしたが、なぜ校長はこんなおせっかきをするのだらう。田舎の封建的な慣例による校長の自意識の尊大さがしのばれて、いやでした。

三学期に帰校してからは、校長の態度によそよそしさがみられました。そして私の行動に注目している様におもいました。高等科女子の体育をうけてもと命令されたので、私は体操は苦手と自信がない旨訴えたけれど、校長はきつい語調でゆずりませんでした。

学校に隣接の公民館で保護者総会がおこなわれたときも、容赦なく私を演壇にたたせました。ま

ったく初めての経験でずいぶんとまどいましたが、のがれることはできない。ひとくぎり、はなしては恥しそうに口に手を当てる動作は、自分でもわかるがどうしようもない。そのたびにみんなの笑いがおが目にはいる。短い時間だったのに私にはずいぶん長いようにおもわれ、上氣して夢中でした。

しかしこの体験は私の一里塚となったようです。勇気がわいてくる感じでした。

同志にあう

昭和七年二月下旬のある日でした。

「新教」中央より通知があつて、西条駅で組織の人と連絡をもつことになりました。つぎの日曜日に指導部の人とあうということで、私の頭は一杯になってしまいましたが、ついにその日の朝がきました。

雪はやんでいたが、残雪で山や畠はしろかった。コートを羽折り、宿のおばさんに外出をつけて外にでたが、停留所までの道はつめたかった。バスで一時間ばかりをついやし、西条駅前に下車した私は指定の待合室で下り列車の到着をまつていたが、なんだかそわそわしておちつけません。

お互に初対面なので、通知された目印を手にしていました。中央の人は、赤い表紙の書物をカバンの上にかさねていられたようにおもいますが、私はどんな目印をつけていたのかおぼえていません。まもなく下り列車が構内にはいったので、私

はおもわず席をたつて、待合室にはいつてくる男の人を目でおっていました。

赤い表紙の本をみつつけようとしていた、あのときの情景はいまでも鮮明におもいだされます。無雑作な態度で近づいたその人の面差しは、いまは全然おぼえていませんが、中肉中背の若い方でした。内気な私は小さくなっていたものと思います。アイサツをかわして、駅をでた二人は競馬場とまであるいて、堤に腰をおろしました。枯草のところどころに残雪はありましたが、早春をつげる日差しはあかるかった。

その人の話される組織や運動情勢、当局のはげしい弾圧ぶりに耳をかたむけ、私は乃美尾校における微々たる活動状況などを、質問に応じて、はなしたようにおもいます。

つぎつぎとはなしたつきず、その人は私の知らなかった天皇制の実態について、かたられました。

「天皇制は絶対的な国家権力で、天皇は神様に祭りあげてある。その階級地盤はブルジョア、地主の支配階級である。天皇制は封建政治の延長であり、小作農制度と資本主義制度を保護するのに懸命である。天皇制は強大な武力をもって侵略戦争をおこない（満州事変は柳条溝事件を口実に前年、昭和六年四月に開始された）現在ではファッショ的色彩を呈してきた。そして教育をゆがめ、児童を軍国主義へとかりたてている。

天皇の収入は日本で一番多く、株券の配当金だけでなく莫大な額で、耕地や森林その他の不動産も膨大で、総所得は三井三菱財閥をはるかに越えている。

その上政府は皇室費として、国民の税金を多額

にのぼって与えている」等々。

知らされる話に私はおどろくばかりでした。いまでは考えられぬことだけれど、天皇制についての書籍は全然手にいれることができなかったのです。言論出版の自由がなく、不敬罪が成立していたのだから……。

いままでに指導者のいなかった私にとって、この真相は画期的なことでした。今後の活動についても、自信をもって当ることができると、胸のふくらむおもいでした。

いまから四年まえの昭和四七年九月一日、竹原の私宅へ突然にかかってきた電話により、四〇年まえにこの西条駅でおあいした「新教」中央の指導者が、小田真一氏であることをしったとき、私はおどろきと同時になつかしきで声もはずんでいました。

苦難な戦前戦後も無事に生きながらえてきたお互いの生活をたしかめあったのです。氏は鹿児島市で新樹出版社をいとなまれ、「教育運動史研究会」で活躍していられた。戦前に教育運動にたずさわって、うもれている同志の発掘や資料の蒐集に力をそそいでいられることを知ったのです。家庭の中に長く同じこもって、空白時代の長かった私のねむりもゆりうごかしてもらいました。

私は昭和八年三月に小学校を職首されて以来教育界から縁どおくなっていたので、初めは遠い存在としての認識しか持てませんでした。『教育運動研究誌』『嵐の中の教育』『教育労働運動小史』などの書籍を送付していただき、少しづつよんでゆくうちに、しだいに教育界の現状を身近かに感

じて、非合法時代のおもいだがよみがえり、プロレタリア教育運動に情熱をもやしていた教師のころをなつかしんだのです。

あのころの先輩諸先生のたゆみない研究と闘争の連続によって、その苛酷なる弾圧にもめげず、きづかれてゆく民主教育が、戦後の発展へとつづいている組織の根強さに、感動したのでした。

『戦後の教育と私』（広島平和教育研究所編）によせられた小田氏の手記によると、氏は広島神石郡神石町の人で、明治四〇年の出生とあります。油木農学校から賀茂郡西条農学校に編入されました。（西条町の地理にくわしいはずです）卒業後、

東京豊島師範二部に入學。専攻科卒業後は「全日本教員組合」と「新興教育研究所」にはいり、その組織と研究活動に従事されました。私が西条駅でおあいしたときは「新教」の組織部と編集部のごとをされていました。

やがて卒業式の日がきて、高等科の送別会と謝恩会がひらかれました。席上校長につづいて各教師も卒業生におくる言葉をのべることになり、私はまえのようにものおじしなくなっていたので椅子からたちあがりました。

「これから社会にむかつて第一歩をふみだそうとしている皆さんはなにごとにも勇氣をもって、あたってください。世間には長いものには巻かれろという言葉がありますが、これは権力者には頭があがらないから、なにをされても服従せよということ。これではいつまでたっても世の中はよくなりません。弱いものは泣くばかりです。皆さんが正しいと判断したことは確信をもって、そ

れを主張し実行してもらいたいとおもいます。勇気をもって正しい道を進んでください」といういみのことを訥弁ではなしたことをおぼえています。

春の休みは短く、四月一日の入学式をまえにして私は乃美尾校へ帰校しました。そして私を待っていたのは転勤の通知でした。賀茂郡川尻小学校へ不意転を命じられたのです。

いつだったか、校長がなにげなくいったことがあります。

「もうすこし竹原がちかくだったらいとおもいませんか」「それは、おもいますよ」と返事しましたが、転勤などのことはなにもいわず、その後私の意志の確認もとめられなかったので、新学期めざして帰校した私には不意うちでした。校長に対してムラムラと腹がたちましたが、どうしようもありません。

新学年の登校日をむかえて、私は受持ちだった生徒をつれ近くの山へあそびにゆきました。陽春の光に息吹く自然はうつくしかった。黒瀬川の流れはおだやかでした。

手足をのばして遊びたわむれる生徒たちの成長をねがって私は別れをつげました。

翌日の送別式には校庭にならぶ全校生徒にむかつて台上にありました。

「今年も皆さんといっしょに勉強したいとねがったのですが、校長先生の命令で、しかたなく川尻小学校にゆくことになりました。大変残念ですが仕方がありません。短い間でしたが、楽しく勉強することができて、うれしくおもいます。おわかれしても決して皆さんのことはわすれません。」

みなさんも時々先生のことをおもいだしてください。」とあいさつして、乃美尾盆地を去りましたが、ふたたびこの村をおとする日があるだろうかと思傷にひたされました。

折角同志として交際をつづけていた井上先生とも充分な会話はできず、補習科の生徒にも心をのこして、おわかれをしなければなりませんでした。下宿の庭にさいいていた白木蓮の花がとても美しく印象的でした。

川尻小学校

昭和七年（1932年）四月八日だったとおもいます。

ぐるぐるとまがりくねった坂道を、バスでくだって安浦町に到着し、安登村の峠をこえると川尻町です。東西に長い海岸の町でした。人口は約五〇〇〇人ほどで、戸数は一〇〇〇戸くらいだったとおもいます。北に賀茂郡第一の高峰、野呂山をいただき、南はすぐ瀬戸内海の岸辺でした。毛筆の産地として、ちよつと有名なこの町の小学校は、町の中心から少し西よりに建っていました。新校舎は、後の小高い丘にたち、余地をのこして旧校舎をみおろしていました。いづれ、下のおんぼろ校舎は廃棄する運命にあるという。私はまるで流浪の旅をしているようで、なんだかものさびしい、たよりない気分に包まれていました。またなにもかもみ知らぬ土地で、み知らぬ人達と交わりを持たなければならぬとおもうと憂うつでした。

校庭であそんでいる生徒におしえられて、二階の教員室に入ったら、校長室は階段の上の別室になっていました。松浦校長は、年配のどっしり太った赤らがおの人で、めがねをかけていました。辞令をわたして頭をさげると、うなづいて直ちに教員室の先生方にひきあわせられ、私の席に案内してもらいました。担任学級のこと、下宿さきのことなど、いろいろ説明されて、私は乃美尾校の亀田校長とは大分ちがった印象をうけました。気のおけない、ザックバランな態度に好感をもちました。

学校から東寄りの山手に下宿をきめました。清水家の二階です。すぐ斜下の加藤という家には、同僚の織田先生が下宿していられました。清水家の主人は船員で、一年の大半は乗船していられるので、おくさんが赤ちゃんをつれて留守をまもっていられました。

二階からは瀬戸内海が眼前にひらけて、非常にみはらしがよかったです。ずっと右手に鎮守の森があり、その前は浅瀬がつづいて汐干狩ができました。川尻校の教員は一八人で、学級数は補習科をふくめて一七学級、生徒は約七〇〇人でした。私の担任は、一年生の二組にわりあてられていましたが、一年生の受持ちは初めてのことで、すべてにおいて、まったく用意ができていませんでした。それに低学年は苦手で、人数も多く自信がないので、できることなら担任をかえてもらいたかったのです。

翌日校長にその理由をいって、担任の変更をおねがいしたら、校長はうなづいて他の先生に交渉してみようと、いうことになりました。しかし、

その結果はみな駄目でした。

どの教師も自分の組の準備をすすめていられて、生徒の気持ちもおちつきを得ているからという訳です。仕方がない。一組の山田先生に教えられて、とりくむことに覚悟をきめました。

山田先生は小柄で活動的ではがらかな人でした。また平凡な感じの人で、物事をふかく考えるタイプにはみえなかったが、若く、すなおで好意的でした。しだいに親しくなると、銭湯にもいっしょに行ったりしましたが、教育の参考書と婦人雑誌以外はあまり読書してないらしく、また興味のない様子でした。

私は現在の小学校教員には案外こうした人が多いのではないかとおもいました。しかし、早いかおそいか、どの人もいづれは、きっと社会の矛盾につきあたって、マルクス主義の領域にまで到着するはずだともおもっていました。それほどあのころは純真で世間知らずだったのです。

校庭の桜は満開でした。ここ川尻の地は標高八〇〇メートルの、びょうぶのような野呂山を北にせおっているの、沿岸では最もあたかい土地でした。雪がふっても、地につくまでには消えてしまつて、つもったことがないそうです。その美しい桜花の下で、新入学の生徒たちは、学校という環境にとまどいながら、私のことばにしたがつて、唱ったり遊んだり駆けたりしている。少しでも早く学校の集団生活になれさせなければならぬ。この子らに悲しみを与えてはならぬと懸命でした。私の任務は重大です。教室でも、校庭でも具体的な指導はこまかにおぼえていませんが、生徒の発言や行動の自由を束縛しないようにと気を

つけたつもりです。その結果、校長の参観のときは、いつもガヤガヤとさわがしかったものです。私に、もっと統率力と手腕があれば、上手に生徒をみちびいて、スムーズに授業をはこぶことができるのといつも反省をしました。

この町は一概にはいえないが、階級的に二分しているようにおもわれました。学校のそばを流れる光明寺川を中心として、東側山手にかけて昔からの有産者、老舗の家が多く、西側よりの海岸部は農家、漁業者の無産者が多かったのです。

毛筆製造業の家も、真宗の光明寺も川東の山手にありました。

光明寺はこの町と町民の中心的存在で、由緒ある大きな寺院でした。婦人会や青年団の勤労奉仕で、境内はいつもきれいに掃除されていました。日高という姓でしたが、ことし一年生の一組に女の子がいました。背のすらりとした、色白の美しい生徒で、いつもきれいな衣服を身につけていました。級友は、日高さんとよばず、「お嬢さん、お嬢さん」と教室でも校庭でもよんでいました。担任の山田先生が注意されても、入学前や家庭での習慣は容易にとれず、幼い生徒たちの羨望の的になっていました。学校集団の中では、みな平等にとりあつかい、差別してはいけないことを、生徒にくりかえしておしえなければ真の教育はできぬと、山田先生とも一度ならずはなしあったことをおもいだします。

これと対照的ともいえることは、私の組に「はまくだし」の男の子がいました。「はまくだし」というのは海岸の中央につきだした波止場をかこんで、漁をしている未解放部落の地区名です。この

子はそまつな衣服を身にとり、色の黒い暴れん坊でした。学校生活になれないせいもあって、動作がいつも乱暴でした。でも私が何か話しかけると、ニコツと人なつこい笑いをうかべて近寄り返事をしてくれて、とてもすなおでした。天衣無縫というのか、無邪気そのもので可愛い子でした。

初夏の日の夕暮に下宿の織田先生といっしょに散歩にゆき、波止場の突端にでたら涼しくて気持ちいいだろうと、いうことになり、「はまくだし」の路地に足をむけました。家なみも道もせましかった。織田先生も私もここへくるのは初めてでした。なぜか川尻校では学年はじめの家庭訪問がおこなわれなかったのです。

漸く波止場へでたところで、「パチッ」という音が出て、石つぶてがとんできました。何だろうとおもつてふりむくと、また「パチッ」「パチッ」という音がして、石つぶてが私たちにむかつてとんできました。一瞬後、私はおどろきとおそれとんいりまじった気持ちで、あわてながら波止場のハナまでかけてゆきました。このショックに私の胸の鼓動は高まりました。そして改めて、いまおきた事件のなりゆきをおもいおこし、織田先生と「はまくだし」の生活のありかたを話しあい、考えました。

町の中央の浜辺に漁生活をして、長い差別の歴史を生きぬいてきた人達の反抗は、こんなにはげしいものであったのか。過去における、心ない教師たちの差別意識や処置にたいして忍従の涙をながした、うらみとにくしみは幾重にも積みかさなっているのだらうと、私はしみじみと考えました。そして私の担任の生徒も、この環境の中に育つて

いるのだとおもって、暗然となりました。

この体験はあまりにも強烈だったせいか、その後、夜中に眼がさめても頭からはなれず、徳川幕府が身分制度を施行して、搾取をほしいままにした悪政、そして現在に及ぶその流れの根深さを次々と考えてゆきました。

松浦校長はいつも頭痛がするらしく、親指と人差指で鼻柱をおさえる癖がありました。飲酒のせいではないかと、同僚と話していましたが、校長というのは、こんなにも酒をのむ機会が多いものかと驚くほどでした。校長会議、研究発表会、教員連合会、役員会等の行事のあとには必ずといっていいほど、「飲み」をしていました。そのたびに補習科の矢田先生が、かまぼこやトマトをきざんで酒の支度をされるので、「今日も、飲み、ですか」と問うと、矢田先生は親指を立てて、「ええ、この連中がね。毎度のことですよ」と淡々と話されます。「先生も大変ですね」とねぎらうと、「もう、なれましたが、いまにアル中ですよ」いって、皮肉そうな笑いをうかべられました。矢田先生はいつもやさしい、ものごしのおだやかな人で、まだ独身だったが、校長は彼女にたいして特にやさしくしていたようにみえました。

古くて広い補習科室は一年一組のとなりでした。私はときどき訪れて、女生徒たちと話す機会をつくろうと努めました。一年生の授業と遊びにくたびれておもうようにゆきません。それに教案の準備もあって、すぐに時間は過ぎてしまします。

小使さんの娘の川崎さんと、ようやく親しくなり、夕方つれだって海岸をあるきながら話をする

ようになったときは、とてもうれしく思いました。彼女は竹をわったようにカラッとした性格で、おもっていることははっきり発言しました。学校の先生にたいする不満や、社会や家庭における疑問をいいただきました。

私は徐々に社会制度の矛盾や女性の歴史的な地位、教育のありかた、理想の社会展望などについて話したようにおもいますが、私の理論的水準はまだまだ低いものでした。そしてプロレタリア小説や雑誌『働く婦人』などを与えて読書をすすめました。

男教員の中に森井先生がいました。なんとなく私に近づいてこられ、はなしをする機会が多かったのです。しかし思想問題にふれるといつも私の意見とくいちがっていました。

天皇制教育についてもはっきり否定はされませんでした。

「生徒の個性を尊重し才能をのばして、よい日本人となるよう指導することが教育の目的だ」と主張し、「よい日本人とは鋳型にはまった人ではなくて、自由に考え、自由に行動して、内容の充実した勇気ある人間だ」と彼はいわれる。

住田先生は恋愛至上主義者でした。広島師範一部卒業の優等生だったそうで、誰にたいしても、えんりよなく自分の意見をのべて、頭脳のよさをおもわせましたが、婚約者である教え子の一人と楽しい家庭をいとなむことが唯一の理想として、「愛情こそ最高のものであってイデオロギーなど僕には興味ない」とはっきりしていました。人柄は至極善良でしたが……。

女教師の織田先生とは下宿が近くで一番したし

く、つきあっていました。彼女は尾道市向島の人で、私より三つくらい若く、四年女子の担任で、上の校舎に教室がありました。思想性はありませんが、非常に純粹で、なんでも打ちあけて率直に話すことができました。夕飯後も度々お互いの下宿をおとずれていました。青春の夢、恋愛、結婚問題などもよく話しました。法律上の男女の差別、職域の差別、家庭における差別などなどについて、いつも差別されて犠牲になるのは女性であること、そしてしわよせの対象になるのは女性であるために、それに耐えて忍従の涙をながした「女性の歴史」はずっと今もつづいていること。

私の貧弱な「日本女性史」の知識から、イブセンの『人形の家』、『青踏社』の平塚らいちよう氏らによる女権獲得運動について。男子にゆるされているものが、なぜ女子にゆるされないのか。経済的に独立できなかった女性の悲劇はどんなにしたら、いつになれば喜びにかわるのだろうか。まず人間の自覚から……彼女がふかくうなづいて共感をえられたようにおもいました。

彼女は女学校出の準教員なので、給料の差別をつねに感じていられたのは当然でした。

乃美尾校でも、川尻校でも農村出身の教員が多かったが、とくに男教員の率は高かったのです。

成績のよい次男、三男を学資のいらない師範学校に入学させた親達の生活がしのべれます。家をつぐ長男の財産しか保持されない農村の貧しさです。分家させるだけの土地も金もない子供たちのために、えらんだ道でした。そして規制された学校で、天皇制絶対教育の指導をうけて（四年一五年間）現地へ赴任した教師たちの意識が、どんな

ところにあるか想像することができます。農村の封建的な環境にそだち、古い慣習を身につけて成長した模範教師の温存的な人生観も処世観もわかるような気がします。

教頭も農村の人で単身赴任していられたが、校長の前では如何にも忠実にふるまい、かげではヘラヘラとして適当にサボっていました。そして女教師にたいしては服装や容姿のことなど口にして、女性観のひくさをあらわしていました。

松浦校長の人は大ざっぱで、能力的にも粗雑さが感じられましたが、人はよかったです。機会あるごとに部下にやりこめられていました。従って教師はわりにはびやかに勤務できたようにおもいます。自分の特長を発揮して教育にとりくむ姿勢の若い教師もいました。毎日の退校時間も校長よりはやくかえる先生もありましたが、校長はあえてなにもいいません。私もいい時間にとらわれることはありませんでした。下宿にかえって炭火で煮物をしながら読書した自分をおもいだします。

まだ呉線が開通していなかったで、西どなりの仁方町小学校でおこなわれる教員連合会に徒歩で出席していました。往復十余キロもある山すその道を迂回して峠をこしました。すこしでも近道をしようとして、細い道をえらぶので、袴のすそが雑草にふれ、蝶がまい、トンボが弧をえがきました。

同僚とはなしながらの帰途はのんびりとしたのしいものでした。この年昭和七年一月には第一次上海事件勃発、三月には満洲国独立宣言、五月には5・15事件、七月には社会大衆党結成、「米よ

こせ闘争」とつづく世相は、ファシズム抬頭の危険な情勢をあらわしはじめ、その軍事色がようやく国民の胸に浸透してきた時期といえます。

あるきながらの語らひは、満洲事変から軍国主義におよび、ファシズムの意味についての質問が女先生のひとりから森井先生にむけられました。森井先生は「それは僕より山本先生のほうがわしいから」といって、私のほうへ答をまわされました。

そのころの新聞紙上には、ファシズムという語がボツボツでていました。私は瞬間、うまく話されるだろうかと迷ったが、それでも思いきつてどうにか説明しました。

「ファシズムは初めイタリアのムッソリーニによって作られた極右団体だが、その後の勢いはドイツ、日本に波及し、武力や警察力で労働運動や民主主義組織を弾圧し、人民を戦争にかりたてている。その軍事権力で資本主義の恐慌をきりぬけようとする、反動的で野蛮な独裁政治のことである」。

完全ではなかったけれど、やつのことで、これだけの意味をタドタドしくたえると、私はホッとして上気していたのをおもいだします。

仁方町は現在呉市に合併して川尻町につづく県道は舗装されて自動車の往来が頻繁です。しかし昔のあの細い道は今ものこっているはずで、年老いた百姓の人たちが農薬のない畠で、なすやきゅうりをつくっていた姿がいまでもおもいだされます。

瀬戸内海の沿岸を汽船で帰竹するより他に交通の便がなかったので、私はそうたびたび帰宅する

ことができませんでした。プロレタリア作家同盟（日本プロレタリア文化連盟の加盟団体）の文学サークルが竹原にできたことを妹より知らせてきました。責任者は千日太計雄という青年でした。

千日氏は忠海中学（旧制）を卒業して、からだがよいせいにか家庭でブラブラとあそんでいる文学青年でした。サークルは女学生やその卒業生五、六人で組織されているもようで、妹もそのメンバーのひとりでした。サークル・メンバーが女性でしめられ、男性は千日氏だけというのも、彼の人柄をものがたっているようにおもわれました。とにかく、機会があればいちど彼にあつて話をききたいとおもっていました。

私の妹は思想的にもまだ未熟で、階級意識もはつきりしないものがありました。サークルに加っていれば、そのうちにきたえられ、情熱も高まるのではないかと期待をもったが、妹はものの考え方が現実的で、話をしてもなんとなく物たりなくなる時がしばしばありました。私は反対に口マンチックで想像の世界に飛躍しようとする傾向が強く自分でもこれでいいのかしらと自省したものです。

『新興教育同盟』の機関誌『新興教育』は昭和七年のことしも財政危機と発禁処分により一・二月合併号として発行されました。三月号と四月号は、発禁押収の弾圧下に赤字と闘いながら、無事発行されて私の手もとに届けられました。

五月号からぱったり送付がたえてしまいました。どうしたのだらうといつも気にかかっていたところ、ようやくにして送られてきたのは、九・一〇月合併号で、しかもガリ版ずりでした。

中央部をおそった敵の弾圧は、原稿をうばい、同志の検挙や、財政難がかさなつて、五ヵ月間の空白をしのげなければならなかったのです。

「吾々は引きつづく暴圧に抗して断固としてたたかうことを諸君のまえにちかう。諸君も亦活発な闘争によつて暴圧に逆襲されんことをのぞむ」と編集後記はむすんでありました。

広島との連絡

こうしたころ、多分昭和七年の六月下旬か七月上旬だったように記憶しますが、「新教」中央部よりの紹介により、広島高等師範学校グループの責任者、星川鳳一氏と連絡をもつことができたのです。

このことはどんなに私をよろこばしたかしれません。中央部に心から感謝しました。

星川氏の便りに私はすぐ返事をしたためました。

また『新興教育』誌三月号に「広島高師も闘っている」村田四郎の名で教育サークルの活動通信がでていたのをおもいだし、とりだして再びよみかえしましたが、活発な活動のようすが記されていました。多分星川氏の投稿にちがいないとおもうと、急に親愛と連帯感がわいて、気が全身にみなぎるおもいでした。

夏休みもおわり、下宿の赤ちゃんに人形のおみやげを買つてかえりました。おくさんは虚栄心のない気さくな人で、いつも親切にしてもらいまし

た。私はようやく町の人たちにもなれて、日常をスムーズにすごすことができるようになりました。近所の青年たちとも、すこしづつ親しくなっていました。

郵便局につとめている畝井君は、下宿のとなりの家だったし、宿のおくさんとも懇意だったので、ときどき話にきてくれました。純朴な青年でした。おくさんの姪の娘さんもとまりにこられたときは、二階にあがつておそくまではなしをすることができました。

私が出広して、高師の星川鳳一氏におあいしたのは、昭和七年の一〇月初旬だったようにおもいます。連絡場所は福屋百貨店（現在の場所より電車をへだてた向側）だったとおもうが、はつきりおもいだせません。彼は大柄でちよつと老けた感じの、やさしそうな学生でした。四、五年ぶりにおとずれた広島市の地理に私はくらかった。みちびかれて、市電にのり、千田町の停留所におりと彼の下宿にともなわれました。そこで、あつまつていたサークルのメンバーに紹介されましたが、みんなインテリ青年ばかりで、私は身の萎縮するおもいでした。なにをしやべつたのか全然記憶にありません。

皆と別れて、星川氏は私をともない、ある小さな喫茶店のなかに入りました。そこでハンサムな学生とおもえる青年に紹介されました。

青年はうなづいて私をつれ、星川氏をのこして歩きだしました。途中はほとんど沈黙していたようにおもいます。そして、また小さな喫茶店に入ると、ひとりの幹部らしき同志がまつていて紹介されましたが、どんな組織の人なのか私には全然

わからない。そのことについてはなにひとつふれず、名前はもちろんのこと、ただ地下活動の人であることをおもわせました。

私は川尻校の職場のことなどを質問され、組織の問題にふれて集会をもつためにいろいろの指示をあたえられたように記憶します。

それから、またハンサムな青年にともなわれて元の喫茶店にもどると、星川氏が待っていて、二人で彼の下宿にかえりました。外はもうぐらくなっていたし、これからでは呉市からのバスもないので、下宿のおばさんにたのんで、空部屋をかり、その夜はそこに泊ったけれど、いろいろの場面が頭にうかんで、すぐにはねつかれませんでした。翌朝、星川氏とわかれて帰路につきましたが、彼には終始気をくばっていただきました。

その後10・30事件（昭和七年一〇月三〇日から八年七月までにかけての広島県の共産党関係の弾圧事件）の一斉検挙がおこなわれて、私もその余波をうけて一二月になつて竹原警察署に留置されることになったのですが、非法時代の組織活動はすべて秘密裡におこなわれて非常に困難であることをおもわせました。

実をいって、初めてこんな経験をした私は、ちよつとキツネにつままれたような気持ちで、とまどいを感じましたが、それでいて厳肅な組織の根深い根拠をみたおもいで、緊張し興奮する自分でした。

それからの私は青年男女の集会をもつべく努力して、漸く第一回の会合を私の下宿でひらくことができました。となりの畝井君や造船所に働く労働者五人ばかりの人数だったとおもいます。各自

にいろんな意見がでて、成功でした。

職場の問題から賃銀のこと、資本家と労働者の対立、社会制度の矛盾など話しあったように記憶しますが、まだまだみんなの考えは幼稚で理論的水準的水準も低いものでした。

プロレタリア小説や社会科学の入門書等与えて読書をすすめました。

また小使さんの娘の川崎さんには、女子青年団や補習科の友人に働きかけるように依頼しました。

10・30事件

第二回めの会合をおえて数日後のことでした。

放課後の職員室にのこって教材の準備をしていたところ、下宿のおくさんが下から私をよばれたので、なんだろうかとおもいながら室からでると、おくさんは私をひっぱるようにして、すばやく私の耳にささやかれました。今郵便局の畝井君から連絡があつて、竹原警察の刑事が私のところに自宅捜査にくるといのです。先生に早く知らせなければならぬとおもつてかけてきてくれたのだといつて、おくさんは息をはずませていました。

私は瞬間、ひやっと身のふるえを感じましたが、とつさに書籍や文書の整理をはやくしなければならぬと気づき、おくさんとともに、いそいで帰りました。さっそく整理にかかったが、こうしているうちに、ふみこまれるのではないかと、気がかりあせりました。書物を下の押し入れにかくし

てもらい、やっと安心しました。部屋の中をみまわしてこれでたすかったと大きな息をつきました。おくさんは心配そうに「先生大丈夫ですか」ととわれるので、私は「大丈夫です。覚悟していますから」といったが、やはり胸の中は早鐘のようになわいっていました。そして、いづれよりの検挙なのかと不安でした。まもなく二人の刑事がきて、階段をおりた私にむかつて、家宅捜査をする旨をつげると、二階へとんとあがりました。整理後の書籍は左翼のものはほとんどない筈です。文書もないのに、刑事はていねいにしらべて、中の二冊とハガキ一枚をフロシキにつつんで署へのおみやげにしました。

「これから竹原の警察までいっしょにきてもらいます」と刑事はいって私の顔をみおろしました。下着と日用品洗面具を持参するようにいわれて下におりたとき、おくさんに後のことをよろしくたのんで刑事のあとに従いました。学校のこと、生徒のことが頭をかすめて気にかかりましたが、どうしようもありません。

船着き場にて、竹原署の刑事一人と乗船しました。一人は川尻駐在所の巡査でした。

生まれてはじめて留置場にはいつて、冷たい床にすわっている自分を意識すると、なんともいえない物悲しい気持になり、さみしさと憤りに胸がふさがりました。

三畳の板の間にうすいゴザがしいてあります。扉のよこに、三尺四方の鉄格子がはめられていますが、視野がせまくて廊下の土間しかみえません。反対側の高いところに、細長い、あかりとり窓があつたが、周囲は板カベで暗かつた。同じよう

な部屋が四つならんでいました。

千日太計雄氏の妹さん（広島女専の学生）がいちばん奥の監房にひとり残っていることを知りました。（検挙された文学サークルのほかのメンバーは釈放されていた）

就寝時間がきて看守はガチャンと錠前をおろし、せんべい布団によこになりましたが、私はおそくまで、ねつかれません。

朝がきて「お天気がいいから、ちよつと外にだしてください」という千日和子さんの声がきこえました。それにしても兄さんの太計雄氏の姿がみえない。どうしたのかと思いました。

ガチャンと錠がはずされ、私は二階の調べ室によびだされました。みしらぬ小柄の私服がこしかけていて、じろつと私をみました。広島県警の特高刑事が出張してきたのです。そして高師の学生星川鳳一氏との関係について尋問をはじめました。私はしらぬ存せぬで逃げようと思いました。しかしそうはゆきませんでした。「証拠はあがつている」といつて迫る見舞はきびしかったです。

すでに星川氏は広島市で検挙されていて、私との関係についても、あらかたバレていたのですが、私はそのことを少しも知りませんでした。（オルグ滝川恵吉氏のメモ帳が敵の手にわたっていた）彼にめいわくがかからないようにと思つて、連絡場所など適当にうそをいつてごまかしたつもりでしたが、むこうははるかに上手で、私など扱い易くて子供のように思えたかもしれせん。

さらに星川氏に紹介された二人の人物について、さぐりをいれてきたが、私は全く知らない人なので、その通りを答えました。しかし留置場へ

もどつても連絡場所などウソをいった点について星川氏が困られるのではないだろうか、明日の刑事の追及など気にかかつてなりませんでした。刑事はまるで背骨が鋼鉄でできているかと思えるほど、頑として権力の強さを感じさせる人物でした。

「君なんか国体がくつがえせると思うか、全くくつけないだよ」といって皮肉に笑いました。

三日ほどで調書がおわりましたが、私は家族のものに心配をかけることはできぬとおもつて、家には知らせてもらいませんでした。

妹もこのとき文学サークルの件で取調べを受けたことを後になって知りました。

翌朝、私の筆跡と顔写真をとられ、刑事に連行されて署をでました。ゆき先は賀茂郡広署です。

広署では保護室に入れられました。翌朝から、型どりの調書をとられて、三日目の朝がきました。署から川尻校に連絡したものとみえて、松浦校長がむかえにきてくれました。私はさすがにうれしかったが、校長の顔は緊張していました。そしてすかさず、これから郡視学のところへ同行してくれといつて、署をでるとバスにのつて呉駅にむかい、広島ゆきの列車にのりました。

水主町の県庁にはいつて郡視学をたずねると、校長は私を紹介しました。視学は前もって考えていた様子で、「こんなことになった以上学校をやめてもらえまいか」というので、「私は悪いことをしたとおもいませんのに、やめなければならぬのですか」とこたえました。

視学は「君はそうかもしれないが、父兄や生徒に及ぼす影響があるからね。こちらで困るので」といったので、私は「今学校をやめると、たちま

ち給料がはいらないので、生活にこまるのです」とこたえました。

視学はかさねて「では、これから先、思想運動をやめますか、それともつづけてゆくつもりですか」と問うてきたので、私はちよつと考えましたが、「それは今後のことですから、いま返事ができません。じぶんでもわからないのです」とこたえました。視学はそれ以上何もいみませんでした。かえる途中で校長は、当分学校を休んでくれというので、「なぜですか。私は一日も早く受持の生徒に会いたいです」と反問すると「とにかく休んで家に帰っててください。そうしないと困るので」とたのむようにいわれて、私は承諾しました。

もう一週間も生徒の顔をみていないので、早く出勤して話がしたいと思いましたが、しかたがありません。下宿のおくさんのホツとした笑顔をみて、私のことを心配してくださっていたのだと、おもしろい感じました。

しばらく家に帰ってくるからと、後のことをおねがいし、また畝井青年にも伝言をたのんで、私は竹原に帰りました。

広島地方検察庁から呼出しの通知がとどいたのは、やはり冬休みの期間中だったようにおもいます。

検事は調書をみながら訊問をつづけましたが、調べが進むにつれて、10・30事件の余波をうけたことが推測されました。

10・30事件の内容は、記事が解禁になってわたったのだけれど、この事件は昭和七年三月五日の

3・5事件で破壊された広島県共産党組織の再建が計られ、そのために活動した党の幹部オルグ綿織彦七氏のメモから県下の組織が判明し、つぎつぎと検挙の手がのびていった事件です。県下で五九名の同志が検挙されました。

私が出広して星川氏を訪ね、最初にひきあわされた青年は広島高等学校（旧制）の学生吉田司氏で、広島共青同盟の責任者でした。つぎに吉田氏によって紹介された人物は、中国地方オルグ滝川恵吉氏でした。

結局この事件で私は起訴猶予の処分となり、終ったのです。高師の組織は壊滅し、星川氏は退学処分になりました。

もし、新興教育同盟本部からの激励と文書の送付がなかったならば、私は挫折していたかもしれません。苦しさからのがれようとする性格のもろさは自分でもよく知っています。そして教育者としての能力に欠けている自分を省みて、あっさり退職したらどんなに清々するだろうと思ったりしました。

このころの『新興教育』誌については殆んど記憶がうすれていますが、昭和七年秋ごろより、しばしば発行禁止がつづき、昭和八年六月号が発行されるまでには、実に五ヵ月間の休刊状態がつづいたのです。その間をつなぐものとしては『新教同盟準備会ニュース』がでていました。

昭和七年八月の同盟員数四二五人でしたが、相続く弾圧によって昭和八月三日までに同盟員数は半分にはへったという。長野県支部の「赤化教員弾圧事件」は昭和八年二月でした。検挙人員一三〇名、起訴者七十七名です。

この厳しい情勢下において、財政、組織、編集活動に困難を生じ、「新教」独自の活動が各方面から批判されましたが、討論に充分な時間をかける暇もなく、危機に直面した「新教」は「コップ」加盟の「プロレタリア科学同盟」に合同することによって、文化戦線の統一強化をはかるという方針が打ちだされました。

そして遂に『新興教育』六月号を終刊号として、七月二三日ひらかれた拡大執行委員会において「科同」への発展的解消が決議されました。

「組織の、特に地方支部組織の破壊的弾圧による痛手が大きく、合同によって相互的に補強されたことはたしかであった。しかしそのため『新教』が独立した文化教員団体として、存続すべき独自性、特殊性まで否定したことは、理論的にも実践的にも誤りであったであろう。実際にも、合同後の『新教』系の同盟組織は、これまでの『新教』の活動のほかに、『科同』の活動が加重となって、同盟員の教育的活動に停滞をおこさせた」（『新興教育』復刻版第七巻月報 土屋基規氏記）

階級闘争の道へ

昭和八年（1933年）九月、私はフロシキ包と手鞆をさげてこっそりわが家をでたのです。そのときかぞえ年二五歳になっていました。妹にあとのことをたのんで竹原駅から上り列車にのつたけれど、年おいた祖母と母のなげきが目にみえるようで、すまないような暗い気持ちにおおわれま

した。しかしこれからの活動をむねにえがいて、つとめて後をふりはらい、うつりゆく窓外のけしきをぼんやりとながめていました。当時はまだ呉線が全通していなかったので、山陽本線三原駅で下り列車にのりかえ、山あいのゆるい勾配を八本松駅までのぼりきると、今度は瀬野川駅まで下り坂でした。

三時間あまりかかって広島駅に下車した私は、市電の土橋停留所から路地をちよつと入った所の、あらかじめ決めていた下宿におちついたのです。

さる（昭和8年）三月に、私はプロレタリア文化連盟（コップ）加盟の新興教育同盟に加入して、その関係で最後の赴任校となった豊田郡中野小学校を退職させられたのです。

退職後の私は四月から竹原町の実家にかえり、母の厄介になっていましたが、昭和七年ごろから竹原でひらかれていた文学サークル（プロレタリア作家同盟―略称ナルプ―所属）のメンバーとなり、文化啓蒙運動にたずさわっていました。

当時「ナルプ」の責任者は堀哲二氏でした。彼は私に、広島市にでて文化運動に参加するよう再度勧めていたのです。母のすすめる強引な結婚問題のこともあって、私はついに出広を決意したのです。以後私は堀氏（本名は國本金夫）の指導下にナルプ再建運動に従事することになったのです。

階下には中年の労働者風のおばさんがすんでいましたが、就職口をさがしにでる私を何か好奇の目でおっているようにおもえました。

一方プロレタリア作家同盟（ナルプ）広島地協

の相談役、南部達三氏に連絡できたので、目抜通り八丁堀の喫茶店でおちあつたのです。彼とは家出前に下宿さがしをかねて出広の際一度お会いしているのですぐその人とわかりました。それに子供のときの事故で足をケガして、つえをついていられるので痛々しい感じがしました。ナルプの再建のためにまず同志の獲得をはからねばならないこと、会合やニュースの発行などについてはなされる、彼のジミな口調に耳をかたむけました。おちつきのある純情な人におもわれました。そしてつぎの連絡をきめてくれましたが、その後私の就職口がみつからず、おちつかない日がつづいていました。

こうしたある日、私は堀氏の連絡指示により、党中国地方広島県オルグ関谷源一氏と西練兵場の広場であうことになりました。

関谷氏のペンネームはわすれてしまいました。が、党のオルグであることなどもちろん知るはずもありません。ただ上部の指導者で、全協の人ではないかとおもったのです。というのは私の就職のことなどたずねて、「工場にはいつて婦人労働者の組織をつくるように」といわれたので、組合の指導者であると想像したのです。

彼は国防色のレインコートに烏打帽をかぶり、どこにでもある、めだたない服装をしていましたが、ずいぶんふけてみました。石にこしをおろして西陽をうけ、あちこちに遊んでいる子供たちに目をやりながら、非法法活動の注意点や、組織づくりなどについてはなされたように思いますが、よくおぼえていません。

人がみたらデートを楽しんでいるようにおもえ

たかもしれません。私もごく普通の服装でモスの単衣羽織をきていたと記憶しますが、それだけに危険性もすくなくたようにおもわれます。彼はつぎのときの連絡を告げて足早にさつてゆかれました。

竹原の妹からの信書は、私の下宿へは直接よこさぬように、紙屋町のある友人宅に届くようにしていました。ある日そのアドレスにたちよつてみると、妹からの回送郵便封書がきていました。それは、おもいがけないものでした。

10・30事件で退学処分になった「新興教育同盟 広島支部・高師班」の責任者星川鳳一氏からのたよりで、高師の寮で会いたいから何日何時ごろきてくれと記してありました。退学以前の星川氏は広島高師國漢科の学生で、愛媛県の人でしたが、私が川尻小学校に在職中に「新教本部」よりの連絡で、広島市の彼の下宿を訪れたのでした。

一年ぶりで彼と再会できるとおもえば、さすがにうれしさがこみあげてきました。

当日高師の学生寮に彼をたずねて会うことができたのですが、そのときの印象はあまり鮮明ではありません。さすがになつかしくて、その後のことをお互いにいろいろ話しあいました。はなしてゆくうちに、彼がいまでは組織からはなれていることを知ったのです。そしてこれからの前途について迷っていられるようにみえました。ふたたび党活動に入る勇気があるようには思えませんでした。

彼は没落したのではないだろうか。たしかに没落だともったとき、私は失望しました。くやしかった。彼にとつて退学処分は決して小さいこと

ではないだろう。しかしそれにしても、学生運動のもろさをひしひしと感じたのです。そのとき彼から、明後日の日曜日に縮景園（浅野の泉邸）へゆくことを、さそわれたので、約束してわかれました。帰る途中も彼の弱さを思つて、悲しい気持ちになるのです。

そしてその晩考えた結果は、組織からはなれた彼とあつてもしかたがない、ということでした。またその反面、会つて今一度組織につくよう激励しようかとの思いが胸を往復しましたが、私の若さによる一途な気持は全くそのゆとりが持てなかったのです。自分は今、道草している時ではないと、甘い気持をはねのけて、直ちに速達ハガキをかけたのです。「当日は仕事の関係で ゆかれないうことになったから 失礼します。」と諒承を求めて朝早く投函したのです。

これで星川氏との連絡は断たれたのですが、一昨年、昭和四十九年（1974年）八月末、かつて「新興教育同盟」中央部で活躍していた小田真一と再会することができて、星川氏との消息が必要になったのです。郷里である愛媛県川之江町を知り電話したところ、義妹の方が電話口にてられて、星川氏がすでに他界していられることを知ったのでした。

昭和八年の秋、広島高師の学生寮でわかれて以来の星川氏の足跡をここに記すことによつて、御冥福をおいのりし追悼の意をあらわしたいとおもいます。

昭和七年の10・30事件で検挙された星川氏は、刑事の苛酷な拷問をうけ、精神に軽い異常をきたし、東京の精神科学研究所に半年ばかり入院加療

されました。退院後の昭和八年秋広島を訪問されたいに、高師学生寮で再会したのだとおもいます。それから東京読売新聞社や保険会社に勤務されたのち、大阪で出版関係の仕事につかれました。

昭和二年（日中戦争勃発の年）川之江に帰り家業（印刷業）に従事。翌一三年結婚されました。

昭和十四年（第二次世界大戦はじまる）、広島高師教授の紹介にて、漢口政務訓練所の特務機関に就職、北京に渡られる。北京の新民学院大学の教官として勤務。

昭和十五年現地召集にて出征。

昭和十九年一二月中支方面にて抑留、敗戦。

昭和二十一年四月復員後、住友化学工場並びに青年団の講師。

昭和二十四年、漁業会の会長に就任。

昭和二十七年、川之江町長に当選。

昭和三十〇年、愛媛県会議員に当選、一期勤務。

昭和三四年、川辺江町周辺町村合併が成り市制がしかれて市長に当選、一期勤務。脳卒中にて倒れられ、心筋梗塞で療養中も新聞などを出版された。

昭和四十七年七月九日、再度の脳卒中で永眠。享年六三歳。

もすこし清潔なところへ引越さなければならぬと思ひ立つて、竹屋町あたりをさがして二階の一室をかり、すぐに引越しました。今度の下宿は八丁堀の停留所にちかく、市の中央に位置していたので便利もよかつたのですが危険もあつたわけですから。まもなく就職した工場へも徒歩でかよえます。

た。私の生活費は妹が少しずつ送金してくれましたが、一ヵ月二五円位だったように思います。食事は外食で炊事はしませんでした。八丁堀のばか盛のうどんが五銭で、カレーライスが一〇銭でたべられたので、もっぱらここで食事をするようにしました。焼芋を三銭買って昼食にすることも度々でした。

そして間もなく新聞広告をみて、幟町の製菓工場に就職したのです。

小企業で従業員が三、四〇名位いました。建物も、道路がわからなければ、普通の家で、うらに長く仕事場がありました。暗くてそまつでした。大半が若い女性です。男の従業員は少数で製造工程にたずさわっていましたが、「鶴の巣こもり」とか「人参飴」「乳菓」などの製品を、ひとつひとつ包装紙にくるんで、箱づめにするのが女工の仕事でした。

粉がまうのでタオルで頭を包み、白い割烹前掛をあてて終日手を動かしました。私は時計が必要なのでいつも持っていました。腕からはずして、ふところにしまいました。時々監視がみまわりってきて、目をひかしました。熟練工があざやかな手つきで包装する仕事よりは、私の目をみはらしました。

私は手技は上手な方でしたが、この早さではとても一朝一夕には出来そうにありません。年季が必要であると思いました。私は早く包もうとして焦り、しわになった包紙をいそいで前掛のポケットにかくしたものです。

となりや前の女工さんの話に耳をかたむけましたが、映画俳優のことや服装や化粧、恋愛などの

話ばかりで、容易にその話題の中に入ってゆけません。それに新米なので、えんりよもあるし、性格も内気で、黙っているばかりではいけないとおもいながら、どうしようもない有様でした。

もうすこし時日がたてばなれて、そのうちに友達もできるだろうと腰をすえましたが、何よりも労働の激しさに身体がつかれて、早くから睡眠をとらなければ、どうにもならない状態でした。

日給はたしか四五銭だったとおもいます。教員時代の月給は四〇円だったのですから、とにかく安い賃銀です。昼食は弁当持参の人がほとんどでしたが、私はアンパンを買うか外にでうどんを食べました。

やっと終業ベルがなり、身なりをととのえて、帰路につく女工さん達の顔は若やいで足がはずんでいました。休みの前日などは、明日の予定をたてて如何に過そうかと、うれしそうに話しあっていました。私は少しでもその雰囲気の中に、はいると努力しました。一週間もすると、大分なれて少しは口出しできるようになりましたが、でもなんだかきこちなくて不自然さを感じ、中々困難な仕事でした。少しでも話せる友達をみつければと毎朝自分を励まして出勤したのです。

しばらくして小林さんという友達ができました。いつも彼女のとなりに腰かけて、日常のことや不平不満などについて、話しあえるようになったときはうれしくて希望がわいてきました。

午後の長い仕事の時間には、お腹がすいて手もとの菓子が食欲をそそのめます。あたりの気配をうかがい、小林さんと、めくばせしてすばやく口にいれて下をむき、口をうごかさないようにして

食べましたが、人参飴などとてもおいしかったのを覚えています。「鶴の巣こもり」は市中では一個二銭もする高級菓子だったし、ふわっとして大きかったのでも口になどいれられませんでした。

小林さんは市内白鳥町の人で家から徒歩でかよっていました。年齢も二二三歳くらいで服装も地味で態度もおちついていました。その後、ずっとしたしくなり、労働者と資本家の関係、その搾取形態など具体的にはなしてゆき、婦人労働者のあまりにも安い賃銀差別などについて語りあいしました。

プロレタリア文化連盟出版の月刊雑誌「働く婦人」やプロレタリア小説を与えて読書をすすめ、組織についても話をしたのでした。

プロレタリア作家同盟（ナルプ）の責任者国本氏は田舎から出広しておちつくことになりましたが、その下宿さきは不明でした。

またプロレタリア科学同盟中央からの指示により、広島市在住の数本英次郎氏と連絡をもつことになったのです。なぜかといえば、私の属していた「新興教育同盟」が解消して、「科学同盟」に合併されたからです。「新興教育同盟のたちおくれが批判され、その原因はマルクス・レーニン教育理論を科学同盟の活動の一部として研究をする、という方針がたてられなかった点にあるという風」に、理論づけられました。そして「新教」の「科同」への発展的解消によって、教育学発展へのみとおしがたてられました。

参加が決定したのは、昭和八年（一九三三年）八月二五日でした。その結果「科同」からの連絡

でおくられた略図をみて、舟入町の数本氏の家をたずねたところ彼は在宅していて喫茶店につれだち、広島での科同再建活動について色々話をしました。

10・30事件の弾圧により壊滅したコップ（プロレタリア文化連盟）の支部再建をめざして、みなそれぞれの部署で活動していました。コップでは機関紙『文化の旗』、ナルプ（プロレタリア作家同盟）では『再建ニュース』が、ガリ版ずりで出されました。

「科同」では『批判の武器』と題する原稿を数本氏が書き、私の下宿でガリ版にかけました。また読書会がもたれて週に一回くらい集っていたのです。場所は小網町の同志の下宿だったとおもいます。

『第二貧乏物語』や『経済学入門』をテキストにして、リーダーは数本氏でした。私は出席はしたけれど、昼間の労働につかれて、ついでゆくのがやっとでした。ともすると、睡魔がおしよせるのです。

ナルプの活動で、私はある日楠木町の文学サークルの会合に出席しました。四、五人の若い労働者が集っていました。ゴム工場にはたらく人達でしたが、そのメンバーで『黒潮』と題するサークル雑誌をだしていました。内容は詩がほとんどで川柳や俳句なども出ていましたが、荒削りで若者の意気を感じられるものです。

この集まりの、この声の中から真実を知ろうとする熱い革新の芽が伸びてゆくのだと思います。

この集会を大切にして、私も出席を怠ってなら

ぬと次の連絡を約束して夜道をいそいだのです。

次回、紙屋町の連絡場所には木原と称する青年が来ていました。この時私も何か書いて持参したように記憶します。彼等の合宿の部屋には木綿のせんべい布団が一隅に重ねてありました。殺風景な部屋でしたが、その中に真白いカバーをかけてふんわりと軟かそうな布団が一重なおいてありました。

「木原の布団はブルジョアの布団みたいじゃない」と若者の一人がひやかしたので、みんなドツと笑ったものです。

木原君はキャップ格で感受性の強い純情な青年のように思えました。布団は最近田舎の母が送ってくれたのだと弁解していました。

私はよく八丁堀の繁華街を通りましたが、電車通りに面して映画館「東洋座」と「太陽館」が二つ並んでいて、華やかな絵看板をかかげて大衆によびかけていました。入江たか子主演の「美しき天」の題名だったと思える顔写真がかざってありましたが、その輝くばかりに美しい容姿を眺めて、これが普通の生活にいたら、組織の中の身でなかったならば、すぐに入場しているのと同じく足早に通り返すのです。今の自分とは全く別世界の生活で、縁のないものだと思ひ自禁に厳禁していたのです。

赤色救援会のカンパ活動で、その責任者小寺英雄氏と時々街頭連絡をしました。文化運動の同志から集金し、私の乏しい財布から許す限りの資金カンパを手渡しました。

小寺英雄氏は厳島の人で、10・30事件で起訴猶予、出広して救援活動一筋に果敢な闘争をつづけ

られました。

舟入町に消費組合があることをかねてきいたので、ある日場所を探して、組合の常任追極盛登氏を訪ねました。

まだそのころの消費組合は合法性を保っていたので、誰でも出入りできたのです。どんなことを話したのかよく覚えていませんが、多分組合の規模や活動などについて話をきいたのではないかと思います。

事務所を出た時、私は刑事に尾行されていることを全然知らなかったのです。後から考えてみて、合法的な消費組合が私服刑事に張られていることは常識で考えてもわかるはずなのに、私は全然気付かず未熟だったといえます。又迫栴氏も注意して下さらなかったのです。

その結果下宿まで尾行されて、私の住所を知られてしまったのですが、この失敗の経験は初めてのことでした。下宿の前に背広の人がたっているのを玄関の格子戸越しに見たり、また街角に往復する姿をみかけたりするようになって、これはおかしいと感じたのです。私服につけられたとすると消費組合にいった時よりほかには考えられないことだと後悔しました。しかし私はまだそんなに重大なこととは思わなかったのです。私の仕事の程度、つまり文化運動だけという甘さがあったのだと思います。うかつなことでした。そして文化関係の同志達が、次第に私の下宿に出入りするようになっていました。

このころ『赤旗』と『共青新聞』（非合法出版）を国本氏から渡されて読んだように思います。「読後は必ず焼却すること」この規則は厳重でした。

明けて昭和九年の正月を迎え工場は休みでしたが、私は郷里にかえりませんでした。三次地区から出広して救済会とコップ関係の活動にたずさわっていた大塚猛雄氏を通じ、十日市町在住の中村芳朗氏をしたたのです。そして国本氏をむかえてナルプの会合がもたれました。三次地区では数名の同志の意識も高く弾圧後の再建運動が徐々になされている模様でした。三次町は県北の町で社会運動の歴史も古く、大正七年県下で最初の米騒動が発生した場所なのです。労働争議も三、四件をかぞえ、芸妓の自由廃業問題の公判闘争は有名です。前年(昭和8年)一月の弾圧で、同人雑誌『暁』が出版法違反に問われ、中村芳朗、藤原勇を中心とする同志十数名が検挙されたのです。

正月三日には職場の小林さんの家を訪問し家族の人にも紹介してもらったのしい一時をすごしましたが、なんとなく家族関係の底に複雑なものがあるように感じられました。

製菓工場の賃銀は少しもありません。不況は深刻だったのです。こうしたある日、鶴見橋通りの缶詰工場では日給五五銭をくれるという話をきいてきた友の一人が、「なんでも職場をかえよう」といいだして、小林さんをふくめて相談していました。日給が一〇銭もたかいことにひきづられてしまったのです。しごとの性質や、労働の量など検討することもなく一決したので、私も同調してしまいました。竹屋町の下宿から近くもあるし、せつかくの友達と、はなれることはできなかったのです。

缶詰工場ではミカンを蒸して、皮をむく仕事でしたが、木箱なども運んだりしました。水がかか

らないように、ゴムのエプロンをしていましたが、足には水がかかって、とてもひえました。立ちしごとなので大変苦しい仕事です。この重労働で第一日目は体全体が痛みました。

なれるに従ってすこしは楽になったけれど、凍るような寒さに手足がひえて辛抱できないほどでした。どうしてここに職場をかわったのかと後悔したのは私だけではなかったのです。小林さんも他の人も「寒いわ」「手が凍るようだ」といっては手袋をはずして、いきをふきかけるのです。

でも工場づとめになれている友は、私よりみんな若くて体力がありました。下半身のひえこみに私は体調をこわしたようでした。

一方、私の下宿でおそくまで仕事することの多かった国本氏は、身の危険を感じたのか「この下宿もそろそろ転宅した方がよいのではないか」と注意したので、下宿さがしにでかけ富士見町の通りに面した駄菓子屋の二階をかりて引越しました。玄人あがりらしいおばさんが一人住んでいた。私は下の台所で炊事をさせてもらうことにしました。あたらしい下宿は秘密にしていました。が、国本氏はガリ版など運んできて仕事をしていました。

広島冬の冬は七つの川のデルタ地帯で、北からの川風がふいてそのさむさは想像以上です。工場ではあいかわらず水仕事がつづいているのです。私はどうもカゼをひいたようで、体が熱っぽくてだるかったのです。

朝おきあがる元気がなくて、二三日仕事をやすんでいた時(三月にはいつていたと思う)二三人の私服刑事にふみこまれて、家宅捜査をうけ

て、いや応なしに拘引されたのです。警察ではなくて西練兵場内の憲兵隊でした。そのとき私の下宿にいた国本氏もいっしょでした。なぜこんなところに検束されたのかいもく見当がきませんでした。暫くして、反戦運動の嫌疑をかけられたのだと想像がついて、やや安心しました。しかし、始めはおどろいて体がふるえたほどです。まさか憲兵隊には思ってもみなかった事でした。

三日ほど留置されて調べられ、嫌疑は晴れたけれど、そのあいだ若い兵隊が上官の命令にしたがって、私を監房から出したり入れたり、食事を運んだり、トイレに導いたりしました。一間ほど離れたところで、姿勢を正して監視しているのです。キビキビと軍隊調に行動するのを見て、命令と服従に律せられた軍隊の厳しさが肌身に浸透したのです。

街頭連絡もとぎれ、体の調子も余りよくないままに工場を退いた私は、故郷のわが家へ一度帰って精気をやしなうことにしました。日がくれてからこっそりわが家の玄関をまたいだのです。さすがになつかしく、祖母の姿をみて私は涙ぐみました。母も何もうずむかえてくれました。

憲兵隊に連行されたことなど、だれも知るはずがなく、私がずっと家に帰ったものと思いきや母と祖母は安心した様子で、こまめに動いて御馳走してくれました。このあたたかい肉親の愛情に私の胸はうるみ、甘えたいような脆さが私の身を包んで、どうしようもない安易さの中にいたのです。

竹原の文学サークルは細く長く今でもつづいている模様でした。妹には広島での出来事を話して、

また出広しなければならぬことを告げました。

外へは一步もでませんでしたが、陽春の息吹きが私の気持ちを和らげてくれ、若葉の緑が身も心も洗ってくれました。居心地のよい、しかしおちつかない生活の中で、私の腰はなかなか上りません。でも、いつも組織のことは頭をはなれなかったのです。

漸く思い切つて身のまわり品をフロシキにつつみ、こっそり家をでたのは四月も半ばをすぎようとしていたと思います。また母と祖母の期待を裏切つて、悲しみを与えてしまった自分をかえりみて、沈みがちでしたが、でも仕方のないことだと、情熱の炎をかきたてました。

下宿について国本氏に連絡したら「どうも弾圧の危険性が濃いうだ。憲兵隊への検束もその前兆だともう」といつていました。

つぎの連絡では、このままの状態では危いから「田舎の家に暫くいつて様子をみよう」ということになり、私は彼の提案に同意しました。賀茂郡高屋村の彼の家に滞在中、4・26事件、つまり昭和九年四月二六日の広島県共産党組織にたいする一斉検挙の大弾圧を私達は全然知らなかったのです。

そして五月一七日について特高にふみこまれて広島市宇品警察署に検挙されたのです。

宇品警察署の留置場は思想犯であふれていました。私はその晩は保護室に四五人の同志といっしょにおかれました。いろいろの思いが頭をよぎつて、ほとんど眠られない夜があけると、男の同志たちはそれぞれほかの房にうつされたので、保護室は私一人の専有になったのです。すしづめの

雑居房にいる国本氏にすまない思いでした。数本氏もこの留置場にいられている様子でした。

部屋の外にでたときに少しづつニュースが伝わってくるのです。国本氏はどこにうつされたのかさっぱりわからない。その後姿をみかけなかったから、あるいは他の警察にまわされたのかもしれないと思いました。

朝鮮の同志たちも逮捕されていました。彼等はカッケが重くて手足がしびれ唇の感覚がないほどで、オリザニン薬を買ってくれと要求していましたが、看守は「買えん」と一喝して応じませんでした。つぎにはヌカを買ってくださいと毎日のように嘆願して漸く応じた様子でした。

ある日そのうちの一人が拷問にやられて、立てなくなり、刑事にひきづられて房にもどつてきました。手当もほどこされず、監房はひっそりと静な拷問がおこなわれたのではないかと想像して、くらいかなしい気持ちになりました。

留置が長びく監房生活の中で、彼等朝鮮の同志と話しあう機会がもてたとき、彼の生いたちや朝鮮の学生生活、日本での生活、階級意識の自覚から朝鮮独立の希望へと、つぎつぎと話してくれました。その同志は頭脳のよいまじめな青年だと感じしました。在広朝鮮人青年会のメンバーでしたが、今ではその姓名を忘れてしまいました。

昭和九年八月一日ついに私は、起訴処分になったのです。釈放を期待していた私にとっては大きな衝撃でした。どんなに叫んでも、もがいても外にはでられない。ゆくさきはひとつだけ。吉島刑務所の未決監でした。

暑い日でした。護送車にのせられて御幸橋をわたり、吉島刑務所の門をくぐった私は、不安とかなしみにうちひしがれていました。車からおろされた所で、ナルブ（プロレタリア作家同盟）の同志、南部達三氏に会ったのです。彼は不自由な足でつえをつき、私の方をみてニツコリとわらつたが、あの体で未決生活をしなければならぬ彼のことを思うと、自分の完全な身を省みてここでへこたれてはならぬと心をひきしめたのです。

背丈よりずっと高い土塀を二、三まがつて門を入ったところが女監でした。囲いの中に一間四方のと二間四方のと、お堂のような建物がポツンポツンとならんでいます。中の二軒の広い方が雑居房で、左右の小さいのが独居房で六個たっています。門の正面に看守室とフロ場などの建物があり、下は砂がしきつめられて、その上をザクザクと足音をさせて看守が巡視するのです。

女監の看守は年配の女が二人いましたが、非常にきつい目をしているのが印象的でした。黒紺の着物に同色の袴をつけ、麻裏草履をはいていました。

一通りの手続きがすんで、つぎに衣服の前を全部ひらけということです。私はそのいみがわかって、おどろき拒絶しましたが、規則だからそうしなければ監房に入れられないと強きうので、しかたなく従ったのですが、まだ未決なのに、この人格を無視した行為にやりきれない惨めさを感じました。

囚衣は着なかったが、細い紙紐を一本渡され、それで着物の前を合せて結んだのです。八番の番号をつけられて、左側北角の独房にいれられました。

た。縦、横、高さ、一間（約二メートル）立方の

小さな部屋なのです。北面の真中に三尺四方の鉄格子があり、左側のフタをあけると便所で、右手に木箱の食膳が置いてありました。左手の後は小さな出入口とのぞき窓、板壁を背にしてすると、右隅に重ねられた紺木綿の布団が、手にふれるほどの狭い箱部屋でした。ここがこれからの新しい私の住居なのです。

いつごろまでいることになるのだろうと思って目頭があつくなり涙をふいたのです。

刑務所の夕食ははやく、赤い衣服の女囚がくばってきましたが、その異様な姿をはじめてみた私の驚きは大きなものでした。隔離されたこの生活は全くシヤバとはちがつている、暗い陰うつさがただよっていました。

食事は丸い型におしかためられた麦飯で、口にいれるとポロポロとこぼれてしまつて、のどを通らないのです。無理におしこめようとしたが駄目なので、おかずだけ少し食べてはしを置きました。みまわりにきた若い看守長が、格子ごしに「なぜ食べんのか」と詰問するので「のどを通りません」と正直に答えると、たたみかけるように「せいたく言うな」と一喝して去ってゆきました。

朝の点呼で「八番」とよばれて「ハイ」とこたえたが、まだ自分のことのように思えませんでした。

私は家にあててハガキを書きました。この住居を少ししらせようと思つて「一間四角の箱の中に三尺平方の鉄格子云々」と、詩のようなものがかきいれたら、翌朝例の看守長がやってきて、いきなり「あのハガキはなんだ」「あれが通るか」と

大声で叱つたので私は慄然としました。

かきなおすように、いわれて信書の制限の厳しさをしつたわけです。

しばらくして家からの差入弁当が差入屋をとうして届くようになりました。昼と晩二回の食事はおいしくて、私はもつたいない気がして、他の同志にすまないと思いつつ食べました。また未決では自分のお金で好きなものを買う自由があつたので、間食を買ってもらい、看守の目をぬすんでは拘留中の女囚にも分けてあげました。この女囚たちは色あせた赤い囚衣をきて、こまめに働いていました。庭の掃除をしたり食事のさしいれ、便所のくみとりなどをしてくれました。そして格子窓にすりよつては口早にしゃべつてニュースをしらせてくれたのです。

たいてい、海軍の根拠地である工廠の街、呉市からきた密いんばい（売春婦）の人たちでした。二九日の拘留刑をつとめてでてゆくのだが、またまいもどつてくるものが、かなりいたので、看守は門を入ってきた顔なじみを見て「ふん、おまえまた来たのか」といつて軽蔑の笑をうかべました。そして赤い囚衣にきかえて雑居房につめこまれました。

私はこの人たちの無知で貧しい境遇を思いしました。まともに文字のかけないような、正常な仕事についてゆけない悲しい事情を沢山もつたこの人たちの、おちていった運命を、社会矛盾の中に見るおもいでした。

軍足の不良品をほぐして、その糸を糸巻きにする仕事をさせられていましたが、こんな簡単なことも満足にできない人がいるのです。糸と糸をむ

すぶのに、旗結びをしなければならぬのだが、これができなくて看守にしかられ「八番におしえてもらえ」といわれたと私のところへ持つてきました。格子から手をのばして何べんも教えてあげたが、どうしてもできない若い娘もいました。また、いったんわかつて自分の監房にもどると、すぐに忘れてしまつて、ものにならない人もいました。そのうちに私もこの仕事をする事になりました（未決のものには請願作業といつた）のですが、読書のあい間にするようなことでは、いけないと、つよくいわれたのです。

運動時間は午後三〇分ほどときめられていました。このとき収容人員の半分づつが交替にでて、足早に歩くので、顔みしりになり少しは話ができるときがありました。

ひまわりの花が高く大きくさいていました。炎天のもと、太陽にむかつて誇り高くひらいた姿に、なぐさめられ勇気づけられました。流れる汗を手でぬぐつて、歩いたり体操をしました。三〇分の運動時間は、たちまちすぎて、箱のような自分の監房にもどる気持ちは、やりきれないものでした。

看守室に一番ちかい、二間四方の房に放火犯の人が赤ちゃんをかかえて、はいっていました。近く刑が決定するらしく実刑は覚悟している様子でした。判決がでてかわい子供を手放さねばならぬ心境は如何ばかりかと思ひやつたのです。私にいま少しでも自由がえられたら、赤ちゃんをおもひしてあげるのにと、いつも思い、不自由な親子の監房生活を悲しんだのです。

私と反対側の独房のまんなかに、死刑の求刑をうけて判決をまつているおばさんがいました。恋

人といっしょになって夫を殺したということですが、一見やさしそうな五〇歳くらいの人でした。運動でたとき、看守の目をぬすんで「あなたはいいですね、そこにでられるんだから。私には望みがないのです」と静かにいって顔をふせた。そのさみしそうな姿に私はいうべきことがなかったのです。

この人も平常はごく平凡なおばさんだろうに、前後のみさかいがつかない位、かつこのぼせての行為で、余程の事情だったのだらうと思ひ暗然としました。

秋風の季節となつても私の調べは始まりません。厳しい獄則のもとに看守の目と声におびえながら日課をくりかえす毎日でしたが、ある日思ひがけなく黒パン半個分がくばられました。今ではハッキリ覚えていないが、満州事変にちなんだ記念日だったように思います。

漸く予審廷にでて取調べをうけることになったので、物置にしまつてあつた羽織を着て編笠をかむり、女監をでるとすぐ護送車にのせられました。

他にも男の囚人が沢山のりました。一つ一つ仕切られた席で、みな編笠をかむつていたので勿論誰だか分りません。小さな窓から久しぶりにみる街並みや、人の流れを別世界のことのように眺めたのです。そして隔絶された圜圀の自分を今更のように意識しました。

車からおりると、又地方裁判所の独房にいられ、よびだしを待たなければならなかつたのです。予審室への途中で二三人の同志に会い、数本氏とも顔を合せて互に微笑しあいました。予審判事は色白で中年風でした。広い机の向う

から淡々とした口調で事件について訊問し、割にスムーズに進行したが、予定の所まですむと今日はこれまでといつて次の同志をよびました。私は又独房にいれられて、あとの同志がおわるまで待つていなければならなかつたのです。

一月の下旬近くに私は保釈で刑務所をでることができました。宇品警察に検挙されてより保釈になるまで実に六ヶ月余りの時日を要したが、なんと苦しい体験の連続だったことでしょう。

晩秋の入日は早く、暗くなつてから、ガチャリと錠をはずす音がして、出所をしらされた時は、まるで夢のようでした。インインと所持品を整理して三ヶ月余りの独房生活に別れをつけました。

頑丈な鉄の門がひらかれ、門の外に出されました。街灯の光は淡く、道をへだてて太田川は暗かつた。コンクリートの高塀を右に曲つて帰る道すがらの、このホツとした解放感は何と表現したらいいのでしょうか。自分の足が宙にういて、うそのようでした。自由とは、自由とは、こんなにも楽しいものなのかと胸の中で、くり返したのです。昭和一〇年一月、数え年二七歳の新春をむかえました。

広島地方裁判所で私の公判がひらかれました。例によつて非公開でした。

裁判所の訊問に対して私の陳述はかりにも堂々たるものとはいえませんでした。答えは訥弁で今思ひかえしてみても恥ずかしい限りです。

そして判事はいいました。「君は外面如菩薩、内面如夜叉という言葉が適合する」と。

私はこれを聞いておどろきました。真剣な表情で発言した裁判長の方をじつとみていたが、腹立

ちと同時に、内心おかしくなりました。

共産主義者は彼ら権力者にとつては、みな夜叉にみえるのでしょうか。為政者こそ夜叉ではないかと思ひました。

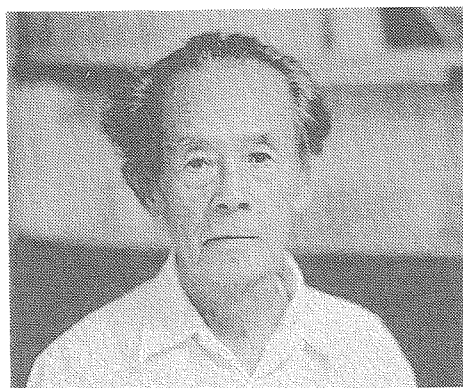
公判前に弁護士を雇う話がでたのですが、私はこちらが弁護士をつけてもつけなくても同じことだといつて断つたので、官選弁護士が立つて刑の軽減を形式的にのべていました。

二カ年の刑罰を課され、五年間の執行猶予を言渡されました。

プロレタリア文化運動にちよつびりたずさわつたというだけで、こんなにも苛酷な刑を課して、彼等は平然としている。世界でも稀な悪法だといわれた治安維持法の刃を思ふ存分ふりまわしていたのです。

その後男の同志の公判が次々とひらかれましたが大抵私と同様な判決でした。南部達三氏、数本次郎氏、広島電鉄の井上栄氏、宍戸年春氏なども二カ年の懲役と五年間の執行猶予の判決でした。幹部級や非転向の同志は拘留が長びき、従つて裁判ものびていました。

〔数本タキエ著『瀬戸内に生きて』(一九七九年・昭和五四年発行)より戦前の教育運動及び文化運動のところを書き抜きました 一九八一年三月九日〕



同志のおもいで

岩佐 寿一

その一

(1)

私は一九一〇年（明治43年）広島市の河原町でうまれた。小学校一年から舟入町の羽田別荘まゝの家にすみ、広島二中を卒業して広島高校を一年で退学するまでいた。

「ふないり、かわらいけ」というところは労働者が多く、また「社会主義者」といわれる人も、子供のころから目についた。

神崎小学校の一年下に岨常次郎君がいた。ランニングが得意で、高等科にすすんでからはスパイ

クをはいではしっていたのをおぼえている。

私の家のまえを広陵中学の制帽をかぶり野球のバットをさげた美少年——私より二年くらい上とおもう——がよく通った。それが柴野利秋君であった。それは大正一〇年代（1920年代）のことである。

のち、一九三八年（昭和13年）のことだが私が出獄したとき、小学校の先生といっしょに、さきに出獄していた岨常次郎君がむかえにきてくれ、思想犯保護監察所の自動車にのせられてそこにゆき、そのとなりの丙子会にゆくと書記をしている柴野利秋君に再会した。岨君は共産青年同盟の中央委員長で検挙され、柴野君は文化団体の関係で検挙されたのだった。

大正年代の一〇年ごろは社会運動がもりあがったときである。神崎小学校にも青年団というものがあつて、小学校長の指導監督をうけることになつていた。青年たちが校庭で陸上競技の練習をしているうちはよかったが、青年デーの集會に青年団のものが参加したというので校長の責任問題になった。

私の家のうらてになる家が白井という洋服職人の家で、近所の三宅という菓屋のむすこや「おさん餅」の二宮のむすこなどみな青年団にはいつていたが「社会主義者だ」といわれていた。まだ「あかい」ということはなかった。

青年団の幹事長が「ひのくま」こと日野熊太郎氏で、たしかこの「青年デー問題」で幹事長をやめたとおもう。のちに社会民衆党で活動した。「吉長」こと吉川長太郎氏の床屋もあった。堀川氏の肉屋の店には「よめ労働新聞」というポスターはつてあつた。もひとつの肉屋には厚い近眼鏡を

かけて大きな本をよんでいる青年がいた。のちに水平社広島県連の幹部になった高橋貞夫氏だ。

説教所とかいうところで争議の演説会がよくひらかれたが、佐竹新市氏は演説会の人気者だった。

私が高校の入学試験の勉強をしているころ岨君は労働運動にはいつていた。大正から昭和に年号がかわろうとするころだった。彼は小学校をでると河原町の佐方というハカリ屋の修理工場ではたらいした。父や兄もこの工場にいた。

岨君は賃銀がとれるようになると本ばかり買込んでいた。ほかの者のようにあそびにかねをつかわない。そのころ「円本全集」というのが、はやった。毎月一円づつおくと一冊づつ本をおくってくる。かれは文学全集や戯曲全集、新興文学全集などからマルクス主義芸術理論双書などもかっていた。あるとき『舞台化粧の研究』という大きな本を、かかえてあるいたので私はあきれたことがある。

あるとき、こんなことがあった。本通りの金正堂で私が立ち読みをしていると雑誌の中から紙きれがでてきた。「……の発売禁止に抗議せよ。広島市河原町〇〇番地岨常次郎」とかいてあった。私はそつと紙きれをそのままはさんでおいた。こうした連絡方法はどこでもとっていたようだ。のちに私が神戸にきてから、土地の人に戦前のおもいでをきいていると、やはり本のたちよみでこんな紙きれをみつめて連絡をとりについたとはなした人があった。

東京や大阪などでは労働争議はげしくもりあがっていた。インテリや学生なども、このいきおいに無関心ではいらなかった。

『中央公論』とか『改造』というような綜合雑誌にも「大学の顛落」とか「蒼白きインテリ」とかいうことばがあらわれ、「未来をつくるものは労働者階級である」ということばもあった。

小説などもプロレタリア文学全盛だった。そのころをえがいた小説にこんなところがあった。

「セビロにきちんとネクタイをしめて会合にくるのが労働者で、ナツパ服をきた、いかにも労働者らしいのが、案外インテリ出身だったらしい」そして「労働者というものが偶像のようにまつりあげられていた」。

まもなく「満州事変」をきっかけとしてはじまった反動時代からふりかえってみると、まるでウソのような時期だった。

学生たちも「インテリ性を清算して」労働者の生活にとびこむものが多かった。

(2)

一九二九年（昭和4年）母親が死んでひとりになったので、大阪にでて日雇労働者になった。そして、一九三二年（昭和7年）広島市にかえってみたら、みんな検挙されたあどだった。

おそまきながら、みんなのあとをついでやらねばならんと思った。

昔から心やすくしている奥田という娘にあって、その友達の林という娘の兄貴が郵便局にいて検挙されたときいた。さっそく林という娘にあって兄貴に紹介してくれといった。

〔注〕 その兄貴というのは三滝山事件で玖島・末元・横野などとともに検挙・起訴された林成城君である。まだ、そこまで私は知っていなかった。

林君は岨君のことや玖島三一君のことも、こまかくいせまでよくしっていた。

そのころ私は缶詰工場ではたらいしていた。あるとき赤旗の歌を口笛でふいていると「そのうたを、しっているのか」ときく青年があった。その青年が神崎宇市君のところへつれていつてくれた。神崎君は「じぶんのいとこが玖島だ。」といった。「玖島は転向しないで、がんばっている。来年（一九三三年、昭和八年）の夏にはかえってくる。玖島が検挙されて、おれがさしいれなどしているうちに、モツブルと関係するようになった。この町のモツブルの組織は責任者の木原の駒ちゃんが検挙されてからバラバラになつとる。」……。

こんなことがあったので林君にあったときは私も玖島三一君のことをしっていたのだ。

林君は消費組合にいつて横野君にあえといった。私が消費組合にいつてあったのは迫榊盛登君だった。ともかく組合員になつて米を配給してもらうことにした。

神崎君も缶詰工場にはたらいしているのでまずこを組織しようと相談した。

神崎君は口がおもいが、はなしずきだった。「部落」というものについて、いろいろとおしえてくれた。中野繁一氏「広島県水平社運動史」もみせてくれた。「水平社宣言」もその本にのつていた。「そうだ。われわれは、けものの皮はぐ報酬と

して人間の皮をひきはがれ、けものの心臓をつらく代償として……」

左翼式の文章をよみなれたものには詩的なしみやすい文章にみえた。しかし考えてみれば、漢文式でホンヤク調のギクシャクした左翼日本文をとつばらつて原文をよめば（原文がよめればの話だが）あちらの人間にはしたしみやすく詩的な「共産党宣言」なのかもしれない。

いまはすっかりかわつてしまった福島町のすがたを、かきとめておこう。福島町本通りの両側には見上げるほどの松の木がたちならんでいた。昔の街道筋のなごりである。松並木は市外の草津にもならんでいたのだが、福島町ではみちばたの家ののきさきも、松の幹のまわりだけあなをあけて、屋根をふいているところもあって、まるで松の木が屋根をつきやぶって、空にのびているようにみえた。

東の方は川添川をへだてて天満町があり、西の方も己斐川をへだてて己斐町があった。

としよりは今でもこの福島町を「むら」とよび、川からむこうを「まち」といっていると神崎君はいった。

「むら」から「まち」の家にいっても、昔は家のなかにはいることはゆるされなかった。人の手から物をうけとることもできない。なげてもらつてひろうのだ。

そして、この「むら」のなかも松並木の街道——本通り——をさかいに、「かみ」（川上のほう）と「しも」（川下のほう）で、住むものの身分にちがいがあった。（封建時代の身分差別政策はおどろくほかはない）

藩の方からは、こんなおしかりがくる。

「ちかごろ ぞうちよう（増長）し 町人とまぎらわしき ふうてい（風体）をなす」。

雨でもゲタははけない。はおりもきられない。かみのゆいかたも「町人とまぎらわしき」かたはいけないのだ。

「かみ」と「しも」で、住むものの身分がちがうということは、もちろんいまはないと神崎はいった。

「かみ」には靴工が多くすんでいる。自分の家に仕事場をもつて問屋から材料をうけてきて一足の靴にしあげてその賃銀をもらう職人である。玖島もその職人である。かれらは工場につとめるものより時間の自由がきいた。玖島も運動をやっている、つかまると、できてからまた自分の家でコツコツと靴をつくりながら運動をつづけた。靴工で運動に入ったものが多いと、神崎君はいった。これらの職人は「底づけ」だが、そのほかに靴の甲皮だけ専門にぬう職人もある。また靴の商店とか運動具店にかよつてそこで仕事をするものもあった。

私は神崎君につれられて玖島君の友達であるという町内の靴工の家にいつて、あれこれムダばなしをしてあるいた。

「しも」の方には皮革工場や肉問屋に、はたらくものが多い。しかし近代的な、工場主と労働者という関係よりも、親方と子方の関係がつよいようだった。家も「しも」では大きな家があるかとおもうと、その日ぐらしの家がある。「かみ」にちいさな家がぎっしりならんでいるのとはちがっていた。

本通りに昔の街道すじの松並木がのこっているように、この町には昔の「五人組」のなごりもあった。十軒ぐらゐが組になつて当番の家が毎日一銭ずつ組の家からつないであるく。「一銭講」とか「実講」——「十講」とかいった。当番は毎月かわるが、責任者の「十講長」は年一回センキョをする。講のうちのおやじたちがよつて、「来年はだれにしよう」と、たいてい「まわりもち」でえらぶ。

「シンラン上人が死んだ日」とかいうのがそれぞれの組の総会の日だ。組のものが当番の家にあつまり、「にごめ」という小豆を入れた野菜のごつた煮をつくり総会をひらく。十講長が会計報告をやり、十講長の改選をする。

毎日一銭づつあつめた金というのは講内で葬式をだすときの費用のつみたてだ。ここで「安芸門徒」といわれる浄土真宗とむすびついている。

私がそだった舟入町では十講などというのはなかった。衛生組合とかいうものがあるが町内の小ボスが「セワケイ」（世計係）になつて月にいくらか費用をつないであるくだけだ。総会をひらいて役員をセンキョするわけではない。

この福島町でも「しも」のほうでは十講長は町内の「有力者」か「旦那衆」である。総会でえらぶのではない。

もちろんこの町でも熟練労働者はかりではない。神崎君は「おれのおやじは、赤ん坊のおれを背中にくくりつけて、土方仕事にいったものだ」といった。

いまの土建労働者とは、ちがう。土方は親の代からの失業者といつてよいだろう。

福島町本通りには呉服屋や鉄工所があった。し

かしそれは「まち」のものがよそからきてやっているのだ。

この町の子どもが小僧にいたり見習工にいたりして、一人前の呉服屋になったり一人前の旋盤工や仕上工やカジヤになって、この町にもどって店をひらいたのではない。

この町からよその町に働きにゆくのは、天満町、観音町の缶詰工場、それから横川のタビのコハゼをつくる工場に娘がかよっているくらいだった。

それと靴工が町の運動具店で靴をつくっている所へいくらかかよっていた。神崎君は小学校を卒業しただけだが、よく本をよんでいた。

私が舟入町の記念碑よこの肉店で、店番をしながら本をよんでいた青年がいたという、「ああそれは高貞のときやろう。いま全国水平社の呉連の幹部になつとる」といった。

(3)

一九三三年（昭和8年）の夏だったとおもう。消費組合で常任の迫栞盛登君から小寺英雄君を紹介された。小寺君を私のところにとめてくれとのことだった。かれは宮島からモツブル（救援会）の再建に広島にでてきたのである。

消費組合の常任の迫栞君はいつも白いエンカン服をきて、組合員のところをまわって注文をとったり配達をしたりしていた。そのかわり、争議の応援にいたり、検挙された同志の家をまわったり、同志の連絡のなかだちもした。

夏のころ、小寺君は関谷源一君を私に紹介した。

関谷君は「私は全協のものだ」といって活版ずりの『赤旗』をくれた。全協機関紙の『労働新聞』はこないとのことだった。

まもなく関谷君が小川正一君をつれてきた。関谷君のはなしでは、小川君は広島郵便局にたった一人のこった同志で、迫栞君に党への連絡をたのみにきたのだといった。

三篠川上流の河原の木の下で、三人で夜の会議をひらいた。全協広島地区協議会準備会の責任者を小川君にした。小川君はややこがりで無口な男である。そのとき全協地区協議会準備会の機関紙を『再建の旗』とした。あとで関谷君から郵便局内で発行されている機関紙『おいらのたより』をもらった。関谷君のいうのでは、これを郵便局の従業員の家に郵便でおくったりしているとのことだった。

私のかりている観音町の二階がりの部屋はモツブルの小寺君がいるし、全協の連中があつて会議をひらくし、大繁盛だった。

そこへまた出獄したばかりの玖島三一君が神崎宇市君とともにやってきて部落解放闘争のビラなどをすつてくれともちこんできた。全国的な「差別裁判糾弾闘争」の準備活動であった。

玖島三一君が三年の刑を非転向でがんばりぬいて、でてきたのは一九三三年の夏だった。獄中で彼は父親の死をきいた。もちろん死に目にはあえなかった。母親ひとり花売りの行商をしたり、草履づくりの内職をしたりしていた。出獄まぎわに佐野鍋山の転向説明書がでた。獄内でもその印刷

物がまわされてきた。

出獄してみると、いっしょに検挙されたものは、転向どころか解党派のほうに走っていた。解党派の連中は「党の中央はスパイばかりだ」「党のオルグはハウスキーパーをだいてねることしか考えていない。やつらは革命のことなんかあたまにない」などといった。

左翼運動をすれば母親をすて、もぐらねばならない。出獄した今は特高にマークされて、うかつにうごけない。

玖島君は福島橋のそばの吉田靴店で仕事をしていた。若主人の三郎氏は玖島君とは友達で自分の子供に「学」「正一」とつけるような男だ。佐野鍋山の転向説明がでると「学」とつけたのは失敗だったな」といつていた。私たちは学君を「おい転向組」などとかからかった。その後吉田の三郎さんは戦争にいつて戦死してしまった。戦後まもなく福島町の青共の会合にいつてみると、学君が私の顔をおぼえていてくれた。

救援会のしごとをしている小寺英雄君は毎日こまめに、あるきまわっていた。検挙された同志の家をたずねたり、カンパをあつめたり、「赤救ニユース」のガリ版の原紙をきつたりしていた。ニユースをつくるにも、原紙をきるまえにまず下書きをつくり字数をかぞえ、ならべかたを考え原紙をきりながら時間がくればそのままにしておいておく。かえつてきてからまたつづきをきる。まことにキカイのようだ。私はそんなまねができない。原紙に、ぶつつけにきつてゆく。ならべかたや長さなど「でたとこ勝負」だ。いっしょにやらねば

気がすまない。

さてそのときの小寺君のモップルのしごとは、それまでの同志の活動をまとめて点検するようなものだった。小寺君がだすニュースで私たちは、まえの同志たちの活動もすることができた。

「親を説得できないようでは、ひとを説得できないだろうな」と同志たちの家をまわった小寺君はいった。

寺尾一幹君のお母さんは心よく他の同志のさし入れもやってくれた。小寺君は自分で差入れ屋にゆけない。つかまるおそれがある。

市川忍君のお母さんは、むすこの「つみほろばし」と毎日こよみの紙をめくるたびにそれに銅貨をつつんでおく。たまったら、どこかに寄付するといったそうだ。だれがこの母親を笑えるだろう。思想犯の家は近所からつめたい目でみられていた。

市川忍君の公判を傍聴にいったときのことを小寺君は話してくれた。傍聴人がはいつたときは、すでに市川君が「絶対反対だ」とさげんでいた。看守におされて公判廷をでながら市川君は傍聴人にむかって「諸君、日本共産党万才」といった。小寺君も、のどもとまで「万才」がでかかった。「万才」をさげんだら、つかまるとおもってやめた。「そのあとすぐ宮島で自分はやられたのだから、あのとき『万才』をさげんでやればよかった」と小寺君はいった。

堀江明治君の家に私は「消費組合ですが、なにがご用は」と時々いった。おやじさんがいて「まあゆつくりして、ゆきなさい」とかたわらの新聞記事のきりぬきをとりあげた。いつも検挙された

同志たちの記事をそばに置いていた。「むすこたちは、なにもはずかしいことをしたんじゃない。政治犯だから」としずかにいった。そのつぎにいったら、お母さんと姉さんもいた。あれこれ同志たちの話をして「岡本の菊さんもケイサツでひどくやられたそうよ。あんたも用心しなさいよ」といわれた。

その岡本菊次郎君がのちに母親のことをこんなぐあいにはなした。

「もぐつていたころ、くうものがないと、自分の家のうらぐちからしのびこんで米ビツから米をとってきたものだ。すこしづつだから気がつくまいとおもったら、おふくろが握りめしと金をいれたフロシキ包みを米ビツの上においとるじゃないか。あのときはまいったな」

家族たちもたたかっていたといえる。

玖島君のおやじさんは福島町のなかをうろついている特高の山中をみると「おどれ、おぼえとれ」といった。山中は「いや、わしがやったんじゃない」とにげたという。特高係山中刑事はいつも、よれよれのきものをきて福島町をうろついていた。「はいと」（乞食）などいわれても、へらへらわらっていた。昔は騎馬巡査だったという。中国新聞の共産党検挙の記事の下にのっている「殊勲の警察官」にならんでいる山中刑事の写真は口ヒゲをはやした堂々たるものだ。

「これがあの、はいとか」とおもうほどだ。特高ケイサツも芸がこまかいのである。

『赤救ニュース』には木村莊重君の妹、右田美子さんのことのもつていた。広島バスの車掌をしながら、兄やほかの同志の救援活動をしていて病

に倒れたとあった。

ニュースにはまた天津せいさんの救援カンパを訴えていた。彼女は広島専売局の女工のころ共産青年同盟にはいり、検挙されたのちもひるまず活動をつづけ、救援会の仕事で同志の家をまわるうち特高につかまった。しかし転向することを拒んで起訴されて獄中にとあった。「はたちになるやならずの娘の子がのう」といってカンパをしてくれた農民のおやじさんのことのもつていた。高田郡で活動している南小一君たちからの報告である。

『赤救ニュース』には執行猶予ででてきた松本徹の手記がのった。同志たちのことがかいてある。

「市川忍君たちがつかまったのは空家で会議しているときだった。市川君はタバコをいっぶくすった。おちついた態度が印象的だった。みんな逮捕されて警察にゆく途中革命歌をうたう。子供たちが『やあドロボウがうたをうとうとる』というので、みな苦がわらいをした。

「市川君がケイサツの留置場にいるころ、古末憲一君が不審訊問にかかって、同じ監房にほうりこまれた。そこで一晩、再建のうちあわせをして古末君はあくる朝、なにくわぬ顔ででていった」

「寺尾君は留置場を脱走して大阪でつかまった。きびしい警戒をどうして、くぐりぬけて大阪にでたかギモンであった。彼は絶対に名前をいわないのでケイサツは『大方宗太郎』（おーかたそーだらう）とよんだ」

松本徹のこんな手記が『赤救ニュース』につづけてのせられた。

事実とちがうところも多いが、特高がこれをみ

たらだれがかいたかすぐわかったろう。執行猶予でそのころ出ていて、しかも事情をくわしく知っているものとなれば松本徹しかない。特高は『赤救ニュース』を手にいれていた。丸川昇一君が小寺君にカンパした金額が『赤救ニュース』にのつた。『〇××』とあつたのをみてただちに丸川君が逮捕された。

松本徹が獄中で転向したということが外につたわったとき、まだ外で活動していた天津せいさんが「あなたが転向するというのなら、私達の間もこれまでとおもつてくれ」とかいてやった。

「転向したかとうたがうことさえ同志にたいする侮辱だ」と松本徹は返事をよこしたが、すぐ転向して執行猶予でできた。一方天津せいさんはそれとすれちがいに検挙されて、松本徹の返事は彼女の手にわたらなかつた。

小寺君は彼女へのさしいれを松本徹にたのみにいった。徹はいったんそれをことわった。あとで消費組合の迫栲君のところきて「天津のさしいれをしてやろうとおもうからモッブルへ連絡してくれ」といった。

「ここは消費組合だからモッブルのことは知らない」と迫栲君はことわった。しかし、ほつておけないから小寺君に知らせた。

こうして小寺君はしばしば徹とあうようになった。徹の手記もそうして小寺君にわたされたものである。

のちに広島刑務所の第二独居のフロで私が小寺君とあつたとき「松本徹がうらぎったんだ」と彼がいった。

「信じられんなあ」と私はいった。徹とは直接

つきあいはないが、同志を信用しなければ我々の活動はなりたない。

「いや、これは確実なことだ」と小寺君はほとりのフロ場から、カベごしにいった。

(4)

一九三三年（昭和8年）八月二十八日、大阪で全国部落代表者会議がひらかれ、差別裁判糾弾闘争の第一歩をふみだすこととなった。

八月二十八日という日は、明治四年八月二十八日太政官布告で部落民の称を廃止して、一般平民と同様にせうろうのこととした日である。じつさいは、これによって兵役と納税の義務をおわせられたが、明治以来むしろ差別はつよくなった。この日を闘争の出発点としたのは——いわゆる「原点にかえって」その兵役と納税の義務を、差別裁判をとりけさないなら、免除せよというのであった。差別裁判というのは、高松地方裁判所でおこなわれた裁判の判決文に、

「被告が部落民たる身分をかくして一般民の婦人をさそいだして同棲したのは、結婚誘拐罪にあたる」

とかかれていることだ。

全国水平社の闘争方針は、差別裁判をとりけすため、大審院に対して非常上告の権限をもつ国会に請願をおこなうこと、この請願をおこなうため全国から部落代表者が東京の国会にむけて徒歩で行進する、各部落に「部落闘争委員会」をつくり

広汎な部落大衆の参加する組織をつくること、などであった。

「在郷軍人、消防団員は制服をきて請願隊行進に参加せよ」と指令をだした。

当局はあるいて行進することはデモ行進だと禁止した。代表者は一府県二名とせよ、通過する所で二日以上とどまってはならないといってきた。

憲兵隊は軍服をきて行進するものから肩章と軍帽をはぎとった。

九月はじめ広島市の己斐駅（西広島駅）に九州、山口の代表団がついた。駅にでむかえた人々は、「万才」をさけんではならんと申しわたされた。請願隊の代表を先頭に福島町にむかう人々は、道いっぱいになって進んだ。

デモ行進をさせたあつては警察の責任になる。「もつとばらばらになって、はなれてあるけ」「二、三人ひっこめくか」西署特高主任の紺谷がかたをいからせ、番犬のようにうなりながら行列のそばをいつたりきたりしていた。

福島町は一千戸あるといわれ、全国でも大きな部落のひとつであった。この町の部落闘争委員会は玖島三一君を中心に青年たちでつくられていた。前から水平社運動をしていた人も第一線からしりぞいているか、「まち」にでて店をひらいていた。

玖島三一君が請願隊の広島県代表としてゆくことになったので、私が部落闘争委員会の書記になった。関谷源一君とは週に二回連絡をとることにした。

関谷君も小寺君も私も部落問題をまったく知らなかった。関谷君は『無産者政治教程』をよんで

いたので、すこしはわかっていたかもしれない。
全国水平社本部は「部落闘争委員会は広汎な部落大衆の参加するものにせよ」といつていた。

そのころ本屋にうられていた本に「再建後の左翼労働組合運動」富田波巖太著（プロバガンダ著）というのがあった。たいていの同志がよんでいた。それには「闘争を下からもりあげる」ということについてこうかいてある。

「大衆は自分のふところから組合費や闘争費をだして、はじめてその組織や闘争に関心をもつ」
「現場の班とかグループなど小さな組織から闘争をつみあげてゆかねばならない」

「下からの闘争でゆこうで」と青年たちでいいあっていた。

「これから闘争費用もだいぶんいる。毎日『一銭講』といつて、一銭ずつつないでいるのだから、そのついでに五厘ずつ費用をつないでもらうことにしよう」

「そのためには、十講をひとつずつ座談会をやつてまわつて、こんどの闘争のことを説明せにやるまい」

「十講長のなかにも力こぶをいれとるものがあるで」

青年たちが「十講座座談会」のピラをはつたり十講長たちに交渉したりした。そして毎晩講の人たちにあつまつてもらい差別裁判のはなしをした。青年たちが多くをいわなくても、差別のことはおじさん、おばさんのほうが身にしみてしつてのことだ。となりの十講長が大いにかたることもある。座談会の結果、各家から一日五厘ずつ、十日

ごとに五厘ずつ十講長があつめて青年会館の闘争委員会へもつてあつまることに話がおちつく。

職人とか労働者ばかりすんでいる所は、わりあい十講座座談会や五厘カンパの話がうまくすすんだ。ところによつては、「かねもち」の家と「その日ぐらし」の家がまじりあつてゐるが、そんなところでは、うまくゆかなかつた。

請願隊にくわつて行進している玖島三二君からは毎日のように報告がはられてくる。カーボン紙で二枚ずつかいて、一部は全水県連幹部の中野繁一氏のところへ、一部は青年会館の闘争委員会あてに送つてくる。中野氏は玖島君の手紙をあちこちら削つて青年たちの方にまわしてくる。

特高に文句をいわれそうなところはニュースにのせないようにというわけだ。青年たちは玖島君の手紙をそのままニュースにのせた。

「戦争反対」（当時全国水平社本部の出版物には「満州事変」を「満州強盗戦争」とかいてあつた）
「労働組合そのほかの民主団体との提携」「封建的な身分制からくる差別観念の撤廃」（天皇制があるから部落民ができるのだと全水本部はかいていた。）

これらの文句をかかないようにしよう、弾圧されたら、もともこもなくなくなると幹部たちはいつた。当然青年たちと幹部は対立した。

全国水平社本部からはつきつきとピラやポスターがきた。「差別裁判取消さねば兵役納税の義務を免除せよ」「華族士族があるために、おれらの差別がなくならぬ」というポスターは特高がとりあげにきた。そんなものは来ていないと特高をおいかえして、あとで町中にはりまわした。フロ屋の

おやじは「あそこへはつたらよくみえる」と姿見のかがみをさした。

『差別裁判糾弾闘争ニュース』を青年たちはガリ版ですつて町内にくばつてまわつた。カベ新聞もつくつてはりだした。

青年は靴工が多かつた。神崎市宇市君のように缶詰工場そのほかではたらいでゐるものもあつた。仕事がおわると青年会館の闘争委員会にあつまつてきた。ガリ版ずり、ピラはり、時々会議といそがしい。青年会館はほんとに、わかもの会館で、横川町のタビのコハゼ工場にかよつてゐる娘たちが裁縫をやりにあつまつてくるから、毎晩ワイワイ、ガヤガヤと、わかきではちぎれるようだった。そこへ十講長のおじさんたちがやつてくる。われわれのかくピラの文句をみて、「何々しろ」などというのはいけん、何々しろしよう」となぜかかないのだ、などというものもある。

青年たちは「なにをバカなことを」という顔をして、「こうかんと力がはいらん」という。

おじさんのいうのがほんとうで、いまは『赤旗』も「あります調」になつてゐる。しかしあのころは左翼の文章は「かたひじはつた」ような文章だった。そのころ私はニュースのガリ版の原紙をきるときは、できるだけ、なでかくようにしてゐた。

みんなが仕事にいつてゐる昼間のあいだは私が闘争委員会のしごとをする。書記の給料は五円で、満田峰夫君の家にその金で「下宿」した。そのころでも二階がりの間代は五円くらいとられた。例の「五厘カンパ」で紙代やのり代、常任費もまかなつたわけだ。大口の寄付金などなかつた。

玖島三二君は請願隊行進からかえつてくると、

本部からもらったといつて「水平社解消息見書」

というガリ版のとしたものをみんなに配った。それをよんでみると、「かつて熱心な活動家であった人々も、いまは商店主や中小企業主になり、そして運動の幹部になっている。その小市民的意識から水平社第一主義という日和見主義がうまれる」

「部落民はすべて兄弟であるという考え方は部落内の階級対立を、おおいにかくそうとするものである」「水平社運動は階級闘争の基本組織にとって障害物となっている。部落内の労働者は労働組合に、農民は農民組合に組織されねばならない」

私の注意をひいたのはこんなところであつた。機械的な考え方だなどそのときでもおもつたものだ。

玖島君は「解消息見書はあやまりで、水平社運動は階級闘争ではなく、部落民という身分層の闘争としてみなければならぬ、ということになっている」と説明したがそうした意味の文書はこなかった。

「身分闘争に関するテーゼ」という表紙の、日本紙にガリ版ずりのものは一九三四年四月二六日に検挙されてから、東署特高室で表紙だけみせられた。「こつちはこんなもので手にはいつているんだ」といったがなかみはみせなかつた。

差別裁判糾弾闘争は福島町では五厘カンパという闘争費用の定期的カンパまでいったのに、そのあと大衆団体に組織するまでの時間がなく一斉検挙がきた。

(5)

「戦争反対の闘争がやられていない」。関谷君は上京して、こういう党中央の批判をもってかえつた。一九三四年（昭和9年）になってからだともう。

「帝国主義戦争絶対反対。日本共産党広島県オクルグ会議」と騰写版で赤インキですつたポスターを小寺英雄君がつくつて、これを手分けして広島市にはつてまわつた。

商業新聞には「さきに呉市内において、第二なるクレーン」というビラがまかれたが、犯人はまだ逮捕されざるに広島市内において不穏なポスターがはりだされた」とかいていた。

『第二 なる クレーン』は広島市で小寺英雄君がガリ版でつくつて呉におくつた。時には関谷源一君が呉にもつていつてまいた。こちらで桃色の封筒にいられてから、もつていつたこともある。門のまえでこれをまいても、すぐにあけてみないで、たいていポケットにいられてはいる。脱衣箱のところくらいで、あけてみるだろうというねらひだった。かえるときは列車にのつたらあぶないので、山のなかに入つて夜をまつてから歩いてかえつた。

『一九三二年テーゼ』をガリ版にきつてのこしておこうと、関谷君がもっているボロボロのパンフレットを私がプリントして『洋服地の裁ち方』という茶色の表紙をつけてだした。

特高の追及もきびしくなつていた。

関谷君は「東京へいつてみたらおれの逮捕状がでているといつていた」といつた。彼はスパイをつかまえて首をしめたことがあり、そいつがケイサツに訴えたのだという。

小寺君は東京からスパイらしい奴がきたといつた。それによると、赤旗の配係といつてきた男がそれらしいという。関谷君は信用して広島の状態をその男にはなしたが、そのあとで東京から、スパイがそつちについてたらしいから用心しろといつてきたそうだ。

郵便局の小川正一君が連絡にこなくなつた。関谷君と私が横川町の小川君の家にいつてみた。おやじさんがでてきたが要領をえなかつた。郵便局の同志もケイカイがきびしくなつて、うごきがとれないのだった。

〔注〕 4・26 検挙発表の新聞記事によれば、すでに特高の監視がつけられていたのだ。横川橋の下で刑事がひそんで小川君を監視していると船頭さんがあやしんで「泥棒 泥棒」とどなつたという。

岩国の人絹工場でも、ビラを外から流しこんだので中にいる同志がうけなくなつていた。この工場の組織をうけもつていた三戸信人君は東京へでいつたが、まもなく検挙されたというしらせがきた。

一九三四年（昭和9年）三月だったか、作家同盟の国本金夫君（堀哲二）と山本タキエさんが憲

兵隊に検挙された。しかしまもなく釈放された。

一斉検挙がちかとおもわれた。つかまつても私は転向しないつもりだった。福島町の青年たちや、おじさん、おばさんに共産党とはどんなものかみてもらわねばならん。

そのころ私は黨員ではない。多くの同志もそうだった。しかしみな党のためにはたらいだ。しかも大衆のなかではたらい、大衆におしえられてきた。

いまが、「わたしの大学」だ。私は広島高校一年中退だった。

四月二六日広島市で一斉検挙が始まった。

私は広島消費組合でねているところを迫栴盛登君、藤原勝美君とともに東署に検挙された。

東署では私の中学校の卒業記念アルバムからきりぬいた私の写真をつきつけられた。私はそのアルバムをもっていないから、ほかのだれかのものから、きりとったのだろう。玖島三一君、神崎宇市君、小寺君、それから関谷源一君の写真、いづれも警察でうつしたものだ。南小一君、大塚猛夫君の写真もある。

「消費組合の事務所にあった文書は全部おれのものだ」と私がいうと、でるわ、でるわ、よくこれほど迫栴君はためこんでいたものだとおもった。

たらいまわしという奴で、ほかの署にいた同志が東署にまわってくる。消費組合の達木幸太氏、茂渡義人君、広高生李英俊君、大男の周了竜君、朝鮮青年会のリーダー金弼東氏などもきた。

そのうち広島高校の生徒がいっぱい、ひっぱられてきた。留置場の監房にはいりきらないので、

あとは道場にいれられた。

郵便局の小川正一君が縊死をとげたことがつたえられた。高校生の吉本康二君の死をしたのは私が一九三八年・昭和十三年に出獄してからだった。

その二 二独居・五舎

(1)

一九三四年（昭和9年）八月のあつい晩「吉島町五〇番地」におくられた。広島刑務所である。

四カ月のあいだの留置場のおいがしみついたコール天の服をぬいで、青い獄衣にきかえてほつとした。未決拘留のあいだは青で、刑がきまると赤いきものになる。

裁判がおわるまでは刑務所のなかの拘留所におかれる。独房にいれられて、ほかの同志にあらうことはない。毎日の運動も看守つきで、ひとりである。週二回くらいのフロム、ひとりづつ、板かべでしきつてあるせまいフロムである。予審がすむまで面会も手紙も禁止である。

神崎宇市君の名前で本のさしいれがあった。いまおぼえているものはつぎのようなものである。日本経済史（黒正巖著）、経済学全集のなかの租税論及び統計学、日本書記上巻、ダンテ神曲のホンヤク、藤森成吉の小説集「鳩を放つ」、ドイツ語文法教科書などである。

さしいれの本は刑務所で検閲して、左翼的なもの

のはいれない。ただし統計学という本は検閲でみおとしたわけだ。その本の中の「統計の理論」という論文には「唯物弁証法をしらなければ統計の原理は理解できない」とあって、数学の理論から「偶然的なものは必然的なものである。必然的なものは偶然的なものである」という論理をみちびきだしている。弁証法は唯物弁証法が正しいことをレーニンの『唯物論と経済批判論』の文章を沢山ひいてのべている。

この『統計学』のはじめが勅任教授の論文だし、そのつぎがグラフや微積分の数式をつかった統計の数学の論文だから、まさか中のほうに左翼文献の引用があるとは思わなかったのだろう。

ドイツ語の文法教科書は私が神崎君にたのんでいれてもらった。高校生からでもかりてくれたのだろう。一年以上未決にいたから暗誦するくらいよんだ。

いまからおもえば聖書をよんでおかなかったのはおしかった。社会にでてからでは、あんな退屈なもの、よめるわけがない。しかし外国のものにはマルクスのなかにさえ、バイブルのことばがでてる。

裁判はあくる年、一九三五年（昭和10年）四月だったとおもう。ひとりづつ、傍聴人もいれない裁判だ。判決もきまつている。目的遂行罪で三年の刑だ。転向しないのだから、まけてくれるわけもない。

できるだけ大声で検事の起訴状に反論してやった。しばらくすると裁判長が「ちよつとまで」といった。「敬語をつかつてはなせ」という。

「敬語はつかわん。もう、裁判長とはものをい

わん」といっておしまいにした。

判決の日裁判長は、むくれたような顔で「懲役三年、未決拘留通算一八〇日」といって、「なにかいうことはないか。なければこれでおしまいにする」とさつさと立ちあがった。裁判所の側が予審をほったらかしにしていたのだから刑期三年から半年さしひいたわけだ。

控訴審では傍聴人もいた。こんどは裁判長は、敬語をつかえといわずに私の「演説」をきいた。敬語を要求したら、こんどは腹をたてないで、階級的政治犯は裁判所にたいして敬語をつかわないと堂々と論争するつもりだった。

控訴判決は一審通りだった。ただちに上告して上告趣意書をかいた。それまでの活動をふりかえってみるよい機会だ。それ以外のことは筆をとって、ものをかくことは許されなかったのである。

一九三五年（昭和十年）十月上告棄却。これから二年半は、手紙をだすこともできないし、面会にくる人もない。私はひとり者でみよりもないからである。もちろん本をさしいれてもらってよむこともできない。

(2)

一九三五年（昭和十年）秋、拘留所から第二独居にうつった。第二独居というからには第一独居もあるのだから私はどこにあるか知らない。すこしのあいだ四舎にいてそれから五舎にうつった。五舎ではいちばんはしの四一房に入った。四

二房は物置きである。北側で日がささない。

私の独居房の扉に「厳正」という札がかけられた。これは級外のとりあつかいである。受刑者はその成績によって、一級（シモフリの服）二級（青いきもの）三級（赤い新しいきもの）四級（赤の古いきもの）とだんだんになっている。普通の受刑者は入ったときが四級である。その下に級外というのがある。犯則をしたものである。独居房にいられる。その下がまだある。手のつけられないものとみられると「厳正独居」の処分になる。

思想犯は入ったときが「厳正独居」のとりあつかいである。入浴運動すべて看守つきで、ひとりである。転向を申しでると、すぐ新しい赤いきものにかわる。それから青いきもの、シモフリの服とあがつてゆく。転向したといわないものが「厳正」の札をかけてこの第二独居の五舎にあつめられている。この札をかけているところは同志だとおもってよかった。

すじむかいの四房に「厳正」の札がかかっている。むかい側は南だから、日あたりがよい。病気のようであった。

朝おきると看守が「ゴミだし」とどなる。みんな独居のなかのゴミを扉のところまで、はきよせておく。看守は北側なら北側の各房の扉を順々にあけてゆく。中のゴミを手早く廊下にはきだす。看守が順々に扉の錠をかけてゆく。そしてこんどは南側の扉を順々にあけてゆくわけだ。

むかい側の四房の扉のあくのを、こちらの房の扉のぞき窓からみているとむこうの若い男はゴミを掃きだしてから、手で空中に「K、P、か」とかいてみせた。「そうだ」という。看守が扉を順々

にとじてきた。

私はマツチの箱をはるしごとをしている。はったものをのせる長い板が何枚もある。青い紙も沢山あった。青い紙をほそながくちぎって、長い板にはりつけて文字をつくる。つぎのあさ、こっちの扉があらたきとき、それをむかいの扉にむけてみせた。「了解」のあいずがあつた。むこうは空中に手で文字をかく。私は長い板で「通信板」を何枚もつくって、むこうにみせた。

おたがいの経歴、むこうのしらない社会情勢や、出獄する日も知らせあつた。かれはそれをおぼえていて、私が出獄する日刑務所から彼のハガキをわたされた。入獄中にきた肉親以外の者の手紙類は出獄のときまで本人にわたさない。出獄の日の二日まえにそのハガキはきていた。小倉市のつとめさきと椎野悦郎の名がかいてあつた。

私の房のひとつおいてとなりが金明文君、そのまたひとつとなりが岩村大次君、そうしたぐあいに、ひとつおきの房に古末憲一君、そのほかに国本金夫君、木村莊重君とみな北側の房にならんでいて、いちばんむこうのはしが小寺英雄君であつた。椎野君は胸をわるくして日の当る南側の房にいたが、まもなく病舎にいつてしまった。

岩村大次君はエンピツでちりがみにかいたレボをときどきくれた。雑役をしている受刑者にたのめば食器口からなげこんでくれる。私はエンピツはないが字をかくことは工夫していた。それで返事をした。

かれはじぶんの経歴をこうかいていた。

「中学を卒業して国鉄にはいり早くから党活動に尽悴し上京してのち紺野与次郎氏の指令で国鉄

の連絡をとってゆく『渡り鳥』となり山口県で活動中検挙された」

かれは古末憲一君に反感をもっていた。その理由をきくとかれがハンストをやったとき古末君がいつしよにやらなかったからだという。私は「獄内でお互の悪口や中傷はよくない」とかいてやった。つぎにフロ場となりになったとき、岩村君は「一方的な判断で批判されてはこまる。椎野君にもきいてくれ」と、えらいケンマクだった。私は岩村君がきらいになった。私は古末君にも岩村君にも、つきあいはない。ハンストをやったというときも私はまだ第二独居五舎にきていない。しかしお互にこの不自由な独居にとじこめられているとき、こんなことをいうのはいけない。もちろん椎野君にもきくつもりはなかった。

私は文字をかくのにはこんなことをした。そのころ靴下のかがりをしていたので針がある。受刑者によませる「人」という印刷物がある。「人」という印刷物の白いところをきりとして針で字をかく。房のなかにはアルミのヤカンがあるが、それに紙をこすりつけると黒くなって、針でかいた字だけ白くのこるわけだ。鉄筆で原紙をきるようなものだ。かなり小さい字でもよめる。それでレポをかいったりメモをとったりした。糸でとじてメモ帖もつくっていた。でるまで、みつけれなかった。しかししでるときは、もってでられなかった。我々が字をかくということは犯則であった。なにをメモしたかといえば「ことばと文字について」であった。房内に一冊づつある漢和辞典や教悔師から貸しだす「言海」「広辞林」「英和辞典」などかたつぱしからよんでいた。「ドイツ語辞典」がみ

たいが、ないといわれた。ドイツの学者はラテン語であらわされたことばをドイツ語でかきかえるように長い間努力しているからだ。

私は中学三年生のとき国語の先生から「かな文字主義」のことをきいた。広島高師の図書館にはカナモジ会のニュースがあった。それから、すこし大きくなってから「レーニンがやさしいことばの字引きをつくっていた。」というのをよんだ。

「日本の大衆はよく商業新聞をよんでいるが、左翼の機関紙や文書がよめないのでどうしてか」というのもきいた。

そんなことから「ことばというもの」には関心をもっていた。

二年半の独居生活は字引きをよんでくらしした。広辞林などをよむと「はなしことば」というものがずいぶんゆたかなものだとなった。

しごととはサボらなかつた。ダランとしていると、あたまがぼける。ノルマの二倍くらいやった。手先が器用なせいだ。ノルマの一・三倍で週一回ボタ餅、ノルマの一・八倍で週一回ボタ餅をくれた。金明文君は房のすみにたたんである、ふとんのあいだに頭をつつこんでねていることが多い。看守もあまりとがめない。たまにいつしよに運動にでることもあるが、かれはばんやりしやがんでいるだけだ。朝鮮人青年会でやっていた夜間小学校で金明文君は先生をしていて子供たちに祖国のことばや歴史をおしえていた。

金君の刑期二年半がおわるころ教悔師がきて、「でたら、どこにゆくか」ときくと「ここにいます」とこたえた。「きてでるものはあるのか」ときくと「これをきてでる」と金君は自分の獄衣をつまん

でみせたと雑役の受刑者がしらせてくれた。厳正独居の思想犯のきている獄衣は、あらいさらして赤い色が白くなっているきものだ。社会では雑巾にもしない。教悔師にそれをつまんでみせたのは、たくまざる皮肉だ。金君が出獄して、どこにいったか朝鮮の同志も知らない。

解放運動無名戦士の碑にいれるべき人かもしれない。あるいは祖国にかえてあの人のおい笑いをうかべているかもしれない。そうあってほしいとおもう。

国本金夫君がどこからか2・26事件のことをきいたらしく、私の房のまえにたつて、てみじかにはなしてくれた。日曜日には独居のものも講堂で説教をききにでることができた。私はでたことはない。みんなかえつてくると房にはいるまで、しばらく混雑する。それにまぎれて国本君が私の房の前で2・26事件のことを話してくれた。国本君のいる房は、ずつとはなれているので、それまであわなかつた。そしてそれがことばをかわした、さいごだった。一九三八年（昭和13年）二月に出獄したという彼は

五年目に出て来た俺れに

昔の友がなみなみと注いでくれた酒

唇へ 咽喉へ 腸へ

しみるうまさ

という短歌をのこしている。しかしふたたびあうことはなかった。

国本君は第二独居では木村莊重君の房にちかかったという。国本君は不器用でノルマがあがらないから、木村君ができあがったものを国本君にまわしてやって、ノルマ一・三倍になるようにした

という。「一人三分」になると週に一回ボタモチをくれるからだ。

木村莊重君ともたった一度だけお話をかわしただけだ。一九三七年（昭和12年）のおわりごろフロで「あしたでます。元気でやってくください」と木村君が声をかけた。

木村君のななしでは獄中で国本君にすすめられて短歌をつくるようになったという。

国本金夫君の遺稿歌集『愛情の歌』が出版されたとき、木村莊重君からも歌がよせられていた。

古末憲一君とは房がちかいのでよくはなした。

散髪ときは廊下に雑役の受刑者がイスをおいて独房からひとりずつで散髪する。イスをおくのは私の房のまえだ。古末君は散髪がおわると私の房のまえで頭をフケトリでゴシゴシかきながら立っている。私はのぞき窓に顔をだして彼と「世間ばなし」をする。看守もたいてい大目にみていた。小寺君とフロ場であったとき、松本徹のうらぎりについて知らされたことはまえにのべた。

(3)

一九三七年（昭和12年）七月、中国との全面戦争がはじまった。

第二独居五舎にもスピーカーがとりつけてある。坊主であるはずの教悔師がのぼせた声で日中両軍の衝突をつたえた。それから毎日教悔師がアナウンサーきどりで「戦況」を放送した。

刑務所はやはり、ひとのいうように「別荘」で

あった。「別荘」だからこそ「おれは転向しない」とうそぶいていられた。ひとあし、そとにでたら「転向しないとは、どうすることだ」と自分にきかなければならない。

戦争がはじまると独房の思想犯のところには、新聞の戦争記事をきりぬいたものをボール紙にはりつけて、まわしてくるようになった。新劇俳優の友田恭助の戦死が「転向者、友田伍長の殉国美談」としてのせてあった。地下の友田氏も苦笑していることだろうとおもった。はりつけてある新聞記事をはがしてみた。林長二郎が顔をきられたとある。タッブダンスの中川三郎の公演広告があった。社会のにおいを、かすかにかぐ。めしつぶではりつけて、つぎにまわす。

ある日私の独房の扉を看守があげた。入口に教悔師がたっていた。

「事変にたいする感想はどうですか」ときいた。「別にありません」私は仕事の手をやすめないでいった。

「という、日本が早くまけりやあええと、いうところですか」

教悔師はこんなことをいった。はなしを、おもしろくはこぼうとしたのだろう。

「そんなところですよ」というだけにした。「字引きしかよまないようですが、どうしてですか」はなしの、つぎはこまて教悔師はいった。「こで科学的なものは字引しかありません」

教悔師は話につまてしまった。

「ところで、あなたが満期で出所するときのことですが、鳥取県のおばさんの所で、前非をくい、かえってくるなら、あたたかくむかえるとい

っています」「いらんことを、しないでください。おばのところにはかえりません」、かれらの、きかない手で、私のみうちにさわってもらいたくない。教悔師はきまずそうなかおで、かえっていった。

この教悔師はあとで私にシツペガエシをするチャンスにありついた。私は犯則ということで「懲罰会議」にひきだされたことがある。

この会議というのは裁判所にならって、裁判官役は所長か所長次席（典獄補とよんでいたが高等文官試験をとりたての若い男）検事役は看守長、弁護士役は教悔師である。

典獄補というのは広島高校のころには寺尾一幹君が「かれは研究会にもきていたはずだ」とのちにいったような男、看守長は広島高校で同じクラスだったサツカーばかりやっていて高文をとりそこねた男だった。

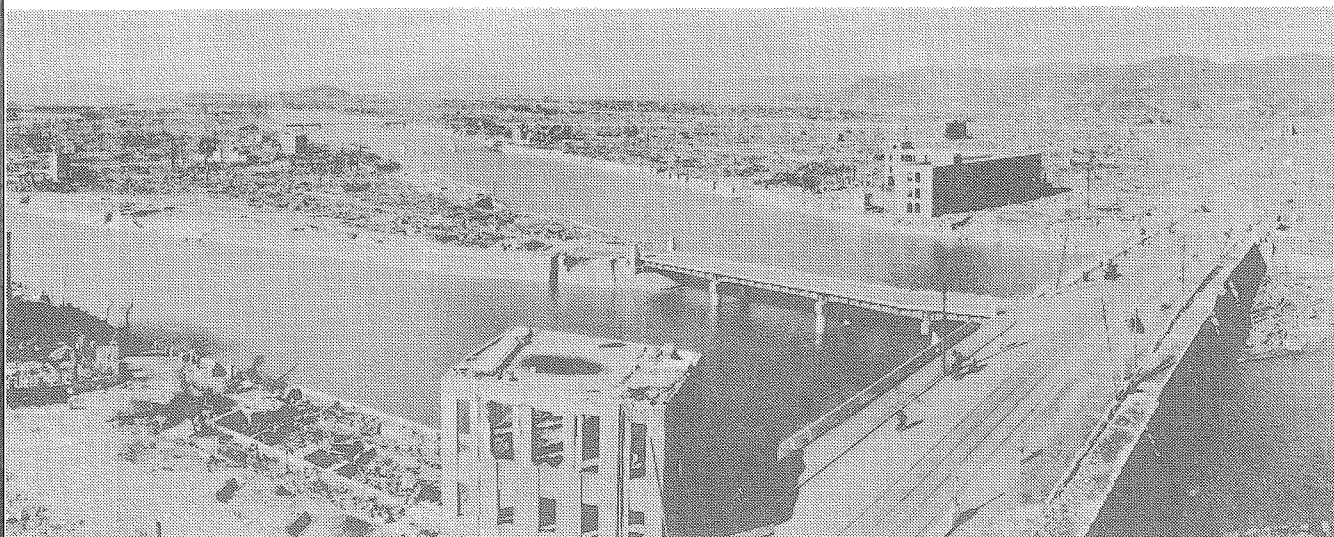
その日の「懲罰会議」はこれらの男が、しかもつらしい顔をしてすわっていたが全くの三文オペラだった。

看守長が「本人のやったことは全く陰険悪辣……よって減食二分の一、運動停止三日間を至当とおもいます」と典獄補に一礼。

弁護士役の教悔師がたちあがった。「本人は出所後、おばのところにかえることを拒否しております。肉親の愛情を感じないものといわねばなりません。また本などは全然よまず、字引ばかりよんでいるという、どうもしまつにこまる人間で……よろしく」

この三文オペラで、いちばんまじめにやったのは教悔師だろう。

一九三七年（昭和12年）の秋になると看守の人



(1985年4月15日林重男氏提供・無断転載せぬこと)

手不足もあって「厳正独居」の思想犯を、いっしよに運動にだすようになった。古末君は、かけ声をかけて三段とびをしていた。私は運動時間いっぱい走っていた。

一九三八年(昭和13年)五月三日私は出獄したとおもう。一〇日ぐらいあと岩村君がでてきた。私は日雇労働者をしていたが、休んで出迎えにいった。刑務所正門のちかくの官舎の出入口からカスリのきものをきた典獄補がでてきた。「所長に面会するなら早いほうがいいですよ。また出張でいなくなります」そういつて町のほうにいった。今

その三

(1)

「戦後」というものも、すでに遠い思い出になるうとしている。

一九四五年一二月のくれ、私は岡本菊次郎君とふたりで原爆あとの広島市にやってきた。私のせおつたりユックサックのなかには「赤旗」再刊第1号がはいっていた。ポケットには二千円はいつている。むかしの同志をさがしだすまで何日でもここで、がんばるつもりだった。

岡本君とは京都の新聞会館でひらかれた「戦争犯罪人追及人民大会」の会場入口で、ばったりであつた。私は一九四五年(昭和20年)四月東京蒲

日は日曜日でやすみなのだ。私は入獄中から、とりあつかいのことについて所長に面会を申しこんでいたのだ。

それからまた十日ぐらいあと古末憲一君の出獄をむかえにいった。

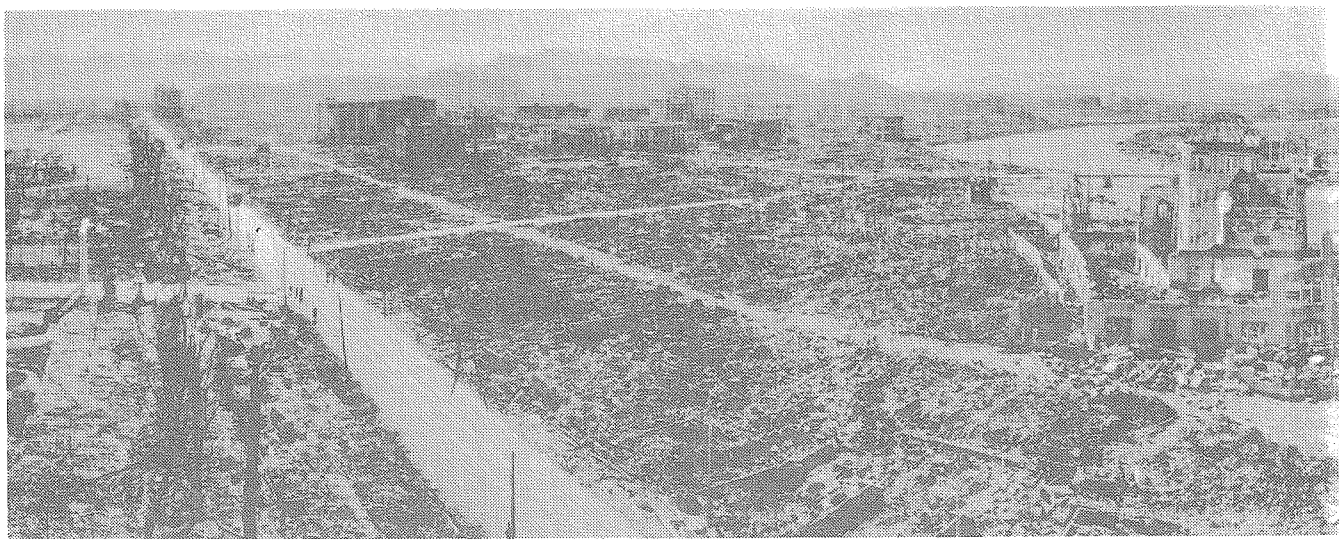
一九三九年(昭和14年)一月小寺英雄君がでてきた。私は門司の工場ではたらいていたが、休んでむかえにいった。その夜は宮島の小寺君の家で、ひとばんとまって、渡辺信樹君もまじえて、三人で、松本徹のうらぎりそのほかのことについて、はなしあつた。

田の工場地帯で空襲にあい、本籍地——といつても親の故郷というだけだが、鳥取県米子市の工場にいて、一一月にやつと京都にでて町工場の旋盤工で働らいていた。

岡本君は東京から京都の会社にかわつていたのである。かれはいつた「原爆で広島の中はみんな死んだらしいぞ。このあいだ広島にいつたが党のポスターらしいものは一枚もはいつてなかつた。仁井教の戦災者同盟のポスターしかなかつた。」

ともかく、いつてさがそうと、ふたりは二〇代のはじめにかえつたように、はりきつて相談した。私は町工場の旋盤のしごとをなげだし、岡本君も女房子供を疎開させてあつて気にかかるが、そのままにして広島にゆくことにした。

そのころは徹夜してならんでキップをかうときだ。「右の者は日本共産党員にして、左の目的をもつて左の区間を旅行することを証明する」という



原爆あとの広島市 撮影 1945年10月7日 林 竜 男 氏

京都地方委員会の証明書をもって駅長室にゆくと、「こわもて」がして、すぐキップをうてくれる。

共産党員であるという証明書がテレクさかった。戦時中の生きかたを考えると、その資格があるとは自分でも思えない。

敗戦の年、一九四五年のくれのころの広島町のすがたを、あらためてここにえがくまでもないだろう。

八丁堀の太陽館のドーム（まるやね）の鉄骨がアメの棒をたばねてねじったように、空につかたっていたのを、おぼえている人があるだろうか。

「ゆめをみとるようじゃ」とそれをみあげながら岡本君がいった。「アメリカ兵のやつが、あれをよろこんでうつしてゆく」と、そばにいる人がいった。

あたりはま昼というのに、ジーンと耳がなるほど、しずかである。

「おゝ、いきとりんさったか」という声がする。道路のまんなかで、ゆきあつた二人があいさつしていた。

岡本君がいった。「生きているのか、というのはおかしいアイサツにはちがいないな」。しかし心にみることばだ。

わたしたちのほうは、やけあとをあるきまわつても「おゝ、いきとつたか」という同志にあうことができなかった。

それにしてもみんなどうしたんだろう。敗戦の日がきたらと、まっていたのだが。今どこでも立ちあがっている。この広島には一枚のポスターもはってない。東京の党本部にこの町からハガキ一

枚だしたようでない。京都地方委員会できいたとき、大会には広島県から二名の代表がきていたという。しかしそれは三原市あたりの人間だった。

戦災者同盟のポスターがはってあったが、広島市観音町仁井田教一とあった。そこへいつてみたが「ニイキヨウ」君はいなかった。

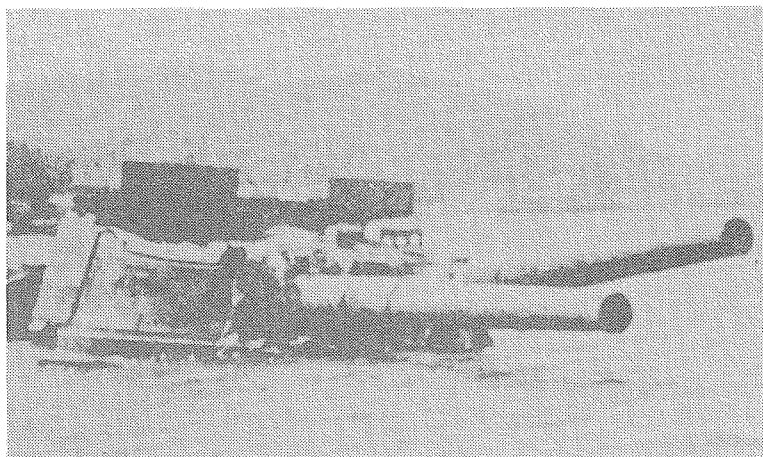
宮島にいったら小寺英雄君がいるかもしれないと、岡本君とはなしあつて、宮島ゆきの列車にのつた。駅から宮島への連絡船のりばにゆくとところで、岡本君が一人みつけた。宮島からかえるところだという人だ。中村氏といって戦前人絹工場で岡本君と働いていたという。岡本君はさつそく住所をかいでもらっていた。あとでこの中村氏の廿日市の家をかしでもらつて、三原市からきた庄田忠二君、岡田重夫君、それに玖島三一君、神崎宇市君、岡本菊次郎君、そして私とで会議をひらいた。玖島三一君を追加して、岡田、小児山、玖島三人を立候補者とすることにしたわけだ。

しかしこれはあとのことで、まだ岡本君と私はだれのこと知らない。

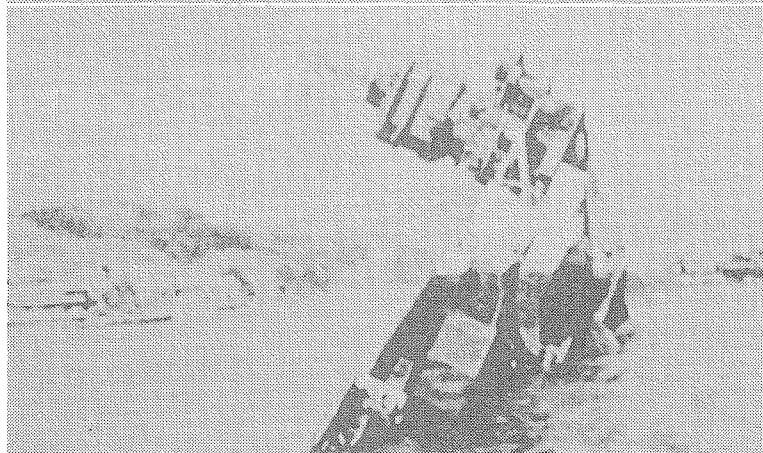
宮島にいったらトウフ屋をたずねると、小寺英雄君はいきていた。八月六日広島市のつとめさを休んだので、たすかつたのだという。高橋まつ子さんと結婚していることをしった。渡辺信樹君もやつてきた。京都からもつてきた『赤旗』再刊第一号をここではじめて、ひろげた。

神崎宇市君がいきていることを小寺君がおしえてくれた。福島町南通りだという。

福島町本通りの松の木にみおぼえがあった。そのうちの一本はてっぴんから煙をふいている。幹のうつろに火がはいつたらしく、ピカドンのとき



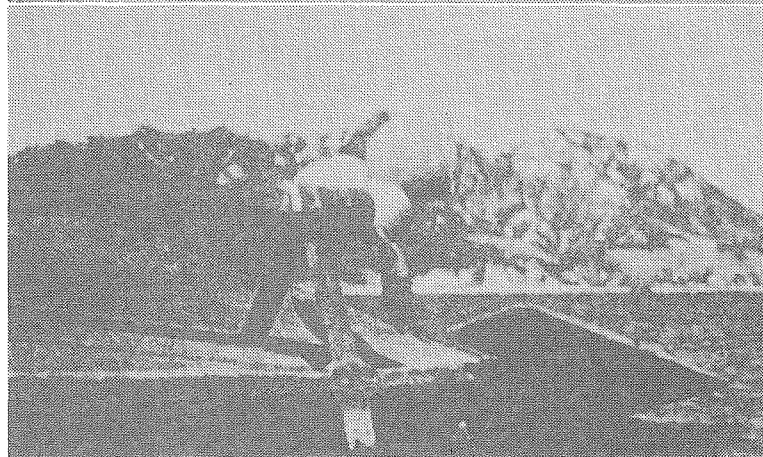
戦艦伊勢



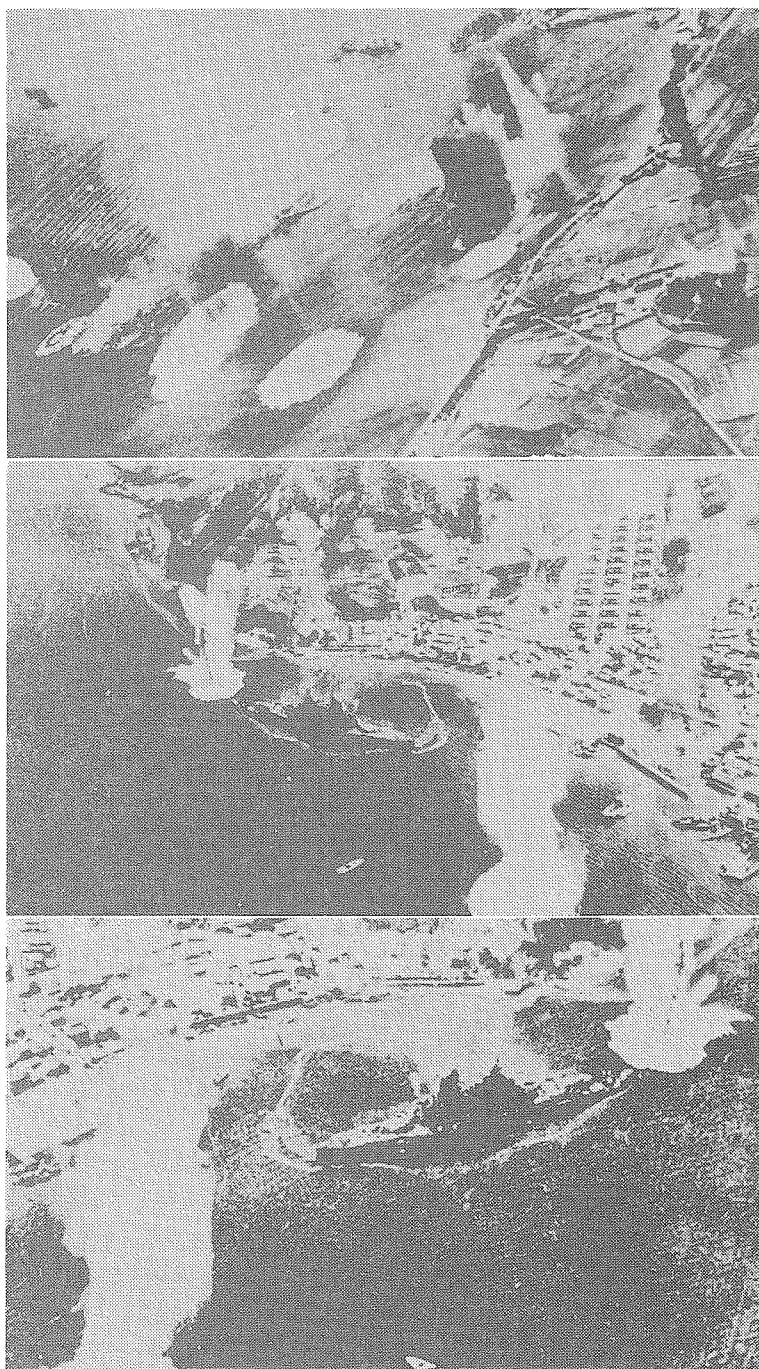
空母天城



戦艦日向



練習艦出雲



提供 呉戦災を記録する会

三省堂「日本の空襲」（7巻中四国編）

1. 沈んだ軍艦。

撮影 1946年3月米戦略爆撃調査団

2. 呉軍港空襲。

3月19日呉軍港。5月5日広11空廠。6月22日呉海写工廠。

7月1日呉市街焼夷弾攻撃。

7月24日～28日呉沖海戦、軍艦全滅。

から煙をふいているという。

その夕方あった神崎宇市君は「ピカドンの日は広島におらなんだ。あくる日もどつてきて、うごきまわるうちに放射能にやられて、しばらくねんだ」といった。

玖島三一君はいなかに疎開しているが、ときどき広島にでてくる。連絡がきたら、知らせてくれといった。あしたくらいでてくるだろうと神崎君はいった。

岡本君と私は神崎君のバラックにとめてもらって玖島三一君をまつことにした。神崎君のところには私たちだけでなく、のちには庄田君、岡田君、南有田君などいろんな人がさこねをしたものだ。

二日目くらいの朝はやく玖島君がやってきた。

『赤旗』第一号を彼のまえにだすと、しばらく、ものもいわないでみていた。岡本君が総選挙に共産党から立候補するようにすすめた。「しばらく考えさせてくれ」と彼はいった。

三原の広島地方委員会（まだ県委員会とはいっていなかった）から、まもなく庄田忠二君と岡田重夫君がきた。はじめ庄田君ひとり、あとで二人できたとおもう。私たちが広島から本部にだした報告を、本部から三原の地方委員会に連絡したためだ。庄田君は地方委員会の事務所を広島市にうつしてもよいといった。しかし原爆あとの広島はそれどころではなかった。庄田君と岡田君が三原からきて廿日市の中村氏宅で会議をしたことは、まえにのべたとおり。岡田重夫君が委員長、庄田忠二君が書記長のようなだった。

そのうち三原の海岸べりの、小児山富恵さんの妹さんがいる家で会議があった。広島から玖島君、

神崎君、岡本君、私がいった。呉から中村定男君がきていた。広島刑務所第二独居五舎であつてから久しぶりであつた。小見山さん、山代巴さん、徳毛君たちとは、はじめてあつた。戦前広島市でやっていた私は東部の同志をしつていなかった。せいぜい竹原から広島市にでてきた山本タキエさんをしつていただけだった。

広島市にも戦前の同志たちはいきていた。南小一君は市役所のやけあとでがんばっていた。ひとばん南君とコンクリートの床の上でたき火をしてはなしあつたあと、暗くなった広島町の町をあるくのは、あぶないので机の上に毛布をしいてねることにした。南君は毎日そうしているといった。

中川秋一君にも道でゆきあつた。中国新聞にいくとのことだった。市外から列車通勤しているのであつた。その夜神崎宇市君のところを訪ねてくれて、ひとばんとまっていた。

田谷春夫君も生きていた。一九四〇年（昭和10年）八月の新協劇団後援会一斉検挙のとき胸をわるくして療養所に入ったときいていた。己斐の町の小屋がけの芝居の木戸口で、中折帽に長靴というかつこうですわっていた。義兄が興行ものをやっているのだそうだった。

「このあいだA映画館に用事があつていたら」と田谷君がいった「事務所の机の上に赤旗のつとるじゃないか。中村さんにきいたら神崎君がもってくるのだといった。こっちの方のいみでもよろしくと中村氏にいったよ」。

広島電鉄にいた井上栄君とも己斐の町であつた。水道工事の店にはたらいでいるといった。彼も新協後援会事件で検挙された一人だ。

丸川昇一君は十日市町のやけあとにバラックをたてて印刷屋の店をひらいていた。そこへよつてはなしている「わたしをおぼえていますか」とはいつてきた人がある。古田稔君だった。

古田君は木村莊重君とともに『そびゆるマスト』5号、6号をつくった人だ。――連隊入営直前に検挙され、入獄二年のち朝鮮の79連隊に入った。戦場で胸と右手をうちぬかれて後送され広島陸軍病院から西条の療養所へいつていた。「退院したのがピカドンの、ちよつとまえでした。あの日警戒警報解除のあと、防空壕をなおしに入っていたら原爆がおちたんです。わたしひとり生きのこりました」。

党の広島地方委員会の事務所はそのとき丸川昇一君の店のつい近く、天満町の土手の元「チヤス」のあとのバラックにきていた。三原市の時計屋の間借りから、広島駅前の本屋の間借り、そしてやつとこのバラックに入ることができたのである。「共産党広島地区委員会何某」の名刺を注文された丸川君が、すこし、とまどつたような顔をしていた。

岡本菊次郎君は京都にかえつたが、私はあとすこし広島市にいた。

福島町のまんなかを通る予定の太田川放水路工事の反対闘争を旧全国水平社、そのころの部落解放委員会の人や町民とともにやった。町民のデモで旧兵器廠あとの広島県庁におしかけて、工事中止の確約を知事からとつた。

土岡喜代一氏、溝口年男氏、和佐田武夫氏、町内会長吉永老人そのほかの町内の人々とともに「放水路を変更せよ」という会をつくつてたか

った。昔のように私が書記だった。

それが一段落ちついたところで私は京都にかえることにした。

(2)

一九三八年の戦前のことにもだろう。

この年五月三日私が出獄して神崎宇市君の家に
かえりついたとき、玖島三一君が仕事場からきて
くれた。

「当分宇市のところ、ゆつくりするがええ。
社会情勢もかわつたし、用心してうごかんと、あ
ぶないぞ。晩にうちへこい。いっぱいのもう。」

そういつて仕事場にもどつていった。

神崎君のはなしでは、大橋という靴工場で兵隊
靴のうけとり仕事をやってだいたいふかせいでいると
のことだった。

福島町はいたるところ、土地がほりかえされて
いた。この町のまんなかを太田川放水路がながれ
るのだという。もうたちのいた家もある。

広島市会での放水路をつくるのがきめられ
るときは「わしらの町を川にせんでくれ」と腰の
まがつたばあさんまで市会におしかけた。

たちのけといつてもゆくところはない。よその
町へいつても、福島町のものにおいそれと家をか
してくれない。しかも土地をほりかえしておいた
ててゆく。ゆくところがないので工事場のまわりの
空地にバラックをたててすむほかはない。

土地をもっている者は買いあげてもらつてかね

がはいった。ただの空地に石をならべて、家をた
てているところだといつて、高く買上げてもらつ
たものもある。貧乏人だけ損をする。神崎君はそ
んなことをいつた。(そののち戦争がはげしくなつ
て、放水路工事は中止された。そしてピカドンが
きた。やけだされた人々は放水路の川底になると
ころに、バラックをたててすみついた。戦後工事
がまたはじめられることになった。土木機械がは
こびこまれた。市役所にいってもうけつけない。
放水路をつくるときは市できめたが、あとは国の
土木出張所がやることで市や県は関係ないとい
う。とうとうこの町の人々はデモをくんで県庁に
おしかけた。県知事が一時工事を中止すると約束
した。)

出獄して四日ぐらゐして、神崎君についていっ
て、千田町の労働紹介所で日雇労働者の登録をし
た。

あくる日から紹介所の窓口から仕事の紹介をう
けて仕事にいつた。材木屋にいつたり大掃除の手
伝いにいつた。私が学んだ県立一中の寄宿舎に四、
五人でいつたこともある。漢文の先生が舎監をし
ていた。めんどろだから、てめぐいで頼みわりし
てはたらいだ。

ある日、ニュース館というのはいつた。四年
のあいだのうちに、トーカーになつていた。戦争
のニュース映画になつた。「脱帽」というタイトル
がでた。白い馬にのつた天皇が閲兵している。私
は帽子をぬがなかつたが、やはりうしろが気にな
つた。だれかがとがめないかとおもつた。ここは
刑務所のなかではない。独房のなかより社会はき

びしいのである。

(戦後一九四六年の春、広島のやけあとにもや
つとニュース館ができた。共産党員のすがたがス
クリーンにでるようになった。天皇も映画にあら
われた。彼は帽子をとつて、おじぎをしている。
おちつきのない男だ。たつたこの間まで白い馬に
のつて人々に帽子をぬがせた男だ。映画をみてい
るものは、くすくす笑つた。)

木村莊重君と林ノ内栄蔵君にであつたのは、井
戸掘り仕事のでつだいにいつて、そのかえりであ
つた。親方から大八車をかえしておいてくれとた
のまれて、その車をひいてタカノ橋をあるいてい
るとむこうから木村君があるいてきた。

刑務所で「あしたでます」といつていたのは昨
年の冬だつたが、あれからはじめてだつた。

木村君は「もう働らいたるんですか」といい、
つれの男を「林ノ内君です」と紹介した。木村君
よりすこし背はひくいだが、がつしりした男だつた。
長崎で活動していたのだという。

「このごろは仕事があまなのであそんでいます」
と木村君はいつた。ふたりとも前田文二君のやつ
ている鉄骨組立の現場ではたらいっているのだが、
鉄材の統制がきびしくなつて仕事があまになつた
という。

三人で飲みに行くことにした。私もこのところ
仕事がつづいているのでいくらかもつていた。

「酒百薬之長」という大きな横額のある「四斗
平」という新天地のちかくの、のみやなど、のん
でまわつた。「ちよつと待っていてくれ」と木村君
がいつて下宿により、大きな本をもつてきた。「こ

の本を売って、のもう」と彼はいった。手にとつとみると、哲学辞典だった。表紙をかえしてみると、「獄中の兄へ、美子」とかいてあった。

『赤救ニュース』で、木村君の妹の右田美子さんの死をよんだことがある。彼女は広島でバスの車掌をしながら、兄やほかの同志の救援活動をするうち、病にたおれた人である。

「この本は売るなよ」と私はいった。

「いや、もうこの本はいらないんだ」と木村君はいった。

そこは竹屋町筋のロンド書房のよこである。木村君は本をもってはいっていったが、すぐ金をもつてでてきた。

「大藤君が、この本はあづかつとくといつたよ」と彼はいった。

いまでもあの本の「獄中の兄へ、美子」という字がおもいだされる。あのころの同志たちのことを一つのシーンにあらわしているようだ。

「島根県のいなかにかえって、百姓をするつもりだ。おやじも年だからでつだつてやらねば」と木村君はのみなながら、そういった。

彼はあくる日、島根県のいなかにかえって、三〇年もあわなかった。

国本金夫君（堀哲二）の遺稿歌集『愛情の歌』

が、大藤軍一君たちの手で出されたとき、木村君の短歌もよせられていた。（戦後になって、木村君は共産党から村長に当選した。それから占領政策違反で投獄された。そののち、いろいろなことが、お互の身の上にあったが、ふたたびあったのは一九六九年の二月、かれが島根県から上京する途中、私のいる神戸によってくれたからだ）。

張鼓峰で、ソ連軍と日本軍が衝突したという新聞記事がでたとき、林ノ内君と私は広島市の相生橋のたもとの小さな鉄工所ではたらいていた。

「ソ連と戦争になったら、わしらはまたほうりこまれるな。赤いやつらは、みなごろしにしてしまえというて。」と林ノ内君はいった。木村君と三人であつてから林ノ内君とつきあうようになっていた。しばらくのあいだ林ノ内君は私といっしょに紹介所について日雇仕事をした。それから前田文二君に鉄工所の雑役にいつてみないかといわれて、私をさそつて二人でこの町工場ではたらくことになった。

林ノ内君はよく休んだ。「のみすぎて、胃のわるうして」と長崎弁でいつていた。そのうち丙子会の書記に欠員ができたので、それにゆくといつて工場をやめた。日給一円五〇銭の工場雑役では、よく休むので、いくらもとれない。それより月給四〇〇円の書記のほうがよいと思つたのだろう。

八月になつてから私は鍛冶屋町の安田祐俊君の家に、毎晩旋盤をならいにかよふことにした。東京にでるしなくである。古末君から東京にでてきてはどうかといつてきた。事務員なんかなるより工場にはいりたいから、すこし旋盤をならつてゆくと古末君にいった。朝、宿から弁当をふたつもつてでる。ひとつは相生橋の町工場の昼めしだ。五時になると相生橋をわたつて安田君のところへ、ふたつめの弁当をくう。

安田君の家は表の土間に旋盤二台おいて仕事をしている。カジヤ町というところはその名のよう

田君のおやじさんは、いまは裏の庭で、ぼつぽつ「インキョしごと」に火づくり仕事をやっていた。

安田君と兄さんとが表の土間で仕事をしていた。店さきに、やき印などをならべたり、ぶらさげてある。昔はお百姓がやってきて、スキやクワの柄におす、やき印などをかつていつたのだろう。あまり売れそうもないが、店の看板がわりである。「スキの刃の、やきつぎがでけるカジヤが今はすくのうなつた」というのが、安田君のおやじさんの自慢だという。

安田君は工業学校を卒業して日本製鋼、海田市工場の旋盤工として働らいていた。全協金属労組に加入して特高に検挙された。いまは兄貴と二人で、自宅に旋盤二台おいて仕事をしている。兄さんは金属彫刻が専門だ。

毎日夕方五時になると店の戸をしめて、安田君は四斗平あたりに、のみにでかけるのだが、私が旋盤をならいにゆくの、毎晩一二時ちかくまで仕事着もきかえないで、おしえてくれる。家の人も応援してくれた。兄貴も私のあやしげな手つきをニヤニヤしながらみている。日曜日と水曜日が「安息日」だ。四斗平などで、林ノ内君や田谷春夫君や私などとのむことにしていた。田谷君は印刷工だ。

「戦時体制」ということで安田君のところのよう

田谷君と安田君が道路のすずみ台で将棋をさし
ていて私が旋盤のハンドルをまわしていることも
ある。兄貴の方は夕方うちにわ片手にでいてい
る。

一〇時になると表の戸をいれて、それから土
間にチョークで数字や図面をかくて、ねじりの
歯車のかけ方（いまどきの旋盤をつかう人はし
らない）、製図の一角法や三角法などをおしえてく
れる。いろんなことを安田君は私のあたまにつめこ
もうとする。

「機械工になるからにやあ、どんなしごとでも
こなせる万能工にならにやあいけん」と彼はまこ
とにむりなことをいう。

相生橋をわたり西練兵場をななめにつつきり、
白島の下宿している家にかえる。

消費組合の常任だった迫桝盛登君も私が出獄す
るまえに東京にでていった。東京では同志たちが
仕上講習会をやっていた。熟練工の同志が講師
になって機械の組立ての勉強をしていると迫桝君
はかいてきた。広島にいるときは製紙工場にいっ
ていたが、ケガをよくした。やけ酒ものんだ。思
いきつて上京してよかったとあった。

(3)

丙子会についてかいておこう。

治安維持法で検挙されたものを監視するために
思想犯保護観察所がこの広島市にもおかれた。月
一回以上ここにいて近況を報告せねばならな

い。所長は元思想検事である。

思想犯の「保護更生の団体」として丙子会とい
うのがつくられた。「思想事件関係者」はみなこの
会員ということにされた。エサをまかねばあつま
つてこないから、丙子会に来る者には昼食をだし
たり、生活補給金として月二〇円だしたり生業資
金をかしてくる。これらの金は思想善導の名目
でこの土地の金持ちや工場主から寄付をあつめた
ものだ。非常時ということで、かれらも金をださ
ねばならない。

観察所の所長、書記、保護司の給料は国からで
るが、丙子会の書記の給料はこの寄附金からであ
る。主事は警察署長の古手を観察所長がひっぱっ
てきたもの、書記は保護司が思想関係者のなかか
ら観察所長にスイセンしたものだ。

丙子会というのは会のできた年が、ひのえ（丙）
ね（子）だからである。九州や東京では更新会と
いっていた。

書記は柴野君と瀬尾君がやっていたが、瀬尾君
がやめたので、林ノ内君がなった。かれは観察所
からみれば、思想犯要観察人のたぐいであり、同
志たちからは「お役人」などと皮肉をいわれるこ
ともあった。

私は彼にいった「おれは東京へいって工場には
いるから、君もあとからこいよ。工場で労働せに
やあいけん。社会のうわつらで、ふらついたりつた
ら、ろくなことにならん」

一九三八年一月のすえ、門司市の岡野バルブ
という工場に、五条俊夫君、中道君と私は雑役と
して働きにいった。夜間三時間旋盤をおしてくれ、
六カ月のちに成績のよいものは旋盤工としてやと

うというのである。どの工場でも労働者がたりな
いときであった。九州の更新会がこの工場に、「会
員の更生のために」たのんだものである。広島
の丙子会からも、それにいれてもらうことにした。
私も東京にでるまでに、すこしでも旋盤につけれ
ばよいとおもっていた。

林ノ内君は丙子会の書記の仕事をかたづけてあ
くる年の一月になって門司にきた。

五条君、中道君、林ノ内君は鍛造工場の雑役を
やり、私は組立工場の雑役をやった。五時にな
ると夕食の弁当をたべて実習工場にあつまった。そ
れから九時まで旋盤をならった。

思いがけないことに竹岡宅一君が組立工場
でボール盤をつかっていた。彼は広島県高田郡吉田
町で南小一君たちと活動していた同志である。九
州のしりあいをたよってこつちにくたので、特高
にも更新会にも、しらせてないという。だから私
も竹岡君のことは、五条君、林ノ内君、中道君に
はだまっていた。

椎野悦郎君は私が出獄するときハガキをくれて
小倉市の影久伊佐人商店というつとめさきをか
いていた。独居のむかいどうしで手で文字をか
いて、はなしあつてから、はじめてあうことにな
った。九州更新会などの世話にならないでも、旋盤を
ならうのなら、ほかの町工場を世話すると彼はい
った。私はまもなく東京にでるつもりだからとい
った。

それからすぐ私はこの工場をやめて広島へか
えった。そのあとで五条俊夫君が事故で死んだ。鍛
造工場でスチームハンマーのまえではたらいにい
た五条君の胸に鉄片がとんできて、彼はたおれた。

林ノ内君たちが、だきおこして病院にはこぶあいだに息がたえたという。

林ノ内君は鍛造工場主任の責任を追及したが、もみけされてしまった。この事件からのち旋盤実習もやめになった。林ノ内君は東京ゆきの旅費をかせぐために鍛造工場の雑役をつづけた。

五条俊夫君は広島最初全協組織の結成にはたらいの同志である。一九三一年五月四日、いわゆる「5・4事件」で市川忍君、小笠原君らとともに検挙、起訴された。このうち小笠原君は病死し、市川君は入獄中精神に異状をきたしていた。五条君は出獄してから大阪へ、のこぎりの目立てをならいにゆき、広島へかえって、製材工場のめたて工としてはたらいの同志。親方の親類の娘と結婚したが、まもなくわかれ、製材工場もやめた。彼はあらためて旋盤をならって再出発しようとしていたのである。わかれた奥さんはみごもっていた。一九三九年の三月であったか、まださむいころ広島市の小さな寺で同志たちが告別式をおこなった5・4事件で起訴された三人は、かえらぬ人となった。

(4)

大藤軍一君(大月洋)、岨常次郎君たちは、そのころ島崎藤村の「夜明け前」の朗読会をやるのだといそがしがっていた。新協劇団が東京浅草であった「夜明け前」は大当りをとっていた。

朗読の練習には昔の同志もあつまってきた。マ

ネージャー役は大藤君がやっていた。

青山半蔵は岨君、寿平次は村上四郎君、牛方は井上栄君、寛齊は中沢晴海氏であった。彼はもと消費組合の役員をしていた。消費組合の会合がよく観音町の中沢氏の家でひらかれ、丸木位里さんも顔をみせていた。まだ丸木さんは絵のうれない苦闘のころだった。中沢さんは私をみると「このとしになって、まだこんなことをせにやあらん」といったが、たのしんでやっているようだった。

若い人たちもいた。金兵衛をやった才野力三君はみなから、いちばんうまいとほめられた。女専のグループもいた。おふき婆さんをやる山口とし子さんは戦後大阪府教組の婦人部長をやって、くるしい活動をしたが、おしくも死んでしまった。この女性グループのなかには高校生、吉本康二君の妹もいた。

朗読で役をうけもたないものも、応援団としてきていた。日曜日と水曜日は「安息日」なので安田君と私も、のぞきにいった。

新協劇団後援会は一九四〇年(昭和15年)八月特高の一斉検挙をうけた。責任者の大藤君はふたたび三年の刑をうけた。北支へいった岨君、村上君のほかは、朗読で役をうけもった男たちはみな検挙されて年をこすまで留置された。ナレーターをやった田谷春夫君はこの検挙から胸をわるくして西条の療養所へいってしまった。女では半蔵の妻お民をやった大前三枝さんが検挙された。おふき婆さんをやった山口とし子さんは東京にでたし、そのほかの女専グループも広島をはなれた。この新協劇団後援会広島支部のことについては、ほかのひとからかたられるとおもう。

わたしたちは、そのまゝに東京にでていた。一九三九年五月五日私は富士山のみえる列車の中で、となりのおばさんからかしわもちをもらった。「きようは五月の節句ですよ」とそのおばさんにいわれた。広島では六月五日が節句だが、なるほどこのへんでは五月五日なんだとおもった。出獄の一周年に上京することにして広島から列車にのったのだ。大阪で途中下車して岡本菊次郎君と昼間をすごして東京ゆきの夜汽車にのったわけだ。

私は東京蒲田の古末君のアパートにおちついた。古末君は蒲田の本庄製作所の事務員をしていた。

古末君は田園調布にいた吉田司君のところへつれていってくれた。彼とは私がすこしのあいだ、高校にいたときおなじクラスだった。野球ばかりやっていたがいつのまに運動にはいったかしらな

い。

吉田君のはなしでは出獄後親類がやかましくて、酒をのむほかはなんにもさせなかったという。いま川崎市の鋼板工業の株をかって重役ということになっているが、これもちろくじやない。毎晩おつきあいでのまなきやならない。「こんばんもまたのみじや」とあとは広島弁になった。

吉田君は五反田の鈴木製作所というのに紹介状をかいてくれた。そこで旋盤工の見習をすることにした。はじめは大型旋盤の先手をした。さきでというのは旋盤にかける大物をつりあげたり、とりつけたりの仕事である。けづりだせば半日でも一日でもすることはない。そのあいだに小型の旋盤をつかわせてくれ、いろいろおしえてくれた。

ある朝五反田にゆこうと、蒲田駅へゆくところ
で、ばったり迫桧盛登君にであつた。蒲田の六郷、
品川精機という工作機械工場に組立工として働い
ているという。その夜のんべ横丁でおちあつた。
彼のかたるところでは、いま蒲田、大森の工場は
工作機械のブームだという。組立てがおわると、
ペンキもぬらないのに、ときには精度のテストも
しないうちからひきとつてゆくという。「インコ旋
盤」ということはがはやつたそうだ。あちらこち
らの町工場で、おそまつなものをつくりすぎて、
値段がさがりし、精度もわるいので、うれなくな
つた。つぶしてスクラップにするしかないものが
でまわっている。戦前のインコやジュウシマツが
はやつたときとおなじだという。いまいつている
品川精機というのは労働者は二〇〇人くらい。堅
型旋盤をつくっているが「インコ旋盤」よりまし
なものだと迫桧君はいった。

林ノ内君も東京にでてきた。かれは六郷土手の
ちかくの町工場に雑役としてはいった。夏になつ
てから土佐の高知にかえる旋盤工についていっ
て、むこうの漁船の発動機修理工場で仕事をにお
ぼえることになった。そして正月をこして春になつ
てかえつてくると、迫桧君のいる工場に組立工と
してはいった。

索日」という日があつた。特高刑事は「要視察人」
のところをまわつて、なにかをつかんでかえらね
ばならなかつた。私の机の上にロシア語の新聞が
あつたという報告書を私はみせられた。ロシア語
もドイツ語も文字が英語とはちがつているので刑
事が早合点したのだ。ほんとドイツ語の学習新
聞だつた。

古末憲一君のアパートの管理人は特高におどさ
れて、何月何日だれがきたと蒲田署に報告してい
た。

第二独居にいるときとかわりがなかつた。手紙
をだしたりもらつたりも、日記や写真も用心しな
ければならなかつた。古末君のところには石川達
三の『結婚の生態』などのような小説五、六冊し
かおいてなかつた。私は機械学の本しかなかつた。
『戦争論』はまあよろうとおいていたら、一九
四一年四月八日の「広島グループ」検挙のとき、
特高はやっぱり知つていて、とりあげていった。

一九三九年の夏には私は五反田の工場をやめて
蒲田の金剛製作所にかわつた。古末君が、そこで
労務係をしている長谷川浩君に紹介状をかいてく
れたのだ。労働者五〇〇人くらいの工場で一五セ
ンチくらいの弾丸をつくつていた。おそらく迫撃
砲のたまだろう。ここでは旋盤ともよべないよう
なもの——コンクリートの台に旋盤の部品をとり
つけたもので、素人工が一個何銭という「うけと
り」で弾丸の部品をけづつていた。朝早くから仕
事にかかつて、ろくに休まないで、一日何円もか
せいだ。まともな旋盤をならべているところもあ
つた。私はそこへ日給二円五〇銭ではいった。

一九四〇年の夏、私のはたらいている工場の労
務係をしていた長谷川浩君が検挙された。おなじ
ころ広島で新協劇団後援会の一斉検挙があつた。
岡本菊次郎君と妻のとし子さんが東京にでてき
た。岡本君は古末君のいる本庄製作所の事務員と
してはいり、とし子さんは蒲田の小学校の先生に
なつた。

一九四〇年の秋のころだつたが、警視庁の特高
課長が「このさい左翼分子の一斉検挙も辞さない」
と談話を発表した。古末君は「みんな用心したほ
うがいい。林ノ内君などのみすけだからきをつけ
るようにいつてくれ」といった。

「用心しろといつても、用心のしようがないじ
やないか。」と林ノ内君がのんべ横丁でいった。そ
のころ迫桧君、林ノ内君と私は毎晩のように蒲田
ののんべ横丁で顔をあわせていた。広島からきた
者だけでなく、ほかの人たちともつきあっていた。
いまさら用心して、工場からまっすぐ家にかえつ
てふとんをかぶつてねるようなことをしても、検
挙されるときはされるのだ。

寺尾一幹君はこういつていた。「ときどきあつま
つていたなかまが、このあいだ検挙されたから、
こんどはこつちへまわつてくるかもしれませんわ
い。」まもなく寺尾君は検挙された。

一九四一年四月八日、「広島グループ」というな
まえで、私たちは検挙された。私と林ノ内君が自
動車のにせられてしばらくゆくと、みしらぬ男が
押収された本といつしよにのせられてきた。だい
ぶん検挙のあみがひろげられているようだ。

蒲田署につくと、ひとまず留置場にいれられ、
通路のかべぎわにたたされた。監房のなかから長
谷川浩君が看守になにかいった。私たちに自分は

ここにいと知らせているのだとおもった。そのうち林ノ内君だけここにのこして、私はそにだされた。そして早稲田署におくられた。

この留置場に薄田研二氏がこのあいだまで、いれられていたという。新協・新築地両劇団解散のとき検挙されたのである。映画にでているから留置場のものも、顔を知っていた。

もうひとり生活派の俳句で検挙された平沢という人が、一年ちかくおかれていた。もうかなりの年であった。何回となく手記をかいては警視庁特高課からきた刑事に「まだ、しらばくれるのか。こんどくるまでにかきなおしておけ」といわれているのである。

「私の俳句は天皇制や私有財産を否定し、共産党の目的遂行に協力するものであります」というように、うまく特高課の注文にはまるような手記にならないからである。

広島でも画家の山路商氏が特高にひっぱられて、こんなことをいわれたという。

「おまえのかく絵はシュールレアリズムという奴じやろう。シュールは自由主義じゃ。自由主義は共産主義とおなじものじゃ」

りくつにもなにもなっていないが、これが特高のりくつなのだ。やつらも女房子供をやしなっている。しごとをしていないと予算をへらされて、めしのくいあげになるのだ。薄田研二氏が釈放されるとき、生活俳句の平沢氏は「ながいおつきあいでしたな」と涙をこぼしたという。しかし平沢氏がでるまえに私たち「広島グループ」のものは一ヵ月で釈放された。大げさなまえをつけて検挙したものの、ものにならないとみて、釈放する

ことにしたのだろう。

この事件でやられたのは、古末君、林ノ内君、迫栞君、中川秋一君、数本英次郎君、岡本菊次郎君などだった。

寺尾一幹君は別のグループで検挙されて、なかなかでてこなかった。

太平洋戦争のはじまるまえ、思想犯の前歴のあるものをあらいざらい検挙していた。

蒲田駅ちかくの女の歯科者、吉仲さんもやられたし、全協刷新同盟にいたという吉本君や、そのほか蒲田でしりあつた人たちが根こそぎやられた。

私はでてくるとまもなく川崎市の工作機械工場に組立工としてはいった。おもしろい工作機械をやっていると、きいたからである。

そこではアメリカの歯切盤をまねてつくろうとしていた。飛行機の歯車は、そまつな歯切盤では削れない。

はいってまもなく、ドイツ軍がソ連に攻め入ったという号外がでた。

そのころ工場の便所のかべにこんな落書きがあった。

「労働者は団結してストライキにたちあがれ、労働者のたつときはいまだ」

ながいことそのままになっていたが、秋になると川崎の警察からきて、便所のなかにはいつて写真にとった。私たちの仕事をしているところの窓からそれがよくみえた。便所のなかでフラッシュをたいていた。こんどはその板をはがしてそで写真をとっている。「くさいのにごころうだな」とみんな窓からみている。

私のところには、なにもいってこなかった。川崎の警察と東京のそれとはなわばりがちがうのだろう。

「おっさんは共産党かい」ときく青年工があった。

「うん、まあね」と私はこたえた。

「日本が戦争にまけたら、労働者が解放されるというのが、どうもわからないな」とその青年工がいった。

こんなことを青年にはなした労働者があつたのだろう。

そのころの労働者の「規律」というものは戦後の工場生活からみても、「まるでなっていないかった」といってよい。

さむくなつてくるとストーブにあたつて、九時ちかくまで腰をあげない。仕事の台なんかどんどんこわしてストーブにくべる。油がしみているから、よくもえた。

もんだいの落書きのあつた便所も、板かべをはがしてたき火をしていたが、とうとう柱を一本ひきぬいてもやした。便所は三本あしでたつていたがそのうちにたおれてしまった。「便所をこわした犯人をしらせた者には賞金をあたえる」と社長名ではりがみがでた。共犯ばかりだからだれもいってゆかない。

食料のかいだしなどで休むものが多いから職場で全員そろうということはなかった。

労働者五〇〇人くらいの工作機械工場は、たいてい、にたりよつたりだった。

軍当局からは歯切盤を月産六台つくれと命令がきていた。しかし六台の歯切盤を組立ててから精

度をだすまでに三月もかかった。アメリカの歯切盤をスケッチして図面をつくり、その通りにつくるのだが、精度がでない。形ばかりできても精度のでない工作機械は三文のねうちもない。

そんなことをしているうちに太平洋戦争になった。

いくら、えらい人があっても、尻をひっぱたいて機械をつくらせるわけにはゆかない。労働者たちは「内職」といって、鉄板をくすねて鍋をつくったり、疎開あとから木ぎれをひろってきて下駄をつくったりした。

戦後のいまになると作業管理がきびしくなつて、作業時間をかいたカードにおいてられて、ナベやゲタをつくる時間はない。

もつとも、こんな工場ばかりではなかった。私のしっている大阪の旋盤工のはなしでは、大型旋盤の「おくり」をかけて、新聞をよんでいた労働者がまわってきた憲兵にひっぱたかれたという。「おくり」をかけて旋盤が自動的に削っているあいだ、何時間もすることがないのだが。

自然発生的にサボタージュ状態がひろがっていた。警察はするやすみしている労働者を留置場にいらたり、さかり場で「不良職工狩り」をした。そのうちにスターリングラードでドイツ軍が包囲されて降伏したというラジオニュースがながされた。岡本君はその夜ひとりで祝盃をあげたという。

一九四五年三月九日、陸軍記念日のデモンストレーションに戦車が銀座のちかくをはしっていたが、その夜本所深川一帯が空襲で全滅した。

四月には蒲田大森の工場地帯がやけ野原になつ

た。蒲田のやけあとで、林ノ内君と私は顔をみあわせてにがわらいをした。すこしまえ、迫栞君と奥さんが千葉県の方へゆくといっていたという。

われわれがよりどころにしようとした工場地帯が、やけ野原になろうとはおもってもみなかった。

私は罹災証明書で本籍地のある鳥取県米子市までのキップを手にいれた。米子製鋼所で旋盤を組み立てているとき、広島に「新型爆弾」がおとされたニュースがでた。そして日本軍の無条件降伏の日がきた。

一九四五年一二月のすえ、やっと広島に足をふみいれたのである。

(5)

一九四六年私は東京にいったが、党本部のまえで、むこうからいそぎあしでくる古末憲一君にあった。いま職場で組合をつくっているところだといつた。私もここでひらく別の会議があるのでゆつくりはなしができなかった。

寺尾一幹君を知っている同志がいて、世田谷の住所をおしえてくれたので、いつてみたがるすだった。

そのつぎに上京したとき、迫栞盛登君にあうことができた。吉田内閣打倒のデモがあった日のことだ。新橋のところでデモをみていると、「日本教具」というデモの列からとびだして私の手をにぎったのが迫栞君だった。私もデモのなかにはいり、彼と肩をならべて歩きながら国会議事堂へつくま

でかたりあった。それから銀座へでて、コーヒー店により、あやしげな紅茶をのみながら、しばらくはなした。

そのち私は神戸にきて、全日自労の運動をするようになった。上京して全日自労の本部がある産別会館にゆくと、となりの国民救援会の事務所に古末君がいた。

ある年の年末闘争には労働省前ですわりこみをするこになった。こんどこそ林ノ内君にあいにゆくと、古末君に連絡をたのんだ。

古末君はわざわざ鶴見駅前の県委員会事務所にいつてくれ、埼玉県の加須市までかえるとおそくなるので、林ノ内君のところとまったという。

上京した私は労働省との交渉がながびき、中野の宿屋にとまりこみで、そこからバスで労働省にゆくの、ぬけだして林ノ内君にあいにゆくひまがなかった。

さいごの日労働省まえで解散になったのは、くらくなつてからであった。夜八時すぎでから鶴見駅まえの神奈川県委員会に林ノ内君をたずねていつた。

かれのあたまは、まっしろになっていた。

「むかしの友達がきたので、私はあれします」と彼は若い人達にいつて、つれだつて出た。

「わしが県委員長というガラじゃないが、えらい人が沢山いるのに、なろうとしないんだ」とわらつた。

ついそこに屋台店があった。林ノ内の奥さんの顔があった。おくさんも声をあげた。林ノ内君の結婚のお祝いに四谷の「きよし」へ落語をききに夫妻をつれていつたことがある。あくる日おくさ

んがいった「うちの人があんなに笑うとはおもわなかったわ。てすりをつかんで大きな声で、からだをゆすつてわらうんですもの」

あのころは店にいつても何も売っていなかった。かれをそれだけわらわせたといえれば、いちばんよいお祝いだっただけかもしれないとおもった。

屋台店をでて、川崎のアパートへかえるみちで、林ノ内君は「このあいだかえるとちゆうでたおれたよ。血圧がたかいのだ」といった。私は、ぎくりとした。

アパートのかれの部屋には男の子がふたり頭をならべてねていた。彼はひとりずつ子供をおこして、便所につれていった。若い女がのぞいた。「新ちゃんの、おくさんだ」といった。新ちゃんも顔をみせた。林ノ内君や迫栞君のいた品川精機の見習工だった。いまは民主書房ではたらいにいるといった。

おくさんも店をしまつてかえってきた。八年もあわないからはなしがたまっているというものだ。

ドアをノックするものがあつた。青年が顔をのぞかせて「林ノ内さん、関東地方からレンラクがありました。こんばん、ガサがあるかもしれないということですよ」といった。

私は林ノ内君に自慢ばなしをした——自慢ばなしというのもおかしいのだが。

「わしは三回つかまつたよ。三回とも無罪だが、三回めは裁判で無罪だから、賠償金を一万八〇〇〇円とつたよ。弁護士が、きみが無罪になるとは、おもわなかったというんだからなあ。」

神戸の突堤には朝鮮の戦場におくる戦車や砲弾

がならんでいた。砲弾荷役のしごとが安定所におしつけられる。「砲弾荷役にゆくな」といえば検挙された。市役所ですわりこみをすれば「不退去罪」や「公務執行妨害」でつかまつた。

それにあの主流派と国際派のゴタゴタ。いまはすぎさつたおもいでになったが。

「このあいだ古末さんがきて、はなしていたけど、古末さんのところはおくさんがいそがしいときは、古末さんがてつだうんだって。うちとは、ぜんぜんちがう、ぜんぜん」とおくさんは「ぜんぜん」にちからをいれた。

三人でよくしゃべつたものだ。気がついたら三時だ。私は子供のそばにもぐりこんでねた。

林ノ内君はその後神奈川県会議員選挙に党からでて当選した。広島の実爆記念日に県会代表として出発するまぎわに心臓マヒでたおれて、それがさいごだった。

迫栞君の手紙には、彼のおくさんがたずねていったとき、林ノ内君は途中までおくつてきて「家のものには、心配するからいわないのだが、私はこのところとてもつかれて再起できそうもない」といつていたとかいてある。林ノ内君の子供は兄の方が二五歳、弟が二三歳になって元気にとめていると、迫栞君の手紙はむすんでいた。(1969年4月22日のてがみ)

あの第一回原水爆禁止世界大会には、私も兵庫県代表団にくわつて広島にいった。古末君も東京から大会にいったのだが、お互にあうこともなかった。

一九六七年春、私ははじめてゆつくり広島にかえることができた。現場でケガをしたので休業補償金十万円くれたからである。

こんども広島でだれのところもわからず敗戦のとしのくれにかえつたときのように、まごついた。それでまた宮島の小寺英雄君をたずねることにした。小寺君は廿日市でレコード店をやっていた。こんどは神崎宇市君のところを知っていなかったのだ、あえなかった。玖島君は死んでいた。

一九六八年夏、ふたたび広島市にいった。解放運動無名戦士の碑のまえにはじめてたつたのである。去年小寺君もこの碑のことをいわなかった。(わかつているとおもつたのだらう)。河原町の小学校友達の家をさがしまわつて、そのへんを何回もあるいたのに気がつかなかったのだ。あとからおもえば電話帳をくつてみれば、ほかの同志たちのこともわかつたのに。

一九六九年三月一日、無名戦士の碑におさめられた銅板になき同志たちの名がぎざまれているのみた。

やはり同志たちのことをかきとめておかねばならないとおもつた。戦前一九三八年に出獄したとき、われわれの活動はかきとめておかねばとおもつたのだが、それができなかった。戦争中はいつ特高にかいたものをみられるかわからなかったから。戦後は活動においまくられていたわけだ。

(おわり)

「一九七一年一月三日再プリント。一九八一年三月四日再記」

私は兄たちとは別に、呉市中通りの友田書店で店員の田中豊さんから左翼文書を買ってよんだのが、運動にちかづくきっかけとなりました。友田書店はのちに田中書店となりました。

その田中豊さんから服部久雄氏と、もうひとりの人を紹介され、共産青年同盟に入りました。

呉一中を卒業した直後(昭和七年四月)特高に検挙されました。

広島市の寿座へ左翼劇団「滝沢修さんや山本安英さんがきて、呉からみんなで見にいって」が、おそくなって呉へかえられず、滝沢さんたちのとまる宿屋にとめてもらい、ザコネをしました。あくる日呉にかえって検挙されたのです。

そのときは留置場におかれただけで出されました。すでに広島師範の二部に合格していたのですが、中学校も警察もだまっていたとみえてその方へは入学することができました。

師範学校在学中片岡義夫氏が連絡にきて、広高生や高師の井ノ口氏等の指導を受けた。昭和八年二月頃広島西署に検挙され退学処分になりました。

そのうち田中豊さんが私に三戸信人氏を紹介しました。党オルグの関谷源一氏にもあいました。中村定男さんの手記には、私が竹地定夫氏を中村さんに紹介したとありますが、どうも思いだせません。

私たちは呉工廠を目標にして、ビラの「ながしこみ」をやりました。このころオルグの関谷源一氏にいわれて入党しました。入党申込書をかくとか、委員会の承認をうけるというのではない時でした。

昭和九年の四・二六事件の検挙をのがれたのは、つぎのような事情でした。そのころ私はすこしでも労働の体験をしなければと考えて新聞配達をやっていました。朝早くおきて家をでて配達にでたあと憲兵隊からきました。私がいないので憲兵分隊に出頭せよといって帰った。私は親からそのことをきいて、そのまま逃げました。森島さんのところで高橋まつ子さんとおちあい、京都へのがれたわけです。高橋まつ子さんより私は年齢がすくないので、姉と弟ということにして大阪で間借りをしました。

松本徹のことですが、彼が吉本康二氏とともに大阪にきたとき、岩本巖氏(当時関西地方委員会)が、彼をひとめ見て「彼は非法活動している人間のように思えない。どうもおかしい」といっていました。

それから吉本康二氏がある文書の一カ所をきりぬいたものを松本徹にわたしたものがそのまま特高の机の上にあつたということもあります。

私は大阪にでてから、まえに呉で活動していた茂渡義人氏が東京の荏原にいたときいて東京へいつてさがしたものです。呉市の私立中学校にいて共産青年同盟に入つて活動していた朝鮮人の同志が、そのご東京の私立大学に入っているのをたよってゆき、しばらく茂渡氏をさがしたが、みつかりませんでした。

(一九八五年一〇月八日大阪市にて書く。文責岩佐寿一)

嵐に抗して闘いの中起訴された人々

当時の中国新聞・呉日新聞より一部抜粋

昭和六年

五月四日

「五・四事件」



上野 良子



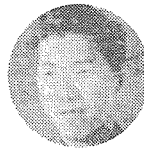
小笠原 豊



胡川 清



五條 俊夫



市川 忍

昭和七年

十月三〇日

「一〇・三〇事件」



宮内 謙吉



稲垣 宏



佐藤 彊



山口 義次



小倉 政弘



石川 茂一



前田フジエ



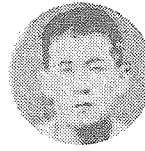
韓 利権



古田 稔



木村 莊重



山下 達吉



安田 祐俊



井上 満



野中 富雄



竹谷 時良



橋本 俊三



伊藤 正朔

昭和九年

四月二六日

「四・二六事件」



小川 正一



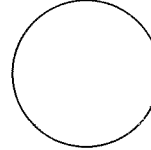
數本英次郎



岩佐 寿一



関谷 源一



北田 建次



吉田 司



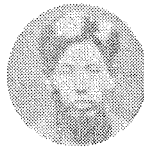
岡本 重康



迫樹 盛登



山本タキエ



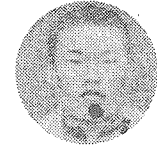
東窪 梅夫



茂渡 義人



高橋 渉



金 明文



小寺 英雄



穴戸 年春



正田 誠一



井上 榮



国本 金夫



南部 達三



永井 健造

當時の新聞記事・資料・年表

「当時の新聞記事・資料」の目次

一九二九（昭和四）年より一九三五（昭和一〇）年まで

（昭和四年）

- 。呉工廠左傾職工三名賊首 二〇九頁
- 。呉工廠内左傾運動者検挙 二〇九頁
- 。呉で初の治安維持法公判 二〇九頁
- 。県下の極左派検挙 二〇九頁
- 。中学生が秘密結社 二〇九頁
- 。共産党第二次検挙（片山峰登の記事） 二〇九頁

（昭和五年）

- 。呉工廠左傾職工一〇数名検挙 二〇九頁
- 。広島電鉄ストライキ 二〇九頁
- 。瓦電争議団員二〇名起訴 二一〇頁
- 。広島合同運送争議の公判 二一〇頁

（昭和六年）

- 。呉工廠整理問題 二一〇頁
- 。大胆な不穏文書撒布 二一〇頁
- 。昭和六年四月八日解雇人員発表 二一〇頁
- 。兵庫共産党事件一五四名を起訴 二一一頁
- 。起訴者・逮捕のもよう 二一二頁
- 。広島市津崎木材労働者検挙 二二三頁

。不穏ビラまき男格闘してとらわる

二一四頁

。初の広島共産党事件

二一四頁

（五・四事件）

。5・4事件まえの広島組織と闘争

二一五頁

。宣伝ビラなどで革命思想を

二一六頁

。市川忍・五条俊夫の公判闘争

二一七頁

。同控訴公判

二一七頁

（昭和七年）

。日本共産党広島地方委員会結成

二一七頁

。三・五事件検挙始末記

二一八頁

。三・五事件呉関係

二一九頁

。三・五事件起訴者

二二〇頁

。三・五事件県外検挙者

二二〇頁

。三・五事件呉関係起訴猶予者

二二〇頁

。ロシア革命記念日集会で検束

二二〇頁

。「文新サークル」の検挙

二二〇頁

（大阪・竹原）

。河上博士の娘、河上ヨシ子

二二二頁

。三・五事件公判（広島市関係）

二二三頁

。三・五事件公判（呉市関係） 二二三頁

。再び呉海軍に赤化の魔手のぶ 二二三頁

。一〇・三〇事件起訴者 二二三頁

。呉海軍赤化事件 二二三頁

。野村梅子・佐藤静枝・真佐子 二三四頁

。横須賀の赤化事件 二三四頁

。呉の水兵公判 二三四頁

。富山県下の共産党検挙 二三四頁

。長野県教員赤化の全貌 二三五頁

。西日本を震わした長崎共産党 二三五頁

。岡山共産党大検挙おこなわれる 二三五頁

（昭和八年）

。守田道輔検挙 二二五頁

。同関係者の検挙 二二五頁

（昭和九年）

。呉にアジビラ 二二六頁

。第三次共産党の検挙 二二六頁

。組織および活動の全貌（上） 二二七頁

。組織および活動の状況（下） 二二八頁

。四・二六事件起訴者 二二九頁

。広島高校自治学生会の再建 二二九頁

。岩田義道突撃隊の編成 二二九頁

。四・二六事件後の検挙 二二九頁

。四・二六事件公判判決 二二九頁

(大呉市民史P123 昭和4年の頃)
呉工廠左傾職工三三名被挙

佐光ら三名はこの夏来呉した無産者新聞記者 御影某と乗込して準備会設置に活動、呉憲兵分隊のとりしらべ家宅捜査もつけ、工廠を被挙さる。

今春、大山都夫来呉の際カフエーブラジルにおける歓迎会の席上、不都合の言をはいた狭間につぐ第二次の被挙で、そのさい佐光は海工会委員会で「狭間の被挙に対する当局糾弾および慰問」について論議したもの。

いまわが身にふりかかっていた被挙を家庭にしろすにしのびず、三人とも弁当をもってでて定時間には帰宅。清水にいたっては親をうしない弟妹四人の生計をささえていたもの。見習工を首席で修了、独学で正教員の資格をもつも、この「官の都合」をうけては免状も役にあたらず路頭に投げだされて悲惨。海工会委員会はこれをついに問題とせず、幹部の無気力を非難さる。

(大呉市民史P123 昭和4年の頃)
工廠内左傾運動者被挙

広島憲兵隊本部特高主任亀井特務曹長上京、同本部、警視庁の応援をえて捜査、眞鍋喜一を引致護送したが、右は最近呉工廠内での組織についてで、同人は九月上旬まで同職工に勤務

中、警固屋町に本部をおき、工廠職工一〇数名の同志と表面上讀書会をよそおい、ひそかに在京同志とレンラクをとっていたが、上京後は中継機関となっていたもの。事件は拡大のものよう。(東京)

翌年(昭和5年)四月二二日予審終結、治安維持法違反としてつぎの五名を公判に。

呉市蔵本通二丁目 職工 中田春雄(20)
本通一一丁目 職工 平原一雄(22)
警固屋町二丁目 職工 田中正雄(22)
音戸町 職工 山口 薫(24)
東京府住原郡目黒 無職 眞鍋喜一(26)

呉で初の治安維持法公判
六月一九日呉軍法会議 染川法務官ら五名が特別傍聴。公開禁止。午後六時におよび眞鍋喜一に懲役二年六月 罰金八〇円、山口、田口、平原に各罰金四〇円求刑。判決、眞鍋に二年。控訴して一年(未決90日通算)。上告棄却。

☆(広島県労会議編「広島県労働運動史」より) P366
呉工廠の共済組合購買所事務員 眞鍋喜一は工廠労働者の中田春雄、平原一雄、山口正男、山口薫に日本共産党の合法機関紙「無産者新聞」の購読をすすめ、讀書会を組織したところ、

憲兵隊に被挙された(1929年未)
非合法の極左派はその筋の眼がわりにとどかぬ(広島市)福島町、己斐町間に共産党のスローガンをつらねた宣伝ビラをはっているのをしった県特高課は、西署と協力して大活動。四〇数名を引致取調べ、一味の二十数名は最近三篠町三瀬山でピクニックと称して密謀をこらした形跡もある。また、大山都夫が統率する労働者の再挙をくわだてる印刷物を散布するなど不穏な行動の極左派も大被挙。

東、西、可部、海田市署で、玖島三一(27)ら十六名を被挙、とりしらべ、いずれも一段落して検事局におくる。玖島ら十六名は不穏文書散布だけでなく、社会科学研究会をつくりの名義によって秘密結社を組織し各地で宣伝準備中、ある種の陰謀をくわだてていることが発覚、十月二十一日から二十三日未明にかけて広島刑務所に収容ののち、樫田検事の指揮により四検事は数名の書記をしたがえ、西署高等係総動員、四台の自動車に分乗して市内外にわたる家宅捜査をおこなう。結果昭和五年呉市和庄通、船大工塚本政雄(22)もくわわる。広島市西寺

町、無職末元玄聡(26)ら七名の治安維持法違反事件を広島地方裁判所で四月十五日予審終結。

「わが國體を變革し私有財産制度を否認する日本共産党の目的遂行のためにする行為があったもの」として公判に。

六月二日から公判。傍聴禁止。二十日判決。玖島三一、末元玄聡に各懲役三年。横野二年。林二年(未決通算80日)。

(大呉市民史P124 昭和4年の頃)
中学生が秘密結社

一二月県立中学生(広島二中)七七八名が社会主義研究と称して不穏の行動あるを探知した広島西署は二三四日にかけて続々引致、一味の指導員組常一郎(19)は共産党広島支部の三瀬山会議にもくわわっている。

翌日東署では広島高校生二三名を連行、とりしらべ、県特高課異常に緊張。

(大呉市民史P124 昭和4年)
共産党第二次被挙(4・16事件) 片山峰登の記事

記事解説 一一月一五日。検挙者のうち片山峰登は呉市二川町、明治三六年生、高小卒後ただちに呉工廠造船部製図工、大正一一年、艦政本部製図工に転じ、大正一三年一月退職、東京合同労働争議に関係、共産主義

に共鳴。大正一四年、東京無産青年同盟委員長。昭和二年より、日本労働組合評議会書記となり、實際運動に加わっていたもの。

(呉日日新聞 昭和7年10月30日記事)
共産青年同盟中央委員片山峰登30求刑一〇年。判決八年。

(大呉市民史P162 昭和5年)
左傾職工一〇数名被挙

五月五日音戸署の協力を得て、某事件関連の工廠職工(24)など八名を喚問。兩名は一応帰宅。一人は音戸町で発行しつつある文芸雑誌「一路」の発行者および三日創立した雄弁クラブの幹事。第二回第三回と被挙つづき工廠従業員一〇余名。

(広島電鉄ストライキの記事)
(呉日日新聞 昭和6年1月3日)
広島瓦電争議は警察の手入れで団員一七五名を一挙に留置して五七名を刑務所へ

(昭和5年12月) 二九日の初発電車から罷業に入り四八カ条の要求事項を提出して会社側と相対峙し、その目的貫徹につとめていた広島瓦斯電軌株式会社乗務員よりなる広島交通労働組合の争議は、年の瀬もおしせまっていた三〇日午後〇時半ごろ、警官隊と争議団員の衝突からついに流血の惨事をみるにいたり、

これがため運輸クラブ内に止っていた団員三〇〇余名のうち一七一名は東西両署に検束され同夜から徹宵とりしらべが開始されてきたが、その結果某陰謀が発覚したものごとく、三十一日佐竹ほか五九名は西署から聞きとり書とともに身柄を検事局におくられ、その大部分は同夜、脅迫、放火予備、公務執行妨害の罪名によって、執行前の強制処分により広島刑務所に収容された。

リーダーを失い団員四分五裂警察の奸策に乗せられた争議団は自然壊滅

警察側のこのトリックにマンマとのせられ前衛分子のほとんど全部を失った争議団員は足並やみだれはじめ、のこりの団員中には同日ただちに会社に復職願をだしたものが多くで、各方面から注視されていた同争議もじつにアッケない跡を止めて自然壊滅の氣運になった。

争議解決の時期を誤った 要求の一部承認で折れたら 市民の声はいう

今回の争議に関し市民の間では次の如き声があがっている。争議団のリーダーがついに警察の手入れにあい、かく無惨に壊滅するにいたったことははなはだ遺憾である。二十九日の会社側の要求一部承認で妥結すべきものであった。

中間派一四名釈放

三一日午後一時半ごろ西署では四〇数名の争議団員の中間派を放免すべく小山行政主任が訓示中争議応援のため来広中の全国各地の大衆党員ならびに労働組合員が職員収容のため西署付近を徘徊していたので署員は極度に緊張、四名を留置するとともに放免を一時中止して四〇名を留置していたが、二日朝にいたりそのうち一四名を釈放した。

平日に復帰

二日市内線は例年の半数四九台で運転し、年内車輛数に復帰して乗客は不便を感じぬ程度となった。

(大呉市民史P195 昭和5年)

広島電車罷業

一二月二六日、二一カ条の要求書を提出したが、小シヤクな回答だと激昂。二九日罷業。運転台数わずかに。師走の市民は足をうばわれてさわぐ。六年八月二日全国大衆党中執委員、佐竹新一市議に懲役七月。

(呉日日新聞 昭和6年1月15日)
瓦電争議団員 二〇名を起訴
暴力行為公務妨害傷害 脅迫罪の名で

佐竹新市(33) 村井一夫(31)

縫部年美(20) 吉本隆一(32)
黄伍姓(26) 久下本有(29)
下井一郎(30) 松本京一(26)
藤原孝憲(2) 中越正雄(24)
中村百合雄(25) 佐川憲雄(29)
辻 繁(20) 杉本 幹(25)
塩田勝次(26) 仁井匠士(21)
有国喜太郎(28) 尾川 繁(25)
川上 精(26) 中山武夫(33)

(呉日日新聞 昭和6年1月15日)
広島合同運送争議の公判

小山幸太郎、鑄物工植本簡雄、栗山政太郎、広島自労下井一郎、中越正雄、活版工村上四郎(24)、大塩安嬬(31)
(懲役4ヵ月)

〔呉工廠整理問題〕

(呉日日新聞 昭和6年1月7日)
いよいよ工廠整理の最後の態度をきめる。ここ数日の間首脳部が海軍省で重要会議

軍縮に伴う海軍工廠整理については

一、整理人員数 二、退職手当の二問題を中心にして海軍省は大蔵省と職工との板ばさみとなり、ゆきなやみのまま今年にもちこされたが、議会再開までに決定して追加予算に計上しなければならぬので、海軍の従来研究をつづけた諸策につき最後の態度をきめるため、六日以後の数日中に、安保海相、小林

次官、藤田鑑政本部長その他関係官を招集して協議をくげ、整理人員の範囲をできるだけせはめ、かつ退職手当を五万円程度に低下せしめんとする大蔵省と最後の接衝を試みるはずで、これと同時に各鎮守府及各要港部の工廠長、工作部長ならびに会計部長に、本省において決定せる右方針を貫徹せしむる予定である。

呉二河公園で市民大会開催
来る一日午後一時を期し職工整理対策同盟会(記事略)

(呉日日新聞 昭和6年1月7日)

失業調査会を設け失業調査を始める。呉市できよう事務規定公布(記事略)

(呉日日新聞 昭和6年1月7日)
嘆願書に全呉市から署名

町総代連合会では七日午後六時から評議員会を市会控室でひらき、職工整理対策に関し協議をおこない、たたちに全市にわたって市民から嘆願書に調印をとるべく、打合せをおこなうはず。

(呉日日新聞 昭和6年1月8日)

陳情委員が大挙上京運動
呉市会と同盟会が提携して職工整理緩和に努む(記事略)

(呉日日新聞 昭和6年1月9日)
動揺すな 呉工廠で再度の通牒

(呉日日新聞 昭和6年1月21日)
〔職工解雇予報記事〕
呉工廠は四二〇〇人

横須賀二、二〇〇人 佐世保一、五〇〇人 舞鶴工作廠七〇〇人 広島工廠其他 七〇〇人 合計 九、二〇〇人
解雇手当 一人平均 六八四円

(呉日日新聞 昭和6年1月24日)
海工会に投げられた暗影
幹部から先づ誠首の噂

(呉日日新聞 昭和6年1月26日)
ある決意をほめかし対策を幹部に一任 空前の整理を前に海工会全員委員会

二四日午後七時公民館楼上、一五〇人以上。東京見物にいったのか」と幹部攻撃の声でる。

(呉日日新聞 昭和6年4月1日)
吉浦砲熖実験部内へ
大胆な不穩文書散布

(3月) 三十日午後二時ごろ呉海軍工廠、吉浦砲熖実験部内に、半紙半枚大の謄写版ずりの不穩文書約二〇〇枚がまかれていたのを、守衛が発見して大いにおどろき、急報により呉憲兵分隊及び呉警察署では、ただちに高等課員の總動員をおこないい、極秘裡に散布者の捜査に着

手したが、同文書は餓首および減給・絶対反対のスローガンをかきつらね、われら三〇〇〇人同胞を餓死戦線におくことに大反対の一大デモをおこなえといった内容のもので、同文書の撒布者は外部からは絶対にはいることができず、内部のものであったものか、あるいは内部と外部との連絡があつて、たぐみにもちこまれたものか、嚴重な捜査をしているが、すでに目算はついたもののように容疑者数名を引致して、嚴重にとりしらべている。

(呉日新聞 昭和6年4月3日)
めがね橋の不穏ビラの製作者は全協系の者

(4月)二日早朝第一門めがね橋での不穏ビラ撒布事件については、呉署、呉憲兵分隊では、職工整理を前にしているさいのこと、極度に緊急して高等諜員は勿論、総出動しているほかに、外勤者の応援もえて各方面に極秘裡に大活動を開始しているが、二日あさめがね橋で不穏ビラを撒布した犯人は同日ただちに呉憲兵分隊において逮捕し極秘裡に取調べており、犯人は六〇歳前後の自由労働者であるが今回二回の不穏ビラ撒布事件は全協系の者が潜入して、たくみに策動して行動を開始しているらしい形跡があり、これがため当局では今回ひきつづいてお

こつた不穏ビラ事件をもっとも重大視して、吉浦、ぬがね橋ともに同一犯人の所為にとらんでいるが……。

二日あさに撒布されたビラは、相当多数の従業員の手になたされているらしく、その影響の程度もおもんばかられ、且、人心の動揺に対しても重大な結果を来し、尚引き続き真犯人がいかなる活動を開始するやもしれず、必死の努力をもつて捜査している。

(呉日新聞 昭和6年4月7日)

三七〇〇余の工廠の職工さんあすいよいよ最後のおわかれ
8日あさ7時半から解雇指名内示

午前中には職工全部を退廠させ
正午まで構内通行禁止

(呉日新聞 昭和6年4月9日)
昭和六年四月八日 解雇人員発表表

呉工廠
総務部 一八人 砲弾部 水雷部 四七九人 電気部 二三八人 造船部 六四二人 造船機部 五四六人 製鋼部 六三九人 潜水艦 砲弾実験部 二〇人 魚雷実験部 一一人 電気実験部 二人 会計部 一三人 医务部 職工教習所 二人 合計 三、七二二人

(呉日新聞 昭和6年4月9日)
職工整理発表の日に不穏ビラ各所に撒布

(4月)八日あさにいたり、めがね橋、清水通、本通附近、長迫町一帯に数百枚のビラがまかれた。犯人いまだ逮捕にいたらず。

(呉日新聞 昭和6年5月2日)

一日あさ川原石方面の各電柱に「メーデーを敢行せよ」「労働者諸君団結せよ」のビラ。呉署員警戒中、路上に午前四時ごろビラまきの怪漢二名。一人は逮捕したがあと一人は、すがたをくらました。知人をイモツル式にしらべている。

(呉日新聞 昭和6年6月6日)

呉工廠整理めあてに不穏文書撒布事件検査者総数は一三名―事件の内容を呉署できょう発表―
呉工廠の整理予告の日をまえにして、さる三月三〇日早朝吉浦街道にところせまきまでにビラがまきちらされ、さらに同日

吉浦砲弾実験部内に配布、ひきつづき二日あさめがね橋附近において日雇労働者を利用して配布、及び市内各要所の公衆電話内に貼布され、さらに整理職工予告日たる八日早朝またまた工廠各衛門附近、及び市内全般にわたって広範囲に撒布するなど、たぐみに当局の警戒網をくぐり前後六回にわたって連続的

におこなわれたもので、事件は最後にさる四月三日あさ清水通り一帯においてビラを撒布しつつあった現行犯人、呉市曙町町田三郎(仮名)を逮捕するにいたつて、同人の自白により連続的に重要人物たる
本通り三丁目 末田良一(25)
吉川町 谷井政之(25)
中通六丁目 吉川 肇(22)
(いずれも仮名)等の中心人物の就縛をみるにいたつたものである。

前記末田は東大文科三年在学中で三月中旬ごろ全協本部の命をうけ早稲田在学中の前記谷井とともに呉市内に潜入し、地元呉市における実際上の中心人物たる吉川らと相謀り、思想上の共鳴者をときまわり、秘密読書会を組織し共同して工廠内外よりストライキを煽動していたものと判明した。尚上記犯人のうち末田は目下逃走、行方不明で、中央と連絡して厳探中である。

(呉日新聞 昭和6年6月6日)

各所に流血の惨事を演出し決死的検査の兵庫共産党事件きょう新聞解禁となる
検査百数十名中五四名を起訴
兵庫県下における第三次共産党事件(いわゆる2月事件)は昨年(昭和5年)三月より同八月まで半年にわたつて、首魁、阿部義美(31)外五四名を神戸地方裁判所思想係、有安、安達、

阿部義美が起訴、爾来、城予審判事の手により慎重なとりしらべがつづけられていたが、ついに今五日予審終結。被告中、半渡登は保釈中病死したので、公訴棄却となり、ほか五三名は全部治安維持法違反ならびに傷害、文書偽造行使、横領罪の嫌疑をもつて神戸地方裁判所の公判に付するとともに、即日、この事件の新聞記事一切は解禁された。

兵庫県下における同党の活動ぶりは今次の日本共産党中もつとも果敢にしてコミンテルンの指示をきわめて忠実に遵奉したもので、検査にさいしては三名の警官が、かれらの赤色テロの手によって重軽傷をおうたほどで、非常に重大視されていたものである。

いわゆる3・15、4・16事件の大検査をのがれた残党員の手によつて、日本共産党第三次組織の準備がなると、第三次共産党の巨頭田中清玄はひそかに一昨年九月来神し、三菱製紙高砂工場にもうけられている高砂工友会の幹部山本久米喜と某所において会合し、山本を兵庫県地方の仮オルガナイザーにおした。山本は田中の命をうけ、ま

佐藤春雄
伊沢五三郎(海員刷新会)
後藤耕作(神戸製鋼)
渡辺芳太郎(三菱造船)

松永太郎（市電）

外一味の被告を入党せしめ
た。

一方田中清玄らは、まもなく
宝塚音楽学校教師須藤五郎およ
び夙川の画家荒木某方にあつま
り、山本より党の組織情勢をき
くとともに、前記七名の党員に
ついて厳密なテストをおこなっ
た。

しかるに其の後にいたり、山
本はかねてより警察方面に相当
しられているので、検挙の危険
を感じただちに上京し中央委員
として活動するとともに故渡辺
政之輔の薫陶を受けた闘士とし
てしられる阿倍義美をして兵庫
県地方のオルガナイザーとして
西下せしめ盛んに党員の獲得に
つとめた結果、兵庫地方委員会
の組織を見、阪神、神戸、姫路
間を五地区にわかし各地区の地
区委員によって兵庫県地方委員
会を組織し自ら委員長となっ
た。

かくて一昨年末までに漸く兵
庫県下をはじめ京阪関西各地の
組織がなったので、こえて昨年
（昭和5年）一月十四日より四
日間、和歌山県二里浜の別荘で
プレナム会議（拡大中央委員会）
をひらき、田中清玄のほか一〇
名の党首脳があつまつたが、兵
庫県よりは阿部義美が中央委員
の資格により直接会議に参加
し、宗武五郎は警備隊として見
張りの役をつとめた。この会議

では党の組織および政治に関す
るテーゼを決定したが、まず同
年二月おこなわれた衆議院議員
選挙を機として党の宣伝、党員
の獲得を目的として勇敢なる選
挙カンパニアを執行することと
なり、しかしてカンパニアにお
いては「一人の党員、一人の同
調者といえども、現在の党とし
て重要であるから、逮捕を防衛
するための武器をもって起つこ
と」となり、神戸は海員と連絡
があるので、阿部は本部の命に
より、被告伊沢五三郎の手を介
して、平野方面に住む密輸前科
三犯の某よりローヤル八連発六
インチ拳銃一挺（一挺三五・
六円）を買ひもつとめ、うち七挺
を各地の党員にわたすため、党
中央部佐野博におくり、残余の
四挺を被告奥島政繁、宗武五郎、
阿部義美がもち、これに鋭利な
匕首、鎧通しなどの兇器を所持
したもので、三名を一組とし
た行動隊を組織した。

（その活動）
こうして総選挙をひかえた
（昭和5年）二月一日建國祭
を機として選挙カンパニアを
開始することになり、同日深更
より翌日一二日拂曉にかけて、
川崎造船所、市電従業員詰所（布
引、長田車庫）鉄道鷹取工場に
まずピラを撒布し、同月一四日
より一九日にかけて各被告人ら
は決死の覚悟をもって神戸、西
宮、加古川、高砂の各工場地帯、

港および姫路三九連隊管内、と
うくは岐阜県、浜松などにまで
でかけて、佐野博推薦その他の
ピラを撒布した。

被告人富島栄次、津彰の二人
は兵庫区川崎小学校前（川崎造
船所正門前）で二月一八日午後
四時ごろ上記ピラを撒布中、逮
捕にむかった兵庫署原田新次、
福富喜弥太面巡査にきりつけ、
原田巡査は右手および鎖骨部に
治療三ヵ月、福富巡査は眼瞼に
治療二週間の重傷をおった。

また被告人広瀬常次、井上清
次、藤井幸一は四月一九日鷹取
工場前で同様ピラを撒布中、逮
捕にむかった須磨署員中間伊三
二ほか一名にきつてかかり、中
間巡査は右太腿部上膊部に治療
三ヵ月を要する重傷をおった。
各地にはらまいたピラは総数
一五万枚にたつし、これは傳單
その他を特に神戸市長田区妙泉
寺一三二八にもうけられた印
刷局において元商大生田中清之
助ほか姫路高校生、神戸某高女
生徒らによって印刷されたもの
である。

（海上の活動）
日本共産党の海上への進出は
今回がもっともさかんで、こと
に神戸はその本拠を置いていた
もので、その活動はもっともめ
ざましかった。

これは神戸には「海員組合刷
新会本部」があった関係である。
海員刷新会は大正一四年ごろ船

内において、下級船員にたいし
て水、火夫長によっておこなわ
れている高利な賃金制度の撤廃
をスローガンとして、田中松次
郎、白土五郎（郵船雇員）など
によって郵船内に組織された海
上青年部と合同して、いよいよ
拡充し、海員組合と対立して、
陸上の元評議会と相呼応し左翼
となつて海上労働運動に勢力を
もつていたもので、幹部はつね
に共産主義を遵奉し、すでに田
中松次郎らは3・15事件その他
で東京において検挙されてる。

しかして刷新会は自然共産主
義の貯水池となり、今回の第三
次共産党海上部では第五地区と
して、宗武五郎を地区委員とし、
伊沢五三郎と協力、党員の獲得
につくし、被告 奥島政繁、名
倉一三、岩本徳次、半渡登、宮
田源吉、熱田豊作らを党員に獲
得、メリケン波止場その他の沿
港各所でピラを撒布するほか、
となく上海まででかけて「海上
労働者諸君」と題する海上労働
者によびかけるピラを撒布しさ
かに活動していたものである。

起訴者

松永太郎（21） 神戸市御蔵通五
丁目合本方（車掌）
後藤耕作 北海道上川郡美
英村原町四線一
宗武五郎（27） 神戸市荒田町小
野田方（無職）
大越徳一（25） 同四番町七倉田

方（電車車掌）
井上敬一（25） 同吉田町四（同
上）

中峯新吉（22） 同大橋町三間海
初次郎方
滝華一郎（22） 同浜山通二（電
車車掌）

細地実雄（20） 同入江通（同上）
渡辺芳太郎（24） 同笠松通一（機
械職工）

井垣政一（21） 同刈松通一（三
菱造船職工）
佐藤春雄（27） 〳大黒町二伊藤
方（船員）

伊沢五三郎（32） 〳長狭通一沖
野方（無職）
池上留義（27） 〳山手七中島
方（船員）

田村 弘（21） 〳湊東一篠田方
（船員）
平岡藤一（23） 山口県玖河郡和
木村（船員）

藤田重実（24） 岡山県真庭郡端
原村（船員）
林 勝芳（21） 神戸市神若通三
（職工）

白峯清士（21） 神戸市脇浜町一
今西方（職工）
中原猪之治（21） 神戸市旗塚町
六（職工）

灘浜喜伴（22） 神戸市若菜通六
（職工）
水口盛雄（22） 神戸市日暮通（職
工）

阿部義美（31） 神戸市御蔵通六
東谷方（無職）
一本松正雄（21） 神戸市荒田町

(鑄造見習) 飯尾芳彦(23) 愛媛県新居郡中萩村(無職) 福田常六(26) 大阪府西淀川区大和田町(無職) 岩本徳次郎(24) 佐賀県西松浦郡東山代村(船員) 名倉一三(26) 愛知県幡豆郡三和村 田中誠之助(21) 神戸市妙泉寺町(無職) 宮崎辰雄(21) 神戸市上楠通一(無職) 松村隆雄(22) 神戸市二宮町三(学生) 樋野忠次(25) 兵庫県加古郡荒井町(三菱製紙職工) 水野作治(25) 兵庫県加古郡尾上村(同上) 山本元次(24) 兵庫県加古郡高砂町(同上) 大西一男(24) 兵庫県加古郡尾上村(同上) 野村貞次郎(24) 兵庫県加古郡高砂町(同上) 佐藤安次(25) 兵庫県加古郡高砂町農人町(同上) 増田喜代治(29) 姫路市京口町(日本紡績播州連合会執行委員長) 姫野栄治(21) 兵庫県加古郡高砂町(職工) 岡政市(25) 兵庫県加古郡荒井町(三菱製紙職工) 松尾裁一(24) 兵庫県加古郡別府新野辺(同上) 天道正人(28) 神戸市野田町四	碓氷方 宮田孫吉(27) 愛媛県海津郡津島町(水夫) 熱田豊作(27) 千葉県匝瑳郡野田村(船員) 藤井幸一(21) 神戸市米町六(車掌) 治安維持法ならびに傷害 広瀬常次(24) 神戸市御蔵通四立川方(車掌) 井上清吉(20) 神戸市妙泉寺町(市電補助車掌) 宮島英二(21) 兵庫県佐用郡徳久村(無職) 津彰(21) 兵庫県武庫郡住吉村(外交員) 治安維持法・文書偽造行使 矢野雄雄(23) 神戸市御蔵通五(鉄工) 岡菊雄(30) 神戸市上沢通(無職) (逮捕のもよう) 宗武五郎 (昭和5年2月) 一七日未明、党海員伊沢五三郎四名にピストル、匕首の武装を命じて神戸製鋼所にピラマキを敢行した五郎はこえて一九日午前六時すぎ、党員池上留義をとめない、和田崎町三菱神戸造船所正門付近でピラマキ中、兵庫署中巡査に追跡されて同巡査の足もとをめぐり、三発までピストルをはなち、池上とともに逃走、荒田町一丁目某印刷屋の二階にか	くれるうち、二三日午前五時特高課村井警部補一隊がおそったが不在、午後六時瓢然と帰宅したところを逮捕された。 そのとき五郎は、ふところの左手にピストルをにぎりしめ、とりださんとしたが、間髪をいれず鳥越刑事におさえられた。 阿部義美 兵庫県における責任者阿部の潜伏場所は神戸市御蔵通六丁目駄菓子屋の二階。二三日午前五時金谷警部、浜中巡査部長の決死隊がむかしたが、外出のため不在。午後六時半「只今」と朗らかな声をかけて帰ってきた。肩手拭の風呂敷といたった調子。おどろかかった浜中部長、西巡査が阿部の両腕を扼したが場所がせまいので身動きできぬところをおさえた。 鈴木勝子 二〇日正午、勝子はただひとり神戸市長田区蓮宮町三丁目の空家に不安の睡眠を貪っていた。布団のかたわらには、ぬきすてられたスカート。いつでもとりだせるよう、きちんと整理された荷物。それに女のみだしなみ、化粧品入りのハンドバック。彼女はそれを忘れなかった。特高課中村警部補の一隊におそわれた勝子は何の抵抗もこころみようともしなかった。 伊沢五三郎 一九日未明、神戸メリケン波止場にあらわれた伊沢は、ベン	チにこう海員のむれにピラマキ中、神戸水上署特高係巡査に発見されサーナイフで抵抗したが、たたきおとされて逮捕。 天道正人 二月検挙のあみの目をたくみにのがれた天道は同年八月一日の赤色デーを期し、須磨鷹取工場附近にピラマキをしたが、顔みしりの須磨署松田巡査に発見され、コウモリガサで猛烈な抵抗をこころみだが逮捕。 かくて同年九月ごろまでにシンパサイザーおよび海上関係者は続々検挙。九月一六日党員熱田豊作の逮捕によって兵庫県における大検挙の幕はようやくとじられたのであった。 「木材労働者の検挙」 (興日新聞 昭和6年6月5日) 広島でとらわれた極左分子6名きよ検事局へ送致 さる二月一日以来広島皆実町居住、江波町津崎木材工場職工知永進(26)がオルガナイザーとなつて、 同工場職工 下端綱義(27) 水主町上川 川畑妙義(19) 江波町 山田庄二(22) 大手町八丁目 寺下四郎(36) 江波町 森田虎熊(30) の五名を、かたがい全国木材労働組合広島支部を組織し、3・15、4・16の記念日を利用して市内木材労働組合同志獲得をく	わだて、江波公園で度々会合して懇談会をひらき、極左系の不穩ピラを各所に散布して、党の拡大強化につとめおることを探知した西署高等係では県特高課の応援をえて大捜査の結果、前記六名を逮捕、久しきにわたつてとりしらべていたが、四日一段落ついたので一件書類とともに全員を送局した。 (興日新聞 昭和6年6月5日) 広島に一カ所無料診療所設置 基督教天主教会で計画 市は医師会の反対を恐る 広島市上柳町、カトリック系のキリスト教天主教会においては広島市内に一カ所の無料診療所もなく、ルンペン階級が困っているの、人類愛を基調とする宗教的立場より、黙視するにしのびずとあつて、市内に診療病院を設置する計画をたて、まづその前提として小規模の診療所を開設すべくすでに医学の本場であるドイツ国より、腕ききの医師三名を招き、このほど広島市社会課に対して助力応援方を依頼したが、これに対して市社会課では、市営の無料診療所設置にさへ、広島医師会の反対をうけ、現在のごとく診療はしても投薬はしない、ヘンテコな実費診療所」となっているの、 「一切無料の診療病院」の設置にたいしては、また医師会の反対があつてはこまる、との見地
--	--	--	---	---

より市医師会の意向をよくた
すことになっているが、実費診
療所の設置当時とは時代もす
み、かかる社会政策的事業に
ついて反対することは、かえ
て市医師会の不信をまねく結
果となり、実際においてルン
ペン階級には市医師会としても現
に治療券をだして救済してい
るほどであるから、反対はす
みている。

(呉日新聞 昭和6年6月5日)
広島市内の失業者統計
働きたくも職がない現世相の
実な表象

広島市社会課では国道改修事
業に使用する失業者の登録を、
過般おこなった際、参考のため
にと彼等失業者群の動態につ
いて詳細に調査をしたが、それ
によると

登録者九五五名のうち、
年齢においてもっとも多いも
のは、

二六歳以上三〇歳まで一九九名
三一歳から三五歳まで一八七名
三六歳から四一歳まで一二四名
二一歳より二五歳まで一二四名
などであって、それで見ると
失業の原因が本人の労働能力の
消失でなく、実に現代経済機構
の欠陥による、社会的失業とい
うのが、中に五六歳あるいは
六〇歳以上の高齢者、二〇名も
あるのは悲惨である。
生活ぶりをみると

家族をかかえたもの九三七名
うち一〇人以上の大家族五名、
八人以上の家族四六名、五人以
上の家族二七名、一人以上の家
族一八一名

失業の原因は、
業務縮小による整理一八四、休
止六二、業務廃止四八、軍備縮
小四三、行政整理一一、傷疾疾
病七五、労働争議一一、兵役関
係一一、など。

(呉日新聞 昭和6年6月10日)
不穏ピラマキ男格闘してとら
わる 広島市千田町の電鉄よこ
で犯人は元市役所の雇員

八日午後一時半ごろ広島市
千田町電鉄よこの小暗い路地で
一名の怪漢が不穏文書を電柱に
はっているのを西署千田町派出
所 横山巡査が発見、追跡大格
闘を演じ、横山巡査は右手に治
療一週間を要する咬傷その他を
おうたが、屈せずついに逮捕し、
目下西署で公務妨害並に傷害罪
として、とりしらべているが、
この男は

広島市南竹屋町元市役所雇員
小卓洋(26)(仮名)で昨年末電
鉄争議以来、赤色救援会広島支
部に入っており、もっぱら争議の犠
牲者ならびに家族のために、金
品の寄附勧誘につとめているも
ので、二月末にもモップルの名
によって市内の各高専、中等学
校に宣伝ピラを撒布し起訴猶予
となっており漸次テロ化したも

ので、西署高等係ではこの傾向
を重大視している。
なお同夜國泰寺町、関西病院
付近にも同様二種類のピラを、
吉田某が撒布したことが判明し
犯人捜査につとめている。

(大呉市民 昭和6年5月の項)
初の広島共産党事件
(6年5月)四日夜、広島東、
西署が宇品署の応援をえて大検
挙。

主犯 広島市 市川 忍(28)
五条俊夫(26) 胡川 清(28)
の三名にかかる治安維持法違反
事件。広島地方裁判所の予審が
昭和七年九月七日終結。公判に
付さる。

市川は広島郵便局に全協日本
通信労働組合支部組織をてはじ
めに、全協広島地方協議会を結
成、産業別労働組合会議の支部
をつくる。

五条は県立工業電気科中退の
のち無産運動にいきり、広島高等
学校生徒、瓦斯電軌従業員らを
誘導、労働争議に介入。

胡川は神戸高商中退、大阪外
語学校露語科に入り、校内の読
書会責任者の一人となり、昭和
5年の衆院選挙に日本無産党員
を立候補せしめるために、校内
から募金。外語の二月事件に連
坐、起訴猶予で輸旨退学。帰郷
後引続き無産主義理論の研究。
日本共産党及び、日本共産青
年同盟の指導下にある、日本共

動組合全国協議会ならびに日本
赤色救援会の左翼組織が直接は
じめて広島地方に手をのばした
画期的な思想事件として注目さ
る。

(昭和7年)十月二十五日公
判。検事の公訴事実にはいろいろ
としたとき、被告人会議を要求
してやまず、裁判長は市川、五
条に退廷を命じ、傍聴禁止を宣
言。弁護士から申し立てた「裁
判長忌避」はただちに却下とな
って審理を続行。証拠しらべを
おこなう。

市川、五条の控訴審、昭和八
年二月三日。前審通り四年と三
年を判決。

(中国新聞 昭和7年9月7日)
5・4事件 一斉検挙

昨年(昭和6年)三月ごろ東
署特高係員が広島放送局員伊藤
正朝ほか数名が『戦旗』の支局
をつくっているとききこみ、同
時に西署特高係員も西地方町某
家に『戦旗』支局をもうけ不穏
出版物を印刷配布しているとき
きこんだので、同家に入出入し
ている小野一明を西署田中巡査が
尾行したところ放送局にはいっ
たので、東西両署が連絡をとり
前記伊藤、小野ほか数名を四月
十六日にいたって一斉検挙した
結果、広島市を中心として『戦
旗』支局がもうけられているこ
とが判明した。

ついで前記二名の自白で『第
二無産者新聞』『無産青年』の責
任者が相次次郎であり、モップ
ルの責任者は胡川清、『戦旗』の
責任者は伊藤正朝であること、
また全協広島支部協議会ならび
に各産業別組合の支部が相当根
強く拡大されていることなどが
わかったものである。

全協事務局長は市川忍でペン
ネームを太田または川口と称
し、堀は安田、五条俊夫は森な
どの変名を用い、小笠原などと
ともに事務局員として活動して
いることが分明になり、その所
在捜査に着手したが不明だっ
た。

たまたま専売局女工上野良子
が全協専売局分会の責任者で同
局には多数の同志がいることが
明らかとなり、五月四日上野良
子を東署に引致取調べにより組
合の組織は自白したが、全協の
アソビや同志の所在については
口を緘してかたらないので、東
署は一応上野良子を釈放し竹内
主任、岡野巡查部長、黒山巡査
ほか数名が良子を尾行したところ、
良子は同日午後七時ごろ台
屋町源光院横の小路に入り付近
の空家から出てきた青年とその
まま他所にむかったのだ、黒山
巡査がこれを尾行、一方残りの
一隊は青年が出てきた空家をお
そい、いあわせた数名の男女を
たちまわりの上逮捕した。これ
らは市川忍、村上文二をはじめ

そのほかいづれも全協の幹部である。逮捕後たちには家宅捜査を開始したところ全協そのほかの証拠書類を発見するにいった。そこで警察当局は一味について詳細な調査を開始したが、かれらはいづれも口を緘してかたらず調査は困難をきわめたが、西署において全協木材労組の責任者池東完を檢舉、とりしらべたところ、広島地区協議会の責任者の会議はいつも郊外高天力原で開いたことを自白したので、西署三宅高等主任、紺谷部長、原巡查などが同所に急行、くさむらの中からメモ一枚と乗おこしの包装紙を発見、これを市川忍、胡川清、五条俊夫、小笠原豊などにつづつけた結果、かれらもついに口をわり一味の關係ならびに犯罪を自白するにいたったものである。

(中國新聞 昭和7年9月7日)

5・4事件まえの

広島組織と闘争

(一) 赤色救援会広島地区の結成
胡川清はかねてから広島で日本赤色救援会広島地区委員会を組織しようと企てていたところ、昭和五年十二月下旬ごろ東京赤色救援会本部所属の小原武臣(慶応大学生)から広島に赤救地区のオルグとして帰広を命ぜられた同学生原民喜から赤救地区の確立を命ぜられ、これを

承諾して昭和六年一月下旬ごろ小原武臣と広島市内で会合し赤救地区の確立につき協議して組織に着手し、自らその責任者となって、知りあいの広島高校生徒新田養三、同佐々木益三にその情をつけて助力を乞い、広島市段原町高村亮次方を赤救本部との連絡アドおよび事務所とし同年一月中ごろから原民喜のアクションによって直接救援会本部との連絡をたもち、同年二月はじめには赤色救援会本部から日本赤色救援会広島地区委員会として確立の承認をうけ、同年三月から戦旗広島支部(責任者伊藤正朔)と連絡をとり、また同年三月全協広島地方支部協議会が成立したので、これとも連絡をとり共同戦線に出て左翼出版物配布網を拡大し、いよいよその活動に入ったが、その拡大強化をはかるため

名義の「狂暴化する当局の弾圧に抗議せよ。戦闘的同志統々奪はる」と題した救援ニュース、同年四月はじめ同所で同委員会名義の「瓦電爭議犠牲者が救援で出ろ」と題した救援ニュース、「国際赤色救援会」と題した文書を各七〇部づつ騰写印刷してつくり、市川、堀、伊藤、新田、佐々木、高村および沼隈郡柳津村山根清らに交付。

(二) 広島最初の全協組織

市川忍は、つとに広島地方において全協の組織をもつとの意図をもっており、昭和五年十月ごろ、同志堀常次郎、蔵重久夫などと広島市三篠町郊外に会合し、全協広島地方協議会準備会を創立し、そのころ堀常次郎を介して五条俊夫と相知るにいたり、ともに広島で全協産業別支部を組織し、活発な活動をしようとはかり、それぞれ産業別支部の結成に着手してのちも、支部組織の担任につき、しばしば協議変更していたが、市川は昭和六年二月はじめ左傾的優秀分子小笠原豊に対して全協日本組織維労働組合広島支部を村上文二に対して全協日本食料労働組合広島支部を寺尾一幹に対して全協日本化学労働組合広島支部を、ついで同年三月ごろ松本徹に対して全協日本金属労働広島支部を、また五条は昭和六年二月はじめ吉田義雄に対して、全日本出版労働組合広島支部を、二月中ごろ山本正一に全協日本木材労働組合広島支部を、いづれもその責任者となって組織するようすめ、小笠原、村上、寺尾、松本、吉田、山本はこれを承諾して責任者となって結成することにし、市川は全協日本通信広島支部、五条は全協日本交通運輸広島支部の責任者となる。

なほ市川は昭和五年十月ごろ大藤軍一にたいして、全協日本通信労働組合広島支部のもとに広島郵便局分会を、五条は昭和六年二月ごろ松本武司に対し全協日本交通運輸労働組合広島支部のもとに、国鉄分会をそれぞれその責任者となって組織するようすめ、大藤、松本はこれに応じ、かくて、村上文二は、広島地方専売局を目標として、女工員、上野良子ほか九名を獲得して全協食料広島支部、専売局分会を、吉田義雄は、広島市市川活版所を目標として職工村上四郎ら五名を獲得して全協日本出版労働組合広島支部市川活版分会を、山本正一は、広島市津崎製材所を目標として、職工下川浦右エ門ら七名を獲得し、全協日本木材広島支部津崎製材所分会を、大藤軍一は、広島郵便局従業員三名を獲得して全協日本通信広島支部広島郵便局分会を、松本武司は、広島國有鉄道従業員新原博ほか四名を獲得して、全協日本交通運輸広島支部國鉄分会をそれぞれ結成し、小笠原は、広島東洋紡績広島工場を目標として、職工児玉幸夫ほか五名を誘導して、全協日本組織維労働組合広島支部東洋紡分会を、松本徹は、日本製鋼所広島工場を目標とし、寺尾一幹は、帝國人絹広島工場を目標とし、五条俊夫は、広島瓦斯電軌株式会社ならびに広島バス株式会社を目標として、それぞれ分会を組織すべく画策した。

設置された

全協広島地方協議会

支部の結成ができたので、市川、五条は、同年三月九日、広島市段原町野村種男方の裏さしきで、そのほかの産業別支部責任者と会合し、市川から各産業別組織が結成されたことをつけ

て、全協広島地方協議会を結成するむねをはかり他の責任者はこれに賛同して、ここに全協広島地方支部協議会を確立し、市川が協議会の議長となり議案の提出、議事の進行をつかさどつて、この第一回の席上で、同協議会是在広島「戦旗」支部および日本赤色救援会広島地区委員会と連絡をとり戦線統一にすることを決定。

第2回協議会の席上で、事務局の設置の件を協議決定し市川は事務局長、五条、組は事務局員に就任した。

また上記野村方における数次の協議会で3・15、4・10、4・16、5・1など無産解放運動上の各記念カンパニアにつき、協議決定した。

(1) 三月九日の第一回協議会で3・15記念カンパニアにつき市川は各責任者に対して、三月十五日は日本共産党が検挙された重要な記念日だから、各支部では闘争力と情勢に応じて勇敢なカンパニア（ピラまき、ポスターくばり、あるいは座談会など）をおこない、もって大衆に革命意識を注入し、党および全協の拡大強化をはからなければならぬ

と提議し五条はそのほかの責任者は異議なくこれを可決した。

(2) 三月下旬の協議会で4・10記念カンパニアにつき、即ち左翼三団体（労働農民党、日本労働組合評議会、日本無産青年同盟）が結社禁止を命ぜられた記念日に結びつけて闘争せねばならぬと協議決定した。

(3) 四月上旬の協議会では、4・16記念カンパニア——昭和四年四月十六日に日本共産党が再度全国的な一斉検挙をうけた記念日にむすびつけて、闘争するよう協議決定。

そのころ小笠原が目標工場として全協日本繊維の分会を組織しようとしていた東洋紡績広島工場内の職工が賃銀値下げ、減首のために動揺していたのに乗じて彼等の不平不満を激発させ、もってストライキにみちびきひいては広島全産業のゼネストに展開させるため4・16カンパニアにむすびつけて全協産別各支部は繊維支部に応援のカンパをすることを決定。

宣伝ピラなどで革命思想を

この協議会の決定にもとづき

(イ) 五条は四月上旬、瓦電ならびにバス兄弟諸君と題した全協日本交通運輸広島支部名義のピラ約一〇〇部をつくり、同月十四日ごろ、広島市千田町広島瓦電合宿所、同己

斐合宿所および千田町広島バス従業員詰所に撤布。

なお、市川および小笠原は四月中ごろ上記野村某方うらさしきで「親愛なる兄弟」または「親愛なる紡績の兄弟につぐ」と題して、会社の暴逆を攻撃し『男女工は団結して会社と闘い、即時ストライキ委員会を組織せよ』と主張、労働者に対して宣伝煽動的に革命的思想を注入したピラ一〇〇枚（全協日本繊維労組広島支部名義）をつくらって東洋紡績工場に撤布。

また、市川、小笠原、村上の三名は4月十二日ごろ野村方で「親愛なる労働者諸君」と題した全協日本食料労働組合広島支部名義のピラ三〇〇枚をつくり、四月十日ごろ村上文二が広島地方専売付近に撤布。

(ロ) 市川は同協議会と日本赤色救援会との連絡の衝にあたり昭和六年三、四月にわたりその責任者胡川清から救援新聞第十六号、十七号、十八号（いずれも発売禁止）ならびに日本赤色救援会広島地区委員会名義の救援ニュースを四十五部うけとり、協議会開催のた

びに各支部責任者に頒布して、その所属会員などに閲読させ

(イ) 五条は、同協議会と戦旗広島支部との連絡の衝にあたり、同支部のインテリの傾向を排除して活発な活動にみちびかんと志し、その責任者伊藤正朔らとはかりみづからその組織宣伝部員となり、戦旗の宣伝配布網の確立により読者の拡大をはかることになり四月中ごろ東京の戦旗本社から支局に送られてきた「戦旗」三・四月合併・白色テロル反対号（発売禁止）を伊藤から三十部うけとり協議会の席上で各支部の責任者に配布回読させた。

(1) 五条は昭和六年二月中ごろから四月まで数回にわたり全協本部または全協・日本交通運輸労組本部から「第二無産者新聞」四八号・五三号、「無産青年」五〇号・五六号、「労働新聞」十号・二三号を約二〇部づつ送付をうけ、またそのころ「三月一日万歳事件にさいして敬す」「4・10、4・16記念日にさいして敬す」などと題した全協名義のピラ「メーデー闘争方針の訂正についての指令」と題した全協中央常任委員会名義の指令、「工場内における組織活動」と題した全協・日本交通運輸労働組合名義のパンフレットなど各数部づつ送付をうけ、自ら、あるいはレポーター新原博を介して国鉄分会責任者松本武司、木材責任者、山本正一らに交付して各所属分会員らに配布回読させた。

(2) 市川は

(イ) 全協ないし日本共産党の革命意識を注入しこれを全協組織内に獲得するため昭和六年二月はじめから同年三月はじめまで数回、広島市段原町野村種男方うらさしきで研究会（小笠原、村上、松本ら出席）

(ロ) また同年二月はじめから同年四月はじめまで同所でひらかれた、広島地方専売局女工上野良子ら数名の研究會にいつれも指導者として出席して「国際闘争の経験から学べ」と題したパンフレットを配布回読させあるいは全協の綱領、組織を詳説して全協が日本共産党指導下に無産大衆のため勇敢に活動し、党を支持している革命的労働組合であることを説明した。

(ハ) また、昭和六年三、四月にわたり東洋紡績広島工場職工児玉幸夫ほか五名を広島市銀屋町小笠原豊方で座談会名義で招集して小笠原、松本徹、児玉らに対して現在の資本主義制度の欠陥を指摘し、ソビエト・ロシアを讃美し、労働者は団結して資本家に対して闘争せねばならぬと力説し、戦旗の購読を勧誘した。

(ニ) 昭和六年三月中ごろ石野方で同志組常次郎より日本共産青年同盟の綱領政策などを掲載した同盟の中央機関紙「レーニン青年」創刊号同一

号の配布をうけて閱讀し、ついで去ビル四階の小笠原に閱讀させた。

(呉日新聞 昭和7年11月26日)
被告人會議を要求して騒ぐ、ただちに傍聴禁止 広島共産党事件

日本共産党および日本共産青年同盟指導下にある日本労働組合全國協議会ならびに日本赤色救援会の左翼組織が直接はじめて広島地方へ手をのばした画期的な思想運動事件として注目されている。

広島市牛田町元広島郵便局員 通信書記 市川 忍(28)
同 白島中東元衡器製作 職工 五条俊夫(26)
広島県安芸郡温品村 胡川 清(24)

の三名にかかる治安維持法違反事件の公判は(昭和7年11月)二十五日午前十一時から広島地裁で小玉裁判長係、片岡検事立会のもとに開廷、検事の公訴事実にはいろいろとしたとき、突如として市川が手をあげて発言をもとめたが、裁判長は検事の陳述があったのち発言の機会をあたえるからと、おしなだめようとしたところ、市川はなおも「法廷にのぞむにあたつてわれわれの態度方針を決定するため、被告人の協議をゆるしていただきたい」と被告人會議を要求し、

五条もまた立って何か発言しようとして、裁判長の制止をきかぬので、裁判長は、「裁判長の指揮にしたがわなければ退廷を命ずる」と宣言。なおも兩名とも発言しようとするので、ついに裁判長の命令により兩名とも看守の手で退廷させられ、つづいて傍聴禁止を宣言し、傍聴人一同はいずれも静かに素直に退廷した。ときに一時二五分。

なお検事の公訴事実の陳述は市川が発言して混乱中に検事が立って発言したので、よくききとれなかったが、「予審終結決定書の事実について審理を求めます」と簡単に陳述したのもうで、傍聴禁止の後の公判は弁護士から申し立てた裁判長の忌避はただちに却下となり審理を続行されたのもうで被告人を退廷させたまま、裁判長と面席判事、検事と弁護士だけで、とりしらべがおこなわれたようである。

(呉日新聞 昭和7年12月6日)
広島共産党員に判決言い渡さる不穩の絶叫をあげて公判廷を退場

五日午後三時から、被告欠席のまま審理をおわった事件の判決は、同地方裁判所の陪審法廷でひらかれ、これよりさき同法廷は東西両署の私服巡査をはじめ、被告らの関係者及び家族がギッシリとつめかけ、かくて裁判長は型の如く身分しらべののち

ち 市川忍を懲役四年
(未決30日通算。求刑5年)
五条俊夫 同 三年
(未決30日通算。求刑3年6月)

ときびしく判決するや、市川、五条の兩名は大手をひろげ「弾圧下における欠席裁判は絶対反対である。すみやかに同裁判の撤回を要求する。日本共産党万才」と大声をあげて退場した。

(呉日新聞 昭和8年2月18日)
転向の被告へ三年
片相手四年を科せられ豪語
広島第一次共産党事件に檢舉され、控訴中の、
広島市牛田町 無職 市川 忍(29)
同市 白島町 無職 五条俊夫(27)

の兩名にたいしては十七日午後広島控訴院で鹿島裁判長から原審どおり、市川に懲役四年、五条に同三年(ただし、いづれも未決通算三〇〇日)の判決言いわたしがあつた。

控訴審では、五条が入獄中思想の転向をなし第一回の公判でこれをのべたので、万一公判廷において市川と衝突してはと、別に判決のいいわしをしたが、市川は、「思想犯にたいする極刑反対」など大声でさげび退廷した。

(大呉市民史 昭和7年3月の項より)
日本共産党中國地方委員会

昭和六年五月四日の全協事件一斉檢舉後(呉から)広島へのがれてきた古末憲一は5・4事件の残党組常次郎、京大の二月事件で保釈中の寺尾一幹と連絡。

昭和六年七月呉が上京、日本共産党に入党してかえり、ただちに古末、寺尾が入党。日本共産党中國地方委員会を創立。松本武司も入党。

呉を呉に派遣。かれは呉で服部久雄と活動。一〇月上京し、これにかわつて寺尾一幹が呉に。

この年九月一八日「満州事変」おこる。反戦運動を勇敢におこなう。

日本共産青年同盟は吉岡道人をオルグとして活動。全協など再組織。

昭和七年三月第一次檢舉三〇〇余名。

檢舉もれとなつた呉海軍の水兵細胞は昭和七年七月満期退団となつた木村莊重を中心に坂口喜一郎、平原甚松が組織の再建に活動。

昭和七年一〇月はじめ、錦織彦七、滝川恵吉のオルグが広島市にきたり本格的に組織に活動しだしたところ、一〇月三〇日の熱海會議に中國地方を代表して出席した錦織彦七の檢舉に端

を發して広島、呉両市の檢舉となる。

前記 組常次郎(22) 広島での共産党の草分け。昭和六年の初めの広島共産党事件(市川、五条ら) 昭和四年の県下極左大檢舉(玖島、末元) にも関係していたが、そのつと、たくみにのがれ、昭和七年三月五日の事件には前年一〇月に上京。檢舉當時は共産青年同盟中央委員長の要職にあり。

寺尾一幹。一審は懲役五年、控訴して転向手記をみとめられ、懲役三年、執行猶予を得。しかし昭和一六年四月、マルクス資本論を研究中檢舉されて懲役四年に処せられ、一審で服罪、終戦直後に出所。

昭和七年五月、呉署はのちに十月事件で檢舉した平原甚松をとらえ、とりしらべののちに釈放したが、このとき坂口の「そびゆるマスト」はすでに第一号を発行しており、ともに海軍赤化の具體的運動にはいつていたものにかかわらず、呉署はこれを探知しなかつた。

木村莊重は在役七年におよぶも一等兵。かねて同人の日記により左傾思想を伺われ、進級停止をくつていたもの。満期退団は同人がひとり。十月事件にとらわれるも転向を肯んぜず。終戦後、郷里鹿足郡木部村にかえり共産党村長として永らく在任。村内の共産化につとめた。

(呉日日新聞昭和8年5月23日)

広島地方最初の共産党狩り

3・5事件検挙始末記広島篇
左眼をねらってひとつき

偽高師生は元兇 古末

(発端) 昭和七年三月四日広島高師にいたる学生があらわれ、

しかも千田町二丁目國広某方二階にいたることを同校学生主事補

尾坂鶴夫氏が発見して、かくと鷹野橋派出所につけ、上川、三

浦面巡査が同日午後四時ごろ、國広方にいたり偽学生を訊問し

たが、言を左右にして、でたらめなことをならべ、態度があや

しいので、とにかく交番まで同行しようとして上川巡査がなげな

く手をだすと、偽学生は突然右手にもついていた鉄筆をもって上

川巡査の左眼をついてきたので、右手にこれをうけとめたため、鉄筆は右手にふかくささ

った。偽学生は二階にとびあがったので、大格闘を演じ、さらに

屋根の上にとびだしたのでなおもこれを追跡、さらに地上にと

びおり大格闘のうえ逮捕した。この間三浦巡査は二階を捜査

した結果、沢山の共産党関係の書類があらわれたので、おどろ

いて本署に報告。峻烈なとりしらべの結果、同夜一時にいた

り、ついに共産党首領である中国オルガナイザー大島こと古末

憲一であることを自白した。

伊藤西署長はこのむね、ただ

ちに異特高課ならびに松本警務官補その他に報告協議した結果、検挙の時期をはやめて、三月五日午前を期し党員の検挙にあたり、広島市内に潜する七七名の中心人物を総検挙するにいたったものである。

(かくて3月5日)

西署全署員を

八隊にわけておそう

広瀬、三條のアジト、河原町、國泰寺町の会合場所を一齐にお

そい、村上文二、村上金彦、花野岩男、井上その、仁井田教一

外数名を検挙。

仁井田教一は舟入町八千代館よこ空家に潜伏していたが、巡査がはりこんでいるともしら

ず、外出さきからゆうゆう革命歌をうたつてかえったところを

巡査が誰何。仁井田は柔道初段のつわもの。巡査は眼の附近に

全治一〇日を要する負傷をおい、顔面血まみれになり四〇分

あまりの格闘のすえ逮捕した。東署に紅一点

(2)皆実町消費組合事務所をおそい、迫栞盛登(31)ほか二名。

(3)大須賀町松本武司方をおそったが、てがかりなし。

(4)皆実町井石竜爾方をおそい松本徹を逮捕

(5)皆実町 車田徳三郎方で金平

國外三名

(6)幟町 伊藤正朔(26)を逮捕

(7)鉄砲町石川茂一(23)を逮捕

同日夜にいたり街頭連絡中の鄭謙容(25)ほか二名逮捕。六日あさ稲荷町川村方で孫泰玄(23)ほか一名。

一〇日あさ南竹屋町高校生梶川英雄(21)、同町奥島方鄭享植(25)。

午後堀川町吉岡道人を街頭連絡中逮捕

紅一点の天津せい逮捕。

留置場を脱走

海田市と廿日市で

総検挙を遂行し効を奏した西署では村上文二を海田市署に依

托していたところ、四月二日村上はたたくみに留置場をやぶ

て脱走したので、ただちに署員の非常召集をおこない、広島市

材木町安楽院うら中村某方に潜伏していることをつきとめ、五

月八日早朝おそったが村上は匕首をぬく間もなく雨戸をやぶ

って逃走せんとしたところを逮捕された。

又仁井田教一も廿日市署に依託されていたが同様留置場をや

ぶって逃走。かねて広島市内に潜伏しているものと同署で捜査

中、段原町小阪行夫方工場寢室に潜伏していることをつきとめ

五月一日午前二時西署から一〇数名廿日市署から二一七八名

がおそって逮捕した。

再挙に奔命の一味を逮捕
残党組はこれが再挙をはから

んとして嚴重な当局の眼をかすめて、ひそかに運動していることを西署が探知し四月二八日彼等の一味から某工場の女工におくっていたアジ文書を発見し、

巡査から報告してきたので、特高で捜査に着手したところ、新

川場町谷本洋服店下宿の自称高校生徒瀧本敏美(21)の挙動が

不審なので注意中のところ、つねに同人の下宿には数名の同志

が会合し、ことに岩國人綱に手をのぼしていることが確実とな

ったので、四月一九日岩國人綱工場から帰広、己斐駅に下車し

たところを、有無をいわさず逮捕し、ただちに突撃隊数名が下

宿をおそい、赤旗、不穩ビラ、トウシャ版など押収してひきあ

げ、そのあとに共青呉地区責任者である片岡義夫(25)ほか3

名がもどってきたところを大格闘のうえ逮捕し、とりしらべの

結果この一味は3・5事件で破壊された党組織を再建すべく前

記谷本方を書記局として不穩ビラを数回印刷発行、『赤旗』を党

から入手して配布していたもの。

若林巡査刺さる

五月十日午後七時ごろ西署特高若林巡査が通行中の井ノ口俊

夫(4月29日逮捕同夜脱走)にであつたので、これをとりおさ

えんとしたところ、刃渡七寸の短刀で若林巡査の腹部をつきさ

したが、若林巡査は重傷にも屈せず数日追跡したが、暗夜ではあるし小路が多いところなので、逮捕することができなかった。同署が苦心捜査、大阪府の特高の応援をうけて六月二日逮捕。

(大呉市民史P272 昭和7年3月)

3・5事件 呉関係

長蛇を逸した砲台山

昭和六年八月ごろ、岨常次郎と服部久雄が呉に潜入したことを呉署で探知したが、かれは危険をうけて呉を脱走。かわって

寺尾一幹が潜入。呉のオルグとして活動しているのを探知。昭和七年二月一日阿賀砲台山で

呉地区委員会がひらかれるのをうけて特高数名が急行したが、

いちばやく四散。

街頭連絡から 学生自治会

四月一日特高、川崎巡査が街頭で、興文中學五年生、金圭順

(19)らが自治会について、はなしあっているのを、たちぎき

して尾行して下宿をつきとめ、京町四一、神谷方をおそって、

金圭順、康洪雄(20)、白鷹以

(19)、李東伊(18)を検挙。家宅捜査で「無産者新聞」その他

を発見。自治会の実体をつきとめる。そのほか興文中學、呉一

中からも二三名逮捕。

金の自白により連絡にきた自治会のキャップ、共産青年同盟

員蒲田政雄を逮捕。

翌日未明、亀田勢、大下一、佐々木修三、山根の四名を。つづいて三日、茂渡義人。一六日、山崎政高と一味を逮捕。

さらに蒲田政雄に学生自治会のキャップをゆずった片岡義夫のゆくえを追及した結果、五月五日にいたり手配により広島西署が逮捕。これにより、呉地区の組織のアウトラインをしる。工廠細胞もついに

五月一日ポストに手紙をいれようとしている、おとこが寺尾一幹にしているのを、よびとめて一、二問答するうち、にげようとするので格闘逮捕。

つづいて同人のかくれが呉市西本通り二丁目一をとおってハウスキーパー林寿恵子を逮捕。

これにより工廠細胞が漸次判明、あくる日一日海工会理事にして革新同盟員たる上田総を工廠のかえりみちで検挙。同人の自由により一三日同盟のキャップ川窪鉄之助その他佐々木万寿司らを検挙。一八日西川成実、一九日重田安一らを逮捕。

(三〇)日未明午前二時ごろ寺尾は手錠をはめたまま逃走、そのご行先は、ようとして判明せず。

三〇名の武装警官が今西通り二丁目、上田総方に寺尾一幹が潜伏中とみておそう。るすをよ

そおって、かぎをかけてひそんでいる部屋のドアをけやぶってはいり、松本京一を逮捕。(寺尾はついに発見されなかった)

二六日宇都宮、野原、小川の三名、三〇日池上を逮捕。(いづれも工廠労働者)

一方シンパとして活躍していた広村小学校訓導、城戸薫を逮捕。

(十川巡査ら五名がむかつたが、おりから児童を引率して郊外からかえるところ。児童たちの面前で逮捕するにしのびず、途中を尾行して学校にかえったところを逮捕)

同六日 田中豊を逮捕した。呉署に検挙したもの五二名のちに警視庁で逮捕した堀、寺尾、松山で逮捕した服部久雄をくわえ、うち三〇名を検事局におくり一一名起訴。城戸薫は不起訴。

(大呉市民史P273 昭和7年3月) 呉署警部談

「かれらは秘密結社であるほどに組織がととのつており、一細胞を検挙しても、ほかののかんけいは、ぜんぜんわからない。かれらは自身がキャップでないかぎり、どんなひとと連絡しているかをしらないありさま。学生自治会にしても、指令する野村(本名蒲田政雄)をしっているだけで、それも家もしらねば本名もしらない。

上田総方には、松本京一、茂渡義人の兩名が下宿していたが、部屋がちがっているの、たがいにおなじ運動にたずさわっている黨員とはしらなかった。毎日かおをかわしてす

ら、こうで、その組織のヒミツはおどろくのほかはない。これで一応呉の組織は潰滅したが今後いつ再建されるかしかない。(大呉市民史P274 昭和7年3月)

寺尾一幹はすでに危険をしり2時間後の列車で呉を脱走する準備をしていたもの。

留置場をやぶってのちは庄原から山陰にまわって上京。東京で運動中逮捕された。

同人は京大経済学部2年終了後、京大事件で逮捕され、保釈中逃走して呉市に潜入。清水通りに家をもち海軍工廠へさまざまの手段ではたらきかけていたもの。

ハウスキーパー、林寿恵子は同志社英文科を4年卒。日仏会館に勤務中、京大に在学中の寺尾としりあい左傾。同年10月検挙。寺尾らの命により名古屋青バスの車掌となって赤化運動中、寺尾をおって来呉したもの。

こんどの事件でも起訴猶予となり一時上京したが、ふたたび来呉し、10月事件オルグ錦織彦七と同棲。同事件でも釈放され

たが、そのご(昭和8年)肺をわずらい、死去をつたえられる。

(大呉市民史P274) 呉工廠 山口労務主任談

「オルグ寺尾の家宅捜査にあたり、党中央部からの指令にまじって『海工会上田君』と鉛筆ではしりがきかれた紙片を発見したので工廠検挙の端緒となった。『海運時報』に『無名氏』と称して時々激越な論文の投稿があり、呉署からあやししいもの、といあわせがあって、しらべたところ造船部製図工海工会出版部理事の上田総であることが判明、以来呉署が監視していたもの。

同人は非常に気がよく廠内の同志およびその連絡内容などを、みんなしゃべって、しまったので他は守衛の手によって佐々木万寿司、川窪鉄之助、西川成実、重田安一、宇都宮寿作、小川一雄、野原一男、池上繁雄、の8名がただちに検挙された。」

うち宇都宮以下3名は証拠不十分または微罪で釈放、五名が寺尾と関係ある共産党関係で送局された。

このうちには全協系もあり、かれらは広の桃山または焼山水源池などで、しばしば寺尾とあっていた。

工廠では以上九名を六月三日づけ除名処分にした。

なお七年一〇月一〇日入廠した砲彈部仕上上田積はほんもの共産黨員だったことが、同一七日同部検査小便所に「〇〇をころし、〇〇をまもれ」と

激越なアツ文句をかけたことで判明。翌日ただちに解雇したごとく、廠内のとりしまりは嚴重におこなっている

(上田は検挙一週間まえに結婚したもの。転向をちかって起訴猶予。)

(中国新聞 昭和8年5月23日) 3・5事件 起訴者

岨常次郎(23) 本籍広島市西新町。住所不定。元職工。党及共青中国地方オルグ。

古末憲一(27) 呉市和庄町。住所不定。東大文科中退。党広島地区オルグ。

寺尾一幹(26) 山県郡八重町大字寺原。京大文科中退。党呉地区オルグ。

吉岡道人(24) 本高田郡生桑村字桑田。広島市千田町一丁目同志社大学中退。共青中国地方オルグ。

松本武司(20) 本安芸郡海田市町。広島市大須賀町。下関商中退。元広島駅機関庫勤務。山陽線オルグ。

村上文二(23) 本広島市荒神町。住所不定。広島県工卒。大工職。党中国地方書記局員。

松本徹(23) 本安芸郡海田市

町。広島市皆実町。広島市立商業卒。無職。同上。

村上金彦(22)(本)広島市小町。広島市千田町一。元小学教員。共青広島地区キヤップ。

花野岩男(23)(本)安芸郡江田島村字切串。広島市南竹屋町吉田方。帝國人絹職工。共青市人細胞キヤップ。

石川市松(27)(本)広島市舟入町。住所同。印刷工。市川印刷。小学卒。共青市川印刷細胞キヤップ。

丸川昇一(24)(本)広島市河原町。住所同。文撰工。共青新聞細胞キヤップ。

村上四郎(26)(本)広島市観音町。活版職工。市川印刷。尋常卒。全協出版責任者。

島本隆司(26)(本)広島市已斐町。住所同。市役所書記補。中学卒。全協一般使用人責任者兼官庁責任者。

元安勝(21)(本)(住)広島市金屋町。印刷工。市川印刷。高小卒。同盟新聞細胞メンバ。

大藤軍一(28)(本)(住)広島市段原町。高小卒。広島郵便局通信書記補。全協通信責任者。

太田史郎(25)(本)(住)広島市観音町。広島郵便局電信課集配手。全協通信広島責任者。

清水次郎(23)(本)(住)広島市西白鳥町。報國火災外交員。全協一般金融責任者。

仁井田教一(28)(本)佐伯郡宮内村宮迫。住所不定。尋小卒。元大工。モップル広島地区キヤップ。

田谷春夫(23)(本)(住)広島市白島中町。高小卒。印刷工。前に同じ。

井ノ口俊雄(22)(本)京都府天田郡下豊富村荒川。住所不定。広島高師臨時教員教員養成所学生。共青学校細胞キヤップ。

廉仁傑(24)(本)京府蓬萊町4。(住)広島市。広島高師学生。同上細胞メンバ。

川窪鉄之助(25)呉市荒神町。海軍工廠水雷部製図工。呉二中二年修了。党工廠細胞キヤップ。

重田安一(28)(本)(住)呉市京町。呉工廠砲弾部職工。尋常小卒。同上メンバ。

松本京一(28)(本)広島市鷹匠町。住所不定。建具職。小卒。党呉地区書記局メンバ。

佐々木万寿司(24)(本)賀茂郡川上村大字飯田(住)呉市西愛宕町。小卒。呉工廠細胞メンバ。

片岡義夫(27)(本)高田郡栗屋村。(住)呉市本通一四丁目。無職。山口県周東中学卒。共青呉地区書記局メンバ。

亀田勢(23)(本)呉市二河町。(住)同西二河通五。新聞配達。呉二中四年修了。共青街頭細胞キヤップ。

蒲田政雄(23)(本)安芸郡下蒲刈島村三ノ瀬。(住)呉市吾妻町。無職。呉一中卒。共青街頭細胞メンバ。

大下二(25)賀茂郡安登村。(住)呉市三城通五。新聞配達。尋小卒。同上。

三好惣次(25)(本)大阪市天王寺区下寺町四。住所不定。東京帝大卒。党中國地方オ

岩村大次(25)(本)広島市鷹匠町。住所不定。元広島駅機関手。党國鉄オルグ。

(党本部は)三好惣次、岩村大次の二名を任命派遣し、岩村は松本武司のあとをうけて山陽線オルグの役割をつとめるうち、当局の捜査にいたまらず、山口県に潜入、そこで活動中七月二十四日同県防府町で検挙せられ、三好は呉市に潜入して寺尾一幹および、本籍大阪府泉北郡伯太村字黒島、予備海軍二等機関兵曹、当時呉(水兵)対策委員会キヤップ。坂口喜一郎(32)とともにビュローを結成し、呉海軍工廠細胞および党水兵対策委員会を組織して海軍軍人間に覚員を獲得すべく狂奔中、四月一日から開始した呉市を中心とする一斉検挙のため呉

地区の一味が潰滅したので、ふたたび広島に転じ市内に移動アジトをもうけて前記。坂口ならびに予備二等機関兵。木村莊重などの現役軍人に対し党組織をはたらきかけ、坂口は呉対策委員会キヤップを木村にゆずり、八月月上旬上京。三好は八月十九日上京、二十日警視庁に検挙せられるにいたった。

(呉日日新聞 昭和8年5月23日) 3・5事件 呉地区起訴猶予者

田中豊(25)(港または渡辺こと)書籍商。(本)呉市海岸通五二九。(住)呉市中通二。

城戸薫(31)小学校訓導。安芸郡倉橋島村四五四。

小川一雄(26)(杉本こと)工廠魚雷実験部製図工。

宇都宮寿作(32)(生田こと)同上。

池上繁雄(26)(白川こと)同上。上田稔(27)(原こと)工廠造船部製図工。

西川成美(25)(野田こと)工廠魚雷実験部製図工。

野原一雄(25)(中野こと)同上。池本米雄(18)(仮名)呉市西畑佐々木修三(22)呉市清水通一丁目。

山根重義(23)呉市二川町二五五。

山崎政高(24)呉市籍通九丁目林寿恵子(20)。

金圭順(大正4年生)

李熙尹(大正5年生)

康東楯(大正3年生)

白康(大正4年生)

藤原鷹則(23)

(呉日日新聞 昭和7年11月6日) 広島「赤露の夕」

無届け9名検束の騒ぎ

四日第一五回ロシア革命記念日に日本プロレタリア文化連盟広島地方協議会員ならびにサウエート友の会四〇名が同夜午後七時ごろ公会堂において文化の夕べを警察に無届けで開催せんとしたので、西署が解散を命じたるも解散しないので、リーダー、河原町伊藤正朔ほか九名を同署に検束した。

(呉日日新聞 昭和7年12月10日) 某小学女教員姉妹 赤の活動

県下の女学校に働きかけ 検挙の女中から足がつく

「文新サークル」発覚

大阪船場署特高係では最近管内の銀行、会社、商店につとめている職業婦人へ、さかんに「赤い誘惑」をこころみている、せいむし男とわかい女性を探知し捜査中、このほど大阪東区平野町四の夜店で街頭連絡中の、同町二丁目渡辺商店方女中爲重政代(21)と西淀川区大仁本町、古本商折戸重一(33)の両名とわ

かり検挙したが、この両名は広島県賀茂郡某尋常小学校訓導山本たきえ(25)および、つきえ(21)と連絡して、大阪では折戸が責任者となり、京大出と自称する大橋某と折戸方ではしばしば秘密会合をひらき、発禁の左翼本を教材として若い女性に、赤い思想をふきこみ前衛分子の獲得に奔走していたもので、広島県下ではすでに、たきえ姉妹が「文新サークル」をつくって女教員、女学生、職業婦人など二〇数名にはたらきかけ、たきえは宣伝部長として、妹のつきえは連絡部長として秘密裡に、組織の拡大強化のために活躍を開始していることが判明した。

(呉日新聞 昭和7年12月10日)

奇しき運命のきずな

父処刑の日 河上ヨシ子の居所をつぎとむ

河上博士の一家 惨澹たり

河上博士の懲役五年の判決はいわたしのあった日、折も折、博士令嬢ヨシ子(22)の最近の消息が警視庁特高課の手によりつきとめられ、目下極秘裡に捜査中。

ヨシ子さんは昨年九月阪急百貨店庶務係帳簿係の職をやめて地下にもぐり活躍。昨年一〇月党再建当時は、城東区亀井戸町岡林方にみをひそめて大阪の同志と連絡し、夜間は男装してヒラマキや街頭連絡に活躍し、危険のせまるところに、津田青楓画伯の名で鎌倉の某氏別荘に一月以上潜伏。最近某男爵邸に出入していた事実がわかったので、目下捜査中。某男爵は物質上の援助もしていた形跡もある。

(呉日新聞 昭和八年八月三日)
広島共産党事件公判開廷

昨年(昭和7年)三月五日の日本共産党中国地方委員会関係、第一次検挙によって、広島地方裁判所に起訴された被告二名の公判は、被告の法廷内の会議、騒擾その他の法廷戦術をさけるため、一人ひとり分離して公判をひらくこととなり、その第一回、広島市荒神町、党中国地方書記局メンバー、村上文二(23)の治安維持法違反にかかる公判は八月二一日午前九時から広島地方裁判所小玉裁判長のかかりで開廷したが、同志の傍聴もなく、しかも被告は未決に在所中思想の転換をなしているの、公判廷は予想外に平穏であった。小玉裁判長から型のごとき身分のとりしらべがあつてのち、和田立会検事より公訴事実の陳述をなし、事実審理にはいったが、被告は広島県立工業学校建築科を卒業後、大工に従事していたが昭和六年二月ごろより全協広島支部協議会に入り、同年の五月検挙されて同六月起訴猶予となり、さらに広島地区委員会の建設に奔走昭和七年の二月に共産党に入党して、党の拡大強化のために潜行運動をおこなっていたものである。共産党にはいった動機については「不遇であった自分の立場や一般労働者のあわれな生活状態をみて、自然に労働問題に興味をもち、つまらんながらも左翼文献などによってこの方面の研究をしていたうちに、資本主義社会の矛盾を発見し我々プロレタリアの社会をつくるには横暴なる資本主義制度を破壊して共産主義によるほかにないと、かんがえたからである」と供述している。よき事実の審理にいらんとするや、裁判長は公安に害があるからと一〇時一〇分公開を禁止し公判を続行した。和田立会検事より懲役四年の求刑があり一〇時一〇分閉廷した。判決申しわたしは九月四日。

(呉日新聞 昭和八年八月24日)
おそろべき教壇の赤化実情
広島共産党の公判につづく村上訓導の審理

広島県第一次共産党検挙の被告二七名のうち広島市千田町元小学校訓導 村上金彦(22)の公判は、二三日午前九時から開廷。和田検事から被告は広島師範学校在学中、吉岡道人(当時広陵中学校生徒)から共産主義思想をうえつけられ、昭和六年三月同校を卒業して安佐郡飯室小学校に奉職するや、全協教員分会を結成して潜行運動をなし、これが発覚して免職となるや徒食中、古末憲一らと全協支部の再建運動に着手し、同年九月全協一般使用人組合広島支部の責任者となって、あらゆる方面に活躍さらに同月日本共産青年同盟に加入、この方面にも活動していたものである。といふいみの公訴事実を陳述して裁判長の訊問にはいり、被告は公訴事実を全部認め赤い思想に染んだ動機については「自分が師範学校三年生在学のととき友人の吉岡道人から現在の社会制度では貧乏人はいつまでたつても下積みでおわらなければならぬ」と資本主義制度の欠点をいろいろきかれ、これを無条件で信用しその思想方面のことを研究したのであります」とのべ全協教員分会のもようについて供述せんとするや傍聴禁止。和田検事より三年求刑。判決は九月四日。

(呉日新聞 昭和八年8月29日)
島本隆司 二年求刑

広島県下3・5事件の被告
広島市巴斐町、島本隆司(23)の治安維持法違反にかかる公判

は八月二八日午前九時半から広島地裁 小玉裁判長、和田検事のかかりで開廷。被告は山陽中学校を卒業昭和三年三月から広島市役所会計課に勤務。昭和六年の八月ごろから日本プロレタリア映画同盟、美術家同盟、同演劇同盟各広島支部の同志と相知り、左翼文化運動に共鳴して自らその中心となって日本プロレタリア作家同盟広島支部を結成、ついで同年一二月中ごろ前記同盟支部をもって、日本プロレタリア文化連盟広島地方協議会を組織し文化運動を通じて無産者の解放運動に奔走していたものである。

傍聴禁止で審理をおこない、懲役二年の求刑があつて二時半開廷。判決は九月四日。

(中国新聞 昭和八年10月5日)
赤い学生 井ノ口 五年の求刑

3・5事件のうち、京都府天田郡下豊富村字荒川 元広島高師臨時教員養成所生徒 井ノ口俊雄(22)にかかる治安維持法違反、公務執行妨害事件の公判は一〇月四日午前九時四〇分広島地方裁判所小玉裁判長、和田検事立会。特別傍聴席には、高橋元文理事長、中邑市労務課長らの顔がみえた。

井ノ口は昭和六年、組常次郎らと交遊し七月ごろ呉市内に全協の確立を企て、同年二月退学

処分になったが共産青年同盟に加入、そのころ高等師範(臨教)廃校問題の勃発にさいし学生層に働きかけ共青細胞を組織、昭和七年三月全協(地区)組織が潰滅するや準備会を結成し同年四月二十九日夜街頭連絡中を西署に検挙され同夜逃走、五月一日西署特高若林巡査に発見され逮捕をまぬがれるためにアイクチで同巡査の腹をさして全治二週間の負傷をさせて逃走したという事件。懲役五年の求刑。

(大貝市民史P23)
呉関係3・5事件公判

九月一日呉市萩原町、川窪鉄之助(25)の公判。同人は大正一三年県立呉中を二年で退学、工廠に入り昭和六年四月の大整理に刺激されて共産主義に染み、同年八月日本金属労働組合広島支部に加入、呉工廠分會を組織してその責任者となり、一月ごろ同志をたすけて全協呉地区協議会を設立その責任者となり、分會を廠内各班別に組織して自らは魚雷実験、水雷、電気三班の責任者となり、分會と地方支部との連絡にあたり、昭和六年九月日本共産党に入党、相被告、重田安一らと工廠細胞を組織した事実をみるとめ、以下傍聴禁止。懲役三年求刑。二十九日判決懲役二年(執行猶予)

安芸郡下蒲刈村。当時呉市吾妻町一丁目、蒲田政雄(23)の公判を昭和八年九月二十九日。同人は昭和六年九月中旬、全協呉地区協議会の確立を策し、一月上旬寺尾一幹の命により全協出版分會を組織。昭和七年二月ごろより日本金属労働組合広島支部呉工廠分會砲熧製鋼班のオルグとなり、同班責任者重田安一と協力して組織を拡大、その間平原水源池、山林そのほかで、もようされる協議会、工場代表者會議などに出席。七年の衆議院選挙にさいしアジビラを配布するなど、公訴事実をみるとめ、傍聴禁止のうちに懲役二年を求刑。一〇月五日判決、同二年(執行猶予)

呉市二河通五丁目、亀田勢(25) 昭和六年四月一八日工廠整理にアジビラをまき出版法違反で罰金。同七月全協呉地区協議会結成をはかり、共産青年同盟にも加入して呉地区委員會を。

昭和七年二月総選挙には、片山峰登(4・16事件共青中央委員)を非法立候補せしめ、同年三月五日第一次選挙はじまるや、三好惣次らと書記局を構成して活動。一〇月結審。懲役二年(執行猶予)

加茂郡八本松、佐々木万寿司(21) 昭和六年工廠整理から社会問題にめをむけ、川窪の指導のもとに全協工廠分會に加

入、共産党にも加入。全協(呉工廠分會)造機班責任者。九月二十九日結審。懲役二年(執行猶予)

茂渡義人(25) 呉二中卒。全協一般使用人組合。三・五事件で検挙されたが起訴猶予。その救援会活動。昭和八年三月入党。共青を指導し佐伯郡五日市方面農村青年組織。全協出版分會指導。昭和七年一〇月の選挙はのがれて上京。昭和九年第三次で検挙。

(呉日日新聞 昭和8年10月5日)
再び呉海軍に 赤化の魔手のお海兵団の中から三人昨夏総検挙ほとんど転向

更生日本共産党の熱海會議に端を発して、全国的な大検挙をみた10・30事件に関連して、三・五事件により一時潰滅していた広島地方の再建運動のために、昨年又々党本部より指導者が潜入し、広島、岡山を中心に党の再建に奔走し、呉海兵団、呉工廠、広島市における日本製鋼所広島工場、帝國人絹工場、郵便局、専売局そのほか各方面に働かすことがバクローし、つとめていることがバクローし、ついに一味の大検挙をみるにいたり、昨年一二月下旬より本年七月にかけて広島地方裁判所で起訴、予審にかけられていたが、同検挙により起訴されたものの二

一名。
おくれて起訴された坂口喜一郎、岡本菊次郎、坂本四郎の三名をのぞいてつぎの一八名は予審終結。いづれも治安維持法違反として広島地方裁判所の公判に付せられることとなった。
滝川恵吉(31) 静岡県志太郡島田町、党中国地方オルグ
木村狂重(27) 島根県鹿足郡木部村、予備役海軍一等機関兵。
石川茂一(24) 広島市幟町、元三高生。
伊藤正朔(27) 同上、画工。
古田稔(25) 広島市三篠町。
韓利權(24) 朝鮮平安北道義州郡枇寛面。
橋本俊三(21) 広島市仁保町、元広島郵便局通信事務員。
竹谷時良(25) 広島県安芸郡江田島村、元広島郵便局員。
堀江明治(25) 広島市南竹屋町、元広島郵便局集配手。
花野ふじえ(24) (前同) 広島県安芸郡江田島村。
野中富雄(25) 広島市平塚町、日本製鋼所広島工場職工。
井上 満(24) 広島市段原町、同上。
安田祐俊(25) 広島市鍛冶屋町、同上。
山下達吉(25) 神戸市湊西区鹿屋町、予備海軍二等主計兵。
平原甚松(28) 広島県豊田郡中野村、予備海軍一等水兵。
吉田 司(23) 広島県山県郡吉

坂村、元広島高校生。
山根 清(25) 広島県沼隈郡柳津村。
寺本強司(26) 広島市三篠町、元宇品陸軍運輸部従業員

(呉日日新聞 昭和8年10月5日)
はからざりき起訴猶予組の暗躍 あらたな指導者を擁し軍需工場等をねらう

滝川恵吉は党中国地方オルグとして昭和七年九月党本部より広島に派遣され、呉では日本製鋼所広島工場、広島郵便局、専売局、乗合自動車(バス) などにはたらきかけ、同志の獲得につとめ

石川茂一は広島県立一中四年修了、三高に入り、社会運動の渦中に投じたため同校を除名処分となり、広島にかえりその文化運動を通じて共産党の運動を支持、三好、滝川、木村などとレンラクして市内で活動。

伊藤正朔は昭和六年の春広島放送局に勤務していた当時、戦旗「広島支局責任者となり文化運動を通じて党の活動を支持していたことがバクローして起訴猶予に付せられ、昭和七年三月再度検挙、同様起訴猶予となったが、そのごも文化運動を通じて党を支援。

韓利權は昭和七年一月旭山中学を中途退学、共青オルグ吉岡道人の勧誘で共青同盟にくわわ

り、三好、滝川などと連絡して帝国人絹広島工場、専売局などを目標に組織の確立結成につとめ、

橋本俊三は昭和六年一月以降、大藤軍一らとともに市内の赤化を企て、全協通信分会を組織し昭和七年七月党に加入、三好、滝川、木村らと連絡して市内に党細胞組織の活動をつづけ、

野中富雄、井上満、安田祐俊はいずれも日本製鋼所広島工場の職工として勤務中、昭和六年八月党オルグ古末の指令により野中をキャップに同工場内に全協金属分会を組織し昭和六年一月ごろ、いづれも入党、野中をキャップとして、三好、木村とレンラクをとり工場内に党の組織を確立するために活動、

堀江明治は橋本、竹谷らとともに昭和六年一月入党、3・5事件で起訴猶予となるや、その後、橋本、竹谷らとともに市内に党細胞組織の活動をつづけ

山根清は神戸高等商業本科一年に在学中病氣のため退学し、昭和六年春以来、胡川清らと連絡して松永、福山地方で赤化活動、全協、コップの組織結成運動をつづけていた。さる九月一八日病氣のため保釈、

呉の三人組 現役中暗躍

木村莊重は大正一五年六月呉

海兵団に入団。昭和七年満期退団したもので、現役中より党員の寺尾一幹(3・5事件で検挙)坂口喜一郎、平原甚松の三人とレンラクし海兵団の赤化を企て、退団後広島市内に居をかまえ、党海軍方面をうけもち、党の組織拡充に努力。

山下達吉は昭和七年現役として呉海兵団に勤務中、七年春以来同志 坂口喜一郎、平原甚松をはじめ外部にある海軍出身者とレンラクして海軍の赤化に奔走。昭和七年九月共產主義者として現役免除となり予備役編入。

平原甚松は昭和六年一〇月共產主義思想抱懷者として呉海兵団を現役免除となり、退団後昭和七年春から呉市内で三好、坂口、寺尾らとともに海軍方面をうけもち赤化運動をつづけ、昭和七年四月入党同年五月検挙され一時釈放されたが、東京本部と連絡をとり、同年一〇月ごろ上京横須賀軍港を目標に党の組織活動をつづけていたもの。

歩兵第一一連隊へ入営を機に

古田稔は昭和六年七月赤化分子として早大専門部を除名され、昭和八年一月広島歩兵一一連隊に入営することとなり、オルグ 三好惣次の指令により滝川、木村などと連絡をとり軍隊の赤化に活躍。

宇品運輸部へ

寺本強司は宇品陸運輸部に勤務中昭和七年一〇月 滝川の勧誘をうけ入党、運輸部の赤化に奔走。

起訴猶予の女給 また広島で

花野ふじえ(24)は高等小学校を卒業後神戸、広島地方の工場を転々し、その後広島市内のカフェーで女給をしているうち、昭和六年六月 岨常次郎の勧誘で共青同盟に加盟、六月末福山地方全協オルグとして活動中検挙され起訴猶予となっていたが、その後も三好、滝川などとレンラクをとり広島地方で党の活動に従事。

(注)広島県労働組合会議編「広島県労働運動史」P72より

花野フジエ判決理由書(1934年2月広島地裁。懲役3年、執行猶予5年の判決)

昭和六年(1931年)一〇月上旬、全協確立のため福山市に至り、二月上旬、同様の指令で来た岡田茂美とともに同地区確立につとめ、二月全協組織福協分会結成(福島紡福山工場、山本八重子、三成五郎、小寺某等)、全協一般使用人福山地区(中山一郎)、全協出版福山地区(佐藤茂)も結成。その後度々全協福山地区オルグ会議を責任者となつてひらく。

昭和七年三月検挙されたのも起訴猶予。その後カフエーリリースの女給となり、党オルグの

要請により、佐藤静枝を水兵との連絡係(ボスト係)として呉市 カフエー摩天樓に住みこましめ……(10・30事件で検挙、起訴)

一九四五年(昭和20年)八月六日、彼女は広島市小網町で原爆にあい、それがもとで同年九月二日死去した。三五年の短い生涯であった。(同書794P)

(大呉市民史P72)
呉海軍 赤化事件

(昭和7年)一〇月更生日本共産党の熱海会議——中央委員に地方オルグもくわわる会合にあたり警視庁がおさえた文書のなかに軍部関係のものがあつたことから、指示された広島県警察部の連絡により、呉海軍法会議、呉憲兵分隊、呉署の活動となり、疾風迅雷、一一月七日には一味六名を検挙。かれらは日本共産党呉地区オルグ 寺尾一幹、坂口喜一郎、山下達吉らの指導をうけつつ、日本共産党本部軍事部の指令にもとづき、呉海軍の赤化をたくらみ、水兵委員会の名による党宣傳機関紙『奮ゆるマスト』を配布、党の拡大強化をはかりつつあつたもの。

軍艦白鷹二等機関兵小倉正弘 (キャップ)

軍艦朝日二等機関兵北田健二
海兵団一等水兵 佐藤 彊
海兵団二等水兵 山口義次

海兵団一等看護兵曹稲垣 宏
海兵団三等看護兵曹宮内謙吉
呉署はまずカフエー摩天樓のアジトをつきとめるや、これを極秘にふして12月2日未明こそり女給、佐藤静枝を引致、水兵グループおよび、山下達吉が事件にかんけいがあるとの推測がつき、ただちに水兵一味を検挙するとともに、16日山下の郷里にむかわしめたが、すでにゆえをくらましていて、実父も口をひらかず、親戚そのほかを調査して大阪にいるとのけんとうをつけ、陸軍大演習で警衛中の曾根崎署の応援をこい、山下の居所をつきとめ全員防弾チョッキに身をかため、19日未明同人のねこみをおそつて逮捕。

一方、小倉が検挙されてのち、同人の下宿和庄通一丁目西田シメ方の家宅捜査におもむいたところ、なにひとつ証拠品が発見されなかったが、ちょうどそのとき家人が野菜をいれた、かごをかついで、出ようとするので野菜をとりのけたところ、底から「赤旗」そのほかの証拠品がでた。小倉から証提湮滅を依頼されていたもの。(小倉はふたつの下宿をもっていたという)

北田健次の下宿のはなし

「昨年5月ごろ、これれ非常におとなしい人。いつも表の間で勉強ばかりしていた。7月はじめ、どうでも3円いるからと

いい、2円ばかり質屋で工面してきたというので、あと1円かしてあげた。7月おわりごろ家をでて、1日ばかりして友人から「給料日にかえすから」と伝言があったきりで、かえってはこちらになかった。」

稲垣宏の下宿のはなし

「七月ごろ来られた。無口で二階で蓄音機をならしたり、下におりてきても、はなしなどしたことがない」

本通り六丁目芸南食堂も家宅捜査をうけ、女給一同呉署にひっぱりだされたが、佐藤しづえから「赤旗」そびゆるマストなどをあづかっていたのは、事情をしらずしてのごとと判明。一時は赤の果敢かと騒がる。

(注) 呉日日新聞には「佐藤 彌水兵から文書をあづかっていた」となっている。

(大呉市民史P278 昭和7年)

坂口の内縁の妻

呉憲兵隊に引致された、坂口喜一郎が口をわるまで、頑として口をわらなかつた野村梅子(24)は大正一五年呉県女卒。昭和四年ごろ坂口喜一郎と西川照三が明神町の養母方に下宿しているうち、梅子あてで雑誌「戦旗」など本部から送付されるようになった。

梅子は、はじめ西川としたし

かったが、坂口のつよい闘争心にほだされ、これと内縁関係をむすぶにいたり養母の反対をうけ、現役免除となった坂口とともに登町一丁目に一戸をかまえ、坂口の運動をたすき、東京で逮捕されたときもいっしょ。とりしらべののち、直接かんけいがないので放免されたが、養母のうちへはかえれず、そのまま上京し裁縫学校に入學。

女給 佐藤静枝

カフェー摩天樓の女給、よしえこと佐藤静枝(22)は生前に両親がわかれ、祖母の私生児としてとどけられ、八歳のとき女中奉公の実母にひきとられたが、一二歳で母がつれ子して山県郡八重町に嫁し、一四歳で広島市左官町の料理屋に単独で奉公、一八歳同市カフェー リラスの女給となり、この左傾女給純子(花野ふじえ)の影響をうけ、昭和七年八月共産党員の指令をうけて来呉。

(検査後) まもなく釈放。やはり同店につとめた。ちょっとした美人、客へのサービスもよいほう。静枝は軍艦に小倉をおとずれ「赤旗」を手わたしたり、下宿も再々訪ねていたという。

百万弗の女給 真佐子

一月七日軍服のまま海兵団内で検査された佐藤彌は普通電信科卒。あたまたのよい、闘争意

識のはっきりした男。中通り一丁目カフェー百万弗の女給、真佐子——岩方通四丁目、正富万三郎娘とジャズのおかけでむすばれ、七年六月ごろから結婚はなしが急速にすすみ、条件として「禁酒」を誓約して実行。女の父も二人の仲をゆるして同棲生活にはいっていた。

百万弗のマダムのはなし

「佐藤さんは金ばなれもよく、水兵にはめづらしい人。破廉恥な罪でなく、ただ、いまの社会にゆるされていないと、いうだけのことだとおもう。真佐子は三年もすこごみ、実家へもよく金をとどけていた。」

この事件があつてから、カフェーでジャズにまぎれて、革命歌をうたうものが、ふえたので、呉署では潜入者のしわざかと監視。

(昭和8年)二月九日夜宮原通二丁目を革命歌をうたつてある男(28)を伏警の呉署員が発見。同志社大学中退、呉市内では、かおききの不良。思想的背景はない。単に酔つてのものとわかり、将来をいまして科料五円に。

(大呉市民史P278 昭和7年)

横須賀の赤化事件

軍艦「榛名」乗組員、三等水兵関兵(22)は「長門」三等水兵

(22)「山城」同(22)をさそい、郊外の池田種治と日曜日ごとに会合。各艦乗組員の赤化運動を密議していたのを、昭和七年九月二日横須賀憲兵分隊で逮捕され、昭和八年三月二三日予審終結、記事解禁。

事件は部内の紛失事件から下宿の捜査をうけ事前に文書を発見されたにとどまるという。

(注) 昭和四九年四月二日発行「サンデー毎日」に当時横須賀の水兵として検査された西氏恒次郎さんの記事がある。それによれば「榛名」には西氏。「長門」に吉原。「山城」に河田。上陸日ごとにあつたのは還子のアジト。盗難事件が軍艦「山城」でおこり、水兵の所持品検査で、河田水兵のところから共産党一九二七年チーズがみつかった。昭和八年四月軍法会議で、西氏懲役三年六月、吉田、河田同三年。西氏さんは昭和九年満期退団のほすが、刑務所入りのため、昭和二年ははじめ退団。

(大呉市民史P278 昭和7年)

呉の水兵公判

横須賀より三日おくれで四月一七月初公判(山口のみ証拠不十分で免訴、五名有罪)

五名はいずれも等級章をはがれ半年ちかい拘禁生活に全く元氣うせ、あおさめた顔を被告席にならば、染川検察官、公訴事実をのべ、太田判事長から型の

ごとく人定訊問あり、検察官から公安を害すると傍聴禁止を申請。合議の結果、海軍準士官以上および被告家族のほかは特にゆるされたもの以外の傍聴禁止を宣言。一八日は証拠しらべ。一九日小倉に六年、稲垣に五年、佐藤に四年六月、北田、宮内に各三年六月を求刑。三弁護人から情状酌量論。

二五日結審。検察官から、主文明読は可なるも理由の公開は禁止されたいとともめ、求刑通りの判決あつて、ただちに傍聴禁止。

「他県関係共産党検査記事」

(呉日日新聞 昭和8年8月1日)

富山県下の共産党検査

富山県第一次共産党事件の昭和六年十一月一斉検査により潰滅したかにみえたが当時検査もれとなった残留分子は翌年昭和七年二月ごろより、またまた地下に暗躍しはじめ、教育界方面にはたらきつつあることを探知した県特高課ではこれを重大視し、鋭意内偵の歩をすすめていたが、その全貌をあきらかにするをえたので、いよいよ昭和七年一〇月八日未明を期して県下にわたって一斉検査をおこな

い、オルグ橋本新七、巴陵宣正以下二名を検挙するとともに多数の文書を押収し、そのとりしらべにより、同月一日さらに二〇名を検挙。

山形県七日市橋本新七(24)東大農学部中退巴陵宣正(24)横浜高商中退小松茂松(23)水見郡碓石村一則小学校訓導浜田善昌(26)射水郡八代村校訓導酒井平正(28)の五名を起訴。橋本新七は富山県地方オルグ団会議なるものを結成、「新興教育」富山支部を組織。

(呉日日新聞 昭和8年8月16日)
長野県教員赤化の全貌 影響下教員二〇八名学校六六校

二月四日未明八六名検挙、二月三日早朝党、共青関係者主脳五三名検挙、六月二日の上諏訪機関車ならびに上田駅員検挙をもって終了。

三市一六郡にわたる検挙で、北信左翼論壇の雄将高倉テヲを加えて県下の左翼というものはすべて検挙されるにいたった。

党員二七名 共青同盟員四三名 検事局へ送局二二六名 長野刑務所に収容七六名(女三名)

注目されるのは多数の小学校教員が潜行的に、全協一般使用人組合・教育労働対策部・長野支部および新興教育同盟準備

会・長野支部を組織、教員二〇八、学校六六におよんだこと。

昭和七年三月以来一回にわたり全県的な会合をしているが、場所は予告せず当日街頭連絡で会場をしらせた。また組織拡大のため師範新卒生、生卒の歓迎会、短期現役兵の歓送迎会をひらいていた。

今回受持ちの先生が検挙されたことをしって、先生を警察からつれもどすことを泣いて決議し、小学校を徒歩で出発せんとしたところを学校側に感知されて阻止されたものもあった。

(呉日日新聞 昭和8年9月2日)
西日本を震わした長崎共産党

(長崎電話) 本年二月一日の紀元節建國祭を期して長崎地検ならびに県警当局が一斉に検挙した長崎共産党事件はとりしらべ一段落とともに〇〇〇〇関係者のぞき昭和八年九月一日午後二時解禁となった。

検挙されたもの田原治男ら五〇名(うち女一名)で起訴三名。同留保二名。同猶予一〇名。

当時長崎高商教授、新川傳介(29)氏もさる三月三〇日検挙されたが同事件の内容特色ともいうべきは全協、赤救、コップ関係、〇〇〇〇関係、新川教授関係の三点である。

首脳部の経歴。
(1)福岡淳次郎(30)

昭和三年第五高等学校卒、東大英文科中退。

(2)林ノ内栄蔵(25)

長崎県西彼杵郡香焼村。小卒後農業。

(3)田原治男(25)

大正一五年長崎中卒。昭和四年長崎電軌運転手。

長崎市高木町一四九、福岡淳次郎、林ノ内栄蔵、長崎電軌運転手田原治男の三名は、昭和七年一〇月ごろ全協長崎地区協議会および赤色救援会準備会を組織し、長崎市内船大工町にアジトをおき、金属に福岡、通信に林ノ内、交通に田原が責任者となり、三菱造船、長崎電話局、長崎電軌にはたらきかけ、特に林ノ内は一般使用人の責任者を兼任して、医大病院等にむかつて党員獲得に潜行運動をつづけ、全協、党委員会とレンラクをたもち、『全線』『鋼車輪』等の機関紙を発行し、一〇数名を獲得、一方赤救方面では一部資金を募集して福岡に送金した。

田原は長崎県水産課技手、松野安郎(32)や長崎高商教授二名を獲得するに成功し、文化サークルを組織、コップの主義綱領にもとづき文化班の設置、『労働新聞』そのほかの非合法出版物を教材として昭和七年九月より研究会を持続し、これに關し当時の〇〇〇〇も種々理論指導をあたえていた、ものである。

(呉日日新聞 昭和8年10月8日)

岡山共産党 大検挙おこなわれ検挙人員二七四名起訴三一名

本年四月二日一斉検挙。

神奈川県で活動していた全協、青井憲一(25)は昨年五月県下に潜入、元第六高等学校生徒、人見正雄(21)中国地方オルグ、錦織彦七とともに労働争議、水平社差別待遇事件などにはたらきかける。また元第六高等学校生徒、上森、天野、斉藤、西岡等の共青同盟員を指導して六高内に全協支持団を結成、中央資金局より、柴田和夫をむかえて資金網をつくる。今回の共産党運動の特色は水平社運動に合流して農村を基礎として地味な方法で地下運動をおこなっていたことで、それだけに根強いものがあり、検挙には非常な苦心がはらわれた。

(守田道輔事件関係)
(呉日日新聞 昭和8年1月22日)
人夫に化けていたおたすねの資産家
検挙網をのがれて呉へ潜入

山口県警察部では呉市に潜入した形跡のある某重大犯人〇〇〇〇(40)逮捕のため数日来係官四名を派遣、呉署の応援のもとに秘密裡に一大活動を開始したが、(二月)二〇日夜某所であいに逮捕し、多数の証拠書類を

押収して引上げた。

同犯人は山口県下における有数の資産家であるが某事件のために財産をかたむけ、当局の追跡急なるをり呉市に潜入、失業救済道路工事の人夫に化けていたものである。

(大呉市民史P40 昭和8年)
共産党再建を検挙

昭和七年10・30事件が一段落したころの本年(昭和8年)二月一七日首領守田道輔を逮捕した呉署はイモツル式に一味七名を検挙。一〇月とりしらべをおわって広島地方検事局におくる。

守田は上京して友愛会などに關係。大正九年山口県にかえって小作組合運動をおこした県下農民運動の草分け。

昭和五年末共産党に入り徳山地区委員会を結成。昭和七年二月の一斉検挙をのがれて東京に潜伏。10・30事件で崩壊した中国地方委員会再建を命ぜられて、三月広島に潜入。呉地区委員会結成をもくろんで来呉。

八月呉日日新聞争議に出入している蔵本通一二目製材職工、木原吉人(31)をアジッて、大衆党支部に働らきかけ、本通八丁目別府喫茶店において、大衆党員、ラス張り工中村定男(24)を獲得、三名で公園、梅林で数次会合、呉日日新聞の關

争化を画策、ついで、広島市国泰寺町、自由労働組合員、風早謙(36)をくわえて、街頭細胞委員会を結成、芸南電鉄従業員の内紛、映画説明者争議などにはたらきかけたが、メンバー獲得にいたらず、そのご、岩方通六丁目、米穀商手伝、坂田進(25)、吾妻町二丁目ラス張工小田正人(24)を獲得、自らは失業救済道路工事人夫となり、広島からよびよせて市内バスの従業員たらしめていた、妻スミ子をくわえて七名で、交通、金属、失業の各責任者をきめ、西原町にアジトをさだめて『職場新聞』『一般使用人』『ニュース市街戦』などの機関紙を発行していたもの。

呉署はききこみにより守田のしごとからのかえりをまちぶせたが、かんづかれたらしいので立廻りさきへはりこみ、本通一三丁目で格闘、逮捕。

これがため委員会は解散されたが、これまでの活動、同志関係ははつきりせぬので、捜査をすすめるうち、最近共産党に転向した坂田進(呉一中中退、元大衆党员)が六月一日帰呉したことをつきとめ、友人方に潜伏中を逮捕。ついで、ピラ撤布でしばしば呉署が検挙したことのある中村定男を街頭で逮捕。両人のとりしらべて、大衆党员木原、風早、小田ほか朝鮮人数名が関係したことがわかった。

て、それぞれ逮捕。うち小田は留置中の坂田、中村らの動静をさぐるために、故意に泥酔検束されたのを特高係にみやぶられたもの。(大衆党员は不起訴)(呉日新聞 昭和8年10月11日) 坂田 進(23)

本籍、広島県呉市岩方通三丁目九 戸主佐一長男。米穀商手伝。峰山こと

比較的裕福な家族にそだち、呉一中、中退、市内古川町、海軍御用達森川直太郎方の店員になったが、そのころから左翼書籍を耽読して赤化し、労働大衆党呉支部に入党したが、同支部の活動、ちととして進展せぬために倦怠を感じ、共産党に転向。

中村定男(24)

本籍 大阪市浪速区塩草町。住所、呉市塩屋町。ラス張り工。林こと

貧困なる家庭にそだち、小学校卒業後、呉市海岸通平田鑄造工場の見習工となり、翌年神戸市東尻池町神戸製鐵会社の職工となり、翌年神戸市日本近海郵便信濃丸のコック見習となり、翌年、呉にかえり爾後自由労働者となったものであって、幼時から労働者の悲惨なる状態を体験して、これすなわち現代社会の欠陥なりとし、ついに赤にはしり、昭和四年三月一三日当時東京にあった池田八束から郵送してきた、

「3・15の一周年と山宣の虚

殺に對し、ストとデモで闘え」と題するピラ四〇枚を市内にはったことが発覚、拘留一五日に処せられ、同年五月一日メーデーにさいし呉署に検束。

なお執拗に左翼運動をつづけ、同年一月当時全国大衆党呉支部に加入し、呉市会の予算反対闘争、昭和四年四月の呉工廠整理反対闘争の文書を撒布して、罰金一〇円に処せられ、同年六月さらに呉一般労組に加入。

本原吉人(31)

本籍、呉市京町三

高小卒業後大正七年呉工廠造機部職工見習。大正一二年退職。大正一四年一連隊に入隊。一五年退黨。

昭和二年上京、ラス張り工。

昭和五年呉にかえり労働大衆党にはいる。同六年四月の呉工廠整理反対闘争はもっとも勇敢にたたかう。同年七月呉一般労働組合結成。中通橋食堂争議の応援。

昭和六年一月金属工のピラはりで罰金一〇円。

昭和七月一月呉市長選挙に支部長、細田伊太郎をたてて運動。その後共産主義に投ずる。

つたもとスミ子(28)

広島県女卒業後同校専攻科三年卒業。

広島市公文館の店員となり左翼文書を耽読。昭和五年五月広島市で「女人芸術」に加入運動

中、昭和六年二月治安維持法違反で検挙起訴猶予となり、昭和六年六月同じく東署に検挙不起訴となる。

昭和六年一〇月から全協広島地区一般使用人組合に加入。昭和七年三月西署に検挙、八月一日起訴猶予。

昭和七年五月 守田道輔と同棲、同年九月呉市に潜入。

〔4・26事件 関係〕

(呉日新聞 昭和9年1月21日) 呉にアジビラ 全協系の暗躍

二十日午前六時ごろ呉市和庄通、清水通一帯にわたって、おりから出勤時の工廠従業員を目標に不穏ピラ二〇〇枚を撒布した怪漢があり、該ピラには、『呉工廠内 第二唸クレン社』とあり、最近中央をおわれて呉市に潜入した、全協系分子の活動とにらんだ呉署特高係ではただちに犯人捜査の警戒網を全市にはった。

(中国新聞 昭和9年8月20日号外) 第三次共産党の検挙

広島地方における共産主義運動は昭和七年秋の、いわゆる10・30事件一斉検挙により、日本共産党中国地方委員会の組織およびその指導下にある外廓団体を潰滅し、その運動を中絶せしめたが、その後党中央部では軍事上もっとも重要な広島、呉

両地区を中心に党組織を確立強化することを、もっとも重要な意義をもつものとして関谷源一を党中国地方オルグとして、昨年四月ごろ広島地方へ派遣して組織活動を開始、同年五月の広島市会の選挙には獄中の党员を候補者に推して(注。市川忍及び古末憲一)活発な選挙運動を敢行、六、七両月にわたり一部分子の検挙をみるにいたったが

(注。岡本菊次郎、坂本四郎、天津せい)オルグはたくみにのがれて活動をにつづけ、九月以後は昭和ゴム争議、海運大会開催(注。海軍労働組合連盟)横須賀、呉、佐世保その他海軍工廠の労働組合の連盟)慶徳鋳物争議、広島市会疑獄事件、市内バス減点制実施などの機会をとらえて、さかんにピラまきを敢行し、一方市内各学校へ手をはすなど活動がいよいよ露骨となるにいたった。

この間県特高課では党オルグおよび中心メンバーの正体をつかむこと、組織の内容、活動の状況を偵知することに全力を集中、特高課視察係を中心に広島市内三署、呉署の視察係を督励して不断の活動をつづけ、大体検挙の材料を蒐集した。

これよりさき警視庁で広島県からの手配により本年二月、加藤郁子を、四月十日 三戸信人をそれぞれ逮捕、両名の身柄を広島県にひきとって取調への結

果、一斉検挙の確信を当局にいかしめた。

ここにおいて四月二十五日午後五時広島市内三署特高主任を県警察部へ招集、一斉検挙の方策を決定。

翌二六日午前三時特高課および右三署の警察官一五〇名を動員し防弾衣に身を固めた決死隊を編成し三〇台の自動車に分乗、鈴木特高課長総指揮のもとに午前五時一斉に出動、広島市内一七カ所のアジトを急襲して、目標人物五〇名を逮捕、多数の証拠物件を押収したが、中心人物である党オルグ関谷源一を発見しなかつたので、アジトを中心に張込み隊を編成警戒中、己斐駅を中心とする西署山崎巡査の発見により難なくこれを逮捕。

そのご検挙が継続せられ、六月二三日広島高等学校事件で四九名、七月九日高田郡吉田町で一一名、合計一〇八名の多数にのぼった。

組織および活動の全貌(上)

広島地方における左翼組織は昭和七年の10・30事件一斉検挙により潰滅したが当時起訴猶予、釈放となつた三戸信人はこれが再建をくわだて、昭和八年一月上京、日本共産青年同盟中央部と連絡し、広島地方の状況、再建活動の必要性を報告し、共青同盟広島地方オルグとして再建活動にあたるべき任務をうけ

て、同月下旬帰広し、モップル、コップ残留メンバー、岡本菊次郎、天津せい、南部達三そのほか数名を同盟員に獲得して、モップル、コップ組織内に共産同盟フラクションを組織し、このフラクションを通じて、モップル地方委員会、コップ地方協議会を再建確立し、同時に県師範、山陽中学、広陵中学、広島県女などで同志を獲得して、広島地区中等学校指導部を結成し、機関紙『鯉城の健児』毎号数十部を発行して中等学生の啓蒙と、

県師範、山陽中学、県女、市女の各中等学校に共青同盟確立のために活動、さらに同年3月初旬、防空演習反対闘争のためにモップル、コップ、消費組合代表者をもって反戦同志会を組織し、ピラ数百枚を印刷して行動隊を編成し、市内重要工場を目標にピラまきを敢行するなど、活発なる運動を展開するにいたつたが、左翼運動の指導核心として共産党の組織をもつ必要にせまられ、同年3月上京、共産党本部と連絡入党し、広島地方の情勢を報告、党オルグの派遣を要求した。

党中央部も、三戸の要求を承認して、組織部員某を通じて、党員、山川こと、関谷源一を党中国地方オルグとして広島地方へ派遣した。

関谷は組織部員某の紹介で4月3日東京で三戸と連絡、活動

上の打ち合せをなし、翌4日横浜駅から三戸とともに急行列車にのり、5日午後3時すぎ広島駅に到着、たちちに八丁堀福屋食堂に会合し、諸般の打ち合せをなし、活動することになった。党中国地方

広島県再建委員会の結成

かくて4月初旬、三戸の推ゼンにより、広島郵便局集配手、小川正一を党員に獲得し、4月10日、関谷、三戸、小川の3名が元字品町山林中に会合し、党中国地方、広島県再建委員会を結成し、関谷はそのキャップとなり、当面の活動部署として、

関谷は広島瓦電党細胞の確立に、三戸はモップル、コップ等のフラクション結成、小川は広島郵便局党細胞確立のため活動することに決定し、以来7月下旬までに前後5回、再建委員会を開催し、メーデー闘争方針、モップルにたいしメッセージをおくる件、広島市会議員選挙闘争方針、3・5事件公判闘争方針、農村活対策、呉地区党オルグ派遣の件、全協組織活動方針、8・1反戦メーデー闘争方針を協議決定し、これにもとづき、つぎのような活動を展開した。

メーデー闘争
広島郵便局、瓦電内意識メンバーをもって懇談会、またはピクニックをおこなわせ、同時にコップ機関紙『文化の旗』号外にメーデー闘争の記事を掲載し

て、市内重要工場を目標に行動隊を編成、撒布せしめた。

市会選挙闘争

コップ、モップル、消費組合代表者をもって市会選挙闘争委員会を結成して、各工場内労働者に合法的に、選挙懇談会をひらかせ、この組織を通して労働者を党にひきつける方針のもとに、獄中の党員、古末憲一、市川忍を候補者と決定して、これに投票することを煽動したピラ数百枚を印刷、ピラまきを敢行した。

公判闘争

3・5事件公判闘争はモップルを指導して公判廷へ大衆デモを煽動したピラ数百枚を印刷、行動隊を編成、目標工場、国鉄、専売局、帝人を中心に、ピラまきをおこなった。

農村活動

農村部落に党細胞を結成して、これを中心に全農全会派の組織を確立する方針のもとに当時佐伯郡五日市の電鉄買収地とありあけ問題で、該小作人が動揺していたので、この問題をとりえ、部落大会、町民大会にまで発展させ、これを闘争に組織するために、党員、茂渡義人をして同町革命的グループ中心メンバー同盟員加藤郁子、東窪梅夫などを指導して組織活動をおこなわせた。

呉地区

呉地区に三戸信人を党オルグ

として派遣した。

全協組織活動

全協の組織活動は当面の力関係よりして、これに全力を集中することとし、六月ごろ小川正一を中心とする広島郵便局分会、井上栄を中心とする瓦電分会、金明文を中心出版分会を結成し、茂渡義人を街頭オルグとして、これを基礎に七月全協広島地区協議会準備会を結成、同時に呉地区オルグ三戸を指導して同人を中心に全協呉地区オルグ会議を結成して活動を開始した。

8・1メーデー闘争

反戦メーデーの行動綱領を決定、闘争方針書を印刷配布して、経営内活動の激化を強調誘導した。

党財政活動

六月中ごろ財政活動について徹を発してシンパの獲得、資金網の確立を強調して、党の財政的支持を煽動宣伝した。

党広郵細胞

小川正一は郵便集配手、加藤精一、大塚猛夫、沖本春登を獲得して、郵便局党細胞を確立し、細胞機関紙『おいらのたより』を発刊、局内従業員の革命化に活動した。

中間検挙

以上の情勢の如く、活動表面化するにいたつたので、同年六月一〇日モップルを中心として、犠牲者家族の慰安会の開催

を契機に岡本菊次郎、坂本四郎、天津せいなどの、コップ、モップルの中心指導分子を検挙して、その組織の一部を破壊した。党中央部との連絡

党中央委員会・広島地方対策委員会

党オルグ、関谷源一は党中央部と連絡のため、昨年（昭和八年）五月、七月、十一月および本年三月の四回上京し、中央部組織部長および部員と連絡、中国地方の情勢を報告、そのつど青山六丁目某料理屋、大塚附近某料理屋、渋谷代官山アパート、神楽坂附近某料理屋などで開催された、党中央常任委員会、広島地方対策委員会に出席参加して、広島地方に対する協議決定に参加した。

中央配布局との連絡

関谷源一は七月、一月上京のさい中央配布局部員某およびキャップ山崎安治と連絡し、八月と二月広島市において配布局員、斎藤昌秀およびキャップ山崎と連絡し、そのつど党機関紙『赤旗』一四六号乃至一六三号各六〇部およびその他党中央印刷物をうけとり、これを組織内メンバーに配布して組織の拡大強化に活動したものである。

（中国新聞 昭和九年八月二十日）

組織および活動の状況（下） 党中国地方広島県再建委員の解体と同広島県オルグ会議の結成

昨年七月二十七日、関谷は三戸、小川と会合し、中央の批判にもとづき、党中国地方広島再建委員会を解体し、オルグの協議機関として、党中国地方広島県オルグ会議を結成、広島における党および外郭諸組織の力をオルグ会議指導下に統一した活動をなさしむるため、党員を中心に未組織分子をふくめて突撃隊を編成し、目標工場を決定し、これにむかって各突撃隊間の競争活動を激化し、党員および影響下の五倍化、財政の確立、大衆的アジプロの強化を通じて、党および外郭組織機関の確立のため、第一期、第二期社会主義競争方針を決定し、方針書を印刷配布して社説の意義を徹底せしめ、この社説を中心に組織活動をすすめる、同時にオルグ会議機関紙を創刊し、党の方針の浸透と突撃隊活動の激化をはかった。

（第一期社説）

八月下旬を出発点として一〇月七日渡政デーを中間ゴール、十一月七日ロシア革命記念日を最終ゴールとして、たたかうことを決定。

○突撃隊活動

突撃隊は九月中旬呉地区に「ハンマー突撃隊」を編成、機関紙『第二なるクレール』を創刊。数百部を印刷、海連大会（海軍労働組合連盟大会）粉碎の前哨戦として、工廠従業員宅に、ながしこみをおこない、同時にこのハンマー突撃隊の活動と呼応して、全協呉地区オルグ会議は、呉工廠従業員の戦争による労働強化反対、残業手当減額のための残業時間短縮反対、および海連大会で議題となる結核保険組合掛金の工廠当局全額負担、などの問題をとりあげ、前後三回にアジプロのながしこみ活動により、工廠従業員にアジプロ（煽動宣傳）した。

周東地区では九月中旬、三戸信人が党オルグとして岩国地方にゆき、同人を中心として突撃隊を編成し、帝人岩国工場を目標に活動し、全協帝人分会を結成して、機関紙『帝人労働者』を創刊。工場内へのながしこみにより従業員を煽動。

○モップル、コップ再建運動

中間検挙によりモップル、コップの組織は破壊されたが、小寺英雄、国本金夫を党員に獲得して、小寺に指令してモップルの再建にあたらせ、小寺はただちにモップル広島地方委員会再建委員会を組織し、機関紙『救援突撃隊』を発行し、犠牲者救援活動のアジプロを通して再建運動をはじめ、同時に国本金夫

は関谷の指令で、コップ同盟員山本タキエ、数本英次郎などコップ広島地方協議会再建委員会を組織し、その責任者となり、再建ニュースを発行して活動を開始した。

○全協組織活動

(1) 缶詰分会結成

広島における全協組織は中間検挙のため、出版分会との連絡が切断したが、三月市内フジヤ缶詰工場職工、岩佐寿一を獲得し、同人を責任者として缶詰分会が結成され、機関紙『オンド釜』を創刊して、市内西部缶詰工場従業員を組織のために工場内にながしこみ活動をした。

(2) 昭和ゴム争議指導

九月初旬、黄伍姓、田原勝次を獲得して、両人を通じて昭和ゴム争議を指導して、ストライキにみちびき、争議対策委員会を開催、指導方針の決定、メッセージの傳達、応援資金をおくり、ビラのながしこみをおこなった。

(3) 金属、土建、木材、革反オルグ決定。

このころ、竹地定夫、金弼東を獲得し、地準全体会議を開催して、竹地を金属オルグに、田原を広島統一労働組合・革反（革命的反対派）オルグに、黄伍姓を土建木材オルグに決定し、それぞれ活動、木材労働者組織のため津崎、桐原両工場にビラのながしこみ活動をした。

(4) 在広朝鮮人青年会の指導

金弼東を指導して在広朝鮮人青年会内に同盟員周丁龍、鄭禹甲、金明文などを、革命的グループを結成せしめ、全協支持団の組織を通して、青年会に所属する朝鮮人労働者を全協に再組織するため、座談会、研究会を開催して、これが指導啓蒙に活動し、朝鮮人ピオニールの組織活動をした。

(5) 革命記念日闘争

一〇月下旬地準全体会議の決定にもとづき、地準機関紙『再建の旗』を創刊し、理論的指導と、日常闘争の激発、未組織大衆の煽動、宣伝、組織のため活動した。

ロシア革命記念日闘争として十一月六・七両日にわたって、全協組合員を中心に未組織をふくめて、広島市福島町、広瀬町、宇品町など五カ所に懇談会を組織し、パンフレット『ロシア革命小史』を印刷して、勤労大衆のアジプロにつとめた。

(6) 新幹部養成

パンフレット『再建後の左翼労働組合運動』を発行、組織内メンバーに配付し、理論的指導につとめた。（注）『再建後の……』は普通出版社からでた、本屋の店先でうられていた本。オルグ会議でだしたものは「一九三三年テーゼ」そのほかのパンフレット。

○水平社運動の指導

一月はじめ岩佐寿一が全国水平社広島県連の書記(注。正しくは差別裁判糾弾闘争委員会の書記)となるや、同人を獲得して、当時高松差別裁判事件、鹿川事件などのために、水平社運動が異常の緊張を示していたので、これら差別事件糾弾闘争を通して、水平社運動中に党の影響を浸透し、同時に合法的に水平社運動支持の会を組織して、いわゆる普通民との共同闘争を組織し、この闘争を通じて党、同盟、全協、モップル、コップのメンバーの獲得と組織の拡大に活動した。

○学生運動の指導
一月初旬より広島高等学校左翼学生と定期的連絡をつづけて、自治学生会および学内資金網の確立のために活動した。

○年末闘争としては

(1) 慶徳鋳物指導

一月下旬全協地協全体会議で書記局設置の件、年末闘争方針を決定し、当時三篠町慶徳鋳物工場朝鮮人職工の動揺をとらえ、これをストライキに導くため、年末闘争の主力をこれに集中し、竹地定夫、田原勝次の二人を争議指導にあたらせ、メッセージおよびスト応援基金をおくり、附近他工場従業員を同情ストにたたせなるべく数回アジビラを発行散布

(2) 自由労働者組織活動

市役所匪救事業を中心とする

自由労働者をもって、自由労働者相互会を組織せしめ、これを全協に再組織する方針のもとに、自由労働者相互会発起人署名のアジビラを発行して、市役所内人夫募集所にながしこみ、煽動宣伝につとめた。

(3) 解党派の排撃

このころ大橋積、末元玄聡一派の解党派排撃を決議し、檄を発行して組織内におけるスパイ挑発の防衛につとめた。

〔第二期社説〕

一月中旬を出発点とし、建国祭、三・一五記念日を中間ゴール、五月一日メーデーを最終ゴールとして、党員の五倍化、党財政月収一五〇円、「赤旗」支持基金の完成を通して、党中国地方広島県委員会確立および全協その他の大衆団体機関確立をたたかいとるために、各突撃隊間における競争を激発した。

○突撃隊活動

昨年一月中旬より本年一月中旬に呉海軍工廠を目標とするハンマー突撃隊、広島高校および煙草専売局を目標とする岩田義道突撃隊、国鉄を目標とする動輪突撃隊、高田郡地方農村を目標とする渡政突撃隊の四つが党員を中心に革命的分子各三二名乃至数名をもって編成され、各突撃隊におのおの突撃隊会議を開催して、活動の目標、方針を決定し、突撃隊活動をおこし、二月中旬突撃隊代表者会議を開

催して、第一中間ゴールまでの活動をめざして計画目的を達成のため活動中であつた。

○オルグ会議

一月はじめ、三戸信人が上京したが、小寺英雄をメンバーに獲得して、関谷、小寺、小川の三名で構成した。

一月中旬以後は、小川との連絡がきれ、正式にオルグ会議をひらくことができたので、関谷は小寺と協議し独断的に組織活動を指導

(1) リンチ事件撤

二月ごろ党内におけるリンチ事件の発表により、広島地方組織の動揺を防ぐため、オルグ会議署名のリンチ事件に対する檄を発行、また

(2) 建国祭闘争、3・15闘争

建国祭紛争闘争および3・15記念日闘争のため、それぞれパンフレットを発行し、その他組織内メンバー指導のため数種の印刷物を発行。さらに

(3) 互電免細胞

二月初旬全協互電分会メンバー 井上栄、高橋渉、穴戸年春を党員に獲得して、党互電細胞を確立し、細胞機関紙「スパーク」を創刊した。ついで

(4) 天津セイ救援闘争委員会

本年一月ごろモップル責任者小寺と協議し、モップル、コップ、全協の代表者をもって、天津セイ救援闘争委員会を結成し、天津セイの英雄的闘争の記

事を赤救ニュースに掲載、アジプロして工場内に「天津セイ救援の会」を組織せしめ、この闘争を通して労働者を組織する方針のもとに、アジビラまきを敢行し、救援基金カンパニアをおこしたほか、

(5) モップルでは一月初旬広島、佐伯、高田各地区代表者会議を開催して、広島地方委員会準備会を結成し、機関紙「赤救ニュース」を発行し、社説方針を決定し、最終ゴールとして天津セイ救援闘争に主力を集中して組織の拡大に活動することとし、同時に「今後における活動方針書」を発行した。

(6) コップ活動

一月コップ広島地方協議会、ナルプ(作家同盟)、科同(科学同盟)広島支部を再建、コップ地協機関紙「文化の旗」を復活し、ナルプ支部機関紙「文学ニュース」、科同支部機関紙「批判の武器」を発行し、小林多喜二一周年記念のため、メンバーより原稿を募集して記念創作者を印刷発行し、千日太計雄ほか数名の没落分子の除名を決議、発表するなど活発なる運動をおこした。

(7) 全協活動

三月一〇日関谷は広島地準、呉オルグ会議代表と会合し、暫定的に全協広島支部準備会を結成し、メーデーをめざして広島地区協、呉地区準備会の確立を

通して、下からの広島支部準備会結成のための活動をおこした。

(8) 農村活動

昨年(昭和八年)一二月ごろモップルを通して高田郡南小一と連絡し、同人ほか一名を党員に獲得して、農村細胞を組織し、本年一月中旬この細胞を中心に「渡政突撃隊」を編成し突撃隊活動を通して、メーデーをめざして全農全会高田支部準備会結成の準備中であつた。

(9) 広島高校暗流問題 指導

広島高等学校暗流問題にたいしては「岩田義道突撃隊」を通して指導し、近く左翼に対する全体検査を予期し、左翼分子の表面的活動をさけて、運動部員を煽動して、行動の先頭にたたしむべき方針のもとに、活動中であつた。

(中国新聞 昭和9年8月20日)

4・26事件起訴者

関谷源一(26)

下関市 新市町 貧困の家庭に生まれ、尋小卒後東京に出て店員、新聞配達、左官および自由労働に従事昭和四年ごろより無産運動に関心をもちにいたり、昭和五年五月全協土建労働組合に加入、一一月城南地区責任者、全協失業者同盟責任者となる。

昭和六年六月、全協土建東京

支部失業対策部員。

昭和六年十一月、日本共産党に入党。党東京市委員会、西南地区街頭細胞キャップ

昭和七年七月、鍋山佐野奪還闘争に参加

昭和七年九月平安名(へんな)常孝リンチ事件(戸越リンチ事件)活動に参加。同月栃木県オルグ

昭和八年二月、長野県オルグ昭和八年四月、党中国地方オルグとなり、広島地方において活動。

この間、出版法違反一回、検束一〇数回。

全協広島支部協議会キャップ。

小寺英雄(33)

佐伯郡嚴島町
昭和七年ごろより赤救佐伯地区責任者。

昭和八年一月入党。広島県オルグ会議メンバー。モップル党フラクシオンキャップ。

岩佐寿一(25)
米子市東町。水平社広島県連書記

県立広島二中をへて、広島高等学校文科一年中退、そのご大阪および広島市において店員および職工として労働に従事。昭和七年七月ごろより左翼運動に参加。八年一月入党。水平社党フラクシオンとして水平社運動の革命的指導に活動。

数本英次郎(24)

広島市中島本町(千田町二丁目)

火災保険事務員。高松高商卒業。高商在学中より左翼思想に共鳴。卒業後昭和八年夏ごろより実践活動に参加。昭和九年一月入党。コップ党フラクシオンとして活動。

小川正一(23)
山県郡都谷村(広島市楠町)郵便集配手。

貧困の家にうまれ小学校卒業後、広島郵便局集配手となる。昭和七年四月ごろ石川茂一の指導をうけて左翼運動に参加。昭和八年二月共青同盟加入。昭和八年四月入党。党オルグ会議メンバー。広島郵便局党細胞キャップ。全協広島地区協議会責任者。全協広郡分會責任者。

昭和九年七月 刑務所内にて縊死。

金明文(20)
全羅南道 求礼面。

新聞配達。公立普通学校卒業。昭和五年九月内地に渡来。新聞配達をなし私立松本中学を卒業。

昭和七年五月ごろ左翼運動に参加。反帝同盟(反帝國主義戦争植民地民族独立支持同盟)広島地区組織に活動。

昭和八年七月共青同盟に加入。在広朝鮮青年会 共青フラクシオンとして、少年団組織に活動。

高橋 渉(22)

豊田郡久芳村(広島市段原町)

広島電鉄車掌
貧困の家にうまれ、小学校卒業後電車車掌となる。

昭和八年六月全協加入。瓦電分会メンバー。
昭和九年二月入党。瓦電細胞メンバーとして活動。

茂渡義人(25)
岡山県津山市新職人町(東京市品川区森下町)
ドリール工

県立呉一中卒業後、呉市役所水道課水質試験所見習工。
昭和七年五月検挙、起訴猶予となる。その後運動をつづけ、昭和八年五月共青同盟に加入。同年四月入党。党、同盟街頭細胞、全協街頭オルグ、農村五日市町オルグとして活動。

東窪梅夫(25)
佐伯郡五日市町。雑貨商。

小学校卒業後、雑貨商手伝をなす。
昭和七年ごろより左翼文献をよくみ

昭和八年春より実践に参加。同年七月共青に加入。五日市部落共青細胞として、同会組織に活動。

山本タキエ(26)
豊田郡吉名村(賀茂郡東高屋村字堀)
中流の家庭にうまれたるも、幼にして父に死別。
昭和二年三月 三原女子師範

二部を卒業。
賀茂郡下 小学校訓導として奉職中、左翼文献によって赤化し、実践運動に参加。

昭和八年一月検挙。起訴猶予となる。そのご運動を継続し
昭和八年八月以降 國木金夫、数本英次郎らと、コップ再建運動に活躍。党シンパとして毎月二円一五円を資金に提供。

迫井盛登(32)
安佐郡飯室町(広島市舟入町)

広島消費組合常任。
貧困の家庭に生まれ、小学校卒業後丁雅奉公をなし、一八歳ごろより父親とともに呉服行商。

昭和八年ごろより消費組合運動に参加し、広島消費組合内において、党指導のカンパニアに参加し、

昭和八年夏ごろより党技術活動、連絡を担当し、党の目的遂行のために活動。

岡本重康(23)
島根県那賀郡波佐村(広島市昭和町)

一五歳にして父に死別、広島文科三年乙(ドイツ語)に在学中。
昭和八年五月ごろより学内左翼運動に参加。
昭和九年一月党オルグの指導下に永井健三らと「岩田義道突撃隊」を編成、学内の党資金網を確立し、また責任者として毎

月三〇円一四〇円の党資金を提供。

永井健造(19)
広島市水主町(同)

「岩田義道突撃隊」メンバー
文3乙党資金責任者。広島自治学生会指導部員。

南部達三(29)
高田甲立町
(広島市東白島町)

蓄音器商。広陵中学卒。
昭和七年ごろより左翼運動に参加。数回の検挙をうけ、昭和八年六月検挙、起訴猶予。その後コップ共青細胞として活動。

國本金夫(27)

賀茂郡東高屋村字堀
中農の家庭にそたち、小学校卒業後、一カ年私塾に学び、以来農業新聞外交員、人絹職工、新聞通信員をなす。

昭和七年三月より左翼運動に参加。

昭和八年二月、共青に加入。同年一月入党。コップ党フラクシオン、キャップおよび農村オルグとして活動。
井上 栄(24)
山口県玖珂郡岩國町
(広島市己斐町)
小学校卒業後広島郵便局電報配達員となり、のちに瓦電争議に活動。
昭和八年六月党オルグ 関谷源一の指導をうけ、全協瓦電分会

を結成し、その責任者となり
昭和九年入党、瓦電細胞キ
ャップとして活動。

正田誠一(20)

安芸郡江田島村

(広島市平野町)

県立広島一中四年修了、広島
高校文3甲(英語)在学。

昭和八年一〇月ごろより学内
における左翼運動に参加、広島
責任者として、党オルグの指導
のもとに、教授間暗流問題をこ
らえ、学内新聞『前進』『広島戦
士』を発行、学内左翼組織の拡
大のため活動。

宍戸年春(24)

広島市蟹屋町(若草町)

自作農の家庭にそたち小学校
卒業後

昭和八年二月瓦電車掌とな
る。同年六月全協瓦電分会メン
バー。

昭和九年二月入党、瓦電細胞
メンバー。

(中国新聞 昭和9年8月20日号外)
「暗流」を利用して同盟休学を
煽動、広島赤化事件の内容

広島内左翼運動に対しては四
月二六日、党中国地方広島県オ
ルグ会議関係の一斉検挙のさ
い、同時に断行するはずであ
ったが、検挙人員のあまりに多数
になるため、これを留置とりし
らるるに支障をきたすため、第
二次にゆする計画のもとに一時
延期することとなった。

その間、広島高校以外の、党
全協などのとりしらべは着々進
行したが五月に入るや、暗流問
題を中心に同窓生の蹶起とな
り、生徒の動揺も深刻化し、一
方自治学生会においては暗流問
題を利用して、これを社会問題
としストライキにまで発展せし
めて、ブルジョア教育の矛盾を
暴露せんと、秘密裡に策動の形
跡があり、来校した卒業生には
自学メンバーであったものもあ
るため、県特高課では広島市内
三署特高係を指揮して、左翼学
生の行動を内査していたが、事
態が放任しえざる状態となつた
ので、六月二二日警察部長は特
高課長および市内三署長を招
集、協議の結果、一斉検挙を断
行することに決し、翌二三日以
来生徒四二名、卒業生京大三名、
東大四名を検挙とりしらべをな
し、三三名を治安維持法違反と
して事件を送致し、そのうち三
名はすでに起訴せられ、なお二
名は近日起訴されるみこみであ
る。

広島自治学生会の再建

10・30事件のさい広島内左翼
組織は党細胞、同盟細胞、自治
学生会指導部員などのことごと
くを検挙され、記述となった生
徒は放校となり、起訴猶予とな
った生徒はいづれも無期停学に
処せられたので、学内左翼組織
は一時終熄状態となったが、昭
和八年五月停学処分を解除され

復学した生徒らは組織の再建を
企図し、残留メンバーを糾合し
同年六月初旬には日本共産党、
広島県 再建委員会の委員であ
る党、同盟員 三戸信人と連絡
を回復し、その後、三戸信人が
党県地区オルグとして呉市に潜
入するにおよび、三戸の後任、
党同盟員茂渡義人と連絡をたも
ちつつ着々と広島内の自治学生
会を組織することにも、自学の
線にそって資金を党委員会に提
供し、党の財政的援助をなしま
った。

昭和八年七月一八日茂渡が検
挙されたため、九月以降は党中
国地方オルグで広島県オルグ会
議キヤップである関谷源一と連
絡し、関谷より直接指導をうけ
るにおよび広島内左翼学生運動
は活況を呈しきたり、広島自治
学生会を再建確立し、同時に機
関紙『前進』を創刊し、自学の
拡大強化のため活動を開始する
にいたった。

自治学生会の再建後、一〇月
下旬、校友会の昭和九年度理事
の選挙執行にあたり、自学の目
標たる「ブルジョア教育の欺瞞
性と反動的役割をバクロし、広
汎なる学生大衆を左翼化する」
ためには、官制校友会を自学の
指導下に自主化するのが、もっ
とも有効必要との見解のもとに
校友会理事選挙対策委員会を市
内八丁堀松屋喫茶店でひらき、
自学指導部員当時、文2乙(現

在文3乙)岡本重義、当時、文
2乙(同上文3乙)永井健造、
ほか二名出席し、候補者として
自学指導部員当時、文2甲(現
在文3甲)正田誠一を立候補せ
しめ、さらにスローガンを決定
し、闘争の結果校友会文科理事
として、正田誠一当選、校友会
文化部、弁論部、文芸部、映画
部の役員もまた自学メンバーを
立候補せしめ、本年五月の理科
代表理事の補欠選挙には理科3
甲某を立候補せしめて当選さ
せ、ここに校友会理事は文科理
科ともに自学メンバーをもって
しめるにいたった。

かくて学内全学生および教官
をもって組織せる校友会役員は
ことごとく左翼学生をもってこ
れにあて、官制校友会を自学の
指導下に自主化をはからんとし
た。

寄宿寮総務の選挙にたいして
も、自学指導部員 岡本重康を
立候補せしめ、寄宿寮の役員も
また自学メンバーの支配下に帰
せしめた。

岩田義道 突撃隊の編成
ならびに 活動

校友会役員を自学メンバーに
よって占領し、全学生大衆を左
翼化せしめんとする運動は広島
県オルグ会議において、これを
指導激励すべく、社会主義競争
を敢行することとし、自学指導
部員をもって、党突撃隊を編成、
本年(昭和9年)一月一六日市

内江波町射撃場に文3乙、岡本
重康、同永井健造ほか一名が合
合し、協議の結果、広島生に突
撃する党突撃隊を「岩田義道突
撃隊」と命名し、学内運動の行
動綱領二〇項目を決定すると
もに、突撃目標として

(イ) 党資金として毎月一〇〇
円を党に提供する。

(ロ) 第一中間ゴール 九年二
月一日(反建国歌祭デー)

(ハ) 第二中間ゴール 同年三
月一日(三・一五記念日)

(ニ) 最終ゴール 同年五月一
日(メーデー)

と決定し、爾来しばしば党突
撃隊会議を開催したったが、
検挙当時には九クラス(各クラ
スとも数名)の自学メンバーを
獲得し、教授にたいする不平不
満その他各科の学内問題をこら
えて、これをバクロし、ブルジ
ョア教育の打倒につとめたもの
である。

自学機関紙の発行

前記の通り昭和八年九月自治
学生会の再建とともに、機関紙
『前進』を極秘裡に発行し、正
田、岡本、永井らによりブルジ
ョア教育の欺瞞性のバクロ、帝
国主義戦争反対などの煽動記事
を掲載し、本年四月まで継続し
てきたが、本年四月にはこれを
『広島戦士』と改題し、広島内
教授暗流問題のバクロにつとめ
るとともに、これはブルジョア
教育の矛盾、資本主義社会の欠

陥にもつくものなれば、社会制度の改革せられざるかぎり、かくのごとき暗流問題は解決せられざるものであると、煽動した。

四月以来は文3乙、岡本重康ほか二名で発行のつど編集会議をひらき、六月二日検挙にいたるまで非合法発行を継続してきた。

党資金活動

広高内学生が唯一の党財政支持隊とされきたり、昭和八年六月七日党员茂渡義人の手をへて当時の自学の責任者より約一〇円ずつ提供し、同年一月には「広高内共産党資金網」の確立を見、「岩田義道 突撃隊」では毎月一〇〇円の党資金完成を目標に突撃してきたもので、岡本重康は党内党資金の責任者となり、正田誠一は文3甲に、永井健造は文3乙の責任者となり、それぞれ党資金を自学メンバーから徴収し、岡本重康のもとに一括して共産党中国地方オルグ関谷源一に提供し、中国地方党活動の資金源としての役割を演じた。

本年（昭和9年）三月たまたま教授の一部間に醸成しきった二派の間の対立激化し、三月末には学生課長の更迭、一講師の罷免となり、これに端を発して二派の抗争はいよいよ表面化するにおよび自治学生会はブルジョア教育の矛盾を暴露すべく

最好の機会とし、党オルグ関谷源一もまたこれを利用して学内を紛糾せしめんと企図し、二三の教授も感情的に生徒に対してストライキを煽動するものあり、四月、関谷および自学責任者の対策協議の結果「自学」としては表面になつことは不利であるから、自学メンバーはひそかに各クラスの輿論をつくることに、運動部員を煽動して、これを先頭にたしめるとともに、正田誠一および某は校友会理事として合法場面にカムフラージュして活動し、岡本重康は寮総務としてこれに参加、さらに自学メンバーたちは代議員、ストライキ対策委員として活躍し、一方某たちは非合法的に『広高戦士』を発行して暗流問題に対する方針、批判などを発表しつつ、たくみに暗躍をつづけ、これが左翼指導につとめきたったものである。

（大興市民史P35 昭和9年） 4・26事件後の検挙

——このあと、なほ残党が県下に潜入し、党広島地方オルグを中心に組織に暗躍しつつあるを探知し、県特高課捜査の結果吉本康二指導のもと、同党、青年同盟員が広電を根拠に宮島はじめ祇園古市の変電所技手、広島市松垣義郎（27）らを逮捕（一〇月三日起訴予審に）

（注）広島県労会議編「広島県労働運動史四〇七ページ」「思想月報」第二号よりとしてつぎの記事あり。

「——右検挙にあたり党员吉本康二、山道繁等は巧みに逮捕を免れ京阪地方に逃走するや直に党関西地方委員会の残留分子と連絡し、同委員会の指導下に広島地方における組織の再建方針並にそのご結成せられたる準備委員会支持等の諸問題につき協議をとり、吉本康二は前期末広島地方における前次検挙の被害調査並に組織再建の使命を帯びて再び呉市に潜入し、当時未検挙中の「ハンマー突撃隊」メンバーを指導し再建活動に移り、同年七月二〇日には日本共産党中央選全国代表者会議準備委員会、広島地方準備委員会署名の撤文を発して、多数派支持を表明し、再度暗躍を開始するに至り、又高田郡吉田町附近には昭和八年一月以来、南小一を中心とする党広島県オルグ会議所属の「渡政突撃隊」、西部佐伯郡廿日市町附近には松垣義郎を中心とし、党支持団体の結成せられ居ること判明したるを以て、八月下旬より九月下旬にわたり順次これが検挙をおこない四五名を検挙した。」

（呉市の検挙） つづいて県特高課千葉警部来呉に呉署俄然色めき翌朝五時を期して呉署総動員。署長陣頭指揮。それぞれ、ねこみをおそって、川原石町、中村定男ほか20余名の男女を一

斉検挙、呉署の武道場に留置。このなかには某中学生、美容師（22）芸南バス車掌（19）（森島守人氏の妹）もあり、呉を中心に再組織をすすめていたもの。

公判 判決

4・26事件のトップをきって広島高校赤化事件の江田島村全校自治会メンバー（22）（注、正田誠一）の公判を二月一七日、同人は四月の同校紛糾に一举、同志を獲得せんとしてストを煽動、党資金獲得に暗躍。（転向のため求刑2年。判決は執行猶予。）

つづいて広島瓦斬電軌赤化関係の車掌井上栄（24）ら三名の予審終結。そのほか簡単なものから分離公判をすすめる。

翌一〇年にいり二月一三日比婆郡山内北村、竹地定夫（27）の公判。山口県宇部市で旋盤工中左傾。昭和五年入党。福岡県で起訴中、広島にまいもどり、呉市にいりこんで工廠従業員を目標に、全協呉地区の拡大強化に暗躍したもの。

（3月 求刑3年。転向に判決3年）

変電所の松垣義郎は四月一二日判決二年、執行猶予。

主魁、下関市、関谷源一は殺人未遂、殺人予備、銃砲火薬違反もくわえて、検挙後一年余をへて、五月はじめ予審終結。昭和一〇年七月一日懲役八年判

決。同裁判所の記録。

その一味呉市塩屋町 ラス張り工中村定男（26）同菊池町大工見習山崎政高（26）の公判を一〇年五月六日、ともに求刑二年。転向をみとめて判決同、執行猶予。

中村は金属工、船員、自由労働者など。昭和五年全国大衆党呉支部常任書記に、そのご左傾して10・30事件では起訴猶予となったにもかかわらず、昭和九年三月県オルグ会議指導のもとに、山崎らと前記「ハンマー突撃隊」を編成し「第二なるクレイン」なる機関紙の編集にいたがい、4・26事件一斉検挙後も、杉山某（注、山道繁）が京阪地方へ潜入を援助し、のち広島自治学生会メンバー吉本康二と連絡して校内の事情を呉市内の同志につたえ、九月検挙までの同志の指導下に運動、呉広島の残留同志と連絡して、資金獲得につとむ。なおこれよりさき同年三月全協に加入、全協呉地区協議会準備会を結成し、土建の責任者となり全協の組織確立をはかる。

山崎はプロレタリア小説の感化から左傾。昭和六年一〇月全協一般使用人組合呉支部に加入。3・5事件では起訴猶予。昭和八年六月全協茂渡某、三戸信人をしるや、その指導下に全協呉地区オルグ会議を組織。工廠赤化をはかり「戦争による

労働強化反対」のアジビラを従業員に配布。中村らと呉地区協議会準備会を確立。関谷の指導をうけ呉地区党組織に活動。なお資金四〇〇円を提供したものの。

一斉検挙の、朝鮮人や水平社の左翼化に暗躍した岩佐寿一は三年半の求刑。非転向のため三年の実刑判決。

広島高校赤化の中心人物、広島市、吉本康二(23)は、しんがりを受けたまわって、昭和一〇年二月予審終結。同人は車掌、農村、朝鮮人赤化と手広く活動したが、一斉検挙まえにすがたをくらまし、呉工廠赤化の同志とともに九月検挙。

六月十五日、求刑三年。非転向のため判決同の実刑。八月三〇日、控訴審も同。

10・30事件で起訴猶予中、今回検挙された小寺英雄は五月一日、求刑四年。判決同。控訴も非転向のため一審通り。

(呉日日新聞 昭和10年3月6日)

二年六ヵ月求刑 赤の朝鮮人に

4・26事件の別派として検挙された、全協及び共産青年同盟に加入し、在広朝鮮人青年会の共青フラクとして、赤の少年团组织に暗躍した。慶尚南道求礼郡求礼面生れ 金明文(22)にかかる公判は四日午後広島地裁で、福田裁判長、吉岡検事か

りで開廷。検事は懲役二年六月を求刑。判決は一日。

あめとかぜと年表 ①

年月日	主な出来事	参考文献
1922年 7 月	広島市河原町、吉川長太郎方で「共産党宣言」の読書会、東大生米村を中心に榊井盛之、堀川俊市、倉本虎一（大工）、達一兄弟など。	『広島県労働運動史』
1924年 9 月 8 日	広島合同労働組合結成、総同盟へ加盟。	『広島県労働運動史』
1925年 5 月24日	広島合同労働組合、日本労働組合評議会へ加盟。	『広島県労働運動史』
1925年 6 月 1 日	広島鉄工組合結成、早川義則ら。	『広島県労働運動史』
1925年 7 月23日	政治研究会広島支部発会式（於広島市横町朝日クラブ）、司会吉本隆一（広島合同労組）、講演上岡利夫（神田農民同盟）、閉会の辞吉川長太郎。	『広島県労働運動史』
1925年 8 月16日	日本労働組合評議会・中国地方評議会結成（於岡山医師会館）、広島合同・広島鉄工・松永労働・岡山労働・岡山足袋ゴムの5組合、出席代議員30余名、傍聴者50名、役員として広島県より早川義則・佐久間松蔵・小林一雄・倉本虎一・三藤茂八選出。	板野勝次著『嵐に耐えた歳月』
1925年12月12日	労働農民党第一回全国大会。	
1926年11月25日	広島一般労働組合結成——広島合同・広島鉄工合同。	『広島県労働運動史』
1927年 2 月18日	労農党広島支部結成、日農県連と評議会一般労働組合及び個人、支部長佐竹新市、書記長片岡重介、執行委員玖島三一・堀川俊市・早川義則・榊井盛之・中島正一・渡辺信樹・池松利男。	『広島県労働運動史』
1928年 2 月27日	日本共産党岡山地方委員会結成、委員長倉本虎一	『嵐に耐えた歳月』
1928年 3 月15日	全国一斉検挙、岡山県では倉本虎一ら不起訴で釈放、直ちに共産党岡山地方委の名で活動開始。	『嵐に耐えた歳月』
1928年 3 月15日	労農党広島支部、早川義則・上岡利夫・片岡重介・玖島三一・中島正一・堀川俊市・末元義彦ら約20名検挙、共産党との関係なく全員釈放。	渡辺信樹手記
1928年 3 月30日	労農党呉支部発会式、大山郁夫来呉、カフェー・ブラジルで観迎会。	
1928年 4 月10日	労農党・評議会・無産青年同盟に解散命令、広島一般労働組合解散。	『広島県労働運動史』
1928年 7 月	済南事件（第3次山東出兵）、反対のビラまきで旧労農党広島支部の活動家一斉検挙、責任者として井上豊起訴。	渡辺手記
1928年 8 月21日	広島合同労働組合結成、佐竹新市・吉本隆一など、主事は左派の岨常次郎。	
1928年12月	労農党再建大会に広島より早川義則を代表としておくる。12月4日（大会2日目）結社禁止命令。	
1928年12月23日	日本労働組合全国協議会（全協）準備会結成、当局の結社禁止命令にしたがわず、非合法組合として発足。	
1928年12月28日	政治的自由獲得労農同盟（政獲同盟）結成。	

あめとかぜと年表 ②

年月日	主な出来事	参考文献
1929年 1 月	政治的自由獲得労農同盟広島支部結成——末元玄聡・玖島三一・片岡重介・早川義則・上岡利夫・晒谷悟・岨常次郎。	
1929年 2 月 2 日	中国無産党結成——旧労農党合法派佐竹新市・高橋武夫・吉本隆一・上岡利夫・高津正道。	『広島県労働運動史』
1929年 3 月15日	中村定男、「3・15、1周年と山宣虐殺に抗議し、ストとデモで闘え」のピラを呉工廠入口でまいて検挙（当時18歳）。	中村手記P.
1929年10月21日 ～23日	「三滝山ピクニック事件」として検挙した16名を起訴、広島刑務所に収容、玖島三一、末元玄聡、横野卯一、林成城、松本京一など。	『大呉市民史』
1929年11月23日 ～24日	県立広島二中生、社会主義研究をしているとして西署に検挙（7～8名）、指導員岨常一郎（19）も検挙、翌日東署、広島高校生2～3名を検挙。	『大呉市民史』 P124
1929年12月	広島憲兵隊本部、上京して眞鍋喜一（元呉工廠共済組合事務員）を検挙、ひきつづき関係の呉工廠工員数名を取調べ。	『大呉市民史』 P123
1930年 5 月 5 日	呉工廠工員8名を喚問、両名は一応帰宅、うち1名は音戸町で発行の文芸雑誌『一路』の発行者、第2回第3回と工廠10余名を検挙。	『大呉市民史』 P162
1930年 6 月19日	呉軍法会議で眞鍋喜一に懲役2年6月・罰金80円、山口薫・田中正雄・平原一雄に各罰金40円求刑、判決、眞鍋に2年、控訴して1年、上告棄却。	『大呉市民史』 P123
1930年 6 月20日	三滝山事件で判決、玖島三一・末元玄聡に各懲役3年、横野・林に各懲役2年。	
1930年12月29日	広島瓦斯電軌（広電）、初発電車からストライキに入る。	『呉日日新聞』昭和6年1月3日記事
1930年12月30日	広電争議団員のデモと警官隊衝突、運輸クラブ内にいた171名を東西両署に検束。	『呉日日新聞』昭和6年1月3日記事
1930年12月31日	広電争議団幹部59名を送検、同夜、執行前の強制処分によりその大部分を広島刑務所に収容。	『呉日日新聞』昭和6年1月3日記事
1931年 1 月 2 日	広電、市内線は例年の半数49台で運転、乗客は不便を感じぬ程度となる。	『呉日日新聞』昭和6年1月3日記事
1931年 1 月14日	広電争議団員20名を起訴、暴力行為・公務妨害・傷害・脅迫罪の名で。 8月22日佐竹新市市議に懲役7月の判決。	『呉日日新聞』昭和6年1月15日記事 『大呉市民史』 P195
1931年 1 月21日	海軍工廠工員解雇予報記事発表、「呉工廠4,100名、横須賀2,200名、佐世保1,500名、舞鶴工作廠700名、広工廠700名、合計9,200名、解雇手当、1人平均684円」。	『呉日日新聞』昭和6年1月21日記事
1931年 1 月26日	市川忍（広島郵便局員）、上京して全協本部に広島地方協議会をつくることの承認をうける。 3月9日広島地方各産業別支部の結成をおわり広島地方協議	

あめとかぜと年表 ③

年月日	主な出来事	参考文献
	会成立。	『中国新聞』昭和7年9月7日記事
1931年2月	胡川清、上京して赤色救援会本部から広島地区委員会結成の承認をうける。	『中国新聞』昭和7年9月7日記事
1931年3月20日	呉工廠吉浦砲煩実験部構内に解雇反対のビラがまかれる。 4月2日工廠第一門めがね橋付近に。	『大呉市民史』 『大呉市民史』
1931年4月8日	呉工廠、3,722名の解雇人員を発表、全市に解雇反対ビラ数百枚まかれる。	『大呉市民史』
1931年4月16日	伊藤正朔（広島放送局員）・小野一明ほか数名、広島西署に検挙。	『中国新聞』昭和7年9月7日記事
1931年5月4日	広島市台屋町そのほかのアジトで、市川忍・五条俊夫・胡川清・村上文二・吉田司・小笠原豊その他を検挙、「5・4事件」。	
1931年6月	岨常次郎、共産青年同盟を通じて共産党中央と連絡がつき上京。 7月、広島市で岨、古末、寺尾の3名で党広島地方委員会準備会を結成。 8月、党中国地方委員会、広島地方委員会を結成。	岨常次郎談——1983年10月
1931年8月	上旬、坂口喜一郎・西川照三両兵曹、平原甚松・山口・若林各水兵、治安維持法違反で検挙、現役免除となる。	平松甚松手記
1931年9月18日	「満州事変」おこる。	
1931年9月22日	広島専売局付近で反戦ビラがまかれる。 9月23日、呉線海田市駅で呉工廠通勤列車到着の際反戦ビラ 10月、広島市内各中等学校に「満州」出兵絶対反対のビラを撒布または送付。 10月24日未明、呉工廠めがね橋付近、広工廠付近に反戦ビラ 翌年2月、3月にも呉市内に反戦ビラ。	『大呉市民史』 『大呉市民史』 『大呉市民史』 『大呉市民史』
1931年10月	呉地区オルグ岨常次郎、共産青年同盟同盟中央委員として上京、かわって寺尾一幹が呉地区オルグに。	『大呉市民史』
1931年10月	花野フジエ、福山の福島紡績組織の目的で、全労系福山労働組合及び全協広島支部協と連絡を保ちつつ福山市に入る。 12月、全協繊維福紡分会、全協一般福山地区、全協出版福山地区の組織に成功、全協福山地区責任者として広島支部協と連絡。	『大呉市民史』
1932年2月	呉工廠細胞工場新聞『唸るクレーン』および海軍細胞新聞『聳ゆるマスト』創刊。	寺尾一幹談
1932年3月4日	広島市千田町で広島地区オルグ古末憲一逮捕。	
1932年3月5日	広島市を中心に左翼組織一斉検挙はじまる。	
1932年4月1日	呉市で興文中学自治学生会員の検挙をきっかけとして一斉検	

あめとかぜと年表 ④

年月日	主な出来事	参考文献
	拳はじまる。	
1934年 4 月	中旬、中国地方オルグ三好惣次、呉地区オルグ寺尾一幹と連絡、寺尾は『聳ゆるマスト』（すでに4号まで発行）のことなど報告。	
1932年 5 月10日	寺尾一幹、路上で逮捕される。 30日未明寺尾、呉署より脱走、山陰線をへて上京。 寺尾脱走のための非常警戒中、路上で平原甚松逮捕される、まもなく釈放。	寺尾手記
1932年 9 月 2 日	横須賀軍港で西氏・河田・吉原の三水兵検挙。	『大呉市民史』
1932年 9 月	滝川恵吉、党本部より中国地方オルグとして広島県に派遣され、中国地方オルグ錦織彦七とともに再建にあたる。 滝川は広島市を中心に、錦織は呉地区、岡山県を担当。	『大呉市民史』
1932年 9 月	山下達吉、坂口・平原らと連絡活動したことにより現役免除。	
1932年10月30日	錦織彦七、党の熱海会議の一斉検挙で逮捕される、平原甚松も。 つづいて広島市で滝川恵吉、大村莊重のほか「10・30事件」一斉検挙はじまる。	『嵐に耐えた歳月』 『大呉市民史』 P278
1932年11月 4 日	広島市公会堂でひらかれた、プロレタリア文化連盟・ソヴェート友の会主催「文化の夕」、警察によって強制解散、伊藤正朔ほか9名検束される。	『呉日日新聞』昭和7年11月6日記事
1932年11月 7 日	呉海軍水兵小倉正弘ら6名、治維法違反で憲兵分隊に検挙される。	『大呉市民史』 P276
1932年11月19日	山下達吉元水兵、大阪で検挙。	『大呉市民史』 P276
1932年11月25日	5・4事件公判、市川忍、裁判開始前に被告人会議をひらくことを強く要求、ついに市川・五条・胡川、3被告退廷を命じられる。	『呉日日新聞』昭和7年11月26日記事
1932年12月 5 日	市川忍懲役4年、五条俊夫懲役3年の判決に両名は「日本共産党万歳」を叫ぶ。	『呉日日新聞』昭和7年12月6日記事
1932年12月	山本タキエ（豊田郡中野小学校訓導）、10・30事件関係で竹原署に検挙。	『瀬戸内に生きて』
1933年 1 月	三戸信人、10・30事件に起訴猶予で釈放後上京、共青同盟本部と連絡。	『中国新聞』昭和9年8月20日号外
1933年 2 月17日	市川忍、控訴審分離公判、懲役4年の判決に「思想犯に対する極刑反対」を叫ぶ、五条は懲役3年の判決。	『呉日日新聞』昭和8年2月18日記事
1933年 2 月17日	山口県での一斉検挙をのがれ、呉市で再建活動をしていた守田道輔、検挙される。	
1933年 4 月 5 日	関谷源一、党本部よりオルグとして広島市に派遣される。	『中国新聞』昭和9年8月20日号外
1933年 4 月10日	関谷源一、三戸信人、小川正一（広島郵便局）の三名で、党	

あめとかぜと年表 ⑤

年月日	主な出来事	参考文献
	広島県再建委員会を結成、7月27日広島県オルグ会議と改める。	『中国新聞』昭和9年8月20日号外
1933年6月10日	赤色救援会の岡本菊次郎、阪本四郎、検挙される。 7月天津せい検挙される。	『中国新聞』昭和9年8月20日号外
1933年7月	小寺英雄、宮島から広島市に入って赤色救援会活動。	『小寺手記』
1933年7月	全協再建準備会結成、関谷、小川、岩佐、その後竹地定夫、黄五姓など参加、全協広島地区準備会結成、『再建の旗』を発行。	
1933年7月	広島郵便局細胞結成、『おいらのたより』を発行。	
1933年8月28日	差別裁判糾弾闘全国委員会、大阪で結成、つづいて各府県に部落闘争委員会結成、「差別裁判を取消さねば部落民の兵役・納税の義務を免除せよ」のスローガンをかかげる、国会にむけて裁判取消しの請願行進を決定。	
1933年9月	中旬、呉地区で「ハンマー突撃隊」結成、『第二唸るクレーン』を発行、呉工廠を目標にながしこみ。	
1933年10月4日	差別裁判取消し要求の請願隊、九州を出発し山口県を経てこの日己斐駅につく。	『中国新聞』昭和8年10月5日
1933年10月5日	玖島三一（福島町）白砂健（坂水平社）、請願隊に加わって出発。 このころ福島町に部落闘争委員会が結成され、岩佐寿一、書記となる、『糾弾闘争ニュース』を発行。	
1933年11月	広島合同労組・広島消費組合・在広朝鮮青年会で差別裁判糾弾闘争支持の会を結成。	
1933年11月	党オルグ、広島高等学校自治学生会を指導、学内党資金網を確立、『前進』を発行、翌年4月『広高戦士』と改題。	
1934年1月	党広島県オルグ会議名の『帝国主義戦争 絶対反対』のビラを広島全市にはる。	
1934年1月	専売局を目標に活動中の高橋マツ子、党オルグの注意により弾圧をされて呉にうつる。	
1934年2月	初旬広島電鉄党細胞結成、『スパーク』発行。	『中国新聞』昭和9年8月21日記事
1934年3月	作家同盟の国本金夫・山本タキエ、反戦活動の嫌疑で広島憲兵分隊に検挙、まもなく釈放、5月17日特高に再検挙。	数本タキエ手記
1934年4月10日	三戸信人、東京で警視庁に逮捕され、広島に身柄をうつして取調べられる。	『中国新聞』昭和9年8月21日記事
1934年4月26日	広島市内17ヵ所のアジトから50名を検挙（4・26事件） 6月23日広島高校生徒49名を検挙。 一斉検挙をのがれた高橋マツ子、山道繁、広高生吉本康二、京都にうつる。	高橋マツ子手記

あめとかぜと年表 ⑥

年月日	主な出来事	参考文献
1934年7月20日	吉本康二、再び呉に入り、残留同志、中村定男らと再建活動 党関西地方委員会の指示により「日本共産党中央奪還全国代 表者会議（準）・広島地方準備委員会」（いわゆる多数派）の 檄文を出す。	中村手記 広島県労会議編『運動史』
1934年8月	吉本康二、松本徹をつれて上阪、広島県へのオルグ派遣を党 関西地方委員会にもとめる、関西地方委では警戒して松本徹 とはあわず、オルグ派遣も人手不足で不可能、吉本もむなし く帰る。	平葦信行談
1934年8月・9月	高田郡吉田町付近の南小一らの「渡政突撃隊」グループ及び 佐伯郡廿日市付近の桧垣義郎（変電所技手）ら、農村青年な ど順次検挙、45名に達す。	『大呉市民史』
1934年9月	吉本康二、中村定男ら検挙。	
1935年6月	吉本康二、3年の実刑判決、8月控訴審も同じ、獄中発病帰 宅まもなく死亡。 中村定男、2年の刑（3年間の執行猶予）、釈放後広島一般労 働組合常任となる。	中村手記
1935年6月26日	小寺英雄、控訴公判で4年の実刑判決。	数本手記
1935年7月1日	関谷源一、8年の実刑判決。	『大呉市民史』
1935年10月	岩佐寿一、上告棄却で3年の刑確定。	
1935年10月	「5・4事件」で起訴猶予の山本正一（製材工）、広島一般労 働組合で活動をはじめる。 1936年10月上阪、党中央再建準備会系の長壁民之助（大阪木 材労組書記）・岩間光男（『労働雑誌』関西支局）らと連絡帰 広後中村定男らと『労働雑誌』読書会をつくる。	『広島県労働運動史』P407「思想月報」
1936年2月11日	「10・30事件」で3年の刑の平原甚松、仮釈放。 6月6日上阪して党中央再建準備会系の森本亮一・長壁民之 助らと連絡、帰郷後社大党細田伊太郎の市議選応援、片岡義 夫・田中豊らと『労働雑誌』読書会などをつくる。	
1936年5月16日	思想犯保護観察所管轄の丙子会発会式（於広島県医師会館）、 会員150名位。	数本手記
1936年12月5日	平原甚松・片岡義夫・山崎政高・田中豊らを検挙、起訴猶予 山本正一・中村定男ら広島一般労組員を検挙、中村定男は前 判決の執行猶予を取消され、合計4年の実刑判決。 1937年6月18日山本正一、予審中病死。	『広島県労働運動史』中村定男手記
1940年8月19日	新協劇団後援会広島支部に弾圧、大藤軍一・中沢晴海・井上 栄・田谷春夫・大前三枝ら宇品署に留置、妻子のある中沢晴 海、年末に釈放、他は留置場で越年、大藤軍一、3年の実刑 で下獄。	

あめとかぜと年表 ⑦

年月日

主な出来事

参考文献

1941年4月8日 「広島グループ」の名目で警視庁に広島出身者検挙、古末憲一・岩佐寿一・迫桝盛登・林ノ内栄蔵・数本英次郎・中川秋一・岡本菊次郎、5月に全員不起訴。
別に寺尾一幹は研究会をひらいていたとして検挙、4年の実刑判決。

人名索引

- ①頁数は本文記載頁
- ②「」は広島県解放運動無名戦士の碑合祀者名簿
- ③「」は参考文献

天津 せい 広島専売局女工員。'31年3月ごろ全協食料労組広島支部専売局分会に加入、同5月解雇。そのご赤色救援会活動（伊藤正朔らと）。'32年「3・5事件」で検挙、起訴猶予。赤色救援会の再建活動（岡本、坂本、三戸らと）。'33年6月検挙、'34年3月、2年の刑、執行猶予の判決

栗根 恒夫 尾道市十四日町。尾道商業卒。'30年～'31年ごろから瀬戸内港湾従組主事野村秀雄方に出入りする。'32年2月尾道バスのストにピラマキで検挙。戦後広島地方委員会再建に参加。'49年10月死亡、38歳。

☆P104（迫川敬一談）

☆第2回合記名簿

池田 八束 呉市東畑町。'28年より'30年、東京で赤色救援会活動に参加。戦後'47年呉市議選に党より立候補、落選。'52年より失対で就労。'54年全日自労広島支部委員長。'58年～'64年広島県労会議執行委員、全日自労広島分会執行委員。'66年7月労災事で死亡、59歳。

☆P. 136、P. 146（中村定男手記）

☆第5回合記名簿

稲垣 宏（池村） '21年（大10年）志願兵として呉海軍に入る。看護兵となり一等看護兵曹に進む。山本俊次看護兵、木村莊重水兵を知り左翼文献を広く集める。'31年（昭6年）左翼文書を発見されて呉海軍病院第二病棟長を免ぜられ、海兵団で取調べ。'33年4月軍法会議で4年の刑。'77年2月三重県久居市庄田町の自宅で高血圧症で死亡、72歳。

☆P. 86（稲垣談）

☆第16回合記名簿

井上 栄 広島電鉄車掌。'33年（昭8年）広島郵便局集配手小川正一（党広島県再建委員会メンバー）のはたらきかけで党オルグ関谷源一と連絡。全協広電分会、党広電細胞に加入、『スパーク』を発行。'34年「4・26事件」で検挙、起訴猶予。'40年8月新協劇団広島後援会員一斉検挙にあい宇品署に翌年まで留置、起訴猶予。

☆P. 62；P. 152（談）

井上 満 岩國市大字美土路。広島県立工業製図科卒。日本製鋼広島工場で全協金属分会加入。'32年1月入党。同年「10・30事件」で検挙、2年の刑、執行猶予。'45年8月6日原爆死、35歳。

☆P. 220、4段目。P. 221、1段目。

☆第2回合記名簿

井ノ口俊夫 広島高師臨時教員養成所学生。共青同盟細胞キャップ（P. 52）'31年4月29日逮捕、同夜脱走。5月10日路上で特高刑事に発見され短刀で刺して逃走。6月2日大阪府下で逮捕。

☆P. 219、5段目

石川 市松 広島市舟入町。印刷工。'31年5月全協加入、市川印刷所分会結成、'31年9月共青加入。'32年3月市川印刷所ストで活動、同年「3・5事件」で検

挙、2年の刑（執行猶予）。'40年7月佐伯郡大柿町柿浦で病死、32歳。

☆P. 218、1段目。 ☆第2回合記名簿。

市川 忍 広島郵便局通信書記。全協広島地方委員会結成。'31年5・4事件で検挙、4年の刑。控訴も同。'46年3月病死、41歳。

☆P. 213、3段目～4段目。

☆P. 215、1段目～3段目。

井上 その 広島市立高女卒後福屋百貨店に入る。全協加入。'32年「3・5事件」で検挙、起訴猶予。

伊藤 正朔 広島放送局勤務中『戦旗』広島支局責任者、'31年4月検挙起訴猶予。'32年3・5事件で検挙、起訴猶予。10・30事件で検挙起訴。

☆P212、4段目。

☆P220、4段目。

石川 茂一 広島一中4年修了で第三高等学校入学。第三高等学校を放校処分となり広島市に帰り左翼運動で検挙起訴猶予。再建活動中、10・30事件で検挙、3年の刑。腸結核で執行停止、出獄。34年9月死亡、23歳。

☆P220、4段目。5段目。

☆第1回合記名簿。

岩佐 寿一 広島二中卒、広島高校1年中退。'30年から大阪で労働生活。'33年7月広島市で全協広島地区再建準備会に加入。10月差別裁判糾弾闘争福島町部落闘争委員会書記となる。'34年4月「4・26事件」で検挙、3年の刑。'38年5月出獄、翌年上京、機械組立工となる。'41年4月警視庁に「広島グループ」として古末・林ノ内・岡本・数本・中川・迫樹らとともに検挙されたが5月に全員釈放。'45年空襲にあい鳥取県米子市で機械工。同年12月広島市に帰り党再建運動に参加。'49年より神戸市で全日自労神戸地区結成運動に参加。

☆P180（手記）

☆P228、1段目。

岩村 大次 国鉄広島駅車掌区勤務、'29年浜口内閣官吏減俸反対のピラマキで解雇後国鉄オルグとして活動、'32年8月山口県防府市で検挙。6年の刑。'85年10月17日病死。

☆P66（清水手記）

☆P218、3段目。

上岡 利夫 賀賀茂郡大和村下徳良90。日彰館中学卒、歯科医専中退。24年世羅郡油田村に「神田農民同盟」結成。労農党広島支部に加入。労農党解散後、政獲同盟（政治的自由獲得労農同盟）に参加。31年8月全農全会派（全国農民組合全国会議派）に属す。'34年3月事務所を造賀村に移す。戦後入党。広島地方委（県委）農民部長となる。'68年9月28日死亡、68歳。

☆第7回合記名簿。

えびすがわ

胡川 清 広島一中卒、神戸高商入学。中退して大阪外語ロシア語科に入学。左翼運動に参加して退学処分となり広島市に帰る。'31年1月赤色救援会広島地区委員会結成に着手。2月赤色救援会本部から広島地区委員会確立の承認を受ける。'31年5月「5・4事件」で検挙。

☆P. 213、1 段目

☆P. 215、1 段目

たかし

岡部 隆司 神石郡豊松村下豊松。14歳で上京、山本懸蔵方へ下宿。産業労働調査所へ小使として入所、正則中学へ通学。「4・16事件」当事、所員全部検挙されて彼ひとり産業労働調査所を守る。'30年6月ごろ入党。野坂、岩田、野呂その他クトペーからの帰国者と党本部との連絡役。'31年1月『第2無産新聞』編集部員。同年11月検挙、広島刑務所で服役。大藤軍一、岡本菊次郎、坂本四郎らと同一作業所で働く。出獄後東京で活動を続け'41年7月2日検挙。'42年7月31日巢鴨刑務所未決で死亡、31歳。

☆P. 114、中段（岡本談）

☆第7回合祀名簿。

おぐら

小倉 正弘 台湾台北州立台北工業学校電気科中退。'30年1月呉海兵団に入団。軍艦那珂、海兵団をへて軍艦白鵬乗組み。一等機関兵、治維法違反検挙で二等兵に降等処分。党中国地方オルグ錦織彦七、呉軍港水兵対策委責任者木村狂重と連絡。『嶺ゆるマスト』5号6号、『赤旗』その他の呉軍港での配布責任者。'32年11月7日検挙、軍法会議で6年の刑。

☆P. 90（手記）

☆P. 221、4 段目。

岡本菊次郎（福本） '32年「3・5事件」に全協メンバーとして検挙、起訴猶予。'32年「10・30事件」の犠牲者の救援活動に取組む。'33年6月10日犠牲者家族の会合で特高にふみこまれて検挙、3年の刑。

☆P. 113（手記）

小川 正一 広島郵便局集配手。'33年2月共青加入、4月入党。4月10日関谷源一、三戸信人とともに党広島地方委員会再建委員会（のちに広島県オルグ会議）結成。広島郵便局細胞キャップ。全協広島地区協責任者。'34年4月「4・26事件」で検挙、7月獄内で自殺。

☆P. 228、2 段目。

☆P. 152（井上手記）

大塚 猛雄 赤色救援会三次十日市地区責任者。'34年4月26日広島市で検挙、起訴猶予。その後も救援活動を続ける。'57年10月21日死亡、47歳。

☆P. 124、3 段目。

大塚梅三郎 広島市松永市神村町。'33年戦闘的無神論者同盟広島支部松永班キャップ。'33年検挙、発病して出所、自宅療養。'34年12月結核で死亡、23歳。

大下 一二 新聞配達員。呉地区共青街頭細胞メンバー。'32年4月2日検挙。

大藤 軍一 広島郵便局通信書記補。全協広郵分会責任者。'31年「5・4事件」で検挙、起訴猶予。'32年「3・5事件」で検挙、3年の刑。'35年8月出獄後、ロンド書房をひらき、新協劇団広島後援会を結成。'40年8月19日同後援会の一斉検挙で、3年の刑。敗前直前に出獄。その後広島労演を結成、事務局長（ペンネーム大月洋）。'73年8月広島市飯室町の自宅で病死、67歳。

☆P. 155（手記）

☆第12回合祀名簿

太田 史郎 大阪府泉南郡佐野町1250。広島郵便局電信課集配手。'32年1月全協広郵局分会加入、同年「3・5事件」で検挙、2年の刑。出獄後大阪で自動車運転手。'45年10月北ボルネオで病死、36歳。

☆P. 218、1 段目。

片岡 義夫 山口県周東中学卒。'31年呉工廠整理反対運動にピラまきで罰金刑。'31年9月共青に加入。全協の組織活動及び中学校の自治学生会組織活動。'32年4月30日広島市で検挙、3年の刑、執行猶予。'49年4月10日死亡、41歳。

☆P. 218、2 段目。

☆P. 41、1 段目。

片岡 重介 京都市電車掌時代、市電ストで中西伊之助らと検挙、6ヵ月の刑。呉市にかえり労農党広島支部執行委員。労農党解散後、新党準備会、政復同盟に参加。'32年賀茂郡造賀村にかえり全農活動。'41年6月23日結核で死亡、49歳。

☆P. 34、2 段目。（渡辺手記）

☆第1回合祀名簿。

蒲田 政雄 呉一中卒。共青呉地区街頭細胞メンバー。'32年2月ごろ全協金属呉工廠分会砲弾製鋼班オルグ。'32年「3・5事件」で検挙、2年の刑、執行猶予。

☆P. 218、3 段目。

亀田 勢 呉二中4年修了。新聞配達員。共青街頭細胞メンバー。'31年4月呉工廠整理反対のピラまきで罰金刑。'31年7月全協呉地区協議会結成をはかり、共産青年同盟にも加入。'32年「3・5事件」で検挙、2年の刑、執行猶予。'45年3月27日中国広西省柳州で死亡、37歳。

☆P. 218、3 段目。

☆第1回合祀名簿

数本英次郎 広島一中を経て高松高商卒。広島市で保険会社勤務。'33年より Copp（文化同盟）再建運動に参加、プロレタリア科学広島地区責任者。'34年「4・26事件」で検挙。2年の刑、執行猶予。

☆P. 228、1 段目。

川窪鉄之助 呉一中2年修了。呉海軍工廠水雷部製図工。党工廠細胞キャップ。「3・5事件」'32年5月13日検挙。2年の刑、執行猶予。'45年11月1日上海陸軍病院で死亡、36歳。

☆P. 220、1 段目。

第1回合祀名簿

韓 利権 '32年1月旭山中学中退。吉岡道人のすすめで共青加入。帝人広島工場・専売局を目標に組織活動。「10・30事件」で検挙、起訴。

☆P.220、4段目

北田 建二 神戸職工学校（三菱）卒業、三菱神戸造船所内燃機科工員。'30年6月志願兵として呉海兵団に入団。軍艦矢矧、海兵団を経て特務艦朝日乗組み。'32年11月7日検挙、軍法会議で3年の刑。

☆P.221、4段目。P.79、1段目。

城戸 薫 安芸郡倉橋島村454。小学校教師。「3・5事件」で検挙。起訴猶予。戦後倉橋村長。

☆P.218、4段目。P.217、2段目。

木村 莊重 '25年6月呉海兵団に入団、'32年7月退団。在役7年に及ぶも一等兵。在役中よりオルグと連絡活動、退団後広島に居住、海軍を目標に活動。'32年「10・30事件」で検挙。3年の刑。'37年末出獄後郷里島根県鹿足郡木部村に帰る。戦後'47年木部村長に当選、'50年10月3日占領政策違反で逮捕され重労働7年。'52年4月講和発効で釈放。'82年10月7日神奈川県湯河原老人ホームで死亡、75歳。

☆P.220、4段目。

☆P.221、1段目。

☆P.18、3段～P.19、1段目。

☆第21回合祀名簿。

金 明文 公立普通学校卒。'30年9月内地に渡来。新聞配達で広島市私立松本中学校卒。'32年5月ごろ反帝同盟広島地区組織に加入。'33年7月共青に加入。在広朝鮮青年会共青フракション。少年団組織。

☆P.228、2段目。

木原 吉人 高小卒後'18年呉工廠造機部見習工。'25年歩兵第11連隊に入隊、'26年除隊。'27年上京ラス張り工となる。'30年呉に帰り労農大衆党に入る。'31年の呉工廠整理反対闘争を最も勇敢に闘う。同年7月呉一般労働組合結成。11月ピラはりで罰金10円。'32年1月呉市長選挙に労農大衆党呉支部長細田伊太郎をたてて運動。その後共産主義に投ず。

☆P.224、3段目。

玖島 三一 靴工。'25年広島合同労組（のち評議会系一般労働組合）に加入。その半年後全国水平社広島支部に加入。旧労農党——新党組織準備会——政獲同盟の各広島支部員となる。'29年10月23日三滝山ピクニック事件で検挙、3年の刑。'33年7月出獄。同年10月差別裁判糾弾闘争で国会請願隊広島県代表として参加。'34年「4・26事件」検挙では不起訴。46年共産党広島県委員に選出。戦後第一回の衆議員総選挙に立候補。'52年3月死亡、46歳。

☆P.207、3段～4段目。

久下本 有^{たもつ} 福山市。'28年2月総同盟福山労組結成に参加。同年11月総同盟脱退全国労働組合同盟（全労）結成に参加、中国地方連合会長。広島合同運送スト・広島電鉄スト応援で検挙される。'61年12月28日病死、57歳。

☆P.208、3段目。P.98、2段～3段目（野田手記）

國本 金夫（堀哲二） 賀茂郡東高屋村字堀。小卒後1年間私塾で学ぶ。そのご農業新聞外交員、人絹職工、新聞通信員。'33年9月ごろプロレタリア作家同盟広島支部を再建。'34年3月広島憲兵分隊に検挙、まもなく釈放。'34年5月「4・26事件」文化団体関係の検挙で宇品署へ。3年の実刑で'38年2月出獄。'39年8月日赤糸崎病院で死亡、32歳。

☆P.228、5段目。P.155（大藤手記）

☆第1回合祀名簿。

五条 俊夫 県立広島工業学校電気科中退。ハカリ器製作工。広島合同労働組合内革命的反対派に参加。'30年10月ごろより市川忍、岨常次郎らと全協広島地方協議会結成を協議、準備会の書記局を担当。'31年3月同協議会結成完了、事務局員。'31年「5・4事件」で検挙、3年の刑。出獄後、'39年2月工場で事故死。

☆P.215、1段～3段目。

☆P.213、3段～5段目。

☆第1回合祀名簿。

小寺 英雄 広島県佐伯郡厳島町。'32年ごろより赤色救援会佐伯地区責任者。'32年「10・30事件」で検挙、起訴猶予。'33年7月広島市にでて、岡本・坂本・天津検挙のあとをうけて赤救再建活動。'34年1月赤救広島地方委員会結成。その間入党、オルグ会議メンバーとなる。'34年「4・26事件」で検挙、4年の刑。

☆P.228、1段目。

☆P.116（小寺手記）

阪口喜一郎 大阪府東北郡和泉町。予備役海軍二等機関兵曹。'31年8月治安維持法違反事件で他の水兵とともに軍法会議の取調べをうけ予備役編入となる。田中書店を通じて党員地区オルグ寺尾と連絡。中国地方オルグとも寺尾を通じて連絡協議、上京して中央軍事部に入る。警視庁で逮捕呉憲兵隊に送られ、広島刑務所未決拘留中、'33年12月死亡、31歳。

佐々木万寿司 賀茂郡八本松。全協金属呉工廠分会造機班責任者。'32年「3・5事件」で検挙、2年の刑、執行猶予。

☆P.218、2段目。

☆P.220、2段目。

迫 樹 盛登 安佐郡飯室町。広島消費組合常任。赤色救援会、そのほか非合法組織との連絡役、争議団の応援などで活動。'34年「4・26事件」で検挙。

☆P.228、4段目。

☆P.117、1段目。

☆P.120、1段目。

坂本 四郎 広島県厳島町。「10・30事件」後の赤色救援会再建のために広島市にでて、岡本・天津とともに活動。'33年6月犠牲者家族の会合で検挙。

☆P. 116 (小寺手記)

☆P. 114、1 段目。(岡本談)

坂田 進 呉市岩方通。呉ノ中中退。社会大衆党呉支部に加入後左翼に近づく。

☆P. 224、1 段目。

佐竹 新市 広島県山県郡川迫村(現千代町田)中学校卒業後石炭外交員。'24年八田舟三牧師の自由労働問題研究会に出席、翌年アナキスト系の広島純労働者組合結成。'28年4月10日労働党解散命令。'29年5月広島自由労働者組合結成、委員長。同年6月広島市議に当選。'30年12月広電争議で検挙、7ヵ月の刑。'35年9月県議員に当選。'36年8月補欠選挙で市議にも当選。'38年2月人民戦線事件で検挙、社会大衆党から除名。9月県議を辞職して不起訴処分。'39年中国に渡り、'46年帰国。'47衆院議員に当選、'58年まで4期つとめる。

☆〔日本社会運動人名辞典〕

佐藤 静江 呉市カフェー摩天桜女給。水兵との連絡係

☆P. 222、2 段目。

☆P. 92、3 段目。(小倉談)

佐藤 彊 愛知県中島郡萩原町大字高松155。高小卒、名古屋中央電話局で技手見習。'27年6月志願兵として呉海兵団に入団。通信兵として軍艦乗組後海兵団勤務。一等水兵。'32年「10・30事件」で検挙、4年の刑。

☆P. 222、3 段目。

佐藤 茂 福山市北吉津町。印刷工。福山市洋画グループ「ブラルタルゴニアン」に属す。広島市よりの全協オルグ花野フジエ・岡田茂美の来福に協力。'44年10月死亡、35歳。

☆P. 101 (野田手記)

重田 安一 呉市京町。呉工廠旋盤工。呉工廠細胞メンバー。「3・5事件」で検挙。戦後三菱造船広島工場で村上経行・土居浅市とともに党細胞結成。レッド・パーズで解雇、息子とともに検挙。

☆P. 177 (手記)

☆P. 218 (呉関係起訴者)

茂渡 義人 呉二中卒。呉水質試験所見習工。'32年「3・5事件」で検挙、起訴猶予。'33年3月入党。広島自治学生会及五日市町の農村青年の指導にあたる。'34年「4・26事件」に東京で検挙、広島に護送される。2年の刑、執行猶予。'45年11月16日北海道へ開拓移民として行き、そこで死亡、36歳。

☆P. 217、2 段目。

☆P. 220、3 段目。

島本 隆司 広島市己斐町。山陽中学卒後'28年3月から広島市役所会計課に勤務。'31年8月ごろから日本プロレタリア映画同盟、美術家同盟、演劇同盟各広島

支部の同志としりあい、自ら中心となって作家同盟広島支部を結成。同年12月各支部をもってプロレタリア文化連盟広島地方協議会を組織、その責任者となる。'32年「3・5事件」で検挙、2年の刑、執行猶予。その後中国に渡り、戦後『民主新聞』編集員、審陽日本人小学校長等。'53年帰国。'54年入党。'55年11月病死、47歳。

☆P. 219、4 段目

☆第1回合祀名簿。

ししと
尖戸 年春 広島市蟹屋町。広電車掌。全協広電分会及党細胞メンバー。'34年「4・26事件」で検挙。

☆P. 229、1 段目。

清水 次郎 ☆P. 218、1 段目。

正田 誠一 安芸郡江田島村。広島高校文科2年在学中自治学生会活動。'34年「4・26事件」で検挙、起訴猶予。戦後九州大学教授(労働法)

☆P. 229、1 段目、4 段目。

末元 義彦 安佐郡可部町。忠海中学から同志社大学入学。退学処分で広島に帰る。'28年2月党オルグ稲村隆一を自宅にとめ、労働党書記などを党員に推せんしたが、稲村の再度の来広がなく、そのままとなる。その後広島市役所に勤め、呉市に転じ、応召。'43年12月マレイで戦死、41歳。

☆P. 34、3 段目。

末元 玄聰 安佐郡可部町。労働党広島支部解散後、政変同盟広島支部に参加。'29年10月「三滝山ピクニック事件」で検挙、3年の刑。出獄後「解党派」の立場をとる。'34年12月自殺、29歳。

☆P. 207、4 段目。

☆第1回合祀名簿。

関口 春夫 呉市中通5丁目。'26年ごろより呉市でエスぺラント運動。呉工廠首切反対闘争で活動。戦後'45年末、『赤旗』呉市分局を自宅につくり活動、党呉地区委員。'49年11月呉民商結成に参加、書記長となる。'78年11月6日自宅にて病死、74歳。

☆P. 146、(中村定男)

☆第16回合祀名簿。

関谷 源一 下関市新市町。小学卒、東京に出て'30年(昭5年)より全協土建労働組合に加入。活動中検束10数回。'31年(昭6年)入党。左翼文献をよみすぎて、つよい近視となる。'32年(昭7年)栃木県オルグ。'33年2月長野県オルグ。同年4月広島県オルグ。'34年(昭9年)「4・26事件」で検挙、8年の刑。刑確定後下関刑務所で転向。戦後全日自労下関分会に加入。戦前のことは語らず、役員にも一切ならず。'72年(昭47年)7月14日下関済生会病院で死亡、64歳。

☆P. 227、5 段目。

☆P. 225、2 段目以下。

☆P. 93、下段。(小倉談)

☆第16回合祀名簿。

岨 常次郎 広島市西新町。高小卒後ハカリ機械製作工場で労働。評議会系広島一般労働組合解散後広島合同労組結成で主事となる。『第二無産者新聞』『無産青年』広島地方責任者。'31年7月古末憲一、寺尾一幹と党広島地方委員会結成。呉地区オルグを経て共産青年同盟中央委員として上京、検挙時中央委員長。

☆P.37 (岨手記)

☆P.215、4段目。

☆〔日本社会運動人名辞典〕

高野 年夫 広島市下柳町。大工。'31年ごろ石川茂一を知り左翼運動に入る。'32年工兵第5連隊に入隊。「3・5事件」で検挙。'62年4月病死、51歳。

☆第1回合記名簿。

滝本 敏美 広島地区全協オルグ。'32年4月19日己斐駅で逮捕。

☆P.216、3段目。

田中 豊 呉市中通り田中書店主。'31年の呉工廠解雇反対闘争で検挙、起訴猶予。工廠労働者及び水兵と党オルグとの連絡役。'32年6月6日検挙、起訴猶予。

☆P.218、4段目。

田谷 春夫 広島市白島西中町。印刷工。'31年6月仁井田教一とともに赤色救援会広島地区委員会を再建。'32年「3・5事件」で検挙、2年の刑、執行猶予。'41年12月太平洋戦争開始で検挙、まもなく釈放。辰巳行平のペンネームで新短歌運動に参加。'65年5月病死、54歳。

☆P.218、2段目。

☆第2回合記名簿。

竹谷 時良 安芸郡江田島村。元郵便局員。'32年10月入党。橋本俊三と共同して活動。

☆P.220、4段目。

田原 勝治 社大党系合同労組内革命的反対派として活動。'33年9月昭和ゴム争議指導。'33年11月慶徳鋳物スト指導。'34年「4・26事件」で検挙、執行猶予。

☆P.226、5段目。

竹地 定夫 比婆郡山内北村。旋盤工。福岡県で検挙、起訴猶予。'33年7月広島県に帰って活動。全協金属オルグ。'34年「4・26事件」で検挙、3年の刑。戦死。

☆P.230、4段目。

滝川 恵吉 静岡県志太郡島田町。'32年9月党本部より中国地方オルグとして派遣、中国地方オルグ錦織彦七とともに広島地方の再建活動。海軍については両オルグが木村莊重を指導。'32年10月30日熱海会議の一斉検挙から滝川のアジトがばれて11月3日検挙。

☆P.220、4段目。

高橋 渉 豊田郡久芳村。広電車掌。'33年6月全協に加入、'34年2月入党、広電細胞メンバー。

☆P.228、2段目。

津田 暁 広島県柳津町。'32年10月戦闘的無神論者同盟松永班結成に参加。'33年3月18日山根清・小林正一らとともに検挙、起訴猶予。'33年10月25日病死、24歳。

☆第2回合記名簿。

つたもとスミ子 広島県女、専攻科卒業。'32年9月守田道輔とともに呉市に潜入。'33年6月検挙。

☆P.224、3段目

寺尾 一幹 広島高校卒、京大1年で検挙、結核のため執行停止で出獄。広島市に帰り、岨、古来とともに党広島地方委員会結成。呉地区オルグとなり『唸るクレーン』『聳ゆるマスト』発行。'32年5月10日検挙、30日呉署から脱走。山陰線を経て上京、党中央の藻谷小一郎と神田神保町で出会い、連絡に成功。

☆P.44 (手記)

☆P.215、5段目。

☆〔日本社会運動人名辞典〕

中村 定男 '29年3月13日呉工廠正門付近で「3・15一周年」のビラをまいて拘留15日(18歳)。同年5月1日メーデーで検束。11月全国大衆党呉支部に加入。'31年4月呉工廠整理反対のビラまきで罰金10円。'33年6月守田道輔の再建運動の関連で検挙、不起訴。'34年「4・26事件」関係で検挙、起訴猶予。吉本康二と党再建運動。同年9月検挙、2年の刑、執行猶予。'35年12月「労働雑誌読書事件」で検挙、前半決の執行猶予を取消され合計4年の刑。戦後呉地区党組織を再建。広島の東洋工業に旋盤工として入社。同社のストライキに争議委員長となる。

☆P.136 (手記)

☆P.230、5段目。

永井 健造 広島市水主町。広高文科乙在学中。党資金文科3年乙責任者。広高自治学生会指導部員。

☆P.228、5段目。

南部 達三 高田郡甲立町。広陵中学卒。レコード商。'32年ごろより作家同盟加入。'33年6月検挙、起訴猶予。'34年「4・26事件」で検挙、2年の刑、執行猶予。'45年8月21日原爆死。39歳。

☆P.228、5段目。

仁井田教一 佐伯郡宮内村字宮迫。元大工。広島合同労組メンバー。赤色救援会責任者として'32年「3・5事件」で検挙。

☆P.63 (手記)

☆P.216、3段目。

☆P.218、2段目。

西川 成美 呉工廠魚雷実験部製図工。「3・5事件」で検挙、起訴猶予。

☆P.218、4段目。

錦織 彦七 32年9月党中国地方オルグ。広島、岡山を中心に党中国地方委員会の再建を準備、呉海軍については木村莊重、小倉水兵を連絡指導。

☆P. 19、中段、〔注〕

野村 梅子 坂口喜一郎の妻。呉の日の丸デパートの店員として坂口の生活を支える。東京で坂口とともに検挙

☆P. 222、1 段目。

野中 富雄 広島市平塚町。日本製鋼所広島工場工員。31年8月全協金属分会結成、責任者。同年11月入党。32年「10・30事件」で検挙。

☆P. 220、4 段目。

野原 一男 呉工廠魚雷実験部製図工。32年「3・5事件」で検挙、起訴猶予。

☆P. 218、4 段目。

花野 岩男 安芸郡江田島村字切串花野フジエの弟。修道中学中退。31年6月全協化学支部に加入、帝人広島工場内に全協化学帝人分会を結成。9月共青同盟に加入。32年「3・5事件」で検挙、2年の刑、執行猶予。戦後入党。68年1月29日死亡、56歳。

☆P. 218、1 段目。

☆第6回合記名簿。

花野フジエ（前岡） 安芸郡江田島村字切串。広島紡績検査工。同紡績のストライキで全労福山労働組合の幹部、全協の岨常次郎などを知る。福山労組の久下本有の要請で山本ヤエとともに福山紡績に入るべくいったが、山本ヤエのみ入り、「しっかりしすぎている」ということで花野は入社できず、街頭で全協のオルグ活動。全協福山地区の組織をつくり、広島組織と連絡。32年「3・5事件」で検挙、起訴猶予。広島市に帰り広島バスなどを目標に組織活動。カフェーリラスの女給となり佐藤静枝を説得して呉の水兵との連絡役として呉のカフェー摩天楼におくりだす。32年「10・30事件」で検挙、3年の刑、執行猶予。45年8月広島市で原爆死。

☆P. 95（野田手記）

☆第1回合記名簿

早川 義則 広島市大手町。金属彫刻業。24年10月広島合同労組に加入。25年6月広島鉄工組合が分離独立してその委員長。同年8月岡山市で開かれた評議会の中国地方評議会に広島鉄工を代表して参加。27年労農党広島支部結成執行委員となる。同年9月県会議員選挙に労農党より立候補、落選。68年9月4日死亡、70歳。

☆P. 33、下段

☆第7回合記名簿

林 寿恵子 京都市生れ。28年同志社女専卒業、日仏学院勤務から名古屋市でバス車掌。31年から呉市で寺尾一幹とともに活動。呉地区の党関係ピラ・ニュースはほとんどその手になる。『唸るクレーン』『簪ゆる

マスト』など。32年「3・5事件」で検挙、起訴猶予。33年3月東京で死亡、24歳。

☆P. 46、下段（寺尾一幹手記）

橋本 俊三 広島市向洋本町。広島郵便局電信課。大藤軍一らと全協広島分会結成、32年7月入党。「10・30事件」で検挙、2年の刑。43年10月召集。44年7月マリアナ諸島で戦死、32歳。

☆P. 220、4 段目。

☆第2回合記名簿。

平原 甚松 豊田郡中野村。26年6月志願兵として呉海兵団に入団、その後一等水兵。31年8月呉海軍軍法会議の取調べをうけ予備役編入。その後予備役海軍二等機関兵曹坂口喜一郎とともに海軍を目標に活動。32年5月下旬呉市の路上で逮捕されたがまもなく釈放、上京して横須賀軍港オルグとして活動。32年「10・30事件」に熱海で検挙、3年6ヵ月の刑。36年2月仮釈放、同年6月上阪して党中央再建準備委員会系分子と連絡、呉市中心に活動中12月検挙、不起訴。戦後島根県木部村（後津和野町）役場勤務。82年1月13日津和野共存病院で死亡、76歳。

☆P. 10、上段

☆P. 77、P. 81。P. 83。

☆第21回合記名簿

古田 稔 広島一中卒、早大に入学。31年赤化分子として退学処分で広島に帰る。中国地方オルグ三好惣次からの紹介で木村莊重と連絡、『簪ゆるマスト』5号の発行に協力。33年1月歩兵11連隊入営直前に検挙、2年の刑。出獄して朝鮮竜山79連隊に入営。戦場で負傷して広島陸軍病院に後送。45年8月原爆投下時、自宅防空壕の中で修理作業中のため生き残る。

☆P. 13、下段。

☆P. 221、2 段目。

古末 憲一 広島県呉市。呉一中から第一高等学校入学。社会思想研究会に加入。東大に入学、新人会に加入。『無産青年新聞』の組織部員として京浜地区で活動中検挙、不起訴処分。呉に帰り病氣療養。31年の呉工廠整理反対闘争を組織。検挙をのがれて広島市に入り「5・4事件」でつぶれた組織の再建活動。同年7月岨常次郎・寺尾一幹と党広島地方委員会準備会を結成、広島地区を担当。この時期広島県の党・全協の組織がほぼ確立。32年3月4日千田町で検挙、5年の刑。38年5月満期出獄後上京。戦後53年～55年国民救援会本部事務局長。67年、71年埼玉県知須市議に当選。75年6月代々木病院で死亡、67歳。

☆P. 31。（手記）

堀江 明治 広島市南竹屋町。元広島郵便局集配手。32年「3・5事件」で検挙、起訴猶予。その後も活動を続け33年「10・30事件」で検挙。

☆P. 220、4 段目。

前田 文二 (村上) 広島市荒神町。広島工業学校建築科卒。'31年2月全協広島地協結成にあたり食料労働組合を担当、広島専売局女工員上野良子ほか9名で専売分局を確立。'31年「5・4事件」の一斉検挙で逮捕、起訴猶予。党広島地区委員会の結成に参加。'32年「3・5事件」で検挙、4月21日海田市署から脱走。5月8日再逮捕。'33年9月公判、3年の刑。

☆P. 216、3段目。

☆P. 217、5段目。

☆P. 219、2段目。

柳井 盛之 '22年(大正11年)7月吉川富長太郎方の「共産党宣言」読書会に参加。'23年福島町で水平社青年同盟広島支部組織の基礎をつくる。'33年広島消費組合で常任の迫樹と意見があわず、広島購買組合結成を計画している横野卯一と行動を共にするが、赤色救援会のカンパには応じていた。戦後党のシンパとして広島県委員会事務所の広島市への移転に尽力した。'51年4月死亡、48歳。

☆第一回合祀名簿。

真鍋 喜一 '29年9月まで呉工廠共済組合購買所事務員。『無産者新聞』の購読を工廠労働者にすすめる読者会をつくって検挙され、共済組合を解雇。その後東京の同志と工廠労働者の連絡役となり、上京後検挙される。'30年5月公判、2年の刑。2審で1年の刑。上告棄却。

☆P. 207、1段～2段目。

松本 京一 広島市鷹匠町。建具職。'29年10月「三滝山ピクニック事件」で検挙、1年の刑、執行猶予。'30年12月広電スト応援で検挙、1審で6ヵ月の刑。控訴保釈中広島市をでて呉市で活動。'31年11月入党。'32年「3・5事件」で検挙、3年6ヵ月の刑。'45年8月原爆死、39歳。

☆P. 217、1段～2段目～3段目。

☆P. 218、2段目。

☆第2回合祀名簿。

松本 武司 安芸郡海田市町。下関商中退。元広島操車場勤務。'31年7月党広島地方委員会準備会に加入、国鉄オルグとして活動。'32年「3・5事件」で検挙。'38年10月死亡

☆P. 68、上段、5段目。

☆P. 217、5段目。

☆第1回合祀名簿。

丸川 昇一 広島市河原町。印刷工。共青中国新聞細胞キャップ。'32年「3・5事件」で検挙。執行猶予中に救援会小寺英雄に金をカンパしたことを特高に知られ、実刑を科せられる。

☆P. 218、1段目。

☆P. 127、下段。(小寺手記)

三好 惣次 東大卒。'32年3月、中国地方オルグとして「3・5事件」一斉検挙中の広島県に来る。同年4月呉地区オルグと連絡。同年8月連絡のため上京。監視庁に検挙。

☆P. 218、3段目

☆P. 48、上段。(寺尾手記)。

☆P. 49、下段(同上)

三戸 信人 ☆P. 225、1段目。☆P. 224、5段目。

宮内 謙吉 ☆P. 221、5段目。☆P. 222、4段目。

右田 美子 木村水兵の義妹。'32年呉海軍病院第7病棟に派遣看護婦として勤め、稲垣一等看護兵曹を兄の木村一等水兵に紹介。のち兄と共に広島にうつり広島バスの車掌となり兄の生活を支え、花野フジエとともに広島バスの組織化に活動。「10・30事件」で兄の検挙後、救援活動中病にたおれ'34年1月死亡、22歳。

☆P.86、P.87 (稲垣ききとり)

☆第1回合祀名簿。

南 小一 高田郡八千代町。'33年8月ごろより赤色救援会高田郡地区委員会結成。同年11月入党。'34年8月3日検挙、2年の刑、執行猶予。'45年8月被爆。'47年～'48年広島市職労執行委員。'48年同副委員長。'66年7月原爆病院で死亡、61歳。

☆P.124～125 (小寺手記)

☆第5回合祀名簿。

村上 金彦 広島市小町。'31年3月広島県立師範学校卒、安佐郡飯室小学校勤務中、全協一般使用人組合教員分会を結成して免職となる。'31年9月全協一般組合広島支部責任者。'32年3月5日検挙、3年の刑。

☆P. 218、1段目。

☆P. 219、3段目。

村上 四郎 広島市河原町。印刷工。'30年入営、病氣のため兵役免除。活版親友会幹事。'30年7月の広島合同運送スト応援で検挙、4ヵ月の刑。'31年1月全協市川印刷所分会確立。'31年「5・4事件」で検挙、起訴猶予。'32年2月市川印刷所でスト。「3・5事件」で検挙、2年の刑。'38年中国に行く。'40年4月北京大学病院で死亡、32歳。

☆P. 218、1段目。

☆P. 208、3段目。

☆第1回合祀名簿。

守田 道輔 山口県光市樋が迫。'32年2月の徳山地区一斉検挙をのがれて上京。「10・30事件」後の再建をもくろんで呉に入る。'33年1月呉市の路上で山口県警によって逮捕。

☆P. 223、4段～5段目。

安田 貞務^{さだむ} 尾道市久保町。小学校卒業後上京、書店員。徴兵検査で尾道に帰り友人と読書会をつくる。非合法出版物の研究会は郵便局員2名、左官職1名の友人と。'32年2月迫川敬一とともに検挙、起訴猶予。その後「満州」にゆき、現地召集となる。'46年4月ソ連イルクーツクの病院で戦病死

☆P. 102、P. 104

☆第2回合祀名簿。

安田 祐俊^{すけとし} 広島市鍛冶屋町。広島県立工業学校機械科卒。日本製鋼所広島工場旋盤工。'31年8月全協金属分会に加入、11月入党。'32年「10・30事件」で検挙。

'42年2月召集。広島市國泰寺町で被爆、8月8日死亡、36歳。

☆P. 220、4段目。

山下 達吉 本籍神戸市湊西区(現兵庫区)鹿屋町。'24年(大正14年)神戸職工学校(三菱)鑄造科2年より志願兵として呉海兵団に入団。坂口喜一郎・平原基松ら外部にいる海軍出身者と連絡して活動、'32年9月共産主義者として現役免除となり予備役編入。11月19日大阪で検挙。'39年12月死亡、30歳。

☆P. 221、2段目、5段目。

☆第2回合祀名簿。

山根 清 広島県松永市柳津町。福山誠之館中学より神戸高商入学。胡川清としりあう。病気のため高商を中退、尾道区検事局雇となる。'30年末ごろ読書会をつくり、赤色救援会沼隈地区委員会を結成。'31年1月赤救広島地区委の胡川清と連絡。'31年6月検挙、不起訴。赤救沼隈地区委の松永班・尾道班・府中班を結成。'33年12月検挙、病気のため保釈、執行猶予。'44年6月15日死亡、35歳。

☆P. 220、5段目。

☆P. 221、1段目。

☆第1回合祀名簿。

山本タキエ(数本) 豊田郡吉名村。'27年3月三原女子師範2部卒業。賀茂郡の小学校勤務中、新興教育同盟の運動に参加。'33年1月検挙、起訴猶予。同年8月以後広島市でコップ(プロレタリア文化同盟)広島支部再建運動。'34年3月憲兵隊に検挙、不起訴。同年5月「4・26事件」で検挙、2年の刑、執行猶予。

☆P. 228、3段目。

☆P. 159(手記)

吉岡 道人 広陵中学卒業、同志社大学中退。広島にかえり'31年7月全協一般使用人化学労組責任者。共青に加入。'32年3月10日「3・5事件」で検挙、3年の刑。出獄後上京。'42年2月22日東京で死亡、32歳。

☆P. 217、5段目。

吉川長太郎 広島市河原町。理髪業。'23年11月広島市の青年デーで検挙。全協系のシンパとして協力。'32年「3・5事件」で検挙、起訴猶予。その後も赤色救援会の資金カンパに協力。'45年9月原爆症で死亡、44歳。

☆第1回合祀名簿。

吉本 康二 広島市國泰寺町。広島高校自治学生会を「10・30事件」後に再建。はじめ三戸信人、のちに党オルグ関谷源一と連絡をとり、入党。「岩田義道突撃隊」を結成。'34年「4・26事件」の一斉検挙まえに党オルグの指示で広島をはなれて京都にうつる。大阪市の関西地方委員会の指導下に広島県の党組織再建のた

めに活動。'34年9月検挙、3年の刑。獄中腸結核となり執行停止で出獄、'37年3月死亡、25歳。

☆P. 138(中村定男手記)

☆P. 280、3段目。

☆P. 281、1段目。

☆第1回合祀名簿。

横野 卯一 広島市広瀬町。'29年10月「三滝山ピクニック事件」で末元玄聡、玖島三一とともに検挙、2年の刑。出獄後広島消費組合理事。末元玄聡とともに解党派の立場をとる。'34年社大党系の広島購買組合にうつる。'45年8月原爆死、36歳。

☆P. 207、3段目。

☆第1回合祀名簿。

渡辺信樹 佐伯郡敵島町。小寺英雄の弟。機械工としてシシドオートバイ工場で働くうち、労農党広島支部の運動に参加。'28年(昭3年)はじめ同支部の書記となる。

☆P. 33(渡辺談)

編集後記

本書は原稿全文のコピーのひとつが神戸交通労組の高島仔副委員長の目にとまりこれに関西共同印刷所で印刷することになって、本年七月大半のゲラ刷りと校正を終りました。

八月より出版費用のカンパと購読予約を私の知る限りの人に要請、みなさんの応援のもとに十二月中旬に本書を完成する事となりました。広島県の戦前の同志たちの手記が漸く世に出ることになります。

同志たちの一斉検挙の写真は呉市史編さん室所蔵の戦前『中國新聞』号外より私が直接写させていただきました。ここには広島県最初の「五・四事件」と呉海軍水兵を含む「一〇・三〇事件」だけにとどめました。

終りに関係者各位に厚くお礼を申述べます。

一九八五年十一月

岩佐 寿一

あめとかぜと——広島県戦前左翼運動の手記

1985年12月16日発行 定価 3,000円

岩佐 寿一 編・著

〒653 神戸市長田区蓮宮通2—9（稲垣アパート）

電話 （078）575—6712（神戸交通労組内）

発行 あめとかぜと出版委員会

広島県呉市清水2丁目 岡本一彦方

印刷所 株式会社関西共同印刷所

